Japanese Hadith Shahih Muslim

ハディース　サヒーフ ムスリム 第2巻

アッサラーム　アライクム

　世界のムスリムが最も信頼する**ハディース**のひとつ**「サヒーフ　ムスリム」**が日本人イスラーム学徒の手により和訳され、1987 年、日本サウディアラビア協会から出版された。その後 2001 年に同協会のご厚意により、当・日本ムスリム協会で再版する機会が与えられた。このハディース集は本邦初のアラビア語原典からの翻訳であることから、特に日本人のムスリムたち、イスラーム研究者たちの間で活用されてきた。この度、広くより多くの人たちに利用してもらうために日本ムスリム協会のホームページ上で一般公開することとした。
　預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の言行録集であるハディースはアッラーの言葉を記した聖典「クルアーン」に次ぐ大切な書として、ムスリムにとっては生き方の指針となり、生活の規範となっているものである。したがってムスリムにとってはイスラームを理解し実行するために、また非ムスリムにとってはイスラームをより深く知るための文献として必須なものである。
　今日、世界に約 14 億のムスリムがいると言われ、イスラームは世界の政治、経済にも大きな影響を与えつつある。この公開ホームページを活用していただき、日本においてもイスラームへの理解と関心をより一層深めていただければと願っている。

2009 年 11 月 20 日
イスラーム暦ズルヒッジャ月
日本ムスリム協会会長　徳増公明

1.″ハディース″について

本書は、**イマーム・ムスリム・ビン・アル・バッジャージ**の著作**「サヒーフ　ムスリム」（ムスリム正伝集）**の日本語訳(全三巻)である。本書は、イスラームの預言者ムハンマドに関するハディース(伝承)、すなわち、預言者の言葉、行為、また、黙認事項などの豊富な採録集であり、預言者の日常を詳細に記録したこれらのハディースを通じ、信徒らはイスラームの基本条項のみならず、預言者と共に生きた当時の教友ら(サハーバ)の生活の仕様に至るまで知り得る内容となっている。

イスラーム以前から、アラブ部族間では先祖伝来の生活慣習を″スンナ″と称して遵奉する傾向があったが、イスラーム以降には、預言者ムハンマドの言動が全信徒の日常生活や信仰の有り様を示す規範とみなされ、いわば、新しい″スンナ″としての位置を占めることになった。そして、この預言者のスンナに関する知識は、クルアーンの教義同様、全信徒の共有すべき知識、つまり、ハディースとして相互に伝達され遵守されるに至った。

周知のように、クルアーンにおける啓示は信仰のみならず、信徒の生活全般にわたる広範な教説を含むものであるが、その具体的指導は預言者のスンナによって補足される必要があった。たとえば、礼拝や巡礼に関する言葉はクルアーンの中に何度も繰り返されているが、それらに伴う細かい規則についての言及はみられないので、信徒は預言者のスンナに倣って実際の形式を学ばねばならなかったのである。

このように、預言者在世の頃からハディースは信徒の実生活上不可欠な知識であったわけで、そのため預言者自身も″相互にスンナを伝達し合うように″と教友らに指示されたといわれる。ただ、預言者在命中には、不明な問題が生じた時、人々は直接預言者に問いただすことができたので、ハディースは記憶や私的な記録として断片的に保存されただけで、組織的にまとめられることはなかった。預言者没後の四大カリフ時代以降、急速にイスラーム世界が拡大発展するに伴った幾多の新しい問題や状況に対処していく関係上、初めて権威ある参考指標としてのハディースに対する全般的知識の必要性が痛感されるようになったのである。そのため、遠く征服地や新開地などに分散した教友らをたずねて預言者に関するハディースを聴聞収集する者たちが現われだした。当時、マディーナは元より、マッカ、クーファ、バスラなどには比較的多くの教友やハディースに詳しい人々が居住していたこともあって、これらの町にはハディース学習を志す多くの学徒が参集したといわれる。ハディース聴聞のため遠隔地まで苦労を重ねて旅した人々の逸話は数多く知られている。これらの篤実な学徒の研鑽や″旅″を契機として幾多の貴重なハディースは保存され、また、各地方の信徒にも広く伝播されることになったのである。

ともあれ、イスラーム世界各地に流伝するハディースの組織的編纂が試みられるのは、8 世紀以降のことであり、散逸したとはいえヒジャーズのアブドル・マーリク(767 没)、クーフアのスフヤーン・サウリー(777 没)などにより、先駆的な小ハディース集が編纂されたことが知られている。

現存する初期の重要なハディース集は、イマーム・マーリク(795 没)による『ムワッタア集』であるが、内容はハディースを題目毎に整理し、法律事典的要素を備えた体裁となっている。なお、このように題目毎に分類して編纂する方式はムサンナフ型と呼ばれ、後代のハディース編纂様式の主流となったものであるが、このムサンナフ形式に対し、ハディースを最初の伝承者の名の下に一括して記述する形式をとるものもあり、ムス

ナド型と呼ばれている。ムスナド型の著名なハディース集には、イマーム・アフマド・ビン・ハンバル(855 没)による**「ムスナド集」**がある。

後代、正伝の名を冠せられた六書は、いずれもムサンナフ形式を採るもので、小項目や簡単な説明が編者自身によって付されたものもあり、いずれも参照に便利な体裁になっている。なお六書、すなわち、六正伝集とは、ブハーリー(870 没)、ムスリム(875 没)の両″サヒーフ集″に加えてイブン・マージャ(886 没)、アブー・ダウード(888,9 没)、ティルミズィー(892 没)、ナサーイー(915 没)らの四『スンナ集』の総称である。

ハディース編纂は、これら六書に終わったわけではなく、その後も数世紀にわたって継続的に行われ、バイハキー(1063 没)、スニーティー(1505 没)などによる著名な集録も編まれている。また、イスナード(伝承者経路)を最初の語り手以外は全部省略し、マトン(本文)のみを記述する簡単な形式のハディース集も編纂されている。

ブハーリーやムスリムの両″サヒーフ集″は、内容の多様さ、また、採録に当っての真偽批判基準の厳格さによって、もっとも信頼できるハディース集としての声価を得たものであるが、この真偽についての検討はイスナードとマトンの両面から為されるのが通常であった。イスナード、すわち、伝承者の経路についての検討とは″A は B より聞き、B は C より伝えられた″という形式で、正しく最初の語り手に遡源できるかどうかについての調査を意味するが、この場合、各伝承者の知的能力、信頼度、年齢、居住地域、更には、本文を伝える伝承者経路の数も吟味された。マトンすなわち、伝承本文の検討においては、イスラームの教義に反していないか、特定の党派への偏向はみられないか、歴史事実に即しているか、などと共にアラビア語表現上の品性までも詮索されている。これらの検討を受けたハディースは全て、サヒーフ(確実なもの)、ハサン(妥当性をもつもの)、ダイーフ(典拠薄弱なもの)など三段階に分類された。ブハーリーやムスリムは、彼らなりの判定基準で、確実なハディースのみを採録したとの見解から″サヒーフ集″の名を冠したのである。

ハディースが法学上ではクルアーンに含まれる規定を補足する権威ある源泉であり、イスラーム初期の歴史研究上重要な文献となっていることは再言するまでもないが、信徒にとってはなによりもこれらの存在は、信仰への理解と預言者像への親近感を促進する大きな要素となっている。

2.著者ムスリムについて

「サヒーフ　ムスリム」の著者イマーム・ムスリムは正確には、アブー・アル・フサイン・ムスリム・ビン・アル・バッジャージ・アル・クシャイリー・アン・ナイサーブーリー(817/21～875)と呼ばれる。イランのナイサーブール(ニーシャープール)で生れ、死後もその郊外のナスラーバードに埋葬された。四大カリフ時代、枢要な地位を占めた先祖をもつ名家の出身とも伝えられるが、詳しくはわかっていない。15 才頃よりハディース学習を志し、広くアラビア、エジプト、シリア、イラクなどを旅行してイスハーク・ビン・ラフワィヒ、アフマド・ビン・ハンバル、クタイブ・ビン・サイードなど当時の秀れた伝承学者に学んだ。イマーム・ブハーリーとも親交があり、終生、ブハーリーのハディースに関する学識を尊敬してやまなかったといわれる。

なお、イマーム・ムスリムは生涯に約 30 万のハディースを収集したと伝えられる。そのうちサヒーフ集に収められたハディースの総数は、話題別に分類した場合、3,000 余であるが、伝承者経路(イスナード)の数で計算した場合には、この 2 倍以上の数量に達するといわれる。このサヒーフ集以外にも、彼の著作や論稿は 20

数種もあり、その大半はハディースに関連したものである。なおまた、彼には多くの弟子がおり、なかにはアブー・ハーテム・ラーズィー、ムーサー・ビン・ハールーン、それに『スンナ集』の編者ティルミズィーら著名人の名がみられる。

イマーム・ムスリムのサヒーフ集の特色はイマーム・ブハーリーの収録と異なり、大題目以外には、小題目、解説の類が一切付されてない点である。現在ほとんどのテキストに大題目区分として"キターブ(…書)"、内容を説明した小題目区分としての"バーブ"がみられるが、この小題目区分は後代の注釈者の筆によるもので、イマーム・ムスリム自身が付記したわけではない。第二の特色としては、イスナードおよびマトンの記述が厳密で、人物名や表現用語上の差異に関してこまごまとした指摘がみられる点が挙げられる。
本文は、信仰、礼拝、婚姻、商取引、遺産、戦争、神学、終末、注釈論など、今回我々のテキストとした**「サヒーフ　ムスリム」**では、56 書(キターブ)に分けられ多様な内容となっている。
なお、このサヒーフ集の注釈書としては、イマーム・アン・ナワウィー(1277 没)による『シャルフ　サヒーフ　ムスリム』が有名である。

3.翻訳について

本書のアラビア語テキストとしては、エジプトの碩学ムハンマド・フアード・アブドル・バーキー校訂の「Sahih Muslim Lil-Imami Abil-Hussain Muslim」(カイロ 1955 年刊初版本)を訳出原本とし、かつイマーム・アン・ナワウィーの注釈付『Sahih Muslim bi-Sharhi An-Nawawi』(カイロ 1929 年刊)にあるハディース本文を併用した。テキスト前部には、ハディース全般に関する解題や説話の紹介が記されているが、本書ではそれらは省略され、訳出は、"信仰の書(キタ.ーブル・イマーン)"以降より始められた。

訳出に関しては、以下の諸点についても予め断っておきたい。

a)第一巻の翻訳は 3 名が分担し、人物名や地名など頻出度の多い事項の表記に関しては統一を図った。文体やいちいちの用語法は訳者それぞれのスタイルに一任された。

b)イスナード(伝承者経路)に現れる人物名を逐一列記するのは煩雑すぎるため、最初の語り手以外は省略された。この方式は、Muhammad Al-Husain Al-Baghawi(1122 没)の**「Masabih As-Sunna」**およびこれに若干の変更を加えて、1336 年頃改題、再版された『Mishkat Al-Masabih』やイマーム・アン・ナワウィー(前出)による「Riyad As-Salihin」に倣ったものである。

c)預言者、アッラーのみ使い、ムハンマドといった呼称には必ず"アッラーの加護と平安を!(サッラッラーフ アライヒ ワ サッラマ!)"という祈願の言葉を付すのが伝統的慣習であるが、頻度があまりに多すぎるため、訳出は省略せざるを得なかった。教友らに関する祈願についても同様である。

d)マトン(本文)表現用語の差異については、前述したように、極めて厳密な指摘がみられるが、訳語上の限界もあり、訳者それぞれの判断によって簡略化されたり、補足説明が加えられた場合がある。

e)前述したように、テキストの小題目(バーブ)は著者イマーム・ムスリム自身の筆によるものではなく、後代の注釈者らによって書き加えられたものである。それ故、これも訳者の判断で内容中心に簡略化されたところがある。

f)会話体の多いハディースでは、内容を変更しない限り、必ずしも直訳形式をとらぬ場合があった。また、理解を容易にするため、テキストにない状況説明を付加したところもある。

9)訳出に当っては、前述したイマーム・アン・ナワウィーの注釈書「**Sharh As-Sahih Muslim**」およびAbdul-Hamid Siddiqi による英訳「**Sahih Muslim**」(Lahore 1973)を参照した。なお、クルアーンについては「**聖クルアーン**」(日本ムスリム協会昭和 58 年版)を参考にした。

h)テキスト全体は、三分冊で出版されるが、第一巻においては″信仰の書″、″斎戒の書″および″ハイドの書″を磯崎定基、″礼拝の書″および″モスクと礼拝場所の書″の大半を飯森嘉助、残りの″礼拝の機会を失した時の償い″以降″旅行者の礼拝の書″までを小笠原良治が担当した。

　クルアーンの日本語訳がすでに数種も存在する現今、イスラーム理解を一層深めるためには、権威あるハディース集の翻訳紹介が急務であるとの見解から、イマーム・ムスリムの″サヒーフ集″がその対象に選ばれたのであるが、訳業が実際に進められだしたのは 1984 年の夏頃からであった。爾来、非力を嘆じながらも、本業の傍ら、担当者はそれぞれ翻訳に苦心してきたのであるが、語学や表現上の未熟さ故に思わぬ誤りを犯しているかとも省みている。ささやかな我々の努力による本書が日本におけるイスラーム理解にいささかなりとも貢献できることを願うと共に、将来、これを轍としてより一層完全なハディース翻訳書が数多く紹介されることを心より期待したい。

　なお、この翻訳は、日本サウディアラビア協会の浜田明夫氏、富塚俊夫氏、武藤英臣氏らの推(車篇に免)と全面的な協力によって進められた。また、和久井生一氏には翻訳文体の全般的調整をお願いした。ここに記して感謝申し上げたい。

1987 年 1 月

これまで、ハディース学、イスラーム法学基礎論、イスラーム法学におけるハディースとスンナの意味を見てきましたが、これらの議論を纏めたのが以下の表です。

学問間のハディースとスンナの比較		
	学問	定義
ハディース	ハディース学	（1）預言者ムハンマドに帰属する、あるいは （2）教友に帰属する、もしくは （3）後続世代（タービイー）に帰属する ①発言、②行為、③承認、④形容
スンナ	イスラーム法学基礎論	（1）預言者ムハンマドに帰属する ①発言、②行為、③承認
スンナ	イスラーム法学	推奨行為
※ハディース学におけるハディースはハディース・クドゥスィー、ハディース・マルフーウ、ハディース・マウクーフ、ハディース・マクトゥーウを含む。 出典：筆者作成		

ハディースは発言者毎に以下のとおり区分されます。

発言者別のハディースの区分	
発言者	区分
アッラー	ハディース・クドゥスィー
預言者ムハンマド	ハディース・マルフーウ 単にハディースと言われた場合には、一般的にはハディース・マルフーウが意図されている。
教友	ハディース・マウクーフ
後続世代	ハディース・マクトゥーウ
出典：筆者作成	

ハディースとスンナという言葉の使い方は一見すると複雑ですが、各学問毎の意味の違いを見てゆけば明晰に理解されうると思います。

（K. S. ）

第 2 巻

金曜礼拝の書

タイトルなし

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

私はアッラーのみ使いが「あなた方は誰でも金曜礼拝参列を望んだら沐浴（大浄）をしなければならない」といわれるのを聞いた。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはミンバル（説教台）にお立ちになって「金曜礼拝に訪れる者は沐浴をしなければならない」と申された。

イブン・ウマルによって伝えられたこのハディースは、他の伝承者経路でも伝えられている。

サーリム・ビン・アブドッラーは彼の父（アブドッラー・ビン・ウマル）を根拠として前述と同様のハディースを伝えている。

アブドッラー・（ビン・ウマル）は次のように伝えている

ウマル・ビン・ハッターブが金曜礼拝で説教していた時、教友の一人が（モスク）に入って来た。

ウマルは大声で「このような時間に来るとはどうしたことか」と言った。

遅れて来た彼は「私は今日忙しくて、アザーンを聞いた時家には戻れませんでした。それでも私はようやく小浄を済ませて来たのです」と言った。

するとウマルは「小浄だけか、だが君はアッラーのみ使いが常々（金曜礼拝に）大浄を命じておられたのを心得ておるであろう」と言った。

アブー・フライラは伝えている

ウマル・ビン・ハッターブが金曜日、人々に説教しているところに、ウスマーン・ビン・アッファーンが入って来た。

ウマルは「アザーンが唱えられた後に、遅れてやって来る者達の気持が計りかねる」と彼（ウスマーン）に当て付けを言った。

するとウスマーンは「信者達の指導者よ、私はアザーンを聞くと辛うじて小浄を済ませて

（モスクに）かけつけたのです」と言った。
するとウマルは「小浄のみか！　時に諸君はアッラーのみ使いが『あなた方は誰でも金曜礼拝に来る時は大浄をしなければならない』と言われていたのを聞かなかったであろうか」と言った。

成人に達した者は金曜礼拝の大浄は不可欠のものである

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは「金曜日には、成年に達した者各々にとって大浄は極めて重要なものである」と申された。

アーイシャは伝えている

近隣の村々に住んでいる人々は、ほこりまみれの異臭を放つ衣服を着て金曜礼拝にやって来ました。
その中の一人が、アッラーのみ使いが私の所に居られた時、その御方の側に参りました。
するとみ使いは「もしあなたが今日ここに来るために大浄をしたならば……」と申されました。

アーイシャは伝えている

人々は（ほとんどが）労働者で、彼等には召使いを雇うだけの余裕がありませんでした。
それで彼等には異臭がございましたので「もしあなた方が金曜日に大浄をしたならば」と言われたのです。

金曜日には香水とシワーク（注）を

（注）芳香のある植物で作った木ぎれで、歯を磨く道具（第 1 巻 202 頁参照）

アブー・サイード・フドリーの息子、アブドル・ラフマーンは彼の父を根拠として伝えている

アッラーのみ使いは「金曜日には、成年に達した者、一人一人が大浄をしなければならぬ。
シワークと多少の香水の使用は出来る限り行うべきである」と言われた。
伝承者の一人は「香水に関しては、たとえそれが女性用のものであっても」と伝えている。

ターウースは伝えている

イブン・アッバースは金曜日の大浄について預言者が言われたことを話した。
ターウースは「私はイブン・アッバースに『もし妻の香水、あるいは香油を使用したら（どうなのでしょう）』と尋ねた」と言った。
イブン・アッバースは「私はそれについては知らない」と言った。

このハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

預言者は「ムスリム一人一人は（少なくとも）一週の中の一日（金曜日）は大浄をし、頭と体を洗わねばならない」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「金曜日の大浄は交接後に行う沐浴（と同じで）ある。
それを行った後、（早目にモスクに）行く者は雌らくだをサダカとして犠牲に供する者同様の（報償を得る）、
第二の刻（注 1）に行く者は雌牛をサダカとして供する者同様の、
第三の刻に行く者は立派な角をもった羊をサダカとして供する者同様の、
第四の刻に行く者は雌鳥をサダカとして供する者同様の、
そして、第五の刻に行く者は玉子を一個サダカとして供する者同様の（報賞を得る（注 2））
そこにイマームが出て来ると、天使達もそこに出席してアッラーへの讃美を傾聴するのである」と申された。

（注 1）第二の刻～第五の刻というのは正午からイマームか説教壇に座るまでの間である

（注 2）イスラームでは雌鳥や玉子か犠牲に供されることはないが、例えとしてあげられたのである

金曜日の説教は注意深く傾聴すること

アブー・フライラは伝えている

　　アッラーのみ使いは「金曜日に、もしあなたが友人に『傾聴しなさい』と、イマームが説教している最中にいったとすれば、それは不必要なことをいったことになる」と申された（注）。

　　（注）イマームの説教を傾聴することは極めて重要なことで、たとえ、話をしている人があっても声を出してそれを注意してはならない。
　　その時は指を口に当てる等のゼスチュアで注意を喚起する

このようなハディースは**アブー・フライラ**によっ、他の伝承者経路でも伝えられている。

同様のハディースはアブー・フライラによって伝えられたが、（その中には）laghauta という言葉に代って laghita が使用されている。
アブー・ジナード（伝承者の一人）は laghita はアブー・フライラ特有の発音で、実は laghauta である」と言った（注）。

（注）laghauta の意味は「あなたは（不必要なことを）言った」である

金曜日には特別に（幸運な）時がある

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは金曜日についてお述べになり「この日、下僕としてのムスリムが願望をアッラーに祈願して礼拝すれば、必ず叶えられる時がある」と申された。

クタイバは彼の伝承の中で「（その時間が）短いものであることを手で示された」という言葉を付加している。

アブー・フライラは伝えている

アブー・カーシム（預言者の別称）は「金曜日に、篤信のムスリムがアッラーに善き事を祈願して礼拝すれば、必ずそれが叶えられる時がある」と申された。

また「（その時間は）短くわずかである」と指摘された。

前述のハディースは**アブー・フライラ**から別伝承者経路を経て伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

預言者は「金曜日には特別の時があり、ムスリムがその時アッラーに善を祈願すれば必ず叶えられる」と申された。

なお「その時間は短いものである」とも言われた。

ハンマーム・ビン・ムナッビフは伝えている

このハディースはアブー・フライラが預言者から聞いた話として伝えているが、その御方は「その時間は短いものである」とは言われなかった。

アブー・ブルダ・ビン・アブー・ムーサー・アシュアリーは伝えている

アブドッラー・ビン・ウマルは私に「あなたは金曜日の特別な時間のことで、あなたのお父上がアッラーのみ使いから聞いた話として、それについて何かお話しになってはいませんでしたか」と言った。

私は「はい、聞きました。父は『私はアッラーのみ使いが“その時間はイマームが着座してから、礼拝が終るまでの時間である”と申されるのを聞いた』と言っておりました」と述べた。

金曜日の徳

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「太陽が最も素晴らしく輝く日は金曜日である。

その日、アダムは創造された。

その日、彼は楽園に入れられた。

そしてその日に、彼はそこから追放された（注）」と申された。

（注）金曜日に起こることはすべて善き事につながる。

アダムの楽園追放も、その後に善き事をもたらすための用意である

アブー・フライラは伝えている

預言者は「太陽が最も美しく輝く日は金曜日である。その日、アダムは創造された。

その日、彼は楽園に入れられた。

そしてその日、彼はそこから追放された。

審判の時は金曜日以外には起こらない」と申された。

この民族が金曜日に導かれた理由

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「聖なる教典は各々の民族（ユダヤ教・キリスト教を奉ずる民族）に授けられ、我々は彼等の後にそれを授けられた。

（つまり）我々は最後（の教典の民）ではあるが、復活の日は最初（に楽園に入る民）となるであろう。

この日（金曜日）はアッラーが我々のために定められ、それにお導き下された、我が同胞達が挙る日である（注 1）。

ユダヤ教徒達はその翌日に、キリスト教徒達は更にその翌日に（導かれる）」と申された（注 2）。

（注 1）金曜礼拝

（注 2）は金曜日がイスラームの合同礼拝の日と定められたが、ユダヤ教やキリスト教はそれぞれ土曜日と日曜日にそれが変更されたということ

アッラーのみ使いが「我々は最後（の教典の民）ではあるが、復活の日は最初（に楽園に入る民）となるであろう」と言われたというようなハディースは、**アブー・フライラ**から伝えられたものである。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「彼等（ユダヤ教徒、キリスト教徒）は聖なる教典を我々以前に授けられ、我々は彼等の後にそれを授けられた。

我々は最後（の教典の民）ではあるが、復活の日は最初に楽園に入る民となるであろう。

つまり彼等は異論を唱えたのである。

アッラーは彼等が異論をさしはさんだ真理に我々をお導き下されたのである。

これは彼等の日であったが、彼等が異議を唱えたので、アッラーは我々をその日（金曜日といわれた）にお導き下さった。

従ってその日は我々のための日であり、その翌日はユダヤ教徒、更にその翌日はキリスト教徒の日である」と言われた。

アブー・フライラはアッラーのみ使いムハンマドから直接聞いた話として伝えている

アッラーのみ使いは「彼等は聖なる教典を我々以前に授けられ、我々は彼等の後にそれを授けられた。

我々は最後（の教典の民）ではあるが、復活の日は、最初に楽園に入る民となるであろう。
そも、これは彼等に決められた彼等の日であった。
しかし、彼等はそれに異論を唱えたのである。
それでアッラーは我々をそれに導かれ、我が同胞は挙って従ったのである。
（このような理由で）彼等すなわち、ユダヤ教徒達はその翌日に、キリスト教徒達は更にその翌日と続くのである」と申された。

アブー・フライラとフザイファは伝えている
アッラーのみ使いは「我々以前の民で、アッラーが金曜日から（他の日に）移された人々があった。
それでユダヤ教徒達には土曜日が、キリスト教徒達には日曜日が（礼拝の日）として定められた。
アッラーは我々にお目を掛けられ、我々には金曜日をお定め下された。
こうして（礼拝の日は）金曜、土曜、日曜の順におかれたのである。
復活の日には彼等は我々に続くのである。
我々は世界の民族の中で最後（の教典の民）ではあるが、復活の日は、それら諸民族の中で最初に審判されて（楽園に入る者となろう）」と言われた。
伝承の一つに「彼等の間で（最初に）審判される」と言うのがある。

フザイファは伝えている
アッラーのみ使いは「我々は金曜日に導かれた。
しかし、我々以前の民で、アッラーが金曜日から（他の日に）移された人々があった」と申された。

残余のハディースは前述と同じである。

金曜日に早目にモスクに行く者には恩恵がある

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「金曜日、モスクの各入口には天使が居て、人々を到着順に一人一人記録している。
イマームが（説教のため）着座すると天使達はクルアーンを閉じ、アッラーへの讃美を傾聴する。
時に、早目に来た者は、犠牲として雌らくだを捧げる人と同様の（報賞を得る）。
次に来た者は雌牛を、次は雄羊を、次は雌鳥を、そして次は玉子を捧げる人と同様の（報賞を得る）」と言われた。

このハディースは**アブー・フライラ**によって、他の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「モスクの各入口には（金曜の礼拝に）訪れた者一人一人を記録する天使が居る」と言われ
（最初に訪れた者をらくだを犠牲として捧げた人に喩え、次に、到着の順序に従って報賞の序列を下げ、最後は、玉子を捧げる人に嘱えた）
それから「イマームが着座すると、天使達はクルアーンを閉じ、アッラーへの讃美を傾聴する」と申された。

説教に傾聴する者の徳

アブー・フライラは伝えている

預言者は「大浄を行って金曜礼拝に訪れた者が、心に定めた数の礼拝を行い、イマームの説教を最後まで傾聴し、そして彼と一緒に礼拝すれば、次の金曜までの一週間と更にその上三日間の彼の（微小な）罪過は許されるであろう」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「丁寧に大浄を行って金曜の礼拝に訪れた者が、説教を熱心に傾聴すれば、彼の小さな罪過は次の金曜日までの一週間と更に三日間も許されるであろう。なお、小石に触れる者（注）は妨害の因となる」と申された。

（注）説教中に話をする者は、小石を拾って投げ遊ぶ行為に似て、人々に迷惑を及ぼすということ

金曜礼拝は太陽が中天を経た後に挙行する

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

われわれはアッラーのみ使いと（金曜の）礼拝を行い、その後、戻って水を運ばせていたらくだを休息させていた。

ハサン（中途伝承者の一人）は「私はジャアファル（中途伝承者の一人で本ハディースをハサンに伝えた）に『それは何時でしたか』と尋ねると、彼は『太陽が中天を経過した時であった』と答えた」と言った。

ジャアファルは彼の父を根拠として伝えている

彼（ジャアファルの父）はジャービル・ビン・アブドッラーに「アッラーのみ使いはどの刻に金曜礼拝をされましたか」と尋ねた。

「あの御方の礼拝は、いつもそれが終ってから、われわれがらくだの所に戻り、そしてそれらを休息させていた刻でした」と言った。

アブドッラー（伝承者の一人）は彼の伝承の中で「太陽が中天を経た時で、水を運ばせるらくだ（を休ませる刻である）」ということを付加している。

サフル・ビン・サアドは伝えている

われわれは金曜礼拝が終らなければ昼寝や昼食をしなかった。

（イブン・フジュル〔伝承者の一人〕は「アッラーのみ使いが御存命の頃は」という言葉を付加している）

イヤース・ビン・サラマ・ビン・アクワウは彼の父を根拠として伝えている

われわれは太陽が中天を経過した時、アッラーのみ使いと一緒に金曜礼拝を挙行した。

その後われわれは戻り（太陽の厳しい著さから身を守るために）木陰を探し求めた。

イヤース・ビン・サラマ・ビン・アクワウは彼の父を根拠として伝えている

われわれは常々金曜礼拝をアッラーのみ使いと一緒に行っていた。

（礼拝後）われわれが戻った時（太陽の厳しい著さから）身を守れるような壁の陰は見つからなかった。

金曜礼拝において礼拝前の二回の説教と、その二回の説教間の着座について

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは金曜礼拝において説教されていた。
それからその御方は座られた。
そのあと、その御方は今日ムスリム達が行うように（第二の説教のため）お立ちになった。

ジャービル・ビン・サムラは伝えている

預言者は（金曜日に）二回にわたる説教をされていた。
その二回の説教の間、その御方は着座され、クルアーンを朗誦し善行を人々に勧めておられた（注）。

（注）このハディースはクルアーンの朗誦と善行の勧めが、説教の一部として不可欠であることを教えている

ジャービル・ビン・サムラは伝えている

アッラーのみ使いは立って説教なされていた（注）。
その後、その御方は座られ、またお立ちになって説教された。
ところで誰か君に「その御方が座って説教されていた」と告げる者があれば、彼は嘘をついたのである。
アッラーに誓い、私はその御方と二千回以上も礼拝を共に行った。

（注）説教は避け難い事情を除き、立った姿勢で行われねばならない

アッラーのみ言葉「しかし彼等は、うまい儲けや遊びごとを見かけると、(礼拝のために)立ち上っているあなたを等閑にして、そちらに駆け出す始末」(クルアーン第 62 章 11 節)について

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者は金曜の礼拝に立って説教なされていた。そこにシリアから隊商が到着した。
すると人々はそちらに駈けて行き、残ったのは十二人の男だけであった。
そこで**「しかし彼等はうまい儲けや遊びごとを見かけると、(礼拝のために)立ち上っているあなたを等閑にして、そちらに駆け出す始末」**(クルアーン第 62 章 11 節)という一節が啓示されたのである。

前述のハディースで**フサイン**によって伝えられたものは(次の変更箇所)がある(すなわち)彼は「アッラーのみ使いは説教された」とは言ったが、「お立ちになって」とは述べられていない。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

われわれは金曜日、預言者と一緒にいた。
そこへ隊商が到着した。
すると人々はそれに寄って行った。
その時残ったのは私を含めて十二人の男だけであった。
それでアッラーは**「しかし彼等はうまい儲けや遊びごとを見かけると、(礼拝のために)立ち上っているあなたを等閑にして、そちらに駆け出す始末」**(クルアーン第 62 章 11 節)の一節の最後までを下された。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者が立って説教されている間に、隊商がマディーナに到着した。
すると教友達はそちらに駆け出して行ってしまい、残ったのはアブー・バクルやウマルを含む十二人の男だけであった。
そこで**「しかし彼等は、うまい儲けや遊びことを見かけると……そちらに駆け出す始末」**の一節が下された。

カアブ・ビン・ウジュラは伝えている

私がモスクに入って行くとアブドル・ラフマーン・ビン・ウンム・ハカムが座って説教を行っていた。
そこで私は「諸君、座して説教をするこの不正な者を良く見るがよい。
アッラーは**「しかし彼等は、うまい儲けや遊びことを見かけると、(礼拝のために)立ち上っているあなたを等閑にして、そちらに駆け出す始末」**と申されているというのに」と言った

（注）。

（注）座して説教していたのはウマイヤ族の一人である。
彼の行為はスンナに反すると共に敬神性を欠く行為でもある

金曜礼拝の放棄に対する警告

アブドッラー・ビン・ウマルとアブー・フライラは伝えている

彼等二人はアッラーのみ使いがミンバルにお立ちになって「皆は、金曜礼拝を放棄してはならない。

もしそれを放棄すればアッラーがその者達の心に封印されて、必ず怠慢な者達の仲間となるであろう」と申されるのを聞いた。

礼拝と説教の軽減について

ジャービル・ビン・サムラは伝えている

私は常々アッラーのみ使いと一緒に礼拝を行っていたが、その御方の礼拝と説教は（長くもなく短くもない）中庸のものであった。

ジャービル・ビン・サムラは伝えている

私は常々預言者と一緒に礼拝を行っていたが、その御方の礼拝の時間は普通の長さで、また説教も適当な長さであった。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いが説教される時、その御方の両目は赤くなり（注 1）、お声は高まり（注 2）、怒りは烈しくなって（注 3）、ちょうど敵の攻撃を予期して警告しているかの如くであった。そしてその御方は「敵はあなた方に朝な夕な攻撃して来た」と言われ、また「私が（アッラーのみ使いとしての）使命を与えられたのと、復活の日とは人指し指と中指の間のように極めて近接している（注 4）」とも言われていた。

そしてなお「ところで、最良の言葉はクルアーンに示されており、最良の導きはムハンマドによるそれである。

そして最悪の問題は（クルアーンやスンナで許容されない）彼等の新奇な事柄であり、その大半は誤りである」と申された。

そしてなお「私はいかなる信者に対しても、あなた方誰よりも近しい存在である（注 5）。この世を去った者の遺産がその家族に残されるように、負債を残し、あるいは扶養家族を残して亡くなった者の債務の返済や家族の養育は私の責務である」とも言われていた。

（注 1）み使いは常々地獄の恐怖を人々に警告していたか、それが目を赤くした因であるとされる

（注 2）み使いの音声の高まった理由は、聴衆に良く聞かせるためと、彼の意図することを人々の心に銘記させるためである

（注 3）み使いの怒りは教友達の失策、また彼の周りにいた非ムスリム達の邪な行為からであったが、特に怒りを表わしたのは非ムスリム達のアッラーに対する傲慢な態度や多神教への執着を感得した時であった

（注 4）これは一つの警告である。人々は審判の日は遠い遠い先のことのように考える。しかしそれは深い眠りから目覚めた人が、もう朝かと思うようにあっという間である。

従ってその日は死と共にあると考えても良いのである。
み使いはこれをほとんど間隔のない指と指の間を例にして話されたのである

（注 5）預言者に対する精神的関係は、自分の血縁関係よりも先行し、真の利益の上では自分自身よりも近いこと

ジャアファル・ビン・ムハンマドは彼の父を根拠として伝えている

私（ジャアファルの父）はジャービル・ビン・アブドッラーが
「預言者は金曜日の説教で、アッラーを讃美、崇拝された後、お声を高くされ」
残余のハディースは前述と同様である。

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いが人々に説教される時、先ずアッラーに讃美と賞讃の言葉を捧げた後「アッラーが導き給える者に一人として迷える者はない。そして惑わせる者には彼を教導する者は一人も存在せぬ。そして最良の言葉はクルアーンに示されている」と申された。
残余のハディースは（前述と）同じである。

イブン・アッバースは伝えている

アズド・シャヌーア族の出身で、精神異常者に祈祷を行っていたディマードという男がマッカに来た。
彼はその地で、そこの愚か者達がムハンマドは気狂いであるというのを聞いた。
彼は「もし私がその男に会えば、アッラーは私の手を通して彼（の病）を癒やして下さるであろう」と言った。
彼はみ使いに会った。
そして「おお、ムハンマドよ、私は精神に異常をきたした者に祈祷を行っている。
アッラーはお望みの者を私の手を通して癒やされる。
あなたもそれを試して見ないか」と言った。
アッラーのみ使いは「アッラーに栄光あれ。
われわれはその御方を讃美し奉り、その御方にのみ御加護を請い願う。
アッラーが導き給える者に一人として迷える者はない。
そして惑わせる者には、彼を教導する者は一人も存在せぬ。
唯一なるアッラー以外にいかなる神もなく、その御方に同位者はない。
ムハンマドこそはその御方の下僕であり、み使いであることを私は証言する」と申された。
するとディマードは（態度を変え）「今申されたあなたの言葉を、私の前で繰り返して下さい」と言った。
み使いは彼の前で先の言葉を三回繰り返した。

すると彼は「私は占い師達の言葉、魔術師達の言葉、そして詩人達の言葉を聞いたが、
今、あなたが申されたような言葉は耳にしたことがない。
その言葉は大海の深淵にまで響くものであります。
あなたの手を取らせて下さい。
私はイスラームのため、あなたに忠誠を誓います」
と言ってみ使いに忠誠の誓いをした。
アッラーのみ使いは「その誓いはあなたの部族民を代表するものですか」と言われた。
彼は「それは私の部族民を代表するものです」と言った。
時にアッラーのみ使いは遠征隊を（ある地に）派遣され、彼等は例の男の部族民の所を通った。
その時、その遠征隊の隊長は「諸君はここの部族民から何か取ったか」と言った。
すると隊員の一人が「私は彼等から沐浴のための器を手に入れました」と言った。
隊長は「それを返して上げよ。彼等はディマードの部族民である」と言った。

アブー・ワーイルは伝えている

アンマールはわれわれに説教した。それは短縮されてはいたが感銘的なものであった。
彼がミンバルから降りた時、われわれは「アブー・ヤクザーン（アンマールの異称）よ、あなたの説教は実に感銘的であり、しかも簡潔なものであった。
だがもしあなたがそれをもう少し長くすればなお良かったのに」と言った。
彼は「私はアッラーのみ使いが『人が礼拝を延長し、説教を短縮するのは教義を理解したしるしである。
故に礼拝は延長せよ。
説教は簡潔にせよ、まこと、その表現には魅力がある』と申されるのを聞いた」と言った。

アディーユ・ビン・ハーティムは伝えている

一人の男が預言者の側で「アッラーとそのみ使いに従う者は、まさに正道を歩んでいる。
そしてその両御方に背く者は既に迷ってしまっている」と説教した。
するとアッラーのみ使いは「あなたはなんて説教が下手なのか。
『アッラーとそのみ使いに背く者は』と言うがよい」と申された（注）。
イブン・ヌマイルはこれに付加し、「彼は既に迷っていた」と言った。

（注）問題は男の説教の部分من يعصهما man ya'sihima（その両御方に背く者は）の接尾人称代名詞の双数形にある。
預言者はアッラーの唯一性に殊の外敏感であったようで、アッラーと彼自身が同位とも受け取れるような هما hima という接尾人称代名詞の使用を好まなかったのである。
つまり彼はあくまで主とその創造物をはっきり区別するのを望んだのである

サフワーン・ビン・ヤアラーは彼の父を根拠として伝えている

彼（の父）は預言者がミンバルの上でクルアーンを朗誦されると、人々が「おお、マーリクよ…」と叫ぶのを聞いた（注）。

（注）マーリクは地獄の看守を委任された天使である。
なおミンバルでのクルアーンの朗誦は、罪を犯した者に対する地獄への警告を発する場合の預言者の慣行の一つであったという

アムラ（アブドル・ラフマーンの娘）は彼女の姉を根拠として伝えている

私はクルアーンのカーフ章（第 50 章）を覚えました。
それはアッラーのみ使いが毎週金曜日にミンバルで朗誦されていた栄光あるクルアーンの一章です。
このハディースはアムラが彼女の姉を根拠として語ったものである。

ハーリサ・ビン・ヌウマーンの娘は伝えている

「私がクルアーンのカーフ章を覚えたのはみ使いが毎週金曜日の説教にそれを朗誦されていたからなのです」
なお彼女は「私の家とアッラーのみ使いの家は同じ炉を使用しておりました（注）」と言った。

（注）この炉は戸外にあったものである。
彼女の家と預言者の家は近接しており、彼女は預言者の様子をかなり良く知っていた

ウンム・ヒシャーム（ハーリサ・ビン・ヌウマーンの娘）は伝えている

私達の炉とアッラーのみ使いの炉は二年、または一年、あるいは一年の中の何か月間は共同でした。
ところで私はカーフ章を覚えましたが、それはアッラーのみ使いが毎週金曜日にミンバルで説教される時、朗誦されていた栄光あるクルアーンによって覚えただけなのです。

ウマーラ・ビン・ルアイバは伝えている

私はビシュル・ビン・マルワーンがミンバルで両手を上げて（祈願して）いるのを見た。
そこで私は「アッラーが両手を醜くされますように（と呪った）（注）」
私はアッラーのみ使いがかように手を上げるのではなく、ほんの人指しゆびで示すのを見るだけでした。

（注）これは良くない事に対する非難、あるいはのろいの表現である。
なおこの言葉を論拠として多くの学者達は、両手を伸ばしての祈祷は是認されないとして

いる。
しかし、学者達の一部は、アッラーのみ使いが降雨のための祈願に両手を上げたとして、それは完全に禁止されているものではないとしている。

このハディースは**フサイン・ビン・アブドル・ラフマーン**を根拠として、他の伝承者経路でも伝えられている。

イマームが説教している時にモスクに来た者は挨拶としてニラカートの礼拝を行うこと

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者が金曜日に説教されていると、一人の男がそこに入って来た。
その御方は「おお、誰々よ、あなたは（ニラカートの）礼拝をしたか」と言われた。
彼は「いいえ」と言った。
み使いは「それでは立って礼拝せよ」と申された。

このハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。

ハンマード（伝承者の一人）も同様のハディースを伝えているが、彼はニラカートについては述べていない。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いが金曜日に説教されていると、一人の男がモスクに入って来た。
その御方は「あなたは礼拝したか」と言われた。
男は「いいえ」と言った。
み使いは「立ってニラカート捧げよ」と申された。
クタイバの伝承では「み使いは『ニラカート捧げよ』とのみ言われた」と伝えている。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者が金曜日にミンバルの上で説教されていると、一人の男が入って来た。
み使いは彼に「あなたはニラカート捧げたか」と言われた。
彼は「いいえ」と言った。
するとその御方は「では（ニラカート）捧げよ」と申された。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者は説教なされて「誰でも金曜礼拝に訪れた場合（たとえ）イマームがそこに出て来ていた時であっても、ニラカートの礼拝を捧げねばならない」と申された。

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いが説教されていた時、スライク・ガタファーニーが金曜礼拝にやって来て、直ぐに座ってしまった。
するとその御方は「スライクよ、立ってニラカート捧げよ。しかしそれは短くせよ」と言われた。

そして「誰でも金曜礼拝に訪れた場合、既にイマームが説教を行っていたなら、その者はニラカートを捧げ、しかもそれを短く行わねばならない」と申された（注）。

（注）これら一連のハディースにみられる金曜日のニラカートについては意見の相違がある。

イマーム・シャーフィー、イマーム・アハマドはモスクの挨拶としてのこのニラカートは義務としている。

一方イマーム・マーリク、イマーム・アブー・ハニーファ、スフヤーン・サウリーその他は、そのニラカートは義務ではなく、イマームが説教を開始した時は人々か説教を聞くのを妨げるからそれを行ってはならないとしている。
アブー・ハニーファ派は二つ前に示されているハディースを根拠とし、説教の始まる直前まではニラカートを行うべきであるとしている。
様々な意見はあるが結局、預言者が説教中にモスクに入って来た男にニラカートを命じた、というハディースがこの問題の解決を示唆するものであるとされている

説教中の教育に関するハディース

アブー・リファーアは伝えている

私は預言者が説教されていた時、その御方の所に行った。

私は「アッラーのみ使いよ、この宗教を知りたいと望んでいる見知らぬ者が参りました。

彼はこの宗教がどういうものか知らないのです」と言った。

するとみ使いは説教を中止されて私の方に近づかれ、私のすぐ近くまで来られました。

そこに椅子が運ばれて来た。

私はその椅子の脚は鉄で出来ていたと思った。

アッラーのみ使いはそれにおかけになった。

そしてアッラーがその御方に教えられたことを私に教えて下さった。

その後で説教のため再度（ミンバルへ）お戻りになって残りの部分を終えられた（注）。

（注）このハディースは椅子の使用や、説教の中止が可能であることを示すものである

金曜礼拝で朗誦するもの

イブン・アブー・ラーフィウは伝えている

マルワーンはアブー・フライラをマディーナにおける彼の代理に任命した後でマッカに行った。

アブー・フライラは金曜日にわれわれを先導して礼拝を行った。

彼は最初のラカートでは合同礼拝章（クルアーン第 62 章）を朗誦し、第二のラカートで**「偽信者達があなたの許にやってくる…」**（クルアーン第 63 章 1 節）を朗誦した。

私は去って行くアブー・フライラに会って「あなたはアリー・ビン・アブー・ターリブがクーファで朗誦していた二章を朗誦されましたね」と言った。

アブー・フライラは「私はアッラーのみ使いが金曜日にその二章を朗誦されるのを聞いたのだ」と言った。

このハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられ、「彼は『み使いは合同礼拝章』を最初のラカートで朗誦され、他のラカートでは「偽信者達があなたの許にやってくる」を朗誦された」というように一部変更している。

ヌアマーン・ビン・バシールは伝えている

アッラーのみ使いは二つの祭礼と金曜日に**「至高の御方、あなたの主の御名を讃え奉れ」**（クルアーン第 87 章）と**「あなたは覆滅の事態発生の話を聞いたか」**（クルアーン第 88 章）を朗誦されていた。

そして、たとえ祭礼と金曜が重なった場合でも、同じ様にその二章を朗誦しておられた。

前述のハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。

ダッハーク・ビン・カイスは、ヌウマーン・ビン・バシールに、アッラーのみ使いは金曜日の礼拝で、合同礼拝章の他に何を朗誦されたか、ということを書面で尋ねた。

彼は「その御方は**「あなたに……が達したか」**（クルアーン第 88 章）を朗誦されていた」と言った。

金曜日に朗誦する章句

イブン・アッバースは伝えている

預言者は金曜日の早朝の礼拝で**「アリフ・ラーム・ミーム。この啓典の啓示は……」**（クルアーン第32章）と**「人間には（人間）と呼ぶことも出来ない時期があったではないか」**（クルアーン第76章）を朗誦されていた。また、金曜日の礼拝には「合同礼拝章」（クルアーン第62章）と「偽信者たち章」（クルアーン第63章）を朗誦しておられた。

このようなハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。

前述のハディースは別伝承者経路を経ても伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

預言者は金曜日の早朝の礼拝で、最初のラカートでは**「アリフ・ラーム・ミーム。この啓典の啓示は」**（クルアーン第32章）を、そして次のラカートでは**「人間には（人間）と呼ぶことも出来ない時期があったではないか」**（クルアーン第76章）を朗誦されていた。

アブー・フライラは伝えている

預言者は金曜日の早朝の礼拝で、最初のラカートでは**「アリフ・ラーム・ミーム。この啓典の啓示は…」**を、そして次のラカートでは**「人間には（人間）と呼ぶことも出来ない時期があったではないか」**を朗誦されていた。

金曜礼拝の後に行う礼拝について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方は誰でも、金曜の合同礼拝挙行後に四ラカートの礼拝を行うように」と申された。

スハイルの父親はアブー・フライラを根拠として伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方が金曜日の合同礼拝の後で礼拝する場合は四ラカート挙行せよ」と申された。

（中途伝承者アムルはその伝承の中で「イブン・イドリースは、これはスハイルを根拠として言ったものである」ということを付加している）

なおみ使いは「もしあなたが何か急ぐ用事でもあれば、マスジドでニラカートを行い、家に帰ってからニラカートを挙行せよ」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方の中の誰でも合同礼拝の後の礼拝は四ラカート捧げよ」と申された。

（ジャリールによって伝えられたハディースには「あなた方の中の」という言葉は述べられてはいない）

ナーフィウは伝えている

アブドッラー・ビン・ウマルは金曜の合同礼拝を行うと（マスジドを）去り、彼の家でニラカートの礼拝を捧げた。

そして彼は 「アッラーのみ使いはこのようになさっておられた」と言った。

ナーフィウは伝えている

アブドッラー・ビン・ウマルはアッラーのみ使いのナフルの礼拝（義務以上に行う礼拝）について述べた。

（それについて彼は）「その御方は合同礼拝の後に礼拝を行わずに去られた。そして家でニラカートを行われた」と言った。

ヤヒヤー（イマーム・ムスリムにこのハディースを伝えた伝承者）は「私はその御方が疑いなくその礼拝を（マスジドで）行ったということを、マーリクの書物で読んだと思う」と言った。

サーリムは彼の父を根拠として伝えている

預言者は合同礼拝の後には二ラカートの礼拝を行っておられた（注）。

（注）合同礼拝後の礼拝のラカート数については学者間に意見の相違がある。

ある学者達は合同礼拝は正午の礼拝の代りであるから、そのラカート数はズフルの礼拝と同じであるべきたと主張する。

これに対して、ハーフィズ・ビン・カイイムは合同礼拝はズフルの代りではなく、独立したもので、それ自体にスンナ（聖慣習）の礼拝があるのだと主張する。

これについては先に述べられたハディースにより各自判断すればよい

ウマル・ビン・アターウ・ビン・アブー・フワールは伝えている

ナーフィウ・ビン・ジュバイルは彼（ウマル）をナミルの姉昧の息子サーイブの所に使いに出した。

それは、彼がムアーウィヤの礼拝で見たことを尋ねるためであった。

彼は「事実、私は合同礼拝をモスクでイマーム（ムアーウィヤ）と一緒に行った。

そしてイマームが（あなた方の上に平安あれ）の挨拶を終えた時、私はその場に立ち上って（スンナ）の礼拝を行った。

イマームは中に入ってから私に使いの者をよこし

「君が今行ったことは繰り返えしてはならぬ、合同礼拝を行った時は（いつでも）君が（誰かと）話をするかあるいは外に出るまでは（スンナ）の礼拝を行ってはならぬ。

アッラーのみ使いはわれわれに『われわれが（誰かと）話しをするか、外に出るまでは二つの礼拝（合同礼拝とスンナの礼拝）を結びつけてはならない』とお命じになった（注）」と言った。

（注）合同礼拝の後にスンナの礼拝を行う場合は、それを行う前に言葉を交わすこと、あるいはその場を移動することが必要である。

この場合は移動の方がより好ましいとされている

ウマル・ビン・アターウを根拠として同じようなハディースが伝えられている。

だがその中で彼は、「彼が（あなた方の上に平安あれ）の挨拶を終えた時、私はその場に立ち上った」とは述べたが、「イマーム」という言葉は述べなかった。

二祭礼の礼拝の書

タイトルなし

イブン・アッバースは伝えている

私は、アッラーの預言者、アブー・バクル、ウマル、ウスマーンの各フィトルの礼拝に参加した。
それらの方々は皆、説教の前にその礼拝を捧げ、その後で説教を行った。
預言者は（ミンバルから）下りて来られ、人々に座るよう手で指示されていた。
その時、私はその御方をじっと見つめていたのを覚えている。
それからその御方はビラールを伴い、人々をかきわけながら女達の所に近づかれた。
そして（クルアーンの一節）**「預言者よ、あなたの許へ女の信者がやって来て、あなたに対しこう忠誠を誓うならば『アッラーの外は何ものも同位に崇めません…』」**（クルアーン第60章12節）を朗誦し終えると、
「あなた方は（今朗誦した節に述べられていたことを）確認しますか」と申された。
するとその女達の中で唯一人だけ「はい、預言者よ、確かに」と答えた女性があったが、その時、それが誰であったか確かめられなかった。
み使いは彼女達に（自発的な）喜捨を勧められた。
ビラールは彼の衣服を広げ「さあ、あなた方のために、私の父と母を犠牲とさせて下さい」と言った。
すると彼女達はビラールの衣服に指輪を投げ入れ始めた。

イブン・アッバースは伝えている

私はアッラーのみ使いが説教される前に礼拝を行っておられたことを証言する。
その御方は（礼拝を行った後）説教をされた。
そして女達にそれを聞かせることが出来なかったのを知ると、彼女達のところに進まれて熱心に訓戒された。
そして彼女達に（自発的な）喜捨をお命じになった。
ビラールが彼の衣服を広げると、女達は指輪、イヤリング、その他の物をそこに投げ入れ始めた。
このハディースはイブン・アッバースを根拠として、別の伝承者経路でも伝えられている。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

イードル・フィトルの日、預言者はお立ちになり、説教の前に礼拝を始められた。
その後、人々に説教なされ、それが済むと（ミンバルから）降りられて女性達の所に行か

れた。

そして、ビラールの手に支えられながら熱心に訓戒された。

ビラールは女達が自発的な喜捨を投げ入れるために彼の衣服を広げていた。

私（伝承者）はアターウ（伝承者の一人）に「それはフィトルの日に、女達が行ったザカート（ですか）」と言った。

彼（アターウ）は「いいえ、その時彼女達が行ったのはサダカ（自発的な喜捨）で、一人の婦人が彼女のリングを投げ入れますと、他の女達もそれぞれの所持品を次々に投げ入れた」と言った。

私はアターウに「現在、イマームが彼の説教を終えた時（善行奨励のために）女達の所へ行って訓戒を垂れるのは正しいのでしょうか」と言った。

彼は 「誓っていう。それは彼等にとって正しいことである。だが、彼等はどうしてそのようにしないのか」と言った。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私はイードの日、アッラーのみ使いと礼拝を行った。

その御方は説教の前に、アザーン（礼拝への呼び掛け）もイカーマ（礼拝挙行直前の触れ）もなしに礼拝を始められた。

その後ビラールに支えられ、アッラーに対して畏敬の念を起すよう命じられ、その御方への服従を促され、そしてなお人々をねんごろにお諭しになった。

それからその御方は女達の所に進まれ、再び彼女達に熱心に訓戒され、そして「あなた方、自発的な喜捨をせよ。（さもなくば）あなた方の多くは地獄に落ちてそこの燃料となる」と申された。

すると両頬が黒く日焼けした一人の婦人が女性達の中から立って、「アッラーのみ使いよ、何故ですか」と言った。

その御方は「それはあなた方が苦情ばかりいって、あなた方の配偶者をないがしろにするからです」と申された。

すると彼女達はビラールの衣服の中に各々の耳かざり、指輪等の装飾品を投げ入れ始めた。

イブン・アッバースとジャービル・ビン・アブドッラー・アンサーリーは伝えている

イードル・フィトルとイードル・アドハーには、アザーンは唱えられなかった。

私（イブン・ジュライジュ）は「これについて彼（イブン・ジュライジュにこのハディースを伝えた伝承者アターウ）に尋ねた」

彼は「ジャービル・ビン・アブドッラー・アンサーリーが私に『イードル・フィトルにはイマームが出て来る時も、出て来た後も礼拝のアザーンは唱えられないし、イカーマやその他いか

なる呼び掛けもない。
その日は、どのような呼び掛けも、イカーマも全くないのである』と言った」

アターウは伝えている
イブン・アッバースがイブン・ズバイルに忠誠の誓いをした当初（彼の許に）使者を送り
「イードル・フィトルには礼拝のアザーンは唱えられなかった。従ってあなたもそれを行って
はなりません」（と告げた）。
それでイブン・ズバイルは、その日、アザーンを唱えなかった。
彼（イブン・アッバース）はそれと共に、説教は礼拝後に行われていた、という事を告げた。
それで、イブン・ズバイルは説教の前に礼拝を行った。

ジャービル・ビン・サムラは伝えている
私はアッラーのみ使いと二つのイードに、アザーンもイカーマもなしに一度や二度ではなく
何度も礼拝を行った。

イブン・ウマルは伝えている
預言者、アブー・バクル、そしてウマルは二つのイードには説教の前に礼拝を行ってい
た。

アブー・サイード・フドリーは伝えている
アッラーのみ使いはアドハーとフィトルの日はお出になられ、まず礼拝から始められた。
礼拝を済まされると（あなた方の上に平安あれ）の挨拶をしてお立ちになり、礼拝の場に
座っている人々の方をお向きになった。
そして、もしその御方に軍隊派遣の要があればその事を人々にお話しになり、あるいはそ
の御方にとって他に必要な事があれば、それを人々にお命じになった。
なお、その御方は常に「自発的な喜捨をせよ、自発的な喜捨をせよ、自発的な喜捨をせ
よ」と申されていた。
その時集った自発的な喜捨のほとんどは婦人達から寄せられたものであった。
こうしてみ使いはその場を去って行かれた。
この（慣例）はマルワーン・ビン・ハカム（が政権を握る）まで続いた。
ある時私はマルワーンと一緒に出かけ、礼拝の場所に着いた。
するとそこにカスィール・ビン・サルトが既に粘土と煉瓦でミンバルを造ってくれていた。
マルワトンは私をそのミンバルの上に押し上げようとするかのように強く引いた。
一方私は彼を礼拝する方向に引いた。
私は彼の動作を見た時「礼拝から始めるのではないのですか」と言った。
すると彼は 「アブー・サイードよ、そうではない。君が知っている事は既に放棄されたの

だ」と言った。
私は「いや決してそうではない。（誓っていう）私はあなたより正しい事を多く知っているのです」という言葉を三度繰り返して立ち去った。

婦人達は両イードに礼拝の場所に出かけ、男達から離れて説教を傾聴する

ウンム・アティーヤは伝えている

（預言者は）私達が、未婚の女性達や家の中に閉じ籠っている婦人達を二つのイードに連れ出すようお命じになった。

そして、生理の（状態にある）女性はムスリム達の礼拝の場から離れるようお命じになった。

ウンム・アティーヤは伝えている

アッラーのみ使いは私達に二つのイードに、家に閉じ籠っている婦人達や未婚の女性を外に連れ出すようお命じになった。

なお彼女は、生理中の女性は外出しても、人々の後にいて「アッラーは偉大なり」を人々と一緒に唱える、と言った。

ウンム・アティーヤは伝えている

アッラーのみ使いはフィトルとアドハーの両イードに、未婚の女性、生理中の女性、家に閉じ籠っている女性達を外に連れ出すよう私達にお命じになりました。

なお、生理中の女性については、礼拝には加わらないが、見聞を広めたり、ムスリム達の（多幸）祈願に参加するのです。

私は「アッラーのみ使い様、私達の一人は（彼女の顔と体を覆う）外衣がございません」と申しました。

するとその御方は「（あなた方の中でそれを持っている）姉妹が彼女に着せて上げよ」と申されました。

イードの礼拝の場合、その前後にナフルの礼拝は行われない

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いはアドハーまたはフィトルの日にお出になりニラカートの礼拝をされ、その前後には礼拝されなかった。
その後、その御方はビラールを伴って婦人達の所に行き、彼女達に自発的な喜捨をお命じになった。
すると一人の婦人がまず彼女のリングやネックレスを取って投げ入れ始めた。

このハディースはイブン・アッバースを根拠とし、別の伝承者経路でも伝えられている。

二つの祭礼の礼拝で朗誦するもの

ウバイドッラー・ビン・アブドッラーは伝えている

ウマル・ビン・ハッターブはアブー・ワーキド・ライスィーにアッラーのみ使いがアドハーとフィトルに朗誦されていたものを尋ねた。
彼は「その御方は両イードに**「カーフ・栄光に満ちたクルアーンによって誓う」**（クルアーン第 50 章）と**「時は近づき、月は微塵に裂けた」**（クルアーン第 54 章）を朗誦しておられた」と言った。

ウバイドッラー・ビン・アブドッラーはアブー・ワーキドが次のように言ったと伝えている

ウマル・ビン・ハッターブは私にアッラーのみ使いがイードに朗誦されていたものについて尋ねた。私は『**時は近づき、月は微塵に裂けた**』と『**カーフ・栄光に満ちたクルアーンによって誓う**』という内容ですといった。

イードの日々、行っても良い競技について

アーイシャは伝えている

アブー・バクルが私に合いに来ました。

その時アンサールの娘二人が私の許にいて、ブアースの戦（注）でアンサール達が互いに話し合っていたことを歌詞にして歌っていました。

しかし彼女達は歌を生業とする女性ではありませんでした。

アブー・バクルは「アッラーのみ使いの家で（聖なる）イードの日に悪魔の笛を（吹き鳴らすとは）何事ですか」と申しました。

するとアッラーのみ使いは「アブー・バクルよ、あらゆる国民に祭がある。これはわれわれの祭である（彼女等に歌わせよ）」と申されました。

（注）マディーナに近い場所名で、預言者がそこに移る前、アウス族とハズラジュ族が戦った所としてよく知られている

このようなハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。
しかしその中には「二人の女性がタンバリンを打ち鳴らしていた」というのがある。

アーイシャは伝えている

イードル・アドハーの日、アブー・バクルが彼女の所にやって来た。

その時、彼女の許に二人の女性がいてタンバリンを打ち鳴らしながら歌っていた。

アッラーのみ使いは衣服で全身を覆っておられた。

アブー・バクルは彼女達を叱った。

するとアッラーのみ使いはお顔をお出しになり「アブー・バクルよ、祭なのだから彼女達をそのままにしておくがよい」と申された。

アーイシャは「アッラーのみ使いは私がエチオピアの人々がスポーツをしているのを見ておりますと、その御方の外とうで私を人目から遮るようにして下さったことがありました。

その時私は未だうら若い乙女でした。

それで、あなた方は年端の行かぬ娘がいかに遊戯を好むか良くお考え下さい」と言った。

アーイシャは伝えている

アッラーに誓って申します。かつてエチオピアの人達が、預言者のモスクの近くで槍の競技をしておりました。

その時アッラーのみ使いは私の部屋の入り口に立たれ、私が彼等の競技を見られるように、その御方の外とうで私を人目から遮るようにして下さったことがありました。

そしてその御方は私が満足して立ち去るまで私のために立っていて下さいました。
それで、あなた方は年端の行かぬ娘がいかに遊戯を好むか良くお考え下さい。

アーイシャは伝えている
アッラーのみ使いが私の所にお出でになりました時、私の許に二人の若い娘がおりましてブアースの戦の歌を歌っておりました。
その御方はベッドに横たわりお顔をそむけておられました。
そこへアブー・バクルが参りまして私を叱り「アッラーのみ使いの家で悪魔のフルートとは」と申しました。
するとアッラーのみ使いは彼の方に向かれ「彼女等をそのままにしておくがよい」と申されました。
やがて、その御方にそれへの興味がうすらいだ様子を見ましたので、私が彼女達に目くばせしますと二人は退出致しました。
その日は黒い皮膚の人達が盾と槍で競技をしていたイードの日でした。
み使いは私をその御方の背に付くようにして立たせて見物させて下さいました。
それは私が望んだのか、それともその御方が私に「見たいのか」と言われ「はい」と私が答えてそのようになったのか（覚えておりません）。
競技を見ておられたその御方は「おお、バヌー・アルフィダ（エチオピア人達の尊称）よ、頑張ってせよ」とお声を掛けられました。
私が飽きて来ました頃「もう十分か」と申されましたので私が「はい」と申しますと、「それでは戻りなさい」と言われました。

アーイシャは伝えている
イードの日、モスクにエチオピアの人々が歌い踊りながらやって参りました。
預言者は私をお呼びになりました。
私は私の顎をその御方の肩に乗せました。
私は終始そのような恰好で彼等のスポーツを眺めておりました。

このハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。
しかしそのハディースでは「マスジドにおいて」（という言葉は）述べられていない。

アーイシャは伝えている
私は競技者達に「あなた方の競技が見たいのです」と言った。
私はまた「そうしますとアッラーのみ使いが（私の前に）立って下さいました。
それで私は門の所で、その御方の両耳、両肩越しに、彼等がモスクで競技するのを眺めました」と言った。

アターウ（中途伝承者）は「彼等はペルシア人でしたか、それともエチオピア人でしたか」と言った。
イブン・アティーク（アーイシャからこのハディースを聞いた伝承者）は彼に「彼等はエチオピア人でした」と告げた。

アブー・フライラは伝えている
エチオピアの人達がアッラーのみ使いの前で槍の競技をしていた時、ウマル・ビン・ハッターブがやって来た。
彼は（彼等に投げようとし）小石を拾うために屈んだ、その時アッラーのみ使いが「ウマルよ、彼等をそのままにしておくがよい」と申された。

雨乞いの礼拝の書

タイトルなし

アブドッラー・ビン・サイド・マーズィニーは伝えている

アッラーのみ使いは礼拝の場にお出でになって雨乞いをされた。
そしてキブラにお向いになっている間にその御方の外衣の裾をお振りになった（注）。

（注）この場合、外衣の裾を片方に、あるいは左右に振る。
それは飢餓から豊艶へ、あるいは繁栄への状態の変化を示すものである

アッバード・ビン・タミームは彼のおじを根拠として伝えている

預言者は礼拝場にお出でになり雨乞いの祈願をされました。
その時キブラに向かわれて外とうを裏返しにされ、ニラカート挙行された。

アブドッラー・ビン・サイド・アンサーリーは伝えている

アッラーのみ使いは雨乞いをされるために礼拝場にお出でになった。
そして、いよいよ祈願されようとした時、キブラに向かわれて外衣を裏返しにされた。

アッバード・ビン・タミーム・マーズィニーは、教友の一人であるおじから聞いた話として（次のように）伝えている

アッラーのみ使いは、ある日、雨乞いのためにお出でになった。
その御方はアッラーに御祈願のため、背中を人々の方に向けられ、キブラに面し外衣を裏返しにされ、ニラカート挙行された。

雨乞いの祈願は両手を上げる

アナスは伝えている

私はアッラーのみ使いが白い両脇の下が見えるくらい両手をお上げになって（雨乞いの）祈願をされるのを見ました。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

預言者は雨乞いをされた。その時み使いは両手を天に向けて上げておられた。

アナスは伝えている

アッラーの預言者は雨乞い以外はいかなる祈願も白い両脇の下が見える程、両手を高く上げて挙行されることはなかった。

しかし、アブドル・アーラーは「その御方の白い片方の脇の下、または白い両脇の下が見えた」と言った。

このハディースは**アナス・**ビン・マーリクによって別の伝承者経路でも伝えられている。

雨乞いの祈願

アナス・ビン・マーリクは伝えている

金曜日、アッラーのみ使いが説教にお立ちにになっていた時、ダールル・カダーウ（注）の方向にある入口から一人の男がモスクに入って来た。

彼はアッラーのみ使いの所に来て立ったまま「アッラーのみ使いよ、（草がなくなって）らくだは死に（生きているものも弱り果てて）歩行も困難です。

アッラーに雨乞いをして下さい」と言った。

するとアッラーのみ使いは両手をお上げになり「おおアッラー、われ等に雨をもたらせ給え、おおアッラー、われ等に雨をもたらせ給え、おおアッラー、われ等に雨をもたらせ給え」と申された。

アナスは「アッラーに誓っていうが、空には一片の雲も見えなかった。

そして、われわれとサルウ山の間にはどんな家も建物もなかった。

だがその時、その山の背後から盾のように丸い雲が現われて中天に達し、それが空一面に広がって雨となった。

アッラーに誓い、われわれは一週間、全く太陽を見なかった。

次の金曜日、アッラーのみ使いが説教に立っておられた時、例の入口から男が入って来てみ使いの前に立ち

「アッラーのみ使いよ、らくだが死にました。

また、通路は（水で）塞がりました。

われわれのために雨が止むよう祈願して下さい」と言った。

するとアッラーのみ使いは両手を上げられ「おおアッラー、雨をわれわれにではなく、郊外に降らせ給え、おおアッラー、小山や丘、涸谷そして樹木の生い茂る場所に降らせ給え」と祈願された。

すると雨は止んだ。

われわれは太陽の照りつける中、外に出て歩いた。

シャリークは「私はアナス・ビン・マーリクに『その男は前の男（と同一の者）でしたか』」と尋ねた。

彼は「それについては知らない」と言った。

（注）ダールは「家」、カダーウは「果す」の意てある。

その家はもともとはウマルの所有であった。

だか彼の没後、彼の負債返済のために売られたので「（負債を）果した家」と呼ばれた

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いが御在世の時、人々は飢饉に見舞われた。
時に、アッラーのみ使いが金曜日、説教に立たれていた時であった。
遊牧民の男が立って「アッラーのみ使いよ、家畜は死に子供達は飢えております」と言った。
残余のハディースは（前述と）同意であるが、その御方は「おおアッラー、雨をわれわれの上にではなく、われわれの居住地の郊外にもたらせ給え」と言われた（が前出のものと異なる）。
（伝承者は）その御方が手で指し示すどの方向でも、雲は切れて消えた。
私はマディーナの上空は（雲が切れて）中庭のようになり、水路は一月の間水で満ちていたのを見ている。
そして郊外から来た者は一人として大量の降雨があったというニュースを伝えないものはなかった（とも伝えている）

アナス・ビン・マーリクは伝えている

金曜日に、預言者が説教されていた。
すると人々はその御方の前に立って大声で「アッラーの預言者よ、日照り続きで木の葉は黄ばみ、家畜は死んでしまいました」と言った。
残余のハディースは同じである。
だがアブドル・アーラーの伝承の中には「マディーナの上空は雲が切れて雨は止み、その郊外で雨が降り出した。私がマディーナを見るとそれはちょうど冠を戴いたかのようであった」と述べられている。

このハディースはアナスを拠り所として別の伝承者経路でも伝えられている。
その中には「アッラーは雲を集められた。そしてわれわれが外に出たくても出られないでいた時、私は、屈強な男が早く家族の許に行きたいという気持を押さえ切れず、いらいらしているのを見ていた」というのがある。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

遊牧民の男が金曜日に、ミンバルにお立ちになっているアッラーのみ使いの所にやって来た。
残余のハディースは同じであるがその中には「私はシーツを折りたたむようにして雲が切れて行くのを見た」というのがある。

アナス（・ビン・マーリク）は伝えている

われわれがアッラーのみ使いと一緒にいた時、雨に降られた。

アッラーのみ使いは衣服の一部をかざし、それで雨を受けるようにされた。

われわれが「アッラーのみ使いよ、どうしてそのようにされたのですか」と言った。

すると「それはアッラーの御慈悲だからです」と言われた（注）。

（注）アラビア半島では、降雨はまさに天の慈悲と考えられている

風、曇天の日の憂いと降雨の喜び

アターウ・ビン・アブー・ラバーフは預言者の妻アーイシャに聞いた話として伝えている

アッラーのみ使いは風の日や曇天の日はその影響がお顔に現れた。
そしてその御方は前後に行ったり来たりされていた。
（一方）雨が降った時は喜ばれ（不安な様子は）その御方には全くなかった。
また彼女は次のようにも言った。
私はその御方に心配される理由を尋ねました。
すると「私は私のウンマ（イスラーム共同体）に不幸がふりかかりはしないかと心配するのです」と申されました。
また降雨については「それは（アッラーの）御慈悲である」と申されました。

アターウ・ビン・アブー・ラバーフは預言者の妻アーイシャを根拠として伝えている

預言者は風の烈しい時は常々「おおアッラー、風はすべて良いことにのみ吹き、けっして災害等をもたらしませんように、私は、偏に主に御祈願致します」と申されておりました。
また（険悪な）雲行きの時は、その御方のお顔の色は変わり、出たり入ったり、前後にお歩きになっておりました。
（程よい）降雨がありますと安心された御様子で、それがお顔に現れました。
アーイシャは「私は（それについて）み使いに尋ねました。
すると"アーイシャよ、それはアードの民について**「その時、黒雲がそれぞれの谷に押し寄せて来るのを見て人々はいった。「この雲では（常ならぬ）雨が来るぞ」」**（クルアーン第 46 章 24 節）と述べられているように、災害をもたらすかも知れないからである"と申されました」と言った。

預言者の妻**アーイシャ**は伝えている

アッラーのみ使いは微笑まれるのが常でしたので、その御方が大きく口を開けてお笑いになったのを知りません。
み使いは曇天の日や、風の日等は（憂色を）顔に現しておられました。
私は「アッラーのみ使いよ、私は人々が雲を見ると雨があるという期待から喜んでいるのを見ますのに、あなたはそれを御覧になるとお顔に憂色がただよいます」と申しました。
するとその御方は「アーイシャよ、私はそれが災害をもたらしはしないかと案ずるのだ。
既に風によって苦しめられた人々があった。
彼等は苦痛を味わったのである。
それで人々は**「この雲では（常ならぬ）雨が来るぞ」**と言ったのである」と申されました。

サバー（東風）とダブール（西風）について（注）

（注）普通サバーはカブールとも呼ばれ心地よい東風である。
しかし、ハンダクの戦（627）でアッラーが吹かせたといわれるサバーは大へん冷たく烈しいものであった。
壕の周囲につくられたクライシュ族のテントは、それによって破壊され炊事の鍋もくつがえされたという。
そのためクライシュ族は戦意を失って引き返した。
一方、ダブールは熱い西風でアードの民を滅した風である。
彼等はアッラーの教えを説く者を嘘つき呼ばわりし、自分達より力の強い者はないと驕りたかぶったためにアッラーの怒りを買って滅亡した

イブン・アッバースは伝えている

　アッラーのみ使いは「私はサバー（東風）に助けられ、アードはダブール（西風）に滅ぼされた」と申された。

このハディースはイブン・アッバースを根拠とし、他の伝承者経路でも伝えられている。

日食の書

日食の礼拝

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いが御在世の時に日食がありました。
み使いは礼拝にお立ちになりました。
そしてとても長い間立っておられましてから立礼されました。
その立礼も大変長ごうございました。
それから頭をお上げになって、また大変長い間立っておられましたが、それは最初の直立程ではありませんでした。
それから(再び)長い立礼をされました。
それも最初の立礼程長くありませんでした。
その後、その御方は叩頭されてお立ちになり、長い間直立しておられました。
それも最初の直立程長いものではありませんでした。
その次にまた立礼されました。
それは長い立礼ではありましたが、最初の立礼程ではございませんでした。
それから頭をお上げになって直立されました。
その直立も長ごうございました。
でも、それも最初のもの程ではありませんでした。
次にまた長い立礼をされました。
それも最初のもの程ではありませんでした。
そして叩頭された後(人々の方を)お向きになりました。
その時既に太陽は明るく輝いておりました。
み使いは説教をなさいました。
先ずアッラーを重ねて讃美されてから
「まことに、太陽と月はアッラーのみ印の中の二つのものである。
その二つは誰かの生死のために(注 1)食が起こるのではない。
諸君がそれを見たならアッラーを讃美し奉り、礼拝を挙行し、慈善行為をせよ。
おお、ムハンマドのウンマよ、アッラーの下僕等が密通の罪を犯した時、いかに義憤を覚える者があっても、アッラーのそれに遠く及ぶものではない。
おお、ムハンマドのウンマよ、アッラーに誓っていう。
もしあなた方が私の知っている事(注 2)を知るならば、あなた方は大いに泣き、まず笑うことはないであろう。

（おお、アッラー）私はそれを伝えなかったでありましょうか（私は確かに伝えました）」
マーリキの伝承には「まことに、太陽と月はアッラーのみ印中の二つの印である」というのがある。

（注 1）往時人々の中には日食や月食が偉大な人の生死に関連して起こると考えている者があった。
それで預言者はそれらの自然現象が人々の生死とは全く関係がないということを述べたのである

（注 2）私が知っている事とは来世の事である

このハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。
その中には「まことに、太陽と月はアッラーのみ印の中のものである」と、「その御方は両手を上げ、おお、アッラー、私はそれを伝達したでしょうか」という表現が付加されている。

預言者の妻、**アーイシャ**は伝えている
アッラーのみ使いが御在世の時日食がございました。
み使いはモスクに行かれ、（礼拝に）お立ちになってアッラーを讃美されました。
人々はその御方の背後に整列致しました。
アッラーのみ使いは（クルアーンを）とても長く朗誦されました。
それから「アッラーは至大なり」を唱えられ、長い立礼をされました。
頭をお上げになりますと「アッラーはその御方を称讃する者に注意をお向けになられる。
われ等が主よ、あなたにこそ凡ての称讃あれ」と申されました。
この後、直立され（クルアーンを）長く朗誦されましたが、それは最初の朗誦ほどではありませんでした。
それからまた「アッラーは至大なり」を唱えられて長い立礼をされましたが、それも最初のものよりは長くありませんでした。
そして「アッラーはその御方を称讃する者に注意をお向けになられる。
われ等が主よ、あなたにこそ凡ての称讃あれ」と申され、次いで叩頭されました。
（伝承者の一人アブー・ターヒルは、「次いで叩頭された」とは述べていない）
次にその御方は一回日のラカートと同じようにして次のラカートにお移りになりました。
こうして四立礼と四叩頭を完結されました。
太陽はその御方が（人々の方に）振り向かれる前に既に明るく輝いておりました。
み使いは立ち上がられて人々に説教をなされましたが先ず、当然そうされるべきアッラーを称讃されました。
それから「まことに、太陽と月はアッラーのみ印中の二つの印であり、それは人の生死に

よって食が起こるのではない。
あなた方がそれを見た時は急いで礼拝せよ」と申されました。
なおその御方は「アッラーがあなた方から不安を取り除かれるよう礼拝せよ」とも申されました。
そして「私はこの場所で、あなた方に約束されたもの（来世での事柄）を見た。
あなた方は（礼拝中）私が前に進み出るのを見たであろう。
それは私が天国でぶどうの房をもぎ取ろうとする私自身の姿を見た時である。
（ムラーディは「進み出る」を「ataqaddamu」といった）
次にあなた方は私が後退するのを見たであろう。
それは私が、地獄の所々方々が互いにすさまじい音を立てて砕けるのを見た時である。
私はそこにイブン・ルハイユ（注）を見た。
彼は雌らくだを徒らにのらくらさせておくような習慣をつくった者であった」と申された。
アブー・ターヒルのハディースは「急いで礼拝せよ」までで、その後は述べられてはいない。

（注）イブン・ルハイユは預言者イスマイールの宗教を変え、聖なる場所に偶像を置いた最初の者であるといわれている。
彼は「サーイバ「（旅行から無事に帰ったり、病気が癒えた時、一頭の雌らくたを自由にして再ひ使役しない）を始めた人物ともいわれている。
これは偶像崇拝者の迷信の一つであり、クルアーンはこれを禁止した

アーイシャは伝えている
アッラーのみ使いが御在世の時に日食がございました。
その御方は礼拝への集合を呼び掛けさせました。
人々が参集致しますと、その御方は先導され「アッラーは至大なり」を唱えられ、四立礼と四叩頭をされました。

アーイシャは伝えている
預言者は日食の時の礼拝に、声をお上げになってクルアーンを朗誦されました。
そのお方はニラカートで四立礼と四叩頭をされました。
イブン・アッバースを根拠として「預言者はニラカートで四立礼と四叩頭を行われた」とも伝えられている。

ズフリーは伝えている
カシール・ビン・アッバースは「日食の日、アッラーのみ使いが行った礼拝についてイブン・アッバースは良く話していた」と語り前述同様の立札数を伝えている。

アターウは伝えている

私はウバイド・ビン・ウマイルが、私の信用している者（彼が意図する者はアーイシャだと思う）がこう私に話したと言っているのを聞いた。

アッラーのみ使いが御在世の時日食があった。

その御方は長い間お立ちになって立礼され、直立されてまた立礼し、そして直立されてからまた立礼された。

すなわち、その御方はニラカートで各三位礼されそして四叩頭を行われたのである。

この後、その御方は去られたが、その時太陽は既に明るく輝いていた。

み使いの立礼であるが、その御方は「アッラーは至大なり」を唱えられてから立礼し、頭をお上げになると「アッラーはその御方を称讃する常に注意をお向けになられる」と申された。

み使いはお立ちになってアッラーを称讃された後

「まことに、太陽と月の食は人の生死とは関係はない。

しかしながらそれはアッラーのみ印の一つで、その御方の下僕に畏敬の念を起させるためのものである。

もし諸君が食を見たらそれが終るまでアッラーを称讃せよ」と申された。

このハディースは**アーイシャ**を根拠とし他の伝承者経路を経て「預言者は六立礼と四叩頭を挙行された」と伝えている。

日食時の礼拝で、墳墓においての懲罰を指摘される

アムラは伝えている

ユダヤの女性がアーイシャの所に来て「アッラーがあなたを墓場の懲罰よりお守り下さいますように」と申しました。

アーイシャは「私は『アッラーのみ使いよ、人々は墓場で懲罰を受けるのでしょうか』と申しました。

するとみ使いは『アッラーがお守り下さるであろう』と言われました」と言った。

ある朝、み使いが乗り物に乗って出かけられた時、日食があった。

アーイシャは「私は他の婦人達と連れ立って（預言者の妻達の部屋の背後から）モスクに入りました。

み使いは乗り物からお降りになってモスクに入られると、いつもお祈りになる場所にお立ちになりました。

人々はその方の後に立ちました」。

彼女は続けて「その御方は長い間お立ちになった後、立礼されました。

それは大変長うございました。

それから頭を上げ長い間お立ちになっておられましたが、それは最初の直立よりは短いものでした。

それから（また）立礼されました。

それも大変長い立礼でございましたが先のもの程ではありませんでした。

そして、その御方が頭を上げられた時は既に太陽は明るく輝いておりました。

その時み使いは『私はあなた方がダッジャール（注）の騒乱の様に墓場で厳しい懲罰を受けているのを見た』」と言われました。

アムラは「私はアーイシャが『アッラーのみ使いはその後、火炎の試練や墓場の懲罰からの御加護を求めておられました』というのを聞いた」と言った。

（注）偽のキリストで多くの信者を従えていたとされる

このハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。

アッラーのみ使いが日食時の礼拝で御覧になった天国と地獄

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いが御在世の時のあるとても暑い日、日食があった。
み使いは教友達と礼拝を挙行された。
み使いは大変長くお立ちになっておられた。
そのため人々は倒れ始めた。
その後長い立礼をされて頭をお上げになり、また長い間お立ちになっておられた。
次に再び長い立礼をされた後、頭をお上げになって長い間立ち続けられた。
その後叩頭を二回行われた。
そしてお立ちになると先程と同じような礼拝を繰り返された。
このようにしてその御方は四立礼と四叩頭を挙行された。
それからみ使いは「私は諸君がやがて入る凡ての場所を見た。
先ず天国を見たが、私はそこの果実を取るために手を伸した（または、私はその果実を取ろうとした）が手が届かなかった。
次に地獄を見た。
私はそこでイスラエル族の女性が彼女の猫を繋いだまま餌も与えず、自然の餌さえも捕らせなかったために罰を受けているのを見た。
私はまた、アブー・スマーマ・アムル・ビン・マーリク（イブン・ルハイユの別称）が地獄で彼のはらわたを引きずっているのを見た。
彼等（半島の住人達）は日食と月食は偉大な人物の死によってのみ起るといってきたが、その二つは諸君に示されるアッラーのみ印の中の二例に過ぎぬ。
その二つの食が始まったら、それが明るく輝くまで礼拝を続けよ」と申された。
このハディースは別の伝承者経路を経ても、伝えられている。
しかしそれは次の部分が異なる
（すなわち）「私は地獄で黒く背の高いヒムヤル（イエメンの古代住民）の女性を見た」と言われたが、「イスラエルの女性」とは言われなかった。

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いが御在世で、その方の御子息のイブラヒームが亡くなられた日に月食があった。
人々は、日食はイブラヒームが亡くなったためであると言った。
預言者はお立ちになり、人々を導かれて六立礼、四叩頭の礼拝を挙行された。
その御方は最初に「アッラーは至大なり」と唱えられた後、クルアーンを朗誦された。
それは大へん長いものであった。
その後、最初に立っておられたのと同じくらい長く立礼をされた。

そして頭をお上げになって再びクルアーンを朗誦されたがそれは最初のもの程ではなかった。
それから（お立ちになっていた）くらいの間の立礼をされて頭をお上げになった。
そして再度、朗誦されたがそれは二回目程長くはなかった。
この後また（お立ちになっていた）くらいの間の立礼をされて頭をお上げになった。
それからひぎまずかれて叩頭を二回された。
そしてお立ちになって三回の立礼をされたが、最初の立礼は後の二回よりも長いものであった。
立礼の時間は叩頭のそれとほぼ同じくらいであった。
その後、み使いは後方にお下がりになった。
それでその御方の背後の列も後に下がり、遂にわれわれはその場所の端まで来てしまった。
（伝承者の一人アブー・バクルは、その御方は婦人達の近くにまで近づかれたと言った）
次にみ使いは前に進まれた。
それで人々もその御方と一緒に前に進まれ、元の場所にお立ちになった。
そして礼拝を終えられてお帰りになる時には太陽は既に輝いていた。
み使いは「諸君、太陽と月はアッラーのみ印の中の二例に過ぎぬ。
その二つは人々の死によって食が起るのではない
（伝承者の一人アブー・バクルは前記ナースをバシャルと言った）
もしあなた方がそれを見たら、それが明るく輝くまで礼拝を挙行せよ。
私は私の今の礼拝の中であなた方が来世に約束されている事を確かに見た。
あなた方が、私が後退するのを見た時、地獄が私の前に現れたのだ。
私はその火炎に焼かれるのを恐れて追ったのである。
なおそこで、火炎の中で己れのはらわたを引きずり柄の曲った杖をもっている者を見た。
彼はその曲った杖で巡礼者の所持品を盗んでいたのである。
もし気付かれた場合はその物が（偶然に）引っ掛ったと言い、もし気づかれなければそれをもって行ってしまっていた。
そこにはまた猫の飼い主で猫を繋いだまま餌も与えず、餌となる地上の生き物さえ捕らせなかったために遂に飢え死にさせてしまった猫の女主人も見た。
次に天国が現れた。
それは諸君が、私が前に進み私の元の位置に立ったのを見た時であるし私は手を差し延べてあなた方がそれを見るようにそこの果実を取ろうと思ったが、それはしないことにした。
私は今の礼拝でアッラーがあなた方に約束されたこと総てを見たが、それは真理でありまことであった」と申された。

アスマーウ（アーイシャの姉）は伝えている

アッラーのみ傾いが御在世の時日食がありました。
私がアーイシャの所に参りますと彼女は礼拝しておりました。
私は「どうして皆礼拝しているの」と申しました。
彼女は顔で空の方向を指し示しました。
私は「それが何か特別な徴候とでもいうの」と言いました。
彼女は「その通りよ」と言いました。
アッラーのみ使いは（礼拝のため）とても長くお立ちになっておられました。
それで私は気が速くなって参りましたので、近くにあった水袋を取って頭や顔に（その中の水を）注ぎ始めました。
み使いが礼拝を終えられた時は既に太陽は明るく輝いておりました。
み使いは人々に説教されて、アッラーを大いに讃美された後
「ところで私はこの場所でこれまでに見なかったものを見たがそれには天国や地獄もあった。
そしてまた、私はあなた方が近々お墓の中で試練を課せられる、あるいは偽りのキリスト（注）の受難のような苦難に会うであろうという霊感を与えられたのである
（アスマーウはそれが“近々”という言葉であったか“何々の”ようなという言葉であったか定かではないと言った）。
それから、あなた方各々は『汝はこの男についてどのような知識があるか』と問われるであろう。
まことの信者であれば
（この場合信者という言葉が al-mu’min と al-muqin のいずれであったか知らない、とアスマーウは言った）
『それはムハンマドです。アッラーのみ使いでありわれわれに明瞭なみ印と、正しい導をもたらした方です。それでわれわれは応え従いました』と三度繰り返して言う。
すると『汝、眠るがよい。われらは汝が彼を信じているのを知った。よって心安らかに眠るが良い』と言われるであろう。
一方、偽善者あるいは無神論者
（アスマーウは、私はその語が al-munafiqu または al-murtabu のいずれであったか知らない、と言った）
は『私は知らない。私は人々が何か言っているのを聞いて、ただ（それを）言っているだけです』と言う」と申されました。

（注）イスラームでは十字架にかけられたキリストは真実のキリストではないと考えている

アスマーウは伝えている

私がアーイシャの所に参りますと、人々は（礼拝のために）立っておりました。
彼女も礼拝しておりました。
そこで私は「人々に何かあったの」と言いました。
残余のハディースは前述のものと同じである。

ウルワは「kasafat-ish-shamusu（太陽がかけた）といってはならぬ khasafat-ish-shamusu（太陽が食す）と言え」と言った（注）。

（注）正しいアラビア語は、日食には kasafa を月食には khasafa を使用する

アブー・バクルの娘**アスマーウ**は伝えている

預言者はある日（それは日食の日であると彼女はいった）大いに混乱されておりました。
そして急ぐあまりに、最初家族の（中の婦人用の）衣服を羽織られておりましたが、直ぐにみ使い御自身の外衣が持って来られてそれに変え、人々と長い間礼拝のためにお立ちになっておられました。
そしてもしみ使いが立礼をされたのを知らない者が来れば、その後あまりにも長くお立ちになっておられたので（ハディースに伝えられているように）み使いが実際に立礼されたとは思わなかったでありましょう。

イブン・ジュライジュは同一の伝承者経路でこのハディースを伝えているが、それには（次のような付加がある）

み使いはとても長い間お立ちになっていた後立礼された。
（伝承者はまた、次の言葉を付加している）
私（アスマーウ）は私より年長の女性と、またもう一人私より痩せて弱々しい女性をじっと見つめておりました。

アブー・バクルの娘**アスマーウ**は伝えている

アッラーのみ使いが御在世の時日食がございました。
み使いは混乱されて、後で御自身の外衣がもって来られるまで、（女性用の）長い上衣を羽織っておられました。
この後、私は用を足してモスクに参りますと、そこにみ使いが（礼拝のため）お立ちになっているのを見ました。
それで私もその御方と一緒に立ちました。
み使いは大へん長く立っておられましたので、私は座りたくなってしまったのです。
その時私は弱々しげな女性が目に止まりました。

私は「あの女性は私より弱いんだわ」と思いました。
それで私は立ち続けたのです。
み使いは立礼されました。
それも長いものでした。
頭をお上げになると、また長い間お立ちになっておりました。
そういうわけで、もし（状況を知らない）人が来れば、み使いは立礼されなかったのでは、と思えたでありましょう。

イブン・アッバースは伝えている
アッラーのみ使いが御在世の時日食があった。
その御方は人々と共に礼拝を挙行された。
み使いは 雌牛章を読み終える時間に相当するくらいの大へん長い間お立ちになっておられ、それから長い立礼をされた。
頭を上げられるとまた長い間お立ちになっておられたが、それは最初のそれ程長いものではなかった。
次にまた長い立礼を行われたが、それも最初のもの程長くはなかった。
次に叩頭された。
そして立ち上がり重ねて長い間お立ちになっておられたが、それも最初のもの程ではなかった。
そしてまた長い立礼を行われたが、それも最初のもの程ではなかった。
それから頭を上げられて、また長い間お立ちになっておられたが、これも最初のもの程ではなかった。
更にまた、長い立礼を行われた。
これも最初のもの程ではなかった。
それから叩頭に移られて、それで礼拝を終えられた。
その時太陽は既に明るく輝いていた。
この時み使いは「太陽と月はアッラーのみ印の中の二例である。それは人の生死のために起るものではない。あなた方がそれを見た時はアッラーを讃え奉れ」と申された。
教友たちは「アッラーのみ使いよ、われわれはあなたがその場所に立たれている間に何かに手を差し伸べられるのを見ました。
だがその後、あなたが（望まれた行為に対し）差し控えられた御様子を拝見しました」と言った。
み使いは「私は天国を見た。そこで私はぶどうの房に手を差し伸べた。
もしそれが取れれば、あなた方はこの世の続くかぎり、それが食べられたであろうに。
次に私は地獄を見た。
私は今日見たような光景を未だかつて見たことはない。

そこで見たほとんどは女性である」と言われた。
教友達は「アッラーのみ使いよ、それはどのような理由でございましょう」と言った。
み使いは「それは彼女達の背信行為の故である」と申された。
「彼女達はアッラーを信じないのでしょうか」と尋ねられた。
み使いは「彼女達の夫や善良な人に対する背信、あるいは親切な行為にも恩を感じないためである。
たとえあなたがある女性に長い間親切にして上げたとしても、時がたてば、あなたから何もしてもらってはいないかのようにふるまい、『私はあなたに恩など全く受けてはいませんよ』と言うであろう」と申された。

このハディースは同一の伝承者経路を経て**ザイド・ビン・アスラマ**によって伝えられている。
それには「われわれはあなたが恐れて後退するのを見た」という文に taka'ka'ta（あなたが後退する）という語が使用されているのが他と異なっている。

み使いは四叩頭で八立礼を挙行されたと伝える者の言葉

イブン・アッバースは伝えている

日食があった時、アッラーのみ使いは八立礼と四叩頭を挙行された。

このようなハディースはアリーによっても伝えられている。

イブン・アッバースは伝えている

預言者は日食の間、礼拝しておられた。

その御方はクルアーンを朗誦されてから立礼された。

そしてまた朗誦されて立礼された。

その後再び朗誦されて立礼された。

そしてもう一度朗唱されて立礼され、そして叩頭された。

二回目の（ラカート）は最初のと同じである。

日食の礼拝への呼び掛け

アムル・ビン・アースは伝えている

アッラーのみ使いが御在世の時に日食があり、人々に合同礼拝への呼び掛けがあった。

アッラーのみ使いは一ラカートで二回の立礼を行われた。

それからまた直立され、第二のラカートでも二回の立礼を行われた。

その後太陽は明るく輝いていた。

アーイシャは言った。

私はこの時程長い立礼や叩頭は全く行ったことがありませんでした。

アブー・マスウード・アンサーリーは伝えている

アッラーのみ使いは「まことに、太陽と月はアッラーのみ印の中の二例である。

アッラーはその二つの天体でその御方の下僕等を脅えさせる。

その天体は誰かの死によって食が起るのではない。

あなた方がそれらの兆を見たら礼拝を挙行せよ。

そして、あなた方のおののきが消えるまでアッラーに祈願せよ」と申された。

アブー・マスウードは伝えている

アッラーのみ使いは「まことに、太陽と月は誰かの死のために食が起るのではない。

それらはアッラーのみ印の中の二例なのだ。

それで、あなた方がそれを見た時は立って礼拝を挙行せよ」と申された。

このハディースは**イスマイール**を根拠とし、同一の伝承者経路を経て伝えられている。
その中で、スフヤーンとワーキウによって伝えられたハディースには「日食はイブラヒーム、（預言者の息子）が亡くなった日にあった」人々は「日食はイブラヒームが亡くなったために起った」と言った（がある）。

アブー・ムーサーは伝えている

アッラーのみ使いが御在世の時日食があった。

その御方は復活の日かも知れないと大変御心労になってマスジドに来られた。

そしてその御方は、私がかつて見たことがない長い直立、立礼、叩頭による礼拝を挙行された。

その後み使いは「アッラーが遣わされたこれらの印は、誰かの生死のためにそうあるのではない。

アッラーはこれによってその御方の下僕等を脅えさせるために、それをお遣わしになるのである。

それで、あなた方がそれについて何かの兆を見た時は、直ちにアッラーを讃美し、祈願してお許しを乞い求めよ」と申された。
イブン・アラーウによって伝えられたハディースには“日食があった。そしてみ使いは「（アッラーは）その御方の下僕等を脅えさせる」と申された”がある

アブドル・ラフマーン・ビン・サムラは伝えている

アッラーのみ使いが御在世の時であった。
私が矢を射ていると日食が始った。
それで私は手にしていた矢を投げ捨てて「本日の日食に、アッラーのみ使いがどのようにされているのか拝見しなければならぬ」と言った。
私がその御方の所に行くとみ使いは両手を上げられて「アッラーは至大なり」といわれ、讃美され、「アッラーの他に神なし」と唱えられて祈願されていた。
（この礼拝が終った時は）太陽は明るく輝いていた。
み使いは（その礼拝で、クルアーンの）2 章を朗誦され、ニラカートを捧げられた。

教友の一人**アブドル・ラフマーン・ビン・サムラは伝えている**

アッラーのみ使いが御在世の時、マディーナで私が矢を射ていると日食が始まった。
私は「アッラーのみ使いは日食にどのようにされておられるのか拝見しなければならぬ」と言った。
私がその御方の所に行くとみ使いは両手を上げて礼拝にお立ちになっておられた。
そして、アッラーを大いに讃美され、「アッラーの他に神なし」と唱えられ、「アッラーは至大なり」と申されて、太陽が元の姿になるまで祈願しておられた。
そして太陽から食が消えるとクルアーンの 2 章を朗誦され、ニラカート捧げられた。

アブドル・ラフマーン・ビン・サムラは伝えている

アッラーのみ使いが御在世の時、私がマディーナで矢を射ていた時に日食が始まった。
残余のハディースは前述のものと同一である。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「太陽と月は誰かの生死のために食が起こるのではない。
それはアッラーのみ印の中の二例である。
それで、あなた方がそれを見た時は礼拝を挙行せよ」と申された。

ズィヤード・ビン・イラーカは伝えている

私はムギーラ・ビン・シュウバが次のように言っているのを聞いた。
アッラーのみ使いが御在世の時で、イブラヒームが亡くなった日に日食があった。

アッラーのみ使いは「太陽と月はアッラーのみ印の中の二つのものであり、それらは誰かの生死のために食が起るのではない。
あなた方がそれらを見た時はアッラーに祈願し、それが元の姿に戻るまで礼拝を続けよ」と申された。

葬儀の書

死者に対する唱道句について

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方が死者の所に行った時は『アッラー以外にいかなる神もない』と唱道せよ」と申された。

このハディースは同一の伝承者経路を経て、**スライマーン・**ビン・ビラールによって伝えられた。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方が死者の所に行った時は『アッラー以外にいかなる神もない』と唱道せよ」と申された。

災難事にいう言葉

ウンム・サラマは伝えている

アッラーのみ使いが「ムスリムは誰でも、もし災難に会ったら、アッラーがお命じになったもの（すなわち）**「まことに、私達はアツラーのもの、その御方の御許に私達は帰り行くものである」**（クルアーン第 2 章 106 節）と言う。

そして『おお、アッラー、私が災難を耐え忍んだことに御報酬を、そして（失ったものの）代りとしてより良き物をお与え下さい』と祈れば、アッラーは前のものよりも良いものをお与えになるであろう」と申されるのを聞いた。

アブー・サラマが亡くなった時、私（ウンム・サラマ）は「アッラーのみ使いの許に家族を連れて最初に移ったムスリム達の中で、アブー・サラマより良い者がありましょうか」と言った。

それから私は「アッラーは私にアッラーのみ使いを（亡き夫の代りに）お与えになりました」と言いました。

私はまた「アッラーのみ使いは私にハーティブ・ビン・アブー・バルタアを遣わされて結婚を申し込まれました。

私は、私には娘がございます。

それに、私は嫉妬深い性質でございます、と申しました。

するとその御方は『あなたの娘については、彼女が十分に一人立ち出来るよう、アッラーに祈願しよう。

また、私は、アッラーがその嫉妬をお直し下さるよう祈ろう』と申されました」と言った。

アッラーのみ使いの妻**ウンム・サラマ**はみ使いが（次のように言われていた）と伝えている

もし、アッラーの下僕の誰かが災難に会ったら**「まことに、私達はアッラーのもの、その御方の御許に私達は帰り行くものである」**（クルアーン第 2 章 106 節）おお、アッラー、どうか私の災難に償いを、そして（失ったものの）代りにより良き物をお与え下さいと祈願すれば、アッラーはその者の災難を償われ、（前のもの）より良きものをお与え下さるであろう。

彼女（ウンム・サラマ）はアブー・サラマが亡くなった時「私は、アッラーのみ使いが私にお命じになったように（前述の言葉を）唱えました。

そうしますとアッラーは、私に前の夫より立派なアッラーのみ使いを下されました」と言った。

預言者の妻**ウンム・サラマ**はアブー・ウサーマによって伝えられたハディースと同様の言葉を、アッラーのみ使いが申されているのを聞いたと伝えている。

なお彼女はそれに次の言葉を付加している。

「アブー・サラマが亡くなった時、私は、アッラーのみ使いの御親友でアブー・サラマより良い人はどなたでしょうか、と申しました。

そうしますとアッラーは私のために判決定下されたのです。
私は（前述の祈願の）言葉を唱えました。そしてアッラーのみ使いと結ばれたのです」

病人や死者の側で口にする言葉

ウンム・サラマは伝えている

アッラーのみ使いは 「あなた方が病人、あるいは死者の側に行った時は、良きことを言いなさい。

まことに、天使達があなた方の言ったことを保証するであろう」と申された。

また彼女は「アブー・サラマが亡くなった時、私は預言者の許に参りまして「アッラーのみ使い様、アブー・サラマが死んでしまいました」と申しました。

み使いは私に「おお、アッラー、私と彼（亡き夫）をお許し下さい。

そして彼より良き人を私に授けて下さい、と言いなさい」と申されました。

そこで私はそのように申しました。

するとアッラーは私にとって彼より素晴らしい預言者ムハンマドを代りに下さいました」と言った。

死者の日を閉じることと死者のために祈ること

ウンム・サラマは伝えている

アッラーのみ使いがアブー・サラマの所に参りましたが、その時彼の両目は開いたままでした。み使いは彼（死者）の目をお閉じになりました。そして「魂が出て行く時、視線はそれを追う」と申されました。その時、彼の家族の幾人かが泣き叫びました。アッラーのみ使いは「あなた方自身を呪ってはならぬ。良きことを口にせよ。それは、天使達があなた方のいうことを保証するからである」と申されました。次いで「おお、アッラー、アブー・サラマをお許し下さい。正しい信仰に生きた人達の中で彼の地位をお上げ下さい。彼を彼の子孫達の代理者とされますように。万有の主よ、われわれや彼を許し給え。彼の墓を広くされ、彼のためにその場所を明るくさせ給え」とお祈りになりました。

このハディースは同一の伝承者経路を経て、**ハーリド・ハッザーウ**によって伝えられたが次のような相違がある

み使いは「おお、アッラー、彼を彼が残した遺産の管理者とされますように」と祈られた。そしてまた「おお、アッラー、彼のために彼の墓を広げて『أوسع له awsi' lahu といわれ أفسح له afsah lahu とは申されなかった』（注）下さい」と祈願された。

（注）أوسع له awsi' lahu もأفسح له afsah lahu も彼のために……広げて、の意

死者の視線は己の魂を追う

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方は人が亡くなった時、その人の目が開かれたままになった状態を見たことはないか」と言われた。

人々は「はい（見ました）」と言った。

み使いは「それは（魂が肉体から離れる）時、視線が己の魂を追うためである」と申された。

このハディースは**アラーウ**を拠り所とし、同一の伝承者経路で伝えられている。

死者に対して泣くことについて

ウンム・サラマは伝えている

アブー・サラマが亡くなった時私は（次のように）言いました

「彼は（マッカからの）移住者で、異郷で亡くなりました。

私はきっと、人々が語り次ぐような烈しい泣き方で泣くでありましょう。

私は（悲しくて）本当に泣きたく思って居りました時、マディーナの高地から私と一緒に泣いてくれる女性が参りました。

その時、アッラーのみ使いが私を迎え『あなたはアッラーが二度も追い出して下された悪魔を家に入れようとするのですか』と申されました。

それで私は泣くのを止め、その後は泣きませんでした」

ウサーマ・ビン・ザイドは伝えている

われわれが預言者の許に居た時、その御方の御息女の一人が使いの者をよこして、彼女の子供、あるいは息子が臨終の時にあると告げさせた。

み使いは使いの者に「娘の所に戻り、アッラーがお取り上げになったものはその御方のもの、その御方がお授けになったものもその御方のものである。

全てのものに定められた命があると告げよ。

そして、娘がその悲しみに耐えてアッラーの報賞を得るよう命じよ」と申された。

その使者は再び来て「御息女は誓って、あなたが彼女の所に参られるよう懇願しておられます」と言った。

するとアッラーのみ使いは立ち上がられた。

その御方と一緒にサアド・ビン・ウバーダ、ムアーズ・ビン・ジャバルも立った。

私も彼等と一緒に行った

「その子供は預言者に抱き上げられたし彼の息はたえだえであって、魂はまさに彼の肉体を離れ去ろうとしている所かと思われた。

み使いの両目には涙が溢れた。

サアドは「アッラーのみ使いよ、これはどうしたことですか」と言った。

み使いは「これはアッラーがその下僕の心につくられた哀れみなのだ。

アッラーは哀みの情をもつ下僕達を哀れみ給う」と申された。

このハディースは**アーシム・アフワル**を拠り所として伝えられているが、**ハンマード**のハディースはより完璧で、より長いものである。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

サアド・ビン・ウバーダは自分の病のことでこぼしていた。

するとアッラーのみ使いがアブドル・ラフマーン・ビン・アウフ、サアド・ビン・アブー・ワッカース、アブドッラー・ビン・マスウードを伴って彼を訪れた。

み使いが彼（サアド・ビン・ウバーダ）の所に入って行くと、彼は意識を失っていた。

み使いは「彼は既にこと切れてしまったのか」と申された。

彼等は「アッラーのみ使いよ、そうではありません」と言った。

この時み使いはお泣きになった。

人々はその御方が涙されるのを見ると彼等も泣いた。

み使いは「まことに、アッラーは真実の涙や衷心からの悲しみによる嘆きにはお咎めにはならない。

しかしこれのため（み使いは御自分の舌をお示しになった）にお咎めにもなるし、あるいは御慈悲を示されもする（注）、という事をあなた方は知らなかったのですか」と申された。

（注）アッラーへの非難の言葉を授けた場合は咎められ、真心のこもった良い言葉には御慈悲がある

病人を訪問すること

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

われわれはアッラーのみ使いと一緒に座っていた。
その時アンサールの一人がやって来てみ使いに挨拶した。
そして彼は立ち去ろうとした。
するとアッラーのみ使いは「アンサールよ、親友サアド・ビン・ウバーダの具合はどうか」と申された。

彼は「良くなっております」と答えた。
み使いは「あなた方の中で彼を見舞いに行くのは誰ですか」と言われてお立ちになった。
われわれもその御方と一緒に立った。
その時われわれの数は十数名であった。
われわれにはサンダルも靴も帽子もシャツも無かった。
われわれは不毛に近い所を歩き彼（病人）の見舞いにやって来た。
彼の周囲にいた人々はアッラーのみ使いとその御方の親友が彼に近づくとその場から遠ざかり（訪問者に）場所を譲った。

災難に出合った際の最初のショックに示す忍耐

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは「真の忍耐は最初のショックの際に示されるものである」と申された。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは息子を亡くして泣いている婦人の所に来られて「アッラーを畏れ、耐えるがよい」と言われた。
すると彼女は「あなたは他人事と思っているのです」と言った。
み使いが去ってから、彼女はその人物がアッラーのみ使いと分って死に近い程のショックを受けた。
それで彼女はその御方の入口の所にやって来た。
だが、そこには門番も居なかった。
彼女は（声を上げて）「アッラーのみ使い様、私はあなたを存じ上げていなかったのです」と言った。
するとみ使いは「真の忍耐は最初のショックに、（あるいは最初のショックの際に）本当に示されるものである」と申された。

このようなハディースは同一の伝承者経路を経て伝えられたが、次のような付加もある（すなわち）“預言者は墓の側に座っていた婦人の所をたまたまお通りになった”

死者はその家族が泣くことで苦しめられる

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

ハフサはウマルに死期が迫った時に泣いた。

彼（ウマル）は「わが娘よ、静かにしなさい。

お前はアッラーのみ使いが『死者はその家族が死者のために泣くことで苦しめられる』と申されたのを知らなかったのか」と言った。

ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「死者はその者への涙のために墓の中で苦しめられる」と申された。

前述のものと同様のハディースは**ウマル**を拠り所として、他の伝承者経路でも伝えられている。

イブン・ウマルは伝えている

ウマルが凶刃に倒れた時、彼は気を失った。

すると叫びが上った。

彼が意識を回復すると「お前達は、アッラーのみ使いが『まことに、死者は人の涙のために苦しめられる』と申されていたのを知らなかったのか」と言った。

アブー・ブルダは彼の父を拠り所として伝えている

ウマルが災難に合った時、スハイブは（悲嘆の声を上げて）「ああ、兄弟よ」と言い出した。

するとウマルは「スハイブ、君はアッラーのみ使いが『まことに、死者は人の涙のために苦しめられる』と申されていたのを知らないのか」と言った。

アブー・ムーサーは伝えている

ウマルが襲われた時、スハイブは彼の家からかけつけてウマルの所に入り、彼の側に泣きながら立った。

ウマルは「何故君は泣くのか、私のことを思って泣くのか」と言った。

彼は「信者達の指導者よ、アッラーに誓って、あなたのことを思って涙しているのです」と言った。

ウマルは「アッラーに誓い、君はアッラーのみ使いが『涙された者は苦しめられる』と申されたのを知っているであろう」と言った。

私はそれについてムーサー・ビン・タルハに話した。

するとタルハは「アーイシャがそれはユダヤ人に関したものである、と言っていた」と言った。

アナスは伝えている

ウマル・ビン・ハッターブが凶刃に倒れた時、ハフサは父親のことを案じて泣いた。
すると彼（ウマル）は「ハフサよ、お前はアッラーのみ使いが『悲しまれ、泣かれた者は苦しめられる』と申されていたのを聞かなかったか」と言った。
その時スハイブも彼を思って泣いた。
ウマルは「スハイブよ、君は悲しまれ、泣かれた者は苦しめられるということを知らないのか」と言った。

アブドッラー・ビン・アブー・ムライカは伝えている

私はウスマーンの娘ウンム・アバーンの葬儀を見送りながら、イブン・ウマルの側に座っていた。
彼の側にはアムル・ビン・ウスマーンもいた。
その時イブン・アッバースが案内人に手を引かれてやって来た。
彼はイブン・ウマルの座っている場所について知らされたようであった。
それで彼はそこに来ると私の側に座った。
私はその二人の間に座っていた。
その時急に家の中から（泣）声が聞こえて来た。
イブン・ウマルは（アムルに彼等を静めるのを指示するかのように）「私はアッラーのみ使いが『まことに、死者はその家族の涙で苦しめられる』と申しておられた」と言った。
伝承者は「アブドッラー（ビン・ウマル）は、特別の場合の問題としていわれた事柄を、普遍的なものとした人物である」と言った。

イブン・アッバースは伝えている

われわれは信者達の指導者ウマル・ビン・ハッターブと一緒に（マッカとマディーナの間の）アル・バイダーウに到着した。
その時木蔭に一人の男がいた。
彼は私に「あの者の所に行き彼が何者か私に告げよ」と言った。
私が行って見ると、なんと彼はスハイブであった。
私はウマルの所に戻り「あなたは私にあの男が何者か知らせるよう命じられました。
実は、彼はスハイブでございます」と言った。
彼は「彼にわれわれの中に入るよう命じよ」と言った。
私は「彼は家族を伴っております」と言った。
彼は「たとえ彼が家族と一緒でも」と言った。
（伝承者の一人アイユーブは「われわれの仲間に入るよう彼に命じよ」と言ったかも知れない）
われわれが（マディーナ）に来て間もなく、信者達の指導者は負傷された。

ウサイブは「ああ、兄弟よ、ああ、盟友よ」と泣きながらやって来た。
するとウマルは「君はアッラーのみ使いが『まことに、死者はその家族の嘆の一部によって苦しめられる』と申されたのを知らなかったのか。または聞かなかったのか」と言った。
アブドッラー（イブン・ウマル）はこの言葉を一般に適用されるものとして伝えた。
一方、ウマルはその（嘆き）の一部についてであると言った。

そこで私（アブドッラー・ビン・アブー・ムライカ）は立ってアーイシャの所へ行き、イブン・ウマルが言ったことを彼女に話した。
彼女は「アッラーに誓って、アッラーのみ使いは『まことに、死者は誰かの悲嘆によって苦しめられる』とは決して申されませんでした。
しかしその御方は『まこと、不信者こそはその家族の悲嘆によって、アッラーが彼に苦しみを増されるであろう。実にアッラーは笑いや涙をもたらせ給う御方である。
「重荷を負う者は、他の者の重荷を負わない」（クルアーン 35 章 18 節）（注）と申されました」と言った。
イブン・アブー・ムライカは（次のように）言った。
アル・カーシム・ビン・ムハンマドは私に「ウマルとイブン・ウマルの言葉がアーイシャに伝わった時、彼女は『あなた方が私に話したことが（正しくないからといって）その二人が嘘つきであったとか、疑わしい者であったとかいうのではなくて、聞き違いによったものです』と言った」と伝えた。

（注）自分の罪によって負う精神的な重荷は自ら負うべきである

アブドッラー・ビン・アブー・ムライカは伝えている
ウスマーン・ビン・アッファーンの娘がマッカで亡くなった。
われわれは彼女の葬儀に参列した。
イブン・ウマルとイブン・アッバースもそれに参列した。
私はその両名の間に座った。
（正確に言えば、最初）私はその両名の中の一人の脇に座った。
そこへもう一人の方が来て座ったのである。
アブドッラー・ビン・ウマルは向い合っていたアムル・ビン・ウスマーンに「あなたは（人々が）泣くのをお止めにならないのですか。
アッラーのみ使いは『まことに、死者はその家族の悲嘆ゆえに苦しめられる』と申されていた」と言った。
するとイブン・アッバースは「ウマルはそれ（悲嘆）の一部と言っていた」と言った。
更に彼は「私はウマルとマッカからの帰りにアル・バイダーウまで来ると、木蔭に乗物に乗った人々がいた。

彼（ウマル）は『乗物に乗った者達は誰か、見てみよ』と言った。
私は（近寄って）じっと目をこらした。
すると、何とそれはスハイブではないか。
私はそれを彼に告げた。
彼は『彼を私の所に呼んで来なさい』と言った。
私は再びスハイブの所に行き『信者達の指導者の所に来て、お会いするか良い』と言った。
ウマルが負傷した時、スハイブは「ああ、兄弟よ、ああ、盟友よ」といって泣きながらウマルの所に入った。
ウマルは「スハイブよ、君は私のために泣くのか。
アッラーのみ使いは『まことに、死者はその家族のある種の悲嘆のために苦しめられる』と申しておられた」と言った。

イブン・アッバースは伝えている
ウマルが亡くなった時、私は（ウマルの話を）アーイシャに話した。
すると彼女は、ウマルにアッラーの御慈悲がありますように、と祈って「アッラーに誓って、アッラーのみ使いは『信者が誰かの悲嘆のために苦しめられる』などとは申されません。
しかし、あの御方は『まこと、不信者こそはその家族の悲嘆によって、アッラーが彼に苦しみを増されるであろう』と申されました」と言った。
なお彼女は「**「重荷を負う者ほかは、外の者の重荷を負わない」**とクルアーン（第 35 章 18 節）に述べられていることで充分お分かりでしょう」とも言った。
イブン・アッバースはその時、「アッラー、その御方こそ笑いや涙をもたらせ給うものである」と言った。
イブン・アブー・ムライカは「アッラーに誓い、イブン・ウマルは何もいわなかった」と言った。

アムルはイブン・アブー・ムライカを拠り所として伝えている
われわれはウスマーンの娘ウンム・アバーンの葬儀に参列していた。
この後のハディースは同一であるが、彼はアイユーブとイブン・ジュライジュが伝えているような、預言者に関しての、ウマルを根拠とするハディースは伝えていない。
なお、（アイユーブとイブン・ジュライジュ）のハディースはアムルのものより完全である。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは「まことに、死者は生ける者の悲嘆のために苦しめられる」と申された。

ヒシャーム・ビン・ウルワは彼の父を拠り所として、（次のように）伝えている

イブン・ウマルの言葉「死者はその家族の悲嘆のために苦しめられる」が、アーイシャの許で述べられた。

彼女は、アブー・アブドル・ラフマーン（イブン・ウマルの別称）にアッラーの御慈悲がありますように、と祈り「彼は何かを聞いたが、それを記憶しなかったのです。

そのことについては、アッラーのみ使いの近くをユダヤ人の葬列が通りました時（それに参列していた）人々が泣いておりました。

その時み使いは『あなた方は泣いていることで彼は苦しめられる』と申されたのです」と言った。

ヒシャームは彼の父を拠り所として（次のように）伝えている

預言者が「死者はその家族の悲嘆のために墓の中で苦しめられる」と申された、というイブン・ウマルのハディースがアーイシャの許で述べられた。

彼女はそれについて「彼は誤解し、かつ忘れてしまったのです。

アッラーのみ使いが申されたのは『まこと、彼は彼の過失または彼の罪のために苦しめられる。そして彼の家族は今彼のために泣いている』と申されたのです。

（イブン・ウマルのこの誤解は、次の）彼の言葉のようなものです。

（すなわち）『アッラーのみ使いはバドルの戦の日、溝の側にお立ちになった。

その中には、その戦で死んだ多神教徒達の遺体があった。

その御方は彼等に既に申されていたことを言われた。

そして彼等は必ず私がいうことに耳を傾けるであろう』というものです。

だが、これはイブン・ウマルの誤解でした。

み使いは『彼等（死者）は私が常々彼等にいっていたことが真実であったというのを知るであろう』とのみ申されたのです」と言った。

それから彼女は**「本当にあなたは、死者に聞かせることは出来ない」**（クルアーン第 27 章 80 節）と**「だがあなたは、（死んで）墓の中にいる者に聞かせることは出来ない」**（クルアーン第 35 章 22 節）を朗誦した。

つまり、それは「彼等が地獄に落ちた時は聞かせられない」と言っているのである。

このハディースは同一の伝承者経路を経て、**イブン・ウルワ**によって伝えられているが、**アブー・ウサーマ**によって伝えられたものはより完全である。

アブドル・ラフマーンの娘**アムラ**は伝えている

アムラはアーイシャから（次のような）話を聞いた。

アブドッラー・ビン・ウマルが「まことに、死者は生ける者の悲嘆によって苦しめられる」と言っているということが、アーイシャに話された。

アーイシャは、アッラーがアブドル・ラフマーンのお父さんをお許しになりますように、と祈った後「彼は嘘をついたのではなく、忘れたか、または誤ったのです。
これはアッラーのみ使いが、嘆き悲しまれている亡きユダヤ女性の所をたまたまお通りになり『彼等は彼女のことを思って泣いているが、まこと、彼女は墓の中で苦しめられる』と申されたのです」と言った。

アリー・ビン・ラビーアは伝えている
クーファで最初に死を嘆かれた教友はカラザ・ビン・カアブ（注）である。
ムギーラ・ビン・シュウバは「私はアッラーのみ使いが『死者は彼のために泣かれることで、復活の日に責め苦を負う』といわれるのを聞いた」と述べた。

（注）彼はアンサールの一人。

ウマルからイスラームについての教育を依頼されていたという人物

このようなハディースは、直接、預言者から聞いた話として、**ムギーラ・**ビン・シュウバによって伝えられた。

このハディースは預言者から直接話されたもので、他の伝承者経路でも伝えられている。

悲嘆への強い戒め

アブー・マーリク・アシュアリーは伝えている

アッラーのみ使いは「私の共同体には、彼等が未だ放棄しようとしない四つのジャーヒリーヤ時代の問題がある。

それは高貴な血統への誇り、他の家系の中傷、星に雨乞いをすること、それと悲嘆である」と申された。

そして「もしその泣き女が彼女の死の前に後悔しなかったなら、彼女はタールの衣服と疥癬のシュミーズを着せられて、復活の日に立たせられるであろう」と申された。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、イブン・ハーリサ、ジャアファル・ビン・アブー・ターリブ、そしてアブドッラー・ビン・ラワーハの戦死が告げられると悲しみをあらわにして座られた。

私はドアの間隙からその御方を見ておりました。

そこに一人の男がやって参りまして「アッラーのみ使いよ、ジャアファルの女達は（悲嘆にくれております）」と彼女達の嘆きを話した。

するとみ使いはその男に、戻って彼女達が泣くのを止めるようお命じになった。

その男は帰って行った。

それから、その男は再びみ使いの所に来て、彼女達が彼の忠告に従わないと告げた。

み使いはもう一度彼に、戻って彼女達が泣くのを止めるようお命じになった。

彼は帰って行った。

しかしまたみ使いの所に来て「アッラーに誓って、彼女達はわれわれの手に負えません」と言った。

彼女（アーイシャ）は「み使いは『行けっ、そして彼女等の口の中に土を入れよ』と申された」と言った、とアムラは伝えている。

なお、アーイシャは（次のように）言った。

私は（その男に）「アッラーがあなたを卑しめるように」と（叱責の言葉を）言い、更に「あなたはアッラーのみ使いの命令を実行しなかった。

そして、アッラーのみ使いが苦しんでおられるままにした」と言った。

このハディースは同一の伝承者経路を経て、**ヤヒヤー・ビン・サイード**によって伝えられた。
なお、アブドル・アズィーズによって伝えられたハディースも最後の一語を除き、全く同一である（すなわち）「あなたはアッラーのみ使いが苦しんでおられるままにした」の العناء al-'ana'が、後者では العي al-'iyyi となっている。

ウンム・アティーヤは伝えている

アッラーのみ使いは忠誠の誓いと一緒に、私達が（不幸に出合っても）泣かないという誓約もお取りになった。

だが、私達の中でそれを履行したのは五人の婦人のみであった。

それは、ウンム・スライム、ウンム・アラーウ、ムアーズの妻でアブー・サブラの娘、それとも彼女は未婚でアブー・サブラの娘というだけだったかはっきりしない。

それとムアーズの妻である。（伝承者は五人全部の名は上げていない）

ウンム・アティーヤは伝えている

アッラーのみ使いは私達に対し、忠誠の誓いと一緒に私達が（不幸に出合っても）泣かないという誓約をお取りになった。

だが、私達の中の五人しかそれを果せなかった。その中の一人にウンム・スライムがいる。

ハフサはウンム・アティーヤを根拠として伝えている

「あなたの許へ女の信者がやって来て、あなたに対してこう忠誠を誓うならば『アッラーの他は何ものも同位に崇めません……また正しいことは、あなたに背きません』」（クルアーン第 60 章 12 節）が下った時、彼女（ウンム・アティーヤ）は

「その（誓約）中には悲嘆にはくれないという誓約もあったのだ。

私は『アッラーのみ使い様、これこれの部族の人々は例外として下さい。

彼等はジャーヒリーヤ時代（私達の不幸で）一緒に泣いてくれたのです。

それで、そのような場合には、私は彼等と涙を分かち合わねばならないのです』と言った。

アッラーのみ使いは『（よろしい）だが、その部族の人々の場合のみ』と申されましたと言った。

女性は葬列に加わることを禁止された

ウンム・アティーヤは伝えている

私達は葬列に加わることを禁止されておりました。

しかしそれはー私達にとって絶対的なものではありませんでした（注）。

（注）女性の葬列参加は「神聖不可侵」というのではなく「嫌われた行為」である

ウンム・アティーヤは伝えている

私達は葬列に加わることを禁止されました。

しかしそれは私達にとって絶対に、というものではありませんでした。

死者の清め

ウンム・アティーヤは伝えている

私達がその御方の御息女（注 1）を洗い清めておりますと預言者が入って来られました。

そしてその御方は「もしあなた方がそうするのが適切であると思ったなら、娘を三回あるいは五回あるいはそれ以上、水と蓮の葉で洗い清めよ。

そしてそれが終ったら、樟脳を、またはいくらかの樟脳を入れ、それが終ったら私に告げよ」と申されました。

私達がそれを終えた時、その御方をお呼びしました。

するとその御方は私達にイザール（注 2）をお投げになりました。

そして「次はそれを娘につけよ」と申されました。

（注 1）彼女は預言者の長女ザイナブである。

彼女はアブー・アース・ビン・ラビーウと結婚している

（注 2）イザールは下半身にまとう腰巻の一種

ウンム・アティーヤは伝えている

私達は彼女の髪の毛を三本のお下げに編みました。

ウンム・アティーヤは伝えている

アッラーのみ使いの御息女の一人が亡くなられた。

イブン・ウライヤによって伝えられたハディースには「アッラーのみ使いは私達がその御方の御息女を洗い清めております時、私達の所へ御出でになりました」というのがある。

マーリクによって伝えられたハディースには「み使いの御息女が亡くなられた時、アッラーのみ使いはわれわれの所に御出でになった」というのがある。

残余のハディースは同一であるが、それは、ウンム・アティーヤ、ムハンマド、アイユーブ、ヤズィード・ビン・ズライウの経路を経て伝えられた。

このようなハディースはウンム・アティーヤを根拠とし、**ハフサ**によっても伝えられている。

それには“み使いは「もしあなた方がそうすることが適切であると考えたなら、（彼女の遺体を）三回、五回、七回あるいはそれ以上洗い清めよ」と申された”が若干異なる。

ハフサはアティーヤを根拠とし「私達は彼女の髪の毛を三本のお下げに編みました」と言った。

ウンム・アティーヤは伝えている

私達は彼女の遺体を奇数の三回、または五回、または七回洗い清めました。

更にウンム・アティーヤは「私達は彼女の髪の毛を三本のお下げに編みました」と言った。

ウンム・アティーヤは伝えている

アッラーのみ使いの御息女ザイナブが亡くなられた時、み使いは私達に

「奇数の回（すなわち）三回、または五回彼女の遺体を清め、五回目には樟脳を、あるいはいくらかの樟脳を入れよ。

そして娘を清め終えたら私に知らせよ」と申された。

（それらの行為を終えて）私達が告げますと、その御方はイザールをお渡しになり「次にこれを娘につけよ」と申された。

ウンム・アティーヤは伝えている

私達がみ使いの御息女の一人を洗い清めておりますと、アッラーのみ使いが私達の所に御出でになりまして「娘を五回、あるいはそれ以上の奇数の回数洗い清めよ」と申された。

残余のハディースは同一であるが、彼女（伝承者）は「私達は彼女の髪の毛を三本のお下げに編みました。

二本は頭の両側に、一本は頭の前部です」と言った。

ウンム・アティーヤは伝えている

アッラーのみ使いが彼女に御息女の清めをお命じになった時、御息女の右側から、しかもそれをウドゥーを行う部分より始めよ、と申されました。

死者の経衣に関して

ハッバーブ・ビン・アラットは伝えている

　　われわれはアッラーの御顔（御喜び）を願い、アッラーの道のためにアッラーのみ使いと御一緒に移住した。
　　こうしてわれわれの報酬はアッラーに保証された。
　　しかしながらわれわれの中には依然として窮乏の生活に耐えている者もあった。
　　その中にはウフドの戦で戦死したムスアブ・ビン・ウマイルがいた。
　　彼には羊毛製の衣服以外に死者に着せる経衣は一枚もなかった。
　　それでわれわれは（やむなく）その衣服を彼の頭にかけた。
　　すると彼の両脚があらわになってしまう。
　　それを脚の方にかければ頭が出てしまう（という状態であった）。
　　その時アッラーのみ使いは「その衣服を彼の頭の方にかけよ。
　　そして足の上にはイズヒル（芳香のある植物）を置くが良い。
　　われわれの中でアッラーの道に献身せる者は天国で十分な報酬を与えられ、それを楽しむであろう」と申された。

このようなハディースはアアマシュを根拠とし、同一の伝承者を経て**ウヤイナ**によって伝えられた。

アーイシャは伝えている

　　アッラーのみ使いは（亡くなられた時）イエメンで織られた綿製の白い衣服三枚を着せられましたが、シャツとターバンはございませんでした。
　　フッラ（注）についてですが、それはみ使いの遺体に着せられるために買われたのだ、という疑念が人々の心にありました。
　　それでそのフッラは放置され、イエメンで織られた白い綿の経衣が着せられたのです。
　　するとアブドッラー・ビン・アブー・バクルがそれを取り「私は私自身の死出の衣として着るために、これをしまっておくであろう」といいました。
　　そしてまた「もし至高偉大なるアッラーが預言者にそのフッラを望まれたとすれば、その御方はそれを着せられたであろうに。
　　そうすればみ使いはそれを売り、代金をサダカとなさったことであろう」といいました。

　　（注）フッラは腰部を包むもの（イザール）と、上半身を包むもの（リダーウ）から成っている

アーイシャは伝えている

　　アッラーのみ使いはアブドッラー・ビン・アブー・バクルの所有であったイエメンのフッラをまとわされました。

でもそれは脱がされて、シャツとターバンは含まれない、イエメンで織られた綿製の白い衣服三枚を経衣として着せられました。
アブドッラーはそのフッラを手に取り「私が死んだ時はこれをまとう」と言いました。
しかし彼は「アッラーのみ使いがおまといにならなかったものを、どうして私がまとえようか。その御方はこれをサダカとしてお与えになったのだ」と言いました。

このハディースは同一の伝承者経路を経て、**ヒシャーム**によって伝えられた。
だが彼によって伝えられたハディースには、アブドッラー・ビン・アブー・バクルの物語は述べられてはいない。

アブー・サラマは伝えている
私は預言者の妻アーイシャに「アッラーのみ使いが亡くなられた際に何枚の経衣を着せられましたか」と尋ねた。
彼女は「イエメン産の綿で出来た白い衣服三枚です」と言いました。

布で遺体を覆うこと

信者達の母**アーイシャ**は伝えている

アッラーのみ使いが亡くなられた時、その御方はイエメンの衣服で覆われました。

このハディースは同一の伝承者経路を経て**ズフリー**によって伝えられた。

死者には白い清潔な経衣を着せること

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

ある日、預言者は説教され、亡くなった教友の一人が短目の経衣を着せられ、しかも夜間埋葬されたことに言及された。

その御方は、やむを得ない場合を除き、（出来るだけ多くの人々が）故人のために礼拝出来るよう、夜間の埋葬を差し控えさせた。

そして預言者は「あなた方は誰でも同胞に経衣を着せる時は、遺体に合った白くて清潔なものでなければならぬ」と申された。

葬儀には急いで参列のこと

アブー・フライラは伝えている

預言者は「（死者が善良な人であったならば彼への報酬として）急いで葬儀に参列せよ。（その御方は次のようにいわれたかも知れない）それはあなた方が彼の善行に対して捧げるものである。

もし故人が善良な者でないのなら、（葬儀参列を急ぐことで）あなた方の肩より悪が早く除かれることになる」と申された。

このハディースは他の伝承者経路でも伝えられている。

マアマルによって伝えられたハディースには「私はそれが預言者から直接伝えられたハディースかどうか知らない」という言葉がある。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いが「あなた方は急いで葬儀に参列せよ。

もし（死者が）善良な者であれば心より冥福を祈るがよい。

もしそうでない者であれば、それはあなた方の肩より悪いことが除かれるのだ」と申されるのを聞いた。

葬儀に参列し礼拝を捧げた場合の徳

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「葬儀に参列し、故人のために礼拝を捧げた者には一カラットの報酬が、そして埋葬終了まで残っていた者には二カラットの報酬がある」と申された。
すると「二カラットとはどれ程ですか」と尋ねる者があった。
み使いは「それは二つの巨大な山に相当する」と申された。
アブー・ターヒルのハディースはここで終っているが他の二人（注）が次の言葉を付加している
“イブン・ウマルは葬儀での礼拝を終えると立ち去ってしまうのが常であった。
アブー・フライラのハディースが彼に伝えられた時「われわれは大量のカラットを失ってしまった」と言った”

（注）イブン・シハーブとサーリム・ビン・アブドッラー・ビン・ウマル

このハディースはアブー・フライラを根拠として、他の伝承者経路でも伝えられている。
それには「二つの巨大な山」という言葉までで、その後は述べられてはいない。
アブドル・アーラーによって伝えられたハディースには“埋葬が終るまで”の言葉が、
アブドル・ラッサークのハディースには“彼（故人）が墓に埋められるまで”の言葉がある。

このハディースはアブー・フライラを根拠とし、他の伝承者経路でも伝えられている。
それには、“葬儀に参列した者は死者が葬られるまで”（という言葉で）伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「葬儀に参列し、死者のために礼拝を捧げただけで去った者には一カラットが、死者が葬られるまで残っていた者には二カラットの報酬がある」と申された。
すると、「二カラットはどれ程ですか」と尋ねる者があった。
み使いは「その二つの小さい方でウフド山に相当する」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「葬儀に参列し、死者のために礼拝を捧げた者には一カラットの報酬がある。
死者が葬られるまでいた者には二カラット（の報酬）がある」と申された。
私（伝承者の一人、アブー・ハージム）は「アブー・フライラよ、カラットはどれ程ですか」と尋ねた。
彼は「ウフド山のように偉大なものである」と言った。

ダーウード・ビン・アーミル・ビン・サアド・ビン・アブー・ワッカースは彼の父を根拠として伝えている

彼はアブドッラー・ビン・ウマルの側に座っていた。

その時、マクスーラ（注 1）の所有者ハッバーブが来て「アブドッラー・ビン・ウマルよ、あなたはアブー・フライラがこのようにいっているのを聞きませんでしたか

『アッラーのみ使いは“家から葬儀と一緒に行き、その死者のために礼拝を捧げ、死者が葬られるまで留まっていた者には二カラットの報酬がある。

二カラットはそれぞれウフド山のように（偉大なものである）、また、死者のために礼拝を捧げたのみで帰った者には一カラットの報酬であるが、もちろんそれもウフド山のように（偉大である）”といわれた』

という言葉です」と言った。

イブン・ウマルはハッバーブにアーイシャの所に行かせ、アブー・フライラの言葉を確かめさせ、更に彼の所に帰って彼女の言葉を伝えるように遣いに出した。

イブン・ウマルはモスクにあった一握り程の小石を手にし、使者が戻る間それを手の中で引繰り返えしていた（注 2）。

使者が戻り、アーイシャが「アブー・フライラは真実を語った」といったと伝えた。

するとイブン・ウマルは手にしていた小石を地に投げつけ「われわれは多量のカラットを捨ててしまった」と言った。

（注 1）壁でしっかりと囲われている堅牢な部屋

（注 2）アラブが考え事をするときの習慣的動作

アッラーのみ使いのマウラー（奴隷の身分から解放された自由民）**サウバーン**は伝えている

アッラーのみ使いは「葬儀に参列し、死者のために礼拝を捧げた者には一カラットの報酬が、そしてもし埋葬に立ち合えば、その者には二カラットの報酬がある。

カラットはウフド山のように偉大である」と申された。

このハディースは同一の伝承者経路を経て、**カターダ**によって伝えられた。

サイードと**ヒシャーム**によって伝えられたハディースには“預言者はカラットに関して尋ねられると「それはウフド山のように（偉大である）」と申された”というのがある。

百人の同胞が死者のために執り成しの祈願をすれば、それは受け入れられる

アーイシャは伝えている

預言者は「亡くなったムスリムのために百人もの同胞達が、その者のために執り成しの祈りを捧げれば、その執り成しは受け入れられる」と申された。

四十人の信者の礼拝でも執り成しは受け入れられる

アブドッラー・ビン・アッバースは伝えている

彼（アブドッラー・ビン・アッバース）の息子がクダイド（注 1）かウスファーン（注 2）で亡くなった。
彼はクライブ（彼のマウラー）よ彼（死者）のためにどのくらいの人々が集ってくれたか見てみよ」といった。
クライブは「それで私は外に出た。すると既に多数の人々が集っていたので、そのことを彼に告げた」と言った。
イブン・アッバースは「お前は、人々が四十人はいると思うか」と言った。
クライブは「はい」と答えた。
その時イブン・アッバースは「遺体を運び出すが良い。私はアッラーのみ使いが
『アッラー以外にいかなる神も認めぬ者達が四十人、亡きムスリムのため礼拝を捧げれば、必ずやアッラーはその者に対する執り成しを受け入れて下さる』
と申されるのを開いた」と言った。

（注 1）マッカとマディーナの間にある村落

（注 2）マッカから北へ 35 マイル程の地点

冥福を祈られた者、非難の声を投げられた者について

アナス・ビン・マーリクは伝えている

　　葬列が通りかかると、それに対して冥福を祈る声が上った。
　　この時預言者は「確かにその通り、確かにその通り、確かにその通り」と申された。
　　また時に葬列が通りかかると、それに対して非難の声が上った。
　　すると預言者は「確かにその通り、確かにその通り、確かにその通り」と申された。
　　ウマルはみ使いに「あなたは葬列が通りかかり、それに対して冥福を祈る声が上ると『確かにその通り、確かにその通り、確かにその通り』と申され、
　　また、ある葬列があった際それに対して非難の声が上ると『確かにその通り、確かにその通り、確かにその通り』と言われたが（その意味は）と尋ねた。
　　アッラーのみ使いは「あなた方が冥福を祈った者には天国が待つ。
　　あなた方が非難した者には地獄が待つ。
　　あなた方は地上におけるアッラーの証人である。
　　あなた方は地上におけるアッラーの証人である」と申された。

このハディースは他の伝承者経路でも伝えられている

Mustarihu（安らげる者）と Mustarahu−minhu（安らぎを与える者）について

カターダ・ビン・リブイーは伝えている

アッラーのみ使いは葬列が通った時

「（彼は）はمستريح Mustarihu でありمستراح منه Mustarahu−minhu でもある」と申された。

彼等は「アッラーのみ使いよ、مستريح Mustarihu とمستراح منه Mustarahu−minhu とは

何でしょうか」と尋ねた。

み使いは「信仰をもつ下僕は（死で）現世の苦労より解放されて安息を得る。

そして、悪人の場合は（彼の死で）人々、町、木々そして動物までも、彼の害より救われて

安らぎを得る」と申された。

カターダを根拠として、**ヤヒヤー**・ビン・サイードによって伝えられたハディースには

「（信仰をもつ下僕は）この世の害悪や苦労より解放されて安息を得る。

そしてなお、アッラーの御慈悲をも得られる」という言葉がある。

死者のために「アッラーは至大なり」を唱えることについて

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いはネグス（エチオピア王の称号）の亡くなった日に、人々にそのことをお告げになった。

み使いは人々をお連れになって礼拝場に御出になり「アッラーは至大なり」を四回唱えられた。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いはエチオピアの皇帝ネグスが亡くなったその日、われわれにその皇帝の死をお告げになった。

そして「諸君、あなた方の兄弟のために（アッラーに）お許しを祈願せよ」と申された。

イブン・シハーブはサイード・ビン・ムサイヤブが（次のように）伝えたと言った。

アブー・フライラは彼（サイード）に「アッラーのみ使いは礼拝場で人々と列にお並びになり、礼拝を捧げ、彼のために「アッラーは至大なり」を四回唱えられた。

このハディースは他の伝承者経路でも伝えられている。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いはエチオピア皇帝アスハマのために礼拝を捧げ、「アッラーは至大なり」を四回唱えられた。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは「本日、アッラーの敬虔なる下僕アスハマは亡くなられた」と申された。

そして立ち上がられ、われわれを導かれて亡き皇帝への礼拝を捧げられた。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方には兄弟である方が亡くなられた。

一同、立って彼のために礼拝を捧げよ」と申された。

そこでわれわれは立ち二列に整列した。

イムラーン・ビン・フサインは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方には兄弟である方が亡くなられた。

立って彼のために礼拝を捧げよ」と申された。

（兄弟とは）ネグスを意味する。

ズハイルによって伝えられたハディースでは“まことに、あなた方の兄弟は”となっている。

墳墓への礼拝

シャアビーは伝えている

アッラーのみ使いは死者が葬られた後、その墓に礼拝を捧げられた。

その御方は死者のために「アッラーは至大なり」を四回唱えられた。

シャイバーニーはシャアビーに「誰がこれを君に話したのですか」と言った。

彼は「信頼出来る人、アブドッラー・ビン・アッバースである」と言った。これはハサンのハディースにある言葉である。

イブン・ヌマイルの話には「アッラーのみ使いは新しい墓に行かれ、それに対して礼拝された。

人々はその御方の後に整列して礼拝した。

その御方は「アッラーは至大なり」を四回唱えられた。

私はアーミルに「誰が君にそれを話したのか」と言った。

彼は「その御方に会った信頼出来る方、すなわち、イブン・アッバースである」と言った。

このハディースは他の伝承者経路でも伝えられている。
しかし、それらの中のあるハディースには"預言者は「アッラーは至大なり」を四回唱えられた"という言葉はない。

シャイバーニーによって伝えられたハディースは、他の伝承者経路でも伝えられているが、それらの中には"その御方は「アッラーは至大なり」を四回唱えられた"がない。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いは墓に礼拝を捧げられた。

アブー・フライラは伝えている

黒い肌の婦人(あるいは若者)が常々モスクを清掃していた。

だが、ふとアッラーのみ使いは彼女の姿が見えなくなったのに気付かれ、彼女(あるいは彼)のことをお尋ねになった。

すると人々は、彼女(あるいは彼は)亡くなったといった。

み使いは「どうしてあなた方はそれを私に告げなかったのか」といわれ、「それは人々が彼女(または彼)のことを軽視しているかのようである」と申された。

その後その御方は人々に「あなた方、私にその墓を教えよ」と申された。

人々はみ使いを案内した。

み使いはその墓に礼拝を捧げ「ここの墓場は、ここに眠る人々にとって、まことに暗い感じである。

至高偉大なるアッラーは私が彼等に捧げた礼拝で、墓を明るくされるであろう」と申された。

アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・ライラーは伝えている

ザイドはわれわれが行う葬儀には「アッラーは至大なり」を四回唱えていた。
だが彼はある葬儀に五回それを唱えたのだ。
そこで彼に尋ねると「アッラーのみ使いがそのようにされていた」と答えた。

葬列を見たら起立すること

アーミル・ビン・ラビーアは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方が葬列を見た時は、それが通り過ぎて見えなくなるまで、あるいは葬られるまで、立ち続けよ」と申された。

アーミル・ビン・ラビーアは伝えている

預言者は「あなた方は誰でも葬列を見た時は、たとえそれに参列していなくとも、それが通り過ぎて見えなくなるまで、
あるいは、それが手前で埋葬される場合はそれが終るまで立ち続けよ」と申された。

イブン・ジュライジュは伝えている

預言者は「あなた方は誰でも、葬儀に出合い、それに参列する意志がなかった時は、それが見えなくなるまで立ち続けよ」と申された。

アブー・サイードは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方が葬儀に加わった場合は、死者が葬られるまで座ってはならぬ」と申された。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方が葬儀に出合った時は起立せよ。
そして、それに加わった者は死者が葬られるまで座ってはならぬ」と申された。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

ある葬列が通りかかった。
するとアッラーのみ使いは起立された。
われわれもその御方に倣って立った。
われわれは「アッラーのみ使いよ、 あれはユダヤの女性（の棺）です」と言った。
み使いは「まことに、死は驚倒の事柄であるゆえに葬儀を見たら、ムスリムとかユダヤ教徒とかの区別なく起立せよ」と申された。

アブー・ズバイルはジャービルが（次のように）いっているのを聞いた

アッラーのみ使いは、その御方の所を通った葬列が見えなくなるまで、立って見送っておられた。

アブー・ズバイルはまた、ジャービルが（次のように）いっているのを聞いた

アッラーのみ使いとその御親友達は、ユダヤ　の葬列が見えなくなるまで立ち続けておられた。

イブン・アブー・ライラーは伝えている

カイス・ビン・サアドとサハル・ビン・フナイフはアル・カーディスィーヤ（注）にいた。
その二人の側をある葬列が通った。
彼等は起立した。
その時、その二人は死者がその地の住民で（非ムスリム）であるというのを聞かされた。
すると二人は「まこと、アッラーのみ使いは、その御方の側を葬列が通りかかると起立された。
するとそれがユダヤ人の棺であると知らされた。
するとみ使いは『彼は人間ではなかったのか』と申された」と言った。

（注）クーファから 30 粁程の地点にあるイラクの都市。

アラブが 636 年この地においてサーサン軍を破った地としてよく知られている

同一の伝承者経路をもつ**アムル・ビン・ムッラ**のハディースは
“彼等二人は「われわれはアッラーのみ使いと一緒にいた。その時、葬列がわれわれの所を通った」と言った”と伝えている。

葬儀に対する起立の撤廃

ワーキドは伝えている

ナーフィウ・ビン・ジュバイルはわれわれが　葬儀のために起立していると私の方を見た。
彼は埋葬が終わるのを待っていたのだが、既に座ってしまっていた。
そして私に「どうして立っているのか」と言った。
私は「アブー・サイート・フドリーのハディースに基づいて棺が葬られるのを待っているのだ」と言った。
するとナーフィウはマスウード・ビン・ハカムが（次のように）彼に話したと言った。
（すなわち）アッラーのみ使いは、最初はお立ちになり、それからお座りになった、ということをアリー・ビン・アブー・ターリブから伝えられた（というのである）。

マスウード・ビン・ハカムはナーフィウに告げた

私はアリー・ビン・アブー・ターリブが葬儀の件について話しているのを聞いた。
それはアッラーのみ使いが最初（葬儀のために）お立ちになり、それから座られた、というのである。
これが話されたのは、ワーキド・ビン・アムルが棺が埋められるまで起立しているのを（ナーフィウ・ビン・ジュバイル）が見たためである（注）。

（注）前章と本章のハディースの相違について意見は多いが、結局、前章のように立ち続けることの方が好ましいとされる。
従って本章のように先ず立って、次に座すことも許されるという意見が優勢である

このハディースは同一の伝承者経路を経て、**ヤヒヤー**・ビン・サイードによって伝えられた。

ムハンマド・ビン・ムンカディルは伝えている

私はマスウード・ビン・ハカムが、アリーを根拠とする（次のような）話をしているのを聞いた。
われわれはアッラーのみ使いが立たれたので立った。
そして、み使いが座られたので座った。それは葬列のためである。

このハディースは同一の伝承者経路を経て、**シュウバ**によって伝えられた。

礼拝にて死者の冥福を祈る

ジュバイル・ビン・ヌファイルは伝えている

私はアウフ・ビン・マーリクが（次のように）いっているのを聞いた。
アッラーのみ使いは死者に礼拝を捧げられた。
私はその御方のお祈りを覚えた。
み使いは「おお、アッラー、彼をお許し下さい。
彼に御慈悲をたまわりますように。
彼を（悪いことから）御救済下さい。
彼（の過去の罪過）をお咎めになりませんように。
彼に名誉をお与え下さい。
彼の墓をお広げ下さい。
彼を水と雪と霰でお洗い下さい。
あなたが白い衣を汚れから清められたように、彼の過失をお清め下さい。
彼に以前より良き住み処を、より良き家族を、より良き配偶者をお報い下さい。
彼を天国に行かせて下さい。
彼の墓の苦しみ（または地獄の苦しみ）に御加護をたまわりますよう」と申されていた。
彼（アウフ・ビン・マーリク）は「私は私がその死者であればなあ、と望んだ程だ」と言った。

これと類似のハディースが他の伝承者経路でも伝わっている。

アウフ・ビン・マーリクは伝えている

私はアッラーのみ使い（その御方は死者のために礼拝を捧げておられた）から（次のように）聞いた。
み使いは「おお、アッラー、彼をお許し下さい。
彼に御慈悲をたまわりますように。
彼をお咎めになりませんように。
彼を御救済下さい。
彼に名誉をお与え下さい。
彼の墓をお広げ下さい。
彼を水と雪と霰でお洗い下さい。
あなたが白い衣を汚れから清められるように、彼の過失をお清め下さい。
彼に以前より良き住み処を、より良き家族を、そしてより良き配偶者をお報い下さい。
彼を墓の災難や地獄の苦しみよりお守り下さい」と申されていた。
アウフは「私が、アッラーのみ使いが祈られたその死者であったらなあ、と願った」と言った。

死者のための礼拝におけるイマームの位置

サムラ・ビン・ジュンダブは伝えている

私は預言者の背後で礼拝した。

その御方は出産が原因で亡くなった、ウンム・カアブという婦人のために礼拝を捧げられたのであった、

その際み使いは彼女の遺体の中央に相対してお立ちになった。

このハディースは同一の伝承者経路を経て**フサイン**によっても伝えられている。
だがそれにはウンム・カアブの名は見えない。

サムラ・ビン・ジュンダブは伝えている

私はアッラーのみ使いが御在世の頃は青年であった。

私は（あの御方から学んだことは）覚えていた。

故に、私はみ使いの言葉を告げることが出来たのだが、その頃は未だ私より年長の人達がいたのだ。

私は（ある時）アッラーのみ使いの背後で、出産して亡くなった婦人のために礼拝を捧げた。

その時、アッラーのみ使いは遺体の腰の部分に相対して礼拝を行われた。

イブン・ムサンナーを根拠とするハディースには「み使いは彼女の中央部に立たれて、彼女のために礼拝を捧げられた」という言葉がある。

死者のための礼拝を終った後、（うま等の）乗り物に乗って去ることは許されている

ジャービル・ビン・サムラは伝えている

　　鞍もあぶみも置かれていないはだかうまが預言者の所に引かれて来た。
　　み使いはイブン・ダフダーフの棺のために礼拝を捧げ終えてお帰えりになる時、それに乗られた。われわれはその御方の周囲を歩いた。

ジャービル・ビン・サムラは伝えている

　　アッラーのみ使いはイブン・ダフダーフの棺のために礼拝を捧げられた。
　　その後、鞍もあぶみも置かれていない馬が引かれて来た。
　　そして一人の男がその馬のくつわを取った。
　　み使いはそれにお乗りになった。
　　すると馬は跳ね始めた。
　　われわれはその後を走りながらついて行った。
　　一人の男が「アッラーのみ使いは『天国には、なんて多くのぶどうの房がイブン・ダフダーフのために垂れ下っていることだろう』と申された」と言った。
　　または、シュウバが「アブー・ダフダーフのために」（と名前を少し変えて）言った。

墓を日干し煉瓦で覆う

アーミル・ビン・サアド・ビン・アブー・ワッカースは伝えている

　　サアド・ビン・アブー・ワッカースは病床にあって「私の墓を掘り、アッラーのみ使いのために造られたように、崩れぬよう煉瓦で囲ってくれるように」といった（注）。

（注）その当時、墓はあまり高く造らないのが普通であった。
埋葬後、その上を煉瓦で覆うか、それは地表より少し高くなる程度であった

墓にへり房のある赤い布を掛ける

イブン・アッバースは伝えている

　　アッラーのみ使いの墓には、へり房のある赤い布が掛けられていた。

「墓は地表と同じ高さにせよ」という命令について

スマーマ・ビン・シュファイユは伝えている

われわれがファダーラ・ビン・ウバイドと共にルーディスというビザンティンの島にいた時、われわれの友人が亡くなった。

ファダーラ・ビン・ウバイドは死者の墓を用意させ、それを地表と同じ高さに造らせた。

そして「私は、アッラーのみ使いがそれを地表と同じ程度の高さに造るよう、命じておられたのを聞いた」と言った。

アブー・ハイヤージュ・アサディは伝えている

アリー・ビン・アブー・ターリブは私に「アッラーのみ使いは『偶像はそのままに放置してはならぬ。

必ず破壊せよ。

高く造られた墓も地表と同等の高さにしなければならぬ』と申され、その事について私を使いとしてお遣わしになったことがあった。

今ここに、私はそれと同じ件で君を使いとして送る」と言った。

このハディースは同一の伝承者経路を経て、ハビーブによって伝えられた。

なお彼は「画(崇拝するために画かれた肖像画)でさえも必ず抹消すること」と言った。

しっくいは墓とその建物に塗ってはならない

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは、墓にしっくいを塗ること、またそれに腰を掛けること、そしてその上に建物を造ること等を禁止された。

これに類似のハディースは、**ジャービル・ビン・アブドッラー**を根拠として伝えられた。

ジャービルは、墓にしっくいを塗ることは禁止された、と言った。

墓に腰を掛けること、またその方向に向って礼拝することは禁止されている

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方誰でも、(たとえ)たき火の上に座って衣服を焦がし、更に皮膚にまでそれが達したとしても、それは墓に腰を掛けるよりましである」と申された。

このハディースに類似のものは、同一の伝承者経路を経て**スハイル**によって伝えられた。

アブー・マルサド・ガナウィーは伝えている

アッラーのみ使いは「墓の上に腰を掛けてはならぬ。またその方向に向いて礼拝してもならぬ」と申された。

アブー・マルサド・ガナウィーは伝えている

私はアッラーのみ使いが「墓に向って礼拝してはならぬ。またその上に腰を掛けてもならぬ」と申されるのを聞いた(注)。

(注)墓を前方に置いて礼拝は行わぬこと

マスジドにおける葬儀の礼拝

アッバード・ビン・アブドッラー・ビン・ズバイルは伝えている

アーイシャは彼女が礼拝を捧げるために、サアド・ビン・アブー・ワッカースの棺をマスジドに運ぶよう命令した。
しかし人々は彼女のいうことを聞かなかった。
すると彼女は「人々はなんと忘れるのが早いのでしょう。
まこと、アッラーのみ使いはスハイル・ビン・バイダーウのための礼拝をモスクでなさっておりましたのに」と言った。

アッバード・ビン・アブドッラー・ビン・ズバイルは、アーイシャを根拠として伝えている

サアド・ビン・アブー・ワッカースが亡くなった時、預言者の妻達は彼の棺の礼拝を行うために、それをマスジドに運ぶよう使いを出した。
関係者はそれに応じ、彼女達がそれの礼拝を行うために彼女達の部屋の近くに安置した。
そして（礼拝終了後）その棺はアル・マカーイドと呼ばれていた場所に通じていた、葬儀の門から送り出された。
すると人々が、棺をマスジドに運び入れたのはなぜか、と非難したということが彼女達に伝わった。
これがアーイシャにも伝わると彼女は「人々は棺がマスジドに入れられたことで私達を非難しますが、アッラーのみ使いはスハイル・ビン・バイダーウの棺の礼拝をマスジドの中央で行われました」と言った。

アブー・サラマ・ビン・アブドル・ラフマーンはアーイシャを根拠として伝えている

サアド・ビン・アブー・ワッカースが亡くなった時彼女は「私は彼のために礼拝を捧げますので、彼の棺をマスジドに入れて下さい」と言った。
すると彼女の言葉は拒否された。
彼女は「アッラーに誓い、アッラーのみ使いはバイダーウの二人の息子、スハイルとその兄弟のためにマスジドで礼拝を捧げました」と言った。
（ムスリムは言った）スハイルとは、スハイル・ビン・ダアドのことで、ダアドはスハイルの母である。
彼女は「白い女」と言われていた。

墓地に入る際に唱える言葉とそこに永眠する人々への祈りの言葉

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは（彼女と夜を過された日は何時も）夜が明ける頃にバキーウ（マディーナの人々の墓地）に出て行かれる習慣がありました。

そしてみ使いは「信仰する人々の住居よ、それらの上に平安あれ。

そこに住む人々よ、あなた方に約束されたことは明日あなた方の所にやって来る。

あなた方はそれを幾分遅れて受け取るのです。

もし、アッラーがおぼしめすなら、われわれはあなた方の御仲間に加わるのです。

おお、アッラー、どうかバキーウ・ガルカド（注）の人々を許されますように」と申されました。

クタイバは彼の言葉の中には「あなた方の所にやって来る」は述べなかった。

（注）この墓地にガルカドと呼ばれていた木があって、その名が残っている

ムハンマド・ビン・カイスはある日、「私は私の母を根拠として（アッラーのみ使いの言葉を）是非ともあなた方に話さなければならない」と言った。
われわれは、その母というのが彼を産んだ彼の母親を意味したのだと考えた。
ところが彼は、その話をしたのは（信者達の母、つまり）アーイシャであったと言った

アーイシャは「私は預言者や私に関してのことを是非あなた方にお話ししなければなりません」と言った。

われわれは「はい、是非とも」と応えた。

彼女は「預言者が私の所で夜を過すために来られると、くるりと背を向けられてコートを取られ、はき物をぬがれるとそれを御自分の足の近くに置かれ、イザール（下半身にまとう腰巻の一種）の端をベッドの上に広げた後でお休みになりました。

そしてその御方は私が既に眠ってしまったとお考えになると、そっとコートをお取りになり、はき物をゆっくりとおはきになり、静かに扉を開けて出て行かれました。

私は私の頭を覆いベールをつけ、私のイザールを身にまとってその御方の後を急いで追いかけました。

み使いはバキーウに行かれ、そこにお立ちになりました。

長い間立った後、両手を三度お上げになりました。

その後、その御方はお帰りになったのです。

それで私も帰りました。

その御方が急ぎますと私も急ぎました。

その御方が走りますと私も走りました。

その御方が家に着かれる前に、私は一足先に家に帰り着き、す早くベッドに横たわっておりました。

み使いは家にお入りになると「アーイシャよ、その荒い息づかいはどうしたのか」と言われました。
私は「何でもありません」と答えました。
み使いは「どうしても、私に言わねばならぬ」あるいは「凡てのことに寛大で、熟知せる御方は必ず私に告げ給う」と申された。
私は「アッラーのみ使い様、あなたは私の両親にも増して大切な存在でございます」と言って私が見たことを告げました。
み使いは「私が見た私の前の黒い影はお前であったか」と申されました。
私は「はい」と言いました。
するとみ使いは私の胸を痛い程お打ちになりました。
そして「お前はアッラーとそのみ使いがお前を不当に扱っていると考えたのか」と申されました。
私は「人々がいかにかくそうとも、アッラーはそれを御存知でございます」と言ってうなずきました。
み使いは「ガブリエルはお前が私を見た時に私の所に来た。
そして私を呼んだがお前にはそれを気付かせなかった。
私は彼の呼びかけに応じた。
しかし私もそれをお前には気付かせなかった。
それはお前が完全に衣服をつけていなかったから、彼がお前の所には行かないようにである。
私はお前が既に寝てしまったと思った。
私はお前がこわがるのではないかと心配して、起すのを好まなかったのだ。
彼（ガブリエル）は『汝の主は、汝がバキーウの住人（死者）の所に来て、彼等のためにお許しを懇願することをお命じになっておられる』と言った」と申されました。
私は「彼等のためにどのように祈願すればよいのでしょうか」と申しました。
み使いは「信者達、ムスリム達の家の人々に平安あれ。
アッラーが私達の先人、また次の世代の人々に御慈悲をおかけ下さいますよう。
私達はアッラーがお望みなら、あなた方のお仲間に加わるのです。と言え」と申されました。

スライマーン・ビン・ブライダは彼の父を根拠として伝えている

アッラーのみ使いは人々が墓地に行った時は（いかにすべきかを次のように）教えておられた。
それについて伝承者の一人はアブー・バクルを根拠としたハディースでは「墓地の住人たちに平安あれ」と唱えると伝えている。
ズハイルによって伝えられたハディースでは「あなた方の上に平安あれ。

おお、信者達、ムスリム達の家族の方々よ、まこと、われわれもアッラーがおぼしめすなら、
あなた方のお仲間に加わるのです。
私はわれわれやあなた方のために、平安を祈願し奉ります」と唱えると伝えている。

預言者は至高偉大なる主に母の墓を訪れる許可を求める

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「私は、わが主に私の（亡き）母のためにお許しを願った。
しかし主は願いをお聞き入れ下さらなかった（注）。
また私は主にわが母の墓を訪れるお許しを願った。主は、それについてはお許し下さった。

（注）預言者の母はジャーヒリーヤ時代の人であったので多神教徒であった

アブー・フライラは伝えている

預言者はその御方の母堂の墓をお訪ねになった。
そしてその御方は泣かれた。
周囲にいた人達も泣いた。
その時「私は、わが主に母のためにお許しを懇願したがお聞き入れにはならなかった。
また私は主に、わが母の墓を訪れることを願った。
それはお聞き入れ下さった。それであなた方も墓地を訪れよ。
まことに、それは亡き人々のことを思い出させる」と申された。

イブン・アライダは彼の父を根拠として伝えている

アッラーのみ使いは「私はあなた方に（かつて）墓の訪問を禁じたが、今や、それを訪れて良い。
また私は犠牲として屠った肉は、三日後には食することを禁じた（その後に残ったものはサダカとすることを命じた）。
しかし今やあなた方が所持しているかぎりは、それを食すが良いしなお私は水袋以外にはなつめ椰子の実その他の木の実を入れて飲むことを禁じた（注）。
今、あなた方はあらゆる種類の飲み物を飲んで良い。
ただし、酔うものはいかなるものも飲んではならぬ」と申された。

（注）ハディースにはナビーズとある。
それは一般に「ぶどう酒」のように訳されるが、ここでは水袋の水になつめ椰子の実が入っているもので、それが発酵して酒に変わる前のものをいっている

このハディースは他の伝承者経路でも伝えられている。

自殺者への礼拝は放棄される

ジャービル・ビン・サムラは伝えている

預言者の所に幅広の矢じりで自殺した男の遺体が運ばれて来た。

その時み使いはその者のための礼拝はなされなかった。

ザカートの書

タイトルなし

アブー・サイード・フドリーは伝えている

預言者は「五ワスク（注 1）以下のものに対してサダカはないし、五ザウド（注 2）以下のものに対してもない。

そしてまた、五オンス以下のものに対しても同様である」と申された。

（注 1）一ワスクの価値は四十ディルハムである。

従って五ワスクは二百ディルハム。

なお一ディルハムは、ほぼ 3.12 グラムの銀貨である

（注 2）ザウトは三頭から十頭までの雌らくだの群

このようなハディースは同一の伝承者経路を経て、**ヤヒヤー・ビン・ヤヒヤー**によって伝えられた。

ウマーラは伝えている

私はアブー・サイード・フドリーが（次のように）いうのを聞いた

私は預言者が五本の指を用いられて話しておられるのを聞いた。

それから彼はアブー・サイード・フドリーによって伝えられたようなハディースを話した。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは「五ワスク以下のものに対してサダカはないし、五ザウド以下のものに対してもない。

また五オンス以下のものに対してもサダカはない」と申された。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

預言者は「ナツメヤシの実でも穀類でも五ワスク以下のものに対してはサダカはない」と申された。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

預言者は「なつめ椰子の実でも穀類でも五ワスク以下のものに対してはサダカではない。

また五ザウド以下のものに対してもない。

そしてまた五オンス以下のものに対しても同様である」と申された。

イブン・マハディーのハディースに類するものは同一の伝承者経路で、**イスマイール・**ビン・ウマイヤによって伝えられた。

ヤヒヤー・ビン・アーダムのハディースに類するものも同一の伝承者経路で、**イスマイール・**ビン・ウマイヤによって伝えられた。
しかし、彼は「なつめ椰子の実」の代りに「果実」という語を用いている。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは「銀五オンス以下に対してはサダカはない。

また、雌らくだ五ザウド以下であればサダカはない。

そしてまた、果実五ワスタ以下であればこれも同様である」と申された。

サダカは十分の一、あるいは二十分の一を支払いとするものがある

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは「河川や雨によって潤されたものは十分の一、家畜を使役して潤されたものは二十分の一を（サダカとする）と申された。

ムスリムは奴隷や（聖戦のための）馬を所有するためのサダカの義務は負わない

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「ムスリムは奴隷や馬の所有によるサダカの義務はない」と申された。

アブー・フライラは伝えている

預言者は「ムスリムは奴隷や馬の所有によるサダカの義務はない」と申された。
（ズハイルは、み使いから直接に伝えられた、と言った）

このようなハディースは**アブー・フライラ**によって、他の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「（奴隷の所有者は）それを所有しているためのサダカを支払うのはイードル・フィトルの場合のみである」と申された。

ザカートの寄進と、それの拒否について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いはサダカ収納のためにウマルを送られた。

その時、イブン・ジャミール、ハーリド・ビン・ワリード、それとみ使いの叔父アッバースはそれの寄進を拒否したということであった。

アッラーのみ使いはこれについて「イブン・ジャミールは何を恨んでいるのか。

彼は貧しかったがアッラーが富ませて下さったではないか。

一方ハーリドについては、あなた方は彼に対し（請求するのは）公正ではない。

彼はアッラーの道のために彼の武具や武器を保有しているのである（商売のためではない）

また、アッバースについては私がそれを供出し、なおそれに等しい量（のサダカに）ついてもう一年供出する義務を負っている」と申された。

それからみ使いは「ウマルよ、人のおじというものは、その者の父親のような存在ということを心に留めておくがよい」と申された。

ムスリムのフィトルのザカートは干しなつめ椰子の実と大麦である

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、自由民、奴隷、男女を問わず、各ムスリムはフィトルのザカートとして一サーア（注）の干しなつめ椰子の実、あるいは一サーアの大麦を義務づけられた。

（注）1 サーアは 4 ムッド（穀物の計量単位）

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、自由民、奴隷、老人、若者すべてに対し、1 サーアの干しなつめ椰子の実、あるいは一サーアの大麦をフィトルのザカートとすることを義務づけられた。

イブン・ウマルは伝えている

預言者は、自由民、奴隷、男女を問わず、ラマダーンのサダカとして、1 サーアの干しなつめ椰子の実、または 1 サーアの大麦を義務づけられた。

イブン・ウマルは「人々は精製された小麦では、それを二分の一サーアで行った」と言った。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは 1 サーアの干しなつめ椰子の実、または 1 サーアの大麦をフィトルのザカートとしてお命じになった。

イブン・ウマルは「人々はそれを精製した小麦では 2 ムッド（二分の一サーア）で行った」と言った。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、自由民、奴隷、男女、老若を問わず、各ムスリムに対し、1 サーアの干しなつめ椰子、または 1 サーアの大麦をラマダーンのフィトルのザカートとすることを義務づけられた。

サアド・ビン・アブー・サルフはアブー・サイード・フドリーが（次のように）言うのを聞いた

われわれはフィトルのザカートを 1 サーアの穀類、または 1 サーアの大麦、あるいは 1 サーアの干しなつめ椰子の実、または 1 サーアのチーズ、もしくは 1 サーアの乾ぶどうで行っていた。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いが御在世の時、われわれは老いも若きも、自由民も奴隷も、フィトルのザカートとして一サーアの穀類、または 1 サーアのチーズ、あるいは 1 サーアの乾ぶどうを寄進していた。

この行為は、ムアーウィヤ・ビン・アブー・スフヤーンがハッジあるいはウムラでわれわれの所に来るまで続いていた。

彼はミンバルの上で人々に「私はシリアの小麦 2 ムッドは 1 サーアの干しなつめ椰子に相当すると思う」と話した。

そこで人々はそれを受け入れた。

しかし、アブー・サイードは「私は生きている限り、今まで寄進していたようにザカートを行う」と言った。

サアド・ビン・アブー・サルフは、アブー・サイード・フドリーが（次のように）言っているのを聞いた

アッラーのみ使いがわれわれと共におられた時、われわれは老いも若きも、自由民も奴隷も皆、1 サーアの干しなつめ椰子、1 サーアのチーズ、1 サーアの大麦の三種の中からどれかをフィトルのザカートとして寄進していた。

われわれはムアーウィヤが 2 ムッドの小麦は 1 サーアの干しなつめ椰子の実に相当するという考えを示すまで、それを寄進し続けた。

アブー・サイードは「私は従来通りにそれを行って来た」と言った。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

われわれはチーズ、干しなつめ椰子、大麦の三種の中からフィトルのザカートを寄進していた。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

ムアーウィヤが二分の一サーアの小麦は 1 サーアの干しなつめ椰子の実に相当するとした時、アブー・サイードはそれに異議を唱えた。

彼は「私はアッラーのみ使いが御在世の時に行っていた、1 サーアの干しなつめ椰子の実、あるいは 1 サーアの乾しぶどう、または 1 サーアの大麦、もしくは 1 サーアのチーズの（いずれかを）寄進する以外にはない」と言った。

フィトルのザカートの寄進は礼拝の前に行うこと

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、フィトルのザカートを、人々が礼拝に向う前に行うよう命じられた。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、人々が礼拝に向う前にフィトルのザカートを行うよう、命じられた。

ザカートを拒んだ者の罪

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「金や銀の所有者で、その中より（ザカートの）義務を履行せぬ者は、復活の日、その者のために火の板が作られる。
その板は地獄の業火で熱せられたもので、彼の脇、額、背に押し当てられる。
そして、それは冷える度に熱せられ、一日が五万年の長さにも相当する日、アッラーのお裁きが下るまで続けられる。
その後下僕等は示された天国あるいは地獄への道を辿るのである」と申された。
すると「アッラーのみ使いよ、らくだは（どうなのでしょう）」という質問があった。
み使いは「もし、らくだの所有者が彼の義務を履行せず、また、彼がらくだを水辺に連れて行った日にミルクをしぼる義務を怠ったとすれば（注）、復活の日には、らくだのために平坦で、そこでは一頭の子らくだも迷うことのないような、広大な大地が開ける。
らくだ達はその場所で彼を足で踏みつけたうえにかみつく。
そして一頭のらくだが過ぎるとまた次のがやって来て同じことを繰り返す。
これは一日の長さが五万年にも相当する日、下僕達がお裁きを受けて大国へ行くか地獄へ落ちるかの道が示されるまで続くのである」と申された。
（その時また）「アッラーのみ使いよ、牛と羊はどうですか」と問われた。
み使いは「もし、牛や羊の所有者が彼の義務を履行しなかったなら、復活の日には、平坦で広々とした柔かな大地がそれら（家畜）に開け、正常な角ーつまり異常に曲っていたり、折れていたり、それを欠いていたりしないーをもったものが、彼を角で突き刺し、ひずめで踏みつけ、前の家畜が過ぎるとまた次のがやって来て、一日が五万年の長さに相当する日、それが続く。
それは下僕達が裁かれて天国へ行くか地獄へ落ちるかの道が示されるまで繰り返される」と申された。
するとまた「アッラーのみ使いよ、馬はどうですか」と聞かれた。
み使いは「馬には三種がある。それは人にとっては重荷となるもの、人にとっては庇護と

なるもの、またある人にとっては報酬源となるものである。
人に重荷となるものについていえば、彼はそれを見せつけ、自慢して、ムスリム達に敵対するために所有している。
これは彼にとって重荷である。
彼の庇護となるものについては、彼はそれをアッラーの道のために所有し、それらの背（聖戦に役立てること）や首（馬にかかるザカート）でアッラーの権能を忘れないでいる者、そういう者にとっては、それは庇護となる。
さて、彼のために報酬源となるものについては、所有者はそれをアッラーの道につくすムスリム達のために牧楊や野原で飼育する。
その時、それらが牧場や野原で食べたものは全て有益な行為として、所有者のために記録されよう。
また、それらの糞尿もまた有益なものとして彼のために記録されよう。
なお、それらが長い繋ぎ綱を伸ばし柵の回りを一回り二回りと走れば、その馬のひずめの跡も糞も良き行為としてその所有者のために記録される。
そして所有者が川辺にそれを引いて行く度に馬はそこの水を飲み、彼がそれに水を与えることを望んで飲んだものは、アッラーが必ず彼のために良き行為としてその回数を御記録になる」と申された。
そしてまた「み使いよ、ろばはどうでしょう」と聞かれた。
すると「ろばについては（次のような）包括的な一節を除き、私には啓示はなかった（すなわち）**「一微塵の重さでも、善を行った者はそれを見る。一微塵の重さでも、悪を行った者はそれを見る」**（クルアーン第 99 章 7、8 節）」と申された。

（注）遊牧民は六日か七日目に、らくだを水辺に連れて行き水を与えた後、ミルクをしぼる。
そのミルクは貧者、必要とする人々に施す習慣があった。
ここではそれの怠慢を戒めている

このハディースは同一の伝承者経路を経て、**ザイド・ビン・アスラム**によっても伝えられている。
彼はその中で「らくだを所持せる者は、相応の義務を果さねばならない」と言ったが、「それら（らくだ）の中からの義務を」とは言わなかった。
なお彼はその中で「それらの中から一頭の子らくだも失わない」と（いう言葉を）述べ、また「彼の両脇と額と背に焼印が押し当てられる」と言った。

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは（次のように）申された。
「財宝の所有者で、そのためのザカートを行わない者は、（彼の所持品は）地獄の業火で熱せられて板状のものに変えられ、それで彼の両脇と額が焼かれる。

それは一日が五万年の長さにも相当する日に、アッラーがその下僕達にお裁きを下されるまで続く。
それから彼が天国へ行くか、または地獄へ落ちるか、行くべき道が示される。
次に、らくだの所有者でそれのザカートを行わなかった者は、彼のらくだにどこまでも平坦で広々とした大地が開け、そこでらくだ達に踏まれ、かみつかれる。
最初のらくだが過ぎるとまた次のがやって来る。
これは一日の長さが五万年にも相当する日にアッラーがその下僕たちをお裁きになるまで続く。
それから彼が天国へ行くか、または地獄へ落ちるか、行くべき道が示される。羊の所有者でザカートを行わなかった者には、果しなく広々とした平坦な大地が羊のために開け、そこで彼をひづめにかけ角で突き刺す。
その中には角が後方に曲ったのや角の無いのはいない。
そして、最初の羊が過ぎるとまた別のがやって来る。
これはその（一日の）長さが、あなた方の計算する五万年にも相当する日に、アッラーがその下僕達をお裁きになるまで続くのである。
それから彼が天国へ行くか地獄へ落ちるかの、行くべき道が示される」
スハイルは「私は牛について述べられたかどうかは知らない」と言った。
人々は「アッラーのみ使いよ、馬はどうでしょうか」と言った。
み使いは「馬はその前頭部に徳点がある（注 1）」といわれた。
（または）「馬はその前頭部に徳点が供わったものである」（と言われた）
（スハイルは）その徳点は復活の日までずっと（と言われたかどうか私は疑っている、と言った）
「馬には三種がある。
それは人にとって報酬源となるもの、庇護となるもの、そして重荷となるものである。
人にとって報酬源となるものについて言えば、彼はそれをアッラーの道のために所持し、そのために訓練する。
故に、かいばや水の消費は、アッラーがその馬の所有者のために必ず報酬を御記録になる。
そして、たとえそれが牧草地で飼育されたとしても、それらが食べたものは、それの所有者のためにアッラーが報酬を御記録になるであろう。
また、たとえ彼がそれに川の水を飲ませたとしても、それらが飲んだ一滴一滴が所有者の報酬となる。
（み使いは馬の糞尿に関しての報酬も述べられた）
そして、もしもそれが一コース、あるいは二コース走ったならば、その馬が進めた歩数の一つ一つが所有者の報酬として記録されよう。
馬が所有者のために庇護となる場合については、彼はそれを名誉と威厳のために所有

するが、順境にあっても逆境にあっても、それらの背や胃（注 2）でアッラーの権能を忘れることはない。
さて、所有者の重荷となるものについていえば、所有者はそれを虚栄心とみせびらかしのために所有する。
これこそその者にとって重荷となるものだ」
人々は「アッラーのみ使いよ、ろばはどうですか」と尋ねた。
み使いは「アッラーはそれについては（次のような）包括的なお言葉以外、何も私に啓示されない」と言われた。
（すなわち）**「一微塵の重さでも善を行った者はそれを見る。一微塵の重きでも悪を行った者はそれを見る」**（クルアーン第 99 章 7、8 節）

（注 1）馬には多くの良い性質があるの意

（注 2）前のハディースには「背と首」とあったがそれと同じ

このハディースは同一の伝承者経路を経て、**スハイル・ビン・アブー・サーリフ**によって伝えられた。
スハイルは「'aqsa'（アクサーウ）」を「'adba'（アドバーウ）（注）」の代りとしたといった。
また彼は「それによって彼の脇と背に焼印が押される」と言い、額については述べなかった。

（注）アクサーウもアドバーウも雌羊または雌山羊を意図している
このハディースは**アブー・フライラ**によって他の伝承者経路でも伝えられている。
それでは彼（アブー・フライラ）は「アッラーのみ使いは『人がその者のらくだについて、アッラーへの義務、またはサダカを行わない時は……』と申された」と言った、と伝えている。
残余のハディースは同一である。

ジャービル・ビン・アブドッラー・アンサーリーは伝えている
私はアッラーのみ使いが（次のように）申されているのを聞いた。
らくだの所有者でそれについての義務を果さない者は、復活の日には、（彼の所有したらくだと一緒に）数知れぬ程のらくだがやって来て、その所有者を広々とした平坦な地に座らせ、彼等の足や爪で踏み、かつ打つ。
また、牛の所有者でそれについての義務を果さぬ者は、復活の日に（彼が所有した牛と一緒に）数知れぬ程の牛がやって来て、その所有者を広々とした平坦な大地に座らせ、彼等の角で突き刺し、足で踏みつける。
次に羊の所有者でそれについての義務を果さぬ者は、復活の日が来れば数知れぬ羊が

彼を広々とした平坦地に座らせ、彼等の角で彼を突きひづめにかける。
それらの中には角の無いのや、角の折れたものはいない。
また財宝の所有者でそれについての義務を果さぬ者は、復活の日、彼の財宝は頭の禿げた大蛇になってやって来て、口を開いて彼の後を追う。
それが近づくと男は逃げる。
すると大蛇は「お前が隠した財宝を取るがよい。私はそれを必要とはしないから」と男に叫ぶ。
男はそれから逃れられないと知ると、開いた口の中に手を押し込む。
するとその大蛇は雌らくだと同じように彼の手をかむのである。
アブー・ズバイルは「私はウバイド・ビン・ウマイルが（前述の話）をしているのを聞いた」と言った。
次にわれわれは、ジャービル・ビン・アブドッラーに、それについて尋ねた。
すると彼はウバイド・ビン・ウマイルと同様のことを言った。
アブー・ズバイルは「私はウバイド・ビン・ウマイルが（次のように）言うのを聞いた」と言った
（すなわち）ある男が「アッラーのみ使いよ、らくだに関する義務とは何でしょうか」と言った。
み使いは「らくだを水辺に連れて行った日にミルクをしぼり、水桶を（水を汲むために）貸し与え、雄らくだを（使役や交配のために）貸し、雌らくだを（その乳や毛を必要とする者のために）貸し、そしてそれらをアッラーの道のための乗り物として用意することである」と申された。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者は「らくだでも、牛でも、また羊でもその所有者がそれらについての義務を果さない場合は、復活の日、彼は広々とした平坦な大地に座らされ、ひづめのある家畜は彼をそのひづめにかける。
また角をもつ家畜はその角で披を突き刺す。
その日、それら家畜の中には角を欠いていたり、折れ曲がっているものはない」と申された。
われわれは「アッラーのみ使いよ、その（家畜）についての義務とは何でしょうか」と尋ねた。
み使いは「雄を交配のために貸すこと、水桶を（家畜に水を飲ませるために）貸すこと、雌の家畜をそのミルクや毛を必要とする者に与えること、水辺に連れて行った時は乳をしぼること、そしてそれを、アッラーの道のための乗物として用意することである」と申された。
また「富の所有者で、それについてのザカートを行わない者は、復活の日、それは頭の禿げた大蛇に変わってその所有者を追う。
それが近づくと彼は逃げる。

すると『これはお前が出し惜しんで来た報いだ』と声を掛けられる。
彼は絶対に逃れられないと分ると彼の手をその大蛇の口に押し込む。
すると雄らくだがかみつくようにその手をかむのである」と申された。

サダカの徴収者を満足させること

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

ベドウィンがアッラーのみ使いの所に来て「サダカの徴収者がわれわれの所に来て、われわれを苦しめるのです」と言った。
するとみ使いは「あなた方のサダカ徴収者を満足させよ」と申された。
ジャリールは「私がこの言葉をアッラーのみ使いからお聞きしてからは、サダカの徴収者は、私の所から不満を抱いて帰ったことはありません」と言った。

このハディースは同一の伝承者経路を経て、**ムハンマド・ビン・アブー・イスマイール**によって伝えられた。

ザカートを行わない者の罪の重大さ

アブー・ザッルは伝えている

私は預言者がカーバの蔭に座って居られた時、その御方の側へ行った。
その御方が私を見ると「カーバの主に誓い、彼等は損失を招く者達である」といわれた。
私は近づいて座ったが、じっとしていられなくて、立ち上がり「アッラーのみ使いよ、彼等とはどのような人達ですか」といった。
み使いは「彼等とは多大の財貨を所有しながら、それらの富を目の前に居る（貧しい）
人々、後に居る人々、右に居る人々、そして、左に居る人々に寛大な心で、このように、このように、このようにといって費すことを知らぬ者達である。
まことに、寛大に施す者の数は極めて限られたものである」と申された。
また、「らくだの所有者でも、牛でも、羊でも、それらについてのザカートを果さぬ者は、復活の日には、太って立派な家畜が彼を角で突き、ひづめにかける。
一頭が終るとまた次のものが代って来る。それは人々の間に裁定が下されるまで続くのである」と申された。

アブー・ザッルは伝えている

私は預言者がカーバの蔭に座っておられた時、その御方の側へ行った。
残余のハディースは同一であるがその中に
「アッラーのみ使いは『私の命がその御手の中にある御方に誓い、生前にザカートを果さず、らくだ、牛、羊を残して死に（アッラーの罰を受けに）行く者はない』と申された」がある。

アブー・フライラは伝えている

預言者は「私がウフド山のように（たくさんの）黄金を所有し、三晩も過ぎぬ中に、私の負債のための一ディーナールだけを残し、その他全部をサダカとして使用出来たら、それは何と喜ばしいことであろうか」と申された。

アブー・フライラは前述のものと類似のハディースを伝えている。

サダカの奨励

アブー・ザッルは伝えている

私はある日の午後、マディーナの石の多い土地を、ウフド山を見ながら預言者と歩いていた。

その時み使いは「アブー・ザッルよ」と私をお呼びになった。

私は「アッラーのみ使いよ、どのような御用でも」と答えた。

み使いは「私に、あのウフド山程の黄金があって、三晩も経ぬ中に、負債のための一ディーナールのみを残し、その他はアッラーの下僕達のために、このように（とその御方の前に）、このように（とその御方の右に）、またこのように（とその御方の左に御手で動作をお示しになって）使用出来たらと望むのだが」と申された。

しばらく歩いているとみ使いはまた「アブー・ザッルよ」と言われた。

私は「アッラーのみ使いよ、ご用は何なりと」と答えた。

み使いは「復活の日には、私が先程いった、そのように、そのように、そしてそのようにと（人に施した）者以外は富んでいた者も貧しい者になり下がるであろう」と申された。

またわれわれが歩いているとみ使いは「アブー・ザッルよ、君は私が戻るまでそこで待つがよい」と言われ何処かへ行ってしまわれた。

しばらくして、私は不明な声を聞いた。

私は「アッラーのみ使いに何か（災難が）起ったのでは」と思った。

私はみ使いの後を追いかけようと考えた。

しかし、み使いが言われた「私が戻るまでここで待て」という言葉を思い出して待った。

み使いが帰られた時、私は先程聞いた声について話した。

み使いは「あれはガブリエルが私の所に来て『あなたの共同体の中の者で、アッラーのみを信じて死せる者は天国へ入る』と言ったのだ」と申された。

私は「たとえ姦通しても、盗みを働いてもでしょうか」と尋ねると、「たとえ姦通しても、盗みを働いても（許される）」と申された。

アブー・ザッルは伝えている

私はある夜外出すると偶然にもアッラーのみ使いが誰もお連れにならず、唯お一人で歩いておられるのに出合った。

私はその御方が誰かと一緒に歩くのは好まれないのだと思った。

そこで私は月影を歩き始めた。

み使いは私の方にお顔を向けられて私を見た。

そして「あなたは誰か」と言われた。

私は「アブー・ザッルです。アッラーが私をあなたの身代りとさせますように」と言った。

その御方は「アブー・ザッルよ、来なさい」と申された。

私はその御方としばらくの間歩いた。
その時み使いは「復活の日、アッラーが良き物をお与えになった富める者達で、それを彼等の前や後に、あるいは善行に消費した者は別だが、報酬を受ける者はまことに少数であろう」と申された。
それから私はみ使いとしばらくの間歩いた。
その後み使いは「ここに座るがよい」と申されて、私を石が周囲にある平坦な場所に座らせた。
そして私に「ここで私が戻るまで座っていなさい」と申されて、石の多い場所を急いで何処かへ行ってしまわれた。
み使いはしばらくの間お戻りにならなかった。
やがて私はみ使いがこちらに来られながら「もし盗みを働いたとしても、もし姦通したとしても」と申されているのを聞いた。
み使いが側に来られた時早速「預言者よ、（アッラーが私をあなたの身代りとされますようにと祈った後）あなたはあの石の多い場所で誰に話して御出でだったのですか。
私はあなたに応ずる誰一人の声も聞きませんでしたのに」と言った。
み使いは「あれはガブリエルがあの石の多い場所で私に会ったのだ。
彼は『あなたの共同体の中で、唯アッラーのみを信じて死せる者は天国に入るという良き知らせである』といった。
私は『ガブリエルよ、もし盗みを働いても、またもし姦通してもですか』と尋ねた。
彼は『その通り』と言った」と申された。
み使いは「もし盗みを働いても、姦通してもですか」と尋ねた。
ガブリエルは「そうです。そしてもし酒を飲んでもです」と申された。

財宝の秘蔵者達と彼等への譴責

アフナフ・ビン・カイスは伝えている

私はマディーナにやって来た。

そこで私がクライシュ族の名士達、のグルーフの中にいると、粗雑な衣服、汚れた体の無骨な風貌の男が来て人々の前に立った。

そして「地獄の業火に熱せられる石（貴金属類）の秘蔵者達に告げよ。

その石は彼等一人一人の胸の乳首に押し当てられ、震動しながらその者の肩から抜け、また肩に当てられて彼の胸の乳首から抜けるのだ」と言った。

人々はうなだれ、誰一人一言も返す者はなかった。

その男は人々から離れて柱の近くに座った。

私は彼について行った。

そして彼に「あの人々はあなたが彼等にいったことに嫌悪するのみだ」と言った。

彼は「彼等は何も分ってはいないのだ。

私の親友アブー・カーシム（預言者の別称）が私をお呼びになったので行くとその御方は『君はウフド山が見えるか』と言われた。

私は頭上の太陽を見た（時刻を知ろうとした）というのは、み使いが私を使いに出すお考えだと思ったからである。

そこで私は『見えます』と答えた。

み使いは『私にあれ（ウフド）程の黄金があって、三ディーナール程を残し、その他は全部（貧しい人々のために）使ってしまえたら、こんな喜ばしいことはないのだが』と申された。

「しかるにあれらの人々はこの世の（富）を集め（他の人のことは）何も考えてはいないのだ」と言った。

私は「それであなたも、またクライシュの同胞達もどうだというのですか。

あなたは彼等に何かを求め、あるいは得ようとして来てはなりません」と言った。

すると彼は「アッラーに誓い、私がアッラーとそのみ使いにお会いする時まで、彼等から生活の糧を求めたり、また宗教的な規則について口をはさむようなことはない」と言った。

アフナフ・ビン・カイスは伝えている

私がクライシュのグループの中にいると、アブー・ザッルが来て「財宝の秘蔵者らは（それによって作られた焼ごてが）彼等の背に置かれ、脇に貫通する。

それが後頭部に置かれる場合は額に出る、と告げよ」と言って、彼は離れて行った。

私は「この方は、どなたですか」と尋ねた。

周囲の人々は「この方は、アブー・ザッルですよ」と述べた。

そこで私は彼の所に行った。

そして「私が先程開いたあなたの言葉はどういうことなのか」と尋ねた。

彼は「あれは私が預言者から聞いたことをいったに過ぎない」と答えた。
私は「贈物についてあなたの御意見は」と尋ねた。
彼は「それが今日の助けとなるならば受けよ。
しかし、もしあなたの宗教を売るようになるなら、それは放棄せよ」と言った。

施しの勧めとそれを善行に用いた者への吉報

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「自ら尊くしていと高くおわしますアッラーは『アダムの息子よ、（財を）施すがよい。

われは汝のために施すであろう』と申された。

そして、アッラーの右手は満ち、（イブン・ヌマイルは満ちるという語を malan といった）夜も昼も減少することなく豊かにお注ぎになる」と言われた。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーは私に『施すがよい。

われは汝のために施すであろう』と申された。

またアッラーのみ使いは「アッラーの御右手は満ち、夜も昼も減少することなく御注ぎになる。

あなた方はアッラーが天地を創造されて以来ずっとお与えになっているのを見ないのですか。

その御方の右手にあるものは減らないのです。

その玉座は水上におわします。

そして別の御手は奪う（死を意味する）手で（その御方が望まれる者の）地位を高め、あるいはお下げになるのです」と申された。

家族や奴隷に出費することの徳と、それらの人達への物惜しみ、または出費不履行の罪悪

サウバーンは伝えている

アッラーのみ使いは「人々にとって最も良い財貨の使用法は家族のために用いること、アッラーの道のために使役する動物に費すこと、またアッラーの道につくす友人達のために費すことである」と申された。

アブー・キラーバは第一に家族のため、という言葉で始めた。

またアブー・キラーバは「子供達のために費す者以上に大きな報酬を得る者があるであろうか。

アッラーは扶養の義務を負う者を手だてとして、その子供達を清廉ならしめ、あるいは御支援を給わって、彼等を豊かにさせ給う」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなたがアッラーの道に費せる財貨または奴隷解放のために費せるもの、あるいは貧しい人々のためのサダカとして費せるもの、そして、あなたの家族のために費せるものの中で、最も大きな報酬が受けられる消費は家族に対してのものである」と申された。

ハイサマは伝えている

われわれはアブドッラー・ビン・アムルと座っていた。

その時彼の執事が入って来た。彼は「奴隷達に彼等の糧を与えたか」といった。

彼は「いいえ」と答えた。

彼は「直ちに行って与えよ。

アッラーのみ使いは『扶養義務のある者が被扶養者の糧をなおざりにすること、これこそ大変な罪悪である』と申された。」

消費は先ず自己に、次は家族、そして近親者に

ジャービルは伝えている

ウズラ族の者が彼の奴隷に「お前は私が死んだ日からは自由の身となる」と言った。

このことがアッラーのみ使いに伝えられるとその御方は「あなたはそれ（奴隷）以外に財産があるか」と尋ねられた。

彼は「いいえ」と答えた。

（それでみ使いは彼のためにその奴隷の処置を引き受けられた）

そして「私から彼（奴隷）を買う者は誰か」と言われた。

ヌアイム・ビン・アブドッラー・アダウィが 800 ディルハムでそれを買うことになった。

彼は（この額を）アッラーのみ使いの所にもって来た。

み使いはそれを（奴隷の所有者に）渡し「先ず、君自身に対してサダカをせよ。

そして余ったものは家族のために、その上余ったら君の近親者に、そしてなお余ったらこれこれ、これこれに」

と言われ、更に「あなたの前の者に、右の者に、そして左の者に」と申された。

ジャービルは伝えている

アブー・マズクールというアンサールの一人が、彼の死後、ヤコブという名の奴隷を解放するということであった。

残余のハディースは前述のものと同じである。

近親者、妻、子供、両親－たとえ彼等が多神教徒であってもーに対する消費やサダカの徳点

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アブー・タルハはマディーナで最も富裕なアンサールであった。

彼が一番気に入っていた財産はバイラハーという庭園であった。

それはモスクに向い合っていて、アッラーのみ使いはそこに入られてはそこの清い水を飲んでおられた。

そして**「あなた方は愛するものを（施しに）使わない限り、正義を全うし得ないであろう」**（クルアーン第 3 章 92 節）が下った時、

アブー・タルハはアッラーのみ使いの所に行き「アッラーはその御方の書で『あなた方は愛するものを（施しに）使わない限り、正義を全うし得ないであろう』と申されました。

私の所有する財産の中でバイラハー庭園は最も愛するもの、それをサダカとしてアッラーに捧げます。

どうか、私がアッラーのみ許に参りました時、それに対する報酬がいただけますように。

それで、み使いよ、それをあなたの望まれるように御使用下さい」と言った。

アッラーのみ使いは「まことに立派なことである。

それは（来世にも）あなたにとって多大の利益をもたらす財貨である。

私はあなたのいったことを確かに聞きました。

しかし、あなたは所持せる財貨を先ず近親者のために消費しなければならない」と言われた。

そこでアブー・タルハは彼の近親者や傍系の者に分け与えた。

アナスは伝えている

「あなたが愛するものを（施しに）使わない限り正義を全うし得ないであろう」（クルアーン第 3 章 92 節）の節が下った時、

アブー・タルハは「われわれの主は、われわれの私財の一部をお望みのようであります。

アッラーのみ使いよ、私はあなたに御証人となっていただきます。

私は私の土地バイラハーをアッラーのために捧げます」と言った。

アッラーのみ使いは「それをあなたの近親者に与えよ」と申された。

そこで彼はそれをハッサーン・ビン・サービトとウバイユ・ビン・カアブに与えた。

ハーリスの娘**マイムーナ**は伝えている

彼女はアッラーのみ使いが御在世の時に女奴隷を解放した。

彼女がこのことをアッラーのみ使いに話すと、その御方は「もしあなたが彼女をあなたのおじ達（注）の所に上げたなら、あなたへの報酬はもっと大きかったであろうに」と申された。

（注）マイムーナの母方の兄弟を意図している。
彼等は大へん窮乏していたという

アブドッラー・ビン・マスウードの妻ザイナブは伝えている
アッラーのみ使いは「御婦人方よ、たとえあなた方の装飾品の一部でもよいから、自発的な喜捨を行いなさい」と申された。
私は夫アブドッラーの所に帰り「あなたは財産を持ってはいないが、アッラーのみ使いは私達に自発的な喜捨をお命じになった。
それで、あなたはその御方の所へ行き“もし妻が夫にサダカを支払っても十分であれば、彼女はそうするでしょう。
そうでなければ誰か他の人々に与えてしまうでしょう”とおいいなさい」と言った。
するとアブドッラーは「お前行け」と言いましたので、私は急きょ引き返して参りますと、み使いの門（マスジドの入口であろう）の所に私と同じ問題でアンサールの婦人が中に入ることをちゅうちょしながら立っているではありませんか。
マスジドには畏敬の念を起させるものがあるのです。
そこに（ちょうど）ビラールが出て参りましたので、私達は彼に「み使いの所に行き、二人の婦人が門の所で『自発的な喜捨は私達両名の配偶者のため、また、その二人の保護下にある孤児のために行われたとしたら、それが有効かどうか』を尋ねていると告げなさい。
でも私達が誰であるかは言ってはなりません」と言った。
ビラールはアッラーのみ使いの所に行き、それを伝えた。
み使いは「その二人とは誰か」とお尋ねになった。
彼は「一人はアンサールの婦人、一人はザイナブです」と答えた。
み使いは「どちらのザイナブか」と言われた。彼は「アブドッラーの奥さんです」と言った。
アッラーのみ使いは「その二人には、近親者のための報酬と、サダカの報酬の二つがある」と申された。

このようなハディースはアブドッラー・ビン・マスウードの妻ザイナブを根拠として伝えられた。
彼女は「私がモスクにおりますと預言者が私を御覧になって『たとえあなた方の装飾品の一部でもよいから自発的な喜捨をしなさい』と申されました」と言った。
残余のハディースは同一である。

ウンム・サラマは伝えている
私はアッラーのみ使いに「アッラーのみ使い様、私がアブー・サラマ（彼女の夫）の子供達に出費した場合でも、私に報酬があるのでしょうか。
（たとえそれが無いからといっても）

彼等は私の子供でもある故いかなる状態でも見捨ることはありませんが」と申しました。
み使いは「もちろんあなたには、あなたが彼等のために消費した報酬があります」と申された。

このハデイースは同一の伝承者経路を経て、**イブン・ウルワ**によって伝えられた。

アブー・マスウード・バドリーは伝えている
預言者は「ムスリムは、彼の家族（や近親者）にアッラーの報酬を求めて出費するなら、それは彼にとってサダカ同様の行為である」と申された。

このハディースは同一の伝承者経路を経て、**シュウバ**によって伝えられた。

アブー・バクルの娘**アスマーウ**は伝えている
私は「アッラーのみ使いよ、私の母はちゅうちょしながら（何かを）望んで私の所に参りました（注）。
私は彼女を好遇すべきなのでしょうか」と申しました。
するとその御方は「もちろんです」と申されました。

（注）彼女の母はイスラームに反対の立場にあった

アスマーウ・ビント・アブー・バクルは伝えている
私の母は多神教徒でございましたが、み使いがクライシュ族と条約を結ばれた時、私の所に参りました。
私はアッラーのみ使いに「み使い様、母は（何かを）望んで私の所に参りました。
私は母を好遇すべきなのでしょうか」と相談致しました。
み使いは「彼女を厚くもてなしなさい」と申されました。

故人の代りに代理者がサダカを行っても、故人は報酬を得る

アーイシャは伝えている

> ある男が預言者の所に参りまして「アッラーのみ使いよ、私の母が一言も遺言を残さず突然亡くなりました。
> もし母にそうする時間があったら、きっと彼女はサダカをしたと思います。
> そこで私が母に代ってサダカを行ったら、彼女に報酬が与えられましょうか」と言った。
> み使いは「もちろんです」と申された。

このハディースはヒシャームを根拠とし、同一の伝承者経路を経て伝えられた。
アブー・ウサーマによって伝えられたハディースには、イブン・ビシュルが言っているような「彼女は一言も遺言を残さなかった」という言葉はある。
しかしそれは他の伝承者によっては述べられてはいない。

サダカとはあらゆる種類の善行を指す

フザイファは伝えている

アッラーのみ使いは「善行の一つ一つがサダカである」と申された。

アブー・ザッルは伝えている

教友達の幾人かが預言者に「アッラーのみ使いよ、富裕な人達は、われわれが礼拝するように礼拝し、断食するように断食し、その上彼等の豊富な財力でサダカを行います。
（その結果）彼等が（全ての）報酬をさらって行ってしまいます」と言った。
み使いは「アッラーはあなた方にも行えるサダカをおつくりになったのではないのか。
（つまり）アッラーを讃美することの毎回毎回がサダカである。
『アッラーは至大なり』を唱えるその都度都度がサダカである。
『アッラーに栄光あれ』と口にするその都度都度がサダカである。
『アッラーの他に神なし』と唱えるその毎回毎回がサダカである。
善行を勧めるのもサダカである。
忌まわしいことを禁ずるのもサダカである。
自己の配偶者との交わりもサダカである」と申された。
教友達は「アッラーのみ使いよ、誰かがただ性欲を満たすために行っても報酬はあるのですか」といった。
み使いは「もしそれが不法に行われたとすれば、その者は（精神的な）重荷を負った、とは考えないのか。
同様に、もしそれが正当に行われたとすれば彼には当然報酬がある」と申された。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは「アダムの子孫である人間一人は 360 の関節をもって創られた。
それで、アッラーを称讃し、アッラーの栄光を称え、アッラーの他に神なしと唱え、アッラーを讃美し奉ってお許しを乞い、歩道から石、棘、骨等を取りのけ、善行を勧め、忌むべきことを禁ずる者は、彼の 360 の関節は健全に保たれ、その日（復活の日）地獄から遠く隔って歩むのである」と申された。
アブー・タウバは「多分み使いは『（歩むという言葉ではなくて）夕方になる』という言葉を使われた」と言った。

このハディースは若干の言葉の相違をもち、ザイドを根拠として同一の伝承者経路で伝えられた。（その相違は）アッラーのみ使いの言葉「または、彼は善行を命じた」というのと、「その日、彼の行為は夕方になる」である。

このハディースはアーイシャを根拠として、他の伝承者経路でも伝えられている。
その中で彼女は「アッラーのみ使いは『人間一人一人は……で創られた』と申されました」と述べている。
残余のハディースは前述のものと同一であるが、なおみ使いは「彼は、その日、歩くであろう」と申されたとも伝えている。

サイード・ビン・アブー・ブルダは彼の祖父を根拠として伝えている

アッラーのみ使いは「ムスリム一人一人がサダカを行わねばならない」と申された。
すると「もし、そのような手段をもたない場合は（どうでしょうか）」と聞かれた。
み使いは「彼の両手をもって働けば、自身のためにもなりサダカも出来る」と申された。
すると「そうすることが出来ない者は（どうなりますか）」と言われた。
み使いは「必要としながらも為す術のないあわれな人に手を借すのです」と申された。
するとまた「そのようなこともかなわない場合はどうしますか」と聞かれた。
み使いは「親切な行為を勧めるのです」と申された。
更に「もしそれが出来なければどうしますか」と尋ねられた。
み使いは「悪いことを行わないことですむそれすなわちサダカなのです」と申された。

このハディースは同一の伝承者経路を経て、**シュウバ**によって伝えられた。

ハンマーム・ビン・ムナッビフは伝えている

このハディースはアブー・フライラが預言者ムハンマドより聞いたものとしてわれわれに話したものである。
後はいくつかのハディースを述べたがその中に（次のようなものがあった）
アッラーのみ使いは「人間は各器官が正常に働くことを感謝し、それらのためのサダカを行わねばならぬ」と申された。
そしてまた「二人の間を公正に扱うこともサダカである。
人を彼の動物に乗せて上げたり、荷を積んで上げることもサダカである。
そしてまた善き言葉もサダカである。
あなたが礼拝に向う一歩一歩もサダカである。
そしてまた、道から害になるものを取り除くこともサダカである」と申された。

アッラーの道のために消費する者と、出し惜しむ者について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーの下僕が朝起床すれば、必ず二人の天使が訪れ、その中の一人は『おお、アッラー（アッラーのために費やせる者に）更に多くを与え給え』といい、他の一人は『おお、アッラー、出し惜しんで（他をかえり見ぬ者に）破滅をもたらせ給え』と言う」と申された。

サダカを受け取る者があるうちに、早くそれを行うこと

ハーリサ・ビン・ワハブは伝えている

私はアッラーのみ使いが「サダカを行え。その者がサダカを行うことを思い立ったら直ちに。（そうでないと）それを受けとるはずの者が『もしあなたがそれを昨日持って来たら役に立ったのに、だが今日は私にとっては必要としない』と言うこともあろう」と申された。

アブー・ムーサは伝えている

アッラーのみ使いは「やがて人はサダカを受け取る者を見出せぬ時が来るであろう。
たとえそれが黄金であろうとも。
また男性が少なく、女性の数が多くて、一人の男性に彼を必要とする 40 人もの女性が属する状態が見られよう」と申された。
イブン・バッラードの伝承では「あなたは男を見るであろう」と述べられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「復活の時は、財貨が満ち溢れ、人がそれをザカートとしても誰一人受け取る者もない（程豊かになり）、アラブの大地には牧場や河川が多く見られるようになるまで、起らない」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「復活の時は、あなた方が大へん豊かになるまで起らない。
その時は誰かサダカを受け入れてくれる者があるであろうかと心配させる程に豊かであり、サダカを与えられるために呼ばれた者が『私はそれを必要としない』という程に（財貨は）満ち溢れる」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「大地は金や銀の柱にも似た素晴らしい物を吐き出す。
すると殺人者が来て『俺はこれのために殺人をした』と言う。

また親や兄弟の縁を断った者が来て『俺はこれのために親、兄弟の縁を断った』と言う。
そして泥棒は『俺はこれのために手を切断された』と言う。
こうして彼等はそれを放置しこの種のものを何一つ取らないのだ」と申された（注）。

（注）これらの宝物はいろいろな問題の原因となり、結局、所有するわずらわしさを覚えてしまう

サダカは合法的に得た物でなければ受け入れられない

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーは合法的に得たもの以外はお受けにならない。
だが合法的に取得したものの中からサダカを行えば、アッラーはその御方の右手で（満足されての意）お受けになる。
たとえなつめ椰子の実一つでも慈悲深き御手の中で、山より大きく成長するであろう。
それはあなた方が子馬または子らくだを育てるのと同様である」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「たとえなつめ椰子の実一個でも、合法的に取得したものをサダカとすれば、アッラーは必ず満足してお受けになる。
そしてあなた方が子馬または若い雌らくだを育てるようにお育てになる。
それはあたかも山のように、あるいはそれより立派に成長するであろう）と申された。

このハディースは若干の言葉の相違をもって、他の伝承者経路で伝えられている。
ラウフによって伝えられたハディースには「合法的に取得したものの中から、当然与えられるべき所に使用される」（とあり）、

スライマーンによって伝えられたハディースには「そしてそれは適切な場所に使用される」（とある）。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「人々よ、アッラーは最も神聖な御方であられ、合法的でないものはお受けにならない。
まことに、アッラーは使徒達にお命じになられたことを、信者達にも命じられた。
（すなわち）**「あなた方使徒達よ、善い清いものを食べ、善い行いをしなさい。われはあなた方のすることを熟知している」**（クルアーン第 23 章 51 節）また「信仰する者よ、われがあなた方に与えた良いものを食べなさい」（クルアーン第 2 章 172 節）それからその御方は、髪は乱れほこりにまみれ（同情をさそう）長旅の者についてお述べになった。そして「彼は両手を天空にさし伸べて『おお、主よ、おお、主よ』と祈願する。しかし彼の食事は不法、彼の飲物も不法、彼の衣服も不法である。つまり不法なもので生活を営んでいたのである。このような場合、いかにして彼の願いが受け入れられるであろうか」と申された。

たとえ半分のなつめ椰子の実でも、どんな良い言葉でもよいから、それをサダカとして行え。
まこと、それは火炎からの防御である

アディーユ・ビン・ハーティムは伝えている

私は預言者が「あなた方の中で、誰が火から自身を護れる者があろうか。

それで、たとえ半分のなつめ椰子でも、それをサダカとして行え。

それが火から身を護るものである」と申された。

アディーユ・ビン・ハーティムは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーはやがてあなた方の誰とでも通訳なしでお話しをされる。

その時、彼（人）が彼の右方を見ると、彼が以前に行った善行だけを見る。

次に彼の左方を見ると、そちらには彼が以前に行った悪い行為のみを見る。

次に彼が彼の前方を見ると、顔前には業火の燃えさかるのを見るであろう。

故にあなた方はたとえ半分のなつめ椰子の実でもサダカを行って、自身を火から護れ」と申された。

このようなハディースは**ハイサマ**によっても伝えられたが、それには「たとえ親切な言葉でも」という付加がある

アディーユ・ビン・ハーティムは伝えている

アッラーのみ使いは火に言及された。

そして嫌悪の様子を示されてお顔をそむけられた。

その後「（あなた方は自身を）火から護れ」と申されてからまた嫌悪の様子を示されてお顔をそむけられた。

われわれは、その御方があたかも業火を御覧になっているかのように拝見した。

それからまた「火から護るがよい。たとえなつめ椰子の実半分（のサダカ）によってでも。

それも見出せぬ者は、親切な言葉ででも」と申された。

アブー・クライブは「あたかも」という言葉は述べなかった。

アディーユ・ビン・ハーティムは伝えている

アッラーのみ使いは火に言及されて、（アッラーに）それに対する御加護をお求めになった。

そして三度（嫌悪の気持を示されて）顔をそむけられた。

その後「諸君、火から身を護るがよい。たとえなつめ椰子の実半分（のサダカ）によってでも、もし（それも）見出せぬ者はどんな親切な言葉ででも」と申された。

ムンズィル・ビン・ジャリールは彼の父を根拠として伝えている

われわれが、朝方、アッラーのみ使いの許にいた時、裸足の者、裸の者、しま模様の羊毛の衣服またはアバーゥ（注）をまとった者が剣を下げてやって来た。

彼等の大半、いやその全部がムダル族の人々であった。

アッラーのみ使いは彼等の貧しさを御覧になって御顔をくもらせた。

その御方は（家に）お入りになり、それからまた出て来られて、ビラールに（アザーンを唱えるよう）命じられた。

彼はアザーンを唱え、そしてイカーマ（礼拝挙行を告げること）も行った。

み使いは（教友達を導いて）礼拝を挙行された。

それからその御方は説教され、その中で**「人々よ、あなた方の主を畏れなさい。その御方は一人の者（アダム）からあなた方を創り給い」**から**「本当にアッラーはあなた方を絶えず見守られる」**（クルアーン第 4 章 1 節）を朗誦され、

更に集合章**「アッラーを畏れなさい。明日のために何をしたか、それぞれ考えなさい。そしてアッラーを畏れなさい」**（クルアーン第 59 章 18 節）を朗誦された。

（これを聞くと）ある者は金貨を、（ある者は）銀貨を、また衣服を、またある量の小麦を、そしてまたある量のなつめ椰子の実をサダカとして提供した。

み使いは、たとえその行為がなつめ椰子の実半分でもよいと申された。

その時アンサールの一人がお金でいっぱいにふくらんだ財布をもって進み出た。

人々はこれに続いて次々にサダカを行った。

その時私は（そこに）食べ物と衣服の山が二つ出来たのを見た。

アッラーのみ使いの御顔は黄金のように輝いていた。

み使いは「イスラームでは良き先例を作った者には、それに対しての報酬がある。

またそれに続いて行った者にも全く同じ報酬がある。

同様にイスラームにおいては悪しき先例を作った者には、それに対する罪の償いが厳しく負わされる。

そしてそれに続いて行った者にも全く同じ償いが負わされる」と申された。

（注）アバーゥは羊毛やらくだの毛で作った外衣

このハディースはムンズィルを根拠として、他の伝承者経路でも伝えられている。

イブン・ムアーズによって伝えられたハディースには「その御方は正午の礼拝を挙行されてから説教された」という言葉が付加されている。

ムンズィル・ビン・ジャリールは彼の父を根拠として伝えている

私がアッラーのみ使いの所で座っていた時、羊毛のしま模様の衣服を着た人々がやって来た。

残余のハディースはほぼ同一であるがその中に

“その御方は正午の礼拝を挙行されてから小さなミンバルにお昇りになり、アッラーを大いに讃美された後

「さて、アッラーはその御方の書にて**「おお人々よ、あなた方の主を畏れ奉れ」**(クルアーン第4章1節)等々のお言葉を下された」と申された”

という若干の言葉の相違が見える。

ジャリール・ビン・アブドッラーは伝えている

砂漠に住む人々がアッラーのみ使いの所に羊毛の衣服をまとってやって来た。

み使いは彼等の困窮状態をお知りになった。

彼等は必要に迫られていたのであった。

残余のハディースは同一である。

労働者は自己の賃金の中からサダカを行うこと、またサダカを行う者を少しでも減少させることへの厳しい警告

アブー・マスウードは伝えている

私達はサダカを命じられた。

われわれはそれを日雇い労働をしながら果して来た。

アブー・アキールが二分の一サーアのサダカを行った。

すると他の者が彼より多くのものを持って来た。

その時偽善者は「アッラーはこのサダカを必要としないのだ」と言った。

それで「**信者達で進んで慈善のために施しをする者を罵り、または自分の労力の外に施すもののない者を罵って(彼等に嘲笑を加える者がある)**」(クルアーン第 9 章 79 節)が下った。

ビシュルは「進んで行う者」という言葉は述べなかった。

このハディースは同一の伝承者経路を経て**シュウバ**によって伝えられた。

サイード・ビン・ラビーウによって伝えられたハディースには「われわれはわれわれの背に負って来た」という言葉がある。

与えることの徳

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「朝な夕な大きな器を満たす程の乳を出す雌らくだを(困っている)家族に貸し与える者は、大きな報酬を得る」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いはある種のことを禁じられ、ある慣習について述べられた。

そして「雌らくだを貸し与える者は、朝な夕なにミルクを与えるための報酬がある」と申された。

（アッラーの道のために）財貨を消費する者と吝嗇家のたとえ

ブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「（アッラーの道のために財貨を）消費する者とサダカを行う者は、二枚の外衣を持つ者、あるいは胸から鎖骨までを覆う二枚の鎖かたびらを所有する者にも例えられる。

アッラーの道に財を使用する者、（他の伝承者は「サダカを行う者」といった）がサダカの提供を望めば、その鎖かたびらは体にぴったりとして不備な箇所はない。

一方吝嗇家が（それを着て）財貨の使用を望めば、それの輪の一つ一つが縮んでしまう。だがサダカの提供者に対しては、この鎖かたびらは彼の体全体を覆い、その上彼の足跡をも消す程に十分に伸びる」

アブー・フライラは「（吝嗇家は）それを伸ばそうとするが伸びない」と言った。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは吝嗇家とサダカの履行者の例えを、両手が胸や鎖骨に押し付けられたような状態で、鎖かたびらを身に着けた二人の男の例えによって];説明された。

すなわち、サダカを行う者はそれを提供する度にその領かたびらは広がり、やがて彼の足の指も覆って、足跡をも消す程にゆったりとする。

一方吝嗇家は、彼がサダカを意図する度にそれは収縮し、一つ一つの輪のかみ合いは縮んでしまう。

アブー・フライラは「私はアッラーのみ使いが、その御方の指をポケットに入れて『もしあなたが、彼がそれを広げようとするのを見ていても広がらぬであろう』と申されていたのを見た」と言った。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは吝嗇家とサダカの履行者の例えを鎖かたびらを着けた二人の男を例にして（説明された）

それは「サダカの履行者がそれを意図する時は鎖かたびらは広がり遂には彼の足跡をも消す程に伸びる。

一方吝嗇家がサダカを意図する時、それは縮んで窮屈になり、彼の両手は鎖骨の所まで（伽をはめられたように）しめ上げられ、輪の一つ一つのかみ合いは互いに収縮してしまう。」（というお言葉である）

彼（アブー・フライラ）は「私はアッラーのみ使いが『彼はそれを広げようと懸命になるが出来ない』と申されるのを聞いた」と言った。

サダカはたとえそれを受けるにふさわしくない者に与えられたとしても、サダカの履行者には報酬がある

アブー・フライラは伝えている

預言者は（次のように）申された。

ある男が「私は今宵必ずサダカを行う」と言った。

そして彼はそれを持って出かけ、姦婦（とは知らず）にその女の手に持っているものを提供した。

朝になると人々は「昨夜、姦婦がサダカを受けた」と話していた。

彼は「おおアッラー、彼女が忌わしい行為を止めますように」と祈り、再びサダカを行う意志を示し、それを持って外出した。

そして今度はそれを富める者の手に置いてしまった。

朝になると人々は「富裕な者がサダカを受けた」と話した。

彼は「おおアッラー、富める者が持てる財貨をアッラーの道のために費しますように」と祈った。

そして再度サダカを行う決心をし、それを持って外に出た。

そして（今度は）それを盗人の手に置いた。

朝になると人々は「盗人がサダカを受けた」と話した。

彼は「おおアッラー『あなたに栄光あれ』そして彼女のため、富める者のため、盗人のために正道をお示し下さい」と祈った。

そこに（天使が）来て「あなたのサダカは受け入れられました。

彼女については、多分あのサダカによって忌わしい行為を断つでありましょう。

また富裕な者は反省し、アッラーが彼にお与えになったものの中から、アッラーの道のために使用するでありましょう。

そして盗人については、彼はあのサダカによって盗みを止めてくれるでありましょう」と言った。

会計係や主婦が主人の許可を得、家計を損ねることなくサダカをした場合の報酬について

アブー・ムーサーは伝えている

預言者は「正直なムスリムの会計係が（主人から）命じられたことを実行し（彼は「与える」といったかも知れない）、
彼が命じられた人に気持よく真心こめて、それをとどこおりなく提供すれば、彼はサダカを与える者の一人でもある」と申された。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは「主婦が家計を損ねることなく、家の食糧の一部をサダカとして提供すれば、そのことによって彼女には報酬がある。
同時に彼女の夫にも彼がそれを稼いだということによる報酬がある。
なお会計係にもこれと同じようなものが与えられ、各々の報酬は互いに他に劣るということはない」と申された。

このハディースは同一の伝承者経路を経て、**マンスール**によっても伝えられた。
その中には「彼女の夫の食糧の中から」という言葉の相違がある。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは「主婦が（家計を損ねることなく、夫が稼いで来たものの中から（サダカとして）提供した場合、彼女に対する報酬があると同時に、夫に対しても彼が得て来たものという意味で同じ報酬がある。
会計係も同様で、彼の報酬が少しも割引かれることなく、前二者と同じものが与えられる」と申された。

このハディースは同一の伝承者経路を経て、**アアマシュ**によって伝えられた。

奴隷が主人のものをサダカとして使用した場合について

アービー・ラフムのマウラー、**ウマイル**は伝えている

私はアービー・ラフムの所有物であった。

私はアッラーのみ使いに「もし私が私の主人の財貨のいくらかをサダカとして提供したとすれば」とお尋ねした。

み使いは「その報酬はあなた方の間で半分ずつである」と申された。

アービー・ラフムのマウラー、**ウマイル**は伝えている

私の主人は私に肉を長く切るように命じた。

その時、あわれな者が来たので私はいくらかの肉を彼に与えた。

主人はそのことを知って私を打った。

私はアッラーのみ使いの所に来てそのことを話した。

み使いは彼（アービー・ラフム）を呼び「どうして彼を打ったのか」といった。

彼は「私の命令もないのに私の食糧を与えたからです」といった。

この時み使いは「報酬はあなた方二人で分けられる」と申された。

ハンマーム・ビン・ムナッビフは伝えている

これらはアッラーのみ使いムハンマドより直接聞いたものとして、アブー・フライラから伝えられたものである。

こういって彼はそれらの中から（次のハディースを）語った。

アッラーのみ使いは「（平常）妻は夫が家に居る時は彼の許可なく断食をしてはならない。

また彼が家に居る時は彼の許可なく人を家に入れてはならない。

そして彼が稼いだものを彼の命令なしに、妻がサダカとして行ったものについては彼に半分の報酬がある」と言われた。

サダカとその他の善行が重なった場合について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーの道のために一対のものを捧げた者は『おおアッラーの下僕よ』と呼ばれて天国に招き入れられる。
これは素晴らしいことである。
また礼拝を規則正しく行っている家族の者は礼拝の門から招き入れられる。
聖戦に参加した家族の者は聖戦の門から招き入れられる。
サダカを行っている家族の者はサダカの門から招き入れられる。
断食を行っている家族の者はライヤーン（注）の門から招き入れられる」と申された。
アブー・バクル・シッディークは「アッラーのみ使いよ、人はどうしてもそれらの門の一から呼ばれて入らねばならないのでしょうか。
人はそれらの門だけから入るのでしょうか」と尋ねた。
アッラーのみ使いは「その通り、私はあなた方がその人々の一人であるよう願っている」と申された。

（注）ライヤーンはアトシャーン（喉が乾いている）の反意語で、断食をすると喉が乾くところから、それに対する安全保証の意味で使用されている

このハディースは他の伝承者経路でも、**ズフリー**によって伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーの道に一対のものを捧げる者は、天国の門の守護者が彼を招く。
（天国の）門の守護者の面面は（彼を歓迎して）『これはこれは、どうぞこちらに』と言う」と申された。
アブー・バクルは「アッラーのみ使いよ、それは彼にとって不滅（を意味するの）でしょうか」と言った。
アッラーのみ使いは「まことに、私はあなたが彼等の一人であるよう望みます」と言われた。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方の中で、今日断食をしている者は誰か」と申された。
するとアブー・バクルが「私です」と言った。
み使いはまた「今日、葬儀に参列した者は誰か」と申されると、アブー・バクルが「私です」と言った。

またみ使いは「今日、貧しい者に食事を与えた者は誰か」と申された。
するとアブー・バクルが「私です」と言った。
更にみ使いは「今日、病人を見舞ったのは誰か」と申された。
アブー・バクルは「私です」と言った。
その時アッラーのみ使いは「一日にそのように数々の良い行為を行った者は、必ず天国に入る」と申された。

アッラーの道への支出の奨励と善行をいちいち数え上げることへの警告

アブー・バクルの娘**アスマーウ**は伝えている

アッラーのみ使いは私に「消費せよ、(または与えよ、または上げよ)そしてそれらのことをいちいち数え上げてはならない。

そうでないとアッラーはあなたに対して(それらをマイナスして)数えるであろう」と申された。

アスマーウは伝えている

アッラーのみ使いは「与えよ(または上げよ、または消費せよ)そしていちいちそれらを数え上げてはならない。

そうでないとアッラーがあなたに対して(それをマイナスして)数えるであろう。

そしてまたあなたはけちってふところに入れてしまってはならぬ。

そのようなことをすればアッラーがあなたに対して(恩恵を)差し控えるであろう」と申された。

このハディースは**アスマーウ**を根拠として他の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・バクルの娘**アスマーウ**は伝えている

彼女は預言者の所に来て「預言者よ、私にはズバイルがもって来る収入以外何もございません。

それで私が、彼がもたらしますものの中から多少なりと(人に)与えたら罪となるでしょうか」といった。

み使いは「与えなさい。

あなたの出来る範囲で、ふところに入れてしまってはなりません。

そのようなことをすればアッラーがあなたに対して恩恵を差し控えます」と申しました。

いかに小さなものであっても、サダカとして与えることをさげすんではならない

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「ムスリムの婦人達よ、たとえ羊の足といえどもそれを隣人に与えることをさげすんではならない」と申された。

サダカの行為を秘める者の徳

アブー・フライラは伝えている

預言者は「その御方（アッラー）の影以外に全く影のない日（審判の日）アッラーが庇護下に置かれる七類型の人々がある。
それは公正な統治者、
アッラーを崇拝して成長した若者、
マスジドを愛しそこに集る人々と親交を深める者、
アッラーのために互いに固く友情を結び、その御方（アッラー）のために会い、その御方のために分れる二人の者、
地位があり才色兼備な女性に誘惑されても『私はアッラーを恐れます』といって応ぜぬ者、
左の手が善行に消費してもすぐ右の手がそれを知らない程こっそりとサダカを行う者、
そしてアッラーを密かに讃美して涙を流す者である」と申された。

このハディースはアブー・フライラを根拠として伝えられたが（次のような言葉の相違をもっている。
「その者がマスジドから出た時はそこに戻るまで、常にマスジドのことが心にある」

最も良いサダカは健康で、家計を引き締めて行う者のサダカである

アブー・フライラは伝えている

ある者がアッラーのみ使いの所に来て「アッラーのみ使いよ、どのようなサダカが最も良いのですか」と尋ねた。
み使いは「それはあなたが健康で、家計を引き締め、貧困を気づかい、豊かになることを願って行うものです。
そしてあなたに死期が近づくまでサダカを延ばし、(その時になって)『これは誰々に、これは誰々にと』ということのないように。
(そうでなくとも)それは必ず誰かの所有となってしまうのだ」と申された。

アブー・フライラは伝えている

ある者が預言者の所に来て「アッラーのみ使いよ、どのようなサダカを行えば、最も良い報酬が得られるのですか」といった。
み使いは「あなたの父君にかけて心するがよい。
それはあなたが健康で、家計を引き締め、貧困を気づかい、希望をもって生きてのものです。
そしてあなたに死期が近づくまでサダカを延ばし(不必要になってから)『これは誰々に、これは誰々に』等ということのないように。
それはあなたが必要とする時(その中から)行ってこそ意義があるのだ」と申された。

このハディースは同一の伝承者経路で伝えられたが「どのようなサダカが最も優れているか」という言葉の相違をもっている。

上の手は下の手より良い。上のそれは施し方のもの下のそれは受取り方のもの

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはミンバルにおられて、サダカを行うことと物乞いを悼むことについて述べておられた。

その時「上の手は下の手より良い。上の手は与える手で、下の手は物を乞う手である」と申された。

ハキーム・ビン・ヒザームは伝えている

アッラーのみ使いは「最も優れたサダカは（または最も良いサダカは）余裕をもって行うものである。

上の手は下の手より良い。それで先ずあなたが養っている（者）から始めよ」と申された。

ハキーム・ビン・ヒザームは伝えている

私は預言者に無心をした。

するとその御方は私に下さった。

また私がその御方に求めると下さった。

そしてまた私が求めるとまた下さった。

この時その御方は「この財貨は緑あざやかで甘いものだ。

善良な心でこれを受け取った者はそれで祝福される。

だがそれを強欲さで受取った者はそれによって祝福されはしない。

彼はいくら食べても満足しない者と同様である。

上の手（施しの手）は下の手（物乞いの手）より良いのだ」と申された。

アブー・ウマーマは伝えている

アッラーのみ使いが「おおアダムの子よ、あなたが余れるものを（アッラーの道に）費やすなら、あなたにとって良いことである。

しかし、もしそれを出し惜しむならあなたにとって良いことはない。

だがあなたが生活のために必要なものを出し控えたとしても、それは非難されはしないい

それで先ず、あなたが養っている者から始めるが良い。

上方の手（施しの手）は下方の手（物乞いの羊）より良いのだ」と申されるのを聞いた。

物乞いの禁止

ムアーウィヤは伝えている

ウマルの治世（に集められた）ハディース以外のものには気をつけよ。

まこと、ウマルは至高偉大なアッラーに関して、人々が恐れるようにしていた。

私はアッラーのみ使いが「アッラーが良いことを授けようと望んだ者には、宗教についての深い知識をお与えになる」と申されるのを聞いた。

そしてまたアッラーのみ使いが「私は（与える者ではなく）預かる者にすぎぬ。

それで私が（私自身の）暖い気持で見守っている者は、そのことで彼は祝福されよう。

しかし私が（連続的な）求めや強欲さを聞き入れている者は、いくら食べても満足出来ない人のようなものだ」と申されるのを聞いた。

ムアーウィヤは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方は執ように物を求めてはならぬ。

アッラーに誓っていう。

あなた方は誰一人として私がいやいやながら出すようなものを乞い求めてはならぬ。

そのような状態で私が与えたものに祝福はない」と申された。

アムル・ビン・ディーナールはワハブ・ビン・ムナッビフの話として（次のことを）伝えている

私はサヌアーウで彼の家に入った。

彼は彼の家のクルミを食べさせてくれた。

そこに彼の兄弟が来て「私はムアーウィヤ・ビン・アブー・スフヤーンが『私はアッラーのみ使いがいわれるのを聞いた』といって前述同様の話をするのを聞きました」と言った。

アブドル・ラフマーン・ビン・アウフは伝えている

私はムアーウィヤ・ビン・スフヤーンが説教の中で「私はアッラーのみ使いが『アッラーが良いことを授けようと望んだ者には、宗教に関する深い知識をお与えになる。

私はただ手渡す者にすぎぬ。

アッラーこそが本当にお授けになる御方である』と申されるのを聞いた」と話すのを耳にした。

真のあわれな人とは、彼を満足させるようなものは見出せず、人々からは気付かれずサダカも得られぬ者である

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「真のあわれな者とは、人々の所を巡り歩き一切れ二切れのパン、あるいは一、二個のなつめ椰子の実を得て追い返されるような物乞いをいうのではない」と申された。

すると人々は「アッラーのみ使いよ、それでは真のあわれな者とはどのような者ですか」と言った。

み使いは「それは、その者を満足させるようなものを見出せず、サダカを受けるにあたいしながら、人々からは気付かれず人々には何も求めぬような者である」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「真にあわれな者とは一切れ二切れのパン、あるいは一、二個のなつめ椰子の実を得て追い返されるような者(をいうの)ではない。

真実のそれは、人に乞うことを慎む者である。

もしあなた方が望むなら**「彼等は執ように人々に請わないのである」**(クルアーン第 2 章 273 節)を読誦せよ」と申された。

なおこのハディースは他の伝承者経路でも伝えられている。

人に物を乞うことへの非難

アブドッラー・ビン・ウマルの息子ハムザは彼の父を根拠として伝えている

アッラーのみ使いは「常に人々から物を乞う者は（復活の日）彼の顔からは肉がそげ落ちた姿で、アッラーにお目通りする」と申された。

これと同様のハディースがズフリーの兄弟を根拠とし、同一の伝承者経路で伝えられているが、それには muz'a（切れはし）という話は述べられてはいない。

アブドッラー・ビン・ウマルの息子**ハムザ**は彼の父から聞いた話として伝えている

アッラーのみ使いは「常に人々から物を乞う者は復活の日、彼の顔からは肉がそげ落ちた姿でやって来る」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「人々から己の富を増やすために乞う者は、地獄の業火を乞い求めているようなものである。
それ故、少なかろうが多かろうが（自由に）求めさせよ（注）」と申された。

（注）これは強欲な者に対する叱責と警告の言葉である

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いが「あなた方の一人が朝、薪を集めに行き、それでサダカを行い、更に人々の助けを借りず自立することは、与えられるにせよ拒絶されるにせよ、人に乞い求めるよりは良い。
まことに上方の手は下方の手に優る。
それで先ずあなたが養っている者から始めよ」と申されるのを聞いた。

カイス・ビン・アブー・ハージムは伝えている

われわれがアブー・フライラの所に来ると彼は次のように話した。
アッラーのみ使いは「アッラーに誓い、あなた方の一人が朝、薪を集めに行き、それを背に負うて売り……」その後のハディースは前述と同様である。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方の一人が薪を束ね、それを背にして売ることは、与えられるにせよ拒絶されるにせよ、人に乞い求めるよりは良い」と申された。

アウフ・ビン・マーリク・アシュジャイーは伝えている

われわれは九人だったか八人だったかそれとも七人だったか（はっきりしないが）、アッラーのみ使いの所にいた。

その時み使いは「あなた方はアッラーのみ使いに忠誠の誓いをしないのか」と申された。

だがわれわれは最近、その御方に忠誠の誓いを行っていたのである。

そこでわれわれは「アッラーのみ使いよ、われわれは既にあなたにその誓いは致しました」と言った。

しかしみ使いは再度「あなた方はアッラーのみ使いに忠誠の誓いをしないのか」と言われた。

そこでわれわれは「アッラーのみ使いよ、われわれは既にあなたにその誓いは致しました」と言った。

そしたらまたみ使いは「あなた方はアッラーのみ使いに忠誠の誓いをしないのか」と言われた。

ここでわれわれは（支持を表明して）手を重ね合わせるためにそれを開き「アッラーのみ使いよ、われわれは既にあなたに忠誠の誓いを致しました。

（それで今）どのような理由であなたに忠誠の誓いをしなければならないのでしょう」と言った。

み使いは「それはあなた方がアッラーを崇拝し、その御方以外いかなる神も認めず、五回の礼拝を挙行し、（低い声で何かに）従い、人々に何も求めてはならぬということのためである」と申された。

私（伝承者）はそこに居たグループの中では、落としたむち一本たりと誰かに拾わせるような者を見なかった。

物乞いが許される者について

カビーサ・ビン・ムハーリク・ヒラーリーは伝えている

私はある負債を負っていた。

私はアッラーのみ使いの所に来てそれについての援助をあおいだ。

み使いは「われわれがサダカを受け取るまで待つがよい。

われわれは君がサダカを与えられるよう命ずるであろう」と申された。

そしてその御方は「カビーサよ、物を乞うのは（次の）三例の者以外は許されぬ。

（すなわち）負債の責務を負った者、このような者は彼がそれを払い終えるまで乞うことが許されるが、それが終ったら止めねばならぬ。

（次に）災害によって財産を失った者、彼に対しては生活を支えるものを得るまで（または生活の手段を得るまでとも言われたかも知れない）乞うことが許される。

それとあと一例は赤貧の状態にある者で、彼の部族民の中の三人の識者によって、某は赤貧極まっているということを確認された者は、彼が生活を支えるものを得るまで、（または生活の手段を得るまでと言われたかも知れない）乞うことが許される。

カビーサよ、これ以外の物乞いは禁止されているし、それによって得たものを施すことも禁止されている」と申された。

欲や物乞い以外で与えられたものは収めてよい

サリーム・ビン・アブドッラー・ビン・ウマルは彼の父（アブドッラー・ビン・ウマル）を根拠として伝えている

私はウマル・ビン・ハッターブが（次のように）言うのを聞いた。
アッラーのみ使いは私に贈物を下さった。
しかし私は「どうぞそれを私以上に必要としている者にお与え下さい」と言った。
またその御方は私にお金を下さった。
私は「どうぞそれを私以上に必要とする者にお与え下さい」と言った。
するとアッラーのみ使いは「それを収めるがよい。この金は君の欲や物乞いで与えられたものではない。
しかしたんなる欲望によってそれへの執着心を起こしてはならぬ」と申された。

サーリム・ビン・アブドッラーは彼の父を根拠として伝えている

アッラーのみ使いはウマル・ビン・ハッターブにある贈物を与えていた。
ウマルは「アッラーのみ使いよ、どうぞそれを私以上に必要とする者にお与え下さい」と言った。
み使いは「それを収めよ。そして君がそれを貯えておくか、またはサダカとせよ。
この金は君の欲や乞い求めによって授ったものではない故、それを収めるがよい。
しかしたんなる欲望からそれへの執着心を起こしてはならぬ」と申された。
それ故ウマルの息子であるアブドッラー・ビン・ウマル（伝承者サーリムの父）は誰にも何一つ物を求めたことはなかった。
そして与えられた時はどんなものでもそれを拒絶したこともなかった。

このハディースはアッラーのみ使いから、ウマル・ビン・ハッターブが直接聞いた話として、**アブドッラー・ビン・サアディー**によって伝えられた。

イブン・サーイディー・マーリキーは伝えている

ウマル・ビン・ハッターブは私をサダカの収納役に指名した。
私がその仕事をし終えた時、彼にそれを渡した。
彼は私に（それに対する）若干の報酬を受け取るよう命じた。
私は「私はアッラーのために行ったにすぎません。
従って私の報酬はアッラーに捧げます」と言った。
すると彼は「君が与えられたものはどのようなものでも収めよ。
私もアッラーのみ使いの時代にこの仕事を行って、み使いがその報酬を下さった。
そこで私も君と同じようなことを申し上げた。

するとその御方は『君が乞い求めることなく与えられたものは、何でも受け入れて食し、そしてサダカを行え』と申された」と言った。

イブン・サアディーは伝えている

ウマル・ビン・ハッターブは私をサダカの収納者に指名した。

残余のハディースは同一である。

物欲切望への非難

アブー・フライラはアッラーのみ使いが（次のように）言われていたと伝えている
　　「老人の心は長生きへの期待と物欲の二つのために若い」

アブー・フライラは伝えている
　　アッラーのみ使いは「老人の心は生への執着と財貨への欲望の二つのために若い」と申された。

アナスは伝えている
　　アッラーのみ使いは「アダムの子は成長し老いる。
　　しかし彼の二つ（の欲望）が彼を若くしている。
　　（それは）財貨への欲望と生への執着である」と申された。

このようなハディースは**アナス**によって別の伝承者経路で伝えられている。

たとえアダムの息子に豊かな二つの渓谷があっても、彼は三つめを欲しがる

アナスは伝えている

アッラーのみ使いは「たとえアダムの息子が豊かな二つの渓谷を所有していたとしても、彼は三つ目のそれも望んだであろう。
アダムの息子の腹は土で満たされるまで（墓に入るまで）満たされぬ。
アッラーは後悔する者をお許しになられる」と申された。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

私はアッラーのみ使いが（前述）のように言われたが、（それが啓示かどうか）は知らない。
しかしともかくそのように言われた。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは「たとえアダムの息子が黄金の渓谷を所有していたとしても、彼はなお別の（黄金の）渓谷も望んだであろう。
彼の口は土以外では満たされることはない。
アッラーは後悔する者をお許しになる」と申された。

イブン・アッバースは伝えている

私はアッラーのみ使いが「たとえアダムの息子に財貨で満ちた渓谷があったとしても、彼はなおそれと同様のものが欲しいと願うであろう。
アダムの息子は土以外にその心を満たすものはない。
アッラーは後悔する者をお許しになる」と申しておられるのを聞いた。
なおイブン・アッバースは「私はそれがクルアーンに述べられていたものかどうか知らない」と言った。
ズハイルによって伝えられた話にも「私はそれがクルアーンに述べられていたものかどうか知らない」とあるが、イブン・アッバースの名は述べられてはいない。

アブー・ハルブ・ビン・アブー・アスワドは彼の父を根拠として伝えている

アブー・ムーサー・アシュアリーはバスラにいるクルアーンの読誦者に使者を送った。
すると三百人もの人が彼の所に集ってクルアーンを朗誦した。
その時彼は「あなた方はバスラの善良な市民であり、その住人達のクルアーンの読誦者でもあります。
それでその読誦を続けて下さい。
クルアーンの読誦を長い間行わないと、あなた方以前の者の心が荒々しかったように、あ

なた方の心も荒んでしまう」と言った。
そこでは、われわれは常々クルアーンのある章を読誦していたが、それは長さ、（内容の）厳格さでバラーアト章（悔悟章）に似ていた。
私はその章句を忘れたが確かその中に「たとえアダムの息子に豊かな二つの渓谷があったとしても、彼は第三のそれも望んだであろう。
アダムの息子の腹を満たすのは土以外にはない（注）」というのがあったのを覚えている。
そしてまたわれわれはある別の章も読誦していたがそれは「アッラーに讃えあれ」で始まる章の一つに似せたものであった。
私はそれも忘れたがその中に**「信仰する者よ、あなた方はどうして（自ら）行わないことを口にするのか」**（クルアーン第 61 章 2 節）と「それは（悪い）証拠としてあなた方の首に記録されるであろう。
あなた方は復活の日、それについて尋ねられる」というのがあった。

（注）人間の欲望は満ちることなく、死に到るまで限りなく続く

豊かさは物の豊富さによって具わるものではない

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「まことの豊かさは物資の潤沢さからのものではなく、心の豊かさからのものである」と申された。

現世の装飾品からもたらされる恐れ

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いはお立ちになって人々に（次のように）説教された。
「人々よ、アッラーに誓い、私はあなた方については心配しない。
しかしアッラーがあなた方にもたらすこの世の装飾品についてはその限りではない」と申された。
すると一人の男が「アッラーのみ使いよ、良きものが悪しきものをもたらすのですか」と言った。
み使いはしばらく黙っておられたが「あなたは今、何といったのですか」と言われた。
すると彼は「み使いよ、私は良きものが悪しきものをもたらすのですか、と申しました」と言った。
み使いは「まことに、良きものは良きもの以外もたらさぬであろうか。
春の雨で育つ植物が、それを満腹する程食べた家畜を（消化不良を起させて）殺したり、殺しそうになったりもする。
適量を食んだ家畜は満腹して横腹が張り出しているような時、太陽に向って腹ばいになり、反すうし、糞尿を排泄し、また（恵ある）もとの所に戻って食む。
正当に財を得る者はその中にアッラーの彼への祝福がある。
他方不当に財を得る者は、いくら食べても満足しないものと同様である」と申された。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは「私があなた方のために最も恐れることは、アッラーがあなた方にもたらすこの世の装飾品についてである」と申された。
人々は「この世の装飾品とは何でしょう」といった。
み使いは「大地の祝福（貴金属）である」と申された。
人々は「アッラーのみ使いよ、良きものが悪しきものをもたらすのですか」と言った。
み使いは「良きものは良きもの以外はもたらさないであろうか。春の雨で育つ植物はそれを食む家畜を殺しもするし、殺しそうにもなる。
適量を食んだ家畜は満腹してその横腹が張り出しているような時、太陽に向って腹ばい、

反すうし、糞尿を排泄し、そしてまた（恵ある所に）戻って来てまた食む。
まこと、この財貨は新鮮で甘いのである。
正当にそれを取得し、正当にそれを用いる者にとってそれは何と良き支援となることか。
一方不当にそれを取得した者はいくら食べても満足しないものと同様である」と申された。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いはミンバルにお座りになった。
われわれはその御方の回りに座った。
み使いは「私が世を去って後あなた方の上に恐れることはあなた方が見るであろう現世の装飾品の数々である」と申された。
その時一人の男が「アッラーのみ使いよ、良きものが悪しきものをもたらすでしょうか」と言った。
アッラーのみ使いは黙ってしまわれた。
するとその男に対し「君がなぜアッラーのみ使いに話すのか、み使いは君とはお話しにならない」という声が上った。
われわれにはその時、その御方に啓示が下っているかのように思えた。
（というのも）み使いは（時をおいて）われに返えられた様子で汗をお拭きになったからである。
そして「まことに、彼は探求者である（その御方は彼を称讃しているかのようであった）」と言われ、また「まこと、良きものは悪しきものをもたらさぬ。
だが春の雨で育つ植物はそれを食む家畜（に消化不良を起させてそれ）を殺しもするし、殺しそうになったりもする。
適量を食んだ家畜はその横腹が張り出す程に満腹した時は、太陽に向って腹ばい糞尿を排泄し、そしてまた（大地の恵みある）もとの所に戻って食む。
まことに、この財貨は新鮮で甘いのである。
貧しき人、孤児そして旅人等に（正当な方法で取得した）その財貨を分け与える者はなんと良き、ムスリムの友人であることか。
（またアッラーのみ使いは「次のようにも」言われた）
まことに、不当に財貨を得る者はいくら食べても満足しないようなものであり、審判の日に、彼に抗弁する者が立って（それを証明）するであろう」と申された。

慎みと忍耐の徳

アブー・サイード・フドリーは伝えている

幾人かのアンサールがアッラーのみ使いに物乞いをした。
み使いは彼等にお与えになった。
彼等が再度乞うとまたお与えになった。
こうしてその御方が持っていたものが無くなってしまった時「私の許にある良きものは何でも、必ずあなた方の役に立てるであろう。
だが求めを慎む者はアッラーがお守り下さる。
豊かになることを求める者はアッラーがそうして下さる。
辛抱する者はアッラーが忍耐力をお与え下さる。
忍耐より良くて尊いものを与えられる者があろうか」と申された。

このハディースは同一の伝承者経路を経て、**ズフリー**によって伝えられた。

充足と満足に関して

アムル・ビン・アースは伝えている

アッラーのみ使いは「イスラームに帰依した者、生活可能限度の糧を与えられている者、そしてアッラーがお与えになったもので満足している者は成功した者である」と申された。
アッラーのみ使いは「おおアッラー、生活を支えられる程の糧をムハンマドの一族にお与え下さい」と祈られた。

厚かましく求める者への給付について

ウマル・ビン・ハッターブは伝えている

アッラーのみ使いはある物をお配りになった。

私は「アッラーのみ使いよ「アッラーに誓って（あなたがお与えになった）これらの者以上に、それを受ける権利を有する者達があります」と言った。

み使いは「まことに、彼等（与えられた者達）は私に厚かましく求めるかあるいは私をけちだと非難するか何れかの者達である。

だが私は吝嗇家ではない」と申された。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

私はアッラーのみ使いと一緒に歩いていた。

その御方は厚い縁のついたナジュラーン製の外衣を召しておられた。

その外衣をベドウィンの男が近づき強く引いた。

私がみ使いの首を見ると外衣の厚い縁で跡が出来ていた。

その男は「ムハンマドよ、あんたの所にあるアッラーの富を私にも分けるよう命じてくれ」と言った。

アッラーのみ使いは彼の方を向かれ、お笑いになって彼に与えるようお命じになった（注）。

（注）預言者の度量の大きさを示したハディースで、このような預言者の在り方が、多くの貧しい心の人達の気持を変えたという

このハディースはアナス・ビン・マーリクを根拠とし、他の伝承者経路でも伝えられている。

イクリマ・ビン・アンマールによって伝えられたハディースには「彼（遊牧民の男）はその御方を自分の方に強く引いた。
預言者は彼の胸の方に引かれた」というのがある。

ハンマームのハディースには「彼はその御方を強く引いた。
そのためその外衣は破れた。
そしてその外衣の縁がアッラーのみ使いの首に残った」というのがある。

ミスワル・ビン・マフラマは伝えている

アッラーのみ使いはカバーウ（長い袖の付いた外衣）をお配りになった。

しかし（私の父）マフラマには何も下さらなかった。

父は「息子よ、アッラーのみ使いの所に一緒に来なさい」と言った。

私は父について行った。
父は私に「中に入ってみ使いをお呼びしてくれ」と言った。
私はその御方をお連れした。
み使いは分配したものと同じカバーウを着て出て来られた。
そして「私はあなたのためにこれをとっておいた」と申された。
父はそれをじっと見つめ、満足の気持を表した。

ミスワル・ビン・マフラマは伝えている

カバーウが預言者の所に献上された。
私の父マフラマは私に「一緒にみ使いの所に来なさい。
み使いはわれわれにも下さるかも知れないから」と言った。
（このようなわけで）私の父は（み使いの家の）門の所に立って声を掛けた。
するとアッラーのみ使いは父の声をお知りになり、カバーウをもって出て来られた。
そしてその御方はその外衣の素晴らしさを父に示し「私はこれを君のためにとっておいたのだ。
これを君のためにとっておいたのだ」と申された。

信仰の弱さを懸念する者への給付

サアドは伝えている

私が人々と座っていた時、アッラーのみ使いはラハト（皮製の腰巻）をお配りになった。
だがその御方はある一人の男にはそれをお与えにはならなかった。
その人は私が最も尊敬している人物であった。
私は立ってアッラーのみ使いの所に行き礼儀正しく小声で「み使いよ、あなたは某に対して何かあるのでしょうか。
アッラーに誓い、私は彼が立派な信者であると承知しております」と申し上げげた。
この時み使いは「（彼は）あるいはムスリム（注）かも知れぬ」と申された。
私はしばらくの間沈黙した。
だが私は彼に対して好感を抱いていたので彼に対する弁護の気持を抑え難く再び「アッラーのみ使いよ、あなたは某に何かあるのでしょうか。
アッラーに誓い、私は彼が立派な信者であると承知しております」と言った。
み使いは「（彼は）あるいはムスリムかも知れぬ」と申された。
一瞬、重苦しい沈黙の空気が流れた。
しかし私の彼に対する弁護の気持がつのり更に「アッラーのみ使いよ、あなたは某に何かあるのでしょうか。
アッラーに誓い、私は彼が立派な信者であると承知しております」と申し上げげた。
み使いは「（彼は）あるいはムスリムかも知れぬ」と申され、続けて「私は彼にはしばしば与えている。
しかるに私には彼以上に私の愛を向けねばならない者があるのだ。
それは、その者の信仰が未だ弱いために地獄に落ちるのを心配するからである」と申された。
フルワーニーのハディースは（前回の三度の繰り返しの）言葉が二度になっている。

（注）ムウミンはまことの信者をいう。
み使いが「（彼は）ムスリムかも知れぬ」といったのはその男に村し信者としての内面的疑念をはさんでいる

このハディースはズフリーを根拠とし、同一の伝承者経路で伝えられている。

このようなハデイースで、他の伝承者経路を経てムハンマド・ビン・サアドを根拠として伝えられたものには次のようを言葉がある。
「アッラーのみ使いは私の首と肩の間を手でお打ちになり『サアドよ君は私と口論するのか。私は既にその者には与えている』と申された」

心が真理に傾いて来た人々への給付と篤信家の忍耐について

アナス・ビン・マーリクは伝えている

フナイン（注）の戦に、アッラーがハワージン族の富を戦利品としてアッラーのみ使いにお授けになった。

その時み使いはクライシュ族の一部の人達に百頭のらくだをお与えになった。

するとアンサールの中から「おおアッラー、われ等の剣から彼等（クライシュの人々）の血がしたたり落ちているというのに、われ等をさて置いて彼等に与える（ようなことをする）アッラーのみ使いにお許しあれ」という者があった。

アナス・ビン・マーリクは言った。

そのことがアッラーのみ使いのお耳に達した。

するとみ使いはアンサールに使者を送り、彼等を革のテントの下に集めた。

彼等が集合するとアッラーのみ使いは彼等の所に来て「あなた方が話していることは何ということか」と言われた。

するとアンサールの識者達が「アッラーのみ使いよ、賢明な者達は何も申しませんが若い者達が『おおアッラー、クライシュ族の者に与え、われ等の剣から未だ彼等の血がしたたり落ちているというのに、われわれのことを放置するアッラーのみ使いにお許しあれ』と申しました」と言った。

み使いは「私は確かについ最近まで背信者であった者達に与えた。

それは彼等のイスラームへの信仰を確固たるものにさせたいためである。

あなた方は彼等が財貨を持って行き、あなた方はアッラーのみ使いと共にあなた方の住いに戻ることに満足しないのですか。

アッラーに誓い、あなた方が持って帰るものは、彼等がもって帰るものよりも良いのです」と申された。

彼等は「み使いよ、その通りです。

われわれは納得しました」と言った。

み使いはなお「あなた方は近い将来、必ず価値あるものを取得するであろう。

故にあなた方がアッラーとそのみ使いに会うまで耐えよ。

私は楽園の清流のほとりに居るであろう」と申されると彼等は「われわれは耐えます」と言った。

（注）フナインはマッカとターイフの間の涸谷。ヒジュラ暦 8 年、預言者のマッカ無血解放直後、イスラームの成功に驚いたアウタース、ハワージン、ガタファーン諸部族がターイフの近くで兵を起こし、四千の兵がマッカに攻め寄せようとした。

これに対しマッカのムスリム軍は、マディーナからのアンサール（マディーナ在来の住民）、ムハージル（マディーナへ逃れた住民）、マッカ解放後イスラームに入信したマッカ住民

等々、この戦に出兵希望者数知れず、ムスリム軍は一万人以上となった。
両軍はマッカ東方 28 キロメートル、ターイフ（標高 1630 メートル）に至る山峡フナインで対峙した。この戦についてクルアーン第 9 章 25 節に記述がある

アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーがハワージン族の富を（戦利品として）アッラーのみ使いにお授けになった。
残余のハディースは前述のものとほぼ同じである。
ただ（次のような点に）相違がある。
アナスは「われわれはそれに耐えられなかった」と伝えた。
そして「年の若い者達は」（というようにも）伝えた。

このハディースはアナス・ビン・マーリクを根拠とし、他の伝承者経路でも伝えられている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーのみ使いはアンサールを集め「あなた方の中に他の土地から来た人はいるか」と言われた。
人々は「いいえ、われわれの姉妹の息子一人以外には」と言った。
アッラーのみ使いは「あなた方の姉妹の息子はあなた方の仲間である」と言われた。
そして「クライシュ族はジャーヒリーヤから抜け出て日が浅く、災難からも解放されたばかりである。
それ故私は彼等を援助して彼等の（イスラームへの信仰が）確実なものとなるよう望んでいるのだ。
あなた方は彼等が財貨をもって帰り、あなた方はアッラーのみ使いと一緒にあなた方の家に帰ることでは満足しないのであろうか。
もし彼等が（歩きやすい）谷を進み、あなた方アンサールが（困難な）狭い道を進むなら、私はアンサールの進む狭い道を進むであろう」といわれた。
マッカか征服「された時、み使いは戦利品をクライシュ族の人々に分配した。
するとアンサールは「これは全く不思議なことだ。
われわれの剣は未だ彼等の血がしたたっているのに、われ等の戦利品が彼等に返還されるとは」と言った。
このことがアッラーのみ使いのお耳に達すると、その御方は彼等を集め「あなた方が話していることは何ということか」と言われた。
人々は「あなたがお聞きになった通りです。
彼等は嘘をつく者達ではありません」と言った。
この時み使いは「あなた方は彼等が財貨をもって家に帰り、あなた方はアッラーのみ使いとあなた方の家に帰ることで満足しないのですか。

もし彼等が谷を、あるいは狭い道を進み、アンサールもまた谷または狭い道を進むなら、私はアンサールの進む谷を、あるいは狭い道を進むであろう」と言われた。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

フナインの戦の時、ハワージン族、ガタファーン族その他の者は彼等の子供達や家畜を伴って戦にのぞんだ。
その日預言者方には一万の兵士と（マッカ征服の際、イスラームに入信した）自由民がいた。
彼等は（一度は）逃亡してしまった。
そのためみ使いお一人になってしまわれた。
その日、その御方は二度連続して呼びかけられた。
先ず最初に右の方に向って「おおアンサールよ」と呼び掛けられると
彼等は「アッラーのみ使いよ、ここにおります。御安心下さい。われわれはあなたと一緒です」と言った。
次にみ使いは左の方に向って「おおアンサールよ」と呼びかけられた。
人々は「ここにおります。アッラーのみ使いよ、御安心下さい。われわれはあなたと一緒です」と言った。
その御方は（その時）白いらばに乗っておられた。
（勝利を収めた後）そのらばからお降りになって「私はアッラーの下僕、アッラーのみ使いである。多神教徒達は降伏した」といわれた。
み使いは多大の戦利品を収められ、これをムハージルや解放された人々にお分けになった。
しかしアンサールにはそれをお与えにならなかった。
アンサールは「（戦局が）厳しい時はわれわれが頼られ、戦利品はわれわれ以外の者に与えられる（とはどういうことか）」と言った。
それがみ使いのお耳に達するとその御方は彼等をテントに集められ、「アンサールよ、あなた方が話していることは何ということか」と申された。
彼等は沈黙した。み使いは「アンサールよ、あなた方は彼の人々がこの世の財貨を持って行き、あなた方はムハンマドをあなた方のものとして連れて帰ることに満足しないのですか」と言われた。
すると彼等は「み使いよ、われわれは納得致しました」と言った。
なおみ使いは「もし彼等が渓谷を進みアンサールが険しい山峡を進むなら、私はアンサールの進む険しい山峡を進むであろう」と言われた。
ヒシャームは「私は『アブー・ハムザよ、君はそこに居合わせましたか』と言った。
すると彼は「私がそこに居ないはずはないであろう」と言った。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

マッカが征服され、次にわれわれはフナインに侵攻した。
その時多神教徒達は私が見た最も整然とした隊伍をなして戦に挑んで来た。
最初に騎士が、次は徒の戦士が、その後に女達が列をなしていた。
それから羊・そして他の家畜が列を作っていた。
わが方も大勢の戦士がおり、その数は六千人にも上っていた。
われわれの（右側の）騎士達はハーリド・ビン・ワリードに統率されていた。
わが騎士達は背後に引き下った。
その騎士達が（危険に）さらされるのを見てベドウィン達やわれわれが知っている人々の中から逃亡する者が出て来た。
アッラーのみ使いは「おお移住者達よ、おお移住者達よ」と呼び掛けられた。
それから「おおアンサールよ、おおアンサールよ」と言われた。
アナスは「このハディースはわれわれの長老達によって語られたものだ」と言った。
われわれは「アッラーのみ使いよ、われわれはここにおります」と言った。
彼（アナス）は「アッラーに誓い、われわれが敵の所に到着した時は、既にアッラーが彼等を降伏せしめた後であった。
われわれは富を得、ターイフに向って進軍した。
そこでは四十夜彼等を包囲した。その後マッカに帰りそこにテントを張った。
アッラーのみ使いは 100 頭のらくだをその男にお与えになった」と言った。
残余のハディースは（前述のものと）同一である。

ラーフィウ・ビン・ハディージュは伝えている

アッラーのみ使いはアブー・スフヤーン・ビン・ハルブ、サフワーン・ビン・ウマイヤ、ウヤイナ・ビン・ヒスン、そしてアクラウ・ビン・ハービス等それぞれに 100 頭のらくだをお与えになった。
だがアッバース・ビン・ミルダースにはそれより少ない数のものが与えられたに過ぎなかった。
それでアッバース・ビン・ミルダースは（次のように）うたった。
われとわが愛馬が収めし戦利の品を
君、ウヤイナとアクラウに分け与う
されど二人の存在はわが父ミルダース
に遠く及ばず
われとても彼等に劣れる者ならず
卑しめられし今の地位高めることぞ
いと難し

彼（伝承者）は「アッラーのみ使いはこれを聞かれ、彼に 100 頭のらくだをお与えになった」と言った。

このハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。
その中に「預言者はフナインの戦利品を配られ、アブー・スフヤーン・ビン・ハルブに 100 顔のらくだをお与えになった」という言葉がある。
なお「アルカマ・ビン・ウラーサに 100 頭をお与えになった」という言葉も付加されている。

このハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられているが、それにはアルカマ・ビン・ウラーサもサフワーン・ビン・ウマイヤもまた前述の詩さえも述べられてはいない。

アブドッラー・ビン・ザイドは伝えている

アッラーのみ使いがフナインを征服された時、その御方は戦利品をお分けになった。
み使いはそれを心が（真理に）傾いて来た者達にお与えになった。
（アンサールにはそれの分配は無かった）
その時み使いは、アンサールも他の人々が得たものと同じものを望んでいるということを耳にされた。
するとみ使いはお立ちになり彼等に次のように説教された。
み使いは先ずアッラーを讃美され賞揚され「アンサールよ、私はあなた方が迷っているとは知らなかった。
アッラーは私を通してあなた方をお導きになったのだ。
貧しかった時、アッラーは私を通してあなた方を富ませて下さった。
あなた方が互いに反目し合っていた時、アッラーは私を通してあなた方（の心）を一つにして下さった」と申された。
するとアンサールは「アッラーとそのみ使いは最も慈悲深い御方々です」と言った。
み使いは「もしあなた方が望んだなら、それはこれこれであり、こうこうのものであったと言うがよい」と申された。
（そしてこれに関連して）その御方は色々の事柄を一つ一つお説きになった。
アムルはそれらを記憶していないと言った。
なおアッラーのみ使いは「あなた方は彼等が羊やらくだを得て行き、あなた方はアッラーのみ使いを伴ってあなた方の家に帰ることに満足しないのですか。
アンサールは肌に着ける衣（私の最も近くにいる人々）であり（その他の）人々は外側に着ける衣である。
そしてたとえヒジュラ（み使いのマッカからマディーナへの遷行）がなかったとしても私はアンサールの一人であったであろう。
それでもしも人々が谷や険しい道を歩むなら、私はアンサールが選んだ谷や険しい道を

歩むであろう。
まことに、あなた方は近い将来、私がアッラーに召された後に、価値あるものを取得するであろう。
楽園の清流のほとりで私に会うまで耐えるがよい」と申された。

アブドッラーは伝えている
フナインの戦の時、アッラーのみ使いは戦利品の分配を受ける人々をお選びになり、アクラウ・ビン・ハービスに100頭のらくだを、ウヤイナにもそれと同等のものをお与えになった。
この他、遊牧民の長老達の幾人かにもお与えになった。
その日、その御方はそれらの人々を特にお選びになって分け与えられた。
この時ある男が「アッラーに誓って、これは不公平な分配である。アッラーはそのようなことを望まれはしない」と言った。
私（伝承者）は「アッラーに誓い、私はその言葉をみ使いのお耳に入れるであろう」と言った。
私はみ使いの所に行きそれを告げた。
するとその御方のお顔の色は血のように赤く変った。
そして「もしアッラーとそのみ使いが公正でなかったとすれば、誰が公正だというのか」と言われ、
なお、モーゼにアッラーの御慈悲あれ（と祈って）その御方は、モーゼは「これ以上に苦しい思いをさせられたがよく耐えられた」と申された。
私（伝承者）は「今後、絶対に（喜ばしくない）話はお耳には入れまい」と言った。

アブドッラーは伝えている
アッラーのみ使いは戦利品を分配された。
その時ある男が「それはアッラーがお望みにならない分配である」と言った。
私は預言者の所に行き、小声でそのことをお耳に入れた。
その御方は大変お怒りになりお顔は赤くなった。
私はあのようなことをお耳に入れなければよかったと思った程であった。
み使いは「モーゼはこれ以上に苦しい思いをさせられたがよく耐えられた」と申された。

ハワーリジュ（離脱者）と彼等の性質について

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

フナインからの帰途ジウラーナ（注）で、一人の男がアッラーのみ使いの所に来た。
その時ビラールの衣服にはいくらかの銀が入っていた。
み使いはその中から若干の量を取り人々にお与えになった。
すると例の男が「ムハンマドよ、公正にせよ」と言った。
み使いは「汝に災いあれ、私が公正でなくて誰が公正だと言うのか。
もし私が公正でなかったら（そのような者に従っている）汝は既にこの上なく不幸であったし多大の損失も招いた」と言われた。
この時ウマル・ビン・ハッターブが「み使いよ、私がこの偽善者を葬り去ることをお許し下さい」と言った。
み使いは「アッラーよ、御救済を給りますように（と祈り）、もしそのようにすれば人々は私が私の教友達を殺すと言うであろう。
この男とその仲間はクルアーンを読誦するであろうがそれは彼等の喉を越えてはいない。
こうして彼等は矢が獲物を突き抜くように（早く）クルアーン（の教訓）から抜け出てその教えを侵すのだ」と申された。

（注）ヨルダンの東部地区

このハディースはジャービル・ビン・アブドッラーを根拠として、他の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アリーはイエメンに居て、そこからアッラーのみ使いに金の鉱石を送った。
み使いはそれを四人のグループ、すなわちアクラウ・ビン・ハービス・ハンザリー、ウヤイナ・ビン・バドル・ファザーリー、アルカマ・ビン・ウラーサ・アーミリーとキラーブ族の者、そしてザイド・ハイル・ターイーとナブハーン族の者の四グループにお分けになった。
するとクライシュ族の人々は怒り「み使いはナジドの指導者達に与えてわれわれのことは見棄てるのか」と言った。
み使いは「私があのようにしたのは、彼等の心をイスラームにおいて不動のものとさせるためである」と言われた。
その時、ひげ厚く頬は高く目はくぼみ額は張り出た丸坊主の男が来て「ムハンマドよ、アッラーを恐れよ」と言った。
み使いは「もし私がアッラーに従順でなかったなら、誰がその御方に従順であるのか。
私は地上の人々の中で最も信頼に値する者として使わされたのではないか。

それでも汝等は私を信頼しないのか」と申された。
するとその男は後退した。
その時人々の間に、その男を殺す許可を求めた者があった。
（それはハーリド・ビン・ワリードであると考えられている）
アッラーのみ使いは「彼等は生来クルアーンを読誦しても、それが彼等の喉を越えることのない者達なのだ。
それでイスラームを信仰する人々を殺害し、偶像崇拝者達は容赦し、矢が獲物を射貫くように早くイスラームを抜け出て行く。
もし私が彼等を認識したら必ずアードの民のように滅亡させようぞ」と申された。

アブー・サイード・フドリーは伝えている
アリー・ビン・アブー・ターリブはイエメンからアッラーのみ使いに金鉱をなめし皮の袋に入れて送った。
み使いはそれをウヤイナ・ビン・ヒスヌ、アクラウ・ビン・ハービス、ザイド・ハイル、アルカマ・ビン・ウラーサまたはアーミル・ビン・トゥファイルの四グループにお分けになった。
この時教友の一人が「それの分配を受けることについては、彼等よりわれわれにより正当な権利があった」と言った。
それが預言者のお耳に達するとその御方は「天におわします御方は私を信頼出来る者として、朝な夕な天より啓示を下され給うのに、あなた方は私を信じないのか」と申された。
この時、目はくぼみ頬は高く額の張り出たひげの濃い丸坊主の男が、腰に巻いた布の裾をまくり上げた姿で立ち上がり「アッラーのみ使いよ、アッラーを恐れよ」と言った。
み使いは「汝に災いあれ、私こそはアッラーにこの大地で最も畏敬の念を抱く者ではないのか」と申された。
するとその男は背を向けて（下った）。
その時ハーリド・ビン・ワリードが「み使いよ、私が彼の首をはねてはなりませんか」と言った。
み使いは「ならぬ。彼は礼拝を捧げているであろうから」と言われた。
ハーリドは「心にもないことをいい。かつ見せ掛けの礼拝をする輩の何と多いことか」と言った。
み使いは「私は人々の心の中を確めたり、また彼の腹の中を探るようなことは命じられてはいない」と言われ後ずさりする男を見据えた。
そして「彼等は生来、アッラーの御書を読誦してもそれが彼等の喉を越えることのない（表面的な読み方をする）人々なのだ。
それで彼等は矢が獲物を射貫くように早く宗教を出て（その教えを侵す）」と言われた。
彼（伝承者）は「私はみ使いが『もし私が彼等を認識したら必ずサムードの民のように滅亡させようぞ』と言われたと思う」と言った。

このハディースは他の伝承者経路でも伝えられている。
（その中で伝承者達は）「額が突き出ている」とは言っているが、「時に巻いた布をまくり上げて」とは言っていない。
（そしてなお次のような相違もある）
「その時ウマル・ビン・ハッターブが立ってみ使いの所に行き「アッラーのみ使いよ、私が彼の首をはねてはなりませんか」と言った。
み使いは「ならぬ」と申された。
そしてその男が後退すると、アッラーの剣と称せられたハーリドがみ使いの所に行き「み使いよ、私が彼の首をはねてはなりませんか」と言った。
み使いは「ならぬ」と言われ「彼はアッラーの御書を流暢に読誦する仲間の者だ。（しかし彼等の）解釈は誤っている」と申された。
ウマーラは「私はみ使いが『もし私が彼等を認識したら必ずサムードの民のように滅亡させるであろう』と言われたと思う」と言った。

このハディースは他の伝承者経路でも伝えられている。
それには「もし私が彼等を認識したら必ずサムードの民のように滅亡させるであろう」という言葉は述べられてはいない。

アブー・サラマとアターウ・ビン・ヤサールはアブー・サイード・フドリーの所に来て“ハルーリーヤ（注 1）”について「あなたはアッラーのみ使いがそれについてお述べになるのを聞きましたか」と尋ねた。
彼は「私はハルーリーヤとは誰のことか分りませんが、アッラーのみ使いは『この国家の中に（この国家からとは言われなかった）離脱して行く人々がある。
彼等は彼等の礼拝に比べてあなた方の礼拝を軽度し、クルアーンを読誦しても彼等の喉（または喉頭を越えず）、宗教からは獲物を射貫く矢のように早く抜け出て行く。
そしてその射手は放った矢の矢じりの先からそれを固定する腱までじっと見つめる。
そして矢はずに少しでも血痕がついていないかどうか念を入れて調べて見る（注 2）』と申されるのを聞いた」と言った。

（注 1）これはハワーリジュのことである。
このようにいわれているのはアリーの本軍から離脱した人々が、ハルーラーウというクーファに近い場所に集って戦いのための協定を結んだためである

（注 2）アラブはこれを「はずれ矢」と称し、何の益もないことを意味する時にいう

アブー・サイード・フドリーは伝えている

われわれがアッラーのみ使いの許に居た時、その御方は戦利品を分配されていた。

そこにタミーム族の男ズール・ホワイスィラが来てアッラーのみ使いに「公正にせよ」と言った。

み使いは「汝に災いあれ、もし私が公正でなかったら誰が公正なのか。

私が公正でなかったなら、お前は既に失敗したであろうし損失も負ったであろう」と申された。

この時ウマル・ビン・ハッターブが「アッラーのみ使いよ、私がその男の首をはねることをお許し下さいますか」と言った。

み使いは「放置せよ。彼には共に礼拝を捧げる仲間がある。

だがあなた方の中には彼が仲間と捧げる礼拝も断食もくだらぬものと考えている者もあろう。

まこと、彼等のクルアーンの読誦はといえば彼等の鎖骨を越えることはなく、イスラームを放棄するのも矢が獲物を貫くように早いのだ。

その矢じりはよく見ても何の痕跡もない。

それを固定する腱にも、それから矢羽に至るまでの部分にも、そして更に羽の部分にさえ何一つ付いていない

（矢があまりにも早く貫通したために）腹部にあたったものも血も付着しないのである。

彼等の中には皮膚が黒く上腕が婦人の胸、あるいはそれに、一片の肉のようにゆれ動く部分のある男がいることで分るが、人々の間で意見の衝突があった時は造反分離して（一層）明瞭となろう」と申された。

アブー・サイードは「私はアッラーのみ使いからそれをお聞きしたことを証言する」と言い、また「アリー・ビン・アブー・ターリブは彼等と闘ったが、私は彼と一緒であった。

彼は（み使いがお述べになった）その男を探すよう命じた。

その男は見つけられ連れて来られた。

私が彼をよく見ると彼はアッラーのみ使いがお述べになっておられた男にそっくりであった」と言った。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

預言者はその御方の共同体の中にあって、人々の意見の相違に乗じて造反する人々について言及された。

そして彼等の明瞭な印は頭髪が剃られていることであると述べられた後「彼等は最悪の生物である（または最悪な生物の一つである）。

彼等を殺すのは（やがて存在する）二つのグループの中でより真理に近いグループである」と申され、彼等がどのような人々かの例をお上げになった。

また（次のような）言葉も述べられた。

「その男は獲物に矢を放ち（または「的に」と言われた）矢じりを見てもいささかの血痕も見出せない。
次に彼は矢じりと矢羽の間を見るが（やはり）何も見出せない。
そして失筈を見ても（やはり）何も見出せない」と言われた。
アブー・サイードは「イラクの人々よ、あなた方こそ彼等を殺した方々です」と言った。

アブー・サイード・フドリーは伝えている
アッラーのみ使いは「ムスリム達に意見の相違があった時、一つのグループが離れて行くであろう。
そして二つに分れたグループの中で真理により近いグループが分離した者達を殺すであろう」と言われた。

アブー・サイード・フドリーは伝えている
アッラーのみ使いは「私の共同体の中に二つのグループが存在するであろう。
そしてその二グループの間から離脱者のグループが出現する。
なお、その二つの中の真理により近い党派が彼等へ離脱者）を殺すであろう」と申された。

アブー・サイード・フドリーは伝えている
アッラーのみ使いは「人々が意見を異にする時、一つのグループが離脱するであろう。そして二つのグループの中でより真理に近い党派が彼等を殺すであろう」といわれた。

アブー・サイード・フドリーは預言者が（次のように）お述べになったと伝えている
一つのグループ（ハワーリジュ）が対立する党派（アリーとムアーウィヤの党派を指す）の一つに反対して起るであろう。
その中で真理により近いグループが彼等を殺すであろう。

離脱者達の殺害の勧め

アリーはいった

私があなた方にアッラーのみ使いからの話をする時、その御方が言われなかったことを言ったと偽って語るより、天から落ちて死ぬ方が、私にはましである。

しかし私が、私とあなた方の事柄についての話をする時は（必ずしもそうではない）例えば戦争は相手の裏をかくものだからである。

私はアッラーのみ使いが「やがて、年はも行かぬ者で考えも浅い者達が現れ、彼等の言葉がこの世で最も良いものであるかのように言う。

（ところが）彼等はクルアーンを読誦してもそれが彼等の喉を越えることはない。

従って彼等は矢が獲物を突き貫けるように早くこの宗教を放棄してしまうのである。

もし諸君が彼等に出合った時は殺すがよい。

彼等を殺した場合は審判の日、アッラーの御許において必ず報酬がある」と申されるのを聞いた。

このようなハディースは他の伝承者経路でも伝えられている。

同様のハディースで、同一の伝承者経路を経、**アアマシュ**によって伝えられたものには「彼等は矢が獲物を突き貫くように早くその宗教を放棄する」という言葉はない

アビーダはアリーからの話として伝えている

彼（アリー）はハワーリジュについて述べた。

そして「彼等の中には手が無い、または手が短い、あるいは肉付きの良い手をした男がいる。もしあなた方が自重するなら、私はあなた方にムハンマドの命令の下に彼等を殺す人々にアッラーが約束されたことを話そう」といった。

私（伝承者）は彼に「あなたはそれをアッラーのみ使いムハンマドより聞いたのですか」と尋ねた。

彼は「その通り、カーバの主に誓って。その通り、カーバの主に誓って。その通り、カーバの主に誓って」と答えた。

アビーダは伝えている

私は彼（アリー）から聞いたもの以外、あなた方には話さない。

それから彼はアリーについて（前記のような）ハディースを語った。

ザイド・ビン・ワハブ・ジュハニーは伝えている

私はアリーの配下にあって、後にハワーリジュに組した軍隊の一員であった。

アリーは「人々よ、私はアッラーのみ使いが（次のように）いわれるのを聞いた」と言った。

「私の共同体よりクルアーンを読誦する一団の人々が出現し、あなた方の読誦は彼等の読誦に比して何等の意味もなく、あなた方の礼拝も彼等のそれに比べて無に等しい。

そしてなおあなた方の断食も彼等の断食に比して全く意味がないとする。

クルアーンは彼等のためのものと考えて読誦する。

しかし実は彼等の考えこそ間違っているのである。

彼等の読誦は自分達の鎖骨を越えることはない。

そのようにして彼等は矢が獲物を突き貫けるように早くイスラームから出て行く」

アリーは「もし彼等を撃つ兵士達が、預言者が申された来世での（偉大な報酬を）知るならば、その仕事（彼等を撃つこと）に専心するであろう。

彼等（離脱者達）の明白な印は、彼等の中に二の腕だけでその先は無く、その腕の先端は白い毛が生じた乳首のようになっている男がいることである。

しかるにあなた方はあなた方の子供達や財産を、その者達（の意のままに）放置してムアーウィヤやシリアの人々との対決に出かけて行く。

アッラーに誓い、禁じられた血を流し、人々の家畜を襲うのは実にその者達であることを私は信じて疑わないのである。

故にアッラーの名において（彼等を撃つために）行け」と言った。

サラマ・ビン・クハイルは「ザイド・ビン・ワハブは（戦闘の場となった）橋を越えるまで、私を宿場に止めた」といった。

われわれが敵に出合った時、ハワーリジュのリーダーはアブドッラー・ビン・ワハブ・ラーシビーであった。

彼（アブドッラー）は彼の兵士達に「槍を投げ、剣を抜け、私はハルーラーウの戦で休戦となったようにまた相手があなた方に休戦を求めることを危惧するのだ」と言った。

そこで彼等は退き遠くから槍を投げ剣を抜いて戦を仕掛けた。

人々（アリーの軍）は敵と槍で闘った。

彼等（ハワーリジュ）は折り重なって倒れた。

この日（アリーの軍の中で）殺されたのは二人だけであった。

アリーは「彼等の中から彼（手無し男）を探し出せ」と言った。

人々は探した。しかしその男は見つからなかった。

アリーは自ら立ち上った。

そして、重なり合って倒れている死者の所に行き「最後まで探せ」と命令した。

遂に人々は下敷になって倒れていたその男を見出した。

アリーは「アッラーフ・アクバル（アッラーは至大なり）」を唱え「アッラーは真実をお述べになり、そのみ使いはそれを伝えられた」と言った。

その時アビーダ・サルマーニーが立って彼の所に行き「信者達の指導者よ“アッラー以外いかなる神もない”そのアッラーに誓って、あなたはアッラーのみ使いからその話をお聞きになったのでしょうか」と言った。
彼は「その通り。“アッラー以外にいかなる神もない”そのアッラーに誓って」と言った。
なおアビーダは彼に三度誓うように求めると、彼（アリー）はそれに応じて誓った。

アッラーのみ使いのマウラー、**ウバイドッラー・ビン・アブー・ラーフィウ**は伝えている
ハルーリーヤ（ハワーリジュ）の離脱が起こった時、彼はアリー・ビン・アブー・ターリブと一緒であった。
離脱した人々は「裁決はアッラーにだけ属する」と言った。
アリーは「その言葉は真実である。しかしそれは悪用されているのだ。
まことに、アッラーのみ使いはある人々についてお述べになったが、私は彼等の性質を本当に知り得た。
彼等は口では真理を唱えるが、それは彼等のこれ（後は彼の喉を指し示した）を越えはしない。
アッラーが創造されたものの中で最も嫌悪すべきは彼等（ハワーリジュ）の中の黒い男である。
彼の片方の手は羊の乳房か胸の乳首のようである」と言った。
アリー・ビン・アブー・ターリブが彼等を討伐した時、彼は「（その男の亡きながらを）探し出せ」と言った。
人々は探した。しかし全く見つからなかった。
この時彼は「戻って探し出せ。アッラーに誓い、私は嘘はつかないし嘘をつかれたこともない」彼はこの言葉を二度または三度繰り返した。
その後人々は戦場からその男の無惨な亡きがらを運んで来て彼の前に置いた。
ウバイドッラーは「私はこの出来事があって、アリーが彼等について話した時、その場所に居合せた」と言った。
イブン・フナインは「私はその黒い男を見た」と言っていたと、一人の男が私に話した。

ハワーリジュは生きとし生けるものの中で最悪である

アブー・ザッルは伝えている

アッラーのみ使いは「私の亡き後、私の共同体から（または私の亡き後程なくして私の共同体から）ある一団の人々が起こるであろう。

彼等はクルアーンを読誦してもそれが彼等の喉を越えることはなく、宗教からは矢が獲物を貫くように早く抜け出て行き、再びそれに戻ることはないであろう。

彼等は生きとし生けるものの中で最悪の創造物である」と申された。

イブン・サーミト（伝承者の一人）は「私はハカム・ギファーリーの兄弟、ラーフィウ・ビン・アムル・ギファーリーに会った。

そして私がアブー・ザッルから聞いたこれこれの話はどのようなものでしょうかといって、彼にその話をした。

すると彼は『私もアッラーのみ使いからそれを聞きました』と言った。

ユサイル・ビン・アムルは伝えている

私はサフル・ビン・フナイフに「あなたは預言者がハワーリジュのことをお述べになったのを聞きましたか」と尋ねた。

すると「私はその御方が『ある人々はクルアーンを舌先で読誦するだけで、それは彼等の鎖骨を越えはしない。

それで彼等は矢が獲物を突き貫けるように早く宗教を通り抜けて行く』と言われるのを聞いた」といって（彼の手で東方を指し示した（注））

（注）ハワーリジュの起ったイラクを指し示した

このハディースは同一の伝承者経路を経て、**スライマーン**・シャイバーニーによって伝えられている。

それには「多くの人々がそれから抜け出る」という言葉がある。

サフル・ビン・フナインは伝えている

アッラーのみ使いは「東の方で、頭を丸めた人々が真理から遠ざかって行くであろう」と申された。

アッラーのみ使いとその一族、すなわちハーシム家とムッタリブ家へのザカートは禁止されている

アブー・フライラは伝えている

ハサン・ビン・アリーはサダカとしてのなつめ椰子の実の中から一個取った。
そしてそれを口に入れた。
するとアッラーのみ使いは「取ってはならぬ、取ってはならぬ。
それを捨てよ。君はわれわれがサダカは食べぬということを知らぬのか」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路を経て伝えられた。
それには「サダカはわれわれには許されぬ」というみ使いの言葉がある。

同様のハディースが別の伝承者経路で伝えられその中では「われわれはサダカは食さぬ」というみ使いの言葉を伝えている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「私が家に帰ると私のベッドの上になつめ椰子の実一個を見つけた。
私はそれを食べようとして手に取ったが、それがサダカかも知れぬと心配して放棄した」と言われた。

ハンマーム・ビン・ムナッビフは「これはアブー・フライラがアッラーのみ使いに関してわれわれに話したものである」と言って(次のように)述べた。

アッラーのみ使いは「アッラーに誓い、私が私の家族(または私の家)へ帰ると、私のベッドの上になつめ椰子の実が一個あった。
私はそれを食べようとして手に取った。
だがそれがサダカ(またはサダカの中の一つ)であることを懸念してそれを放棄した」と言われた。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

預言者はなつめ椰子の実を一個見つけられた。
そして「もしそれがサダカの中の一個でないならば食べたのに」と申された。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは道でなつめ椰子の実を一個見つけられた。
そして「もしそれがサダカの一部でないのなら食べたのに」と言われた。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

預言者はなつめ椰子の実を一個見つけられた。

そして「もしそれがサダカでないのなら食べたのに」と言われた。

アッラーのみ使いの家族はサダカの使用は許されない

アブドル・ムッタリブ・ビン・ラビーア・ビン・ハーリスは伝えている

ラビーア・ビン・ハーリスとアッバース・ビン・アブドル・ムッタリブが会った。
その二人は「アッラーに誓い、もしわれわれがこの二人の若者（私とファドル・ビン・アッバースのこと）をみ使いの所に遣わしたら、彼等はその御方に御願いして、サダカ（ザカートのこと）の徴収係に任命されたかも知れない。
そうすれば彼等は人々がやるようにそれを集めてお渡しし、人々と同じように報酬を得たであろうに」と話した。
二人がこのような話をしていた所へアリー・ビン・アブー・ターリブが来て二人の前に立った。
二人は後にその話しをした。
するとアリーは「それはしてはならない。アッラーに誓い、その御方はあなた方の願いはお受けにならぬ」と言った。
ラビーア・ビン・ハーリスは彼の方に向き直り「アッラーに誓って、君がそのようにいうのは君のわれわれに対する嫉妬の気持に外ならない。
君はみ使いの娘婿になったがわれわれは君に対する嫉妬はない」と言った。
するとアリーは「二人を送りたまえ」と言って立ち去り、（家に帰って）ベッドに横たわった。
アッラーのみ使いが昼の礼拝を行われた時、われわれは先にお部屋の近くに行って待っていると、その御方が御出でになりやさしくわれわれの耳をつかまれて「君達の胸にあることを打開けよ」と言われて中にお入りになった。
われわれもその後に続いた。
その日、その御方はザイナブ・ビント・ジャハシの家に行かれた。
われわれ二人はちゅうちょしお互いに話の切り出しを他に譲っていたが、結局どちらかが「アッラーのみ使いよ、あなたは人々の中で最も敬虔な御方であり、また人々のことを最も心に懸けて下さる御方です。
時にわれわれも結婚適齢期に達しました。
それで、あなたがわれわれをサダカの（徴収者として）任命されるよう御願いに参りました。
われわれは人が行うようにそれを集めてあなたに収め、人々がそれに対する報酬を得るようにわれわれもそれを得るでありましょう」と言った。
み使いは長い間沈黙しておられたのでわれわれが更に話そうとした時、ザイナブがカーテンの後でこれ以上話さないようわれわれに合図をした。
その時み使いは「サダカ（を受けるの）はムハンマド一族にとっては適切ではない。
その施しを受けさせるのは、それによって人々を清めて罪滅しをさせるためである。
私にマハミヤ（彼はサダカの徴収者の一人）とナウファル・ビン・ハーリス・ビン・アブドル・ムッタリブを呼べ」といわれた。

二人が来るとみ使いはマハミヤに「お前の娘とこの若者（ファドル・ビン・アッバース）を結婚させよ」と申された。
彼は娘をその若者に嫁がせた。
その御方はナウファル・ビン・ハーリスに「お前の娘とこの若者（私）を結婚させよ」と言われた。
彼は彼の娘を私と結婚させた。
更にその御方はマハミヤに「この五分の一（注 1）の中より彼等二人に代ってこれこれのマハルを払うがよい」と申された（注 2）。
ズフリーは「その御方は（マハルの額は）お決めにならなかった」と言った。

（注 1）サダカの徴収者達は徴集した物の五分の一の中から報酬を得ていた

（注 2）預言者はその五分の一の中に正当な分けまえをもっていた。

その中から両名のマハルを支払うということである
ラビーア・ビン・ハーリス・ビン・アブドル・ムッタリブとアッバース・ビン・アブドル・ムッタリブはアブドル・ムッタリブ・ビン・ラビーアとファドル・ビン・アッバースに「アッラーのみ使いの所へ行け」と言った。
残余のハディースは同一であるが（次のような付加がある）「アリーは彼の外衣を投げベッドに横たわった。
そして「私はハサンの父親であり人々を指導する立場にもある。
アッラーに誓って、私はあなた方二人が御子息をアッラーのみ使いの所に行かせたことについて、その二人が答を持って来るまでここを離れない」と言った。
そしてまた「これらサダカは貧しい人々のためのものであり、ムハンマド一族のためのものではない」と言った。
また伝承者は「アッラーのみ使いは「私にマハミヤ・ビン・ジャズウを呼べ」と申された。
彼はアサド族の出身で、み使いは彼をサダカの徴収者として任命していた。

サダカを得た者がそれを他に与えた場合、その物からはサダカという性質は消える

預言者の妻**ジュワイリヤ**は伝えている

アッラーのみ使いは彼女の所に来て「何か食べるものはあるか」と言われた。
彼女は「アッラーに誓って、私達の所には私のマウラーにサダカとして与えられた羊の骨以外にはございません」と言った。
み使いは「それを私の所に持って来なさい。
それは既に目的の場所に着いて（われわれにも許されたものとなった）」と言われた。

このハディースは同一の伝承者経路を経て、**ズフリー**によって伝えられた。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

バリーラは彼女にサダカとして与えられた肉を預言者に贈った。
み使いは「それは彼女にはサダカであるが、われわれには贈物である」と言われた。

アーイシャは伝えている

預言者に牛の肉が届けられました。
その時それがバリーラにサダカとして与えられたものであると知らされました。
み使いは「それは彼女にはサダカであるが、われわれには贈物である」と申されました。

アーイシャはいった

私達がバリーラを通して知った（イスラーム法上の）三つの問題がありました。
（これはその中の一つで）人々は彼女にサダカを行っておりましたが彼女は（それを）私達に贈っていたのです。
そこで私は預言者にそのことを話しました。
み使いは「それは彼女にはサダカであってもあなた方にとっては贈物であるから、それを食べよ」と申されました。

このハディースはアーイシャを根拠として他の伝承者経路でも伝えられている。

アーイシャを根拠としてこれと類似のハディースが伝えられている。
それには“み使いは「それは彼女からわれわれへの贈物である」と言われた”という言葉がある。

ウンム・アティーヤは伝えている

アッラーのみ使いは私に羊の肉をサダカとして送って下さった。

私はアーイシャにその中のいくらかを上げました。

み使いがアーイシャの所へ参りました時「あなたの所に（何か食べるものは）あるか」と言われました。

彼女は「何もございません。

でも、あなたがヌサイバ（ウンム・アティーヤの本名）に送られた羊の一部を彼女が送ってくれました」と言った。

み使いは「それは既に目的の場所に着いたのです」と申されました。

預言者は贈物はお受けになり、サダカはお返しになった

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは食物が運ばれて来ると、何時でもそれについてお尋ねになった。
そしてもしそれが贈物であると告げられれば、それはお食べになった。
そしてもしそれがサダカであると告げられれば、それは全くお食べにならなかった。

サダカを持って来た者へのみ使いの祈願

アブドッラー・ビン・アブー・アウファーは伝えている

アッラーのみ使いは人々がサダカを持ってその御方の所に来た時「おおアッラー、彼等に御加護あらんことを」とお祈りになった。
私の父アブー・アウファーがその御方の所にサダカを持って参りました時も「おおアッラー、アブー・アウファーの一族に御加護あらんことを」と祈られた。

前述のハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられ、その中には“その御方は「彼等に御加護あらんことを」と祈られた”とあり（おおアッラー、は記述されていない）

不当な要求がない限りザカートの徴収官を満足させること

ジャリール・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方の所にザカートの徴収官が来た時は、彼が満足してあなた方の所から帰って行くようにさせよ」と申された。

断食の書

ラマダーン月の徳

アブー・フライラは伝えている

　　アッラーのみ使いは「ラマダーン月が来ると天国の扉という扉は開かれる。
　　そしてサタン等はしっかりと鎖でつながれてしまう」と言われた。

アブー・フライラは伝えている

　　アッラーのみ使いは「ラマダーン月になると慈悲の扉という扉は広々と開放され、地獄の扉という扉は固く閉ざされる。
　　そしてサタン等は鎖でつながれる」と言われた。

このハディースは**アブー・フライラ**によって伝えられた。
その中には“アッラーのみ使いは「ラマダーン月に入った時」と申された”という言葉の相違がある。

ラマダーンの断食は新月の確認で始められねばならない。
そしてそれは次の新月の確認で終了する。
もし初めまたは終りが曇天であればその一カ月を 30 日で完結する

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはラマダーン月に関してお述べになった。
そして「あなた方は新月を見るまでは断食をしてはならない。
そして（次のシャッワール月の）新月を見るまで断食を破ってはならない。
（だが天候が悪く）それがはっきりしない時はそれを算定せよ」と言われた。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはラマダーン月に関してお述べになった。
そして両手をお打ちになり「この月はこのように、このように、そしてこのように」
（といわれ三度目に親指を折り曲げられた）
そして「あなた方がそれを見た時は断食をせよ。
またあなた方がそれを見た時は断食を止めよ。
もし（天候が悪くて）それが明らかでなければ、その月を 30 日で算定せよ」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路で伝えられその中に“み使いは「もし曇天であったなら（ラマダーン月を）30 日で算定せよ」と申された”という言葉がある。

アブー・フライラは別の伝承者経路で（次のように）伝えている

アッラーのみ使いはラマダーン月に関してお述べになった。
そして「この月は 29 日であり、このように、このように、そしてこのように」といわれ更に「その月を算定せよ」と申された。
しかし「30 日」とは言われなかった。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「だがこの月は 29 日である。
あなた方はそれ（新月）を見るまで断食をしてはならない。
また（シャッワール月の）それを見るまで断食を破ってはならない。
もし曇天であればそれを算定せよ」と申された。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「その月は 29 日である。
あなた方が新月を見た時は断食をせよ。

またあなた方が再び新月を見た時は断食を止めよ。
もし曇天で（明らかでない時は）その月を算定せよ」と申された。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている
私はアッラーのみ使いが「あなた方がそれ（新月）を見たなら断食をせよ。
そしてまたそれを見た時は断食を止めるがよい。
もし曇天でそれが明らかでなければ、それを算定せよ」と申されるのを聞いた。

イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは「この月は 29 日である。
曇っていなければあなた方はそれを見るまで断食をしてはならない。
またそれを再び見るまでは断食を止めてはならない。
だがもし曇天であればそれを算定せよ」と申された。

イブン・ウマルは伝えている
預言者は「その月はこのように、このように、このように」といわれ、三度目に親指を折り曲げられた。

イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いが「この月は 29 日である」と申されるのを聞いた。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている
預言者は「この月はこのように、このように、このように、それは例えば 10 日、10 日、9 日である」と申された。

イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは「この月はこのように、このように、このように」といわれ、両手の指すべてをお示しになって二度合わせられ、三度目は右または左の親指を折り曲げて合わせられた。

イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは「この月は 29 日である」と言われた。
シュウバは彼の両手を三度合わせ、三度目は親指を折り曲げて見せた。
ウクバ（伝承者の一人）は「私はその御方が『この月は 30 日である』と申され両手の平を三度お合せになったと思う」と言った。

イブン・ウマルは伝えている

預言者は「われわれは書くことも計算も知らない世代の者である。

それでこの月はこのように、このように、そしてこのように」といわれ、三度目には親指を折り曲げられていた。

そしてなお「一月はこのように、このように、そしてこのように」と申された。

つまりそれはちょうど 30 日であることを意味する。

このハディースはアスワド・ビン・カイスを拠り所とし、同一の伝承者経路で伝えられているものもある。
しかしそれには"他の月が 30 日である"とは述べられてはいない。

サアド・ビン・ウバイダは伝えている

イブン・ウマルはある男が「今夜は（一ヵ月の）真ん中の夜だ」というのを聞いた。

彼は「どうして君は今夜が月の中間の夜だと分るのか」と尋ねた。

その男は「私はアッラーのみ使いが

『この月はこのように、このように（彼は十本の指で二度示した）そしてこのように』（三度目は彼の親指を隠し他は全部示した）

と言われるのを聞いたからである」と言った。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方は新月を見た時は断食をせよ。

そして（次の月の）新月を見たら断食を止めよ。

もし曇天で（それが明らかでない場合は）30 日間断食をせよ」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「それ（新月）を見たら断食をせよ。

そしてそれを見たら断食を止めよ。

もし曇天であれば 30 日で（一ヵ月と）せよ」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「それを見たら断食をせよ。

そしてそれを見たら断食を止めよ。

もし曇天であればその月を 30 日として計算せよ」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは新月についてお述べになった。

そして「あなた方がそれを見た時は断食をせよ。

そして（再び）それを見た時は断食を止めよ。

もし曇天であれば（この月を）30 日として計算せよ」と申された。

ラマダーン月に入る前の一日あるいは二日も前から断食を行ってはならない

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方はラマダーン月に先んじて一日あるいは二日も前から断食を行ってはならない。

だが習慣として常々それを行っている者はそれを行うがよい」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路を経て、伝えられている。

この月は 29 日の場合もある

ズフリーは伝えている

預言者は一ヵ月間は妻達の所には行かないと誓われた。

ズフリーはアーイシャがウルワ（伝承者の一人）を通じ、（次のように）言ったと伝えている。

私が数えて 29 日目の夜が過ぎた時、アッラーのみ使いは最初に私の所へ来られました。

それで私は「み使い様、あなたは一ヵ月間私達の所に御出でにならないと誓われましたのに、私が数えて 29 日が過ぎましたら直ぐに御出でになりました」と申しました。

するとその御方は「この月は 29 日である」と申されました。

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは一ヵ月間、妻達から離れておられた。

（彼女達は次のように言った）

その御方は 29 日目が終ると私達の所に来られた。

それで私達は「今日は 29 日が終った所です」と言いました。

その御方は「この月は」と言われ、両手を三度お合わせになりましたが、最後の一度は親指を折り曲げておられました。

アブー・ズバイルはジャービル・ビン・アブドッラーから聞いたとして伝えている

預言者は一ヵ月間妻速から離れておられた。

（彼女達は次のように言った）

その御方は 29 日目が過ぎた朝、私達の所にお見えになりました。

ある人達が「アッラーのみ使いよ、今日は 29 日目が明けた朝です」と言った。

預言者は両手の指全てを用いてそれを三度お合わせになったが、三度目に出された指は九本だけであった。

ウンム・サラマは伝えている

預言者は一ヵ月間妻達の誰の所にも行かないと誓われました。

それで 29 日が過ぎますとその御方は朝（または夜）彼女達の所に来られました。

するとその御方は「み使い様、あなたは一ヵ月間私達の所には来られないと誓われました」と言われました。

するとその御方は「まことに、この月は 29 日である」と申されました。

このようなハディースは別の伝承者経路で伝えられている。

サアド・ビン・アブー・ワッカースは伝えている

アッラーのみ使いは一方の手で他の手をお打ちになった。

そして「この月はこのように、このように、このように」と言われ、三度目は一本の指を隠しておられた。

ムハンマド・ビン・サアドは彼の父（サアド・ビン・アブー・ワッカース）を拠り所として伝えている

預言者は「この月はこのように、このように、そしてこのように、すなわち 10、10 そして 9 である」と申された。

このハディースと同様なものが別の伝承者経路を経て伝えられている。

新月の確認はそれぞれの都市で行われ、ある都市のそれの確認は遠隔の都市に対しては適用されない

クライブは伝えている

ハーリスの娘ウンム・ファドルはシリアに居るムアーウィヤの所に息子（ファドル）を使者として送った。
私（ファドル）はシリアに来て母のために必要なことを済ませた。
私がシリアに居る時ラマダーン月が始った。
私は金曜の夜新月を見た。
そして私がマディーナに帰ったのはその月の終りであった。
アブドッラー・ビン・アッバースは私に（ラマダーンの新月について）尋ねた。
そして「あなたは何時それを見ましたか」と言った。
私は「われわれは金曜の夜それを見ました」といった。
彼は「あなた御自身で見たのですか」と言った。
私は「はい。そして人々もそれを見ました。
それで彼等は断食をしましたし、ムアーウィヤも断食をしました」と言った。
すると彼は「しかしわれわれは土曜日の夜それを見て、30 日間が過ぎるまで、または（シャッワールの新月を）見るまで、今も断食を続けています」と言った。
私は「あなたはムアーウィヤによる新月の確認や断食には満足されないのですか」と言った。
すると彼は「いや、そうではなくて、このようにアッラーのみ使いがわれわれに命令されたのです」と言った。
伝承者の一人は（クライブによって伝えられた言葉が）نكتفي Naktafi（われわれは満足する）であったのかまたはتكتفي Taktafi（あなたは満足する）であったのかについて疑問を抱いている。

新月の大小（日数が経過しているかどうか）は関係がない。アッラーはそれを見る日時をお延しになった。それでもし曇天であれば（始めた日から）数えて三十日間完全に行うこと

アブー・バフタリーは伝えている

われわれはウムラ（小巡礼）に出かけ、ナフラ涸谷で夜を過した時、お互いに新月を見て（月齢を話し）合った。

ある者はそれが三日目であると言いある者はそれが二日目であると言った。

それからわれわれはイブン・アッバースに会って

「われわれは新月を見ました。そしてある者はそれが三日目の月であると言い、ある者は二日目であると言いました」と言った。

彼は「あなた方は何時の晩にそれを見たのですか」と尋ねた。

われわれは「それはこれこれの晩です」と言った。

彼は「アッラーのみ使いは『アッラーはそれが目で確認されるまでお延しになられた。

つまりあなた方がそれを見た晩が（第一夜なのです）』と申された」と言った。

アブー・バフタリーは伝えている

われわれがザート・イルク（ナフラ涸谷の上流）に居た時、ラマダーンの新月を見た。

われわれはイブン・アッバースに（法的な見解を）尋ねるために使者をたてた。

イブン・アッバースは「アッラーのみ使いは『アッラーはそれの確認日時の延長をお認めになった。

それでもし曇天でそれが確認出来なければ、その期間を三十日とせよ』と申された」と言った。

「二祭礼月は不足のない月である」というみ使いの言葉について

アブー・バクラの息子は彼の父を拠り所として伝えている

預言者は「ラマダーン（九月）とズール・ヒッジャ（十二月で巡礼の月）の二祭礼月は不足のない月である」と申された（注）。

（注）このハディースは直訳である。

というのもこれについては注釈者の意見も分かれ、その意図が完全に理解されていないからである。

先ず、一般に考えられているものとしては同年のその二つの月が 29 日から成るのではないというものてあるだか、もし片方の月が 29 日であれば他は 30 日となるべきであるというように考える人も多い。

もう一つよくいわれている意見は、たとえその二つの月が 29 日であっても、信者に与えられる報酬においては、完全な月（30 日の月）同様に、決して欠けることがないというものである

アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクラは彼の父アブー・バクラを拠り所として伝えている

預言者は「二祭礼月は不足のない月である」と申された。

ハーリドによって伝えられたハディースには「イード（祭礼）の月はラマダーンとズール・ヒッジャである」（という言葉がある）

断食は夜明けと共に始まる

アティーユ・ビン・ハーテムは伝えている

「また白糸と黒糸の見分けられる黎明になるまで（食べて飲め）」（クルアーン第 2 章 187 節）の啓示があった時、

アディーユ・ビン・ハーテムは「アッラーのみ使いよ、私は昼夜が分かるように私の枕の下に白と黒の二本のひもを置いております」と言った。

するとみ使いは「あなたの枕はまことに広い（注）。

ただそれは夜の暗黒と夜明けの明るさを意味しているのだ」と申された。

（注）枕が広いというのは修辞法の一種で、首か長いことを意図し「愚さ」を意味する

サフル・ビン・サアドは伝えている

「また白糸と黒糸の見分けられるまで食べて飲め」の啓示があった時、一人の男が白い糸と黒い糸を身近に置き、それが（夜明けの明りで）明らかになるまで食べ続けた。

その後、至高偉大なるアッラーが「黎明になる（まで）」のお言葉を下されて、その意味することが明瞭になった。

サフル・ビン・サアドは伝えている

「また白糸と黒糸の見分けられるまで食べて飲め」の啓示が下った時、断食を行うことを望んだ男が彼の両脚に黒い糸と白い糸を結び、

それの見分けがつくまで食べそして飲んだ。

その後アッラーが「黎明になる（まで）」のお言葉を下されて、人々はそれが夜と昼を意味したということを知った。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「ビラールが（サフール（注 1）のための）アザーンの詠唱を行うであろう。

そうしたらあなた方は食べそして飲むがよい。

だがそれはイブン・ウンム・マクトーム（注 2）の（断食開始）のアザーンを聞くまでである」と申された。

（注 1）夜明けにとる食事

（注 2）彼はビラールと同じようにアザーンの詠唱者であった

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「ビラールが（サフールの）アザーンの詠唱を行ったら、あなた方は食べそして飲むがよい。

だがそれはイブン・ウンム・マクトームのアザーンを聞くまでである」と申された。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いにはビラールと目の不自由ななイブン・ウンム・マクトームという二人のアザーンの詠唱者があった。

み使いは「ビラールが（サフールの）アザーンの詠唱を行ったら、あなた方は食べそして飲むがよい。

だがそれはイブン・ウンム・マクトームがアザーンの詠唱を行うまでである」と申された。

伝承者は「両者のアザーンの間隔は、一人が（アザーンの詠唱を行って夜明けの近いことを知ると）光塔から下り、

それから他の一人が（断食開始のアザーン詠唱のため）昇って行くくらいの時間であった」と言った。

このようなハディースはアーイシャを根拠として伝えられた。

このようなハディースでウバイドッラーを根拠とするものは、二つの伝承者経路で伝えられている。

イブン・マスウードは伝えている

アッラーのみ使いは「ビラールのアザーン（または"ビラールの呼び掛け"と申された）はけっしてあなた方のサフールを止めるものではない。

彼は目覚めている者（夜間礼拝のために起きている者）には憩いの時が来たことを告げ、眠っている者には目覚めるようにアザーンを詠唱するのである」と申された。

それからみ使いは「夜明けは人がいうようにこのように、そしてこのようにではなくて（といわれて手で低く高く示された後）このようである」と言われ（指の間をお開きになった）。

前述のようなハディースは別の伝承者経路を経て伝えられている。

それには「その御方は「夜明けはこのようにではなくて（と指を揃え、次にそれを大地の方にお下げになって）

このようであると言われ（人指し指を片方の人指し指の上に置いて両手をお延しになった）」

前述のハディースは別の伝承者経路を経て伝えられている。

そして「その御方は『第一のアザーンはあなた方の中の眠っている者を目覚めさせ、目覚めている者には想いの時が来たのを知らせるのです』と申された」で終っている。

別伝承のハディースの中では「アッラーのみ使いはそのようには申されなかった。

しかし『このように（夜明けは）縦にではなく水平に現れるのです』と申された」とある。

サムラ・ビン・ジュンドブは伝えている

ムハンマドが「ビラールのサフールへの呼びかけに、あなた方は惑わされることはないし、
また夜明けの光が地平線に広がって行くその明りに、あなた方は惑わされることはない」
と申されるのを聞いた。

サムラ・ビン・ジュンドブは伝えている

アッラーのみ使いは「ビラールの呼びかけにあなた方は惑わされることはないし、
また夜明けの光（柱のような垂直の朝の光）が広がって行くまでの明かりに、あなた方は
惑わされることはない」と申された。

サムラ・ビン・ジュンドブは伝えている

アッラーのみ使いは「ビラールのアザーンにあなた方は惑わされることはないし、
またこのように地平線での垂直の光が広がって行くまでのその光にあなた方は惑わされ
ることはない」と申された。
ハンマードは彼の両手を使用し「つまり（暁の光は）地平線全体に広がって行く」と説明し
た。

サムラ・ビン・ジュンドブは説教の中で次のように語った

預言者は「ビラールの呼びかけにあなた方は惑わされることはないし、
明け方が明白に、または夜が明けるまでの（うす）明かりにあなた方は惑わされることは
ない」と申された。

このようなハディースはサムラ・ビン・ジュンドブを根拠として伝えられた。

サフールの徳、またサフールを遅らせるのは大へん好ましく、フィトル（断食を破る事）を急ぐのも大へん好ましい

アナスは伝えている

アッラーのみ使いは「サフールを取るがよい。それには祝福がある」と申された。

アムル・ビン・アースは伝えている

アッラーのみ使いは「われわれの断食と聖書の民の断食の相違はサフールである」と申された。

このハディースは別の伝承者経路で伝えられている。

ザイド・ビン・サービトは伝えている

われわれはアッラーのみ使いと御一緒にサフールを取った。
その後も共に礼拝を行った。
私（伝承者）は「サフールと礼拝の時間はどのくらいありましたか」とお尋ねした。
ザイドは「50 節（を朗誦する程である）」と言った。

このハディースは別の伝承老経路でも伝えられている。

サフル・ビン・サアドは伝えている

アッラーのみ使いは「人々が断食を破ることを急ぐ限り（注）、彼等は健全であり続けるであろう」と申された。

（注）この場合は日没を確認した後でのフィトル（断食を破ること）を意味する。
つまりイフタールを意味している。
これは共同体内の秩序が維持されていることを物語るものであり、それが遅れるようなことかあれは混迷の状態を招きかねない

このようなハディースは**サフル・ビン・サアド**によって伝えられた。

アブー・アティーヤは伝えている

私とマスルークはアーイシャの所に行った。
そして「信者達の母よ、アッラーのみ使いムハンマドの教友二人で、一人は断食を破ることと礼拝の挙行を急ぎ、他の一人は断食を破ることと礼拝の挙行を遅らせるのです」と言った。
彼女は「断食を破ることと礼拝を急ぐのは誰ですか」といった。

われわれは「アブドッラー、つまりイブン・マスウードです」と言った。
彼女は「アッラーのみ使いは彼と同じようにされておられました」と言った。
伝承者の一人は「他の一人はアブー・ムーサーである」とつけ加えた。

アブー・アティーヤは伝えている
私とマスルークはアーイシャの所に行った。
マスルークは彼女に「アッラーのみ使いの教友の二人で、両者共に善行については甲乙のない者がおります。
その中の一人はマグリブの礼拝と断食を破ることを急ぎ、他の一人はマグリブの礼拝と断食を破ることを遅らせます」と言った。
彼女は「マグリブの礼拝と断食を破るのを急ぐのは誰ですか」と言った。
彼は「アブドッラーです」と言った。彼女は「アッラーのみ使いもそのようにされておりました」と言った。

断食を破る時と一日（太陽が沈むまでを意図する）が終る時刻について

ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「夜が近づき、その日が終って太陽が沈んだ時は、断食を行っている者は既にそれを破ってしまっているであろう」と申された。

イブン・ヌマイルは「既に」という言葉は述べなかった。

アブドッラー・ビン・アブー・アウファーは伝えている

われわれはラマダーン月の旅でアッラーのみ使いに同行していた。

太陽が沈んだ時その御方は「某よ、（乗り物から）降りて、われわれに煎り大麦粉を水で溶いた食事を用意せよ」と言われた。

その男は、「み使いよ、まだ日は残っています」と言った。

預言者は（再び）、「降りて我々に煎り大麦粉を水で溶いた食事を用意せよ」と言われた。

それで彼は（乗り物から）降り、煎り大麦粉の食事の用意をし、それをみ使いの所に持って行った。

預言者はそれを飲まれた。

それからその御方は両手を使用され「太陽が西に沈み、夜が東方に現れた時は、断食をしている者も既にそれを破ってしまっているであろう」と申された。

イブン・アブー・アウファーは伝えている

われわれはある旅をアッラーのみ使いに同行した。

太陽が沈んだ時、み使いは供の一人に「（乗り物から）降りてわれわれに煎り大麦粉の食事を用意せよ」と言われた。

彼は「アッラーのみ使いよ暗くなりましたなら」と言った。

み使いは（再び）「降りてわれわれに煎り大麦粉の食事を用意せよ」と言われた。

彼は「未だ日（の明かるさ）が残っております」と言った。

しかし彼は降りてその御方のために煎り大麦粉の食事を用意した。

み使いはそれを飲まれ「あなた方が、夜があの方向（その御方は手で東方を示された）からやって来るのを見た時、断食をしている者も既にそれを破ってしまっているであろう」と申された。

アブドッラー・ビン・アブー・アウファーは伝えている

われわれは断食をされているアッラーのみ使いと一緒に歩いた。

太陽が沈んだ時その御方は「某よ、降りてわれわれに煎り大麦粉の食事を用意せよ」と申された。

残余のハディースは前述のものと同一である。

このハディースはイブン・アブー・アウファーを根拠として他の伝承者経路でも伝えられている。
伝承者達のある者によって伝えられたハディースには「ラマダーン月には」と「夜がその方向（東方）から来た」は述べられてはいない。
それがあるのはフシャイムの話のみである。

継続的断食の禁止

イブン・ウマルは伝えている

預言者は（継続的な）断食（注）を禁止された。

人々は「あなた御自身は継続的な断食をなさっております」と言った。

すると「私はあなた方とは違う。私は（アッラーより）食事を与えられ渇きをいやされる」と申された。

（注）日没後のイフタール（断食を止める食事）もしないで次の日の断食を行うような断食をいう

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはラマダーンに継続的な断食を行われた。

それで人々もそれに倣った。

み使いは人々のそれを禁止された。

すると「あなたは継続的な断食をなさっております」と言われた。

み使いは「私はあなた方とは同じではない。

私は（アッラーより）食事を与えられ渇きをいやされている」と申された。

前述のようなハディースは**イブン・ウマル**によって伝えられている。

しかし別伝承のハディースでは彼は「ラマダーン月の間に」という言葉は述べていない。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは継続的な断食を禁止された。

するとムスリムの中の一人が「アッラーのみ使いよ、あなたは継続的な断食をなされています」と言った。

み使いは「あなた方の中に私と同じような者がおりますか。

私は主が食事をお与え下さり、渇きをいやして下さるので夜が過せるのです」と申された。

ところが教友達は継続的断食の放棄に同意しなかった。

そこでみ使いは彼等と一緒にその断食を一日そして一日と（三日間）続けられた。

この後彼等は（月が変ったしるしの）新月を見た。

その時アッラーのみ使いは「もし新月の現れるのがもっと後であったなら、あなた方が継続的断食の禁止に同意しなかった懲罰として、私はあなた方と共にもっと長くその断食を行ったであろうに」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方は継続的断食を行ってはならぬ」と言われた。

彼等（教友達）は「アッラーのみ使いよ、あなたは継続的に断食をなさっております」と言った。

するとみ使いは「そのことではあなた方は私と同じではない。

私には私の主が食事を下さり、渇きをいやして下さるから夜も過せるのです。

あなた方はあなた方に出来る事柄に専心せよ」と申された。

アブー・フライラは預言者から聞いた話として前述のような話を伝えている。
しかし彼は「み使いは『あなた方の能力の範囲内での事柄に専心せよ』と申された」と言った。

アブー・フライラは伝えている

預言者は（教友達に）継続的な断食を行うことを禁止された。

アナスは伝えている

ラマダーン月に私はアッラーのみ使いが礼拝を行われている所に行き、御側に立った。

その時別の男が一人やって来て、彼も同じように立った。

それでわれわれは一つのグループになった。

預言者は私がその御方の後に居ることに気付かれると礼拝を短くされた。

その後み使いは居所に入られ、われわれとは行われたことのない長い礼拝を挙行された。

朝になった時われわれはみ使いに「昨夜、あなたはわれわれに気付かれましたか」と尋ねた。

み使いは「はい。それだから私はあのようにしたのである」と申された。

伝承者はまた（次のように）伝えている。

み使いはその月の終りに継続的な断食を挙行し始められた。

すると教友達の中からもそれに倣う人々があった。

その時み使いは「継続的断食を行っている者達は何を考えているのか。

あなた方は私とは違うのだ。

アッラーに誓い、もし私にこの月が延長されるのであれば、ことさらに誇張する者達がその誇張を止めるように、私はなおこの継続的断食を続行したであろうに」と申された。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いはラマダーンの始めに継続的断食を行われた。

それで、あるムスリム達もそれに倣った。

それがその御方のお耳に達すると「もしわれわれにこの月が延長されたとすれば、ことさらに誇張する者達がその誇張を止めるように、私はこの継続的断食を続行したであろうに。

あなた方は私と違うのである（または、私はあなた方と違う。）
まことに、私には私の主が食事をお与え下さり、渇きをいやして下さるのだ」と申された。

アーイシャは伝えている
預言者は教友達への思いやりとして、彼等に継続的断食を禁止されました。
すると彼等は「あなたは継続的な断食をされております」と言った。
み使いは「私はあなた方とは異なるのだ。
私には私の主が食事をお与え下さり、渇きをいやして下さる」と申されました。

性欲を刺激しない口付けは断食中でも禁止されない

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは断食をされている時、その御方の妻達の一人に口付けをされておられました。

そういって彼女はにっこりと笑をうかべました。

スフヤーンは伝えている

私はアブドル・ラフマーン・ビン・カーシムに「あなたはあなたのお父さんからアーイシャの話として、預言者は断食をされている時彼女に口付けなされた、という話を聞きましたか」と尋ねた。

彼はしばらく沈黙していたがややあって「はい」と言った。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは断食をされていた時、私に口付けをされました。

それで「あなた方の中で誰が、アッラーのみ使いが御自分の欲望を制御出来たようにそれを制御出来るでしょうか」と言った。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは断食をされている時に(その御方の妻達に)口付けをなさいました。

そしてまた断食されている時に(彼女達を)抱擁されました。

しかしその御方はあなた方には出来ない程、御自分の欲望を制御お出来になりました。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは断食をされている時(その御方の妻達に)口付けされました。

でもその御方はあなた方には出来ない程、御自分の欲望を制御お出来になりました。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは断食をされている時(その御方の妻達を)抱擁されました。

アスワドは伝えている

私とマスルークはアーイシャの所に行き「アッラーのみ使いは断食をされていた時(その御方の妻達を)抱擁されたのですか」と尋ねた。

彼女は「はい。しかしあの御方はあなた方には出来ない程、欲望を制御お出来になりました。

または(次のようにいった)その御方は欲望を制御出来る人達のお一人でした」

このハディースの最初のところで「アスワドとマスルークの両名は信者達の母に尋ねるため、彼女の許に行った。」という別伝承もあり残余のハディースは同一である。

ウルワ・ビン・ズバイルは伝えている

信者達の母アーイシャは、アッラーのみ使いは断食をされている時彼女に口付けをなさったと伝えた。

このようなハディースは別の伝承者経路を経て伝えられている。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは断食月に口付けをされました。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは断食をされているラマダーン月に口付けなさいました。

アーイシャは伝えている

預言者は断食をされている時口付けなさいました。

ハフサは伝えている

アッラーのみ使いは断食をされている時、口付けされておられました。

このようなハディースはハフサによって、他の伝承者経路で伝えられている。

ウマル・ビン・アブー・サラマは伝えている

彼はアッラーのみ使いに「断食をしている者が（彼の妻に）口付け出来るのでしょうか」と尋ねた。

み使いは「それは（ウンム・サラマ（注））に尋ねよ」と言われた。

彼女は彼に「アッラーのみ使いはそれをなさいました」と告げた。

そこで彼は「アッラーのみ使いよ、アッラーはあなたが犯した以前の罪も今後のものも必ずお許し下さいます」と言った。

み使いは「アッラーに誓い、私はあなた方の誰よりもアッラーに敬虔な者であり、あなた方の誰よりもその御方を恐れている者である」と申された。

（注）ウンム・サラマは預言者の妻の一人

性交渉をもって朝を迎えた者も、断食を行うことは正しい

アブー・バクル・ビン・アブドル・ラフマーン・ビン・ハーリスは伝えている

「私はアブー・フライラが性交渉をもって夜明けを迎えた者は、断食をしてはならない」と話しているのを聞いた。

私はそれをアブドル・ラフマーン・ビン・ハーリスに話した。

すると彼はそれを否定した。

それで私は彼と一緒にアーイシャとウンム・サラマの所に行った。

そしてアブドル・ラフマーンがそのことについて二人に尋ねた。

すると彼女達は「預言者は夢精ではない大汚（性交渉のあと）で朝を迎えられましても断食をなさいました」と言った。

それでわれわれはマルワーンの所に行き彼にそれを話した。

マルワーンは「あなた方は是が非でもアブー・フライラの許に行き彼の言葉を訂正しなければならない」と言った。

それでわれわれはアブー・フライラの所に行った。

この間、私（アブー・バクル）はずっと行動を共にしていた。

アブドル・ラフマーンはそのことをアブー・フライラに話した。

アブー・フライラは「彼女達がそれをあなたに話したのですか」と言った。

彼は「はい、そうです」と答えた。

彼は「その二人は私より良く御存知である」と言った。

それからアブー・フライラは彼がそれまでいっていた言葉はファドル・ビン・アッバースからのものであるとし

「私はそれをファドルから聞いたのであり、預言者から直接お開きしたのではない」と告白した。

その後アブー・フライラはそれまでいっていたこの問題を取り下げた。

イブン・ジュライジュ（伝承者の一人）はアブドル・マリクに「彼女達二人はラマダーン中に関して話したのですか」と尋ねた。

彼は「そうです。そしてその御方は夢精ではない大汚で朝を迎えられても断食をされたのです」と言った。

預言者の妻**アーイシャ**は伝えている

アッラーのみ使いはラマダーン月、夢精ではない大汚（性交渉）で夜明けをお迎えになりますと大浄（全身沐浴・グスル）をされて断食をされました。

アブー・バクル・ビン・アブドル・ラフマーン・ビン・ハーリスは伝えている

マルワーンは彼をウンム・サラマの所に行かせ、大汚で朝を迎えた男も断食をするのかどうか尋ねさせた。

すると彼女は「アッラーのみ使いは夢精によるのではない大汚で朝をお迎えになっても、断食を破ることなく完全にそれを果されました」と言った。

アブー・バクル・ビン・アブドル・ラフマーンは預言者の二人の妻アーイシャとウンム・サラマを根拠として伝えている

アッラーのみ使いはラマダーン月に交接による大汚で朝を迎えられましても、断食はなさいました。

アーイシャは伝えている

一人の男がアッラーのみ使いの許に宗教上の問題で相談に来ました。

私は戸の後で聞いておりました。

その男は「アッラーのみ使いよ、礼拝の時が参りました時、私は交接による大汚の状態でした。

それで私は礼拝をし、断食も行うのでしょうか」と言った。

み使いは「私は大汚でも礼拝の時が来ればそれを行い、断食も行います」と言われた。

するとその男は「あなたはわれわれとは違います。

アッラーはあなたが以前に犯された罪も今後のそれも必ずお許しになられます」といった。

み使いは「アッラーに誓い、私はあなた方の誰よりもアッラーを恐れる者であることを願い、あなた方の誰よりも敬神の念を知る者であることを願う」と申されました。

スライマーン・ビン・ヤサールは伝えている

彼はウンム・サラマに大汚の者が朝を迎えて断食をするのかどうか尋ねた。

彼女は「アッラーのみ使いは交接による大汚で朝を迎えられても、断食をされておられました」と言った。

ラマダーン月の間は、日中の性交渉は完全に禁止される

アブー・フライラは伝えている

ある男が預言者の所に来て「アッラーのみ使いよ、私は破滅してしまいました」と言った。
み使いは「君が破滅したというのはどういうことか」と言われた。
彼は「私はラマダーン月に妻と性交渉をもったのです」と言った。
み使いは「君が自由にしてやれる奴隷はあるか」と言われた。
彼は「いいえ」と言った。
み使いは「では君は二ヵ月続けて断食が出来ますか」と言われた。
彼は「いいえ」と言った。
み使いは更に「君は六十人の哀れな人に食事を用意出来ますか」と言われた。
彼は「いいえ」と言った。
それからその御方はお座りになった。
その時預言者の所になつめ椰子の実の入っている籠が運ばれて来た。
み使いは彼に「これをサダカとして施すがよい」と申された。
すると彼は「私どもより貧しい者がありますでしょうか。
マディーナの二つの溶岩地帯の間に住む家族で私達以上に必要とする者はないのです」と言った。
すると預言者は犬歯が見える程笑われて「それを持って行き、君の家族に食べさせよ」と申された。

このハディースは別の伝承者経路を経て伝えられている。
その中で“彼は「なつめ椰子の実の入ったアラクが運ばれた。アラクは麦わらで出来た籠である」と言った”
しかし「預言者は犬歯が見える程笑われた」とは言わなかった。

アブー・フライラは伝えている

ある男がラマダーン月（の日中）に彼の妻と性交渉をもった。
それでアッラーのみ使いにそれに対する宗教上の判断を求めに来た。
み使いは「あなたが自由に出来る奴隷はあるか」と言われると彼は「いいえ」と答えた。
次にみ使いは「ではあなたは二ヵ月続けて断食が出来るか」と言われた。
彼は「いいえ」と言った。
み使いは「では六十人の哀れな人達に食事の用意をしなさい」と言われた。

このハディースはアッズフリーを根拠とし、同一の伝承者経路で伝えられている。
その中に「一人の男がラマダーン月に断食を行わなかった。

それでアッラーのみ使いは彼に（償いとして）一人の奴隷を自由にするよう命じられた」というのがある。
残余のハディースは前述のものと同一である。

フマイド・ビン・アブドル・ラフマーンは伝えている

アブー・フライラは彼に（次のように）話した。
預言者はラマダーン中に断食を実行しなかった男に、一人の奴隷を自由にすること、または二ヵ月連続して断食を行うこと、あるいは哀れな六十人の者に食事を用意することを命令された。

このハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アーイシャは伝えている

一人の男がアッラーのみ使いの所に来て「私は火獄に落ちます」と言った。
するとみ使いは「どうしてか」と申された。
彼は「私はラマダーン月の日中、妻と性交渉をもちました」と言った。
み使いは「サダカをせよ、サダカをせよ」と申された。
男は「私には何もございません」と言った。み使いは彼に座るようお命じになった。
そこに食物が入った二個の籠が運ばれて来た。
み使いはその男に「これをサダカとして与えよ」と申された。

アーイシャは伝えている

一人の男がアッラーのみ使いの所に来た。
それから後は前述同様の話をした。
しかしこれには「サダカをせよ、サダカをせよ」や「日中に」の言葉は述べられてはいない。

アッバード・ビン・アブドッラー・ビン・ズバイルは伝えている

彼は預言者の妻アーイシャが（次のように）いうのを聞いた。
一人の男がラマダーン中モスクに来てアッラーのみ使いに会い「アッラーのみ使いよ、私は火獄に落ちます。私は火獄に落ちます」と言った。
アッラーのみ使いは「どうしたのか」とお尋ねになった。
彼は「私は（ラマダーン月の日中）妻と性交渉をもったのです」と言った。
み使いは「サダカをせよ」と申された。
彼は「アッラーに誓い、預言者よ、私には何もございませんので、それは出来ません」と言った。
み使いは「座るがよい」と申された。

彼がそこに座っていると、食物を積んだろばを引いた男が来た。
アッラーのみ使いは「先刻、火獄に落ちると申していた者よ」と言われた。
その男は立ち上った。
み使いはその男に「これをサダカとして与えよ」と申された。
彼は「アッラーのみ使いよ、われわれ以外の者にでしょうか。
アッラーに誓い、われわれには何もございません。
私どもは飢えております」と言った。
するとみ使いは「それではそれを食すがよい」と申された。

ラマダーン月に旅をする者は、断食を行ってもよいし、行わなくともよい

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは（マッカ）征服の年のラマダーン月にお出かけになり、断食をされた。
その御方がアル・カディード（マッカから42マイルの地点にある泉）にお着きになると、そこで断食をお破りになった（注）。
その時教友達はその御方のされる最も新しい事例に従う習慣であった。
それは、（み使いのされる）最新の行為が、その問題の最終的決定であるからである。

（注）この場合は規定されている断食を何等かの理由で止めることを意味する
前述のハディースは別の伝承者経路で伝えられている。

スフヤーン（伝承者の一人）は「それは誰の言葉か私は知らない」と言った。
彼が意味したのは「アッラーのみ使いのお言葉の中で最後のもの（最終的決定）として受け取られている」ということについてである」と言った。

ズフリーは伝えている

（旅で）断食を破ることは、断食かそれともそれを破るかの懸案の中で、み使いが示されたそれへの最終的決定である。
なおズフリーは「アッラーのみ使いはラマダーン月の 14 日の朝、マッカに来られた」と言った。

前述のようなハディースは**イブン・シハーブ**を経由して伝えられている。
イブン・シハーブは「彼等（教友達）はみ使いの最も新しいお言葉に従った。
そしてそれは最終的決定であると同時に（前に行われていた事例の）廃止と看なした」と伝えている。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いはラマダーン月に断食をしながら旅をされていた。
その御方がウスファーン（マッカから 35 ないし 36 マイルの地点）にお着きになった時、水の入ったうつわを求められた。
そして日中、人々の見ている前でお飲みになった。
それから断食を破られてマッカにお入りになった。
イブン・アッバースは「アッラーのみ使いは断食もされたが、それをお破りにもなった。
それで断食を望む者はそれを行い、それを破りたい者は破る（ことが許される）」と言った。

イブン・アッバースは伝えている

(旅行で)断食を行う者あるいはそれを破る者いずれも咎められない。

アッラーのみ使いは旅で断食もされたし、それを破られもした。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは勝利の年のラマダーン月にマッカにお出かけになった。

その時み使いも人々も断食を行っていたが、クラーウル・ガミーム(ウスファーンより入マイルの地点)にお着きになると水の入ったコップを求められ、人々の見ている前でそれを差し上げて飲まれた。

するとその後で「断食を行っている者もございます」と告げられた。

するとみ使いは「それらの者は不従順である。それらの者は不従順である(注)」と申された。

(注)この日は大へん厳しい日で、旅中の断食を破るように命令されていたようである

このハディースは別の伝承者経路を経て伝えられている。

その中に"み使いは「断食が人々には負担になって来ており、彼等はあなたがどうされるのか注目しています」と告げられた。

その時み使いは水の入ったコップをお求めになった。それは午後のことであった"という言葉がある。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは旅をされていた。

その時人々がある男の回りに集って、彼に日蔭を提供しているのが目に止った。

み使いは「彼はどうしたのか」と言われた。

人々は「断食をしている者です」と言った。

その時み使いは「旅中、断食をして苦しむのは敬神的な行為ではない」と申された。

ムハンマド・ビン・アムル・ビン・ハサンはジャービル・ビン・アブドッラーから(次のように)聞いたと伝えている

アッラーのみ使いは一人の男を御覧になった。

残余のハディースは前述のものと同じである。

このハディースは**シュウバ**(途中伝承者の一人)を経由して、伝えられているが、それには次のような付加がある。

「その御方は『アッラーがお与え下さった御許可(旅中では断食を破れること)を受けるがよい』と申された。」

伝承者の一人が他の伝承者（**ヤヒヤー・ビン・アブー・カシール**）にこれを尋ねたが、彼はそれを記憶していなかった。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

　　われわれはラマダーン月の 16 日にアッラーのみ使いと共に遠征した。
　　われわれの中には断食をしている者とそれを破っている者とがあった。
　　その時、断食を破っている者はそれを行っている者を、また断食をしている者はそれを破っている者を咎めるようなことはなかった。

このようなハディースはカターダを経由し、同一の伝承者経路で伝えられた。
しかし**タイミー**と**ウマル・ビン・アーミル**そして**ヒシャーム**によって伝えられたハディースの中では（前述のハディースにあったラマダーンの日付が）18 日となっており、サイードによって伝えられたハディースでは 12 日、シュウバによって伝えられたものでは 17 日または 19 日となっている。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

　　われわれはラマダーン月にアッラーのみ使いと一緒に旅に出た。
　　その時、断食をしている者はその行為を、また断食を破っている者もその行為を咎められることはなかった。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

　　われわれはラマダーン月にアッラーのみ使いと遠征に出かけた。
　　その時、われわれの中には断食を行っている者とそれを破っている者とがあった。
　　断食を行っている者はそれを破っている者に対し、また断食を破っている者はそれを行っている者に対して反対もしなかったし怒るようなこともなかった。
　　彼等は体力に自信のある者は断食を行うのが良いと考えたし、体力に自信のない者は断食を破るのが良いと考えたのである。

アブー・ナドラは伝えている

　　アブー・サイード・フドリーとジャービル・ビン・アブドッラーは「われわれはアッラーのみ使いと旅に出た。
　　その時断食を行っている者とそれを破っている者があったが、彼等は互いに咎めだてするようなことはなかった」と言った。

フマイドは伝えている

　　アナスはラマダーン月の旅中における断食について尋ねられた。
　　彼は「われわれはラマダーン月にアッラーのみ使いと旅をした。

その時断食をしている者はそれを破っている者を、断食を破っている者はそれを行っている者を咎めだてするようなことはなかった」と言った。

アブー・ハーリド・アフマルはフマイドが（次のように）言ったと伝えている

私は遠くに出かけたがその時断食をしていた。

人々は私に「（断食を）破れ」と言った。

私は彼等に「アナスは私に『み使いの教友達は旅をした時、断食をしている者はそれを行っている者を、また断食を破っている者はそれを行っている者を咎めだてするようなことはなかった』と言った」と話した。

（フマイドは次のようにも言った）

私はイブン・アブー・ムライカに会った。

その時彼は私に、アーイシャを根拠とした（前述と同じ）ハディースを述べた。

断食を破っている者が旅で、他の者に代って仕事をした時は、その者に報賞がある

アナスは伝えている

われわれはアッラーのみ使いと御一緒に旅をした。
その時われわれの中には断食を行っている者とそれを破っている者とがあった。
われわれは酷暑の日ある場所に到着した。
一行の大半は衣服を蔭として使用したが、中には自身の手をかぎして暑さをさえぎっている者もあった。
断食をしている者は倒れた。
その時断食を破っている者達が立ってテントを張り、乗用の動物に水を与えた。
アッラーのみ使いは「今日は、断食を破っている者達に報賞がある」と申された。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いが旅をされた。
その時ある者は断食をしある者はそれを破っていた。
断食を破っている者は、元気に働いたが、それを行っている者は仕事を十分に果せなかった。
み使いは「今日は、断食を破っている者に報賞がある」と申された。

カザアは伝えている

私がアブー・サイード・フドリーの所に来た時、彼の回りに大勢の人々が集っていた。
人々が去った時私は「あなたにあの人々とは別の事柄についてお尋ねしたい」と言って、旅中での断食について彼に尋ねた。
彼は「われわれは断食を行っている時、アッラーのみ使いと御一緒にマッカに旅をした。
われわれがある場所に到着した時、アッラーのみ使いは『あなた方は敵に近づいた。
それで断食を破ることはあなた方をより強力にするであろう。
それは許されたことである』と申された。
しかしわれわれの中には断食を行っている者もあったしまたそうでない者もあった。
この後われわれは別の場所に到着した。
ここでみ使いは『あなた方は朝、敵と相対する。
それで断食を破ることはあなた方をより強力にするであろう。
故に断食を破るがよい』と申された。
これにはその御方の強い決意がうかがえたのでわれわれは断食を破った。
だがその後われわれがアッラーのみ使いと旅を共にする時は断食をしたものである」と言った。

旅中で断食を行うかそれを破るかの選択について

アーイシャは伝えている

ハムザ・ビン・アムル・アスラミーはアッラーのみ使いに旅中での断食について尋ねた。
するとその御方は「もしあなたが望むなら断食をし、望まないなら破るがよい」と申された。

アーイシャは伝えている

ハムザ・ビン・アムル・アスラミーはアッラーのみ使いに「み使いよ、私は断食励行者ですが、旅中、私はそれを行うのでしょうか」と尋ねた。
み使いは「もしあなたが望むなら断食を行い、望まないなら破るがよい」と申された。

このハディースは**ヒシャーム**を経由し別の伝承者経路を経て伝えられている。

ハムザは「私は断食の励行者ですが、旅で私は断食をするのでしょうか」と言った。

このハディースはヒシャームを経由し、前記と別の伝承者経路を経て伝えられている。

ハムザ・ビン・アムル・アスラミーは伝えている

私は「アッラーのみ使いよ、私は旅中でも断食を行っていると元気なのですが、(断食することは)私にとって罪となるのでしょうか」とお聞きした。
み使いは「それはアッラーからの御許可である。
故にそれが有益な者にとっては結構なことであり、断食の挙行を望む者が罪となることはない」と申された。
ハールーン(伝承者の一人)は彼の伝えたハディースの中で「それは御許可である」とは言ったが「アッラーからの」とは述べなかった。

アブー・ダルダーウは伝えている

われわれはアッラーのみ使いと共に酷暑のラマダーン月に出かけた。
その時われわれの中には厳しい暑さを遮るために手を頭上にかぎす者もあった。
一行の中で断食をしている者はアッラーのみ使いとアブドッラー・ビン・ラワーハのみであった。

アブー・ダルダーウは伝えている

われわれは大へん暑い日にアッラーのみ使いの御旅行の一つに参加した。
あまりの暑さで、人々はそれを遮るため手を頭上にかぎしていた。

その時一行の中で断食をしている者はアッラーのみ使いとアブドッラー・ビン・ラワーハのみであった。

アラファの日（ズール・ヒッジャ月の九日）の巡礼者は断食を破ることが好ましい

ハーリスの娘**ウンム・ファドル**は伝えている

　　アラファの日、人々は私の所でアッラーのみ使いの断食について議論していた。
　　その中のある者はその御方が断食をしていると言い、ある者はその御方がそれを破っていると言った。
　　そこで私はその御方の所にミルクの入ったコップをお送りした。
　　その時み使いはアラファ（マッカ近傍の山）で、その御方のらくだに乗られたまま、それをお飲みになった。

このハディースは別の伝承者経路で伝えられている。
その中では「その御方がらくだに乗られたまま」という言葉は述べられてはいない。
また「ウンム・ファドルの解放奴隷ウマイルがウンム・ファドルについて話した」の記述がある。

このハディースはウンム・ファドルのマウラー（解放奴隷）**ウマイル**を根拠とし、別の伝承者経路を経ても伝えられている。

ウンム・ファドルは（次のように）言ったと伝えられている

　　アッラーのみ使いの幾人かの教友は、アラファの日の断食に疑いを抱いた。
　　その日われわれはアッラーのみ使いと御一緒であった。
　　それで私はその御方にミルクの入った木製のコップをお送りした。
　　その時み使いはアラファに居られ、それをお飲みになった。

クライブ（イブン・アッバースのマウラー）はマイムーナ（預言者の妻の一人）が次のように言ったと伝えている

　　々はアラファの日、アッラーのみ使いの断食を疑った。
　　それでマイムーナはみ使いにミルクの入ったコップを送った。
　　その時み使いは特定の場所にお立ちになっておられたが、人々が見ている所でそれをお飲みになった。

アーシューラー（ムハッラム月の十日）の日の断食について

アーイシャは伝えている

　クライシュ族はジャーヒリーヤ時代、アーシューラーの日に断食を行っており、アッラーのみ使いもそれを行っていた。

　その御方はマディーナに移られてからもこの断食を行っておられ、人々にもその断食の励行を命令されていた。

　しかしラマダーン月の断食が義務となってからみ使いは「アーシューラーの断食は望む者は行い、望まない者は放棄せよ」と申された。

このハディースは**ヒシャーム**を経由し、別の伝承者経路で伝えられている。

彼は前述のハディースの始めの部分「アッラーのみ使いもそれを行っていた」は述べていない。

そして終りの部分では「彼はアーシューラーを放棄した。

それで断食を望む者はそれを行い、望まない者はそれを放棄した」とは言っているが、前述のハディースのように、み使いのお言葉であるとは言ってはいない。

アーイシャは伝えている

　ジャーヒリーヤ時代、アーシューラーの日には断食が行われておりました。

　しかしイスラームが起こってからは（その日の断食を）望む者は行い、望まない者は放棄しました。

アーイシャは伝えている

　アッラーのみ使いはラマダーン（の断食）が義務づけられる以前にはアーシューラーの日の断食を命じておられました。

　しかしラマダーン（の断食）が義務づけられてからは、アーシューラーの日の断食を望む者は行い、破りたいものは破りました。

アーイシャは伝えている

　ジャーヒリーヤ時代、クライシュ族はアーシューラーの日に断食を行っておりました。

　アッラーのみ使いは（最初）その断食をお命じになっておりましたが、ラマダーンのそれが義務づけられますと「その断食を望む者は行うがよい。

　望まない者は破ってよい」と申されました。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

　ジャーヒリーヤ時代の人々はアーシューラーの日に断食を行っていた。

　アッラーのみ使いもその断食をしておられたし、ムスリム達もラマダーン（の断食）が義務づけられる以前はそれを行っていた。

しかしラマダーン（の断食）が義務づけられるとみ使いは「アーシューラーはアッラーの御日々の中の一日であるが、（その日の断食を）望む者はそれを行い、望まぬ者は放棄してもよい」と申された。

このようなハディースは別の伝承者経路を経て伝えられている。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはアーシューラーの日についてお述べになった。
その御方は「その日、ジャーヒリーヤの人々は断食をしていた。
それであなた方の中でその断食を望む者は行うがよい。
またそれが嫌な者は放棄してもよい」と申された。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

私はアッラーのみ使いがアーシューラーの日について（次のように）言われるのを聞いた。
「この日、ジャーヒリーヤの人々は断食を行っていた。
それでその断食を望む者は行い、放棄したい者は放棄せよ」
アブドッラーは（彼が常々行っていた断食の日とそれが）一致しない限り、それを行わなかった。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはアーシューラーの日の断食についてお述べになった。
この後、彼（アブドッラー）は前述と同様の話をした。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはアーシューラーの日についてお述べになった。
そして「その日はジャーヒリーヤの人々が断食を行っていた日であった。
それで（断食を）望む者はそれを行い、望まぬ者はそれを放棄するがよい」と申された。

アブドル・ラフマーン・ビン・ヤジードは伝えている

アシュアス・ビン・カイスはアブドッラー・ビン・ウマルが昼食をしている所に入って行った。
するとアブドッラーは「やあ、アブー・ムハンマド（アシュアスの別称）よ、昼食を一緒にどうぞ」と言った。
彼は「今日はアーシューラーの日ではないのですか」と言った。
アブドッラーは「あなたはアーシューラーの日がどういう日か御存知ですか」と言った。
彼は「それはどのような日でしょう」と言った。
アブドッラーは「それはラマダーン月の断食が義務づけられる以前には、アッラーのみ使

いが断食をされていた日です。

しかしそれが義務となった時（アーシューラーの断食は）放棄されたのです」と言った。

別の伝承では、「その御方はそれを放棄された」と伝えている。

前述のハディースは別の伝承者経路を経て伝えられている。
それには「ラマダーン（の断食）が義務となった時、その御方はそれ（アーシューラーの断食）を放棄された」と述べられている。

カイス・ビン・サカンは伝えている

アシュアス・ビン・カイスはアーシューラーの日、アブドッラー（・ビン・ウマル）の所に行った。
その時彼は食事をしていた。
アブドッラーは「おおムハンマドのお父さん（カイスのこと）よ、こちらへ来て食事をどうぞ」と言った。
彼は「私は断食をしております」と言った。
その時アブドッラーは「われわれはその断食を行っていたのですが放棄しました」と言った。

アルカマは伝えている

アシュアス・ビン・カイスはアーシューラーの日、イブン・マスウードが食事をしている所に入って行った。
そこで彼（アシュアス）は「アブドル・ラフマーンのお父さんよ、今日はアーシューラーの日ですよ」と言った。
するとイブン・マスウードは「ラマダーン（の断食）が義務となる前はその断食が行われていた。
しかしラマダーンのそれが義務づけられるとその日の断食は放棄された。
それでもしあなたが断食をしていないのなら、ここで食べなさい」と言った。

ジャービル・ビン・サムラは伝えている

アッラーのみ使いはアーシューラーの日の断食をわれわれに命令し、奨励し、われわれの断食に対する関心の程に心を配っておられた。
しかしラマダーン（の断食）が義務づけられてからは、それを御命令されることはなかったし、禁止されることもなかった。
そしてまたわれわれのそれに対する存り方についても関心を示されなかった。

フマイド・ビン・アブドル・ラフマーンは伝えている

私はアーシューラーの日、ムアーウィヤ・ビン・アブー・スフヤーンの説教を聞いた。
彼は巡礼の途次マディーナに寄ったのである。
彼は「マディーナの方々よ、あなた方の学者達はどこに御出でですか。
私はアッラーのみ使いがこの日について
『本日はアーシューラーの日ではあるが、アッラーはこの日の断食を義務とはされなかった。
私は断食をしているが、あなた方は、それを望む者は行い、破りたい者は破るがよい』
と申されるのを聞いた」と言った。

このようなハディースは別の伝承者経路で伝えられている。

このようなハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。
しかしその別経路によるものには、「彼はアッラーのみ使いが「私は断食をしている。それで、断食を望むものはそれを行え」と申された」と述べているだけで、残余のハディースは伝えてはいない。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いがマディーナに来られた時、ユダヤ人達がアーシューラーの日に断食を行っているのを知った。
ユダヤ人達はそれについて尋ねられた。
すると「この日はアッラーがファラオに対しモーゼとイスラエルの民の上に勝利をお与えになった日です。
故にわれわれはその御方に感謝するために断食を行うのです」と言った。
預言者は「われわれはあなた方以上にモーゼとの関係は密接である（注）」と申され、その日の断食を御命令になった。

（注）唯一なる神アッラーに対する信仰の強さでモーゼ（やその方に導かれた人々）との結びつきが密接である。
だが今（預言者の時代）のユダヤ人は異なるということ

このハディースは別の伝承者経路を経て伝えられているがそれには「その御方は彼等にそれについてお尋ねになった」と述べられている。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いがマディーナに来られた時、ユダヤ人達がアーシューラーの日に断食を行っているのをお知りになった。

アッラーのみ使いは彼等に「あなた方はどうして今日断食をするのか」と言われた。
彼等は「今日はアッラーがモーゼと彼の民族をお救いになられ、ファラオとその人々を溺死させた意義ある日です。
それでモーゼは感謝のために断食を行いました。
従って私達もこの日断食を行うのです」と言った。
アッラーのみ使いは「われわれこそ（それをするのに）よりふさわしい。
われわれはあなた方以上にモーゼとの関係は密接である」と申されて自らその日の断食を挙行され、人々にもお命じになった。

このハディースは、同一の伝承者経路で伝えられているが伝承者名が前述のハディースのように明記されていない。

アブー・ムーサーは伝えている
アーシューラーの日はユダヤ人達が讃美し、祝日として来た日であった。
アッラーのみ使いは「あなた方ムスリムも、その日断食をせよ」と申された。

アブー・ムーサーは伝えている
ハイバル族（ユダヤ人部族）の人々はアーシューラーの日に断食を行い、その日を祝日とし、女達には美しい衣装を身に着けさせていた。
アッラーのみ使いは「あなた方ムスリムも断食をせよ」と申された。

イブン・アッバースは伝えている
私はアーシューラーの日の断食について尋ねられた。
それで私は「アッラーのみ使いがこの日（アーシューラー）とこの月（ラマダーン）を除いては、好んで断食をなされた日々を知らない」と答えた。

このようなハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アーシューラーの断食日について

ハカム・ビン・アーラジュは伝えている

私がイブン・アッバースの所に行った時、彼はザムザムの井戸の所で彼の外衣を枕のようにしてそれにもたれ掛っていた。
私は彼に「アーシューラーの断食について話して下さい」と言った。
彼は「あなたかムハッラム（イスラーム暦 1 月）の新月を見たら、それから数えて九日目に.断食を行うのです」と言った。
私は「アッラーのみ使いはそのようにされていたのでしょうか」と言った。
彼は「はいそうです」と言った。

ハカム・ビン・アーラジュは伝えている

私はイブン・アッバースがザムザムの井戸の所で彼の外衣を枕のようにしてそれにもたれ掛っていた時、アーシューラーの断食について尋ねた。
残余のハディースは前述と同様である。

アブドッラー・ビン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いがアーシューラーの日に断食をされ、それを御命令になった時、教友達は「アッラーのみ使いよ、それはユダヤ人やキリスト教徒が讃美する日です」と言った。
するとみ使いは「来年も、インシャー・アッラー、われわれは第九日に断食を行うであろうぞ」と申された。
しかしその翌年を待たずしてアッラーのみ使いはお亡くなりになった（注）。

（注）イブン・アッバース（アブドッラー・ビン・アッバース）はアーシューラーの断食日をムハッラム月の九日といっているが、学者達の多くはムハッラム月の十日としている

アブドッラー・ビン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは「もし私が来年も生きていれば、第九日にきっと断食を行うであろうぞ」と申された。
別伝承者によって伝えられたハディースには「それ（第九日）とはアーシューラーの日のことである」と述べられている。

アーシューラーの日、早くに食事を取ってしまった者は、その後、その日の食事を断つこと

サラマ・ビン・アクワウは伝えている

アッラーのみ使いはアーシューラーの日、アスラム族の者を使者として送り「これまで断食をしていなかった者はそれを行い、
また既に食事を取ってしまった者は、その後は夜まで何も口にせぬように」と人々に告げよと命令した。

ムアッウィズ・ビン・アフラーウの娘ルバィイウは伝えている

アッラーのみ使いはアーシューラーの朝、マディーナの周囲に住んでいたアンサールの村々に使者を送り「朝起きて未だ何も口にしていない者はそのまま断食を成し遂げよ。
食事を取ってしまった者は、その後夜までは何も口にせぬように」と告げさせた。
教友達は「われわれは、これ以後この断食を行って来ているし、またわれわれの子供達にもそれを行わせている、アッラーのおぼしめしで。
そしてモスクにも（子供達を連れて）行っているがその時は彼等のために羊毛でおもちゃを作り、もし彼等の中で食事を欲しがって泣く者があれば、断食を破る時間が来るまで、そのおもちゃを彼等に与えている」と言った。

ハーリド・ビン・ザクワーンは伝えている

私はムアッウィズの娘ルバィイウにアーシューラーの日の断食について尋ねた。
彼女は「アッラーのみ使いはアンサールの村々に使者を送られました」
残余のハディースは前述と同様であるが最後の部分に若干の相違がある
（すなわち）「われわれは子供達に羊毛のおもちゃを作り、それを持って出かけ、彼等が食べ物を欲しがった時は、彼等にそのおもちゃを与えて遊ばせ、彼等が断食を成し遂げるようにした」と言った。

アーシューラーの日、早くに食事を取ってしまった者は、その後、その日の食事を断つこと

サラマ・ビン・アクワウは伝えている

アッラーのみ使いはアーシューラーの日、アスラム族の者を使者として送り「これまで断食をしていなかった者はそれを行い、
また既に食事を取ってしまった者は、その後は夜まで何も口にせぬように」と人々に告げよと命令した。

ムアッウィズ・ビン・アフラーウの娘ルバィイウは伝えている

アッラーのみ使いはアーシューラーの朝、マディーナの周囲に住んでいたアンサールの村々に使者を送り「朝起きて未だ何も口にしていない者はそのまま断食を成し遂げよ。
食事を取ってしまった者は、その後夜までは何も口にせぬように」と告げさせた。
教友達は「われわれは、これ以後この断食を行って来ているし、またわれわれの子供達にもそれを行わせている、アッラーのおぼしめしで。
そしてモスクにも（子供達を連れて）行っているがその時は彼等のために羊毛でおもちゃを作り、もし彼等の中で食事を欲しがって泣く者があれば、断食を破る時間が来るまで、そのおもちゃを彼等に与えている」と言った。

ハーリド・ビン・ザクワーンは伝えている

私はムアッウィズの娘ルバィイウにアーシューラーの日の断食について尋ねた。
彼女は「アッラーのみ使いはアンサールの村々に使者を送られました」
残余のハディースは前述と同様であるが最後の部分に若干の相違がある
（すなわち）「われわれは子供達に羊毛のおもちゃを作り、それを持って出かけ、彼等が食べ物を欲しがった時は、彼等にそのおもちゃを与えて遊ばせ、彼等が断食を成し遂げるようにした」と言った。

イードル・フィトルとイードル・アドハーの両日は断食が禁止されている

アブー・ウバイド（イブン・アズハルのマウラー）は伝えている

私はウマル・ビン・ハッターブと共に祭礼を祝った。

彼は礼拝場に出て来て（人々と）礼拝を行った。

それを終えると人々に説教し「アッラーのみ使いは両祭日には断食を行うことを禁止された。

その一つは、あなた方が断食を破る日（イードル・フィトル）であり、他の一つはあなた方が犠牲に捧げた（肉）を食す日（イードル・アドハー）である」と言った。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いはイードル・アドハーとイードル・フィトルの両日、断食を行うことを禁止された。

カザアはアブー・サイードから聞いたとして（次のように）伝えている

私は彼（アブー・サイード）から重要なハディースを聞いた。

私は「あなたはそれをアッラーのみ使いからお聞きしたのですか」と言った。

すると彼は「私がみ使いから聞かなかったことをいうであろうか。

その御方は『イードル・アドハーとラマダーンあけのイードル・フィトルの両祭日に断食を行うのは適切ではない』と申されるのを聞きました」と言った。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは断食あけの日と、犠牲を屠る日の両日、断食を禁止された。

ジヤード・ビン・ジュバイルは伝えている

ある男がイブン・ウマルの所に来て「私は一日断食を行うことを誓いました。

それがアドハー、またはフィトルの日と一致します」と言った。

イブン・ウマルは「至高なるアッラーは誓いを果すことをお命じになった。

しかしアッラーのみ使いはこの日の断食は禁止された」と言った。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いはフィトルとアドハーの両祭日は断食を行うことを禁止されました。

タシュリークの日（イスラーム暦十二月であるズール・ヒッジャ月の 11、12、13 日）の断食は禁止される

ヌバイシャ・フザリーは伝えている

アッラーのみ使いは「タシュリークの日は食べ、そして飲む日である」と申された。

前述と同様なハディースは別の伝承者経路でも伝わっている。
ただし最後に「そしてアッラーを念ずる」という言葉の付加がある。

イブン・カアブ・ビン・マーリクは彼の父を根拠として伝えている

アッラーのみ使いは、タシュリークの日に、彼（カアブ・ビン・マーリク）とアウス・ビン・ハダサーンを使者として送り
「天国に入るのは信者のみである。ミナーの日（タシュリークの日）は食べそして飲む日である」ということを広く告知させた。

このハディースは別の伝承者経路で伝えられた。その中では「その二人が告知した」と語られている。

金曜日だけ行う断食は好ましくない

ムハンマド・ビン・アッバード・ビン・ジャアファルは伝えている

ジャービル・ビン・アブドッラーがカーバを巡回していた時、私は彼に「アッラーのみ使いは金曜日の断食を禁止されたのでしょうか」と尋ねた。

彼は「そうです。この聖殿の主に誓って」と言った。

ムハンマド・ビン・アッバード・ビン・ジャアファルはジャービル・ビン・アブドッラーに前述のような話を預言者から聞いたかどうかを尋ねた。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方は誰でも、金曜日はその前日も断食をするか、あるいはその次の日も断食をするかでない限り断食をしてはならぬ」と申された。

アブー・フライラは伝えている

預言者は「あなた方は金曜日の夜だけ、特に礼拝を行うということがあってはならない。また習慣的に行っている断食が（たまたま）金曜日と一致するというのでない限り、その日のみ特別に断食をするということがあってはならない」と申された。

「それに耐え難い者の償いは、貧者への給養である」（クルアーン第 2 章 184 節）が廃棄され「それで、あなた方の中その月（ラマダーン）家にいる者はこの月中、断食をしなければならない」（クルアーン第 2 章 185 節）が下された理由

サラマ・ビン・アクワウは伝えている

「それに耐え難い者の償いは、貧者への給養である」（注）（クルアーン第 2 章 184 節）の一節が下った時、断食を望まない者は食べ、その代りのことを償いとして行った。
その結果前述に続く一節（クルアーン第2章185節）が下され、前述のものは廃棄された。

（注）病人、旅行者その他特殊事情の者にはそれの実行上融通性かあることを示す一節である

サラマ・ビン・アクワウは伝えている

われわれはアッラーのみ使いが御在世の時、ラマダーン月を迎えると断食を望む者はそれを行い、望まない者はそれを破って、貧者への食事の提供で償いをしていた。
その結果**「それであなた方の中その月（ラマダーン）家にいる者は断食をしなければならない」**（クルアーン第 2 章 185 節）の一節が下った。

ラマダーンの断食はシャアバーン月に全うすることが許される

アブー・サラマは伝えている

私はアーイシャが（次のように）いうのを聞きました。
私にはラマダーンの断食が後幾日か残っておりました。
でもみ使いにして差上げねばならない仕事、あるいはみ使いの御要望に何時でも応ずる同意のために、シャアバーン月になるまでその断食を全うすることが出来ませんでした。

このハディースは別の伝承者経路で伝えられている。
その中では「それ（アーイシャが断食を行えなかったこと）はアッラーのみ使いのお立場のためです」と伝えている。

ヤヒヤー（途中伝承者の一人）は前述の話に関連して、「私はそれが預言者の（妻としての）彼女の立場のためであると思った」と言っている。

このようなハディースで別の伝承者経路で伝えられたものの中には「み使いにして差上げねばならない仕事のために」という言葉がないのがある。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いが御在世の時、われわれの一人が断食を破らなければならなかったような場合、その御方との生活のために、破った断食の償いはシャアバーン月になるまで果せませんでした。

死者に代って断食を行うこと

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは「果さねばならない断食を残して亡くなった者に対しては、その相続人が代ってそれを果す」と言われました。

イブン・アッバースは伝えている

ある女性がアッラーのみ使いの所に来て「私の母は亡くなりましたが、彼女には果さねばならない一ヵ月の断食がございました」と言った。
み使いは「もし仮に彼女に負債があったとすれば、あなたがそれの返済義務を負うということは御存知であろう」と言われた。
彼女は「はい承知しております」と言った。
み使いは「アッラーへの義務行為はどのような義務行為にも優先して果さねばならない」と申された。

イブン・アッバースは伝えている

ある男が預言者の所に来て「アッラーのみ使いよ、私の母は果さねばならなかった一ヵ月の断食を残して亡くなりました。
それは私が彼女に代って行うのでしょうか」と言った。
み使いは「もし仮に彼女に負債があったとすれば、あなたが彼女に代ってそれの返済義務を負うのではないのですか」と言われた。
彼は「その通りです」と言った。
み使いは「アッラーへの義務行為はどのようなものにも優先して果されねばならない」と申された。

このハディースはアッラーのみ使いから直接聞いた話としてイブン・アッバースを根拠として伝えられた。

イブン・アッバースは伝えている

ある女性がアッラーのみ使いの所に来て「アッラーのみ使いよ、私の母は誓約した断食を果さずに亡くなってしまいました。
それは私が彼女に代って行うのでしょうか」と言った。
み使いは「もし仮にあなたのお母さんに負債があったとすれば、あなたが代ってそれの返済を行うということは御存知であろう」と言われた。
彼女は「はい承知しております」と言った。み使いは「それでは代って断食をしなさい」と申された。

アブドッラー・ビン・ブライダは彼の父を根拠として伝えている

われわれがアッラーのみ使いの側で座っていた時、ある女性がみ使いの所に来た。

彼女は「私は母に奴隷女をサダカとして供しました。

その母が亡くなってしまいました」と言った。

み使いは「あなたには必ず（アッラーからの）報酬があります。

それでその奴隷の女は遺産としてあなたに戻ります」と申しました。

彼女は「アッラーのみ使いよ、母には果さねばならなかった一ヵ月の断食がありました。

それは私が彼女に代って行うのでしょうか」と言った。

み使いは「彼女に代って断食をしなさい」と申された。

彼女はまた「母は一度も巡礼しておりませんでしたが、私が代ってそれをするのでしょうか」と言った。

み使いは「彼女に代ってあなたが巡礼しなさい」と申された。

アブドッラー・ビン・ブライダは彼の父を根拠として伝えている

「私は預言者の側で座っていた」残余のハディースは（前述と）同様であるが、アブドッラー・ビン・ヌマイルによって語られたものは「二ヵ月の断食」となっている。

イブン・ブライダは彼の父を根拠として伝えている

「ある女性が預言者の所に来た」残余のハディースは同一であるが、アブド・ビン・フマイドによって語られたものは、「彼は「一ヵ月の断食」と言った」となっている。

このハディースはスフヤーンを経由して伝えられているものもある。
それでは「彼は「二ヵ月の断食」と言った」となっている。

スライマーン・ビン・ブライダは彼の父を根拠として伝えている

「ある女性が預言者の所に来た」

残余のハディースは他の伝承者達のものと同様であるが、彼は「一ヵ月の断食」と言っている。

断食をしている者が食事に招待されたり、口論しかけられたら「私は断食をしている」ということ

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方は誰でも、断食をしている時食事に招待されたら『私は断食をしております』と言いなさい」と申された。

断食をしている者は口を慎むべきこと

アブー・フライラは伝えている

み使いは「あなた方は誰でも断食をしていて朝起床した時はみだらな言葉を用いてはならない。

そして誰かが悪口を言ったり口論をしかけて来たら『私は断食をしている』と言いなさい」と申された。

断食をしている者の徳

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いが「至高偉大なるアッラーは『断食を除き人間の行為の一つ一つはその者のためである。

しかるに断食はわがためにある。

故にわれはそれに対して報酬を与えるであろう』と申された。

ムハンマドの命を手中にされている御方に誓い、断食を行っている者の息は、アッラーにはじゃこうの香より香わしいのである」と申されたというのを聞いた。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「断食は盾である」と申された（注）。

（注）断食は忍耐力や自制心を養う。

それは卑しい欲望を抑え、それによって陥りやすい失敗を防ぐ、また断食をしている者は争いごとやひわいな言葉の使用を戒しめられている。

それは、ひいては身の防御、安全につながる

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「至高偉大なるアッラーは『断食を除き、人間の行為の一つ一つはその者のためである。

しかるに断食はわがためにある。

故にわれはそれに対して報酬を与えるであろう』と申された。

その断食は盾である。

あなた方は誰でも、断食をしている日には不品行な言葉は慎み、声を張り上げてはならない。

それで誰かが悪口をいったり口論しかけて来たら、『私は断食をしている』と言うがよい。

ムハンマドの命を手中にされている御方に誓い、断食を行っている者の息は、復活の日、アッラーにはじゃこうの香より香わしいのである。

そして、断食をしている者には二つの喜びがある。

その一つは、断食を終えた時の食事の喜び、他の一つは、主にお目通りした時、果した断食（による報酬）の喜びである」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「人間の行為の一つ一つの（報酬は）倍加される。

善行については十倍から七百倍にして頂ける。至高偉大なるアッラーは『断食はわがた

めにある。

わがために欲望や食物を放棄する者には報酬を与えるであろう』と申された。

なお断食をしている者には二つの喜びがある。

その一つは、その者が断食を終えた時の食事の喜びであり、他の一つは、その者が主にお目通りした際の喜びである。

まことに断食をしている者の息はアッラーにはじゃこうの香より香わしいものである」と申された。

アブー・フライラとアブー・サイードは伝えている

アッラーのみ使いは「至高偉大なるアッラーは『断食はわがためにある。われはそれについて報酬を与えるであろう』と申された。

なお断食をしている者には二つの喜びがある。

それは断食を終えた時の（食事の）喜びとアッラーにお目通りした時の喜びである。

ムハンマドの命を手中にされている御方に誓い、断食を行っている者の息は、アッラーにはじゃこうの香より香わしいのである」と申された。

このようなハディースは別の伝承者経路で伝えられている。

それには「み使いは『彼がアッラーにお目通りした時、アッラーは彼に報酬を下さり、彼は喜ぶ』と申された」と伝えている。

サフル・ビン・サアドは伝えている

アッラーのみ使いは「天国にはライヤーンと呼ばれる門があり、復活の日、断食を行っている者はその門より入り、彼等以外の者は一緒に入ることは出来ない。

そこでは先ず『断食をしている者達は何処か』という呼び掛けがあって、彼等はそこより入って行く。

そして彼等の最後の者が入った時、その門は閉じられ（その後は）誰一人入ることは出来ない」と申された。

断食で害を受けたり、権利を喪失したりすることなく、アッラーの道のために耐えてそれを行う者の徳

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーの道のために一日断食を行う下僕は、アッラーがこの日（一日）のために彼の顔を 70 年の間（地獄）の火より遠ざけて下さる」と申された」

このハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

私はアッラーのみ使いが「アッラーの道のために一日断食をする者は、アッラーが 70 年間、その者の顔を地獄の火より遠ざけて下さる」と申されるのを聞いた。

中天に陽がさしかかる前に自発的断食を発意した時はそれを行ってもよい。またそれを実行に移した場合に理由なく破ってもさしつかえない

信者達の母**アーイシャ**は伝えている

ある日、アッラーのみ使いは私に「アーイシャよ、何か食べる物はあるか」と言われました。
私は「み使い様、私達の許には何もございません」と申しました。
するとその御方は「それでは私は断食をする（注）」と申されました。
それからみ使いは外出されましたが、その後私達に贈物がありました（あるいは幾人かの訪問客もございました）。
み使いがお帰りになった時私は「アッラーのみ使い様、私達に贈物がありました（または訪問客もございました）私はあなたのためにある物をとって置きました」と申しました。
み使いは「それは何か」と聞かれました。
「ハイス（なつめ椰子の実を牛乳やバターと混ぜた食べ物）です」と申しますと「それをもって来なさい」と言われました。
私がそれを持って来て差し上げますとお食べになり「私は起床した時から断食をしていた」と申されました。
タルハは「私がこの話をムジャーヒドに話すと彼は『それ（自発的な断食）は、人が自己の財産の中からサダカの分を別にしておくようなものである。
それでもし彼がそれを（使用することを）望むなら消費するし、（保有しておきたいのなら）そのままとって置くのです』と言った」と話した。

（注）断食をするときは、それを行うことを発意しなければならない

信者達の母**アーイシャ**は伝えている

預言者はある日、私の所に御出になりますと「あなたの所に何か食べる者はありますか」と言われました。
私が「何もございません」と申しますと「それでは私は断食をしよう」と申されました。
別の日、その御方は私の所に御出でになりました。
この時私は「アッラーのみ使い様、私達の所にハイスの贈物がございました」と言いました。
み使いは「私にそれを見せなさい。
私は朝から断食をしていた」と申され、それをめし上がりました。

断食を忘れ、何か食べたり、飲んでしまったりした者も断食を続行すること

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「断食をしてそれを忘れ、何か食べあるいは飲んでしまった者も、断食を継続せよ。

食物や飲み物をお与え下さるのはアッラーのみであられる」と申された。

ラマダーン月以外における預言者の断食また、毎月（幾日かを）断食することが望ましいこと

アブドッラー・ビン・シャキークは伝えている

私はアーイシャに「預言者はラマダーンの他に、一ヵ月間を通して断食をされた月がありますか」と尋ねた。

彼女は「アッラーに誓い、私はその御方が亡くなられるまで、ラマダーンを除いて、一ヵ月間通して断食をした月があったのか、また一日も断食をなされなかった月があったのか存じません」と言った。

アブドッラー・ビン・シャキークは伝えている

私はアーイシャに「アッラーのみ使いは一ヵ月通して断食をされておられたでしょうか」と尋ねた。

彼女は「私はその御方が亡くなるまで、ラマダーン月を除き、一ヵ月間通して断食をされた月があったのか、また全くそれをなさらなかった月があったのか存じません」と言った。

アブドッラー・ビン・シャキークは伝えている

私はアーイシャに預言者の断食について尋ねた。

彼女は「み使いは私達が『その御方は断食をされております。

その御方は断食をされております』という程継続的に断食をされておられました。

また時には『その御方は断食をなさいません。

その御方は断食をなさいません』と言う程（何日もの間）断食をなさいませんでした」と言った。

なお彼女は「私はマディーナに参りましてから、その御方がラマダーン月以外の一ヵ月を、適して断食をされたのを存じません」と言った。

前述のようなハディースは**アブドッラー・ビン・シャキーク**を根拠として伝えられた。
しかし伝承者経路にヒシャームとムハンマドを記述していないものもある。

信者達の母**アーイシャ**は伝えている

アッラーのみ使いは私達が「み使いは断食をお止めになりません」と言う程、それをよくされておりました。

そしてまた「その御方は断食をなさいません」と言う程（何日も）それを行われませんでした。

私はアッラーのみ使いが（ラマダーンを除いて）シャアバーン月程多く断食をされた月は存じません。

アブー・サラマは伝えている

私はアーイシャにアッラーのみ使いの断食について尋ねた。

彼女は「み使いは私達が『実に良く断食をなさいます』と申し上げる程それをなさいました。

また（時には）『あの御方は断食を放棄されてしまいました』と言う程（幾日も）それをなさいませんでした」と言った。

彼女はまた「私はその御方がシャアバーン月程多く断食をされた月は他に存じません。

その御方はシャアバーン月は数日を除いただけで後は全部断食をされておられました」と言った。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは一年を通じ、シャアバーン月のように断食を多くされた月は他にありませんでした。

み使いは「あなた方は自身が耐えられる仕事を行うがよい。

まことに、アッラーは（いかなることも）お疲れにはならないが、あなた方は疲れてしまう」と申された。

なおその御方は「アッラーにとって最も好ましい行為は、たとえ少しでも継続的に行われるものである」とも申しておられました。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いはラマダーン月以外は一ヵ月間全て、断食をされた月はない。

だがその御方が断食をされた時は人が「アッラーに誓い、その御方は断食をお止めにならない」と言う程継続してそれをされておられた。

そしてまたその御方が断食を行われない時は、人が「アッラーに誓い、み使いは断食を放棄されてしまわれた」と言う程に（何日もの間）それをなさらなかった。

前述のハディースは別の伝承者経路で伝えられている。
それには「み使いがマディーナに来られて以来、一ヵ月間継続して（断食をされたことはなかった）」と述べられている。

ウスマーン・ビン・ハキーム・アンサーリーは伝えている

私はサイード・ビン・ジュバイルにラジャブ（七月）の断食について尋ねた。

その時はちょうどラジャブでもあった。

彼はイブン・アッバースが（次のように）話すのを聞いたと言った。

アッラーのみ使いはわれわれが「その御方は断食をお止めにならない」と言う程に、よく断食をされておられた。

また「その御方は断食を放棄されてしまった」と言う程（幾日もの間）それを放棄されていた。

このようなハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アナスは伝えている

アッラーのみ使いは「その御方は確かに断食をされた。

確かに断食をされた」と言われる程に、よく断食をされておられたし、「その御方は確かに断食を放棄されてしまった。

確かに断食を放棄されてしまった」と言われる程、それを放棄されておられた。

継続的断食の禁止と一日おきの断食の徳

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースは伝えている

「私は生ある限り必ず夜は起きて（礼拝し）、昼は断食を行うであろう」と話していることが、アッラーのみ使いに伝えられた。

その時み使いは私に「それをいったのは君であろう」と申された。

私は「み使いよ、確かに私がそれを言いました」といった。

その御方は「君にはそれは出来ない。それで君は断食をし、（時刻が来たら）それを破るがよい。

そして眠り（礼拝のために）起きよ。

君は月に三日断食をせよ。

まこと、善行にはそれと同等のものを 10 倍にして頂ける。

それは終生の断食のようなものである」と申された。

私は「私にはそれ以上のことが可能です」と申し上げると、その御方は「一日断食をせよ。

そして次の二日はそれを破るがよい」と申された。

私は「アッラーのみ使いよ、私にはそれ以上のことが可能です」と申し上げた。

すると「一日断食をせよ。

そして（次の）一日はそれを破るがよい。

それは（預言者）ダビデの断食であり、最も良い断食でもある」と申された。

私は「私にはそれ以上のことが可能です」と申し上げた。

するとアッラーのみ使いは「それ以上良い断食はない」と申された。

アブドッラー・ビン・アムルは「私が老いた時、私は（毎月）三日間（の断食を）行った。

それはアッラーのみ使いが『私（み使い御自身）にとって私の家族や財産より好ましいものである』と申されていたものである」と言った。

ヤヒヤーは伝えている

私とアブドッラー・ビン・ヤジードはアブー・サラマの所に急いで行った。

そして彼（アブー・サラマ）に我々が来たことを告げさせた。

われわれは彼の家の入口から程遠くない所にあったモスクで彼を待った。

アブー・サラマはそこに来て「もしよろしかったら（家に）お入り下さい。

しかしここでよければここ（モスク）に座りましょう。お話し下さい」と言った。

彼（ヤヒヤー）は（次のように）語っている。

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースは（次のように）言った。

私は毎日断食をし、毎夜クルアーンを読誦していた。

これが預言者のお耳に達し、その御方から使いの者が見えたので私はみ使いの所に行った。

み使いは「私は君が毎日断食をし、毎夜クルアーンを読誦しているということを知らされたが」と申された。

私は「預言者よ、それは本当です。

私はただ良きことを願ってそれを行っているのです」と言った。

み使いは「君にとっては毎月三日の断食で十分である」と申された。

私は預言者よ「私はそれ以上のことに耐えられます」と申し上げた。

み使いは「君は、君の妻を愛し、客を歓待し、自分の体を大切にすることこそが重要なのです。

それであなたは預言者ダビデの断食を行うがよい。

まことに、彼は人々の中で最も敬虔なアッラーの下僕であった」と申された。

私は「預言者よ、ダビデの断食とはどのようなものでしょうか」と尋ねた。

み使いは「その御方は一日断食をされると次の一日はそれを放棄された」と申され、「毎月クルアーンを一回読誦せよ」と言われた。

私は「預言者よ、私にはそれ以上のことが可能です」と申し上げた。

するとみ使いは「それを 20 日で読誦せよ」と申された。

私は「預言者よ、私にはそれ以上のことが可能です」と申し上げると「10 日で読誦せよ」と申された。

更に私は「預言者よ、私にはそれ以上のことが可能です」と申し上げると、「それを一週間で読誦せよ、それ以上時間を短縮してはならぬ。

まことに、君にとって大事なことは、君の妻を愛し、客を歓待し、君自身の体を労ることである」と申された。

彼（アムル・ビン・アース）は「私は自身に厳しく対処し、試練に臨んだ」と言った。

そしてまた「預言者は私に『これは分らないことだが、君は長命であるかも知れない。

そうすれば（誓約は破られぬ故）長い間厳しさに耐えて行かねばならない』と申されたが、それが事実となった。

私が老いて（それの実行が困難になった時）私は預言者が緩和して下さった御許可を受入れておけばよかったと思った」と言った。

前述のハディースは別の伝承者程路を経て伝えられている。

その中で彼はみ使いの言葉「毎月、三日（の断食を）」の後に「善行の一つ一つはそれと同等のものを 10 倍にして頂ける。

それは終生（行うものと同じ）であると申された」を付加している。

更にハディースの中で「私は『預言者ダビデの断食とはどのようなものでしょうか』とお聞きすると、『生涯の半分のものである』と言われた」と伝えている。

なおクルアーンの読誦については述べられてはいないし、「君の客を歓待することが大切である」という言葉もない。

だが（それに代って）「君の子供をいとおしむことが大切である」という言葉が述べられている。

アブドッラー・ビン・アムルは伝えている

アッラーのみ使いは私に「全クルアーンを毎月読誦せよ」と言われた。
私は「それより短い時間で全部読誦出来ます」と言った。
み使いは「それを 20 夜で読誦せよ」と言われた。
私は「それより短い時間でそれを読誦出来ます」と言った。
み使いは「それではそれを七夜で読誦せよ。それ以上（時間を）短縮してはならぬ」と申された。

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースは伝えている

アッラーのみ使いは「アブドッラーよ、某は常々（礼拝のため）夜間起床していたが、それを止めてしまった。君はそのようであってはならぬ」と申された。

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースは伝えている

アッラーのみ使いは私が継続的（注）に断食をし、夜間の礼拝も行っているということを耳にされた。
その時み使いが使いの者をよこされたか、それとも私がみ使いとお会いしたかのいずれか（はっきり覚えていないが）、その御方は「私は、君が断食をしてそれを破ろうともせず、夜はまた一晩中礼拝している、ということを知らされた。
だがそのようにしてはならぬ。
目には目の、身体には身体の、そして家族には家族の役割がある。
斎戒し、そして寛くが良い、祈拝したら休むがよい。
それで 10 日に一日だけ断食をせよ。君には残りの九日も報酬がある」と申された。
私は「預言者よ、私にはそれ以上の能力があります」と申し上げた。
み使いは「（預言者）ダビデの断食をせよ」と申された。
私は「み使いよ、ダビデはどのような断食をされていたのでしょうか」と言った。
み使いは「その御方は一日断食をしたら一日はそれを放棄しておられた。
そして敵に遭遇した時は敵に後を見せることはなさらなかった」と申された。
私は「預言者よ、私には（その御方のように勇敢に振る舞える）保証はありません」と申し上げた。

（このハディースの伝承者の一人アターウは「私はどうして継続的な断食の話が述べられたのか覚えてはいない」と言った）
その時預言者は「継続的な断食をする者のそれは断食ではない。

継続的な断食をする者のそれは断食ではない。継続的な断食をする者のそれは断食ではない」と申された。
（注）ここでの継続的の意はラマダーン以外の月もラマダーン同様の断食を行うこと

このハディースは別の伝承者経路で伝えられている。
（イマーム・ムスリムは「アブー・アッバースとはファッルーフの息子サーイブのことで、マッカ住人の一人でもありハディース伝承に信頼できるものである」と言っている。）
「このハディースはマッカの伝承者の中で、信頑の厚いアブー・アッバース・サーイブ・ビン・ファッルーフを拠り所として伝えられた」と言った。

アブドッラー・ビン・アムルは伝えている

アッラーのみ使いは私に「アブドッラー・ビン・アムルよ、君は毎日断食をし、夜は夜通し礼拝を行っている。
もし君がそのようにし続ければ、目は落ち窪み視力は弱くなってしまう。
継続的な断食をする者のそれは断食ではない。
一ヵ月に三日の断食は一ヵ月全ての断食と同様である」と申された。
私は「それ以上のことに耐えられます」と言った。
するとみ使いは「君は（預言者）ダビデの断食を行うがよい。
その御方は一日断食をすると（次の）一日はそれをしておられた。
そして（敵に）遭遇した時は敵に後を見せることはなかった」と申された。

前述のハディースは別の伝承者経路で伝えられている。
その中では「心は疲れ切る」というみ使いの言葉を伝えている。

アブドッラー・ビン・アムルは伝えている

アッラーのみ使いは私に「私は君が夜通し礼拝し、昼は断食を行っているということを聞いたが」と申された。
私は「まことに、私はそのようにしております」と言った。
するとみ使いは「君がもしそのようにし続ければ目は落ち窪み、心は疲れ切ってしまう。
君は目を休め、心身を労り、家族を大切にしなければならない。
礼拝に起きたら、また休むがよい。断食を行い、（その後は）それを破るがよい」と申された。

アブドッラー・ビン・アムルは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーが最もお好みになる断食は（預言者）ダビデの断食である。
そしてアッラーが最も好まれる礼拝も（預言者）ダビデの礼拝である。

その御方は一晩の半分を休み、夜の三分の一を礼拝に使用し、残り六分の一を再びお休みになっておられた。
そして一日断食をすると、次の日はそれを放棄されていた」と申された。

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースは伝えている

預言者は「アッラーにとって最も好ましい断食は(預言者)ダビデの断食である。
ダビデは一日おきの断食をされていた。
至高偉大なるアッラーにとって最も好ましい礼拝はダビデの礼拝である。
ダビデは一晩の半分を休んでから礼拝のため起床されていた。
そして夜半後、夜の三分の一を礼拝に使用され、その後再びお休みになった」と申された。
私(中途伝承者)がアムル・ビン・ディーナールに「アムル・ビン・アースは(その御方が)夜半後、夜の三分の一を起きていた、と言っていたのですか」と尋ねますと
彼は「はい、そうです」と答えました。

アブー・キラーバはアブー・マリーフが(次のように)告げたと伝えている

私はあなたの父君と御一緒にアブドッラー・ビン・アムルの所に行った。
彼はわれわれに(次のような)話をした。
アッラーのみ使いは私の断食についてお耳にされた。
するとその御方は私の所に御出でになった。
私はその御方になつめ椰子の繊維の入った皮のクッションをおすすめしたが、その御方は大地にお座りになった。
クッションは私とその御方の間に置かれたままであった。
み使いは私に「一ヵ月に三日間の断食では満足ではないのか」と申された。
私は「アッラーのみ使いよ、(それでは満足ではありません)」と言った。
み使いは「五日では」と申された。
私は「いいえ、アッラーのみ使いよ、(それでも満足ではありません)」と言った。
み使いは「一週間」と申された。
私は「いいえ、アッラーのみ使いよ」と言った。
み使いは「九日では」と申された。
私は「いいえ、アッラーのみ使いよ」と言った。
み使いは「11 日では」と申された。
それでも私は「いいえ、アッラーのみ使いよ」と申し上げると預言者は「ダビデが行われた一日置きの断食、つまり半生の断食より優れたそれはない」と申された。

アブドッラー・ビン・アムルは伝えている

アッラーのみ使いは私に「（月に）一日断食をせよ、君は残りの日々の報酬も得られる」と言われた。

私は「私にはそれ以上のことが出来ます」と言った。

み使いは「二日断食をせよ、君は残りの日々の報酬も得られる」と申された。

私は「私にはそれ以上のことが出来ます」と言った。

み使いは「三日断食をせよ、君は残りの日々の報酬も得られる」と申された。

私は「私にはそれ以上の事が出来ます」と言った。

み使いは「四日断食をせよ、君は残りの日々の報酬も得られる」と申された。

私は「私にはそれ以上のことが出来ます」と申し上げると

み使いは「アッラーにとって最も良い（預言者）ダビデの断食をせよ。その御方は一日断食をすると、一日はそれを放棄しておられた」と申された。

アブドッラー・ビン・アムルは伝えている

アッラーのみ使いは私に「アブドッラー・ビン・アムルよ、私は君が昼は断食を行い、夜は夜通し礼拝しているということを耳にした。

そのようなことはしてはならぬ。

君は体を労り、目を休め、妻を仕合わせにしなければならぬ。

断食をしたら次はそれを破るがよい。

君は月に三日の断食をせよ。それは終生の断食でもあるのだ」と申された。

私は「アッラーのみ使いよ、私には（それ以上のことをする）能力があります」と言った。

み使いは「それでは君は（預言者）ダビデの断食をせよ。

つまり一日断食をし、次の一日はそれを破れ」と申された。

彼（アブドッラー・ビン・アムル）は（老いてから）「ああ、み使いの特許を受け入れておけばよかった」とよく口にしていた。

毎月三日間の断食が好ましいこと、
そして、アラファの日、アーシューラーの日、月曜日、木曜日の断食について

ムアーザ・アダウィーヤは伝えている

私は預言者の妻アーイシャに「アッラーのみ使いは毎月三日断食をされていたのでしょうか」と尋ねました。
彼女は「はい、そうです」と答えました。
私は更に「その御方は月のどのような日に断食をされておられたのでしょうか」と言いました。
彼女は「その御方が断食をされた日は特にどの日というのではありませんでした」と申しました。

イムラーン・ビン・フサインは伝えている

預言者は彼（またはみ使いの言葉を聞いていた男）に「おお某よ、君はこの月の中頃に断食を行ったか」と申された。
彼は「いいえ」と言った。
み使いは「君が断食を破った時は（その後）二日間断食をせよ」と申された。

アブー・カターダは伝えている

ある男が預言者の所に来て「どうしてあなたは断食をするのですか」と言った。
その時み使いは怒った。
ウマルがみ使いの怒りを見た時「われわれは（われらが）主であられるアッラー、宗教であるイスラーム、われわれの預言者であるムハンマドに心より満足している。
われわれはアッラーとそのみ使いの怒りが静まりますよう祈願する」と言い、ウマルはみ使いの怒りが静まるまでこの言葉を繰り返した。
それからウマルは「アッラーのみ使いよ、終生連続的に日中の断食を行う者についてはいかがなものでしょうか」と言った。
み使いは「その者にとってそれは断食をしたでもなく、それを破ったでもない」
（あるいは）「その者が断食をしなかったとか、それを破らなかったとかとは別のことである」と申された。
ウマルは「二日断食をし、一日それを破る者はいかがですか」と言った。
み使いは「それに耐え得る者があろうか」といわれた。
ウマルは「一日断食をし、一日それを破る者についてはいかがでしょうか」といった。
み使いは「それは（預言者）ダビデの断食である」と申された。
更にウマルは「一日断食をし、二日それを破る者についてはいかがでしょうか」と尋ねた。

み使いは「私にその断食が出来れば良いのだが」と申された。
そしてまた「毎月三日間の断食（注）と毎年のラマダーン月のそれは連続的（に日の出から日没までの）ものである。
私はアラファの日（ズール・ヒッジャ月の九日）の断食では、アッラーに前年の罪と来る年の罪をお許し下さるよう請い願い、アーシューラーの日（ムハッラム月の 10 日）の断食では以前の罪のお許しを祈願する」と申された。

（注）毎月三日間だけ連続的な断食が許される。
それを行う日は月暦の 13、14、15 日が好ましい。
それらの日は月明りの日々である

アブー・カターダ・アンサーリーは伝えている
アッラーのみ使いは御自身の断食について尋ねられた。
その時み使いはお怒りになった。
ウマルは「われわれは（われらが）主であられるアッラー、宗教であるイスラーム、み使いであるムハンマドに心より満足し、忠誠のお誓いを致したのだ」と言った。
み使いは連続的に日中の断食を終生行うことについて尋ねられると
「それは断食をしたでもなく、それを破ったでもない（あるいはそれは、断食をしなかったとか、それを破らなかったとかとは別のことである）」と申された。
更にみ使いは二日間の断食をし、一日はそれを破ることについて尋ねられると「誰がそれに耐え得るであろうか」と申された。
そしてみ使いは、一日断食をし二日それを破ることについて尋ねられると「ああ、アッラーがわれわれにそれが可能な力をお与え下されば良いが」と申された。
み使いはまた一日断食をし一日はそれを放棄することについて尋ねられると「それは私の兄弟（である預言者）ダビデの断食である」と申された。
更に月曜日の断食について尋ねられると「それは私が生まれた日であり、私が預言者としての使命を負った日（または天啓が下った日である）」と申された。
そしてみ使いは「毎月三日間の断食と（毎年の）ラマデーン月の断食は連続的（に日の出から日没まで）ものである」と申された。
なおみ使いはアラファの日の断食について尋ねられると「それは前年と来る年の罪をあがなうものである」と申された。
次いでアーシューラーの日の断食について尋ねられると「それは前年の罪をあがなうものである」と申された。
イマーム・ムスリムは「シュウバが語ったハディースの中には「み使いは月曜日と木曜日の断食について尋ねられた」というのがある。

しかしわれわれ（イマーム・ムスリム）は木曜日のことについては誤りがあると見たので記述しなかった」と言った。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。
その中では月曜のことについては述べているが、木曜のことについては触れられていない。

アブー・カターダ・アンサーリーは伝えている
アッラーのみ使いは月曜日の断食について尋ねられると「それは私が生まれた日で、私に天啓が下った日である」と申された。

シャアバーン月の中日の断食について

イムラーン・ビン・フサインは伝えている

アッラーのみ使いは彼（または別の者に）「あなたはシャアバーン月の真ん中に断食を行ったか」と言われた。
彼は「いいえ」と言った。
するとみ使いは「もしあなたがそれを行わなかったのであれば、（その代りに）二日間断食をせよ」と申された。

イムラーン・ビン・フサインは伝えている

預言者はある男に「あなたは今月（シャアバーン）の中頃に断食を行ったか」と申された。
彼は「いいえ」と言った。
み使いは「それではその代りに、君がラマダーンの断食を完遂した後で、二日間の断食を行え」と申された。

イムラーン・ビン・フサインは伝えている

預言者はある男に「あなたは今月（すなわちシャアバーン月）の中頃に断食を行ったか」と言われた。
彼は「いいえ」と言った。
するとみ使いは「それではその代りとして、一日または二日の断食をラマダーン月が終ったら行え」と申された。
（シユウバはそれについて疑った）そして彼は「私はそのお方が「二日間」と言われたと思う」と言った。

このハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

ムハッラム月の断食の徳

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「ラマダーン月に次いで良い断食はアッラーの月、ムハッラムのそれである。
そして義務の礼拝に次いで良い礼拝は夜間のものである」と申された。

アブー・フライラは伝えている

み使いは「定められた礼拝に次いで徳のある礼拝は何時行うものか、またラマダーンに次いで徳のある断食は何時行うものか」について尋ねられた。
み使いは「定められた礼拝に次ぐ良い礼拝は夜間に行うものであり、ラマダーンの断食に次いで良い断食はアッラーの月、ムハッラムに行うものである」と申された。

前述のようなハディースはアッラーのみ使いから直接聞いた話として、別の伝承者経路でも伝えられている。

ラマダーンに続き、シャッワール月（イスラーム暦十月）に六日の断食の挙行が好ましい

アブー・アイユーブ・アンサーリーは伝えている

アッラーのみ使いは「ラマダーンの断食を終え、続けてシャッワール月に六日間の断食を行うのは（好ましいもので）それは終生の断食のようなものである」と申された。

アブー・アイユーブ・アンサーリーは伝えている

私はアッラーのみ使いが前述のような（ハディースを）話されるのを聞いた。

アブー・アイユーブは前述のようなハディースを他の伝承者経路でも伝えている。

ライラトル・カドルの徳と、それの欣求の勧め

イブン・ウマルは伝えている

預言者の教友達の幾人かが（ラマダーンの）最後の週に、夢の中でライラトル・カドルを見た。

アッラーのみ使いは「私はあなた方の見た夢が（ラマダーン月の）最後の週に一致したということを知った。

そこで、それの欣求（ごんぐ）を望む者は最後の週にそれを行え」と申された（注）。

（注）ライラトル・カドルは預言者にクルアーンが下されたその夜のことで（クルアーン第 4 章 3 節）、ラマダーン月の下旬の一夜といわれている。

何日であるかは明らかではない。

一般には 27 夜を「ライラトル・カドル」と呼ぶ。

クルアーン第 97 章にあるようにこの夜の礼拝は 1000 月以上の価値がある

イブン・ウマルは伝えている

預言者は「（ラマダーン月）の最後の週にライラトル・カドルを欣求せよ」と申された。

サリームは彼の父を拠り所として伝えている

ある男が（ラマダーン月の）27 日の夜にライラトル・カドルを見た。

預言者は「私はあなた方の夢が（ラマダーン月の）終りの 10 日間に一致したということを知った。

それで諸君は（その 10 日の中の）奇数日の夜に）にそれを欣求せよ」と申された。

サーリム・ビン・アブドッラー・ビン・ウマルは彼の父が（次のように）いったと伝えている

アッラーのみ使いは「ライラトル・カドルに関して、あなた方の幾人かはそれを夢で、最初の週に見た。

またある者はそれを最後の週に見た（と言う）それで、それの欣求は最後の 10 日間にせよ」と申された。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「それ（ライラトル・カドル）を月末の 10 日間（の夜）に欣求せよ。

それでもしそれを行う者が、体が弱かったり年をとっている者であれば（それを行うのは）最後の一週間で十分である」と申された。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「それを欣求する者は、月末の 10 日間に行え」と申された。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「月末の 10 日間（の夜）に（あるいは最後の九日間に）ライラトル・カドルが何時であるかを欣求せよ」と申された。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「私はライラトル・カドルを見ていた。

その時私の家族の誰かが私を眠りから覚ました。

それが私にそれを忘れさせた。

諸君はそれを最後の 10 日間に欣求せよ」と申された。

ハルマラ（伝承者の一人）は「み使いは『私はそれを忘れた』と申された」と言った。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いはラマダーン月の中旬の 10 日間の夜は「マスジドに）お籠りして一心に祈願しておられた。

20 日の晩が過ぎ 21 日の夜を迎えると、通常その御方は御自分の住居にお帰りになっていた。

その時み使いと一緒にその行事を行っていた者達も帰って行った。

ところが、いつもは帰られるはずのその夜（21 日の夜）はその場所に止まられて人々に説教され、アッラーがお望みになる事柄を果すようお命じになった。

そしてみ使いは「私はこの 10 日間の夜、アッラーへのお勤めを行って来たが、この月の最後の 10 日間もその勤めを行うことにした。

それで今まで私と一緒にそれを行って来た者はそれぞれが居た場所で夜を過すがよい。

私は一度ライラトル・カドルを見た。

だがそれが何時の晩であったか忘れてしまった。

諸君はそれを最後の 10 日間の奇数日に欣求せよ。

なお私は（夢で）私が水と泥の中でひざまずいて礼拝しているのを見た」と申された。

アブー・サイード・フドリーは「21 日の夜は雨が降った。

それでアッラーのみ使いが礼拝されていたモスク（の屋根）から雨垂れが落ちた。

私が夜明けの礼拝を終えられたその御方を見ると、お顔は水に濡れ泥がついていた」と言った。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いはラマダーン月の中旬の 10 日間、マスジドに御籠りして一心に祈願しておられた。

残余のハディースは前述と同一であるがその中に「み使いは『その者が勤めを行った場所から離れてはならない』と申された」

また「その御方の両頬は泥と水がたくさんついていた」等に若干の相違が見られる。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いはラマダーンの初旬の 10 日間、マスジドにお籠りして一心に祈願しておられた。

そしてその月の中旬の 10 日間は入口にすだれが懸っているトルコ風のテントで祈願しておられた。

み使いはテントのすだれをお上げになって顔を出され、人々に話しかけられた。

皆その御方の近くに寄った。

み使いは「私は初旬の 10 日間、この夜（ライラトル・カドル）を欣求するために一心にアッラーに祈願した。

それから中旬の 10 日間もその勤めを行った。

すると（天使が）私の所に使わされ『それは下旬の 10 日の中のどの晩かである』とお告げになった。

それで、あなた方の誰でもお籠りの祈願を望む者はそれを行うがよい」と申された。

すると人々はその御方に倣ってその勤めを行った。

み使いは「私は夢の中でそれ（ライラトル・カドル）を奇数日の夜に見たが、その翌朝私が泥と水の中でひぎまずいているのも見ている」と申された。

21 日の夜明け、その御方が礼拝に来られた時は雨が降っていて、モスク（の屋根）からは雨垂れが落ちていた。

それで私（伝承者）はそこに泥と水を見た。

その御方が礼拝を終えられて出て来られた時、その御方の額、鼻の先には泥と水がついていた。

その夜は下旬の 21 日の夜であった。

アブー・サラマは伝えている

われわれはライラトル・カドルについて話し合った。

それで私は友人のアブー・サイード・フドリーの所に来て彼に「なつめ椰子の庭園に行こうではないか」と言ってさそった。

その時彼は黒い縁取りのある外衣を着てやって来た。

私は彼に「君はアッラーのみ使いがライラトル・カドルについて話されるのを聞いたか」と

いった。
彼は「聞いたとも。
われわれはアッラーのみ使いに倣ってラマダーンの中旬の 10 日間の晩は（モスク）に籠って一心にアッラーに祈願していた。
20 日の朝になるとその御方はわれわれの所に出て来られて（次のように）説教された。
『私はライラトル・カドルを見せられたがそれを忘れた。
（またはそれを忘れさせられた）
諸君はそれを下旬の奇数日の夜に欣求せよ。
私は（夢で）私が水と泥の中でひぎまずいて礼拝しているのも見た。
それで私と共にお籠りの祈願を行っていた者は、その者が居た場所に戻るがよい』と申された」
彼（アブー・サイード・フドリー）は「われわれは（祈願を行っていた場所に）戻った。
その時空には雲のかけらも見えなかったが（その後）雲が広がって雨となり、モスクの屋根から雨垂れが滴って来た。
その屋根はなつめ椰子の枝葉で敷かれていたからである。
折しも礼拝が行われた。
私はアッラーのみ使いが水と泥の中でひざまずいて礼拝されるのを見た。
そのためにみ使いの額に泥の跡が残っていたのを知っている」と言った。

前述のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。
それには「私は（礼拝を）終えられたアッラーのみ使いを見た。
その時、その御方のお顔と鼻の頭に泥の跡が残っていた」と述べられている。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いはライラトル・カドルがその御方に明白になる前には、ラマダーン月の中旬の 10 日間にその晩を欣求されるために（マスジドに）お籠りして祈願されていた。
そしてそれらの夜が過ぎるとテントを取り除くようお命じになり、それは引き払われた。
その後、その夜がラマダーン月の下旬にあることをお知りになって再びテントを張るよう命じられ、それは張られた。
それからみ使いは人々の所に来られ「皆よ、私にライラトル・カドルが明白にされたので、それを知らせるために来た。
すると互いに自己の権利を主張して譲らない、悪魔を伴った二人の男がやって来た。
それが私にそのことを忘れさせたのである。
それで諸君はその晩をラマダーンの下旬の 10 日間に欣求せよ。
それは九日、七日、五日に行うがよい」と申された。
私（伝承者の一人）は「アブー・サイードよ、君はその日々に関してはわれわれより良く御

存知の筈である」と言った。
彼は「まことに、われわれはそれについてはあなた方より正しく理解している」と言った。
私は「その九日、七日、五日とは何でしょう」と言った。
彼は「21 日（の夜）が過ぎれば次の日は 22 日、残るは九日である。
23 日（の夜）が過ぎれば、後は七日であり、そして 25 日が過ぎれば残るは五日である」と言った。
イブン・ハッラードは「互いに自己の権利を主張する」という語の代りに「互いに論争する」という言葉を用いた。

アブドッラー・ビン・ウナイスは伝えている

アッラーのみ使いは「私はライラトル・カドルを見せられたが、それを忘れさせられた。
またその翌朝、私が水と泥の中でひぎまずいて礼拝しているのも見せられた」と申された。
彼（伝承者）は「23 日の夜は雨であった。
アッラーのみ使いはわれわれを先導して礼拝された。
その御方が去られる時、水と泥がその御方の額と鼻についていた」と言った。
彼はまた「アブドッラー・ビン・ウナイスは「23 日」（を属格で言っていた）」と述べた。

アーイシャとイブン・ヌマイルは伝えている

アッラーのみ使いは「ライラトル・カドルをラマダーンの下旬の 10 日間に欣求（中途伝承者の一人ワーキウはこの言葉についてتحـــرو taharraw を使用した）せよ」と申された。

ジッル・ビン・フバイシュは伝えている

私はウバイユ・ビン・カアブに「君の兄弟（宗教上の）イブン・マスウードは『一年を通して夜間礼拝を行う者は、ライラトル・カドルを見出す』といったであろう」と聞いた。
ウバイユは人々が（その一夜にのみ）集中せず（常日頃も夜間礼拝を挙行することを）望んでいたのだ。
ところで彼はそれ（ライラトル・カドル）がラマダーン月にあり、しかもそれが下旬の 10 日間の中の 27 日の夜ということを知っていたのだ」と言った。
私はアブー・ムンジル（ウバイユの別称）よ、君はどのような根拠からそのように言うのか」と言った。
彼（ウバイユ）は「アッラーのみ使いが申された徴候や印によってである。
それは、その日（太陽が）毫光のない姿で昇ってくる」と言った。

ジッル・ビン・フバイシュは伝えている

ウバイユ・ビン・カアブはライラトル・カドルに関して「アッラーに誓い、私はそれを本当に知っている。

シュウバは『私のもてる知識の中で最高のものは、それが 27 日の夜であり、アッラーのみ使いがわれわれに礼拝の挙行を命じられた夜である』と言った」と述べている。
だがシュウバは「アッラーのみ使いが礼拝の挙行を命じられた夜である」という言葉について私に話したのだ」と言った。

アブー・フライラは伝えている
われわれはアッラーのみ使いの許でライラトル・カドルについて話し合った。
その時み使いは「あなた方の中で、大盤の一部分のような月が昇る時を記憶している者はあるか」と申された。

参籠の書

ラマダーン月の下旬の十日間、マスジドに籠って祈願することの奨励

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはラマダーン月の最後の十日間、マスジドにお籠りになって一心に祈願されていた。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはラマダーン月の下旬の十日間、マスジドにお籠りになって一心に祈願されていた。

（アブドッラー・ビン・ウマルより前述のハディースを聞いた）

ナーフィウは「アブドッラーは私にアッラーのみ使いが常々参籠されていたマスジドを見せてくれた」と言った。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いはラマダーン月の下旬の十日間、マスジドにお籠りになって一心に祈願されておられました。

このハディースは**アーイシャ**により、他の伝承者経路でも伝えられている。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、その御方が至高偉大なるアッラーの御許に召されるまで、ラマダーン月の最後の十日間はマスジドにお籠りになって一心に祈願されておられました。

その後、その御方の妻達が（それぞれの居所で）お籠りの祈願を致しました。

お籠りの祈願を望んだ者がその場所に入る時について

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いがお籠りの祈願を望まれると、夜明けの礼拝を行われてからマスジドの祈願の場所にお入りになりました。
そして(そこの一部に)テントを張るようお命じになり、それが張られるとラマダーン月の最後の十日間、それに御籠りになって祈願されたのです。
時に、ザイナブ(預言者の妻の一人)も彼女のテントを張るよう命じました。
それが張られると、預言者の他の幾人かの妻達もそれぞれテントを張るよう命じました。
そしてそれもまた張られました。
アッラーのみ使いが夜明けの礼拝を挙行されて御覧になると(多くの)テントが張られているではありませんか。
その時み使いは「あなた方が(何故ここで)敬虔な祈りをささげることを望むのか」と言われ、その御方のテントを取り除くよう命じられ、その年のラマダーン月のお籠りを放棄されました。
そしてシャッワール月の最初の 10 日間にそれを行われました。

このハディースは他の伝承者経路でも伝えられている。
それにはアーイシャ、ハフサ、ザイナブ等がマスジドにお籠りのテントを張ったと述べている。

ラマダーン月の最後の 10 日間の奮励

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いはラマダーン月の最後の 10 日に入りますと、夜は夜更けまで（礼拝のために）起きておられ、御家族を（礼拝に）お起しになりました。
その時御自身は既に礼拝を行う用意は済ませておられました。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いはラマダーン月の最後の 10 日間は、他では見られない程に一生懸命になっておられました。

ズール・ヒッジャ月の断食について

アーイシャは伝えている

私はアッラーのみ使いがズール・ヒッジャ月の（初旬の）10 日間に断食をされるのを見たことがございません。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いはズール・ヒッジャ月の（初旬の）10 日間には断食をされませんでした。

巡礼の書

ハッジやウムラの心得について

イブン・ウマルは伝えている

或る男がアッラーのみ使いに対し、ムフリム（注 1）はどのような衣服を着用すべきかについてたずねた。

アッラーのみ使いはこういわれた。

「シャツやターバン、またズボンや帽子を着けてはならない。

靴を持たぬ者以外には皮製の靴下をはいてはならない。

ただし、靴下をはく場合にはくるぶしの下にくるよう短く切らねばならない。

また、サフランやワルス（注 2）を香料としてふりかけた衣服を着てはならない」

（注 1）ムフリム「巡礼衣（イフラーム）を着けた人」の意味。

無用な殺生、緑樹の伐採、香料の使用など禁じられる

（注 2）サフラン（ザフラーン）、ワルス（ウマンインディアンサフランの一種）、共に衣服にふりかけて香料として用いられた

サーリムは、彼の父（アブドッラー・ビン・ウマル）が語った話を次のように伝えている

「ムフリムはなにを着るべきでしょうか」とたずねられた時、預言者はこういわれた。

「ムフリムはシャツやターバン、帽子、ズボン、また、ワルスやサフランに触れた衣服を身に着けてはならない。

更に、靴のない場合を除き靴下をはいてはならない。

ただし、この場合でも靴下をはく前に、両くるぶしより下になるよう靴下を短く切らねばならない」

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはこういわれた。

「ムフリムは、サフランやワルスで染められた衣服を着てはならない」。

更にこうもいわれた。

「靴のない者は靴下をはいてもよいが、その場合靴下はくるぶしより下になるよう短く切らねばならない」

イブン・アッバースはこう語っている

「私はアッラーのみ使いが次のように説教なさるのをきいた。

即ち、『腰巻（イザール）を持たぬ者はズボンを着用しても構わない。

また、靴を持たぬ者には短かい靴下（ソックス）をはくことが許される』と。

これはムフリムに関しての説教であった」

アムル・ビン・ディーナールは別の伝承者経路で預言者がアラファートで前記と同内容の説教をなさるのをきいたと伝えている。

アムル・ビン・ディーナールによるハディースは他にも三種の伝承者経路で伝えられている。
その中でもシュウバ以外には、預言者がアラファートで説教をなさったと伝えているものはいない。

ジャービルはアッラーのみ使いが次のようにいわれたと語っている

「はくべき靴がないものは靴下を着用すればよい。

腰巻（イザール）をもたぬ者はズボンを着用すればよい」（注）

（注）イマーム・アブー・ハニーファによれば、ムフリムとして着用すべき二枚の白い布かない場合には、ズボンを着けてもよいとされる。

ただし、縫目のないものに限られる。

これに反する場合、動物犠牲を捧げて代償せねばならない

サフワーンは彼の父ヤアラー・ビン・ウマイヤの言葉を次のように伝えている

或る男がジアラーナに滞在中の預言者の処にやってきた。

その男は黄色の香水をふりかけた外衣を着ていた。

その外衣には黄色い（香水の）跡がついていた。

その男は預言者に、「私のウムラ（小巡礼）に関してどんなことをお命じになりますか」とたずねた。

この時、預言者に啓示が下されだしたため、預言者の上に布がかぶせられた。

それを知った私（ヤアラー）が、「預言者に啓示が下されている様子をみたいものだ」というと、傍にいたウマルが「あなたは預言者が啓示を受けておられる様子をみたいのですか」といって、その布の一端をそっと持ち上げてくれた。

それで私は、預言者の姿をみたのであるが、その時、彼はうめき声をあげておられ、私にはそれがラクダのうなり声のようにも思えた。

啓示を受け終ったあと、預言者は「ウムラについてたずねた男はどこか」といわれ、その男が来ると

「黄色の跡（または香料の跡）を洗いおとしなさい。

それに外衣を脱ぎ、ハッジ（大巡礼）の場合と同じ方法であなたのウムラを行ないなさい」
といわれた。

サフワーン・ビン・ヤアラーは彼の父が、次のように語ったと伝えている
預言者がジアラーナにおられた時、私もお供をしていた。
その折、香料の跡をつけた上衣を着た一人の男がやってきた。
彼はこういった。
「ウムラ（注）を行なうため、私はムフリム（禁忌）の状態でいます。
それで、私はこの外衣を着、また香料もつけているのです」
これに対し、預言者は、「ハッジの時には、どうするのか」といわれた。
この男は「私は、衣服を脱ぎ、この香料を洗い落します」と答えた。
すると、預言者は「ハッジの場合と同様のことをウムラでも行ないなさい」といわれた。

（注）ウムラ（小遥礼）イフラーム（巡礼衣）を着て、マッカのカーバ神殿の巡回とサファーおよびマルワの両丘間の連歩の儀礼を行なう。
ハッジ（大巡礼）期間を除きいつでも行なうことが可能である

サフワーンは彼の父ヤアラー・ビン・ウマイヤの話をこう伝えている
私は、「アッラーのみ使いに啓示が下される様子をみたいものだ」と常々ウマル・ビン・ハッターブに話していた。
ある時、み使いは、ジアラーナで、日陰をつくった一枚の布の下におられた。
ウマルもその中にいたが、み使いの教友らも何人か一緒だった。
そこに香料をふりかけたウールの外衣を着た一人の男がやってきてこういった。
「アッラーのみ使い様、香料をふりかけた衣服を着たままムフリム（禁忌）の状況に入ることについてはいかがお考えですか」
これに対し、み使いはしばらくこの男をみていたが、その後沈黙なさった。啓示が彼に下されだしたのであった。
ウマルはこの時、ヤアラー・ビン・ウマイヤに近くに来るようにと手で合図した。
ヤアラーは近づいて頭をその日陰を作っていた布の下に入れ、そこでみ使いが顔面を赤くなさり、いびきをかくような荒い息をしておられるのをみた。
その後、啓示から解放されたみ使いは「ウムラについて私になにかたずねていた男はどこか」といわれた。
その男が呼びだされ連れてこられた時、み使いは次のようにいわれた。
「香料は三度洗って落しなさい。
また、この外衣は（縫目がある故）脱ぎなさい。
そして、ハッジの場合と同様にしてウムラを行ないなさい」

サフワーンは、彼の父ヤアラーの話をこう伝えている

或る男が、ジアラーナに滞在していた預言者の処にやってきた。

その男はウムラのためイフラームを着ていたが、顎髭と頭髪を黄色く染め、外衣（ジュッバ）を着ていた。

その男はいった。

「アッラーのみ使い様、私はウムラを行なうため、イフラームを着、ごらんのような姿をしています」。

それに対し、み使いは「外衣を脱ぎなさい。

そしてその髭と髪の黄色を洗い流しなさい。

ハッジと同じ状態になってウムラを行ないなさい」といわれた。

ヤアラーはこう伝えている

「私たちが、アッラーのみ使いと一緒にいた時、黄色い香料をつけた跡のみえる外衣を着た男がやってきて次のようにいった。

「アッラーのみ使い様、ウムラをしたくイフラームを着ました。

どうやったらよいのでしょうか」。

み使いは沈黙され、なにもお答えにならなかった。

この時、ウマルはみ使いが啓示を受ける時にいつも行なうように（布をかけて）み使いの姿を人の目からさえぎった。

この時、私はウマルに「アッラーのみ使いがどのようにして啓示を受けられるのかみるため、布の内側に顔をつっこんでみたい」といった。

み使いに啓示が下された時、ウマルは布でみ使いを覆い隠した。

私はウマルの近くに寄り彼と一緒に頭を布の内側に入れて、み使いが啓示を受ける様子をみた。

み使いは、このことが終って後、「ウムラについてたった今、質問していた男はどこか」とおたずねになり、それでその男がみ使いの処にくると、次のようにいわれた。

「着ている外衣を脱ぎなさい。

また躰についている香料の跡を洗い落しなさい。

ハッジでやったと同じように、ウムラでも行ないなさい」

イフラームを着ける場所（注 1）について

イブン・アッバースはこう伝えている

アッラーのみ使いはマディーナ方面から巡礼に来る人々のために、ズール・フライファ（注 2）を、
シリヤ方面からの人々のためにジュッファ（注 3）を、
ナジュド方面の人々のためにカルン・アル・マナーズィル（注 4）を、
イエメン方面からの人々のためにヤラムラム（注 5）を指定された。
そして、「それらの場所（マワーキート）は、そこに住む人々、およびそこに住んでなくてもハッジやウムラを志してそこに来る人々のための場所をも意味している。
これらの領域以内に住む人々、またはマッカの郊外、或いはマッカ市内に住む人々は、その住んでいる場所でイフラームを身にまとうべきである」といわれた。

（注 1）イフラーム（巡礼衣）に着替える場所はミーカート（複数マワーキート）と呼ばれる。別にムハッル（高唱する所）ともいわれるが、これはイフラームを着る時、タルビーヤ（巡礼朗唱）を唱えるためである。
それ故、イフラームとタルビーヤは同じ意味に用いられる場合がある

（注 2）ズール・フライファ　現在のアブヤール・アリー。
マディーナから五マイル程、マッカからは 295 マイルも離れた場所で、ミーカートの中では最もマッカからの距離が遠い

（注 3）ジュッファ　ラービガの近く、マッカからは 150 マイル程離れたアラビア半島西海岸側の地

（注 4）カルン・アル・マナーズィル　現在サイルの名で知られるマッカの東方 50 マイルの地

（注 5）ヤラムラム　マッカから約 60 マイル程の距離にあるティハーマ地方の山頂にある町の名

イブン・アッバースはこう伝えている

アッラーのみ使いは、マディーナからの人々のためにズール・フライファを、シリヤの人々のためにジュッファを、ナジュドの人々のためにカルン・アル・マナーズィルを、イエメンの人々のためにヤラムラムをミーカートとして指定され次のようにいわれた。
「これらの場所は、そこに住む人々やハッジ、または、ウムラのためこれらの方面を通って

外からやってくる全ての人々のミーカートである。
これらミーカートの領城内に住む人々にとっては、巡礼に出発するその場所がミーカートとなるし、マッカに住む人々にとってはマッカがミーカートになる」

イブン・ウマルはアッラーのみ使いの言葉をこう伝えている
「マディーナの人々はズール・フライファ、シリヤの人々はジュッファ、ナジュドの人々はカルン・アル・マナーズィルでイフラームに着替えねばならない」
これに関連し、アブドッラーは「アッラーのみ使いはまた『イエメンの人々はヤラムラムでイフラームの状態に入らねばならない』といわれるのをきいた」と述べている。

サーリムは彼の父アブドッラー・ビン・ウマルからきいて、アッラーのみ使いの言葉をこう伝えている
マディーナの人々は、ズール・フライファで、シリヤの人々はジュッファで、ナジュドの人々はカルン・アル・マナーズィルでイフラームの状態に入るべきである。
これに関連し、イブン・ウマルは次のように語っている。
「私が直接きいたのではないが、アッラーのみ使いは『イエメンの人々は、ヤラムラムでイフラームに替えるべきである』といっておられたと人々が話していた」

サーリムは彼の父アブドッラー・ビン・ウマル・ビン・ハッターブの言葉を次のように伝えている
私はアッラーのみ使いが「マディーナの人々はズール・フライファで、シリアの人々はマフヤー、即ち、ジュッファで、ナジュドの人々はカルン・アル・マナーズィルで、イフラームに替えるべきである」といっておられるのをきいた。
これに関連し、アブドッラー・ビン・ウマルは次のように述べた。
「私が直接おききしたわけではないが、み使いはまた、『イエメンの人々はヤラムラムでイフラームに着替えるべきであるといわれた』という言葉を人々が話していた」

イブン・ウマルはこう伝えている
アッラーのみ使いは、マディーナの人々はズール・フライファで、シリヤの人々はジュッファで、ナジュドの人々はカルン・アル・マナーズィルで、イフラームに着替えるようお命じになった。
アブドッラー・ビン・ウマルはこれに関連し、こう語った。
「私はアッラーのみ使いが、『イエメンの人々は、ヤラムラムでイフラームに着替えるべきであるといわれた』ときいている」

アブー・ズバイルはこう述べている

ジャービル・ビン・アブドッラーはイフラームに着替える場所について質問された時、「アッラーのみ使いからおききした」と語って（私が思うに）アッラーのみ使いのお言葉をそのまま伝えた。

アブー・ズバイルはこう伝えている

ジャービル・ビン・アブドッラーは、イフラームに着替える場所について人からたずねられた時、（彼が直接質問したと思うが）「私は預言者からおききした」といって、その言葉を次のように述べた。

「マディーナの人々のためには、ズール・フライファがイフラームに着替えるべき場所であり、

別の道、即ちシリヤ方面から来る人々のそれは、ジュッファ、

イラク方面からの人々のミーカートはザートル・イラク（注）、

ナジュド方面の人々のはカルン・アル・マナーズィル、

イエメンからの人々のはヤラムラムである」

（注）ザート・ル・イラク　マッカの北方 77 マイルの地点にある

タルビーヤに関して

アブドッラー・ビン・ウマルはこう伝えている

アッラーのみ使いのタルビーヤ（巡礼朗唱）（注）は次のようなものであった。

「私はここにおります。

なんなりとご用命下さい。

おおアッラーよ。

私は、ここにおります。

なんなりとご用命下さい。

私はここにおります。

なんなりとご用命下さい。

あなた様に比べられるものはございません。

ここに私はおります。

なんなりとご用命下さい。

まことに全ての讃美すべきこと、恩寵深きこと、更にまた、主権もあなた様のもの、あなた様に比ぶべきものはございません」なお、口述者によれば、アブドッラー・ビン・ウマルは、これに次の言葉を加えている。

「私はここにおります。

なんなりとご用命下さい。

ここに私はおります。

なんでもご用命下さい。

あなたに従おうとしています。

善なるものは、あなたの御手の中にあります。

ここに私がおります。祈願の全てはあなた様に、そして行為の全てもあなた様のためであります」

（注）タルビーヤ　巡礼朗唱と訳されるが、アッラーに従順なることを高声で唱える行為を指す。

本来、従順、遵守、応諾を意味する言葉である

アブドッラー・ビン・ウマルはこう伝えている

アッラーのみ使いは、ラクダが立ち止まったズール・フライファのモスクの近くで、イフラームに着替えた後、次のようにお唱えになった。

「私はここにおります。

おお、アッラーよ。

私はここにおります。

なんなりとご用命下さい。
なんなりとご命じ下さい。
あなた様に比肩すべき存在はありません。
私はここにおります。
なんなりとご命じ下さい。
讃美すべきもの、そしてまた、慈愛深きものは全てあなた様のもの、そしてまた、権威もあなた様のものです。
あなた様に比べるべき存在はありません」
人々はこれがみ使いの唱えたタルビーヤであるとアブドッラー・ビン・ウマルが話したと語っている。
なお、ヤーフィウによると、アブドッラーは、これに次の言葉を加えて唱えていたと語っている。
即ち、「私はここにおります。
なんなりとご命じ下さい。
私はここにおります。
なんなりとご命じ下さい。
あなた様に従います。
善なるものは、あなた様の御手の中にあります。
なんなりとご命じ下さい。
祈願も行為も全てあなた様のためです」

イブン・ウマルはこう伝えている
私はアッラーのみ使いから、タルビーヤの言葉を習いすぐに覚えた。このあと彼は前述のハディースを語った。

アブドッラー・ビン・ウマルはこう語っている
私はアッラーのみ使いが頭髪をかたく結んだまま、タルビーヤを次のようにお唱えになるのをきいた。
「私はここにおります。
おおアッラーよ。
私はここにおります。
私はここにおります。
なんなりとご命じ下さい。
あなたに比肩すべきものはありません。
私はここにおります。
なんなりとご命じ下さい。

まことに全ゆる讃美も恩恵も、また、権威も、あなたに帰せられるべきものです。
あなたほどのお方はありません」
アブドッラー・ビン・ウマルによると、み使いが唱えたのはこれだけであった。
彼はまた次のようにも語っている。
「アッラーのみ使いはズール・フライファで二ラカートの礼拝をなさるのが常であった。
ラクダが彼を背中にのせたままズール・フライファのモスク近くに立ち止まった時、このタルビーヤをお唱えになったのである」
また、アブドッラー・ビン・ウマルは、こうも述べている。
「ウマル・ビン・ハッターブは、アッラーのみ使いと同じタルビーヤをいつも唱えたがそれは
『私はここにおります。
なんなりとご命じ下さい。
おおアッラーよ、私はここにおります。
あなた様に従います。
なんなりとご命じ下さい。
善なるもの全てはあなたの御手にあります。
私共の祈願も行為も全てあなた様のためのものです』

イブン・アッバースはこう語っている
多神教徒ら（注）もタルビーヤを唱えるがそれは次の言葉である。
「私はここにおります。
なんなりとご命じ下さい。
あなたと比べるべきものはありません」
これに対し、アッラーのみ使いは「多神教徒らに災いあれ！
彼らはまた、こうもいっている。
あなたと比べるべきものがあっても、あなたは彼を支配なさるが、彼はあなたを支配できない。
こう唱えながら、彼ら多神教徒らはカーバを巡拝するのである」といわれた。

（注）多神教徒ら（ムシュリクーン）とは、最高神の存在を信じながらも、それ以外の神の存在をも否定していない者らを指す

マディーナ住民のミーカートについて

サーリムは彼の父アブドッラーからきいてこう伝えている

この場所バイダーウ（注）をイフラームに着替える処であるというのは、アッラーのみ使いの言葉に対し虚偽を告げることになる。

み使いはズール・フライファのモスクの近くでイフラームに着替え、タルビーヤをお唱えになったのである。

（注）バイダーウ　ズール・フライファ近くの地名

サーリムはこう伝えている

イブン・ウマルは、イフラームの状態がバイダーウから始まると告げられた時、次のように述べた。

「バイダーウをイフラームの場所であると語るのはアッラーのみ使いに対し虚偽を述べることになる。

アッラーのみ使いは雌ラクダが彼をのせたまま立ち止まった木の近くで、タルビーヤをお唱えになったのである（注）」

（注）方式通り、イフラームに着替え二ラカートの礼拝後、ラクダにのり、タルビーヤを唱えたのである。

なお、このハディースに関しては、ズール・フライファでの最初のタルビーヤの朗唱に人々が気付かなかったため、バイダーウがタルビーヤの場所であると錯覚されたものといわれる

イフラームに関して

ウバイド・ビン・ジュライジュは伝えている

彼はアブドッラー・ビン・ウマルに次のようにいった。

「おお、アブドル・ラフマーンの父（アブドッラー）よ！

私は教友らが行なわないことをあなたが四つもなさっているのに気づいています」

これに対し、アブドッラーが、「ジュライジュの息子（ウバイド）よ、それはなんですか」ときいたので彼はこう述べた。

「あなたは、カーバのタワーフ（巡回）をする時、南側両角、即ち、イエメン角側（注 1）以外にはお触れにならない。

なめした皮（注 2）のサンダルをはいておられる。

また、顎髭や頭髪を染めておられる（注 3）。

更に、マッカでは人々が、ズール・ヒッジャ月の新月が現われるとタルビーヤを唱えるのに、あなたは、ズール・ヒッジャ月八日までそれをお唱えにならない」（注 4）。

これに対しアブドッラー・ビン・ウマルは次のようにいった。

「カーバの角に触れることに関しては、アッラーのみ使いが、イエメン側の両角（注 5）以外にはお触れにならなかったのをみたからです。

なめし皮のサンダルについては、アッラーのみ使いが、毛のついていない靴を、ウドゥーをなさったあと、おはきになったのをみたからであり、私もそのような靴をはきたいからです。

黄色く髭や頭髪を染めたのは、アッラーのみ使いがこの色で顎髭や頭髪、それに衣服などを染めておられたからで、私もその色で染めたいためです。

タルビーヤに関しては、アッラーのみ使いは、ラクダがズール・フライファに到着するまでタルビーヤをお唱えにならなかったのをみたからです」（注 6）

（注 1）カーバ神殿、南東側の両角は、イエメン角、黒石角とそれぞれよばれている。
北西面はシリヤ角側とよばれ、西側にシリア角、北側にイラク角がある

（注 2）なめし皮とは動物の毛がついていない皮を指す

（注 3）サフランを用い顎髭や頭髪を染める習慣があった

（注 4）ズール・ビッジャ月八日は、タルウィーヤの日と呼ばれ、巡礼に必要な水の準備をする日とされる。
この日巡礼者は、ミナー谷に行き、イフラームに着替えタルビーヤを唱える

（注 5）イエメン側の両角は預言者アブラハムとイスマイルによって構築されたといわれる

（注 6）タルビーヤの朗唱は、ズール・ヒッジャ月の初めからでも、また、ミナーに巡礼者が集まる八日からでもよいことになっている

ウバイド・ビン・ジュライジュはこう伝えている

私は、アブドッラー・ビン・ウマル・ビン・ハッターブと、ハッジ及びウムラで 12 日間も一緒に過した。

その折、私は「アブドル・ラフマーンの父《アブドッラー》よ、あなたは、四つのことを独自になさっています」といった。

以下は、タルビーヤに関する以外、前記と同内容のハディースである。

イブン・ウマルはこう伝えている

アッラーのみ使いは、ズール・フライファで足をあぶみにのせてラクダを立ち上がらせ、歩ませながら、タルビーヤをお唱えになった。

イブン・ウマルは伝えている

預言者は、ご自分の乗ったラクダが立ち上がった時、タルビーヤをお唱えになった。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、ズール・フライファでラクダにお乗りになったが、ラクダが立ち上がった時、タルビーヤをお唱えになった。

ズール・フライファモスクでの礼拝について

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、ズール・フライファで夜を過された。

その時、巡礼の儀式を始め、モスクで礼拝をなさった。

イフラーム前の香料に関して

アーイシャはこう伝えている

私は、アッラーのみ使いがイフラームをお着けになる前と、カーバ神殿のまわりをタワーフ（巡回）なさる前に香料をつけてあげた。

預言者の妻の一人**アーイシャ**は伝えている

私は、アッラーのみ使いにイフラームをお着けになる前と、ズール・ヒッジャ月 10 日、巡礼最後の日のタワーフの前に、私自身の手で、香料をつけてあげた。

（注）巡礼の前のタワーフには、カーバ到着の時のタワーフ（タワーフ・クドーム）と、ズール・ヒッジャ月 10 日、動物犠牲を捧げ切髪（ハラク）した後に行うタワーフ（タワーフ・イファーダ）がある。
この場合は、後者を指す

アーイシャは伝えている

「私は、アッラーのみ使いか、イフラームを着る前と巡礼の最後に神殿のタワーフを行なう前に、香水をいつもつけてあげた」

アーイシャは伝えている

「私は、アッラーのみ使いが（ハッジを終えて）イフラームをお脱ぎになる時と、ハッジのためイフラームをお着けになる時、香料をつけてあげた」

アーイシャは語っている

「私は、アッラーのみ使いの最後の巡礼の折、イフラームをお着けになる時と、巡礼が終ってそれをお脱ぎになる時、私自身の手で（インド産の）ザリーラ香料をつけてあげた」

ウスマーン・ビン・ウルワは彼の父の言葉をこう伝えている

私はアーイシャに、「どんなものを香料としてイフラームを着る時、アッラーのみ使いにつけてあげるのですか」とたずねた。
これに対し彼女は、「最良の香水（注）です」と答えた。

（注）麝香を意味する

アーイシャは語っている

私は、アッラーのみ使いがイフラームをお着けになる時、できるかぎり最良の香料をつけてさしあげた。
み使いはその後イフラームを身にまとわれたのです。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いがイフラームをお着けになる前と、それをお脱ぎになった後には、いつも私が入手できる最良の香料をつけてあげた。

アーイシャは語っている

私には、イフラームを身にまとったアッラーのみ使いの頭髪の分け目に香料がきらきらと光っている様子が目にみえるような気がする。
なお、伝承者の一人ハラフはこれに関連し「それはイフラームにつけた香料であった」と記している。

アーイシャは語っている

私には、イフラームをお脱ぎになったアッラーのみ使いの頭髪の分け目に香料が光っている様子が目にみえる思いがする。

アーイシャは語っている

私には、タルビーヤを唱えるアッラーのみ使いの頭髪の分け目に香料が光っている様子が目にみえるような気がする。

前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アーイシャは語っている

私には、頭髪の分け目に香料を光らせ、イフラームを着たアッラーのみ使いのお姿がみえるような気がする。

アーイシャは語っている

私には、イフラームを着たアッラーのみ使いが頭髪の分け目に香料を光らせておられる姿をみたい思いがある。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、イフラームを着る時には、入手できる最良の香料を自らおつけになった。

そのため、私はみ使いの頭や顎髭にオイルが光るのをみました。

アーイシャは語っている

私には、アッラーのみ使いが、イフラームを着て、（頭髪の分け目に）麝香を光らせておられた姿が、今でも、目に見えるような気がする。

前記のハディースは**ハサン・ビン・ウバイドッラー**によっても別の伝承者経路で伝えられている

アーイシャは伝えている

私は麝香入りの香料をアッラーのみ使いがイフラームを着る前、および、ズール・ヒッジャ月 10 日の動物犠牲の日、

そして、また、巡礼行事を終える前のカーバ神殿のタワーフ（タワーフ・イファーデ）の前などに、いつもつけてあげた。

ムハンマドは彼の父ムンタシルの話をこう伝えている

私は、アブドッラー・ビン・ウマルに対し、だれが香料をつけてあげるのか、また、イフラームの状態に入るその翌朝のことについて、たずねた。

これに対し、彼は「私は香料をふりかけてから、イフラームを着るのを好まない。

むしろ、沈香を躰にこすりつける方が香料をふりかけるよりも好ましい」といった。

私は、アーイシャの処に行き、イブン・ウマルが香料をふりかけてから、イフラームに着替えることを好まず、沈香を躰にこすりつける方がより好ましいといったことを話した。

その折、アーイシャはこう語った。

「私はアッラーのみ使いに、イフラームを着る前、香料をつけてあげました。

み使いは、妻たちの処をまわり、そのあと、朝のうちにイフラームを身におつけになったのです」

アーイシャはこう伝えている

私はいつも、アッラーのみ使いに香料をつけてあげた。

み使いは、その後彼の妻たちの処をおまわりになった。

そして、朝イフラームをおつけになったが、この折、香料をふりかけられた。

ムハンマド・ビン・ムンタシルの父はこう伝えている

私は、イブン・ウマルが次のように話しているのをきいた。

「私（イブン・ウマル）にとって沈香を躰にこすりつける方が、香料をふりかけたイフラームを着るより好ましい」

私はアーイシャの処に行き、イブン・ウマルのいった言葉を話した。

それに対し彼女は次のように語った。

「私はアッラーのみ使いに香料をつけてあげました。

み使いは、そのあと妻たちの処を訪問なさり、翌朝イフラームをお着けになったのです（注）」

（注）イフラームを着る前に香料をつけること、及び、その香りがイフラームに残ることは、イスラーム法上違反にはならないことをこのハディースは語っている。

ただし、すでにイフラームを着ている場合、香料を用いることは禁じられる

ムフリム（禁忌者）の禁猟について

サアブ・ビン・ジャッサーマ・ライスィーはこう語っている

「私は、アッラーのみ使いが、アブワー、もしくは、ワッダーンにおられた時、一頭の野性ろばを献じたが、み使いはそれをお受けにならなかった。

み使いは、贈り物を拒否されたため失望している私の顔をごらんになり、私をなぐさめてこういわれた。

「私たちがあなたの贈り物を受けなかったのは、ムフリム（禁忌者）の状態にいるためなのです（注）」

（注）クルアーン（第 5 章 95～96 節）には、イフラーム状態の禁忌についての言葉が記されている

前述のハディースは、**ズフリー**によっても伝えられ、それには次の表現がみられる

「私は野性ろばをアッラーのみ使いにさし上げました」

ズフリーは、別の伝承者経路でサアブの言葉を次のようにも伝えている

「私は、アッラーのみ使いに野性ろばの肉をさし上げました」

イブン・アッバースは伝えている

サアブ・ビン・ジャッサーマは、アッラーのみ使いが、イフラーム（禁忌）の状態でおられた時、野生ろばを贈ったが、み使いはそれを次のようにいってお返しになった。

「もし、私たちがイフラーム状態でなければ、あなたの贈り物を受取ったでしょう」

前述のハディースに関し、ハカムからきいてマンスールが伝えた言葉には、「サアブ・ビン・ジャッサーマは野性ろばの脚を、預言者に献じた」とあるが、

同じくハカムにきいて、シューバが伝えた言葉には、「血のしたたる野性ろばの臀部の肉を献じた」という表現がみられる。

また、ハビーブからきいて伝えた同じくシューバによるハディースには、「預言者に、野性ろばの顎肉の一部が贈られたが、預言者はそれをお返しになった」と記されている。

ターウースはイブン・アッバースよりきいて、次のように伝えている

ザイド・ビン・アルカムがイブン・アッバースの処に行き、「イフラームの状態のアッラーのみ使いに贈られた狩猟肉について、あなたが私に語ったことは、どんな内容でしたか教えて下さい」とたのんだ。

それで、アブドッラー・ビン・アッバースは次のように話した。

「み使いは狩猟肉の一部を贈られたが、それをお返しになり、『私たちはイフラーム状態なので、その肉を食べることができません』といわれた」

アブー・カターダは伝えている

私たちは、アッラーのみ使いのお供をして(マディーナ近くの)カーハに到着した。
私たちの中には、イフラーム状態の者とそうでない者とがいた。
この折、私たちの仲間がなにかを見付けた。
私がよくみるとそれは野性ろばであった。
私は鞍をつけてから、槍をとり馬に乗った。
その時、私の鞭が落ちたので、私は、イフラームを着ていた仲間たちにむかって、その鞭をひろってくれるよう頼んだ。
しかし彼らは「神に誓って、私たちは狩の手助けをするわけにはゆかない」といって断ったため、私は馬から降り、鞭をひろってから再び乗馬し、少し追いかけて後、その野性ろばを捕えた。
その場所は小山のうしろであったが、私は槍で突いてこのろばを殺した。
そして後、仲間たちの処にこれを持って帰った。仲間らの一部は「それを食べよ」といい、別の人々は「食べてはならない」といった。
預言者が私たちの前方におられたので、私は馬を進めて、預言者の近くに寄せてからこの件に関し質問した。
預言者は、その折、「これは許される(ハラール)肉です。食べなさい」といわれた。(注)

(注)この場合、野性ろばの狩猟はムフリム(禁忌者)たちのすすめや、助けによって行われたわけではなかった。
イフラーム状態でないアブー・カターダ自身が、自らの判断で狩猟して、仲間たちにその肉を献じたのである。
それ故、ハラールであると預言者は判断したのである

アブー・カターダはこう伝えている

マッカに通ずる道をアッラーのみ使いの後をイフラームをまとった教友ら共々進んでいった折、彼は、一匹の野性ろばを見付けた。
彼自身はムフリム(禁忌者)状態ではなかった。
彼は、乗馬の際、落した鞭を拾ってくれるよう教友たちにたのんだ。
しかし、彼らはそれを断わった。
彼は槍をとってくれるようにと頼んだがそれも断わられた。
そのため、彼は自分で鞭や槍をとってろばを追跡し、殺した。
預言者の教友の一部は、その肉を食べたが、他の人々は食べるのを拒否した。

彼らはみ使いに追いつき、この件に関して質問した。

この時、み使いは「それはアッラーがあなたたちに下された食物故、食べなさい」といわれた。

前記のアブー・カターダによる野性ろばに関するハディースは、アブー・ナダルによっても伝えられる。

なお、ザイド・ビン・アスラマは、アッラーのみ使いが次のようにいわれたと語っている。

「あなたたちはその肉を少し持っていますか」

アブドッラー・ビン・アブー・カターダは伝えている

私の父（アブー・カターダ）は、フダイビアでマッカの市民との間に和議が結ばれた年（628年）に、アッラーのみ使いに従って行った。

彼の教友らは、イフラームをまとっていたが、彼は、み使いに敵がガイカという処に隠れひそんでいるとの情報がもたらされたこともあって、通常服の姿だった。

み使いは、先に進まれた。

父アブー・カターダはこの折の話を次のように語った。

「私は教友らと一緒だった。

彼らは互いに笑い、話しながら進んでいた。

この折、私がなにげなく遠くをみまわしたところ、野性ろばをみつけた。

私は、ろばを追って捕え、槍で刺して殺した。

この折、教友らに手助けを求めたが、彼らはそれを断わった。

（ともあれ）私たちはその肉を食べた。

しかしながら、私たちは（この行為が巡礼規則の違反事項とされ）、み使いにお供できなくなることを恐れた。

それで私はみ使いのご判断をうかがうべく、み使いに追いつくよう先に進むことにした。

そのため私は、或る時は馬を急がせ、ある時は他の人々と歩調を合わせて、ゆっくり走らせるといった状態で前に進んで行った。

その日の夜半、私はギフアール族出身の男に会い、『どこでみ使いに会ったのか』とたずねたのに対し、『私はタアヒンでみ使いと別れたが、み使いはスクヤーで午後休止なさるようだ』との答えを得た。

私は、み使いに追いつきこう申し上げた。

『アッラーのみ使い様、あなたの教友たちがあなたのために平安とアッラーの祝福があらんことをと祈っておりました。

彼らはまた、あなたから遠く離れすぎていることを案じておりました。

それ故、どうか彼らを待って下さい』

それでみ使いは彼らの到着をお待ちになったのでした。

この時、私はまたこういいました。
『み使い様、私は狩をし、その肉を持っております』
この言葉をきいた預言者は人々に『その肉を食べなさい』といわれた。
その時いたのは、イフラームを着た人たちでした」

アブドッラーは、彼の父アブー・カターダの話をこう伝えている
アッラーのみ使いは巡礼に出発され私たちもお供をした。
私を含めた教友らは一団となって進んだが、み使いは「あなた方は、先で私とおち会えるように海岸線にそって進みなさい」といわれた。
それで、私たちは、海岸線にそって、み使いの前方を進んだ。
この折、私を除き全員イフラームを着ていた。
私たちが進んでいた時、野性ろばをみつけた。
私はこれを追って殺した後、後脚を切りとった。
一同は乗物から降り、そのろばの肉を食べたが、その後、「私たちは、ムフリム（禁忌）状態でありながら肉を食べてしまった」といった。
ともあれ一同は残ったそのろばの肉を運び、み使いの処に来ると次のようにいった。
「み使い様、私たちは、ムフリム状態であり、アブー・カターダだけはそうでなかったのです。
野性ろばをみつけたので、アブー・カターダはそれを追って屠殺し、後脚を切りとりました。
私たちは乗物から降りてその肉を食べたのです。
私たちはこのように、イフラームを着ておりながら、狩猟肉を食べました。
その残った肉を持ってきました」これに対し、み使いは「あなた方のだれかが彼に狩をするよう命じたり、なにかを用いてそうするよう指示しましたか」とおたずねになり、一同が「いいえ」と答えると、「それならば、その肉の残りを食べなさい」といわれた。

前記のハディースは**ウスマーン・ビン・アブドッラー・ビン・マウハブ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。
なお、**シャイバーン**によるハディースには「み使いは、『あなた方のだれかがろば狩りを命ずるか、またはろばの方を指さしましたか』といわれた」とみえる。
シュウバの伝えるハディースにも「み使いは、『あなた方は指示、または、助力、もしくは、狩りをしたのですか』といわれた」とあり、
シュウバ自身は、「私には、み使いが、『助力したのですか』または、『狩りをしたのですか』という言葉のどれをいわれたのか、わかりません」と述べている。

アブドッラーは彼の父アブー・カターダの話をこう伝えている
彼（アブー・カターダ）ら一行は、アッラーのみ使いと共にフダイビーヤ遠征に出発した。
この折の出来事をアブー・カターダは次のように語った。

「私を除き他の人々は、ウムラを行なうためイフラームを着ていた。
私は野性ろば狩りをして、ムフリム状態にいる教友らに食べさせた。
その後、私は、み使いのいる処に行き、肉の残りを持っていることを話した。
み使いは、ムフリム状態であってもそれを食べてよいといわれた」

アブドッラーは彼の父アブー・カターダの話をこう伝えている
「彼らは、アッラーのみ使いと共に出発したが、アブー・カターダ以外の全員は、イフラームを着ていた」
このあとのハディースは次の言葉を除き、前記と同内容である。
「み使いは『なにかそれの余りを持っていないか』といわれた。
彼らが『脚肉があります』と答えると、み使いはそれをとってお食べになった」

アブドッラー・ビン・アブー・カターダは伝えている
「アブー・カターダは、イフラームを着けた一行と一緒だったが、彼自身は普段着のままだった」。
このハディースの後半は次の表現を除き前記と同一内容である。
「アッラーのみ使いは『あなた方のだれか、アブー・カターダに狩りをするよう指示、または、命令をしましたか』といわれた。
彼らが『いいえ、み使い様』と答えると、み使いは『それならば食べてよろしい』といわれた」

ムアーズは彼の父アブドル・ラフマーン・ビン・ウスマーン・タイミーの言葉をこう伝えている
私たちは、タルハ・ビン・ウバイドッラーと一緒で、イフラームを着ていた。
この折、料理した鳥肉が彼の処に贈られてきた。
タルハは寝ていたので、私たち何人かの者がそれを食べた。
ハラーム（禁じられた食物）であるとして、食べるのをひかえた者たちもいた。
タルハが目をさました時、彼は鳥肉を食べた人々の意見に同意し、「私たちもアッラーのみ使いと一緒の折、このような肉を食べたのです」と語った。

イフラーム状で殺し得る生物について

カーシム・ビン・ムハンマドは、預言者の妻アーイシャの言葉をこう伝えている
私は、アッラーのみ使いが次のようにいわれるのをきいた。
次の四種の鳥類、動物、昆虫類は、イフラーム状であろうとなかろうと殺さねばならない。
それらは、とんび、からす、ねずみ、それに獰猛な犬である。
これに関連し、伝承者の一人、ウバイドッラー・ビン・ミクサムがカーシムに「へびについてはどうですか」とたずねたところ、「彼はいためつけてから殺すべきです」と答えた。

アーイシャは、預言者の言葉をこう伝えている
「次の五種のものは、イフラーム状態であろうとなかろうと、殺してもかまわない。
それらは、へび、まだら模様のついたからす（注）、ねずみ、獰猛な犬、それに、とんびである」

（注）普通のからすより有害だといわれる

アーイシャは、アッラーのみ使いの言葉をこう伝えている
「次の五種は、人がたとえイフラーム状態であろうと殺してもかまわない有害な動物です。
それらは、さそり、ねずみ、とんび、からす、獰猛な犬です」

前記のハディースは、**ヒシャーム**によっても、別の伝承者経路で伝えられている。

アーイシャは、こう伝えている
アッラーのみ使いは、「次の五種は有害である故、聖域内であろうとなかろうと殺してもかまわない。
それらは、ねずみ、さそり、からす、とんび、それにすぐにかみつく犬である」といわれた。
アーイシャの語ったハディースは**ズフリー**によっても別の伝承者経路で伝えられ、次のように記されている
「アッラーのみ使いは、人がイフラーム状態であろうとなかろうと次の五種の有害物を殺すよう命じられた」
以下の叙述は前記と変らない。

アーイシャはアッラーのみ使いの言葉を次のように伝えている
「次の五種の生物は有害である故、たとえカーバ神殿の聖域内であろうと、殺さねばならない。
それらは、カラス、とんび、かみつく犬、さそり、それにねずみである」

サーリムは彼の父からきいてこう伝えている

預言者は「たとえカーバ神殿の聖城内であろうと、また、イフラーム状態であろうと、次の五種の生物を殺すことは罪にはならない。

それらは、ねずみ、さそり、からす、とんび、それに、かみつく犬である」といわれた。

なお、イブン・アブー・ウマルの伝えるハディースには、「ムフリム（禁忌者）の状態で、イフラームをまとっていても」という表現がみられる。

預言者の妻の一人**ハフサ**は伝えている

アッラーのみ使いは、「次の五種の生物は、全て有害である故、殺しても罪にはならない。

それらは、さそり、からす、とんび、ねずみ、それにすぐかみつく犬である」といわれた。

ザイド・ビン・ジュバイルは伝えている

或る男がイブン・ウマルに「どんな生物をムフリム状態であっても殺してよいのですか」とたずねた。

これに対しイブン・ウマルは「アッラーのみ使いの妻の一人が、

『預言者は、ねずみ、さそり、とんび、かみつく犬、それにからすを殺すようお命じになった』

と私に話してくれた」と答えた。

ザイド・ビン・ジュバイルは伝えている

或る男が、イブン・ウマルに「ムフリム（禁忌者）には、どんな生物を殺すことが認められるのですか」とたずねた。

彼はこう答えた。

「預言者の妻の一人が私に、『預言者は、かみつく犬、ねずみ、さそり、とんび、それにへびを殺すようお命じになった』と語ってくれました。

これはまた礼拝中であっても構わないのです」

イブン・ウマルはアッラーのみ使いの言葉をこう伝えている

次の五種はイフラーム状態の者であっても殺して罪にならない生物である。

それらは、からす、とんび、さそり、ねずみ、それにかみつく犬である。

イブン・ジュライジュはこう伝えている

私は、ナーフィウに「イブン・ウマルが述べているムフリム状態にある者でも殺すことが許される生物とはなんですか」とたずねた。

ナーフィウは、アブドッラー・ビン・ウマルの言葉を次のように話してくれた。

「私は預言者が『次の五種は殺しても罪を問われないし、殺されてもよい生物である。

それらは、からす、とんび、さそり、ねずみ、それにかみつく犬である』といわれるのをきいた」

イブン・ウマルによって語られた前記のハディースは、他にも幾つかの伝承者経路で伝えられているが、その中には次の表現もみられる。
「私は預言者がこういわれるのをきいた。
即ち、カーバ神殿の聖城内でだれかが殺しても、まただれかに殺されることがあっても、次の五種の生物については関係した者の罪は問われない」

この後のハディースは、前記と同内容である。

アブドッラー・ビン・ウマルは、アッラーのみ使いの言葉をこう伝えている
「次の五種の生物は、もし、イフラームを着た者が殺したとしても、罪を問われない生物である。
それらは、さそり、ねずみ、かみつく犬、からす、そしてとんびである」

ムフリムの剃髪について

カアブ・ビン・ウジュラは語っている

フダイビーヤにいた折、アッラーのみ使いが、私の処においでになった。

私は、その時（カワーリーリーの言葉によれば）料理なべ、もしくは、（アブー・ラビィーウの言葉によれば）土なべの下で火をつけようとしていた。

この時、しらみが私の顔をはいずっているのをごらんになって、み使いは、「こんな害虫が頭髪に巣くっているのか」といわれた。

「そうです」と私が答えると、み使いは「頭髪をそりなさい。

そして、その代償として三日間断食するか、または六名の貧者に食物を供しなさい。

さもなければ、（動物）犠牲を捧げなさい」といわれた。

これに関連し、伝承者の一人アイユーブは「どの償い方をみ使いが最初にいわれたのか、私にはわからない」と述べている。

前記のハディースは、**アイユーブ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

カアブ・ビン・ウジュラは語っている

アッラーのみ使いに下された次の啓示は、私のためのものであった。

「あなたがたの中に病人、または頭の皮膚に患いのある者は、斎戒をするか、施しをなし、または犠牲を捧げて頭を剃る償いとしなさい」（クルアーン第 2 章 196 節）

私が、アッラーのみ使いの処に行くと、み使いは「近くに来るように」といわれた。

それで私は更に近くに行ったが、み使いは、「もっと近くに寄るように」といわれた。

私が更に近寄るとみ使いは「しらみで苦しんでいるのか」といわれた

（これに関連し伝承者の一人、イブン・アウンは、この時「カアブが『その通りです』と答えたと思う」と述べている。）

み使いは、このあと、私に断食、または施し、もしくは動物犠牲（注）のいずれかできることで償いをするよう命じられた。

（注）動物犠牲は山羊、羊、牛、ラクダなど四種の動物に限られる

カアブ・ビン・ウジュラは語っている

アッラーのみ使いが、私の傍に立っておられた時、何匹かのしらみが私の頭から落ちた。

それをみたみ使いは、「こんな害虫で困っているのか」といい、私が「その通りです」と答えると「それならば、頭髪を剃りなさい」といわれた。

クルアーンの次の聖句が下されたのは、この折の私に関連してのことであった。

「あなたがたの中で病人、または頭の皮膚に患いのある者は、斎戒をするか、施しをなし、

または犠牲を捧げて頭を剃る償いとしなさい」（第2章196節）
み使いは私にこういわれた。
「三日間断食を行うか、または六人の貧困者のために十分な食量を施すか、更にまたは動物犠牲を捧げるか、を償いとしていずれでもできることをしなさい」

カアブ・ビン・ウジュラは伝えている
預言者が、フダイビーヤで、たまたま彼の傍を通りかかった。
彼はその時、マッカに入る前でもあり、イフラームを着た姿で料理なべの下で火を焚いていたが、その顔面にはしらみがはいずっていた。
その様子をみた預言者は「頭をしらみにたかられているのか」とおたずねになり、彼が「そうです」と答えると次のようにいわれた。
「その頭髪を剃りなさい。
そして、償いとして六人の困窮者を食べさせるのに十分な量（ファラク：一ファラクは3サーアに当る）を供しなさい。
さもなければ、三日間断食を行うか、または、犠牲動物を捧げなさい」
伝承者の一人、イブン・ナジーフは、「もしくは、山羊を犠牲として屠殺しなさい」といわれた、と記している。

カアブ・ビン・ウジュラは伝えている
フダイビーヤ滞在の折、アッラーのみ使いは、たまたま、彼の側をお通りになった。
この時、み使いは、カアブに「頭髪のしらみで困っているのか」とおたずねになり、彼が「そうです」と答えると、次のようにいわれた。
「頭髪をそりなさい、そして、償いとして、羊を屠殺して捧げるか、または、三日間断食をしなさい。
さもなければ、六人の困窮者に食物として3サーア（重量単位）相当のなつめやしの実を与えなさい」

アブドッラー・ビン・マアキルはこう語っている
私は、モスクでカアブと一緒に座っていた。
私はこの折、彼に、断食、施し、犠牲による償いに関する、クルアーンの聖句について質問した。
これに対し、カアブは次のように語った。
「それは私に関連して下された啓示です。
その頃、私の頭に面倒なことが起こり、私はアッラーの処に連れて行かれたのです。
というのも、しらみにたかられ、私の顔面にまでもしらみかはいずっていたのです。
み使いは私に対し、その時、『私のみたところ、あなたの困惑はそれ程耐え難いものとは

思えないのだが、あなたは、羊を犠牲として捧げる余裕がありますか』といわれたので、私は『いいえ』と答えました。
このあと、断食、施し、犠牲による償いについてのクルアーン聖句が啓示されたのです。
み使いは、この聖句を説明して次のようにいわれました。
『三日間の断食を行なうか、または、六名の困窮者への食事、つまり、各人に半サアーの食物を供せねばなりません』
ともあれ、この聖句は、特に私のために啓示されたものですが、今や、あなた方全ての人々に適用されるものとなっています」

カアブ・ビン・ウジュラは伝えている

彼は預言者と共にイフラームを着て出発した。
この折、彼の頭や顎髭には、しらみがたかっていたが、そのことは預言者の知るところとなった。
そこで預言者は彼を呼び出し、床屋に命じて彼の頭髪をそらせた。
この折、預言者は彼に対し、「犠牲として捧げ得る動物を所有しているか」とたずね、彼が「いいえ」と答えると、
三日間断食するか、または、六人の困窮者に、それも二人に1サーア量分の割で食事を与えることをお命じになった。
（ともあれ）アッラーは、特に彼に関連して「**あなたがたの中で病人または、頭の皮膚に患いのある者は……**」（クルアーン第2章196節）の聖句を啓示されたのである。
この聖句は、これ以降ムスリム全てに通用されることになっている。

吸角治療法に関して

イブン・アッバースは伝えている

預言者は、イフラームを着たまま吸角法による治療をなさった。

イブン・ブハイナはこう伝えている

預言者は、マッカに行く途中、イフラームを着たままのお姿で、頭部の中ほどから、吸角法により放血なさった。

眼の治療に関して

ヌバイフ・ビン・ワフブはこう伝えている

私たちは、アバーン・ビン・ウスマーン一行共々イフラームをまとって旅立った。
私たちがマラルにいた時に、ウマル・ビン・ウバイドッラーの両眼が炎症を起こし、そして、ラウハーウに着いた時には、痛みがひどくなった。
それで、ヌバイフ・ビン・ワフブは、アバーン・ビン・ウスマーンの処に使いを出してどうすべきかをたずねた。
この折、アバーンは、ヌバイフに村し、両眼にアロエの葉をあてるよう指示したが、それはアッラーのみ使いが、イフラームをまとったある人物の両眼の痛みに対し、
アロエをあてて治療させた話を(カリフ)ウスマーン・ビン・アッファーンが伝えていたためであった。

ヌバイフ・ビン・ワフブはこう伝えている

ウマル・ビン・ウバイドッラー・ビン・マアマルは両眼がはれあがったのでアンチモン(注)を用いて治療しようとした。
これを知ったアバーン・ビン・ウスマーンは、それをやめさせ両眼にアロエを当てるよう指示した。
なお、ウスマーン・ビン・アッファーンは預言者が、そのようになさったと伝えている。

(注)イフラーム状態の者がアンチモンを利用することは、いかなる理由かあれ、禁じられる。
これに反した場合、償いが科せられる

頭部や躰を洗うことについて

イブラーヒームは、彼の父アブドッラー・ビン・フナインの話を次のように伝えている

ある時、アブワーと呼ばれる場所で、アブドッラー・ビン・アッバースと、ミスワール・ビン・マフラマの間に、意見の衝突が起こった。

アブドッラー・ビン・アッバースは、ムフリムでも頭部を洗ってよいとの意見だった。

ミスワールはこれに対し、ムフリム状の者には、頭部を洗うことは禁じられていると主張した。

そのため、イブン・アッバースは、私（イブラーヒームの父）を、アブー・アイユーブ・アンサーリーの処に使いとして送りこの件に関して質問させることになった。

それで、私は、アブー・アイユーブの処に行ったのであるが、彼は丁度、一枚の布をかけた二本の槍の背後で沐浴をしていた。

私が挨拶すると彼は「あなたはだれか」ときいた。

これに対し、「私はアブドッラー・ビン・フナインです。

実は、アブドッラー・ビン・アッバースが、私をあなたの処によこして、アッラーのみ使いはイフラームをまとっていた時どのようにして頭を洗ったのか、あなたにたずねるようにとのことです」といった。

アブー・アイユーブは、片手で少しばかり布をさげて、彼の頭部が私にもみれるようにした。

その後、彼は、水を注いでいた男に「もっと水をかけるように」と命じた。

それで、その男は頭に水を注ぎかけたのであるが、アブー・アイユーブは、このあと、両手で頭を動かしたり、両手を前後にふる動作をした。

そして後、「これが、私がみたみ使いの動作です」といった。

前記と同内容のハディースは、**ザイド・ビン・アスラマ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。
なお、それには、「アブー・アイユーブは、彼の両手を用いて頭のすみずみまでこすり、その後、両手を前後に動かした。
ミスワールは、イブン・アッバースに対し『私は今後、あなたと決して論争しません』（注）と述べた」と記されている。

（注）ミスワールは、イブン・アッバースのハディースに関する知識に敬服し、こう述べたのである

ムフリムが死んだ場合に関して

イブン・アッバースは伝えている

或る人がラクダから落ちて首の骨を折り死亡した。

これに関して預言者は次のようにいわれた。

「ロト《いばら樹の一種》の木の葉を混じた水で躰を洗い、イフラームとして着ていた二枚の布でそれを包みなさい。

頭部を覆ってはならない。

なぜならアッラーは復活の日、タルビーヤを唱えている姿の彼を召喚なさるからです」

イブン・アッバースは伝えている

或る人が、アッラーのみ使いと一緒にアラファートにとどまっていた時、ラクダから落ちて首の骨を折り死亡した。

このことが知らされた時、預言者はこういわれた。

「ロトの葉をまぜた水で、彼の遺体を洗い清め、その後、二枚の布で包みなさい。

香料をつけたり、頭部を覆ったりしてはいけません」

これに関連し、アイユーブは「なぜなら、アッラーは復活の日、タルビーヤを唱えている状態の彼を立ち上らせるからです」と述べ、

また、アムルは「まことにアッラーは復活の日、タルビーヤを唱える彼を立ち上らせるからです」と語っている。

サイード・ビン・ジュバイルは、イブン・アッバースからきいたこのハディースに関し「預言者と一緒に(アラファートに)滞在したその人物は、イフラームを着ていた」と記しているが、後半は前記と同内容である。

イブン・アッバースは伝えている

或る人物がイフラームをまとい、預言者に従って進んでいたが、ラクダから落ちて首の骨を折り、死去した。

アッラーのみ使いは、次のようにいわれた。

「ロトの葉をひたした水で彼の身体を洗い、二枚の布で包みなさい。

ただし、頭部を包んではならない。

なぜなら、彼は復活の日、タルビーヤを朗唱しながらやってくるからです」

サイード・ビン・ジュバイルは、イブン・アッバースよりきいてこう伝えている

「イフラームを身にまとった人が、アッラーのみ使いと一緒にやってきた」

このハディースの後半は、前記と同内容であるが、み使いの言葉の表現に多少の異同があり、これには「復活の日、彼は、タルビーヤを唱えながら召喚されるだろう」と記されている。
なお、サイード・ビン・ジュバイルは、この人物がラクダから落ちた場所については述べていない。

イブン・アッバースは伝えている
乗っていたラクダに首の骨を折られ死去したイフラームをまとった人物がいた。
この件に関し、み使いは次のようにいわれた。
「ロトの木の葉をひたした水で遺体を洗い二枚の布で包みなさい。
頭部も顔面も覆ってはなりません。
なぜなら、復活の日、彼はタルビーヤを唱えながら召喚されるからです」

イブン・アッバースは伝えている
イフラームをまとった或る人物が、アッラーのみ使いの一行の中にいたが、彼のラクダから落ち首の骨を折ったため死去してしまった。
この事件に関し、み使いは「ロトの葉をひたした水で身体を洗ってから、二枚の布で包みなさい。
香料をかけたり、頭部を覆ってはなりません。
なぜなら復活の日、彼はタルビーヤを朗唱しながら（アッラーの下に）召し出されるからです」といわれた。

サイード・ビン・ジュバイルはイブン・アッバースからきいて、次のように伝えている
一頭のラクダがイフラームをまとったその持主の首の骨を折ってしまった。
その折、この人物は、アッラーのみ使いの一行と一緒だった。
それでみ使いは次のようにいわれた。
「この人物遺体を、ロトの葉をひたした水で洗浄しなさい。
香料をかけてはならず、また頭部も覆ってもいけない。
復活の日に彼は、タルビーヤを唱えながら、召し出されるからです」

サイード・ビン・ジュバイルはイブン・アッバースが次のように語ったと伝えている
「イフラームを着た一人の男が預言者の処にやってきたが、彼はその後、自分のラクダから落ち、首の骨を折って死んでしまった。
預言者は人々に命じて、ロトの葉をまぜた水で洗ってから、二枚の布で遺体を包むよう、また、香料をつけてはならず、頭部も露出しておくようお命じになった」
これに関連し、シュウバは次のように語っている。

この後、アッラーのみ使いは、私たちにこういわれた。
『彼の頭や顔面を露出するよう、なぜなら彼は復活の日、タルビーヤを唱えながら、召し出されるからです』」

サイード・ビン・ジュバイルはイブン・アッバースからきいてこう伝えている

或る男のラクダが、アッラーのみ使いの一行に加わっていたその男の首の骨を折った。
そのため、み使いは、ロトの葉をひたした水で、その男の遺体を洗い、顔面は露出しておくようお命じになった。
これに関連し、イブン・アッバースは「頭部も露出しておかねばならない。
なぜなら、その男は復活の日、タルビーヤを唱えながら召し出されるからである」というみ使いの言葉を語った。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いの一行中の或る人物は、自分のラクダに首の骨を折られ、死亡した。
この折、預言者は、次のようにいわれた。
「彼の遺体を洗いなさい。
ただし香水を使ってはなりません。
彼の顔を包んでもいけません。
なぜなら、復活の日彼はタルビーヤを唱えながら、召し出されるからです」

病人のイフラームについて

アーイシャはこう伝えている

アッラーのみ使いは、ズバイルの娘、ドゥバーアの処に行き、彼女に「あなたは巡礼に行きたいと願っていますか」といわれた。
彼女はこれに対し、「アッラーに誓って。そう願っています。
ただ私はしばしば病気になります」と答えた。
み使いは「巡礼に行きなさい。
ただし、条件として次の言葉を唱えなさい。
『おお、アッラーよ、もしも、あなたが私に病いを与えなさる場合には、私はイフラームを脱ぐことに致します』」といわれた。
ドゥバーアはミクダードの妻であった。

アーイシャは伝えている

預言者は、ズバイル・ビン・アブドル・ムッタリブの娘ドゥバーアの家に行かれた。
その折、ドゥバーアは「アッラーのみ使い様、私は、巡礼に行きたいのですが、病身なのです」といった。
これに対し、預言者は「巡礼に行きなさい。
ただし、アッラーがあなたを（病気などで）ひきとめた場合には、行くのをやめなさい。
《病気が重い場合は断念しなさいの意》といわれた。

アーイシャによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

イブン・アッバースは伝えている

ズバイル・ビン・アブドル・ムッタリブの娘、ドゥバーアは、アッラーのみ使いの処でこういった。
「私は病身の女ですが、ハッジに出かけたいと思っています。
どういう風にしたらよいのでしょうか」
これに対し、み使いは「条件として『私の躰が特に悪い場合には、中途であっても断念いたします』と祈ってから巡礼に出かけなさい」といわれた。
彼女は、巡礼を中断することなく、完了することができた。

イブン・アッバースは伝えている

ドゥバーアは、巡礼に参加したいと願っていた。
そのため、預言者は条件を付して、彼女の参加を認めた。
彼女は、み使いの指示に従って巡礼を行なったのである。

イブン・アッバースは伝えている

預言者は、ドゥバーアに対し「巡礼に行きなさい。

ただし、病気になった場合、中断しますという条件を付して祈ってから行きなさい」といわれた。

出産とメンス時のイフラームに関して

アーイシャは伝えている

ウマイスの娘アスマーウは、シャジャラで、アブー・バクルの息子ムハンマドを出産した。
アッラーのみ使いはこの時、夫のアブー・バクルに命じて、彼女に、沐浴をし、そのあと、
イフラームに着替えるようにと伝えさせた。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

ウマイスの娘アスマーウが、ズール・フライファで子供を生んだ時、み使いは、彼女の夫
アブー・バクルに、彼女が沐浴（注）してから、イフラームを着るよう伝えさせた。

（注）この場合の沐浴は躰を清潔にするためで、宗教的意味を持つものではない。
なお、メンス中、または、出産直後の女性でも、巡礼行事に参加することは認められるが、
神殿でのタワーフ及びニラカートの礼拝は禁じられる

イフラームの三種のタイプに関して

アーイシャはこう語っている

私たちは、アッラーのみ使いと一緒に、最後の巡礼の年(632 年)、巡礼に旅立った。
私たちは、ウムラ(小巡礼)のための祈願(ニーヤ)をしてからイフラームをまとった。
この時、み使いは、犠牲を捧げる動物を伴っている者は、イフラームを着る時、ウムラとハッジ両方を終えるまで、イフラームを脱いではならないといわれた。
マッカに着いた時、メンスが始まっていたため、私は、カーバ神殿をめぐるタワーフも、サファーとマルワの間を走るサアーイも行なえなかった。
私がこのことについての不満を訴えた時、み使いは、「髪をほどいて櫛けずりなさい、そして後、ハッジのためタルビーヤを唱えなさい。
ウムラを行うことは断念しなさい」といわれた。
私はその通り行なった。私たちがハッジを終えた時、み使いは、アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクル(注 1)と一緒に私をタニーム(注 2)に行かせ、「そこは、あなた方がウムラを行なう準備をするための場所です」といわれた。
それで私同様にウムラを行なうことを祈願して、イフラームを着た者たちはカーバ神殿のまわりをタワーフ(巡回)し、サファーとマルワの両丘間を走ったのです(注 3)。
そして後、イフラームを脱いで普段着をまとい、ハッジに関する行を全部終えてミナーから戻った後、最後のタワーフを行ないました。
ただし、ハッジとウムラを合併して行うと祈願した人たちは、ただ一度タワーフを行っただけでした。

(注 1)アブドル・ラフマーンは、初代カリフ・アブー・バクルの息子故。
アーイシャの兄弟に当る

(柱 2)タニーム　マッカからマディーナ方面に向って 4 マイルほどのところにある町

(注 3)巡礼に際しイフラームを着る方式には、次の三種がある
イフラード　ハッジだけを目的にイフラームを身に着ける方式。
タマットゥ・ビル・ウムラ　ズール・ヒッジャ月にウムラを志してイフラームを着、ウムラを完了した後普段着に戻り、その後あらためて、ハッジのためイフラームを再び身に着ける方式。
キラーン　ズール・ヒッジャ月にウムラ及びハッジを行なうことを目的としてイフラームを身に着け両方を完了するまでそのままの状態ですごす方式。

預言者の妻**アーイシャ**は次のように語った

私たちはアッラーのみ使いと一緒に、最後の巡礼に出かけた。

私たちの中には、イフラームを着るのに際し、ウムラを志して祈願（ニーヤ）した人たちや、ハッジを志して祈願した人たちがまじっていた。

私たちがマッカに着いた時、アッラーのみ使いは、「ウムラを行なうつもりで、イフラームを着た者でも、犠牲に捧げる動物を持たない者は、イフラームを脱ぎなさい。

ウムラを願ってイフラームをまとい、犠牲動物を持ってきた者は、その動物を屠殺して捧げるまで、イフラームを脱いではいけない。

また、ハッジを目的として、イフラームを着けた者は、それを完遂しなければならない」といわれた。

私は丁度この時、メンスの時期で、その状態がアラファート滞在の日までつづいた。

私は元々、ウムラのためにイフラームを着ていたのであるが、み使いが私に、「髪をとかして櫛けずるよう」（注）

更に、「ウムラを断念して、ハッジのためのイフラームを、改めて、着るように」といわれたので、私はその通りに行なった。

巡礼が終った時み使いは、「アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクルと一緒に、タニームに行って、ウムラのための祈願を再び行なうように」といわれた。

その場所は、私がウムラを断念し、ハッジのために改めてイフラームをまとった場所であった。

（注）髪をほどき、櫛けずるのは、イフラームを脱いで普段着に戻ることを意味する。

イフラーム状態にいる女性の場合、これらの行為は許されないからである

アーイシャは伝えている

私たちは預言者と共に最後の巡礼の年、巡礼に旅立った。

私はウムラを目的にイフラームを着たので、犠牲獣を連れて行かなかった。

預言者はこの折、「犠牲獣を連れてきた者は、ウムラとハッジ両方を行う祈願をし、イフラームを着なさい。

これら両方共完了するまで、イフラームを脱いではならない」といわれた。

この頃私のメンスが始まった。

アラファート滞在（注）の夜、私はみ使いに対し、「私はウムラを祈願してイフラームを着ました。

今更どのように、ハッジを行なうべきでしょうか」と質問した。

これに対し、み使いは、「髪をとかして櫛けずり、ウムラを行うことは当面思いとどまりなさい。

そして、ハッジを祈願してイフラームを改めて身に着けなさい」といわれた。

私がハッジを終えた時、み使いはアブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクルに、彼の乗り物の後部に乗せて私をタニームに連れて行き、再び、ウムラのため祈願を行なわせるようにと命じた。
タニームは私が以前にウムラを行うことを断念した場所であった。

（注）アラファートにズール・ヒッジャ月九日に滞在すること（ウクーフ）は、たとえそれが僅かな時間であっても、最も大切な行事とされている。
巡礼はこれなしには完了したことにならない。
カーバ神殿のタワーフや、サファー及びマルワ間のサアーイ、また、ミナーでの石投げなどの行事は実行しなくても代償行為がみとめられるが、このアラファート滞在に関するかぎり、いかなる代償方法も許されない

アーイシャは伝えている

私たちは、み使いと一緒にマッカにむかった。
その折、彼は「あなたたちの間でハッジとウムラ両方を行なうため、イフラームをまとった者は、その通りにやりなさい。
また、ハッジを目的、イフラームを着けた者もその通りに行ないなさい。
ウムラだけを目的としてイフラームを着た者もその通り行なってよろしい」といわれた。
み使いはハッジのためだけにイフラームをまとわれたが、一部の人々もそれに従った。
人々の中には、また、ウムラとハッジ両方を目的とした者たち、更には、ウムラだけを目的にイフラームをまとった者たちなどがいた。
私もこのウムラのみを祈願してイフラームをまとった者の一人でした。

アーイシャは伝えている

私たちは、アッラーのみ使いと共にズール・ヒッジャ月の新月が現われる前、巡礼に旅立ちました。
この時、み使いは、「ウムラを志してイフラームをまとった者はその通り行ないなさい」といわれました。
もし、犠牲獣を伴って行かなければ、私はウムラを目的にイフラームを着なければなりません。
ウムラを目的にイフラームを着た人々、ハッジを目的にイフラームを着けた人々がそれぞれいたのですが、私の場合、ウムラを目的にイフラームをまとったのでした。
私たちは、旅を重ねマッカに到着しました。
その後、アラファート滞在の日、私のメンスが始まりました。
私はウムラを行なうためそれまでイフラームを脱ぎませんでしたが、預言者にこの状態を訴えました。

すると預言者は「当面、ウムラを断念し、頭髪をとき、櫛を入れなさい。
そしてハッジを目的とした祈願のあと、イフラームを改めて着なさい」といわれました。
私はその指示通りに行ないました。
(ともあれ)ハスバ(注)に滞在していた夜のことですが、アッラーは私たちにハッジを完了させて下さったのです。
預言者は私のためにアブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクルに命じて、彼のラクダの後に私を乗せ、タニームまで連れて行かせました。
私はタニームで、また、ウムラのためのイフラームに着替えました。
こうしてアッラーは私たちにハッジとウムラ両方を恙無く完了させて下さったのでした。
私たちは、償いとして、犠牲も施しも断食も行う必要はなかったのです。

(注)ハスバ　ミナーからマッカに至る途中の地名。

ハスバの夜とは、アイヤーム・ル・タシュリーク(ズール・ヒッジャ日の 11 日より 13 日)の終りに、巡礼者がミナーから移動する夜のことである

アーイシャはこう語っている
私たちはアッラーのみ使いと共にズール・ヒッジャ月の新月が現われる頃、巡礼に出発した。
私たちはハッジを行なうことだけを目的としていたが、この折、み使いは、「あなたたちの中で、ウムラを行なうためのイフラームを着ようとする人は、そのための祈願をしなさい」といわれた。
このハディースの後半は前記と同内容である。

アーイシャは伝えている
私たちはズール・ヒッジャ月の新月が現われる頃、アッラーのみ使いと共に巡礼に旅立った。
私たちの中には、ウムラを目的としてイフラームを着た者や、ハッジとウムラ両方を祈願してイフラームをまとった者、更にまた、ハッジのみを目的にイフラームを着た者たちがおりました。
私自身は、ウムラだけを目的としてイフラームを着た者のひとりでした。
この後半のハディースの内容は、前記と同じである。
なお、預言者の一人、ウルワは、このハディースに関連し、「アッラーは彼女に、ハッジ及びウムラの両方共完了せしめたもうた」と記し、
同じくヒシャームも「彼女は、犠牲動物を捧げることも、断食することも、また、施しを行なう必要もなかった」と述べている。

アーイシャは語っている

私たちは、アッラーのみ使いと共に最後の巡礼の年、マッカにむかって出発した。

私たちの中には、ウムラを目的としてイフラームを着た者、ハッジとウムラの両方を目的にイフラームをまとった者、ハッジだけを目的にイフラームを着た者などがいた。

み使いは、ハッジだけを目的にイフラームをお着けになった。

ウムラだけを目的にイフラームを着た者はウムラを終えた後これを脱いだが、ハッジだけ、もしくは、ハッジ及びウムラの両方を目的にイフラームを着た者は、ズール・ヒッジャ月 10 日、ナフル（犠牲）の日までイフラームをそのまま着ていた。

アーイシャはこう語っている

私たちは預言者と一緒に、巡礼だけを目的に出発した。

私たちかサリフ、もしくは、その近くにいた時、私のメンスが始まった。

預言者が私の処においでになり、私が泣いているのをみて「メンスが始まったのか」といわれたので、私は「そうです」と答えた。

預言者はこの折、「これはアッラーがアダムの子孫たる女性全てに定められたことです。

ともあれ、巡礼者の行なうことはなんでもやりなさい。

ただし、（メンスの終った後で）あなたが躰を洗って清めるまで、カーバ神殿のタワーフを行ってはなりません」といわれた。

預言者は妻たちのため、雌牛を犠牲としてお捧げになった。

アーイシャは伝えている

私たちはアッラーのみ使いと共に、巡礼だけを目的にマッカにむかって出発し、サリフの名で知られる場所に着いた。

ここで、私はメンス状態になった。このため、泣いているところに、み使いがおいでになり、「どうして泣くのか」といわれた。

「私はこの年、巡礼に参加すべきではなかったのです」と私がいうと、

「なに事が起こったのか。

恐らくメンスが始まったのではないか」といわれた。

私が「そうです」と答えると、み使いは「そのことはアダムの子孫たる女性だれしもに運命づけられていることでしかたのないことです。

巡礼では、メンスが終り、躰を清めるまでは、カーバ神殿のタワーフが禁じられているだけ故、それ以外のことは他の巡礼者と同じように行なえばよいのです」といわれた。

マッカに到着すると、み使いは教友たちにむかって「この度は、小巡礼（ウムラ）のためイフラームを着たことにしなさい」といわれた。

それ故、人々は犠牲動物を伴ってきた者らを除き、イフラームを脱いだ。

み使いは犠牲動物を伴ってこられたが、アブー・バクル・ウマルその他の資産家も同様で

あった。
イフラームを脱いだ人々は、再び、今度は大巡礼（ハッジ）のためイフラームを身にまとい、ミナーの谷にむかったが、それは、ズール・ヒッジャ月八日のことであった。
ズール・ヒッジャ月十日、ナフル（犠牲）の日に、メンスが止まり、私は正常な躰に戻った。
この折、み使いが命じたので、私は大巡礼（ハッジ）を終えたあとに行なうタワーフ・イファーダを行った。
その後、雌牛の肉が私たちに贈られてきた。
私が「どうしたのですか」とたずねると、人々は、「み使いが雌牛を奥様たちのために、犠牲に捧げたのです」といった。
ハスバにとどまった夜、私はみ使いに、「他の人々は大巡礼（ハッジ）や小巡礼（ウムラ）を終えて帰ってゆくのに、私は大巡礼（ハッジ）だけです」と訴えた。
それで、み使いは、アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクルに命じ、私を彼のラクダの後に乗らせた。
私は若い小娘であったし、よく覚えているが、ラクダの背でいねむりを始め、そのため顔をラクダの輿の後部にしばしばぶっつけた。
そうして、私たちはタニームに着き、他の人々がすでにすませた小巡礼（ウムラ）を改めて行なうため、ここで、またイフラームを身にまとった。

アーイシャは伝えている
私たちは、ハッジを目的にイフラームを着て出発した。
サリフに着いた時、私のメンスが始まった。
アッラーのみ使いが私の処においでになった時、私は泣いていた。
以下は前記と同内容であるが、このハディースには、み使いやアブー・バクル、ウマル、それに裕福な人々が犠牲動物を伴ったことや、
アーイシャがまだ若い小娘であったこと、いねむりをして輿に顔をぶっつけたことなどは記されていない。

アーイシャは伝えている
アッラーのみ使いは巡礼だけを行なうための祈願をしてイフラームを身に着けられた（注）。

（注）この方式をハッジ・イフラードと称する

アーイシャは伝えている
私たちは聖なる巡礼月、即ち、シャッワール及びズール・カーダの両月とズール・ヒッジャ月の 10 日の夜までの期間（注 1）に、アッラーのみ使いと共に巡礼に旅立ち、サリフで宿泊した。

この時、み使いは教友らの処に行き、こういわれた。
「犠牲に捧げる動物を伴わない者はウムラだけを行うことが望ましく、そうすべきである。
また、犠牲動物を伴っている者はウムラを行なってはならない」
そのため、或る人たちは、ハッジを行なったのに、一方、犠牲動物を持っていない人たちは、ウムラだけでハッジは行なわなかった。
み使いは犠牲動物を持っておられたので、同様に持ってくる程の余裕のあった人々共々、ハッジをなさった。
そのあと、たまたま私が泣いているところにみ使いが来られ、「なんで泣くのか」といわれたので、私は「ウムラに関してあなたが教友らにお話したことをきいたからです」と答えた。
み使いは、また、「なにか起こったのか」ときかれたので、私は「（メンスのため）礼拝してないのです」といった。
この折、み使いは「心配することはない。
（神殿外での行事故）巡礼儀式には参加しなさい。
アッラーは、多分、恩寵を給うでありましょう。
あなたはアダムの子孫たる女性の一人であり、アッラーが女性ら全てに定められたことをあなたも担っているだけなのです」といわれた。
それで、私はハッジの諸々の行事を終えてから、ミナーに戻った。
（メンス期間も終ったので）私は、沐浴の後、カーバ神殿のまわりのタワーフも行なった。
み使いはこの折、ムハッサブに滞在されていたが、アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクルをそこにお呼びになり、
「あなたの妹アーイシャをカーバ神殿の聖域外に連れだし、ウムラを行なうためのイフラームに着替えさせ、その後、神殿のタワーフを行なわせなさい（注 2）。
私はここであなたたちを待っています」といわれた。
それで私は聖域外に出て改めてイフラームをまとい、そのあとマッカに戻って神殿のまわりをタワーフしてから更にサファーとマルワの両丘間を往来する行（サアーイ）を終えた。
その夜半に、私たちは宿泊所にいたみ使いの処に行った。
この時み使いが「行事を完了したか」とおたずねになったので、私はそれに対し、「はい」と答えた。
その後、み使いは教友たちに出発することを命じ、宿泊所からでて神殿に行き、夜明けの礼拝（サラート・スブフ）前に、タワーフを終えた後、マディーナにむかって出発なさった。

（注 1）イスラーム暦 10 番目の月シャッワール、11 番目の月ズール・カアダ、12 番日の月ズール・ヒッジャが巡礼月とよばれる。
ただし、ズール・ヒッジャ月 10 日で巡礼行事は終了する故、巡礼を行なうためにイフラームを身につけるのはこの期日内に限られる

（注 2）今日でも、ウムラのために巡礼者がイフラームに着替える地点（ミーカート）は聖域外の場所に定められている。
ただし、これには聖域内でも違法にならないとする見解もある。

このハディースには、アーイシャの心情をくんだみ使いの特別な配慮がうかがわれる

アーイシャは語っている
私たちの中には、ハッジだけを目的とした者（ハッジ・ムフラド）、ハッジとウムラを目的とした者（カリーン）、更には、最初にウムラを目的とし、それが終ったあと改めてハッジを行なう者（ムタマットゥ）などがいた。

カーシム・ビン・ムハンマドは伝えている

アーイシャはハッジを行なう目的で（マッカに）至ったのである。

ウマラはアーイシャの言葉を次のように伝えている
私たちはアッラーのみ使いと共に、ズール・カアダ月の終る五日前に出発した。
私たちは、み使いがハッジだけを目的としていることを知っていた。
しかし、マッカに近づいた処で、み使いは、犠牲動物を伴わなかった者は、カーバ神殿のタワーフとサファー及びマルワ両丘間の往来（サアーイ）を終えたならば、イフラームを脱いで通常生活に戻るようにと命じられ、ハッジからウムラを目的とするよう変更なさった。
ズール・ヒッジャ月 10 日ナフル（犠牲）の日、雌牛の肉が届いたので、私は「これはどうしたのですか」ときいた。
すると或る人が「み使いが、彼の夫人たちのために犠牲として捧げた肉です」と話してくれた。
このハディースに関連し、伝承者の一人ヤヒヤーは、次のように述べている。
「私はウマラの語ったこのハディースをカーシム・ビン・ムハンマドに話した。
すると、彼は『アッラーに誓って。アーイシャは誤まりなくあなた方にみ使いの言葉を伝えている』といった」

前記のハディースは**ヤヒヤー**によっても、別の伝承者程路で伝えられている。

カーシムは信者の母アーイシャの言葉をこう伝えている
私は、「アッラーのみ使い様、他の人々は、二つの儀式、即ち、ハッジとウムラを終えて、マッカから帰って行くのに、私はただ一つ、ハッジだけで帰ってゆくのです」といって訴えた。
それに対しみ使いは、「待ちなさい。

メンスの期間が終ったら、タニームに行き、改めてウムラを行うためにイフラームを着なさい。
そのあと、これこれの時間（カーシムの記憶では、明日といわれた）に会うことにしたい。
ウムラを行なえるのは、この巡礼であなたが経験した苦労や支出した経費に対する代償です」といわれた。

イブン・ムサンナーは、イブン・アブー・アーディーとイブン・アウンらからきいて、カーシム及びイブラーヒームらが伝えたハディースについて、
「信者の母アーイシャが『アッラーのみ使い様、他の人々は二つの儀式、即ち、ウムラとハッジを行なって帰って行きます云々』と述べた前記と同内容のハディースをこの二人のうちだれが最後に伝えたのか私にはわからない」と述べている。

アーイシャは伝えている
私たちは、アッラーのみ使いと共に（巡礼に）旅立った。
私たちは、み使いが巡礼のみを行なうものと思っていた。
私たちがマッカに着き、神殿のタワーフを行なった時、み使いは「犠牲動物を持ってこなかった者は、イフラームをここで脱ぎなさい」とお命じになった。
それで結局、犠牲動物を持参しなかった者はイフラームを脱ぐことになった。
み使いの妻たちも、犠牲動物を持たない者は同様にイフラームを脱いだ。
私の場合、月経が始まったので神殿のタワーフを行なうことはできなかった。
ハスバに宿泊した夜、私は「み使い様、他の人々はハッジとウムラ両方を完了して帰って行きます。それに比べて、私はハッジを終えただけです」といった。
み使いはこれに対し、「マッカに着いた夜、カーバ神殿のタワーフを行なわなかったのですか」といわれ、
私が「その通りです」と答えると、「あなたの兄弟と一緒にタニームに行き、ウムラを行なうため、改めてイフラームを着なさい。
そのあと、これこれの場所で、私たちと会うことにしなさい」といわれた。
とかくするうちに、み使いの妻の一人サフィーヤがみ使いにむかって
「私のメンスが始まったので、別離のタワーフを行なうことが遅れることになり、あなたをそのためにマッカにひきとめることになるかと思います」といった。
み使いは、これに対し「あなたが怪我をして、頭を剃られますように！《なんと愚かなことをいうのか！の意》
あなたはズール・ヒッジャ月 10 日の犠牲の日に、タワーフをすませなかったのですか」といわれ、
彼女が「すませました」と答えると「そうであれば、出発してもよいのです」といわれた（注）。
み使いはマッカで、或る時、丘の方に登って行かれたが、私は丁度、そこから下るところ

であった。
また私が丘に登りかけた時、ここから下ってくるみ使いにお会いしたこともあった。
この話に関連し、イスハークはアーイシャもみ使いも、丘を登り下りなさったのであると語っている。

（注）サフィーヤに関するこの話は、月経時の女性には、マッカを離れる際に行なう別離のタワーフは義務とされないことを示している

アーイシャは伝えている
私たちはアッラーのみ使いと共に、タルビーヤを唱えながら出発したが、その時には、ハッジまたはウムラのどちらを行なうのか、だれもはっきりとは知らなかった（注）。
この後半のハディースは前記と同様である。

（注）み使い自身、ハッジとウムラのいずれを行なうのか明確な意図をもたずに出発したのであるが、途中、啓示めいたものがあって、
ハディースにみるように、ハッジとウムラ両方を一緒にした、いわゆる、キラーンの方式による巡礼を行なうことになったのであろう

アーイシャはこう伝えている
アッラーのみ使いは、ズール・ヒッジャ月の四日、または、五日に巡礼のためマッカに到着なさった。
その折、み使いは私のところにこられたが、ひどく怒っておられる様子だった。
私は「み使い様、だれがあなたを怒らせたのですか。
その者をアッラーよ、火中に投じ給え！」といった。
み使いはこの時「知っての通り、私は人々に或る事を命じたが彼らはそれを行なおうとせずにためらっている
（ハカムは、この折み使いは「彼らは、ためらっているようにみえる」といわれたようだと述べている。）
もし私自身が、後にどういう風に変更せねばならぬか知っていたとしたら、犠牲動物をわざわざ持ってくることはせずにマッカで買ったであろうし、他の人々と同じようにイフラームを脱いでしまったであろう」（注）といわれた。

（注）神聖月とされる巡礼月にウムラを行なうのは、罪障に当るとイスラーム以前から信じられていたが、預言者は巡礼が実際に行なわれるズール・ヒッジャ月八～十日までの間のウムラが禁じられるのみで、巡礼月間であっても両方を兼ねて行なうことができることに改めたのである。

旧来の慣習に反するとして、預言者の教示に従うのをためらう人々がいたことをこのハディース は示している

ザクワーンはアーイシャからこうきいて伝えている

預言者はズール・ヒッジャ月四日、または、五日に巡礼のためマッカに到着した。

以下は前記内容と同じであるが、ハカムの伝える預言者の言葉「彼らはためらっている」についての記述はない。

アーイシャは伝えている

彼女はウムラを目的として、イフラームを着、マッカに到着した。

しかし、メンスが始まったため、神殿のタワーフを行なわなかった。

彼女は、その後ハッジのためイフラームを改めて身に付け巡礼に関する全ての儀式を完了した。

預言者は巡礼行事を終えてミナーに戻ったその当日、彼女にむかって、「あなたのタワーフは、ハッジとウムラ両方分に相当する」といわれた。

しかし、彼女が納得しない様子だったため、預言者は彼女を彼女の兄のアブドル・ラフマーンと共にタニームに行かせた。

それで彼女はようやく、ハッジのあと、ウムラを行なうことができたのである。

アーイシャは伝えている

彼女は、サリフで月経期に入った。

その期間が終ったあと、アラファートで彼女は沐浴をして躰を清めた。

アッラーのみ使いは彼女に対し、「サファーとマルワ間のあなたのサアーイの行は、ハッジとウムラ両方分に相当します」といわれた。

シャイバの娘**サフィーヤ**はアーイシャの言葉をこう伝えている

アーイシャは「アッラーのみ使い様、ほとんどの人々は、二つの報償を持って帰るのに、私にはそれが一つだけです」と訴えた。

そのため、み使いはアブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクルに命じ、彼女をタニームに連れて行かせた。

彼女はこれに関して、次のように語っている。

アブドル・ラフマーンは彼のラクダの後部に私を座らせた。

私は（巡礼のため）頭部を覆っていた布をあげ、それを首からはずした。

すると彼は、ラクダをぶつように、私の脚を手でぶった。

それで私は彼に「だれかみている人がここにいますか」といった（注）。

ともあれ、私は、ウムラを行なうため、再びイフラームを着、ウムラを終えた後、ハスバに

滞在していたみ使いの処に戻った。

（注）アーイシャは他人はだれもいない処故、ヴェールを着ける必要はないと判断したのであるが、アブドル・ラフマーンは、用心深く彼女にそれを許さなかった

アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクルは伝えている

預言者は、彼にアーイシャを（ラクダの背に）乗せてタニームに連れて行き、ウムラのためイフラームを着けさせることをお命じになった。

ジャービルは語っている

私たちは、イフラームを着け、アッラーのみ使いと共に、ハッジだけを目的（ハッジ・ムフラド）として、出発した。
アーイシャはウムラを目的にしていた。
サリフに着いた時、アーイシャのメンスが始まった。
私たちはマッカに到着してのちカーバ神殿のまわりをタワーフし、サファーとマルワの両丘の間のサアーイを行った。
その後み使いは、私たちのうち犠牲動物を持っていない者にイフラームを脱ぐようお命じになった。
私たちはこれに対し「イフラームを脱ぐようにとはどんな意味ですか」と質問した。
み使いは「イフラーム状態を完全にやめることです」といわれた。
そこで私たちはイフラームを脱ぎ、妻たちの処に戻り、香料をつけ普段着に着替えた。
それは私たちがアラファートに詣でる日まで四夜程前のことであった。
私たちは、ズール・ヒッジャ月八日、タルウィーヤの日《巡礼用に水を準備する日》、再びイフラームを身にまとった。
み使いはその後、アーイシャの処に行き、彼女が泣いているのをごらんになった。
み使いが「どうしたのか」とたずねると、彼女は「メンスが始まったのです。
他の人々はイフラームを脱ぎましたが、私は脱ぐこともできず、また神殿のタワーフもしませんでした。
今、他の人々はハッジに出かけるというのに、私は参加することができないのです」といった。
これに対し、み使いは「月経は、アッラーがアダムの子孫たる女性全てに運命づけたもので仕方のないことです。
それ故、今、沐浴してハッジを行なうためにイフラームを着直しなさい」といわれた。
彼女は、いわれた通りに巡礼の行事に従い、月経期が終るまで定められた場所に滞在した。
そして後、神殿のまわりをタワーフし、サファーとマルワの間のサアーイの行をすませた。

この時、み使いは「これであなたのハッジとウムラの行は完了したのです」といわれた。
これに対し彼女は「私はウムラのためのタワーフを行なわずにハッジのための神殿のタワーフを行なったという思いです」といった。
するとみ使いは「アブドル・ラフマーンよ、彼女をタニームに連れてゆき、別にウムラが行なえるようにしてやりなさい」といわれた。
それはハスバに滞在していた夜のことであった。

ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように伝えている
預言者がアーイシャの処にこられた時、彼女は泣いていた。
このハディースの後半は前記と同内容である。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
アーイシャはウムラを行なうためイフラームをまとった。
その折預言者はまだ巡礼をなさっておられた。
以下は前記と同内容のハディースであるが、次の言葉も記されている。
アッラーのみ使いはやさしい性格の方であった。
それ故に、彼女が或る事を願った時、それをお認めになったのである。
み使いは、彼女をアブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクルと一緒に行かせ、タニームでウムラのためイフラームを改めて着せしめたのである。
このハディースを伝承したマタル及びアブー・ズバイルはまた次のようにも述べている。
「アーイシャは、その後いつもこの預言者在世時の折と同じ様式で巡礼を行なった」

ジャービルはこう語っている
私たちはアッラーのみ使いと共にハッジのためにイフラームを着て出発した。
女性や子供ら（注）も私たちと一緒だった。
マッカに着いた時、私たちは神殿のタワーフや、サファーとマルワ間のサアーイを行なった。
この折、み使いは「犠牲動物を持たない者はイフラームを脱ぐように」といわれた。
私たちが「どの程度脱げばよいのですか」とたずねると、彼は「全部脱ぎなさい」といわれた。
それで、私たちは妻たちの処に行き、通常服に着替え、香料などもつけた。
そして、タルウィーヤの日に再びハッジを行なうためイフラームをまとったが、最初にタワーフとサファー及びマルワ間のサアーイを済ませているのでこれらを再び行う必要はないとのことであった。
み使いは、また、私たちにラクダや牛を犠牲に捧げた場合、七名の者が分担してもよいと指示なされた。

（注）子供の巡礼は、ハッジやウムラの儀式を覚えさせるためにはよい機会とされるが、成人に達しないかぎり、義務としての巡礼を果したとはみなされない

ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように語っている

預言者は一旦イフラームを脱いだ私たちに、ズール・ヒッジャ月八日ミナーの谷に出かける日、イフラームを改めて着るようにと命じられた。

私たちは、アブタフ（注）でイフラームをまとい、タルビーヤを唱えた。

（注）アブタフ　本末、石の多い平地を意味する言葉であるが、ここではマッカ郊外、ムハッサル近くの地名を指す。

なお、シャーフィー派によれば、タマットゥ方式の巡礼をする者にとっては、ズール・ヒッジャ月八日、また、マーリキー派では、この月の一日がイフラームを身にまとうのに最善の日であるとされる

ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように語っている

預言者も教友たちも、神殿のタワーフやサファー及びマルワ間のサアーイの行をハッジ及びウムラ両方のため、十分であるとして一回なさっただけであった。

これに関連し、ムハンマド・ビン・バクルは「それは最初に行なったタワーフ及びサアーイのことである」と付言している（注）。

（注）初めから、ハッジ及びウムラを志した場合（キラーン方式）タワーフ及びサアーイの行は、両儀式に共通とされ、一回行なえばよい。

ただし、ウムラを先ず行なって後、一旦、通常の生活に戻り、改めてハッジのためにイフラームを再び身に着ける場合（タマットゥ方式）にはハッジとウムラそれぞれのため計二回これらの行が行われることになっている

アターはこう伝えている

私は、或る人たちと一緒にジャービル・ビン・アブドッラーが次のように話すのをきいた。

「私たちムハンマド様の教友らは、ハッジだけを目的にイフラームをまとった」

アターは、ジャービルの言葉を更につづけてこう語った。

「預言者は、ズール・ヒッジャ月四日に（マッカに）到着され、私たちに、イフラームを脱ぐようお命じになった」

アターは、これに関し、預言者は教友らにイフラームを脱いで正常な生活に戻り、彼らの妻たちと性交渉を持つよう命ぜられたのであるといい、更に、これは義務（ワージブ）ではないが、許される行為（ハラール）として認められたのであると説明している。

「（ともあれ）私たちは互いに『アラファートに行くまでたった五日前というのに、預言者は、

妻たちと性交渉を持つよう命じられた』と話し合った。
このため私たちは性交をあたかも少し前に終えたかのような状態でアラファートに着いたのである」
アターは、また、ジャービルは、手ぶりをまじえながら話したが、彼にはその時、ジャービルの動く手がその様子を目にみえるように語っているかのようにも思えたと述べている。
「しばらくして、預言者は、私たちを前に立ち上り次のようにいわれた。
『ご承知のように私は、あなた方の中で最も神を恐れ、最も忠実で、また、最も信心深い者です。
その私でも、もし犠牲動物を持参しなかったならば、あなた方と同じようにイフラームを脱いだでありましょう。
そしてまた、もしも私が、後になって知ることのできたこのこと、即ち、ウムラの後、一度通常生活に戻ってもよいことを知っていたならば、私は犠牲動物を伴って来ることはなかったでありましょう』
教友らは、イフラームを脱ぎ、私たちもまた、同様に脱いで預言者の命令をきき、それに従った。
この折、アリーがイエメンからの税収入をたずさえてやってきた。
預言者はアリーにむかい、『あなたはどのように発願してイフラームを着たのか』とたずねた。
アリーは、これに対し、『預言者と同じような発願です』と答えた。預言者はキラーン、即ち、ハッジ及びウムラを中断することなくつづける方式をとられたのであった。
それ故、アリーに対し、『動物を犠牲として捧げねばならない。
両儀式が終るまで、イフラームをそのまま着ているように』といわれた（注）。
アリーは、預言者のために犠牲動物を持参していた。
スラーカ・ビン・マーリク・ビン・ジュアシムがこの折、『アッラーのみ使い様、ハッジまたはウムラを目的として、イフラームを一旦脱ぐことができるのは、この年だけ特に認められたことですか、それとも今後共同様でしょうか』とたずねると、
預言者は、『今後共同様です』といわれた」

（注）イフラーム状態のまま性交渉を行うのは禁じられるが、タマットゥ方式により、イフラームを脱いで通常生活状態に戻れば、それらの行為は許され、不敬には当らない。
また、このハディースが示すように、預言者自身はイフラーム状態を両儀式が終るまでつづけているが、義務として捧げることになっている犠牲動物を持っているかぎり、この状態をつづけることは不敬とみなされず、ハラール（許される行為）として認められている。
なお、このキラーン方式による巡礼者は、ズール・ヒッジャ月 10 日に動物犠牲を捧げるまで、イフラームを脱ぐことはできない

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私たちはみ使いと一緒に、ハッジを目的にイフラームの状態に入った。

私たちがマッカに到着した時、み使いはイフラームを脱ぐように命じ、このイフラームをウムラのためのものとするようにといわれた。

私たちは、この命令が承服できないことと思い、そのため、隠やかならぎる気持に落入った。

人々のこのような反応は預言者にも伝えられた。

私たちには、それが天からの啓示によったものか、だれかが話したためであるのかわからなかった。

（ともあれ）預言者は、「人々よ、イフラームを脱ぎなさい。もし私が犠牲動物を持参しなかったならば、私もあなた方と同様に脱いだでありましょう」といわれた。

それで、私たちはウムラを終えた後、イフラームを脱ぎ、私たちの妻たちと性交渉を持ったり、普通の状態にいる人と同じように日常全てのことを行なった。

そして、ズール・ヒッジャ月八日のタルウィーヤの日、ハッジのためイフラームを着て、マッカを離れ、ミナーにむかった。

ムーサー・ビン・ナーフィウは伝えている

私は、タマットゥ、即ち、ウムラを最初に行なってから通常衣に戻り、再びハッジのためイフラームをまとう方式の巡礼者として、先ず、ウムラを目的にズール・ヒッジャ月四日、即ち、タルウィーヤの日の四日前にマッカに着いた。

すると人々は私に「今やあなたはマッカに住む人々と同じやり方でハッジをしなければなりません」といった。

それで私はアター・ビン・アブー・ラバーハの処に行き、彼の意見をきいた。

この時、アターは次のように話してくれた。

「ジャービル・ビン・アブドッラー・アンサーは次のように語っていた。

彼は、アッラーのみ使いと共に巡礼に行った。

それは、み使いが犠牲動物を伴って行かれた年（即ち、別離の巡礼で知られるヒジュラ暦十年）のことであった。

人々は（イフラード方式により）巡礼だけのためにイフラームをまとっていた。

み使いは、この折、「イフラームを脱ぎなさい！

先ず、神殿をタワーフし、サファーとマルワ間のサアーイの行を終えたならば、髪の毛を切り、その後、通常生活に戻って過し、タルウィーヤの日には、ハッジのため再びイフラームを着けなさい。

今まとっているイフラームをタマットゥ方式《つまり、ハッジを目的にイフラームにまとっても、ウムラの後に一旦、それを脱ぎ、改めてハッジのために着直す方式》のためとしなさい」といわれた。

人々は、これに対し、「私たちはハッジだけを行なうと唱えてイフラームをまとったのです。
どうして、タマットゥ方式に今更変えねばならないのですか」といった。
この時、み使いは、「私があなた方に命じた通りにしなさい。
私に関しては、犠牲を捧げるまでイフラームを脱ぐことは許されないのです」といわれた。
その後、人々はみ使いの命じた通りに行なった。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私たちは、み使いと共に、ハッジを行なうためイフラームをまとって出発した。
み使いは、私たちの着ているこのイフラームをウムラのためのものとするようお命じになった。
それで、私たちはウムラのあと、イフラームを脱いだ。
しかし、み使いは、犠牲動物を伴っていたので、イフラームをウムラだけのためとすることはできなかった。

ハッジとウムラを別々に行なうことについて

アブー・ナドラは伝えている

イブン・アッバースはムトア《タマットゥと同意。即ち、ズール・ヒッジャ月にウムラのためイフラームを着、ウムラを終えた後、改めてハッジを目的にイフラームをまとう方式の巡礼》を行うよう命じた。

しかし、イブン・ズバイルはそれを禁じた。

私が、ジャービル・ビン・アブドッラーとこの件について話した時、彼はこう語った。

「その件に関するハディースが流布したのは、私が述べたからです。

私たちが、アッラーのみ使いと共に、タマットゥ儀礼による巡礼を行なったためです。

ウマルがカリフに就任した時、彼は『まことにアッラーは、彼のみ使いに対し、望むことはなんでも望みのままに行うようお許しになった。

そしてクルアーンによる啓示もそれら全てに関して下された。

それ故、あなたたちはアッラーが命じ給うたように、ハッジとウムラを行ないなさい。

なお、あなた方と、このタマットゥ巡礼の間共に過した女性がおれば、法に定められた条件で結婚しなさい。

期限つきの結婚（ムトア）（注）をした者が連れてこられた時には、私は石打ち刑による死を宣告します』といいました」

カターダも、このハディースを伝えているが、それには次のように記されている。

「ハッジとウムラを別々の機会にしなさい。

なぜならその方が、最もよいハッジの方式であり、ウムラの方式でもあるからです」

（注）ムトア本来の意味は、楽しむこと、利益を得ることであるが、法律上では期間つきの結婚、一時婚の意味で用いられる。

一時婚はアラブの古い結婚様式の一つであったが、預言者によるマッカ征服期に厳禁されるに至った。

違反者には姦通罪同様の罰が科せられた

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私たちはアッラーのみ使いと共に、ハッジを目的にイフラームを着け、タルビーヤを唱えながら進んだ。

み使いはこの折、このイフラームをウムラのためのものにするようお命じになった。

別離の巡礼に関して

ジャウファル（注 1）は彼の父ムハンマドの話をこう伝えている

私たちはジャービル・ビン・アブドッラーを訪問した。

彼は一緒に行った人々それぞれについて質問を始め、それが私の番になったので、「私はムハンマド・ビン・アリー・ビン・フサインです」と答えた。

すると彼は、彼の手を私の頭に置き、私の上衣の上のボタンと下のボタンを順に開いてから、彼の手のひらを（祝福するため）私の胸に当てた。

そして、当時私はまだ子供であったが、その私にむかい、彼は「私の兄弟の息子よ、よくぞこられた。知りたいことがあればなんでもたずねなさい」といった。

それで私は、質問を始めたのであるが、彼は盲目の身でもあり、すぐにそれに答えてくれるというわけにはいかなかった。

そのうち礼拝時間となった。

彼は織り布で躰を覆って立ち上ったが、その布の端を両肩にかけようとする度に、サイズが短かかったため、布は肩からずり落ちた。

別のより広い覆い布（リダー）は近くの衣類かけにかけられてあった。

（ともあれ）彼は、イマームとなって礼拝を行なった（注 2）。

その後、私は彼に「アッラーのみ使いの巡礼について話してほしい」と頼んだ。

すると彼は、手で九の字を示してから、次のように語った。

「み使いは、マディーナに九年も滞在されながら、その間、巡礼を行わなかった。

十年目になってようやく巡礼を行うことを発表なさったため、大勢の人々がマディーナに集まってきて、み使いの巡礼に従うことを願った。

私たちはみ使いと共に出発し、ズール・フライファに到着した。

そこでウマイスの娘、アスマーウは、ムハンマド・ビン・アブー・バクルを出産したのであるが、この折、彼女はみ使いに使いを送り、『どうすべきでしょうか』と質問した。

み使いは彼女に対し沐浴して後、流血しないよう布で手当をしてからイフラームをまとうようにと指示された。

み使いはモスクで礼拝をなさり、その後、ご自分のラクダカスワーウに乗って出発なさった。

み使いを背に乗せたラクダはバイダーウで立ち止った。

その時、私の前方のみわたすかぎりは、ラクダや馬に乗った人と徒歩者たちであった。

私の右側も左側も彼方も同じ状況であった。

ともあれ、私たちと一緒におられるみ使いは、クルアーン啓示を受けられる卓絶したお方です。

そして、そのクルアーン啓示の真の意味を正しく理解なさるのはみ使いだけです。

それ故、私たちは彼の行為に準じてなんでも行ないました。

み使いはアッラーの唯一性（タウヒード）を讃えて、次のように唱えられた。

『ラッバイカ、あなたの近くに参りました。
おおアッラーよ、ラッバイカ、ラッバイカ、あなたに比べるべき存在はございません。
讃えられるべきはあなた。
慈悲深き方はあなた。
また権威もあなたのもの。
あなたに比ぶべき存在はございません！』
人々もまた、今でも唱えているように、このタルビーヤを唱えました。
み使いは人々の唱えるタルビーヤの文句に別の言葉が付加され変更されても、なにも否定なさらなかったが、ご自身のタルビーヤの言葉をずっとお唱えになっていた」（注 3）。
ジャービルはつづけて語った。
「私たちはハッジ以外の意図は持っていなかったし、その時期にウムラを行なえるなどとは知らなかったのです。
私たちはみ使いと共に、カーバに着き、黒石に口づけ（イステスラーム）（注 4）し、カーバ神殿のまわりを七回、そのうち三回は速歩で、四回は並み足でめぐるタワーフの行を終えてから、イブラーヒームの立ち処（マカーム・イブラーヒーム）に行った。
ここで、み使いは**「そして、イブラーヒームの（礼拝に）立った所をあなた方の礼拝の場としなさい」**（クルアーン第 2 章 125 節）という聖句をお読みになった。
この場所はみ使いとカーバ神殿の中間にあった。
私の父は（私は彼が預言者から直接きいて話したのかどうか知らないが、）預言者はこの場所でのニラカートの礼拝の折、クルアーンの純正の章（112 章）と不信者たちの章（109 章）をお読みになったとも語っている。
そして後、み使いは黒石の処に戻りそこに口づけをなさった。
み使いはこのあと、門を出てサファーの方に行きそこに近づいた時、クルアーンの言葉
「本当にサファーとマルワは、アッラーのみ印の一部である」（第 2 章 158 節）をお唱えになり、
その後『私は、アッラーが私に命じたことを始めます』といわれた。
このあと先ず、サファーの丘に神殿がみえる処まで登り、キブラ《カーバの方向》にむかって、アッラーの唯一性と偉大さを讃える言葉を次のようにお唱えになった。
『アッラー以外に神は存在しません。
アッラーに比肩すべきものはありません。
アッラーこそ最高権威者、讃えらるべきお方、万能なお方であられる。
アッラーのみが唯一の存在で、アッラー以外に神は存在しません。
約束を果たし、信者を助け、徒党を組む者らを敗退せしめ給うお方であられる』
このような言葉を三度繰り返し唱えてから祈願なさった。
み使いは、このあとサファーを下り、マルワの方に進んだ。
そして谷の中ごろでは、走り、また、上りにさしかかると歩いてマルワの丘に到着なさった。

そして、ここマルワでみ使いは、『もし私が後になってわかったことを予め知っていたならば、私は犠牲動物を持参せず、ウムラを行なったであろう。
それ故、あなた方の中で、犠牲動物を持参しない者は、イフラームを脱ぎ、それをウムラを行なうためのものとしなさい』といわれた。
この時、スラーカ・ビン・マーリク・ビン・ジュシャム（注 5）が立ち上って『み使い様、それはこの年だけですか。
それとも今後ずっとですか』といった。
み使いは、片手の指をもう一方の手の指にからみ合わせながら、『ウムラはハッジと合同して行なわれることになった。
しかも、今後ずっと、ずっと』と二度繰り返していわれた。
この頃、アリーが、イエメンから預言者のために犠牲動物を連れてやってきた。
アリーの妻ファーティマは、イフラームを脱いだ人々の一人で、色つきの布でつくった服を着、アンチモンをつけていたため、アリーは不満気の様子だったが、
ファーティマはこれに対し、『預言者である私の父がこうするよう命じたのです』と話していた。」
ジャービルは話をつづけた。
「アリーはイラクでこの時のことを次のように語っていた。
『私はみ使いの処に行き、ファーティマの行為に困惑していると話し、み使いがいわれたこと、彼女が述べていることについてみ使いの考えをたずねると同時に、私は彼女に立腹していますといった』
み使いは、これに対して『ファーティマの言葉通りです。ファーティマの言葉通りです』といわれただけであった。
そして、その後アリーにむかって、『あなたは巡礼を志した時、どのような祈願をしたのか』といわれた。
アリーは『おおアッラーよ。私はあなたのみ使いと同じ目的で、イフラームをまといます』と祈願したことを伝えた。
するとみ使いは『私は犠牲動物を伴ってきた。それ故、イフラームを脱がないで過しなさい』といわれた」
ジャービルは、話をつづけた。
「これら犠牲用の動物の総数は、イエメンからアリーが持参したもの、み使いが持参なさったものを合わせると百頭ほどであった。
（ともあれ）預言者や犠牲動物を持つ者を除き、人々は全てイフラームを脱ぎ、髪の毛を少々切りとった。
そしてズール・ヒッジャ月八日タルウィーヤの日、彼らは（ハッジのためのイフラームを改めて身にまとい）ミナーの谷に行った（注 6）。
み使いはラクダでミナーに到着し、午後、夕方、日没、夜それに夜明け前の礼拝をなさっ

た。
夜明け前の礼拝後、太陽の上るまで少し待って後、(動物の毛を編んで作った)テントをナミラに張るようお命じになった(注 7)。
そのあと、み使いはミナーを出発した。
クライシュ族の人々は、み使いが『マシャアル・ハラーム(神聖地域)』に休止なさるだろうと考えたが、これはクライシュ部族の者が、イスラーム以前の時代にいつもそうしたためであった。
しかし、み使いはそのままここを通りすぎ、アラファートに至った。
到着前に命じられたテントはすでにナミラに建てられてあった。
み使いは、ここで太陽が正午をすぎるまで過し、そのあと、ラクダカスワーウに鞍をおくようお命じになった。
その後、み使いはここの谷の中央に進み、人々に次のようにいわれた。
『まことにあなたの血、あなたの財産はあなた方のこの日、この月、この土地が神聖であるように、神聖にして犯すべからざるものです。
みなさい！
無明時代(ジャーヒリーヤ)のものは全て、私の足下で完全に廃止されます。
また、無明時代の血の復讐問題も同様に廃止されます。
“血の復讐”を廃止した最初のケースは、ラビーア・ビン・ハーリクの息子に関するものです。
彼はサアード部族の者に育てられたがフザイルによって殺されました。
無明時代の高利貸(リバー)も廃止されます。
私が廃止する高利貸の最初のケースは、アッバース・ビン・アブドル・ムッタリブに関するもので、それは全て廃止します。
女性に関してはアッラーを特に恐れなさい。
まことにあなた方は彼女らを、アッラーの保障の下に娶ったのであり(注 8)、彼女らと性交渉を持つことも、アッラーのみ言葉によって合法として許されるに至ったのです。
あなた方は、また、彼女らを服属せしめる権利を持っています。
彼女らはあなた方の好まない者をあなた方の寝床に座ることを許してはならないのです(注 9)。
もしも彼女らがそうした場合には、彼女らに体罰を科してもよいが、厳しすぎてはなりません。
あなた方が彼女らの権利に対して行うべきことは、適切を態度で彼女らに食物や衣服を提供することです。
私はあなた方にアッラーの聖典を残した。
もし、あなた方がそれをしっかり守るならば、決して迷うことはないでしょう。
さて、あなた方は(審判の日にアッラーに)私に関して質問を受けることだろうが、その時、

あなた方はどのように答えるのですか』
これに対し人々は、『私たちはあなたがアッラーの教えを伝え、預言者としての役割を果し、真摯な助言を与えて下さったことを証言します』と答えた。
するとみ使いは、人指し指を、初め、天にむけて上げた。
その後、人々の方にむけながら、『おおアッラーよ、ご照覧あれ、おおアッラーよ、ご照覧あれ！』と三回繰り返して叫んだ。
その後、（ビラールが）礼拝を告げるアザーンを唱え、しばらくしてから、イカーマ《礼拝のための整列を告げる言葉》を唱えた。
み使いは、午後（ズフル）の礼拝を先導なさった後、つづけてまた、ビラールがイカーマを唱えると、夕刻（アスル）の礼拝を先導なさった。
ここではみ使いは、これら二つの礼拝を行なっただけでした（注 10）。
み使いはその後、ウクーフ（滞在）の場所にむかい、雌ラクダカスワーウに乗って、岩山《ラフマ山》の近くに行かれた。
そこには、人々によってつくられた道路があった。
み使いは、ここでキブラにむかい、日没まで立ちつづけ、そして、円形の太陽が沈み、黄色い光線が幾らか消えだした頃、ウサーマを彼の背後に座らせ、カスワーウの鼻づなを頭が鞍に触れるほど強くひかれた。
その後、右手を示し、人々に静かに並み足で出発するようお命じになった。
み使いは、砂山を通りすぎる度に、ラクダの鼻づなを少しゆるめて学らせながら、ムズダリファに到着した。
ムズダリファでみ使いは、日没と夜の礼拝をアザーン一度とイカーマ二度唱えただけでおすませになった。
その間、義務とされていないこれら以外の礼拝は一切行なわれなかった。
ここでみ使いは夜明けまで休息なさり、その後、アザーンとイカーマを唱えさせてから、明け方の礼拝を行われ、朝の光が明るくなってから、再びカスワーウに乗って出発なさった。
マシャアル・ハラームでは、キブラをむいてアッラーに祈願し、“アッラーは偉大なり”と唱えて讃美し、更に、“アッラー以外に神はいない”と唱えて、アッラーが唯一絶対の存在であることを証言なさった。
その後は、明るさがはっきりするまでそこに立っておられた。
み使いは、太陽が昇る前にここを出発なさったが、この時、み使いの背後に座ったのはファドル・ビン・アッバースであった。
このファドルは、きれいな髪をもった色白の美しい顔つきの男だった。
み使い一行はどんどん先に進まれたが、女性の一群も、彼らと一緒に歩いていたため、ファドルは彼女らの方をしきりに眺めだした。
み使いは、手を彼の顔において彼の眼をさえぎろうとなさったが、ファドルは、顔を他の方向にむけて、女性たちの方を眺めることをやめなかった。

み使いは、手をそちらの方にむけ、また、ファドルの顔をおおわれたが、彼はまた別の方角に顔をむけて、女性らから目を離そうとしなかった。
そうこうするうちに、み使いは、ムハッシル(注 11)の谷間にさしかかり、ここでは、カスワーウを少しばかり急がせた。
その後、石投げのための、最大の投石場(ジャムラトル・コブラー、又は、アカバ)に通ずる真中の道を通って、一本の木の側にあるそのジャムラ(投石場)に着かれた。
ここで彼は、アッラーフ・アクバル!(アッラーは偉大なり!)と唱えながら七個の小石を一つずつつかんでお投げになった。
これは、ミナーの谷の平地で行なわれる行事である(注 12)。
このあと、み使いは、犠牲場所に行き自分の手で、六十三頭のラクダを屠殺してアッラーに捧げ(注 13)、残りはアリーに命じて屠殺させた。
み使いは犠牲動物をアリーとお分けになったのである。
そのあと、み使いは、犠牲として屠殺された各動物の肉を調理なべに入れるよう指示され、その料理ができると、アリー共々肉をとって食べ、そのスープを飲まれた。
そのあと、み使いは再びラクダに乗って神殿に行き、マッカで午後の礼拝をなさった。
そして後、ザムザムの水を管理していたアブドル・ムッタリブ部族の者の処に行き、
『アブドル・ムッタリブ部族の者よ、水をくんで下さい!
もしも他の人々が、水をくんで供給する権利をあなた方から奪おうとしないならば、私はあなた方と共に、水をくみあげたいのです。
《私が水をくむと私のまねをして、人々は勝手に水をくみはじめ、あなた方の権利を犯すことになりますの意味》」といわれた。
彼らが桶をさし出したので、み使いはその中の水をお飲みになった」

(注 1)ジャアファル・ビン・ムハンマド　四代目カリフ・アリーの息子フサインの子孫。
ジャアファル・サーデクの名で史上有名である。
イスラーム法に関する著書も多い。
90 歳になるジャービルに会って話したのは、彼が 14-5 歳の頃であったという。
なお、ジャービルは預言者の教友として名高い人物で、晩年盲目となったが、94 歳まで生きイスラーム暦 74 年に没した

(注 2)このハディースは、盲人でもイマームとして礼拝を先導することができることを示している

(注 3)人々が唱えたタルビーヤの語句は預言者のそれとは多少異なっている(タルビーヤの項参照)。

預言者はタルビーヤの語句に多少の変化が加えられても内容的に支障がないかぎりそれを黙認なさった。

（注 4）黒石（ハジャル・アスワド）に口づけする行為は、イステスラームと呼ばれる。
通常タワーフやサアーイの行の前にこの黒石に口づけすることになっている

（注 5）スラーカ・ビン・マーリクは、預言者がマッカから、アブー・バクルと共にマディーナに移った折、彼らを追跡し、捕えようとした人物である

（注 6）ハッジの行はズール・ヒッジャ月八日の朝巡礼者がミナーの谷にむかうことから始まる。
イフラード（ハッジのみを目的とする方式）やキラーン（ハッジとウムラ両方を目的とする方式）を志した巡礼者は、イフラームを着けたままの状態でこの日まで過すのであるが、タマットゥ（ウムラの後通常生活に戻り改めてハッジにそなえる方式）の場合には、この日にイフラームを身につける。
ミナーには、九日の朝まで滞在することになっている。

（注 7）巡礼者はズール・ヒッジャ月九日に神殿外の領域のアラファートに滞在（ウクーフ）することになっている。
クライシュ部族の者だけは、これに従わず神殿領城内にあたるムズダリファのある小山寄りのマシャアル・ハラームに、彼らの特権であるとして、とどまろうとしたのである。
預言者はこれを無視し定められた場所アラファートの平原にあるナミラの地にテントを張らせた

（注 8）これらはイスラームが女性の権利を確証した言葉として有名である

（注 9）妻は夫の意志を尊重し、それに添うよう努めるべきであるという教示である

（注 10）巡礼中、アラファートでは、午後（ズフル）と夕方（アスル）の礼拝がつづけて行なわれる。
更に、ムズダリファでは日没（マグリブ）と夜（イシャー）の礼拝がつづけて行なわれるきまりである。
なお、スンナ（預言者の慣行にならった礼拝）やナワーフィル（自由意志による礼拝）は一切行なわれない

（注 11）ムハッシル　ムズダリファとミナーの間にある地名。

イスラーム以前、イエメンの将アブラハが象をひきいてマッカを攻撃しようとした折、滞在した処として有名である

（注 12）ミナーの谷には、投石場は三ケ所あり、その最大なものはジャムラ・アカバ（アカバの投石場）または、ジャムラ・コブラー（大投石場）の名で知られる。

他は、ジャムラ・ウスター及びスグラーの名で呼ばれている。

このミナーにある三ヵ所の投石場で小石を投げる行事は、ハッジの重要な儀式とされ、ズール・ヒッジャ月 10 日には、ジャムラ・アカバ（または、コブラー）の一ヵ所だけで投石されるが、11 日、12 日、13 日には、それぞれ三ヵ所において、投石されることになっている。

行事の起源はこのようにして悪魔を追い払ったイブラーヒームの故事に因んだものといわれる

（注 13）六十三頭の犠牲動物を捧げたのは、預言者の年齢に合わせたもので、彼は生涯の一年分毎に一頭ずつ犠牲を捧げてアッラーへの感謝の思いを表わしたのである

ジャウハルは彼の父ムハンマドの話をこう伝えている

私は、ジャービル・ビン・ムハンマドの処に行って、アッラーのみ使いの（別離の）巡礼について質問した。

この後半は、前記ハディースと同内容であるが、次の言葉が付加されている。

「砂浜に住むアラブ人の中にアブー・サイヤーラという人がおり、鞍をつけてないろばに乗って（ムズダリファからミナーへ）まだイスラームの教えを知らない人々を連れてきた。

アッラーのみ使いが、ムズダリファから、マシャアル・ハラームにむかって出発した時、クライシュ族の人たちは、み使いが必らずやそこにとどまって滞在場所とするに違いないと思った。

しかし、み使いはなんの注意も払わずそこを通りすぎてアラファに行き、ウクーフ（滞在）なさった」

アラファでのウクーフ場所に関して

ジャービルはみ使いの言葉をこう伝えている

私はここで動物犠牲を捧げた。

ミナーの谷全体は、犠牲のための場所である。

それ故、あなたたちはそれぞれ自分のいる場所で犠牲を捧げなさい。

私はこのラフマの岩山近くでウクーフしたが、全アラファ平原がウクーフするための場所です。

私はここマシャアル・ハラームの近く、ムズダリファでもウクーフしました。

ムズダリファの土地全体がウクーフの場所です。

ここでは、自由にどこででも夜を過すことが許されています。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いはマッカに到着すると、黒石の処に行き口づけをなさった。

そのあと、右まわりにタワーフを行われたが、三回は速歩で、あとの四回は並み足であった。

アラファでのウクーフに関連して

アーイシャは伝えている

イスラーム以前、クライシュ部族の者や彼らの信仰慣習に従っていた人たちは、ムズダリファでウクーフし、自らをフムス（注）と称していた。

当時、他のアラブ人たちは、アラファでウクーフしていた。

イスラーム時代が到来すると、アッラーは彼の預言者に、アラファに来て、そこでウクーフし、そして後に、急ぎ立ち去るようお命じになった。

そのことをアッラーのみ言葉**「それで、人々が急ぎおりるところからあなたたちも急ぎおりなさい」**（クルアーン第 2 章 199 節）は意味しているのです。

（注）フムス　信仰熱心なる者の意味

ヒシャームは彼の父の言葉をこう伝えている

アラブは、フムス、即ち、クライシュ部族の者を除き、神殿のまわりを裸身でタワーフした。

彼らはフムスたちが衣服を与えないかぎり、この裸身状態のまま、ウクーフも行なった。

なお、この場合、フムスの男性は男性に、フムスの女性は女性に衣服を与える慣習であった。

フムスらは、ムズダリファから離れなかった。

これに関連し、ヒシャームはアーイシャからきいた彼の父の話をこう伝えている。

アッラーはフムスらのため聖句、即ち、**「それで、人々が急ぎおりるところからあなたたちもおりなさい」**（第 2 章 199 節）を啓示された。

人々はアラファートから急ぎ降りたが、フムスらはムズダリファから急ぎ降りたのである。

このため人々は「ハラム（アラファート）から急いで降りるべきなのです」といってフムスらを非難した。

ともあれ、この啓示「人々の急ぎ降りるところからあなたたちも急ぎ降りなさい」が下された後、クライシュ族の者たちもアラファートへ行くようになった。

（注）ズール・ヒッジャ月九日、巡礼者には午後から夕方までアラファート平原で慈悲の山（ジャバル・ラフマ）と呼ばれる岩山にむかって立つこと（ウクーフ）か要求される。

復活の日、人々の霊魂がアッラーの前で裁決を待つ姿を表した行為といわれる。

日没少し前巡礼者は、マッカの方角に戻り始め、夜は、聖地ムズダリファで一夜を過ごすことになっている

ジュバイル・ビン・ムティームは伝えている

私はアラファート滞在の折、ラクダを失い、さがしまわった。

その時、私はアッラーのみ使いが、アラファートで人々と一緒におられるのをみた。

それで私は、「アッラーに誓って、み使いもフムス《クライシュ族出身者》である。

このような処にどうしておいでになったのであろうか」といった。

クライシュ族出身者は全てフムスの一員であると教えられていたのであった（注）。

（注）ジャービル・ムティームはこの頃まだイスラームに改宗していなかった。

なお、この話はみ使いがマディーナに移る前に行った巡礼に関して語られたものといわれる

ハッジ及びウムラに関して

アブー・ムーサーは語っている

私はバトハーウで、天幕の中におられたアッラーのみ使いをたずねた。

その折、み使いが「あなたはハッジを志しているのか」といわれたので、私は「そうです」と答えた。

み使いは私がイフラームを着た時、再び、「どのような方式《即ち、イフラード、キラーンのうちどれを》望んでイフラームをまとったのか」といわれた。

これに対し、私は「預言者がタルビーヤをお唱えになったと同じ目的でタルビーヤを唱え、イフラームを着ました」といった。

み使いは「あなたのやり方は正しかった。

それでは神殿をタワーフし、サファーとマルワ間のサアーイを行ない、この後（あなたは犠牲動物を持っていない故）イフラームを脱ぎなさい」といわれた。

それ故私は、神殿のタワーフ、サファー及びマルワ間のサアーイを終えてから、カイス部族出身の或る女性の処に行った。

彼女は私の頭のしらみをとってくれた。私はこの後、再び、ハッジのためイフラームをまとった。

その後私はこの時の経験を元に、巡礼方式に関する意見を述べてきたが、カリフ・ウマルの時代になって或る人物が私に「アブー・ムーサーよ（または、アブドッラー・ビン・カイスよ）、あなたの宗教上の見解の一部を変更した方がよい。

なぜなら、信者の長、ウマルがハッジの儀式に関して話したことをあなたは不在中であったため知らないからです」と告げたので、

私は「私たちから、イフラームに関する教えをきいた人々よ、待って下さい。信者の長ウマルがここに来ますから彼の意見に従いましょう」といった。

ウマルが来たので私はこの件に関して彼に質問した。

すると彼は「アッラーの聖典をみると、その中にはハッジとウムラを完全に《それぞれ、別々に　の意》行なうよう私たちに命じております。

なおまた、アッラーのみ使いのスンナ（慣行）によれば、み使いは、犠牲動物を捧げるまでイフラームのままで過されたことがわかります」といった。

前記のハディースは、**シュウバ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アブー・ムーサーは伝えている

私はバトハーウに滞在しているアッラーのみ使いの処に行った。

この折、み使いは「どういう目的でイフラームの状態に入ったのか」といわれた。

私は「み使いと同じ目的でイフラーム状態に入ったのです」と答えた。

み使いが「犠牲動物を持っているか」といわれたので、私は「いいえ」と答えた。
み使いはこれに対し「それでは、神殿のタワーフとサファー及びマルワ間のサアーイを終えたら、イフラームを脱ぎなさい」といわれた。
私は、神殿をタワーフし、サファー及びマルワ間をサアーイして後、私の部族の或る女性の処に行った。
彼女は私の髪をとかし、頭を洗ってくれた。
私は預言者のいわれたこれらの教えを、カリフ・アブー・バクル及びカリフ・ウマルの時代に、人々に説いた。
或る年の巡礼の季節に、一人の男が私の処に来て「あなたは多分、信者の長ウマルがハッジの儀式に関して、説教した内容を知らないでしょう」といった。
それで私は、信仰上の問題について、私たちに意見を求めていた人々に対し、「待ちなさい。
信者の長があなた方の処に来ます。
彼の意見をきいて下さい」といった。
信者の長が到着した時、私は「信者の長よ、ハッジの形式について、あなたはどういったのですか」とたずねた。
彼は「アッラーの聖典をみると、そこには『アッラーのため、ハッジとウムラをしなさい』と書かれています（注）。
また、預言者のスンナによれば、預言者は、犠牲動物を捧げるまで、イフラームを脱がなかったのです」といった。

（注）ウマルは預言者のスンナを尊重しながらも、本来はハッジのみを目的とする様式（イフラード）が最善であるとの見解を持っていた

アブー・ムーサーはこう伝えている
アッラーのみ使いは、私をイエメンに遣わした。私は、み使いの別離の巡礼の年に帰ってきた。この折、み使いが私に「アブー・ムーサーよ、イフラームをまとった時、どういったのか」といわれたので、私は「預言者と同じ祈願をしてイフラームを着、ラッバイカを唱えました」と答えた。
み使いは更に、「犠牲動物を持ってきたか」といわれた。
私がそれに対し「いいえ」と答えると、「行って神殿とサファー及びマルワ間をまわり、その後、イフラームを脱ぎなさい」と指示された。
このハディースの後半は、前記内容と同じである。

アブー・ムーサーは伝えている

彼はハッジ・タマットゥ《ウムラ後、イフラームを脱ぎ、ハッジのため改めてそれを身に着ける方式》巡礼をよしとして、いつも人々に語っていた。

或る男が彼に、「そのような話はやめた方がよい。

なぜなら信者の長が巡礼儀式について、あなたがイエメンに行って不在の折、説教したことをあなたはまだ知らないからです」といった。

それで、彼はウマルに会いこの件について質問した。

ウマルは、この時彼に「私は預言者やまた彼の教友らがタマットゥ方式の巡礼を行なったのを知っています。

しかし、私は結婚した男たちがアラークの近くの木陰で彼らの妻たちと性交渉をし、このあと汗を流しながら巡礼に出かけるのを容認する気にはなれません」と語った（注）。

（注）アラークはアラファート近くの地名。

ウマルはイフラード《ハッジのみを目的とする巡礼》を巡礼の最善の方式と考えていた。

なお、これらのハディースには、ハッジの儀式が行われる聖地アラファート近くでの性行為を嫌悪し、禁止したいとするウマルの意図がみられる

タマットゥ巡礼方式について

アブドッラー・ビン・シャキークは伝えている

ウスマーン・ビン・アッファーンはタマットゥ方式の巡礼を禁じたが、アリーはそれを行なうことを命じていた。

ウスマーンがアリーにこれについての意見を述べた時、アリーは「ご承知のように、私たちはアッラーのみ使いと共に、タマットゥ方式の巡礼を行ないました」といった。

これに対し、ウスマーンは「その通りですが、私たちは心配しているのです」(注)といった。

(注)この心配、不安というのは、イフラード方式の巡礼にタマットゥのそれよりもよりよいアッラーからの報償があると信ずる彼が、信徒たちが折角のその機会を逸するのではないかと不安を感じ心配したことを意味する。

タマットゥ方式そのものに反対しているわけではない

サイード・ビン・ムサイヤブは伝えている

アリーとウスマーンはウスファーンで会った。

「ウスマーンはタマットゥ方式の巡礼、即ち、ハッジの期間に人々かウムラを行なうのを禁じていた。

これに対しアリーは「アッラーのみ使いが、あなたの禁じる方式の巡礼を行なわれたことを、どう思いますか」と質問した。

この時、ウスマーンは「どうか、私たちだけの問題にしておいて下さい」といったが、アリーは「それはできません」と答えた。

アリーはその会見の折、ハッジとウムラをつづけて行なうため、イフラームをまとっていた。

アブー・ザッルは伝えている

タマットゥ方式の巡礼は、ムハンマド様の教友らのために、特別に認められたものであった(注)。

(注)ウムラは、巡礼月間には行ない得ないという、イスラーム以前からの慣習を打破するための特別の配慮のもとに紹介された巡礼方式であるという意味である

アブー・ザッルは伝えている

タマットゥ・方式の巡礼は、私たちに対する特別の配慮のもとに行なわれだしたものである。

アブー・ザッルはこう語っている

ムトアの名でよばれる二つの事柄、即ち、女性との一時婚、及び、タマットゥ方式の巡礼は私たちだけのために許されたものである（注）。

（注）ムトアという言葉は、タマットゥ巡礼の意味でも用いられる

アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・シャアサーは伝えている

私は、イブラーヒーム・ナハイー及びイブラーヒーム・タイミーの処に行って、「今年、私はウムラとハッジを一緒に行ないたいと思う」といった。

これに対し、イブラーヒーム・ナハイーは「しかし、あなたの父上はそのような考えを持っていませんでした」といった。

その折、イブラーヒームは私の父からきいた話を次のように語った。

「あなたの父上がラブザに住むアブー・ザッルの処に立寄った時、丁度あなたと同様のことを述べたのであるが、それに対し、アブー・ザッルは『タマットゥ巡礼は、私たちだけに対する特典であって、あなた方に許される方式ではない』といった」

グナイム・ビン・カイスはこう語っている

私はサアド・ビン・アブー・ワッカスにムトア、即ち、タマットゥ巡礼についてたずねた。

これに対し彼は「私たちはムトアを行ないました。

彼、即ちカリフ・ムアーウィヤはまだイスラーム改宗前で、マッカの或る家に住んでいました」と語った。

（注）「彼」とはウマイヤ朝の始祖カリフ・ムアーウイヤを指すといわれる。

彼はイスラーム暦八年（629 年）預言者のマッカ征服の折、イスラームに入信した。

なお、ムトアに関するこの話は、イスラーム暦七年目に行なわれたウムラ・カダーの折にいわれたものである

前記と同内容のムアーウィヤに関するハディースは**スライマーン**・タイミーにより、別の伝承者経路でも伝えられている。

前記と同内容のハディースは、表現用語に多少の差があるが、**スライマーン**・タイミーによって更に別の伝承者経路でも伝えられている。

ムタッリフは伝えている

イムラーン・ビン・フサインが私に「今後、アッラーが必ずやあなたに役立て給うようなハディースを、今日、話させて下さい。

覚えていて下さい。
アッラーのみ使いは、彼の家族の何人かの人たちに、ズール・ヒッジャ月の 10 日以前にウムラを行なわせたのです。
この行為を中止させるための啓示はありませんし、み使いも死去なさるまでそのことを中止しようとはなさらなかったのです。
み使いの死後、だれもが勝手な意見を述べだしたのです」

前記のハディースは、**ジュライリー**によっても語られ、別の伝承者経路で伝えられている。

イブン・ハーティムはこの中で「或る人物が個人的見解を述べています。
ウマルがその当人なのです」と記している。

イムラーン・ビン・フサインは伝えている
「私はアッラーがあなた方に恩恵を与え給うた或るハディースをお話しします。
それはアッラーのみ使いが、ハッジとウムラを結合し、逝去なさるまでそれを禁じなかったということです。
それを禁じる言葉もクルアーンには啓示されていません」
私個人のことですが、痔に苦しみながらも耐えていた時、私は天使の祝福を受けました。
その後、酸を用いて痔の傷口を焼いた時、痛みはとれましたが、天使の祝福は得られなくなりました。
それで、焼くのをやめたところ、また祝福されるようになったのです（注）。

（注）イムラーン・ビン・フサインは痔の激痛に苦しみながらもそれを訴えず忍耐したため、天使の祝福を受けたといわれる
前記と同様のハディースは、**ムタッリフ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

ムタッリフは伝えている
イムラーン・ビン・フサインは、彼を死に至らしめた病床に臥していた折、私を呼んで次のようにいった。
「私の亡くなった後でも、アッラーがあなたのために、役立たしめ給う幾つかのハディースをお話ししておきます。
私が生きているうちは、どうか私が語ったということを秘密にして下さい。
そして、もし私が死んだら、どうか必要があればそれらを人々に話して下さい。
私は（天使に）祝福されている者です。
ともあれ、預言者は、ハッジとウムラをつづけて行なうよう結びつけたことを忘れないで下さい。

これを廃棄するよう命じた啓示はアッラーの啓典にはみあたりません。
預言者もまた、それを禁止なさいませんでした。
或る男（注）がなにをいおうと、それは彼の個人的見解を示すものにすぎません」

（注）カリフ・ウマルを指すといわれる。
イムラーンはウマルとの意見の対立を避けるため、自分の生存中には名前を公表することを禁じたのである

イムラーン・ビン・フサインはこう語っている
「アッラーのみ使いはハッジとウムラを結合なさいました。
それを廃棄するよう命じたクルアーンの啓示はありません。
み使いもまた、その方式を禁じませんでした。これらのことはよく知っておいて下さい。
或る人がどんなことをいおうと、それはその人の個人的見解でしかありません。」

イムラーン・ビン・フサインは伝えている
「私たちは、ハッジとウムラを結合したタマットゥ方式の巡礼をアッラーのみ使いと一緒に行ないました。
この方式を廃棄するよう命じた啓示はクルアーンにはありません。
或る人《ここでは、カリフ・ウマル》がどのようにいおうとそれは、彼の個人的意見で、それにとらわれる必要はありません。」
イムラーン・ビン・フサインは、このハディースを別にも「アッラーの預言者はハッジ・タマットゥを行い、私たちもまたそれに従いました」という言葉で伝えている。

イムラーン・ビン・フサインは語っている
「アッラーの聖典にはハッジのタマットゥ方式に関する啓示があり、それには
「アッラーのために巡礼（ハッジ）と小巡礼（ウムラ）を全うしなさい。もし、あなた方が妨げられたならば、容易に得られる供物を送りなさい」（第 2 章 196 節）と記されています。
アッラーのみ使いは、これを行なうよう私たちにお命じになりました。
このタマットゥ方式の巡礼を中止するよう命じた啓示はありませんし、み使いは、逝去なさるまでそれを禁じなさいませんでした。
それ故、或る人がなにをいったとしても、それは個人的見解でしかないのです。」
なお、イムラーン・ビン・フサインにより、別の伝承者経路で伝えられた同内容のハディースには「私たちはみ使いと一緒にそれ《タマットゥ》を行なったが、この折、み使いはそれを指示する言葉以外にはなにもいわれなかった」と記されている。

タマットゥ巡礼の動物犠牲について

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは別離の巡礼の時、タマットゥ巡札を行なわれた。
その折、み使いは初めウムラのためにイフラームを着、次いでそれをハッジを目的とするものに変え、動物を犠牲に捧げられた。
み使いは犠牲動物をズール・フライファから伴ってこられた。
み使いは、初めウムラを目的にイフラームをまとい、ウムラのためにタルビーヤを唱え、そして後（ハッジを目的とするイフラームに変えて）ハッジのためのタルビーヤを唱えられた。
人々はみ使いと共に、タマットゥ方式の巡礼を行ない、初めウムラを目的とし、次いでハッジを目的としてイフラームを身に着けた。
或る人たちは犠牲動物を持参していたが、それを持たない人たちもいた。
それでみ使いは、マッカに着いた時、人々に次のようにいわれた。
「犠牲に捧げる動物を持ってきた者たちは、巡礼を終えるまで禁じられていることを（合法であるとして）行なってはいけない。
また犠牲動物を持っていない者たちは、神殿のタワーフ、サファー及びマルワ間のサアーイを終え、頭髪の一部を切った後、イフラームを脱ぎ、その後、ハッジのために改めてそれを着て犠牲動物を捧げねばならない。
犠牲動物を得ることができない者たちは、巡礼期間中に三日間、または、家族のもとに帰った後七日間断食しなければならない」
み使いは、マッカに着いた時、神殿のタワーフをなさった。
その折には、先ず神殿の黒石角に口づけをし、それから七回のタワーフを始め、そのうち三回は速歩で、そして四回は並み足で進まれた。
そしてタワーフの後、み使いはイブラーヒームの立ち処（マカーマ・イブラーヒーム）の傍で、二ラカートの礼拝をし、サラーム・アライクム！（あなた方に平安を！）と唱えて礼捧を終えられた。
その後、ここを去ってサファーに行き、サファーとマルワの間を七度巡回（サアーイ）なさった。
その後、み使いは、巡礼が終わるまで、巡礼者としての禁忌事項を守り、ズール・ヒッジャ月 10 日、犠牲の日には動物を犠牲に捧げられた。
これがすむと、み使いは、マッカに急いで戻り、神殿のタワーフ《タワーフ・イファーダ》をなさり、巡礼中の禁忌事項全てから解放され、自由の身におなりになった。
犠牲動物を一緒に連れてきた者たちはみ使いの行動に従った。
預言者のタマットゥ方式によるハッジ及びウムラ、また、預言者に同行した人々によるタマットゥ巡礼行事に関するこのハディースを、アーイシャも別の伝承経路で伝えている。

キラーン方式の巡礼者に関して

預言者の妻の一人、**ハフサ**はこう語っている

私はアッラーのみ使いに、「他の人々はイフラームを脱いでいるのに、ウムラを終えた後もあなたはそれをお脱ぎになりませんが、どうしてですか」とたずねた。

これに対し、み使いは「私は頭髪をきつく縛っているし、犠牲動物の世話をしなければなりません（注）。

それ故、犠牲を捧げるまで、イフラームを脱がないのです」といわれた。

（注）犠牲動物であることを示すための首飾りをつけることも含まれる

ハフサはこう伝えている

私は、アッラーのみ使いに、「どうしてイフラームをお脱ぎにならないのですか」とたずねた。

このハディースの後半は、前記内容と同じである。

ハフサは伝えている

私は預言者に向かって、「どうして人々はイフラームを脱いだのでしょうか、あなたはウムラを終えた後にもそれを着ておられるのに」といった。

これに対し、預言者は、「私は犠牲動物の世話をしているし、髪も固く縛っています。

ハッジを終えるまで、イフラームを脱ぐわけにはゆかないのです」といわれた。

ハフサはこう語っている

「アッラーのみ使い様」

このハディースは、前記内容と同じであるが、み使いの言葉には、「私は犠牲を捧げるまで、イフラームを脱ぎません」という表現がみられる。

ハフサはこう語っている

預言者が、別離の巡礼の年、彼の妻たちに、イフラームを脱ぐよう命じた時、ハフサは、「あなたはどうしてお脱ぎにならないのですか」ときいた。

預言者は、これに対し、「私は頭髪をきつく縛っているし、連れて来た犠牲動物の世話もしている。

この状態の者には犠牲を捧げるまで、イフラームを脱ぐことは許されないのです」といわれた（注）。

（注）ウムラとハッジを、イフラームを換えることなしに続けて行う（キラーン）巡礼者のことを、カーリンと秩する。

また、イフラード方式の巡礼者はムフリド、タマットゥ方式の巡礼者はムタマットゥと呼ばれる

巡礼中イフラームを脱ぐことに関して

ナーフィウは伝えている

アブドッラー・ビン・ウマルは、ハッジャージュ・ビン・ユースフの率いる軍隊によって、神殿が焼かれ、マッカの太守、アブドッラー・ビン・ズバイルが、戦闘で殺されたあの忌わしい混乱の続いた頃、ウムラに出発した。

この時彼は「もし私が、カーバ神殿に行くのを遅らせたならば、私たちが、アッラーのみ使いと一緒に経験したことを、再び繰り返すことになります」と語っていた（注 1）。

ともあれ、彼は、ウムラのためのイフラームを着た姿でバイダーウ（注 2）に到着した。

ここで彼は、み使いの教友の処に行き、「二つの行事を一回で済ませるための教示があります。

それに関し、私の証人になってもらいたく、あなたを訪問しました。私は実は、ハッジとウムラを同時に行ないたいと願っています」といった。

その後、彼はそこを出発し、マッカの神殿に着いて、七回のタワーフと、サファー及びマルワ間の七度のサアーイを行い、最後に犠牲動物を捧げた。そして、それだけで十分であると思った（注 3）。

（注 1）マッカのクライシュ族との間にフダイビーヤの条約が定められた年（627 年）預言者は、巡礼のためにマッカに入ることを許されず、空しくマディーナに引き返した。

これは、この事件に関して述べられたものである

（注 2）バイダーウ　マッカとマディーナの中間にある町

（注 3）キラーン方式の巡礼者のイフラームはハッジとウムラ両方に有効で脱ぎ替える必要はない。

タワーフやサアーイの行も両儀式に共通で一回行なえばよいことになっている

ナーフィウは伝えている

アブドッラー・ビン・アブドッラー及びサーリム・ビン・アブドッラーが、アブドッラー・ビン・ウマルに、ハッジャージュ・ビン・ユースフがイブン・ズバイルと戦うためマッカに進撃して来た頃、次のようにいった。

「今年は、ハッジに行かない方が安全です。

なぜなら、戦いが起こって、あなたが神殿に行けなくなることが、心配だからです」

これに対し、アブドッラー・ビン・ウマルは、「もし、私と神殿との間に障害があったとしたら、私はアッラーのみ使いがなさったのと、同じようにします。

クライシュ族の不信者たちが、神殿に行くのを妨害した時、私はみ使いと一緒でした。

私はあなた方に、私がウムラを是非やりとげようとしたことの証人になってもらいたいと思います」といった。

その後、彼は出発し、ズール・フライファに着いた。そして、ここでウムラのためのタルビーヤを唱え、次のようにいった。

「もし、道路が平隠であればウムラを行なうが、もしも、カーバ神殿に着くまでに妨害があって、行けなくなれば、私は、かつて私もお供したが、み使いがフダイビーヤでなされたのと同じ風に行動します」。

こういって彼は、クルアーンの聖句**「まことに、アッラーの使徒は、あなたたちにとって立派な模範であった」**（第 33 章 21 節）を唱えた。

その後、彼は出発し、バイダーウの後背地に到着し、ここで次のようにいった。

「ハッジとウムラ両儀式を同時に行なうことに関する教示がある。

もし私がウムラを中止すれば、ハッジもまた中止されることになる。

私がウムラとハッジを同時に行なうのを義務としていることの証人に、あなた方がなってくれるようお願いしたい」

それから彼は（マッカに至り）犠牲動物を、クダイドで買い、神殿をタワーフし、サファーとマルワ間のサアーイを、ハッジとウムラ両方のために一度だけ行った。

そして、ズール・ヒッジャ月 10 日、犠牲の日まで、イフラームを脱がなかった。

ナーフィウは伝えている

ハッジャージュが、イブン・ズバイルを攻撃した年、イブン・ウマルはハッジに行くことを願った。

この後半は、前記と同内容であるが以下の記述もみられる。

イブン・ウマルは、この話をいつも、次の言葉で終えた。

「ハッジとウムラを同時に行なう場合、タワーフは一度で十分であるが、両儀式を終えるまで、イフラームを脱ぐことは許されない」

ナーフィウは伝えている

イブン・ウマルは、ハッジャージュがイブン・ズバイルを攻撃した年、巡礼に参加することを志した。

彼に対し人々は「戦争が起こりそうな様子であるし、巡礼が中止されるのではないかと心配です」といったが、彼は、**「まことに、アッラーの使徒は、あなた方の立派な模範であった」**（クルアーン第 33 章 21 節）と唱えてから、

「私は、アッラーのみ使いが、かつてフダイビーヤでなさったようにするつもりです。

私は、あなた方に、私がウムラを行なうと発願したことの証人になるよう願っています」といった。

その後、彼は出発し、バイダーウの後背地に着いた。

そして、ここで、彼は「ハッジとウムラの両方を一度に行なうようにとの教えがあります。
それ故、証人になって下さい」といった。
この話に関連しイブン・ルムフは、彼が、「私がハッジとウムラを一緒に義務として、即ち、両方の儀式の巡礼者《カーリン》として行なうことへの、あなた方は、証人になって下さい」と述べたこと、更に、彼がクダイドで購入した犠牲動物を捧げたことなどを付記している。
彼は、両儀式のためにタルビーヤを唱えながら、マッカに到着した。
そして、神殿のタワーフ、サファーとマルワ間のサアーイを、ただ一度ずつ行なった。
そして後、このままの状態で過しながら、彼は、犠牲を捧げることも、頭部を剃ることも、髪を切ることも、また、巡礼者としてのいかなる禁忌事項を破ることも、ズール・ヒッジャ月十日の犠牲の日まで一切行なわなかった。
そしてこの日、彼は、犠牲を捧げ、髪の毛を切ったのであるが、ハッジとウムラのためのタワーフは、最初のタワーフで完了した故十分であるとして改めては行なわなかった。
彼は、このハディースに関連し、「このようにアッラーのみ使いはなさったのです」と語っている。

イブン・ウマルについて前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられているが、話の前後関係には多少の異同がみられる。

イフラード及びキラーン様式に関して

ナーフィウは、イブン・ウマルの言葉をこう伝えている

私たちは、アッラーのみ使いと共に、ハッジ・ムフラド《巡礼だけを目的とした人》として、イフラームをまとった。
イブン・アウンは、この言葉を「み使いはハッジ・ムフラドとして、イフラーム状態に入った」という表現で記している。

アナスは語っている

私は預言者が、ハッジとウムラ両方のため、タルビーヤをお唱えになるのをきいた。
バクルは、このハディースに関し次のように述べている。
「私がこのことをイブン・ウマルに話した時、彼は『預言者はタルビーヤを、ハッジだけのためにお唱えになったのです』といった。
更に私が、アナスに会い、イブン・ウマルの言葉を伝えた時、彼は、『あなた方は、私たちをまるで子供のように思っているようだ（注）。
私は確かに、み使いがウムラとハッジの両方のために、タルビーヤを朗唱なさるのをきいたのです』といった」

（注）イブン・ウマルは、預言者が、両巡礼の結合様式を教示する以前に、預言者のタルビーヤをきいたのであろうしなお、アナスは、他人の話をいちいち告げ口されるのを嫌ってこう述べたのである

バクル・ビン・アブドッラーは伝えている

アナスは私たちに、「預言者がハッジとウムラを同時になさるのをみた」と語った。
これに関連し、バクルは次のように述べた。
「私がこのことについて、イブン・ウマルに質問した時、彼は『私たちは、ハッジだけのためイフラームを着たのです』と語った。
それで私は、アナスの処に行き、イブン・ウマルの言葉を伝えたのであるが、これに対し、アナスは、『あなたは、私たちをまるで子供のように思っているらしい』といった」

巡礼者の義務行為について

ワバラは伝えている

私が、イブン・ウマルと共に座っていた時、一人の男がきて彼に「アラファート滞在（ウクーフ）までに、神殿のタワーフをしてもよいのですか」ときいた。

イブン・ウマルがこの折、「その通りです」と答えると、その男は「イブン・アッバースは『アラファート滞在まで、神殿をタワーフしてはならない』といっています」といった。

イブン・ウマルはこれに対し、「み使いは、ハッジをなさった折、アラファート滞在前に、神殿のタワーフをなさいました。

もしも、あなたの話が本当であればのことですが、イブン・アッバースの言葉よりもみ使いのお言葉に従うのがより正しくはありませんか」といった。

ワバラはこう伝えている

一人の男がイブン・ウマルに「ハッジを目的にイフラームを着た私は神殿をタワーフしてもよいのですか」ときいた。

これに対し、彼は「どうしてだめだと思うのですか」といった。

その男は、「私は、或る人の息子がそうすることを非難したのをみたからです。

あなたは彼に比べ親しめるし、私たちが思うに、彼は世間に毒されているようです」といった。

イブン・ウマルは「あなた方や私たちのうち、だれが一体世間に毒されていない人がいますか」といい、更に、「アッラーのみ使いがハッジのためイフラームを着け、神殿をタワーフし、サファー及びマルワをサアーイなさるのを私たちはみました。

み使いによって定められた方式（スンナ）はもしもあなたの話が本当であればのことですが、なにがしによって示された方法よりもずっと従うに価するでしょう」といった。

アムル・ビン・ディーナールはこう語った

私たちはイブン・ウマルに、神殿のタワーフを終了したがサファーとマルワ間のサアーイを行なわなかった或る男の場合について、イフラームを脱ぎ平常生活に戻って、妻との性交渉を持つことが許されるかどうか質問した。

これに対し、イブン・ウマルは次のようにいった。

「アッラーのみ使いは、アラファートに滞在された後、神殿を七回タワーフし、二ラカートの礼拝をなさった。

そしてのち、サファーとマルワの間を七度往き来（サアーイ）なさった。

「まことに、アッラーの使徒は、あなた方にとって、りっぱな模範であった」（クルアーン第33章21節）」（注）

前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている（注）。

（注）これらのハディースは、ハッジを目的に神殿に到着後すぐに行う、いわゆる、到着のタワーフ（タワーフ・クドゥーム）の意義とそれが預言者のスンナ（慣行）として知られていることを示すものである。
なお、ウムラの場合、このタワーフ・クドゥームは行なわれない

巡礼者の義務行為について

ワバラは伝えている

私が、イブン・ウマルと共に座っていた時、一人の男がきて彼に「アラファート滞在（ウクーフ）までに、神殿のタワーフをしてもよいのですか」ときいた。

イブン・ウマルがこの折、「その通りです」と答えると、その男は「イブン・アッバースは『アラファート滞在まで、神殿をタワーフしてはならない』といっています」といった。

イブン・ウマルはこれに対し、「み使いは、ハッジをなさった折、アラファート滞在前に、神殿のタワーフをなさいました。

もしも、あなたの話が本当であればのことですが、イブン・アッバースの言葉よりもみ使いのお言葉に従うのがより正しくはありませんか」といった。

ワバラはこう伝えている

一人の男がイブン・ウマルに「ハッジを目的にイフラームを着た私は神殿をタワーフしてもよいのですか」ときいた。

これに対し、彼は「どうしてだめだと思うのですか」といった。

その男は、「私は、或る人の息子がそうすることを非難したのをみたからです。

あなたは彼に比べ親しめるし、私たちが思うに、彼は世間に毒されているようです」といった。

イブン・ウマルは「あなた方や私たちのうち、だれが一体世間に毒されていない人がいますか」といい、更に、「アッラーのみ使いがハッジのためイフラームを着け、神殿をタワーフし、サファー及びマルワをサアーイなさるのを私たちはみました。

み使いによって定められた方式（スンナ）はもしもあなたの話が本当であればのことですが、なにがしによって示された方法よりもずっと従うに価するでしょう」といった。

アムル・ビン・ディーナールはこう語った

私たちはイブン・ウマルに、神殿のタワーフを終了したがサファーとマルワ間のサアーイを行なわなかった或る男の場合について、イフラームを脱ぎ平常生活に戻って、妻との性交渉を持つことが許されるかどうか質問した。

これに対し、イブン・ウマルは次のようにいった。

「アッラーのみ使いは、アラファートに滞在された後、神殿を七回タワーフし、二ラカートの礼拝をなさった。

そしてのち、サファーとマルワの間を七度往き来（サアーイ）なさった。

「まことに、アッラーの使徒は、あなた方にとって、りっぱな模範であった」（クルアーン第33章21節）」（注）

前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている（注）。

（注）これらのハディースは、ハッジを目的に神殿に到着後すぐに行う、いわゆる、到着のタワーフ（タワーフ・クドゥーム）の意義とそれが預言者のスンナ（慣行）として知られていることを示すものである。
なお、ウムラの場合、このタワーフ・クドゥームは行なわれない

タマットゥ方式のハッジについて

ムスリム・クッリーは伝えている

私はイブン・アッバースにハッジのタマットゥについて質問したが、彼はこの方式を正当であるとして、この方式で巡礼を行うことを許した。

イブン・ズバイルは、これに反し、この方式を禁じていた。

イブン・アッバースはこの件に関し、次のように語った。

「アッラーのみ使いが、このタマットゥ方式の巡礼を許可されたといったのは、他でもなく、イブン・ズバイルの母です。

それ故、あなたは、彼女の処に行き、これについて質問すればよいと思う」

それで、私たちは彼女を訪問した。彼女は太った盲目の女性であったが、この折、「み使いは確かにこれをお許しになったのです」と話してくれた。

前記のハディースは、**シュウバ**によっても、別の伝承者経路で伝えられているが、それには用語上多少の差異がみられる。

ムスリム・クッリーはイブン・アッバースの話をこう伝えている

預言者は、ウムラを目的にイフラームを身にまとわれたが、教友らはハッジを目的としていた。

預言者や犠牲動物を伴ってきた教友らは、だれもイフラームを脱がなかったので、同様にそれを伴ってきた他の巡礼者たちも彼らの方式に従った。

タルハ・ビン・ウバイドッラーも、この人達と一緒に犠牲動物を持ってきた者の一人であった。それ故、彼もイフラームを脱がなかった。

前記のハディースは、シュウバによっても別の伝承者経路で伝えられているが、叙述の内答に差がみられ、これには「タルハ及び他の人たちは犠牲動物を伴ってこなかったため、イフラームを脱いだ」と記されている

巡礼月のウムラに関して

イブン・アッバースは伝えている

（イスラーム以前）人々は巡礼月間にウムラを行うことは、この地上での最大の罪行に当るとみなしていた。
それ故、彼らは、ムハッラム月（イスラーム暦一月）をサファル（同二月）にさしかえて数え、そして「このサファル月には（巡礼者を乗せる必要もなくて）ラクダの背は丈夫になるし、巡礼者の足跡も道路から消えてしまう」といって、サファル月が終わるとウムラを行うことを望む者には、そのために出発することを許したものであった（注）。
それだけに、預言者や教友らがズール・ヒッジャ月四日にハッジを行うため、イフラームを着てマッカに着いた時、預言者は、人々にイフラームの状態をハッジを目的とするものから、ウムラのそれに変えるよう命じられたが、その命令は彼らにとって、思いもよらぬことだったのである。
ともあれ、この時彼らは「アッラーのみ使い様、イフラーム状態の義務をどの程度解放され自由になるのですか」とたずねたが、み使いは、これに対し、「完全に自由になるのです」といわれた。

（注）イスラーム以前、太陰暦の順序を、都合によって適当に変えるのは珍しいことではなかったといわれる。
太陰暦による様々な宗教行事の定めを乱す行為でもあり、預言者はこれを不信者の証左であると述べている

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは、ハッジのため、イフラームをまとわれた。ズール・ヒッジャ月四日が過ぎた時、み使いはファジュル（早朝）礼拝を先導なさり、礼拝が終わると、「ハッジを目的としたイフラームをウムラのために変えたい者はそうしてもよい」といわれた。

ラウフ及び**ヤヒヤー・ビン・カシール**は、ナスルの伝えるハディースと同じく、「アッラーのみ使いは、ハッジを目的にイフラームをまとわれた」と記し、また、**アブー・シハーブ**は、「私たちはみ使いと共に、タルビーヤを唱えながら、ハッジに出発した」と記している。
なお、これらのハディースは全て、「み使いはバトハーウで朝の礼拝をなさった」と伝えている。

イブン・アッバースは伝えている

預言者は、ズール・ヒッジャ月十日までのうち四日間を過ぎた日、教友らと共にマッカに到着された。
一行はハッジのためのタルビーヤを唱えていた。

預言者は、教友らにこの度のイフラームをウムラのためのイフラームにするよう命じられた。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは（マッカ近郊の谷）ズー・タワーで朝の礼拝をなさった。
マッカに到着し、ズール・ヒッジャ月四日が過ぎた時、み使いは、教友らに、彼らがハッジを目的としてまとったイフラームを、ウムラを行うためのイフラームにするよう命令なさった。
ただし、犠牲動物を伴ってきた者らは、この命令の対象外とされた。

イブン・アッバースはアッラーのみ使いの言葉を次のように伝えている

「これは私たちにとっては、便宜なウムラの儀式です。
犠牲動物をもたない者は、イフラーム状態から完全に脱けだしなさい。
ウムラは復活の日まで（この後ずっと）、ハッジと合併して行なわれることになったのです」

アブー・ジャムラ・ドゥバイーは伝えている

私が、タマットゥ方式の巡礼を行なった時、人々はそれをやめさせようとした。
それで私は、イブン・アッバースの処に行き、この件に関して質問したが、彼はこのタマットゥ方式の巡礼を行うことを私に命じた。
その後、私は神殿に来てここでねむったのであるが、その折、夢に一人の男が現われ、「ウムラは、アッラーが嘉し祝福なさる儀式であり、ハッジもまた同様である」と語った。
私はイブン・アッバースの処に行き、夢でみたことを話した。
すると彼は「アッラーは偉大なり！　アッラーは偉大なり！」を二度唱えた後、「これは、カーシムの父、ムハンマド様がなさった事（スンナ）です」といった。

犠牲動物の飾りについて

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは、ズール・フライファでズフル（午後）の礼拝を行われた。
そのあと、雌ラクダを連れて来るよう命じ、こぶの右側に印をつけ、そこから少しばかり血をとったあと、首のまわりに履き物二つを結びつけた（注）
それから、彼はそのラクダに乗り、バイダーウに到着した時、ハッジのためのタルビーヤをお唱えになった。

（注）犠牲に捧げる動物を飾るのは、イシャーラと呼ばれる。
犠牲動物であることと所有者を明確にするためである

前記と同内容のハディースは、**カターダ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アブー・ハッサン・アーラージは伝えている

フジャイム族の或る男が、イブン・アッバースに「人々の関心事となり、また、論争問題ともなっている、神殿のタワーフを終えた者がイフラームを脱ぎ得ることについてのあなたの判断はいかがなものですか」ときいた。
これに対し、彼は、「たとえ、あなた方が認めないとしても、そのことは預言者のスンナ（慣行）なのです」と答えた。

アブー・ハッサンは伝えている

「ハッジを目的とし、イフラームを着け、神殿のタワーフを終えた者にも、別にウムラのため、タワーフすることが許されたということが人々の関心の的となっています」とイブン・アッバースが人から告げられた時、彼は「あなた方が認めないとしても、それは預言者のスンナなのです」といった。

アターは語った

イブン・アッバースは「ハッジ、或いは、ウムラを志し、神殿のタワーフを行なった者は、イフラーム状態から解放される」（注）と常々いっていた。
これに関連し、預言者の一人、イブン・ジュライジュは次のように語っている。
私はアターに向かい「イブン・アッバースはなにを根拠にそれを話しているのか」ときいた。
彼が「**アッラーの御言葉、即ち、「それらの（家畜）は古来の家カーバの近くで犠牲として捧げられた」**（クルアーン第 22 章 33 節）による」と答えたので、私はまた、「これは、アラファート滞在（ウクーフ）後に関連する啓示である」といった。
すると、アターは「イブン・アッバースはこれについてアラファート滞在の後にも、それ以前

にも関連する啓示であると述べている。
彼は、預言者が別離のハッジの折、イフラームを脱ぐよう命じた時のご指示によって、そのようにしているのである」と答えた。

（注）イブン・アッバースの言葉は、ウムラを終えた者に関していわれたものと理解される。
なお、ここでいうタワーフにはサアーイの行も含まれる。
巡礼の場合タワーフ、アラファート滞在、投石、更に、切髪、動物犠牲などの行事を終えないかぎり、イフラームを脱ぐことはできない。
ただし、タマットゥ方式のハッジの場合、犠牲動物をもたない者は、タワーフ、サアーイの後、イフラーム状態より解放される

ウムラの際の切髪に関して

イブン・アッバースは伝えている

ムアーウィヤが私にむかい、「私がアッラーのみ使いの頭髪をはさみで切ったことがあるのを知っていますか」といったので、私は「知りません。あなた以外にそのことを証言する人はいないでしょう」と答えた。

イブン・アッバースはこう伝えている

ムアーウィヤ・ビン・アブー・スフヤーンは、マルワで「私は、はさみを使ってアッラーのみ使いの髪を切ってあげた。
もしくは、私はマルワでみ使いが、はさみを使って髪を切るのをみた」（注）と彼に話した。

（注）頭髪の一部を切ったり、頭髪全部を剃ったりするのは、ハッジやウムラの基本行事で、これらを行なわずにイフラームを脱ぐことは許されない

アブー・サイードは伝えている

私たちはアッラーのみ使いと一緒に、タルビーヤを高らかに唱えながらハッジに出発した。
マッカに着いた時、彼は、ハッジを目的としたイフラームをウムラのそれに変更するよう命じたが、犠牲動物を持参した者は例外とされた。
ズール・ヒッジャ月八日、タルウィーヤの日、私たちは、ミナーに行き、ハッジのためのタルビーヤを（改めて）唱えた。

ジャービルと**アブー・サイード・**フドリーは伝えている

私たちは預言者と共に出発したが、その時、ハッジのためのタルビーヤを声高く唱えた。

アブー・ナドラは伝えている

私がジャービルと一緒にいた時、或る男がきてこういった。
「二つのムトア、即ち、ハッジのタマットゥ方式と女性との一時婚に関し、イブン・アッバースとイブン・ズバイルとの間に意見の相違がみられます」
ジャービルはこれに対し「私たちは、み使いの在世時それらを行なっていたが、カリフ・ウマルが禁じたので、それ以来、決して行いませんでした」と述べた（注）。

（注）ウマルは、前述した通り、イフラードを最も好ましい巡礼方式であるとしているが、タマットゥ方式を全面的に禁じているわけではない。
一時婚制度は、預言者在世時に禁止されたが、ウマル時代以降、それが一層強化された

預言者のイフラーム及び犠牲動物に関して

アナスは伝えている

アリーがイエメンから帰ってきた時、預言者は彼に、「どのように祈願してイフラームをまとったのか」とたずねた。

アリーは「預言者と同じ祈願をしてイフラームをまといました」と答えた。

預言者はこの折、「もし、私が犠牲動物を伴ってなければ（ウムラを終えた後）イフラームを脱いだであろう」といわれた。

このハディースは、サリーム・ビン・ハイヤーンによっても、別の伝承者経路で伝えられているが、それには表現上多少の差異がみられる。

アナスは伝えている

私は、アッラーのみ使いが（キラーン方式で巡礼を行なわれたため）ウムラとハッジのタルビーヤ、ウムラとハッジのタルビーヤといいながら、両方のため同時に、タルビーヤをお唱えになるのをききました。

なお、別の伝承者経路で伝えられたアナスのこのハディースには、「私は預言者がウムラ及びハッジのために（同時に）タルビーヤを唱えるのをききました」と記されている。

ハンザラ・アスラミーは伝えている

私はアブー・フライラが預言者の言葉をこう語っているのをきいた。

「私の生命の主たる御方に誓って。マルヤムの息子《イエス・キリスト》は、ハッジ、または、ウムラ、もしくは（キラーン方式の巡礼者として）両方のために、ラウハーウ谷（注）で必ずやタルビーヤを唱えることだろう」

（注）マディーナよりマッカの方角 60 マイル程の処にある谷の名。

ハディースには、イエス・キリストがこの世が崩壊する前に、一ムスリムとして再臨する話が記されている

ハンザラ・ビン・アリー・アスラミーは、アブー・フライラの語った前記と同内容のアッラーのみ使いの言葉を伝えている。

預言者のウムラに関して

カターダは、アナスからきいてこう語っている

アッラーのみ使いは、四回ウムラをなさったが、ただ一度ハッジと合併してウムラを行なった場合を除き、三回共ズール・カアダ月の間であった。

それらは、フダイビーヤから、即ち、ズール・カアダ月、フダイビーヤの和議が結ばれた時、行われたウムラであり、また、この次の年のズール・カアダ月のウムラ、及び、フナインでの戦い（注）の戦利品を分配した場所、ジイラーナから出発したズール・カアダ月のウムラであった。

そして最後は（別離の巡礼の時の）ハッジと合併して行なわれたウムラであった。

（注）フナインの戦いフナインはマッカよりターイフに向かって 60 マイル行程の谷の名。

ここで 630 年にムハンマドは反イスラームのアラブ部族と戦った

カターダはこう語っている

私はアナスに、アッラーのみ使いは何度ハッジをなさったのかとたずねた。

彼は、「ハッジを一度、ウムラを四度なさった」と答えてくれた。

以下のハディースは前記と変らない。

アブー・イスハークは語っている

私がザイド・ビン・アルカムに、「何度、あなたはアッラーのみ使いに従って遠征に参加したのか」とたずねた時、彼は「17 回」と答えた。

この折、ザイド・ビン・アルカムは、「み使いは 19 回の遠征を指揮なさった。

マッカからマディーナに移った後には、ただ一回ハッジを行なわれたがそれが、別離の巡礼であった」とも話してくれた。

これに関連し、アブー・イスハークは、「み使いは、マディーナに移る前、マッカで他にもハッジをなさった」と語っている。

アターはウルワ・ビン・ズバイルからききこう伝えている

私とイブン・ウマルはアーイシャの部屋の壁に寄りかかりながら、彼女がシワークの小枝を使って歯をみがく音をきいていた。

この折、私が、「アブー・アブドル・ラフマーン《アブドッラー・ビン・ウマルの呼名》よ、預言者はラジャブ月にウムラをなさったのですか」とたずねたところ、彼は「そうです」と答えた。

それで私はアーイシャに向かい、「信者の母よ、あなたはアブー・アブドル・ラフマーンの言葉をききましたか」といった。

彼女が「何をいったのですか」というので私は預言者がラジャブ月にウムラをなさったとい

う彼の言葉を伝えた。
すると彼女は、「アッラーがアブー・アブドル・ラフマーンを許し給わんことを！
私の生命に誓って、預言者はラジャブ月にウムラをなさったことはありません。
預言者がウムラをなさった時には、アブー・アブドル・ラフマーンも必ず同行したはずです」
といった。
イブン・ウマル《アブー・アブドル・ラフマーン》は、この言葉をきいたが、肯定も否定もせず
黙っていた。

ムジャーヒドは伝えている
私とウルワ・ビン・ズバイルはモスクに入った。
そしてそこで、他の人たちが朝の礼拝を行なっているのに、アブドッラー・ビン・ウマルだけ
がアーイシャの部屋の近くに座っているのをみかけた。
（太陽はすでに昇り、朝の礼拝時刻には遅いので）私は彼らの礼拝についてアブドッラー
に質問した。
すると彼は、「あれは、新方式（ビダーア）（注 1）です」といった。
その時ウルワも彼に「アブー・アブドル・ラフマーンよ、アッラーのみ使いは何度ウムラを
行なったのですか」と質問した。
彼は「四回です（注 2）。
その一回はラジャブ月になさいました」（注 3）と答えた。
私たちは、彼の話を虚偽であるといったり否定したりするのは嫌だった。
その時、アーイシャの部屋から、彼女が歯をみがく音がきこえた。
それでウルワは、「信者の母よ、アブー・アブドル・ラフマーンが話したことをききましたか」
といった。
彼女が「なにを話しましたか」といったのでウルワは、「彼はみ使いが四回ウムラなさり、
そのうち一回はラジャブ月になさったのですと話しています」と告げた。
これに対し、彼女は、「アッラーがアブー・アブドル・ラフマーンに慈悲を給わらんことを！
み使いはウムラの度に彼を伴って行かれたが、ラジャブ月にウムラをなさったことはあり
ません」と答えた。

（注 1）ビダーアと記されるが、これは朝の礼拝ではなく、自由礼拝として個人的に行なわ
れていた礼拝であったものと思われる
（注 2）預言者は一回目のウムラの折には、マッカに入ることを許されず、フダイビーヤで
イフラームを脱ぎ犠牲動物を捧げ頭髪を剃った後、マディーナに戻った。従ってタワーフ
やサアーイは行なっていない。
二回目のはこの翌年、フダイビーヤの協定によりマッカに入り、三日間滞在した折のウム
ラであり、更に三回日のウムラはフナインでの戦いの帰途、630 年（イスラーム暦八年）に

行なわれている。
四回目のウムラは、イスラーム暦十年最後の巡礼の析に、ハッジ共々合併して行なわれたものである
（注 3）ラジャブ月にウムラを行なったとのイブン・ウマルの言葉は、彼の錯覚、または、失念によるもので正しくない

ラマダーン月のウムラに関して

アーイシャは伝えている

イブン・アッバースは私に、アッラーのみ使いがアンサールの一女性と次のように話されたと語ってくれた

（なお、イブン・アッバースは彼女の名前もいったが私は忘れてしまった）。

「み使いは、『どうしてあなたは私と一緒にハッジに行かなかったのですか』といわれた。

彼女はこれに対し、『私たちは、水を運ぶラクダ二頭をもっているだけです。

そのうち一頭は、私の夫と息子がハッジのため連れて行きました。

一頭が水を運ぶため残っているだけです』と答えた。

すると、み使いは、『それでは、ラマダーン月になったら、ウムラを行ないなさい。

なぜなら、この月のウムラはハッジの代りとなるからです。

（即ち、ハッジと同じ功徳があるからです）』といわれた。」

イブン・アッバースは伝えている

預言者は、ウンム・シナーンという名のアンサールの一女性に「どうして私たちと一緒にハッジに行かなかったのですか」とたずねた。

彼女は「私の夫、某の父はたった二頭の駱舵を持つのみです。

そのうち一頭は私の夫と息子のハッジのために連れていかれました。

残った一頭を私たちの小さな子供が水を運ぶために使っています」と答えた。

これに対し、み使いは、「ラマダーン月のウムラは、ハッジ、または、私と一緒のハッジに十分相当します」（注）といわれた。

（注）ラマダーン月のウムラは、ハッジと同等の功徳があるとされているが、ハッジの代用にはならない

マッカへの出入に関して

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは（マディーナを出る時には）シャジャラの道（注 1）を通った。
またマディーナへは、ムアラッスの道（注 2）から入った。
またマッカには、山手側の方から入り、下手の方から出ていった。
このハディースは、別の伝承者経路でウバイドッラーによっても、伝えられているが、伝承者の一人、ズバイルはその中で、「山手側とは、バトハーウのことである」と述べている。

（注 1）シャジャラ道　ズール・フライファのモスク近くに出る道筋

（注 2）ムアラッス道　マディーナから 6 マイル程はなれた場所の名に因んだ道路

アーイシャは伝えている

預言者は、マッカに至ると、上手側から入り下手側から出て行かれた。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いはマッカ征服の年（630 年）カダーウ、即ち、上手側からマッカに入られた。
これに関連し、ヒシャームは「私の父は上手、下手両側からマッカに入ったが、通常はカダーウ、つまり上手側より入った」（注）と述べている。

（注）イスラームでは、一般に、町への出入に別々の道を通ることが推奨される。
混雑を避けること、また、どちらの道にも加護を祈ることのためといわれる

ズー・タワーの夜に関して

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、ズー・タワーで夜を過し、朝まで滞在して後、マッカに入られた。アブドゥッラー・ビン・ウマルもそのように行なった。

なお、これに関連し、イブン・サイードによるハディースには「朝の礼拝を行うまで」とあり、ヤヒヤーのそれには「朝まで」と記されている。

ナーフィウは伝えている

イブン・ウマルはマッカに入る時には、必ず、ズー・タワーで夜を過し、朝まで滞在した。その折には躰を洗ってから、朝のうちにマッカに入った。

彼は、預言者がこのようになさったと語っていた。

アブドゥッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、マッカに入る度に、いつも、ズー・タワーに滞在して夜を過ごし、ここで朝の礼拝をなさった。

み使いは、この礼拝を近くにあるモスクではなく、やや荒涼とした感じの小山の上でなさった。

その場所は、このモスクの下方にあった。

ナーフィウは、アブドゥッラー・ビン・ウマルの話を次のように伝えている

アッラーのみ使いは、顔を二つの小山の方角にむけられた。

これらの長い小山は、カーバ側にあって、カーバとみ使いとの間をさえぎっていた。

そして、そこに建てられたモスクは、小山の左側にあった。

み使いの礼拝場所はその黒い小山よりも下方、十腕尺程度離れた処にあった。

み使いは、あなたとカーバの間に横たわるこの長い二つの小山の方角にむかって礼拝をなさったのでした。

速歩（ラマル）でのタワーフについて

ナーフィウはイブン・ウマルからきいて伝えている

アッラーのみ使いは、神殿のタワーフの折、初めの三回を早めにお歩きになり、あとの四回を普段の速度で歩かれた。

また、谷のなかほどでもサファーとマルワ間の場合のように駆け足でお通りになった。

イブン・ウマルも、これと同じように行なった。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはハッジやウムラで、神殿のタワーフをなさるときには、初めの三回を速歩で、そのあとの四回を普通の速度でおまわりになった。

これが終わるとニラカートの礼拝をし、そのあとサファーとマルワ間のサアーイをなさった。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

私はアッラーのみ使いがマッカにきて、黒石に口づけをなさり、そのあとのタワーフでは、七回巡るうち初めの三回を速足でおまわりになるのをみた。

ナーフィウはイブン・ウマルからきいてこう伝えている

アッラーのみ使いは、黒石からひと巡りしてまた黒石に戻る巡回（タワーフ）のうち三回を速足で、四回を並み足でなさった。

ナーフィウは伝えている

イブン・ウマルは黒石間を速足で歩いた。そして、アッラーのみ使いがこうなさったと話した。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは、黒石から黒石までの三回巡を終えるまで速足で歩かれた。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは、黒石から黒石へと三巡回を早足でお歩きになった。

アブー・トゥファイルは伝えている

私は、イブン・アッバースに「あなたは神殿のまわりを三回は早足で、四回は並み足で歩くのが預言者のスンナ（慣行）だと思いますか。

あなたの仲間たちは、そのように話していますが」といった。

これに対し、イブン・アッバースが「彼らの話は本当でもあり、嘘でもあります」といったので、私は「『彼らの話は本当でもあり、嘘でもあります』とはどんな意味ですか」とたずねた。
するとイブン・アッバースは次のように答えた。
「アッラーのみ使いが、マッカにやってきた時、多神教徒らは『ムハンマドや教友らは疲れてやつれ切っている。
それ故、神殿のタワーフはできないだろう』といった。
彼らは、預言者をそねんでいたのです。
そのこともあって、アッラーのみ使いは、人々に、タワーフの三回は早足で、四回は並み足で歩くようにと命じられたのです」
私は更に、「サファーとマルワをラクダに乗ったまま、タワーフするのは、スンナですか。
あなたの仲間はそのように話していますが、教えて下さい」といった。
イブン・アッバースは、これに対しても「彼らのいうことは、正しくもあり、嘘でもあります」といった。
私は、また「正しくもあり、嘘でもあります、という言葉の意味はなんですか」と質問した。
彼は「アッラーのみ使いが、マッカに到着された時、(彼を一目でもみようとして)大勢の人々が、しかも小娘らまで、『ムハンマドだ、ムハンマドだ』と口々にいいながら、み使いのまわりに集まってきました。
み使いは、彼らをぶったりして、彼の前からどかせるようなことはなさいませんでした。
そのように、まわりに大勢の人が集まったため、み使いはラクダに乗ってタワーフをなさることにしたのです。
しかし、元より、自分の足で歩いたり、走ったりするのがよりよい方法であることは、いうまでもありません」と答えた。

前記のハディースは、**ジュライリー**によっても、別の伝承者経路で伝えられているが、表現上多少の異同があり、それには「彼らは、預言者をそねんでいた」ではなく、「マッカの人々は、しっと深い性格だった」と記されている。

アブー・トゥファイルは伝えている
私は、イブン・アッバースに「人々はアッラーのみ使いが神殿のまわりのタワーフとサファー及びマルワ間を速歩でまわったので、これがスンナ(注)であると語っています」といった。
彼はこれに対し、「彼らの話は本当でもあり、また嘘でもあります」と述べた。
(注)スンナ預言者の慣行、ムスリムは預言者の慣行を典範としてそれに従うことになっている。
これを無視した場合、代償が課せられる場合もある

アブー・トゥファイルは伝えている

私は、イブン・アッバースにむかって、「アッラーのみ使いをみかけたと思います」といった。
彼が、「その人の様子を話してみなさい」といったので私は「その人は雌ラクダの背に乗ってマルワの丘の近くにおり、そのまわりには、大勢の人々が集まっていました」と述べた。
するとイブン・アッバースは、「その人は、アッラーのみ使いに相違ありません。
なぜなら教友らは、決して人々をみ使いの側からどかしたり、追い払ったりはしないからです」といった。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いと教友らはマッカに着いたが、その時、彼らはヤスリブ《マディーナの旧名》特有の熱病にかかり弱っていた。
それをみた多神教徒たちは、「熱病で弱っている者たちが明日（神殿に）やってくるだろう。彼らは、ひどく苦しんでいる」といった。
ムスリムたちがハテームの中（ヒジュル）（注）に座っていた時、預言者は、彼らに神殿の角から角へと七回のタワーフを行う時には、三回は速歩で、四回は並み足で歩くようにと命じた。多神教徒らに、彼らの強さをみせるためであった。
多神教徒らは、それをみて互に、「あなたたちは、彼らが熱病でやつれているといったが、彼らは、某々よりも強健ではないか」といい合った。
イブン・アッバースはこの話に関連し、「アッラーのみ使いが神殿の巡回（タワーフ）全部を早足で歩くよう命じなかったのは、ムスリムらへの思いやりからであった」と述べている。

（注）ハテーム　カーバ神殿南西側にある半円形の囲いをいう。この内側をヒジュルと称する

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは、サアーイを行ない、また、神殿のまわりを早足で歩まれた。
これは、多神教徒らに、彼の強靭さを示そうとなさったためである。

イエメン側両角に触れることについて

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

彼はアッラーのみ使いが、イエメン側両角（注）以外に、神殿のどこかにお触れになるのをみたことがなかった。

（注）イエメン側両角　カーバ神殿の東南側の通称で、東角には黒石（ハジャル・アスワド）がはめ込まれている。
なお、神殿の北西側はシリヤ側両角とよばれる

サーリムは彼の父からきいてこう伝えている

アッラーのみ使いは黒石角以外、神殿のどの角にもお触れにならなかった。
黒石角はジュムヒ一族の人々の家に近い角である。

ナーフィウは、アブドッラーからきいて、こう伝えている

アッラーのみ使いは、黒石とイエメン角以外には、お触れにならなかった。

イブン・ウマルは伝えている

私はイエメン側両角と黒石に口づけすることをやめたことはない。
アッラーのみ使いが困難な時にも、平隠な時にも、これらの両角にお触れになったからである。

ナーフィウは伝えている

私はイブン・ウマルが黒石に手でさわり、その後、その手に口づけしているのをみました。
それについて彼は、「私はアッラーのみ使いが、こうなさるのをみて以来、ここに口づけすることをやめたことがない」といった。

アブー・トゥファイル・バクリーは伝えている

イブン・アッバースは「アッラーのみ使いが、イエメン側面角以外の場所にお触れになるのをみたことがなかった」と語った。

黒石への口づけに関して

サーリムは彼の父からきいて伝えている

ウマル・ビン・ハッターブはカーバの黒石に口づけしたあと、次のようにいった。

「アッラーに誓って、私はお前が、ただの石にすぎないことを知っている。

もしもアッラーのみ使いが、お前に口づけなさるのをみなかったら、私は決してお前に口づけはしないだろう」

ハールーンは「これと同内容のハディースをザイドもその父アスラムからきいて伝えている」と述べている。

イブン・ウマルは伝えている

ウマルは黒石にキスしながらこういった。

「私はお前にキスするが、勿論、お前が単なる石塊にすぎないことを知っている。

ただ、私は、アッラーのみ使いがキスなさったのをみたことがあるため、このようにお前にキスするのである」

アブドッラー・ビン・サルジスは伝えている

私は額が広い（注）男《ウマル・ビン・ハッターブ》が黒石に口づけしながら、

「アッラーに誓って、私はお前がいかなる害悪も善行も為し得ない単なる石塊にすぎないことを十分知りながら、このように口づけしている。

もし、アッラーのみ使いが、お前に口づけなさるのをみることがなかったら、私は決して口づけなどしなかったろう」といっているのをみた。

（注）額が広い　原文は「アスラア」、はげ頭の意味でも用いられる。

知性や寛大さの表象とされる

アービス・ビン・ラビーアは伝えている

私は、ウマルが黒石にキスしながら「私はお前にキスしているが、お前が単なる石塊にすぎないことを知っている。

もしも、アッラーのみ使いがお前にキスなさるのをみなかったならば、私はこのようなキスはしなかったろう」といっているのをみた。

スワイド・ビン・ガファラは伝えている

私はウマルが黒石にキスし、頭をその黒石につけたまま、「私はアッラーのみ使いが、お前を大変大切にしておられるのを知っている」といっているのをきいた。

このハディースは、スフヤーンによっても別の伝承者経路で伝えられるが、用語上多少の

異同がある。
それにはウマルの言葉として、「しかしながら私は、アブー・カーシム《預言者ムハンマド》が、お前を大変尊重しておられるのをみた」と記され、「頭をつけたまま」という表現はみられない。

ラクダ上でのタワーフに関して

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは、別離の巡礼の際、ラクダに乗ったままで神殿のタワーフをなさり、黒石には杖でお触れになった。

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは、別離の巡礼の際、ラクダの背に乗ったまま、神殿のタワーフをなさり、その時杖で黒石にお触れになったが、それは、人々に彼の姿をはっきりみえるようにするためであった。

更にまた、まわりに大勢の人が集まっていたので、（宗教上の問題を）彼らがあれこれ質問できるように配慮なさったためでもあった。

ジャービル・ビン・アブドッラーは語っている

アッラーのみ使いは、別離の巡礼の際、神殿のタワーフやサファー及びマルワ間のサアーイを、彼の乗用雌ラクダに乗ったまま行なわれたが、それは彼の姿を人々にはっきりみえるようにして、なんでも質問させるためであった。

この時には、大勢の人が彼のまわりに集まっていた。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、別離の巡礼の時、ラクダの背に乗ったまま、カーバ神殿のタワーフをなさり、黒石にお触れになった。

み使いは、その折、人々を遠ざけるようなことはなさらなかった。

アブー・トゥファイルは伝えている

私は、アッラーのみ使いが神殿のタワーフを行ない、手に持っていた杖で、黒石に触れたあと、その杖に口づけなさるのをみた。

ウンム・サラマは伝えている

私は、アッラーのみ使いに私の病気について愚知をこぼした。

み使いはこの時、「乗物に乗ったまま人々の後方でタワーフをしなさい」といわれた。

それで、私はいわれた通りにタワーフをしたが、その時、み使いは神殿にむかって礼拝をなさっておられた。

み使いがその折、唱えていたのはクルアーンの山章（アッ・トール）であった。

サアーイに関して

ヒシャームは彼の父ウルワの語った話を伝えている

彼（ウルワ）はアーイシャに「私は（ハッジの折）、サファーとマルワの間のサアーイを行なわなくても構わないと思います」といった。

「どうしてですか」と彼女がいうので、彼は「なぜならば、アッラーは

「まことにサファーとマルワは、アッラーのみ印の一部である。だから聖殿に巡礼する者、または、小巡礼のためにそれを訪れる者は、この両丘をタワーフしても罪ではない」（クルアーン第 2 章 158 節）

と述べておられるだけだからです」といった。

これに対し、彼女は次のようにいった。

「アッラーは、サファーとマルワ間のサアーイを行なわぬかぎり、ハッジやウムラ（小巡礼）を完了したとはお認めにならない。

もしも、あなたのいうような意味ならば、クルアーンの聖句『この両丘をタワーフしなくても罪ではない』という表現であるべきでしょう。

（ともあれ）あなたは、どのような情況でこの啓示が下されたのか知っていますか。

それは、ジャーヒリーヤ《イスラーム以前》の時代に、アンサール《改宗前のマディーナの人たち》が、イサーフ及びナアーイラとよばれる川の岸辺に安置された二つの偶像にむかってタルビーヤを唱えた時啓示されたものです。

人々はここに行ってから、サファーとマルワの間のタワーフを行ない、そのあと、頭を剃りました。

イスラーム時代が始まると、彼らは、ジャーヒリーヤ時代に慣行となっていたこれら両丘のタワーフを行なおうとしなくなったのです。

このような事情で、アッラーは『まことにサファーとマルワはアッラーのみ印の一部である』に始まる聖句を啓示なさったのです。

それで人々は、サアーイを再び行なうようになったのです」

ヒシャームは父ウルワの語った話をこう伝えている

私（ウルワ）はアーイシャに「サファーとマルワ間のサアーイの行をしなくても罪にはならないと思います」といった。

彼女が「どのような理由でそういうのですか」といったので、私は「なぜなら、アッラーは

「まことにサファーとマルワはアッラーのみ印の一部である。だから神殿に巡礼する者、または小巡礼のためそれを訪れる者は、この両丘をタワーフしても罪ではない」（クルアーン第 2 章 158 節）

といっておられるからです」と答えた。

これに対し彼女は次のように話した。

「もしもあなたの主張が正しければ、クルアーンのその言葉は『それら両丘間をタワーフしなくても罪にはならない』と表現されるべきでしょう。
この啓示はアンサールの人々に関連して下されたもので、ジャーヒリーヤ時代には、彼らはタルビーヤを唱える時、偶像神マナートの名で唱えたのです。
それ故、ムスリムにとってサファー及びマルワ間のタワーフは許されない行為であると彼らは考えたのです。
ムスリムたちが、預言者と共にハッジのためマッカに着いた時、彼らはみ使いにこのことを話しました。
そのため、アッラーは、この聖句を啓示なさったのです。
アッラーは、サファーとマルワのサアーイを行なわなかった者に対しては、巡礼行事を完了したものとはお認めにならないでしょう」

ウルワ・ビン・ズバイルは伝えている

私は預言者の妻アーイシャに「他の人が、サファーとマルワ間のサアーイを行なわなくても誤ちとは思いません。
また、私自身がそれを行なわなくても気には致しません」といった。
これに対し、彼女は「私の姉妹の息子よ、あなたのいったことは間違っています。アッラーのみ使いはサアーイをなさったし、彼の教友たちも同様でした。
それ故、これは必ず守らねばならない預言者のスンナ（慣行）のひとつなのです。
サアーイの行は、ムシャッラルにあったあのあわれな偶像、マナートに対してタルビーヤを唱えたアラブ人異教徒の慣習だったのです。
イスラームの教えがもたらされた時、私たちは預言者にこの慣習について質問しましたが、その折、アッラーは**「まことに、サファーとマルワはアッラーのみ印の一部である」**という聖句を啓示なさったのです。
それ故、ハッジやウムラのために神殿を訪れた人が、これら両丘間のサアーイを行なっても罪にはならないのです。
また、もしもあなたが考える通りであれば、聖句は、『両丘間のサアーイを行をわなくても罪にはならない』との表現であるべきでしょう」といった。
ズフリーは、これに関連し、次のように伝えている。
私はこの話を、アブー・バクル・ビン・アブドル・ラフマーン・ビン・ハーリス・ビン・ヒシャームに語った。
彼は、これに感銘して次のようにいった。
「これこそは、知識（イルム）というべきものです。
私は学者らが、『サファーとマルワのサアーイを行わなかったアラブ人の多くは、これら両丘間のサアーイ行は、ジャーヒリーヤ時代の行為であるといい、また一方、アンサールの人たちは、神殿のタワーフは命じられたが、サファーとマルワ間のサアーイについては命

じられなかったといった。
それ故、アッラーは、まことにサファーとマルワはアッラーのみ印の一部であるというこの啓示を下されたのである』と話すのをききました。」
アブー・バクル・ビン・アブドル・ラフマーンはこの時、また、「私はこの啓示は某々の人たちのために下されたものと思います」とも話していた。

ウルワ・ビン・ズバイルは伝えている
私はアーイシャに質問した。このハディースの後半は、前記と同内容であるが、次の言葉も記されている。
「教友らは、アッラーのみ使いに、この件について質問し、『み使い様、私たちは、サファーとマルワ間のサアーイを行なう気になれません』といったが、その折、**「サファーとマルワは、アッラーのみ印の一部である」**というこの聖句が啓示されたのです。
それ故、ハッジまたは、ウムラを行なう者が、もし、向丘間のサアーイをしても罪にはならないのです」
アーイシャは、この話に加えて、また、「アッラーのみ使いは、両丘間のこのサアーイの行を全ムスリムが遵守すべきスンナとしてお定めにをったのです。
それ故、両丘間のこのサアーイを無視するのはだれにとってもよくないことです」と語っている。

ウルワ・ビン・ズバイルは伝えている
アーイシャは彼に次のように話した。
「イスラームへの改宗以前、アンサールやガッサーン部族の人たちは、偶像神マナートのためにタルビーヤを唱えていました。
それ故、彼らは、サファーとマルワの間のサアーイは行なわなかったのです。
先祖伝来の慣習であったが、偶像神マナート巡拝のためイフラームを着た者は、サファーとマルワの間をめぐることはしませんでした。
彼らは、イスラームに改宗した時、アッラーのみ使いに、このことについて質問しました。
この時アッラーは**「まことにサファーとマルワは、アッラーのみ印の一部である。だから聖殿に巡礼する者、または、小巡礼のためにそれを訪れる者は、この両丘をタワーフしても罪ではない。進んでよい行ないをする者には、本当にアッラーは嘉し、それをよくお認め下さる」**（クルアーン第 2 章 158 節）という啓示を下されたのです」

アナスは伝えている
アンサールたちは、クルアーンの**「まことにサファーとマルワはアッラーのみ印の一部である、だから聖殿に巡礼する者、または、小巡礼のためにそれを訪れる者は、その両丘**

をタワーフしても罪ではない」（クルアーン第 2 章 158 節）というこの聖句が啓示されるまでは、サファーとマルワ間のサアーイを行をうことに熱心ではなかった。

サアーイを繰り返さないことに関して

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

　　預言者と彼の教友らはサファーとマルワの間のサアーイをただ一瞬行なっただけであった。

イブン・ジュライジュも前記と同内容のハディースを伝えているが、それには「アッラーのみ使いは、最初にただ一回サアーイをなさっただけでした」と記されている。

タルビーヤ朗唱継続に関して

ウサーマ・ビン・ザイドは伝えている

私はアラファートからアッラーのみ使いのラクダに同乗し、後部に座っていた。

み使いは、ムズダリファ近くにある山の左側に着いた時、ラクダをひざまづかせて降り、放尿してから戻ってこられた。

私が水を注ぐと、み使いは簡単にウドゥー《礼拝前の洗浄》をなさった。

その時私は「み使い様、礼拝の時間です」といったが、み使いはこれに対し、「礼拝は間もなく行われる」といわれただけであった。

み使いは、再びラクダに乗り、ムズダリファに到着してから礼拝をなさった（注 1）。

このあとファドルがラクダの背の後部にみ使いと一緒に座り、朝（ミナーに）到着した。

これに関連し、クライブは次のように述べている。

「ファドルからきいたアブドッラー・ビン・アッバースは私に、『み使いは（ミナーにある）アカバの投石場（ジャムラト・ル・アカバ（注 2））に到着するまで、タルビーヤをお唱えになった』といった」

（注 1）ムズダリファでは日没（マグリブ）と夜（イシャー）の礼拝がつづけて行なわれる

（注 2）別にジャムラト・ル・クブラー（大投石場）ともよばれる。

ズール・ヒッジャ月 10 日、ナフル（犠牲）の日、巡礼者はここで最初の小石を投げた後、タルビーヤの朗唱を一切中止することになっている

イブン・アッバースは伝えている

預言者はファドルを彼のラクダの後部に座らせ、マグリブとイシャーの両礼拝がつづけて行われる場所、即ち、ムズダリファを出発なさった。

イブン・アッバースは、また、次のようにも伝えている。

預言者は（ミナーにある）ジャムラト・ル・アカバ（アカバの投石場）で小石を投げる時まで、タルビーヤを唱えることをおやめにな、らなかった。

イブン・アッバースはアッラーのみ使いのラクダの後部に座ったファドル・ビン・アッバースからきいて次のように伝えている

アッラーのみ使いは、アラファート滞在の日の夕方と、また、ムズダリファでの朝、人々が押し合って進んでいたので、ゆっくり進むようにといわれた。

み使いは自ら手綱をとって雌ラクダを制御しながら、ミナー郊外のムハッシルに到着なさり、そして、ここで人々に、ジャムラ（投石場）で投げる小石を拾うようにといわれた。

その後、み使いは、ジャムラで投石するまで、タルビーヤの朗唱をおつづけになった。

このハディースは、アブー・ズバイルによっても別の伝承者経路で伝えられるが、それには、「アッラーのみ使いは、ジャムラで投石するまでタルビーヤの朗唱をおつづけになった」という言葉はない。
なお、これには「預言者は、人が小石を拾う場合の手つきをなさった」という言葉が加えられている。

アブドッラーは私たちが（ムズダリファに）集まった時こう語っている
私は（クルアーンの）雌牛の章の啓示を受けた御方《預言者ムハンマド》がタルビーヤを朗唱なさるのをききました。

アブドル・ラフマーン・ビン・ヤズィードは伝えている
アブドッラー・ビン・マスウードはムズダリファでの集会から帰りながら、タルビーヤを唱えた。
これをきいた人々は「彼は、砂漠に住むベドウィンに相違ない《ハッジの儀式に関して正確な知識を持たず、そのため、このような場所でさえタルビーヤを唱えているの意》」といった。
これに対し、アブドッラーは「人々は預言者のスンナを忘れてしまったのだろうか。
それとも、迷って判断がつかなくなったのだろうか。
私は（クルアーンの）雌牛の章の啓示を受けた御方《預言者ムハンマド》が正しくこの場所でタルビーヤを朗唱なさるのをききました」といった。

アブドル・ラフマーン・ビン・ヤズィード及びアスワド・ビン・ヤズィードは伝えている
私たちはアブドッラー・ビン・マスウードが（ムズダリファに）集まった人々にむかって、「雌牛の章の啓示を受けた御方《預言者ムハンマド》が、正しくこの場所でタルビーヤを朗唱なさる声をききました」と語るのを耳にしました。
このあと、アブドッラー・ビン・マスウードがタルビーヤを唱えたので、私たちもまた彼と一緒にそれを唱えました。

アラファの日の朗唱について

アブドッラーによると、彼の父ウマルは次のようにいった

私たちは朝、アッラーのみ使いと共に、ミナーからアラファへと向かった。
或る者はタルビーヤを唱え、また、或る者はタクビール《アッラーは偉大なり！》を唱えていた。

アブドッラーによると彼の父ウマルは次のように語っている

アラファの日《ズール・ヒッジャ月九日の朝》、私たちはアッラーのみ使いと一緒に歩いた。
この折、或る人たちはタクビールを唱え、別の人たちはタフリール《アッラーの他に神はない！》を唱えた。
私たちも、タクビールを唱えていたが、この折私は人々に「アッラーに誓って、どうしてあなた方はこういう場合、アッラーのみ使いはどうなさるのか、おたずねしないのですか」といった。

ムハンマド・ビン・アブー・バクル・サカフィーは伝えている

彼はアナス・ビン・マーリクに、朝ミナーからアラファに向かう途中、「あなた方はこのアラファの日に、アッラーのみ使いとご一緒しながら、なにをなさったのですか」と質問した。
これに対しアナスは、、タフリールを唱える者がいたが咎められなかった。
また、タクビールを唱える者かいたが咎められなかった」と答えた。

ムハンマド・ビン・アブー・バクルは伝えている

私はアラファ滞在の日の朝、アナス・ビン・マーリクに「この日にタルビーヤを唱えることについてなにか意見がありますか」とたずねた。
彼は次のように答えた。
「私はアッラーのみ使いや教友たちと共にこの旅程を歩みました。
その折、ある者はタクビールを唱え、また、ある者はタフリールを唱えました。
私たちの誰もそのことで非難し合うことはありませんでした」

マグリブとイシャーの同時礼拝について

イブン・アッバースの解放奴隷**クライブ**によると、ウサーマ・ビン・ザイドは次のように伝えている

アッラーのみ使いはアラファを出発し、とある繁みの処で、ラクダから降りて小用をたされ、簡単にウドゥー（洗浄）なさったが、それは礼拝のためのウドゥーではなかった。
私がみ使いに「礼拝は」というと、「礼拝は間もなく行なわれる」といわれただけであった。
その後、また、ラクダにお乗りになり、ムズダリファに着くと降りて、丁寧にウドゥーをなさった。
そして、礼拝の始まり（イカーマ）が告げられた後、マグリブの礼拝をなさった。
この折、誰もがそれぞれのラクダをここでひざまづかせた《ラクダから降りたの意》。
その後、イシャーの礼拝の始まりが告げられ、み使いは礼拝をなさった。
これら二礼拝、つまり、マグリブとイシャーの間には、いかなる礼拝もなさらなかった。

ウサーマ・ビン・ザイドは伝えている

アッラーのみ使いはアラファから帰る途中、小用のために繁みの処でラクダからお降りになった。
そのあと私は彼の両手に水を注いであげた。
この折、「礼拝をなさるのですか」とおたずねしたところ、「礼拝は間もなく行なわれる」といわれた。

クライブはウサーマ・ビン・ザイドからきいてこう伝えている

アッラーのみ使いは、アラファからの帰途、とある繁みにさしかかった折、ラクダから降りて小用をたされた（ウサーマが水を注いだとは述べられてない）。
その後、み使いは水を求め、簡単にウドゥーをなさった。
私がみ使いに「礼拝はどうなさいますか」ときくと「間もなく行なわれる」といわれた。
それから出発し、ムズダリファに到着した。ここでみ使いはマブリブとイシャーの礼拝をつづけて行なわれた。

クライブは伝えている

彼はウサーマ・ビン・ザイドに「アラファの夜、あなた方はアッラーのみ使いに従っておられたが、その折、なにをしたのですか」とたずねた。
するとウサーマは次のように答えた。
「私たちは或る小山の細い通りにさしかかった。
そのあたりは人々がマグリブの礼拝を行なう場所でもあった。
み使いはラクダを止め、そこで小用をたされた（ウサーマがこの時、水を注いであげたことは述べられていない）。

それから水を求め、簡単にウドゥーをなさった。
私が『み使い様、礼拝はどうなさいますか。』というと『礼拝は間もなく行なわれる』といわれた。
それからみ使いはラクダにお乗りになり、私たちと共にムズダリファに到着なさった。
ここでみ使いはマグリブの礼拝を行なわれた。
人々はそれぞれの場所にラクダをつなぎ、イシャーの礼拝の始まり（イカーマ）が唱えられ、礼拝が終るまで、そのままにしておき、そのあとラクダのつなぎをほどいたのでした」
「その朝はどうしましたか」とたずねるとウサーマは、「ファドル・ビン・アッバースがアッラーのみ使いのラクダの後に座りました。
私は徒歩でクライシュ族の人達と共に先を進んだのです」と答えた。

ウサーマ・ビン・ザイドは伝えている
アッラーのみ使いはマッカの裕福な人々がよく訪れる谷まで来ると、ラクダから降りて小用をたされた（ウサーマが、この折水を注いだとは述べられていない）。
それから水を求め、簡単にウドゥーをなさった。
私が、「み使い様、礼拝はどうしますか」というと、「礼拝は間もなく行なわれる」といわれた。

ウサーマ・ビン・ザイドは伝えている
私は、アラファからお帰りになるアッラーのみ使いの乗物の後に座っていた。
み使いは或る山道にさしかかった時、ラクダを止め排尿のため野原の方に行かれた。
戻ってこられたので私は壷の水を注いであげた。
み使いはウドゥーをなさってからラクダに乗り、ムズダリファまでおいでになった。
そしてここでマグリブとイシャーの礼拝をつづけて行なわれた。

イブン・アッバースは伝えている
アッラーのみ使いがアラファからお戻りになった時、ウサーマはみ使いのラクダの後部に座った。
ウサーマはこの折のことを「み使いはこの状態のまま旅を続けられムズダリファにお着きになったのです」と述べている。

ヒシャームによると彼の父は次のようにいった
ウサーマは、私の目前で人々から質問されていた。
私もまたこのウサーマ・ビン・ザイドに質問した。
ウサーマがアッラーのみ使いがアラファからお戻りになった時、み使いの後に同乗しながら帰ったからであった。

私が、「み使いがアラファからお戻りになった折の旅の様子はいかがでしたか」とたずねると、

ウサーマは「み使いは狭いところではラクダをゆっくり進ませ、広いところでは急がせました」と答えた。

このハディースは、ウルワにより別の伝承者経路でも伝えられている。

なお、フマイドの伝えるハディースには次の言葉がみられる。

ヒシャームは「ラクダの歩みを示す“ナッス”という言葉は“アナク”よりも早い速度を意味します」と語った。

アブドッラー・ビン・ヤズィード・ハタミーは、アブー・アイユーブからきいて次のように伝えている

アブー・アイユーブは別離の巡礼の折、み使いと共にムズダリファで日没（マグリブ）と夜（イシャー）の礼拝をつづけて行なった。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはムズダリファでマグリブとイシャーの礼拝をつづけてなさった。

ウバイドッラーは彼の父アブドッラー・ビン・ウマルの言葉を次のように語っている

アッラーのみ使いはマグリブとイシャーの礼拝をムズダリファでつづけてなさったが、それ以外には、この間にいかなる礼拝も行なわれなかった。

マグリブは三ラカート、イシャーは二ラカートだった。

アブドッラー・ビン・ウマルは生涯、ムズダリファではこのような方式の礼拝を行なった。

サイード・ビン・ジュバイルは伝えている

彼（サイード）は、ただ一回、イカーマ《礼排開始の知らせ》を唱えただけで、マグリブとイシャーの礼拝をつづけて行った。

彼はまた、イブン・ウマルも「同様の方式で礼拝を行なった」と記し、更に、イブン・ウマルの言葉、即ち、「預言者も同じくマグリブとイシャーの礼拝をつづけておやりになった」を伝えている。

シュウバもこれと同様のハディースを別の伝承者経路で伝えているが、それにも「預言者はイカーマを一回唱えただけで二つの礼拝をつづけて行なわれた」と記されている。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、ムズダリファでマグリブとイシャーの礼拝をつづけて行なわれた。

マデリブの礼拝は三ラカート、イシャーの礼拝は二ラカートだった（注）が、礼拝開始を知らせるイカーマは一回唱えられただけであった。

（注）旅行中でもマグリブ礼拝のラカート回数だけは短縮されない。
イシャー礼拝は本来四ラカートであるが、旅行中には二ラカートに短縮される

サイード・ビン・ジュバイルは伝えている
私たちはイブン・ウマルと共にムズダリファまで戻った。
そこで、彼は私たちを先導してマグリブとイシャーの礼拝を、イカーマを一度唱えただけでつづけて行なった。
このあと、私たちは出発したが、その折、彼は「このような方式でアッラーのみ使いは私たちとこの場所で礼拝なさったのです」といった。

ズール・ヒッジャ月 10 日のファジュル（早朝）礼拝について

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

ムズダリファでのマグリブとイシャーの両礼拝を除き、アッラーのみ使いが定刻以外に礼拝なさるお姿を私はみたことがなかった。

ムズダリファではマグリブの礼拝を遅らせて、イシャーの礼拝時刻に合わせて行ない、また、ズール・ヒッジャ月 10 日の朝には、通常より早くファジュル（早朝）の礼拝をなさった（注）。

（注）ファジュル礼拝か早められたのは、この日行事が多く、巡礼者が多忙となるからである

アアマシュは別の伝承者経路で前記と同内容のハディースを伝えているが、用語上には多少の異同がみられる。

ハッジ中の女性や老人の移動に関して

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いの妻の一人、サウダは太った女性でした。
彼女はムズダリファに滞在した夜、み使いに対し、み使いよりも先に、また、大群衆で混雑する前に、ムズダリファを離れるための許可を求め、そして許しを得た後、先に出発しました。
一方、私たちは明け方まで、ムズダリファに止まり、み使いと一緒に出発したのですが、もし、サウダと同じように、み使いにお願いすれば、私も許可を得て先に出発できたでしょう。
しかし、私にとっては、それよりも、み使いと一緒の方が嬉しいことだったのです。

カーシムは、アーイシャの言葉を次のように伝えている

「サウダは太った大柄な女性だった。
そのため、彼女はアッラーのみ使いに対し、夜半にムズダリファからミナーへ出発する許可を求めた。
み使いは、彼女の願いをお許しになった。」
アーイシャは、更に、「私もサウダと同じように、み使いから許可を得た方がよかったかも知れません」と語った。
ともあれ、アーイシャは巡礼行事のイマーム《アッラーのみ使いのこと》の道中に従って旅したのであった。

アーイシャはこう語っている

私もサウダが許可を求めたように、アッラーのみ使いに（早目に出発するための）許可を求めた方がよかったのかも知れません。
そうすれば、ミナーでファジュルの礼拝を行ない、人々が集まる前にジャムラ（投石場）での石投げの行を終えることができたでありましょう。
これに関連し、アーイシャは「サウダがアッラーのみ使いに直接許可を求めたのですか」と質問された折、
「その通りです」と答え、「彼女は太った大柄な女性でした。
それでみ使いは彼女に許可をお与えになったのです」と述べている。

前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

アスマーウの解放奴隷**アブドッラー**は伝えている

女主人アスマーウは、ムズダリファにある家にいた時、「月は沈みましたか」と私にたずねた。

「いいえ、まだです」と私が答えると、彼女はしばらくの間礼拝をつづけた。

彼女が再び「息子よ！《慣用的呼びかけ》月は沈みましたか」といった時、私が「はい、沈みました」と伝えると、彼女は、「私と一緒に来なさい」といった。

私たちは出掛け、ミナーに到着した。彼女は、ジャムラで石投げの行事をし、それを終えたあとその場所で礼拝を行なった。

この折、「ご主人様、明るくならないうちに出発しませんか」と私はいったが、

彼女は「息子よ！

その必要はありません。

預言者は女性にもここに来ることを許されたのです」と答えた。

イブン・ジュライジュはこのハディースを別の伝承者経路で伝えている。

イブン・シャッワールは伝えている

彼が預言者の妻の一人、ウンム・ハビーバを訪れた時、彼女は「預言者が私を夜のうちに、ムズダリファから（ミナーに向けて）出発させたのです」と語った。

ウンム・ハビーバは伝えている

預言者在世の頃、私たちは、早朝、まだ暗いうちに、ムズダリファからミナーへと向かった。

なお、このハディースを、伝承者の一人ナーキドは「私たちは、夜明け前にムズダリファを出発した」と多少表現を変えて伝えている。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは、私を荷物や弱少者らと共に夜明け前にムズダリファを出発させた。

イブン・アッバースは伝えている

私は、先に出発するよう命じられたアッラーのみ使いのご家族の女性や子供らと一緒でした。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いのご家族の中で、弱少者たちはみ使いよりも先に出発したが、私もその中にいました。

アターによれば、イブン・アッバースは次のようにいった

アッラーのみ使いは、夜明け前、私を荷物と共にムズダリファから出発させた。

このハディースに関し、伝承者の一人イブン・ジュライジュは次のように語っている。

私は、アターにむかい、「イブン・アッバースらをアッラーのみ使いは、深夜出発させたとい

われていますが、このことを知っていますか」とたずねた。
これに対し彼は、「いや、夜明け前でした」と答えた。
私は、また、「イブン・アッバースは、『私たちはジャムラで朝の礼拝前に石投げの行をした』と述べていますが、朝の礼拝はどこですませたのですか」ときいた。
これに対し、彼は、「いや、イブン・アッバースは私があなたに話した通りに語ってくれただけです」と答えた。

サーリム・ビン・アブドッラーは伝えている
アブドッラー・ビン・ウマルは巡礼の折にはいつも彼の家族の女、子供らを先に出発させた。
彼らは、ムズダリファのマシャアル・ハラームで夜を過し、アッラーの御名をずっと唱えつづけていたが、イマーム《巡礼行事の導師》がアラファートへの往来の途中、ここに立寄る前には必ず出発した。
彼らのなかにはミナーに到着して、ファジュル（早朝）の礼拝をする者もいれば、その後に到着する者もいた。
到着すると、ジャムラで石投げを行なった。
イブン・ウマルは「こうすることを、アッラーのみ使いは彼らに許されたのです」と語っていた。

アカバでの投石に関して

アブドル・ラフマーン・ビン・ヤズィードは伝えている

アブドッラー・ビン・マスウードはアカバでジャムラのある谷底に立って七つの小石を投げ、ひとつずつ投げるごとにタクビールを唱えた。

「他の人々は谷の上から投石しています」といわれた時、彼は「絶対者アッラーに誓って。ここは、クルアーンの雌牛の章が啓示された場所なのです」といった。

アアマシュは伝えている

私は、ハッジャージュ・ビン・ユースフが説教台の上から次のように話すのをきいた。

「天使ジブリールのように、あなたたちも、クルアーンの教えに従いなさい。

このことは雌牛について言及された章にも、婦人について言及された章にも、また、イムラーンについて言及された章にも述べられている教えです」

私は、イブラーヒームに会い、ハッジャージュの言葉について話した。

すると、彼は、ハッジャージュをののしってから、次のように語った。

「アブドル・ラフマーン・ビン・ヤズィードは私に、アブドッラー・ビン・マスウードと同行していた時のことを話してくれた。

それによると、この時、アブドッラーは、アカバのジャムラに来て、谷の底へと下りて行った。

そして、ジャムラにむけて、谷の底から七つの小石を投げ、ひとつずつ投げるごとにタクビールを唱えた。

私が、『アブドル・ラフマーンよ、他の人々は谷の上から投石しています』というと、彼は『絶対神、アッラーに誓って。

この場所でクルアーンの雌牛の章が啓示されたのです』といった」

アアマシュによると、ハッジャージュ（注）は次のようにいった

「雌牛の章というよび方をしてはならない」

（注）ハッジャージュは「雌牛についての言及がみられる章」といい換えるべきだとの意見であった。

なお、前記ハディース後半は「雌牛の章」という名称が預言者の教友らによって、以前から問題なく用いられていたことを示した内容である

アブドル・ラフマーン・ビン・ヤズィードは伝えている

彼は、アブドッラー・ビン・マスウードと共にハッジを行なった。

その折、ジャムラで七つの小石を投げた。

カーバの神殿はその場所の左の方角にあり、ミナーは右の方角にあった。
アブドッラーは、「ここが雌牛の章が啓示された場所です」と語った。

シュウバによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブドル・ラフマーン・ビン・ヤズィードは伝えている
アブドッラーは、「他の人々が、アカバのジュムラで、上の方から投石しているのに、あなただけが谷の底に立って投石している」といわれた時、
「絶対神、アッラーに誓って。小石を投げつけるこの場所で、雌牛の章が啓示されたのです」といった。

アカバでの投石の意義に関して

ジャービルは伝えている

私は、預言者がナフル（動物犠牲）の日にラクダに乗ったまま投石なさるのをみました。
この折、預言者は「（私の動作をよくみて）巡礼の方式を学びなさい。
私にはこの巡礼の後、再び巡礼を行なうことができるかどうか、わからないからです」といわれた。

ウンム・フサインは伝えている

私はアッラーのみ使いと共に、別離の巡礼を行なった。
私はアカバのジャムラで、み使いが投石なさり、その後ラクダに乗って行かれるのをみた。
み使いの側にはビラールとウサーマがお伴をしていたが、彼らの一人がラクダを引き、もう一人は日差しをさえぎるためにみ使いの頭上に自分の衣服をかざしていた。
み使いは、さまぎまなことをいわれたが、その中には次のようなお話があった。
「もし手足のどこかが片端で色が真黒の奴隷であっても、啓典に従ってあなたたちを彼が指導するかぎり、彼の言葉をきき、彼に従いなさい」

ウンム・フサインは伝えている

私はアッラーのみ使いと共に、別離の巡礼を行なった。
そこで私は、ウサーマとビラールをみかけたが、彼らの一人は預言者のラクダの手綱を引き、もう一人は暑さをさえぎるために、自分の衣服を預言者の頭上にかざしていた。
そんな状態でアカバのジャムラに着き、預言者は石投げの行をなされたのです。

ジャムラでの投石について

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私は預言者がジャムラで小さな石をお投げになるのをみました。

ジャムラでの投石時刻に関して

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは、ズール・ヒッジャ月 10 日のナフルの日には、日昇後間もなく、また、その後（11、12、13 日）には、夕方日差しが弱くなった頃に、ジャムラでの投石をなさった。

アブー・ズバイルは、ジャービルの語った前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えている。

ジャムラでの投石の数について

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いはいわれた。

「トイレの後使う石の数は奇数、ジャムラでの投石は奇数の七個、サファーとマルワ間のサアーイも奇数で七回、カーバのタワーフもまた奇数で七回です。

あなたたちが、トイレ後石を用いて浄化する時には奇数の石を使いなさい」

剃髪及び切髪について

アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは動物犠牲を捧げて後、剃髪なさった。

教友のなかにも剃髪する者がいたが、切髪するだけの者もいた。

み使いは「剃髪した者たちにアッラーの慈愛あらんことを！」と、一回または、二回祈願なさり、その後、次いで切髪した者たちのためにも、同様に祈願なさった。

アブドッラー・ビン・ウマルは、伝えている

アッラーのみ使いは「おお、アッラーよ、剃髪した者たちに慈愛を与え給え！」といわれた。

教友らは「み使い様。切髪した者らについてはいかがですか」といったが、み使いは再び「おお、アッラーよ、剃髪した者らに慈愛を与え給え！」といわれた。

教友らが更に「み使い様、切髪した者らについてはいかがですか」というと、み使いは（ようやく）「そして、切髪した者らに慈愛を与え給え！」といわれた。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、「剃髪した者たちにアッラーの慈悲がありますように！」といわれた。

教友らがこれに対し、「み使い様、切髪しただけの者らはどうですか」といったが、み使いは、再び、「剃髪した者たちにアッラーの慈悲がありますように！」といわれた。

「み使い様、切髪した者らはどうですか」と教友らが再度たずねたが、これに対してもみ使いは「剃髪した者らにアッラーの慈悲がありますように！」といわれた。

教友らが更に三度目に、「み使い様、切髪した者らはどうですか」といったところ、み使いはようやく「切髪をした者らにも、アッラーの慈悲がありますように！」といわれた。

ウバイドッラーは、前記のハディースを別の伝承者経路で伝えている

なお、それには預言者が、「切髪した者らにもアッラーの慈悲がありますように！」といわれたのは、教友らが四度同じ質問を繰り返した後であったと記されている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、「アッラーよ、剃髪した者らを許し給え！」といわれた。

教友らは、「み使い様、切髪した者らについてはいかがですか」といったが、み使いは、「アッラーよ、剃髪した者らを許し給え！」と再びいわれた。

それで、教友らは再度、「み使い様、切髪した者らについてはいかがですか」とたずねた。

しかし、み使いは三度も「アッラーよ、剃髪した者らを許し給え！」といわれるのみであった。

教友らは、また繰り返して、「み使い様、切髪した者らについてはいかがですか」とたずねた。

それでようやくみ使いは、「アッラーよ！　切髪した者らを許し給え！」といわれたのである。

アブー・フライラの語った前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

ヤヒヤー・ビン・フサインは、彼の祖母からきいて次のように伝えている

預言者は別離の巡礼の折、剃髪した者たちのために三度、加護、を祈られたが、切髪した者らのためには、一度．祈られただけであった。

なお、ワキーウの伝えるハディースには、「別離の巡礼の折」という言葉はみられない。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、別離の巡礼の折、剃髪なさった。

ナフルの日の儀式について

アナス・ビン・マーリクは語っている

アッラーのみ使いはミナーに到着し、ジャムラで投石されてからミナーでの宿泊所に行き、犠牲を捧げられた。

それから床屋を呼び、初め右側を彼の方にむけて髪を剃らせ、その後左側をおむけになった。

そのあと、剃り落した髪を人々にお与えになった。

アナスの語った前記と同内容のハディースを**アブー・バクル・ビン・シャイバは次のように伝えている**

アッラーのみ使いは床屋を呼び、手で頭の右側を示され、「ここから始めよ」といわれた。

そして剃り落とした髪を近くにいた人たちにお与えになった。

それから床屋に左側を示し、そこを剃らせた。

そして、その髪をウンム・スライマにお与えになった。

アブー・クライブは、また、このハディースを次のように伝えている。

アッラーのみ使いは、頭髪を右側から剃り始め、人々に髪の毛を一本か二本ずつお与えになった。

それから左側を剃り同じようになさった。

その後、「ほら！　アブー・タラハよ」といいながら髪の毛を彼にお与えになった。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いはアカバのジャムラで投石して後、犠牲動物のいる処に行き、それを屠殺して犠牲として捧げた。

その折、床屋が近くに座っていたので、み使いは手で頭を指し、頭の右半分の髪を剃り落とさせた。

そして、それを近くにいた人たちに分け与え、その後、「左側も剃るように」と命じてから「アブー・タラハはどこか」といわれた。

み使いは、これらの髪の毛を彼にもお与えになった。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは、ジャムラでの投石を終えた後、犠牲動物を屠殺なさった。

それから右側を床屋に示し、頭髪を剃らせた。

このあと、アンサールの一人アブー・タルハを呼び、彼にその髪の毛をお与えになった。

それから左側を示し、剃るようお命じになったが、床屋の剃り落としたその髪の毛をアブ

ー・タルハにお渡しになり、「他の人々にも分け与えるように」といわれた（注）。

（注）女性の巡礼者は剃髪せず、切髪だけでよいことになっている

ミナーでの行事の順序について

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースはこう語った

アッラーのみ使いは別離の巡礼の折、ミナーに滞在されたが、それは彼に質問するために来る人々への配慮からだった。

ともあれ、この時、或る男が来て、「み使い様、知らなかったため犠牲を捧げる前に剃髪してしまいました」といったのに対し、

み使いは、「再度、犠牲を捧げなさい。そうすればなんの差し障りもありません」といわれた。

また、別な男が来て、「み使い様、気がつかないで投石の前に犠牲を捧げてしまいました」といったのに対しても、

み使いは、「再度投石を行ないなさい。そうすればなんの差し障りもありません」といわれた。

み使いはこの折、規定外の時刻に行なった事に関する質問は受けられなかったが、この点についても「行ないなさい。別に差し障りはありません」といわれた。

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースはこう伝えている

アッラーのみ使いがラクダに乗ったまま立ち止まった時、人々は彼に質問し始めた。

彼らの一人は「み使い様、犠牲を捧げる前に投石することに気がつかず、私は投石の前に犠牲を捧げてしまいました」といったが、み使いはこれに対し、「また投石を行なえば、なんの差し障りもありません」といわれた。

また、別の男が来て、「剃髪の前に犠牲を捧げることに気がつかず、私は犠牲を捧げる前に剃髪してしまいました」といった時にも、み使いは、「また犠牲を捧げなさい。そうすればなんの差し障りもありません」といわれた。

この折、人がうっかりして儀式の順序その他を間違えたり、また、失念、もしくは、無知のため、同様のことをした場合の質問はなかったのであるが、み使いは、これらに関しても、「再度行ないなさい。なんの差し障りもありません」といわれた。

ズフリーは前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えている。

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースは伝えている

預言者はナフル（動物犠牲）の日、説教をなさった。

この折、ある男が立ち上がって、「アッラーのみ使い様、私はこれこれの儀式が、これこれの前に行なわれるとは知りませんでした」といった。

また、別の男は「アッラーのみ使い様、私はこれこれの儀式が、これこれの前に行なわれるものと思っていました」といった。

その後、また別の男が来て「アッラーのみ使い様、私はこれこれの儀式はこれこれより前で、また、これこれの儀式は、投石、犠牲、剃髪など三つの儀式の続きだと思っていました」といった。
み使いは、「再度、行いなさい。そうすれば（たとえ順序を、前に、間違えたとしても）なんの差し障りもないのです」とこれら三人に対していわれた。

イブン・ジュライジュは前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えているが、用語表現には多少の異同がみられる。

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースは伝えている
ある男が預言者の処に行き、「私は犠牲を捧げる前に剃髪してしまいました」といったが、預言者は、これに対し「改めて犠牲を捧げなさい、なんの差し障りもないことです」といわれた。
その男はまた、「私は投石する前に犠牲を捧げました」ともいった。
これに対しても預言者は、「また改めて投石を行ないなさい。そうすればなんの差し障りもないことです」といわれた。

ズフリーは前記と同内容のハディースを伝えているが、それには、「私はアッラーのみ使いがミナーで、ラクダに乗っておられるのをみた。その折、或る男がみ使いのところへやってきた」という言葉が記されている。

アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースは伝えている
ナフル（動物犠牲）の日、アッラーのみ使いがジャムラの近くに立っておられた時、ひとりの男が彼のもとへやって来て、「み使い様。私は投石の前に剃髪してしまいました」といった。
み使いは、これに対し、「また投石を行いなさい。そうすればなんの差し障りもないことです」といわれた。
この後、また、別な男がやって来て、「私は投石の前に犠牲を捧げてしまいました」といったが、み使いは、これに対しても、「再度投石を行ないなさい。なんの差し障りもないことです」といわれた。
更に、また、別な男がやって来て、「投石の前にカーバ神殿のタワーフをしていません」といったがみ使いは、これに対しても、「また投石を行ないなさい。そうすればなんの差し障りもありません」といわれた。
私はこの日、み使いがこれら以外のことについての質問を受けておられるのをみなかったが、み使いは（ともあれ）「やりなさい。別に支障はありません」と何度も繰り返していわれた。

イブン・アッバースは伝えている

預言者は、屠殺、剃髪、投石、儀式の順序を先行させたり、遅らせたりすることなどについて質問を受けたが、「なんの差し障りもない」といわれた。

タワーフ・イファーダ（注）について

（注）タワーフ・イファーダ　アラファートやミナーでの行事を終えたあと行なうタワーフのこと。
タワーフ・ジヤーラともいう

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはナフル（犠牲）の日に、タワーフ・イファーダを済ませてから戻り、ミナーでズフル（午後）の礼拝をなさった。
ナーフィウは、これに関連し「イブン・ウマルはナフルの日にタワーフ・イファーダを行なってから戻り、ミナーでズフルの礼拝を行なうのを常としていた。
そして『預言者がこのようになさったのです』と語っていた」と記している。

アブドル・アズィーズ・ビン・ルファイウは語っている

私がアナス・ビン・マーリクに、アッラーのみ使いについて知っていることを話してくれるよう頼み「タルウィーヤの日、み使いはどこで礼拝をなさいましたか」と質問した時、彼は、「ミナーです」と答えた。
また、「ナフルの日、アスルの礼拝はどこでなさいましたか」と質問した時、彼は、「アブダフです」と答え、そして後「あなた方の指導者がする通りに行ないなさい」といった。

ムハッサブでの滞在について

イブン・ウマルは伝えている

預言者、アブー・バクル、それにウマルはアブダフ（注）でいつも滞在なさった。

（注）アブダフ　マッカとミナーとの問にある谷の名

ナーフィウは伝えている

イブン・ウマルは、ムハッサブに滞在することをアッラーのみ使いのスンナとみなしていた。

そしてナフルの日、ズフルの礼拝をこの場所で行なった。

み使いが、ムハッサブで休息されたので、後のカリフ（後継者）たちはこれに倣った。

アーイシャは語っている

アブダフで休息することはスンナではありません。

アッラーのみ使いが、そこで滞在されたのは、ただ、そこから出発なさるのが楽だったからです。

前記と同内容のハディースは**ヒシャーム**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

サーリムは伝えている

アブー・バクルやウマル、それにイブン・ウマルはアブダフで滞在するのを常としていた。

これに関連し、ウルワは「アーイシャはこの慣習を行なわず『アッラーのみ使いが、ここに滞在なさったのは、出発しやすい場所であったからです』といった」と伝えている。

イブン・アッバースは語っている

ムハッサブでの滞在は（イスラーム法上）なんの意味もありません。

そこは、アッラーのみ使いが滞在された場所であるにすぎません。

アブー・ラーフィウは語っている

アッラーのみ使いは、ミナーを出発した時私に、アブダフで休止せよとはお命じにならなかった。

しかし、私はそこにみ使いのためのテントを張った。

み使いは、そこにおいでになり滞在なさった。

ラーフィウによるこのハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

ラーフィウはアッラーのみ使いの荷物担当者であった。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、「アッラーが望み給うなら、私たちは明日、キナーナ族の住むハイフで休止するであろう。

そこは彼らが不信仰を誓いあった処であるが」といわれた。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは私たちがミナーにいた時、こういわれた。

「私たちは明日、キナーナ族のハイフで休止します。

そこは彼らが不信仰を誓いあった処です。

なお、この時クライシュ族とキナーナ族は盟約を結び、ハーシム家とムッタリブ家が彼らに、み使いを引き渡すまでは、両家との間に結婚も取り引きも行なわないと約束し合ったのですが、その場所はこのムハッサブでした。」

アブー・フライラはこう伝えている

アッラーのみ使いは次のようにいわれた。

「もし、アッラーが望み、許し給うならば、私たちは明日、ハイフで休止します。

そこは、キナーナ族の者らが不信仰を誓い合った処でした」

ミナー滞在に関して

イブン・ウマルは伝えている

アッバース・ビン・アブドル・ムッタリブは、巡礼者たちに水を供給する仕事のために、ミナーに止まるべき夜（注）を、マッカで過せるよう、許可をアッラーのみ使いに求めた。
み使いは、アッバースに許可をお与えになった。

（注）巡礼行事の終った巡礼者は、ズール・ヒッジャ月 11 日より 13 日までミナーに滞在するきまりで、この期間は、タシュリークの日と呼ばれている

ウバイドッラー・ビン・ウマルは、前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えている。

バクル・ビン・アブドッラー・ムザニーは伝えている

私はイブン・アッバースと、カーバ神殿の近くに座っていた。
その折、一人のベドウィンがやって来て、イブン・アッバースに、「私はあなたの叔父さんが、蜜と乳を供給しているのをみました。
あなたは今ナビーズ《なつめやしの実で甘くした水》だけを供給していますが、それはどうしてですか。
あなたが貧しいからですか、それとも倹約しているのですか」といった。
イブン・アッバースはこれに対し、次のようにい上った。
「アッラーに讃えあれ！
それは私が貧しいからでも、倹約しているからでもありません。
預言者がラクダで背後にはウサーマを乗せてここに来られた時、水を求められました。
私たちが、ナビーズ一杯を差しあげると彼はそれを飲み、残りをウサーマにお与えになりました。
そうして、『よろしい。あなたたちは、とてもよいことをした。今後もこのようにしなさい』といわれました。
私たちは、アッラーのみ使いがお命じになったことを変えたくないのです」

犠牲動物の肉を喜捨することについて

アリーは伝えている

アッラーのみ使いは、私を犠牲動物の担当者に任じ、これらの肉と皮と鞍敷を喜捨（サダカ）として人々に与え、屠殺人にはなにも与えないようにと、お命じになった。
その折「屠殺人には私たちから支払う」といわれた。

アブドル・カリーム・ジャザリーは、前記と同内容のハディースを伝えている。

アリーによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられるが、それには「屠殺人への支払い」についての言及はない。

アリー・ビン・アブー・ターリブは伝えている

預言者は、彼（アリー）に、犠牲動物の処理をお命じになり、肉、皮、鞍敷など全部を貧しい者に分かち与え、屠殺人にはなにも与えないようにと、お命じになった。

アリーによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

牛、または、ラクダの犠牲に関して

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私たちは、フダイビーヤで和議が結ばれた年（イスラーム暦 6 年）、アッラーのみ使いのお伴をした。

その折、私たちは、七人で 10 頭のラクダ、七人で一頭の雌牛を犠牲に捧げた。

ジャービルは語っている

私たちは、ハッジのためイフラームを身にまとい、アッラーのみ使いと共に出発した。

み使いは私たちに、ラクダ一頭、雌牛一頭をそれぞれ七人で犠牲として屠殺するようお命じになった。

ジャービル・ビン・アブドッラーは語っている

私たちは、アッラーのみ使いと共にハッジを行なった。

私たちはラクダ一頭を七人で、また、雌牛一頭を七人で、それぞれ犠牲として捧げた。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私たちは預言者と共に、ハッジとウムラに出かけた。

その折、七人で一頭の動物を犠牲に捧げた。

或る男が、ジャービルに「七人で牛一頭を犠牲とするように、ラクダ一頭でも同じことができますか」といった時、ジャービルは、「それは犠牲に捧げるのにふさわしい動物です」と答えた。

ジャービルはフダイビーヤに滞在した折のことを「あの日、ラクダ 70 頭を犠牲に捧げたが、七人が組になって、それぞれ一頭ずつ分けた」と語った。

ジャービル・ビン・アブドッラーは預言者の巡礼について次のように語っている

私たちが、イフラーム状態でいた時、アッラーのみ使いは、動物犠牲を捧げるよう命じられた。

この折、七人が一グループとなって、一頭のラクダ、または、牛をそれぞれ分け、犠牲として捧げた。

これは、人々がウムラの後ハッジを終え、イフラームを脱ぐよう命じられた時のことであった。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私たちは、アッラーのみ使いと共にハッジ・タマットゥ《ハッジとウムラを一緒に行う巡礼方式》を行なったが、この折、七人で雌牛一頭を犠牲として捧げた。

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは、ナフルの日に、アーイシャのために雌牛一頭を犠牲として捧げた。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは、彼の妻たちのために犠牲を捧げた。

なお、イブン・バクルは「み使いは、巡礼の折、アーイシャのために雌牛一頭を犠牲として捧げた」と伝えている。

ラクダの屠殺に関して

ズィヤード・ビン・ジュバイルは伝えている

イブン・ウマルが、或る男のところへ行った時、その男は犠牲のために屠殺するラクダをひざまづかせていた。

そこで、彼はその男に「ラクダの足を縛って立たせたまま屠殺しなさい。

それがアッラーのみ使いのスンナです」といった。

犠牲動物に関して

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いが、マディーナから犠牲に捧げる動物を送った時、私はそれら犠牲動物のための首飾りを編んだが、み使いはご自分でそれを動物たちの首におかけになった。み使いは、イフラームをまとった人《ムフリム》たちが通常嫌がることでも、なんであれ避けることなくおやりになった。

イブン・シハーブは、これと同様のハディースを、別の伝承者経路で伝えている。

アーイシャはこう語っている

私には、アッラーのみ使いの犠牲動物の首飾りを編む自分の姿が、今、あたかもみえるような気がする。

アーイシャはこう語っている

私は私のこの両手で、アッラーのみ使いの犠牲動物の首飾りを編んだ。
み使いは（通常）ムフリム状態の者が嫌がり、中止することでも、なんであれ避けず、お止めにはならなかった。

アーイシャは語っている

私は、アッラーのみ使いの犠牲動物のため、私自身の両手で首飾りを編みました。
み使いはそれらに印をつけ、首飾りをかけてマッカへ送りました。
み使いは、（マディーナにおられた時には、教義に反しないかぎり）なにごとをも自由に行われました。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、犠牲動物をマッカに送られたが、私はそれらの首飾りを私自身の手で編みました。
み使いは、非ムフリム状態、即ち、普段の状態と全く同じに、なんでもおやりになりました。

信者の母**アーイシャ**は語っている

私は持っていた様々な色の羊毛を使って、これらの首飾りを編みました。
アッラーのみ使いは、普段の状態で私たちの処におられ、その状態の者に許されるあらゆることを、妻たちと共になさいました。

アーイシャは語っている

私は、アッラーのみ使いの犠牲動物、山羊の首飾りを編んだことを覚えています。

み使いはそれを送った後、普段の状態で私たちとお過しになりました。

アーイシャは語っている

私はアッラーのみ使いの犠牲動物のために、しばしば、首飾りを編みました。

み使いは、この首飾りをかけてから、それらの動物をマッカへお送りになったが、その後は、ムフリム状態の者が通常避けることでも、なんら気にすることなく、家で極く普通にお過しになりました。

アーイシャは語っている

アッラーのみ使いは犠牲動物として山羊をマッカに送られた。

この折、み使いはそれらに首飾りをおつけになった。

アーイシャは語っている

私たちは山羊を花輪で飾り、それをマッカへ送った。

アッラーのみ使いは、非ムフリム（ハラール）状態でしたので、行動上禁じられることはをにもありませんでした。

アブドル・ラフマーンの娘、**アムラ**は伝えている

イブン・ズィヤードはアーイシャに手紙を書き、「アブドッラー・ビン・アッバースは、犠牲動物をマッカに送った者には、犠牲が捧げられるまで巡礼者たちと同じように行動することが義務づけられると話しています。

私は犠牲に供する動物をマッカに送りましたが、これについてあなたの意見をきかせてください」と述べた。

アーイシャは返事の中で「イブン・アッバースの話は間違っています。

私は、アッラーのみ使いの犠牲動物のために自分の手で花飾りを編みましたが、み使いは、ご自身の手でそれらに花飾りをし、私の父に託してマッカに送りました。

このように、アッラーはみ使いに対し、犠牲動物が捧げられるまで、なにごとをも禁じ給わず、普通に生活することをお許しになったのです」といった。

マスルークは伝えている

私は、アーイシャがカーテンのうしろで両手を叩いた後、「アッラーのみ使いの犠牲動物のために、私は自分の手で花飾りを編んだものでした。

み使いはそれをマッカに送られたが、犠牲が捧げられるまでムフリムが控える行為を、み使いは一切気にせず、普段通りに生活なさいました」というのをきいた。

アーイシャの伝える前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

犠牲用の動物に乗ることに関して

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、或る男が犠牲用のラクダを引いているのをみて、「それに乗りなさい」といわれたが、その男は「これは犠牲用のラクダなのです」と答えるのみであった。
み使いは再度「乗りなさい」といわれ、同じ答えをきくと「わからないのかな！」といわれた。
これは、二度か三度目かの答えをきいた時のことだった。

前記と同内容のハディースは、**アーラジ**によっても伝えられるが、それには「或る男が首飾りをつけた犠牲動物を引いていた」と記されている。

ハンマーム・ビン・ムナッビフは伝えている

アブー・フライラは、アッラーのみ使い、ムハンマド様に関する次のハディースを私たちに語った。
アッラーのみ使いは、或る男が、飾りをつけた犠牲用の動物を引いているのをみて、「なんたることか！　それに乗りなさい」といわれた。
するとその男は「み使い様、これは犠牲用の動物です」といった。
これに対し、み使いは「なんたることか！　乗りなさい、乗りなさい」と二度繰り返していわれた。

アナスは語っている

アッラーのみ使いは、たまたま犠牲用のラクダを引く男の近くを通った。
その折、み使いは「それに乗りなさい」といわれたが、その男は「これは犠牲用のラクダなのです」と答えて、それに乗ろうとはしなかった。
み使いは「乗りなさい」と二、三度繰り返していわれた。

アナスは語っている

或る男が、犠牲用のラクダ、もしくは、犠牲用の動物を連れて、預言者の側を通った。
預言者は「それに乗りなさい」といわれた。
しかし、その男は「これは犠牲用ラクダ、もしくは、犠牲用の動物です」と答えるばかりでした。
み使いは「たとえ、犠牲用であっても、乗って構わない」といわれた。

アナスは語った

「或る男が、犠牲用の動物を連れて、たまたま預言者の側を通りかかった」
この後半は、前記ハディース内容と同じである。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

彼は犠牲用動物に乗ることに関して質問を受けた折、次のように話した。

「私は預言者が、『別の乗りものをみつけるまで、必要とあれば、やさしく扱いながらそれに乗ることは構わない』といわれるのをききました」

アブー・ズバイルは伝えている

私はジャービルに、犠牲用動物に乗ることについて質問した。

彼はこれに対し、「私は預言者が『別の乗りものをみつけるまで、やさしく扱いながら乗りなさい』といわれるのをききました」と答えた。

犠牲用動物の扱いに関して

ムーサー・ビン・サラマ・フザリーは伝えている

私は、シナーン・ビン・サラマと一緒にウムラ（小巡礼）に旅立った。

シナーンは、犠牲用ラクダを引いていたが、途中このラクダは疲労困憊して動けなくなり、そのため彼はすっかり困惑してしまった。

彼はこの時「もしラクダがこのままずっと動けなくなったら、どうやって連れて行くことができようか」と思い、「こんな場合どうしたらよいのか、解決法を探したい。朝になったら動きだそう」といった。

私たちは、バトハーウに宿泊したが、この折、シナーンは私に、「イブン・アッバースの処に行き、この件について話してみよう」といった。

それでシナーンは、イブン・アッバースに、この犠牲用ラクダの件を話した。

イブン・アッバースは、彼の話をきくと「あなたはまことに適任者の処に質問に来ました」といってから、「アッラーのみ使いは、或る男を責任者として、犠牲用ラクダ十六頭を送らせたが、その男は出発してから、間もなく立ち戻りこういったのです。

『み使い様、全く疲労して動く力もなくなったラクダは、どうしたらよいのでしょうか』

これに対し、み使いは『屠殺し、血をとってひづめを染めてから、それをラクダのこぶの両側に置きなさい。

ただし、あなたや、あなたに同行している者はだれも、それらのラクダのどんな部分の肉であっても食べてはいけません』といわれた」と語った。

イブン・アッバースは伝えている

「アッラーのみ使いは、十八頭の犠牲用ラクダを或る男に託して送った」

このハディースの後半は前記と同内容である。

イブン・アッバースは、カビーサの父ズワイブよりきいて、こう伝えている

アッラーのみ使いは、ズワイブに託して犠牲用ラクダを送ったが、この折、「もし、これらのラクダのどれかが、ひどく疲労し、死にかかっているとわかった時には屠殺しなさい。

そして、ひづめをその血にひたし、こぶの上にひづめの印をつけなさい。

ただし、あなたも、あなたの仲間のだれも、その肉を食べてはなりません」といわれた。

別離のタワーフに関して

イブン・アッバースは伝えている

巡礼を終えた後、人々は様々な道を通って帰って行った。

この折、アッラーのみ使いは「神殿のまわりで最後のタワーフの行を終えないかぎり、帰途についてはならない」といわれた。

イブン・アッバースは伝えている

人々は、アッラーの家《カーバ神殿》で最後のタワーフを行なうよう命じられた。ただし、月経中の女性は除外された。

ターウースは伝えている

私がイブン・アッバースと一緒の折、ザイド・ビン・サービトが「月経中の女性は、神殿で最後のタワーフを行なわなくても、帰国の途につくことが許されるという見解を、あなたは話しているのですか」といった。

これに対し、イブン・アッバースは「私の言葉を信じないならば、アンサールの某婦人に、アッラーのみ使いが、この件に関し、どう命じたかたずねなさい」といった。

ザイド・ビン・サービトは、その婦人の処に行き、彼のこの見解について確認した後、イブン・アッバースに、笑いながら「あなたの言葉が真実であることが十分わかりました」といった。

アーイシャは伝えている

フヤッイーの娘、サフィーヤは、神殿でイファーダのタワーフ（タワーフ・イファーダ）を終えたあとで、月経期に入った。

私がアッラーのみ使いにそのことを話すと、み使いは「それでは彼女が私たちの出発を遅らせてしまうことになる」といわれた。

私はこの時「彼女はすでに、イファーダのタワーフを行い、神殿をまわりました。

その後で月経期に入ったのです」といった。

み使いは、これに対し「それならば、出発させよう」といわれた。

同様のハディースは、**イブン・シハーブ**によっても別の伝承者経路で伝えられているが、若干表現上に異同があり、
「預言者の妻、フヤッイーの娘、サフィーヤは、別離の巡礼の折、月経期に入ったが、それは、彼女が人々と共に、神殿のタワーフ・イファーダを汚れのない状態で終えてからのことであった」などの言葉がみられる。

アーイシャは伝えている

彼女は、アッラーのみ使いに、サフィーヤが月経期に入ったことを告げた。

このハディースの後半は前記と同内容である。

アーイシャは語った

私たちは、サフィーヤが、タワーフ・イファーダを行う前に、月経期に入るのではないかと心配したものだった。

（ともあれ）アッラーのみ使いが、私たちの処に来て「サフィーヤのため出発を遅らせることになるだろうか」といわれた時、私たちは「彼女はすでにタワーフ・イファーダを終えました」と答えることができた。

この折、み使いは「それならば（帰国のための）出発を遅らせる必要はない」といわれた。

アーイシャはいった

私がアッラーのみ使いに、「み使い様、フヤッイーの娘、サフィーヤの月経が始まりました」というと、彼は「それでは私たちの出発が遅れることになります。彼女はあなたたちと一緒に神殿のタワーフを行なわなかったのですか」といわれた。

女たちが「いいえ、済ませました」と答えると、彼は、「それでは出発しなさい」と彼女らにお命じになった。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、妻のサフィーヤに対して、通常の夫が妻に感じる種類の愛情を抱かれたが、この時、夫人たちから「み使い様、彼女のメンスが始まりました」と告げられた。

み使いはこれをきくと「それでは私たちの出発が遅れることになろう」といわれた。

これに対し、彼女らは「ナフル（犠牲）の日に、彼女は人々と一緒に行って、神殿のタワーフを済ませました」と話した。

み使いは「それでは、彼女はあなた方と一緒に出発できます」といわれた。

アーイシャは伝えている

預言者は、マディーナへの帰途につこうと決心なさった時、サフィーヤがテントの入り口に立って悲しそうにしているのに気付かれた。

預言者は彼女に「おばかさんよ！　あなたは私たちの出発を遅らせるところだった！」といわれ、「巡礼終りのタワーフ（タワーフ・イファーダ）をナフルの日に済ませましたか」とおたずねになった。

彼女が肯定の返辞をすると、預言者は「それでは出発しなさい」といわれた。

アーイシャによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

カーバ神殿の内部に入ることに関して

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、カーバ神殿のなかに入られた。

ウサーマ、ビラール、神殿の管理者ウスマーン・ビン・タルハが同行した。

み使いは扉を閉じ、内部でしばらくの間お過しになった。

私（イブン・ウマル）はビラールが出てきた時、彼に「み使いはなにをなさったのか」とたずねた。

すると、彼は「み使いは、左側に柱二本、右側に柱一本、そして後方には柱三本がある処で礼拝なさった」といった。

当時カーバ神殿内部には六本の柱があった。

イブン・ウマルは語っている

アッラーのみ使いは、勝利の日《マッカ征服の日》にカーバの前でラクダから降り、ウスマーン・ビン・タルハを呼びにやらせた。

彼がカーバ神殿の鍵を持ってき、扉を開けると、預言者は、ビラール、ウサーマ・ビン・ザイド、ウスマーン・ビン・タルハらを同伴して中に入り、扉を閉じるようお命じになった。

そして、かなり長い間中にとどまってから扉をお開けになった。

一番最初にカーバ神殿の外でみ使いと会ったのは私だった。

ビラールがみ使いの後に続いて出てきたので、私は彼に「み使いは中で、礼拝なさったのか」とたずねた。

彼が「そうです」と答えたので、私は更に、「どこで礼拝なさったのか」と質問した。

これに対し彼は、「彼の正面の二本の柱の間で礼拝なさった」と答えてくれた。

ただ私はこの折、礼拝回数（ラカート）について、彼にきくことを忘れていた。

イブン・ウマルは伝えてトる

アッラーのみ使いは、勝利の年に、ウサーマ・ビン・ザイドのラクダに乗ってカーバ神殿に行き、その前でラクダをとめた。

それからウスマーン・ビン・タルハを呼び、「鍵を持って来なさい」といわれた。

彼は鍵を彼の母の処へ取りに行ったが、彼女は渡すのを拒んだ。

その時彼は「アッラーにかけて、預言者に鍵を渡させて下さい。

さもないと、この剣が私の横腹を突き通すことになります」といった。

それでようやく彼女が鍵を渡したので後はそれを預言者の処に持って行くことができた。

このあと、預言者は神殿の扉をお開きになった。

この後半は、前記ハディースと同内容である。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、神殿内部にお入りになった。
彼と同行したのはウサーマ、ビラール、ウスマーン・ビン・タルハだった。
彼らは扉を閉じ、内部に長い間とどまってから扉を開いた。
私は最初に神殿のなかに入りビラールに会って、彼に「み使いはどこで礼拝なさったのか」とたずねた。
彼は「前方にあるこの二つの柱の間で礼拝なさった」といった。
（ともあれ）、私はこの時、み使いがここで何回礼拝をなさったのかについて質問するのを忘れていた。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

私がカーバ神殿に到着した時、預言者はすでに内部にお入りになっていた。
ビラールとウサーマも一緒だった。
ウスマーン・ビン・タルハが神殿の扉を閉めた後、彼らは内部にかなり長くとどまっていた。
その後、扉が開けられ、預言者が出てこられた。
このあと私も階段を登り、神殿の内部に入った。
そして「預言者はどこで礼拝なさったのか」とたずねた。
すると、そこにいた人たちは「この場所です」と教えてくれた。
この時、私は彼らに預言者が何回礼拝されたのかときくのを忘れていた。

サーリムは彼の父が次のように語ったと伝えている

アッラーのみ使いは神殿の内部に入った。
この折、み使いに同行したのは、ウサーマ・ビン・ザイド、ビラール、ウスマーン・ビン・タルハらだけであった。
入ると彼らは内側から扉を閉めた。
その後、彼らが扉を開けた時、最初に入ったのは私だった。
私はビラールに会い、彼に「アッラーのみ使いは中で礼拝なさったのか」と質問した。
彼はこの時「はい、イエメン角側の二つの柱の間で礼拝なさいました」と答えた。

サーリムは、彼の父アブドッラーの言葉をこう語っている

私はアッラーのみ使いがカーバ神殿に入るのをみた。
ウサーマ・ビン・ザイド、ビラール、ウスマーン・ビン・タルハが彼と同行し、その他の者は誰も入らなかった。
彼らは内側から扉を閉じた。
父アブドッラー・ビン・ウマルは、更に次のように語った。

「ビラール、ウスマーン・ビン・タルハらが私に、アッラーのみ使いは神殿内部のイエメン角側の二つの柱の間で礼拝なさったと教えてくれた」

イブン・ジュライジュは伝えている

私はアターに、「イブン・アッバースが、『あなたたちは神殿のタワーフを命じられたが、内部に入ることは命じられなかった』というのをききましたか」と質問した。

アターはそれに答えていった。

「彼は中に入ることを禁じはしなかったが、次のようにいいました

『ウサーマ・ビン・ザイドは私に対し、預言者は、神殿内部では、全方角に向って祈願(ドゥアー)されただけで、出てくるまで礼拝はなさらなかった。

出てから初めて神殿の前でニラカートの礼拝をなさり、そして後に"これが、あなた方のキブラ(礼拝の方角)です"といわれた。

この折、ウサーマが預言者に"キブラとは神殿の側面や角のことですか"と質問すると、預言者は"カーバ神殿のすべて(の側面や角)がキブラなのです"といわれたと話してくれた』」

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは、カーバ神殿内部にお入りになった。

そこには六本の柱があった。

み使いはそこの一本の柱の近くに立ち、祈願なさったが、礼拝は行なわなかった(注)。

(注)神殿内部での礼拝に関しては、最も近くに随行したビラールの言葉が正しく、預言者はここで、実際に、礼拝を行なったものとみられる

イスマーイール・ビン・アブー・ハーリドは伝えている

私はアッラーのみ使いの教友、アブドッラー・ビン・アブー・アウファーに、預言者が小巡礼(ウムラ)の折に、神殿内部に入られたかどうかについてたずねた。

彼は、「いいえ」と答えた。

カーバ神殿の破壊と再建に関して

アーイシャは語っている

アッラーのみ使いは私に次のようにいわれた。

「もしも、人々が不信仰者のままでいたとしたら、私はカーバ神殿を壊し、イブラーヒームが基礎を定めた場所に、それを再建していただろう。

なぜならクライシュ族は、アッラーの家（カーバ神殿）を建立したとき、その敷地を縮少したからである。

私は、また、後方に入口の扉を作ったであろう」

同様のハディースは、**ヒシャーム**により別の伝承者経路で伝えられている。

預言者の妻**アーイシャ**は伝えている

アッラーのみ使いは「あなた方の先祖が再建したカーバ神殿は、イブラーヒームが基礎を築いた当時の広さよりも、縮少されていることに気づいていませんか」といわれた。

それで私は、「み使い様、あなたはどうしてイブラーヒームが築いた基礎の上に、カーバ神殿を再建しないのですか」といった。

これに対し、み使いは「もしも、あなたの属するクライシュ部族の人々が、イスラームに改宗しなかったならば、私はそうしたでしょう」といわれた。

アブドッラー・ビン・ウマルは、このハディースに関連し「アーイシャが（もっと前に）この言葉をアッラーのみ使いからきいていたならば、イブラーヒームの築いた基礎の外に建てられたために、み使いがヒジュル（注）近くのシリヤ面両側に、（御手を）お触れにならなかったということについて、私自身であれこれと考える必要はなかったでありましょう」といった。

（注）ヒジュル　神殿北西面の半円形の壁（ハーティム）に囲まれた場所預言者の妻アーイシャは伝えている

預言者の妻**アーイシャ**は伝えている

私は、アッラーのみ使いが「あなたの部族の人々が、イスラームに改宗しなかったならば、私はカーバ神殿の財宝を、アッラーの道のために使ったであろう。

そして、神殿の扉を地面の高さにし、ヒジュルをその中に入れたであろう」といわれるのをきいた。

アーイシャは語っている

アッラーのみ使いは「アーイシャよ、あなたの部族の人々が、多神教徒であり続けたとしたら、私はカーバ神殿を壊して地面に合った高さにし、東と西に扉をつけ、敷地をヒジュル

から六腕尺《ズィラア》ほど広くしたでしょう。
クライシュ族が、カーバを再建した時、縮少したからです」といわれた。

アターは伝えている
ヤズィード・ビン・ムアーウィヤの時代、シリヤ人が、マッカを攻略し、カーバ神殿は焼かれた。
（マッカの大守）イブン・ズバイルは巡礼の季節に人々がやってくるまで、カーバを破壊されたままにして置いた。
シリヤ人に対する敵愾心をかきたてるためであった。
巡礼者たちが到着すると、彼は「人々よ、カーバ神殿の件で相談にのって欲しい。
これを壊して、基礎から再建するのがいいだろうか、あるいはまた、壊れた部分を修理するのがいいだろうか」といった。
イブン・アッバースは「私の考えでは、壊れた部分をただ修理するのがいいと思う。
神殿を人々がイスラームに帰依した当時のままにして置き、またこれらの石もそのままにして移動しない方がよい。
預言者はこの神殿のために遣わされたのです」と発言した。
イブン・ズバイルは「あなたたちのだれでも、もし自分の家が焼けたなら、それを新しく再建するまで満足しないだろう。
それならば、あなたたちの家よりもはるかに重要な主の家の場合はどうなのか。
私は主に助言を求めて三度祈りその後、この件についての決断を下したい」といった。
彼は三度助言を求めて祈ってから、神殿を壊すことを決意した。
しかし、人々は壊すために最初に神殿の上に登る者に、災いが起こることを恐れた。
そのうち、ひとりの男が登り、石をとって投げだした。
人々はその男になにも起こらないのをみると後に続いて、神殿を完全に壊し、地面と同じ高さにまでしてしまった。
イブン・ズバイルは柱を立てて、それに布をかけ、（再建されるまでの臨時の）礼拝所とした。
その後、壁が築かれたが、その折、イブン・ズバイルは次のように語った。
「私はアーイシャからきいたのであるが、預言者は『もしも人々が、不信仰であり続けるならば、そしてまた、実際は持っていないが、もしも私に再建のための資力があるならば、私は必ずやヒジュルの広さを五腕尺など拡張し、更に、人々の出入のための扉をつけたであろう』といわれました。
今の私は再建費用を持っているし、再建に反対する人々を恐れる必要もありません」
そういって彼は、ハーティム側から五腕尺ほど広げた。
その折、イブラーヒームがカーバ神殿を建てた時の基礎が発見された。
人々はこれを確認し、その上に壁を築いた。

拡大された結果、カーバの横幅は十八腕尺になり、縦幅がこれに比べて小さくなったため、十腕尺ほどこの側面も拡張された。
また、出入のため二つの扉もつけられた。
イブン・ズバイルが殺害された時、ハッジャージュはアブドル・マリク・ビン・マルワーンに手紙を書き、そのなかに、イブン・ズバイルがイブラーヒームの礎石の上に建物を建てたこと、それをマッカの信頼できる人々が確認したことなどを記した。
アブドル・マリクは彼に返答し、「私たちにはイブン・ズバイルを非難するつもりは全くないが、彼が拡張した縦幅の部分を元に戻し、また、ヒジュル側で拡大した部分も元の状態に復するよう、更にまた、取りつけた扉部分も壁に変えるように」と命じた。
ハッジャージュは、この命令により、拡張部分をこわし、以前の状態に建て直したのである。

アブドッラー・ビン・ウバイドは伝えている

ハーリス・ビン・アブドッラーは、アブドル・マリク・ビン・マルワーンがカリフの時代、彼のもとに使節として訪れた。
この折、アブドル・マリクは「私は、アブー・フバイブ《イブン・ズバイルの別称》が自ら述べたようなことをアーイシャが語ったとは思わない」といった。
これに対し、ハーリスは、自分もまた彼女からきいたことがあると述べた。
アブドル・マリクは、この時彼になにをきいたのかとたずねた。
そこで、ハーリスは、彼女が語った言葉を次のように話した。
「アッラーのみ使いは、アーイシャに『あなたの部族の人々は、神殿の敷地を縮少した。
もし彼らが多神教徒であることをやめなかったら私はその縮少部分を元の形にもどしたでしょう。
今後あなたの部族の人たちが、再建しようとすると思うなら私と一緒にきてみなさい。
縮少された部分を教えてあげます』といわれた。
そして、み使いはアーイシャにハーテム側から十五腕尺ほど離れた場所を示された」
以上は、アブドッラー・ビン・ウバイドの伝えたハディースであるが、ワリード・ビン・アターは、更に、これに次の言葉を加えている。
アッラーのみ使いは「私は東と西に、地上と同じ高さの二つの扉を設けたい。
あなたは、あなたの部族の人々が神殿の扉を高い処に作った理由を知っていますか」といわれた。
彼女が「知りません」と答えると、み使いは「彼らは驕慢心から、自分らの裁量だけで、人々の出入りをとりしきろうとしたからです。
それ故、勝手に入ろうとする人をみると階段を昇らせはしても、神殿に入る前にその男を突き落したのです」
（ともあれ）アブドル・マリクはハーリスに、この話を直接アーイシャからきいたのかとたず

ねた。
そしてハーリスが「そうです」と答えると、杖でしばらく地面をひっかいたあと「イブン・ズバイルが建てた神殿を残しておくべきだった」と嘆じた。

前記と同内容のハディースは、**イブン・ジュライジュ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アブー・カザーアは伝えている
アブドル・マリク・ビン・マルワーンはカーバ神殿のタワーフの折、次のようにいった。
「アッラーよ、イブン・ズバイルを罰し給え！
彼は信者の母（アーイシャ）に関し嘘を申したてに『あなたの部族の人々が、イスラームに新たに改宗しなかったならば、私は神殿を取り壊し、ヒジュル側を拡張しただろう。
なぜならあなたの仲間たちが基礎部分を縮少したからである』といわれたと述べていました」
この言葉をきいたハーリス・ビン・アブドッラー・ビン・アブー・ラビーアは「信者の長よ、そのようなことはいわないでください。
私も信者の母（アーイシャ）からその話をききました」といった。
アブドル・マリクは、この折、「もし取り壊す前にきいていたなら、神殿をイブン・ズバイルが建てた状態のままにしておいたであろうに」といった。

カーバ神殿の壁と扉に関して

アーイシャは伝えている

私は、アッラーのみ使いにカーバ神殿を囲む壁、即ち、ヒジュル側の壁も神殿に含まれるかどうかについてたずねた。

彼が肯定なさったので、私は「なぜ、神殿の中にいれないのですか」といった。

それに対し彼は、「あなたの仲間の経費が足りなかったためできなかったのです」といわれた。

私は更に「どうして、扉の位置は高いのですか」と質問した。

これに対し彼は「あなたの仲間が、人々の出入を好みによってとりしきろうとしたためです」といわれた。

そして更に、「もしもあなたの仲間らが、イスラームの新改宗者とならなかったならば、たとえ、彼らが容認しなかったとしても、私は恐れず、必ずやこの壁を神殿の中に移し、神殿への入口の扉も地面と同じ高さにしたでしょう」といわれた。

アーイシャは伝えている

私は、アッラーのみ偉いにヒジュルについて質問した。

このハディースの後半は、前記と同内容であるが、これには「私は、また、『梯子を用いなければ入れないように入口を高くしたのはどうしてですか』といった」

「彼らの気持ちが、それを認めないという不安があったとしても」などの言葉がみられる。

代理による巡礼に関して

アブドッラー・ビン・アッバースは伝えている

ファドル・ビン・アブドッラーは、アッラーのみ使いのラクダの後部に乗っていた。

この折、ハスアム族の女がやってきて、み使いに宗教上の判断を求めたが、ファドルが彼女の方をみつめると、彼女もまたファドルの方をみつめるので、み使いはファドルの顔を別の方へ向けさせなさった。

（ともあれ）彼女は「み使い様、巡礼はアッラーのしもべに課せられた義務です。

しかし私は、私の父が高年齢の老人で乗物に乗ることができないことを知っています。

私が父の代わりに巡礼をしていいでしょうか」と質問した。

み使いはそれを肯定なさったが、これは別離の巡礼の時のことであった。

ファドルは伝えている

ハスアム族の女が「アッラーのみ使い様、私の父は老人です。

彼には巡礼の義務がありますが、このためラクダに乗り続けることはできません」といった。

預言者はこれに対し「彼の代わりに巡礼を行いなさい」と答えた。

幼な児の巡礼について

イブン・アッバースは伝えている

預言者は、ラウハーウでラクダに乗った人たちに会った時「なにをする人たちですか」とたずねた。

すると彼らは、ムスリムであると答え「あなたはどなたですか」と問い返した。

彼が「アッラーのみ使いです」と告げると、そのなかの女が男の子を抱え上げ、「この子にも巡礼の資格がありますか」とたずねた。

み使いは、それを肯定し「あなたにはよい報いがあります」といわれた。

イブン・アッバースは伝えている

或る女性が、自分の子を抱え上げ「アッラーのみ使い様、この子にも巡礼が行なえますか」と質問した。

み使いは、これに答えて「行なえます。あなたにはよい報いがあります」といわれた。

クライブは伝えている

或る女性が自分の子を抱え上げ「この子にも巡礼の資格がありますか」と質問した時、アッラーのみ使いは「はい。それにあなたにはよい報いが下されます」といわれた。

前記と同内容のハディースは、**イブン・アッバース**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

巡礼の回数について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、私たちに説教され、「アッラーは巡礼をあなたたちの義務となさった。
それ故巡礼を行ないなさい」といわれた。
或る男がこの時「み使い様、毎年行なうのですか」とたずねた。
これに対しみ使いは沈黙なさっていたが、その男が同じ質問を三度繰り返したので、ようやく「私がそうだといえば、巡礼は毎年の義務となりますが、あなたたちには、それは到底不可能なことでしょう」といわれた。
このあとみ使いは、「私があなたたちに話したことを行なうだけにしなさい。
というのは、あまりに質問しすぎたり、預言者に反対したりしたため、身を滅ぼした人たちが以前にいたからです。
それ故、私がなにかを命じたならば、あなたたちのできる範囲内でそれを実行し、また、私がなにかを禁じた場合には、それを行なわないようにしなさい」といわれた。

女性の巡礼に関して

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「女性は自分の近親者と同行しない限り、三日間の旅にでてはいけない」といわれた。

前記と同内容のハディースは、**ウバイドッラー**により別の伝承者経路でも伝えられている。
なお、伝承者の一人、アブー・バクルの記述には「三日間以上」との表現がみられ、同じく、イブン・ヌマイルが、彼の父の話を伝えた記述にも「女性は近親者と同行しない限り、三日間云々」という言葉がみられる。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

預言者は「アッラーと来世を信じる女性が、近親者と同行しないで三夜以上の旅を行なうのは違法である」といわれた。

カザーアは伝えている

私はアブー・サイードの語るハディースをきいたが、非常に感銘を受けたので、彼に「あなたはそれをアッラーのみ使いから直接きいたのですか」とたずねた。

彼は「アッラーのみ使いから直接おききしたこと以外、どうして話せますか」といい、次のように語ってくれた。

「私は、アッラーのみ使いが『三つのモスク以外にお参りのための旅行をしてはならない。それらのモスクとは、この私のモスク《マディーナの預言者モスク》、マッカの聖モスク、更にエルサレムのアクサー・モスクである。

また、女性は、近親者や夫が同行している場合を除き、二日間の旅に出かけてはいけない』といわれるのをききました」

カザーアは伝えている

私は、アブー・サイード・フドリーが次のように語るのをきいた。

「私は、アッラーのみ使いから非常に印象深く忘れ難い四つのことをきいた。

その中のひとつは、夫や近親者の同行なしに女性が二日間以上の旅に出ることを禁じたことであった」

この後、彼はこのハディースの後半を物語った。

アブー・サイードは伝えている

アッラーのみ使いは、「女性は近親者の同行なしに三日間出かけてはいけない」といわれた。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは「女性は近親者の同行なしには、三夜以上の旅に出かけてはいけない」といわれた。

前記と同様のハディースは**カターダ**によっても別の伝承者経路で伝えられているが、それには、「近親者の同行なしに三日間以上の旅に」と記されている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「ムスリム女性が近親者の同行なしに三夜以上の旅に出かけることは違法である」といわれた。

アブー・フライラは伝えている

預言者は、「アッラーと来世を信じる女性が近親者の同行なしに一日もかかる旅行に出かけるのは違法である」といわれた。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、「アッラーと来世を信じる女性が近親者の同行なしに昼夜を越える旅に出かけるのは違法である」といわれた。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、「女性が近親者の同行なしに、三日間の旅に出かけるのは、違法である」といわれた。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは、「アッラーと来世を信じる女性が三日間、または、それ以上の旅に出かけるのは違法である。
ただし、女性の父、息子、夫、男兄弟、または近親者が同行する場合はこれに該当しない」といわれた。

前記と同内容のハディースは**アアマシュ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

イブン・アッバースは伝えている

私は、預言者が、説教で次のようにいわれるのをきいた。
「だれしも、赤の他人の女性と一緒にいてはいけない。
ただし近親者が彼女と同席している場合は構わない。
女性は近親者の同行がない場合、旅に出かけてはいけない」

この折、一人の男が立ち上がって「アッラーのみ使い様私の妻はハッジに出かけました。
私は、これこれの戦いに参加することになっています」といった。
これに対し、み使いは「あなたは行って、あなたの妻と一緒にハッジをしなさい」といわれた。

前記と同内容のハディースは**アムル**により、別の伝承者経路でも伝えられている。

前記と同内容のハディースを**イブン・ジュライジュ**は別の伝承者経路で伝えているが、それにも「だれしも赤の他人の女性と一緒にいてはならない。
ただし近親者が彼女と一緒にいる場合には構わない」と記されている。

旅行前の祈願に関して

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは旅行のためラクダに乗る時には、いつもアッラーを讃えて「アッラーは偉大なり！」と三回唱え、そのあと次のようにいわれた。
「いと高くましますアッラー、彼こそ私たちにこの乗り物を与え給うた方です。
私たちはこれを乗り物として使いこなすには力不足です。
私たちは主の御元に帰りゆく者です。
アッラーよ、私たちのこの旅において、あなたから徳と敬虔さを授かりたく、また、あなたを喜ばす行為について教えていただきたく願います。
私たちの旅を軽くして下さい！
違い道程を楽なものにして下さい。
あなたは旅の同行者です。
そしてまた家族の後見人です。
アッラーよ、旅の辛さから、光景のやるせなさから、そしてまた、財産や家族に起こる悪い変化から私をお守り下さい」
旅の帰りにも、同じようにいわれたが、これには「私たちは、戻りつつある者、悔悛した者、主を崇拝する者、そして主を讃える者であります」という言葉を加えられた。

アブドッラー・ビン・サルジスは伝えている

アッラーのみ使いは、旅立たれる時には、旅の困難さから守って下さるよう、また、戻るまでに悪い変化が起きていないよう、更に、名誉の後に不名誉なことが起こらないよう、そしてまた更に、財産と家族に重苦しくやり切れない事態が起こらないよう、アッラーに加護を祈った。

前記と同内容のハディースは、**アーシム**ほか何人かの伝承者によっても伝えられるが、それらには、表現上多少の異同がみられる。

旅行後の祈りに関して

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは戦闘、遠征、または、ハッジ、ウムラから戻るといつも、丘、または、高い場所にのぼり、アッラーは偉大なり！　と三度お唱えになり、その後次のようにいわれた。

「アッラーの他に神はない。

彼は唯一者であらせられ、彼と同列に並ぶ者はいません。

彼は主権者、讃えられるべき御方、そして、万能な御方です。

私たちは主の御元に帰る者、悔悛する者、主を崇める者、更には主の前にひれ臥す者です。

私たちは主を讃えます。

アッラーは約束を果たす方、しもべを助ける方、お一人で同盟して反抗する者たちを打ち砕く方です」

前記と同内容のハディースは**イブン・ウマル**によっても、別の伝承者経路で伝えられている。
なおこれには「アッラーは偉大なり！」という言葉は二度述べられている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

私とアブー・タルハは、アッラーのみ使いと共に戻ってきた。

預言者の妻の一人、サフィーヤは、み使いの背後でラクダに乗っていた。

私たちがマディーナのはずれにきたとき、み使いは、「私たちは戻る者、悔悛する者、主を崇める者、主を讃える者です」と唱え、それをマディーナに入るまでお続けになった。

前記と同内答のハディースは、**アナス・ビン・マーリク**によっても、別の伝承者経路で伝えられている

ズール・フライファでの休止に関して

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、ズール・フライファのバトハーウでラクダをひざまづかせて降り立ち、そこで礼拝をなさった。

アブドッラー・ビン・ウマルも同じように礼拝を行なった。

ナーフィウは伝えている

アブドッラー・ビン・ウマルは、ズール・フライファのバトハーウで必ずラクダを止めた。

そこはアッラーのみ使いが、いつもラクダを止めて礼拝なさった場所であった。

ナーフィウは伝えている

アブドッラー・ビン・ウマルは、ハッジやウムラから戻る際には、ズール・フライファのバトハーウでラクダを止めた。

そこはアッラーのみ使いがラクダを止めた場所であった。

サーリム・ビン・アブドッラー・ビン・ウマルは彼の父からきいてこう伝えている

ズール・フライファで、アッラーのみ使いを、深夜、見知らぬ誰かが訪問した。

そして彼に、バトハーウは祝福された場所であると告げた。

サーリム・ビン・アブドッラー・ビン・ウマルは、彼の父からきいて、こう伝えている

アッラーのみ使いは、深夜、谷の中ほどにあるズール・フライファにきた時、誰か見知らぬ人によって「ここバトハーウは祝福された場所である」と告げられた。

伝承者の一人、ムーサーは次のように語っている。

サーリムは、或るモスクの前で彼のラクダを止めた。

ここは、彼の父アブドッラーが、アッラーのみ使いの適当な休息場所を探すために、ラクダを止めた場所であった。

その場所は、谷の中ほどで、モスクより低い処にあり、丁度そのモスクとキブラ（礼拝の方角）との間に位置していた。

巡礼規則に関して

アブー・フライラは伝えている

アブー・バクル・シッディークは、最後の巡礼の年の前、即ち、彼がアッラーのみ使いから巡礼の責任者（アミール）に任ぜられた年の巡礼の折、私を或る一団の人々の処に送って、その人々が、ナフルの日に、一般の巡礼者に、次の布告をするよう連絡させた。

それは、「この年の後、多神教徒にハッジは禁じられる。

裸の者には、神殿のタワーフは禁じられる」という布告であった。

なお、イブン・シハーブは、フマイド・ビン・アブドル・ラフマーンからきいて、「アブー・フライラが、偉大な巡礼（ハッジ・アクバル）の日（注）とは、ズール・ヒッジャ月10日のこのナフルの日のことである」と語ったことを伝えている。

（注）偉大な巡礼の日クルアーン第9章3節にみえる言葉。

ここには、「（これは）アッラーとそのみ使いから、偉大な巡礼の日にあたり、人々へ布告された宣言である」と記されている

ハッジ及びウムラとアラファートでのウクーフに関して

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、「アッラーが地獄からしもべらをより多く自由にする日は、アラファの日以外にない。
アッラーは近づいて、天使たちの前で彼らを誉めそやし、『この者たちはなにを望んでいるか』とお尋ねになる」といわれた。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、「ウムラを一度行なえば、それと次のウムラとの間に犯した罪は償われ、ハッジを正しく行なった者には、報いとして天国に入ることが許される」といわれた。

前記と同内答のハディースは、**アブー・フライラ**により、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、「（巡礼を行なう目的で）カーバ神殿にきて、下品な言葉を口にせず、邪悪な行為もしなかった者は、母が彼を生んだその日のような清浄な身となって家に帰ることができる」といわれた。

前記と同内答のハディースは、**マンスール**によっても別の伝承者経路で伝えられており、それには、「下品な言葉を口にせず、邪悪な行為もしないで巡礼を行なった者は」と記されている。

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

マッカ滞在に関して

ウサーマ・ビン・ザイド・ビン・ハーリサはこう伝えている

ウサーマは、「アッラーのみ使い様。あなたは（マッカからマディーナへ移った時見捨てた）マッカの自分の家に滞在なさるのですか」ときいた。

これに対しみ使いは、「アキールは土地や家など私たちになにか残しましたか」といわれた。

アキールとターリブは、アブー・ターリブの財産を継承した。

しかし、ジャウファルも、アリーも共に、アブー・ターリブからなにも譲与されなかった。

この二人は、ムスリムであったが、アキールとターリブは非ムスリムであった（注）。

（注）ムスリムが非ムスリムの遺産を受継ぐことは許されない

ウサーマ・ビン・ザイドは伝えている

私はアッラーのみ使いに、「明日はどこに滞在なさるのですか」とお尋ねした。

これはハッジを行うために、マッカに近づいていた時のことでした。

み使いは、この折、「アキールは私たちのために家を残しておきましたか」といわれた。

なお、アムル・ビン・ウスマーンは、ウサーマ・ビン・ザイドからきいて、同内容のハディースを次のように伝えている。

ウサーマは「アッラーのみ使い様。もしアッラーが望み給うならば、明日はどこに滞在なさるのですか」と質問した。

それは、マッカを征服した時のことでした。

み使いは、この折、「アキールが、私たちのために家を残しておきましたか」と問い返された。

ムハージルのマッカ滞在について

アブドル・ラフマーン・ビン・フマイドは伝えている

彼は、ウマル・ビン・アブドル・アズィーズがサーイブ・ビン・ヤズィードに「マッカ滞在についてなにかききましたか」とたずねた時、サイーブがアラーウ・ビン・ハドラミーからきいた言葉を次のように話すのをきいた。

「アッラーのみ使いは『ムハージル《マッカからマディーナに移住したムスリム》に巡礼を終えた後、マッカ滞在が許されるのは三日間だけである』といわれた。

この言葉は、み使い自身がこの期間以上滞在しないことを表明するためにいわれたようにも思えた」

アブドル・ラフマーン・ビン・フマイドは語っている

私は、ウマル・ビン・アブドル・アズィーズが教友らに「マッカ居住に関してなにをききましたか」とたずね時、サーイブ・ビン・ヤズィードがアラーウの語った言葉を次のように話すのをきいた。

「アッラーのみ使いは『ムハージルは巡礼の儀式を終えた後、三日間だけマッカにとどまることができる』といわれた」

アブドル・ラフマーン・ビン・フマイドは伝えている

彼は、ウマル・ビン・アブドル・アズィーズがサーイブ・ビン・ヤズィードに質問した折、サーイブがアラーウ・ビン・ハドラミーからきいた言葉を次のように話すのをきいた。

「アッラーのみ使いは『ムハージルが、巡礼の儀式を終えた後、マッカに滞在できるのは三日間だけである』といわれた」

アラーウ・ビン・ハドラミーは伝えている

アッラーのみ使いは「巡礼の儀式を終えた後のマッカ滞在は、三日間にかぎられる」といわれた。

前記と同内容のハディースは、**イブン・ジュライジュ**によっても、別の伝承者経路で伝えられている。

聖地マッカに関して

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは、マッカ征服の日、次のようにいわれた。

「今後、再び、ヒジュラ《移住、ここでは信仰上の抑圧から逃れること》が行なわれることはない。

ただ信仰を守るためのジハード《努力、または、戦い》と善意が必要とされるのみである。

召集された時には戦闘に参加しなければならない」

み使いは、また、このマッカ征服の日にこうもいわれた。

「アッラーは、この町を、天地を創造なさった日に聖なる町と定められた。

それ故、この町が最後の審判の日が到来するまで神聖なることは、アッラーによって保障されているのである。

この町で、戦闘を行なうことは、私以前には誰にも許されなかった。

私に対しても日中の一時間許されただけであった。

なぜならば、ここは、最後の審判の日の到来まで、神聖なることを、アッラーによって保障された町であるからである。

ここでは、植物のとげすらも切り取られず、獲物も狩猟によって荒らされてはならない。

また落し物は、公に誰のものなのか問われてから拾得される。

新鮮な草木を切ることも許されない」

この折、アッバースは「み使い様、イズヒル草《いぐさの一種》は例外にして下さい。

鍛冶屋や家の者にとって役に立ちます」といった。

み使いは、そのため「イズヒル草を除く」といわれた。

前記と同内容のハディースは、**マンスール**により、別の伝承者経路でも伝えられているが、それには「天地を創造された日に」という言葉はない。
なお「戦闘」に代わって「殺生」という言葉が使われており、更に「公に告知するまで、誰も落し物を拾わない」とも記されている。

アブー・シュライフ・アダウィーは語っている

彼は、アムル・ビン・サイード（注）がマッカに軍隊を派遣した時に次のようにいった。

「司令官よ、私にいわせて欲しいことがあります。

マッカ征服の翌日、アッラーのみ使いがいわれた言葉があります。

それは私の耳によってききとられ、私の心にとどめられており、また、私の両目もみたことです。

み使いはアッラーを讃え、そうして次のようにいわれました。

『マッカは、人によってではなく、アッラーによって聖なる町にされたのである。

アッラーと最後の審判の日を信じる者が、マッカを血で染めることは許されない。
また町の木を切り倒すことも許されない。
み使いが、ここで戦ったことを理由に、ここでの戦闘の許可を求める者には次のようにいいなさい。
“アッラーは、み使いにのみ特別に許したのであって、あなたに許したのではない”と。
アッラーはみ使いに対しても、日中の一時間の戦闘だけを許されたのである。
そうしてマッカは、その日のうちに、昨日と同じような、神聖な状態に戻されたのである。
ここに出席している者は、来れなかった者にこれらのことを告げなさい』」
アブー・シュライフは「アムルはあなたに、なにを話したのか」と質問された。
この時彼は次のように答えた。
「アムルは、『アブー・シュライフよ、私はあなた以上にそれらの件についてはよくきき及んでいる。
しかし聖なる領域であっても、不服従の者、流血事件を引き起こして逃亡した者、更にまた、罪を犯して逃亡した者らには、保護は与えられない』といった」

（注）アムル・ビン・サイードは、ウマイヤ朝のカリフ、ヤズィードがマッカの太守、アブドッラー・ビン・ズバイルを攻撃した時派遣された軍隊の司令官であった。
なお、アブー・シュライフは、預言者の教友の一人で、預言者によるマッカ征服以前にイスラームに改宗し、687 年にマディーナで死去した人物である

アブー・フライラは伝えている
アッラーが、アッラーのみ使いに対し、マッカの征服をお許しになった時、み使いはアッラーを讃美してから、次のようにいわれた。
「アッラーは象を抑えてマッカを守り給うた（注 1）。
また、み使いと信者たちに、マッカに対する支配権を与え給うた。
この聖なる領域を私以前に犯すことは許されなかった。
そして私に対しても、日中の一時間それを許されただけであった。
私以後には誰にも許されないであろう。
狩猟も木を切断することも許されない。
公に告げることなしに落ちている物を拾うことは違法である。
近親者が殺された場合には二つの選択権が認められる。
ひとつは血の代償金を要求すること、もうひとつは殺人者を殺すこと（注 2）である」
アッバースは、この折「み使い様、イズヒル草を例外にして下さい。
それは私たちの墓にも家にも利用されます」といった。
み使いはこれに対し「イズヒル草は例外にする」と答えられた。
この時、また、イエメンのアブー・シャーという男が立ち上がって「み使い様、私のためにそ

のことを書いてください」と頼んだ。
それでみ使いは、「アブー・シャーのために書くように」とお命じになった。
なお、これに関し、ワリードはアウザーイーに「み使い様、書いてください、とはどういう意味ですか」とたずねた。
アウザーイーは、この時、彼に「み使いからきいた説教内容を書くよう依頼したのです」と答えた。

（注 1）イエメンの大守アブラハは、象を連れた軍隊を率いて、マッカ攻略を図ったが成功しなかった。
西暦 570 年頃のことで、この年は象の年、預言者ムハンマド誕生の年として知られる。
なお、クルアーン 105 章（象の章）は、これに関連する啓示である

（注 2）アラビア語で、キサース《血の復讐》と呼ばれる

アブー・フライラは語っている
マッカ征服の年に、フザーア族の者たちはライス族の男を殺害したが、それは、以前にライス族の者らによって殺された男の復讐のためであった。
このことは、アッラーのみ使いに報告された。
その折、み使いはラクダに乗り、次のような説教をなさった。
「アッラーは象を抑えてマッカを守られた。
アッラーは、そのみ使いと信者たちに、マッカの支配権をお与えになった。
この聖域を私以前には、誰にも侵すことは許されなかった。
そして私の後にも、それは許されることはないだろう。
私に対しても、日中の一時間許されただけであった。
今や再び（マッカは）侵すべからざる神聖な町となった。
それ故、ここでは、植物のとげを切ったり、木を倒したり、また、公に告げることなしに、落し物を拾ったりすることなどは許されない。
近親者を殺害された者には、二つの選択がある。
ひとつは、血の代償金を受け取ること、もうひとつは、血の復讐である」
この時、イエメン出身のアブー・シャーという男が「み使い様。そのことを私のために書いてください」と頼んだ。
み使いは、それで、「アブー・シャーに書いてやりなさい」といわれた。
また、クライシュ族の或る男は「み使い様。イズヒル草は例外にして下さい。私たちは家や墓でこれを使います」といった。
み使いはこれに対しても「イズヒル草は除くことにする」といわれた。

マッカでの武器携帯禁止について

ジャービルは語っている

アッラーのみ使いは「マッカで武器を携帯することは誰にも許されない」といわれた。

イフラームをまとわずにマッカに入ることに関して

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは、勝利の年（マッカ征服の年）に兜を被ったままマッカに入城なさった。
兜を脱いだ時、或る男がやって来て「イブン・ハタル（注）がカーバ神殿の覆い布（キスワ）にぶらさがっています」と知らせた。
み使いは「彼を殺せ」と命令なさった。これには、マーリクが応答した。

（注）イブン・ハタル　奴隷を殺し、ザカートを盗み、預言者ムハンマドを愚弄する歌を広めるなど、数々の悪事を重ねた。
預言者のマッカ入城の折、捕えられ処刑された

ジャービル・ビン・アブドッラー・アンサーリーは伝えている

アッラーのみ使いは（マッカを征服した日に）マッカに入城なさった。
この折、み使いは勝利の年に、黒いターバンを頭に巻いてマッカの町に入られたが、イフラームの装束ではなかった。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは勝利の日に、黒いターバンを頭に巻いてマッカに入った。

ジャアファルは彼の父アムル・ビン・フライサからきいてこう伝えている

アッラーのみ使いは、マッカを征服した日に黒いターバンを頭に巻いて人々に説教なさった。

ジャアファルによれば、彼の父アムル・ビン・フライサは次のように語っている

私には、アッラーのみ使いが黒いターバンを頭に巻き、その端を両肩の上にたらしながら、説教壇の上に立った姿が目に浮かぶような気がする。

マディーナに関して

アブドッラー・ビン・ザイド・ビン・アースィムは伝えている

アッラーのみ使いはこういわれた。

「まことに、イブラーヒームはマッカを神聖な地域であると宣言し、そこに住む人々を祝福した。

私はイブラーヒームが、マッカを神聖であると宣言したように、マディーナを神聖な地域であると宣言する。

私はイブラーヒームがマッカの人々のために祈ったよりも、いわば、二倍もの重さをかけて（熱心に）祈りを捧げている」

これと同内容のハディースは、別の伝承者経路によっても伝えられるが、用語に多少の異同がみられる。

ラーフィウ・ビン・ハディージュは伝えている

アッラーのみ使いは「イブラーヒームは、マッカを聖なる土地であると宣言した。

私は二つの岩場の間の領域（マディーナ）を聖なる土地であると宣言する」といわれた。

ナーフィウ・ビン・ジュバイルは伝えている

マルワーン・ビン・ハカムは人々に演説し、マッカとマッカの住民、そして、マッカの神聖さについて話した。

しかし彼は、マディーナとその住民、その神聖さについてはなにも話さなかった。

ラーフィウ・ビン・ハディージュは、彼を呼びつけて、次のようにいった。

「私はあなたが、マッカとマッカの住民、その神聖さについて話すのをききました。

ただ、あなたはマディーナとマディーナの住民、そして、その神聖さについてはなにもいいませんでした。

それは、どうしてですか。

アッラーのみ使いは、二つの岩地の間は神聖であると宣言しました。

私たちは、ハウラーニーの羊皮に書かれたこれに関する記録を持っています。

もし、あなたが望むなら、それをあなたに読んであげます」

これに対し、マルワーンは沈黙し、このあと「そのことについては、私も少しはきいています」といった。

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは「イブラーヒームがマッカを聖なる土地であると述べたように、私はマディーナ、即ち、二つの山の間のこのよき地を神聖であると宣言する。

ここでは、いかなる木も断ち切られないし、また、いかなる種類の狩猟も許されない」といわれた。

アーミルは彼の父サアドの言葉を伝えている

アッラーのみ使いは「私はマディーナのふたつの岩地の間の領域は聖地であると宣言した。
それ故、その領域内で木を切ってはならないし狩猟を行なうことも禁じられる」といわれ、続けて、また、「マディーナはここをよく知っている人々にとって最良の町です。
アッラーが誰かよりよい人物を或る人の代りに望まれる場合は、別ですが、誰も自分からここを嫌って去る者はいません。
審判の日の、執り成し人、証言者の私がいますし、人々は困難や不幸があっても、このマディーナに住んでいるのです」といわれた。

アーミルは、彼の父サアド・ビン・アブー・ワッカースの言葉を伝えている

アッラーのみ使いはいわれた。
このあと前記と同内容のハディースを伝え、更に、それに、み使いの次の言葉を加えている。
「マディーナの住民に対し誰も敵意を抱いてはならない。
さもないと、アッラーは鉛を溶かすように、または、水の中で塩を溶かすように、敵意を抱くものを溶かしてしまうだろう」

アーミル・ビン・サアドは伝えている

サアドは、アキークにある彼の城へ向かっている時、一人の奴隷が木を切り、また、葉を落としているのをみつけたので、奴隷の持ち物を取り上げた。
サアドが戻ると、奴隷の主人たちがやって来て、彼らの奴隷から取り上げた物を、奴隷、または、彼らに返してくれるよう頼んだ。
それに対し彼は「アッラーは、アッラーのみ使いが戦利品として私に与えた物を返すことを禁じ給うた」といって彼らの頼みを拒否した。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いはアブー・タルハに「私のために召使を一人、あなたの処の若い者たちのなかからみつけてください」といわれた。
アブー・タルハは、私をラクダの後部に乗せ、一緒に出かけた。
それで私は、アッラーのみ使いがラクダから降りるときはいつも手助けをすることになった。
アナス・ビン・マーリクはまた、次のようにも語っている。
アッラーのみ使いは道中、ウフドの山が視界に入ってきた時「この山は私たちを愛し、私

たちもこの山を愛する」といわれた。
そして、マディーナに近づいた時「アッラーよ、イブラーヒームがマッカを聖地であると述べたように、私もこれらふたつの山の間の領域（マディーナ）を聖地であると宣言します。
アッラーよ、マディーナに住む人々を十分に祝福して下さい！」といわれた。

アナス・ビン・マーリクは別にも前記と同内容のハディースを預言者からきいて伝えているが、これには「両岩地の間の領域を聖地とする」と記されている。

アースィムは伝えている
私はアナス・ビン・マーリクに、アッラーのみ使いがマディーナを聖地であるといわれたのかどうかについてたずねた。
すると彼は「そうです。これこれの間の領域を」と答え、「これに別の場所を勝手に加えていう者がいます」といった。
そして、更に私に「なにかを勝手につけ加えたり、行なったりするのは、まことに由々しいことです。
そのようなことをすると、アッラーと天使たち、それに人々全部の呪いがかかります。
そのような者が、義務、または、義務として課せられていること以上の行為をしたとしても、アッラーは最後の審判の日、それらをお認めにはならないだろう」といった。
なお、イブン・アナスはこれに「または、「なにかを勝手につけ加える者を保護するのは（由々しいことです）」」という言葉を加えている。

アースィムは伝えている
私はアナスにアッラーのみ使いが、マディーナを聖地であるといわれたのかどうかについてたずねた。
彼は「そのとおりです。
聖地であるといわれました。
それ故、木を切ってはなりません。
木を切った者に対し、アッラーと天使、それに人々全ての呪いが下ります」といった。

アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーのみ使いは、「おおアッラーよ、十分に彼らを祝福して下さい。
サーアと、ムッド（注）を用いて（よく量り）祝福して下さい」といわれた。

（注）サーアもムッドも共に、アラブの古い計量単位を示す言葉

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーよ、マディーナにマッカの倍の祝福をお与え下さい！」といわれた。

イブラーヒーム・タイミーは、彼の父からきいて次のように伝えている

アリー・ビン・アブー・ターリブは私たちに「クルアーンの他にも私たちが朗誦するものがあると主張する者がいれば、その者は嘘をついています。
刀の鞘の側にかかっている私のこのノートには、ラクダの年齢や、傷の種類についての記録が記されているだけです」といった。
彼は、また、預言者が「マディーナはアイルからサウル（注）まで聖なる領域である。
従ってこの領域で勝手に新しいことを始める者や、それを庇護する者があれば、アッラー、天使、それに人々全ての呪いが下ります。
そのような人が、たとえ義務、または、義務以上の行為をやっていたとしても、アッラーは審判の日、それらを償いとして受け入れることはなさらないでありましょう。
ムスリムが遵守すべきものはただひとつです。
謙虚に尊重していかねばなりません。
もし、誰か父の名を偽ったり、自分の主人を他人の名で語ったりする者がいれば、その者には、アッラー、天使、更には、人々全ての呪いが下されるでしょう。
アッラーはその者が義務行為または義務以上の行為をやったとしても、償いとしてそれらを受け入れることはないでありましょう」といわれたと語った。
なお、これに関連したアブー・バクル及びズハイルの伝えるハディースは「人は謙虚にそれを尊重すべきである」という言葉で終わっているがそれには「刀の鞘にかかっているノート云々」という記述はみられない。

（注）アイル　マディーナ近くの小山の名。
サウル　マッカ近くにも同名の小山があるが、このハディースの場合、マディーナ近郊の忘れられた山の名前ではないかといわれる

前記と同内容のハディースは、**アアマシュ**によっても伝えられるが、これには「ムスリムとの契約を破った者は、アッラーと天使、それに人々全ての呪いを受ける。
審判の日には、彼の果たした義務行為、または、それ以上の行為があったとしても、それらは受け入れられない」と記されている。

前記と同内容のハディースは、別にも**アアマシュ**によって伝えられるが、用語に多少の異同がみられる。

アブー・フライラは伝えている

預言者はいわれた。

「マディーナは聖なる町である。

それ故勝手に新しいことを始める者やそれを庇護する者には、アッラーと天使、それに全ての人々の呪いがある。

審判の日には、その者の果した義務行為、または、それ以上の行為があったとしても、それらはアッラーには受け入れられない」

前記と同内答のハディースは**アアマシュ**によって更に別の伝承者経路で伝えられている。
なお、それには「ムスリムの信仰する対象は、唯ひとつ《クルアーンの教え》である。
人々は謙虚にそれを守っていかねばならない。
ムスリムとの契約を破った者は、アッラーと天使、それに人々全ての呪いを受ける。
義務、または、それ以上の行為をたとえ行なったとしても、それらは償いとしては受け入れられない」との言葉がみられる。

アブー・フライラは語っている

もし私がマディーナで鹿をみかけても、私は決してそれを狩ろうとはしません。

なぜなら、アッラーのみ使いが、「これらふたつの岩地の間は聖地である」といわれたからです。

アブー・フライラは語っている

アッラーのみ使いは、マディーナの岩地の間を聖地と定められた。

もしも、この両岩山の間の地域で鹿をみつけても、私は追いかけたりはしない。

アッラーのみ使いは、マディーナの周辺 12 マイル四方を、保護地（ヒマー）に指定なさった。

アブー・フライラは伝えている

人々は最初の果物の収穫を、預言者のもとへ持って行った。

アッラーのみ使いはそれを受け取ると、次のようにいわれた。

「アッラーよ、この収穫で私たちを祝福し給え！

私たちの町で私たちを祝福し給え、サーアとムッド《度量衡の単位：ここでは「多量の物品によって」の意》で私たちを祝福し給え！

アッラーよ、イブラーヒームはあなたのしもべ、友人、預言者です。

私もあなたのしもべ、預言者です。

イブラーヒームはマッカへの加護を新たに祈願しました。

彼がマッカのために祈ったように、私はマディーナのために加護をあなたに祈願します」
み使いはこのあと、一番小さい子供を呼んで、その果物をお与えになった。

アブー・フライラは語っている
アッラーのみ使いは、最初の収穫物を受け取った時、「アッラーよ、私たちと私たちの町、収穫物、そして数々の品々に祝福をお与え下さい。
そしてその祝福の上に更に祝福を加えて下さい！」といわれた。
この後、そこにいた一番小さい子にそれをお与えになった。

マディーナでの居住について

アブー・サイード・マウラー・マフリーはこう伝えている

人々はマディーナで、困難で苦しい生活をしていた。

或る時彼は、アブー・サイード・フドリーの処へ行って「私には扶養すべき多くの家族があり、苦しい毎日です。

それで私は家族を連れてここを去り、田舎の方へ行こうと思います」といった。

この時、アブー・サイードは次のように語った。

「そんなことはやめなさい。

マディーナに留まりなさい。

かつて、私たちはアッラーの預言者と共にウスファーンまで行き、そこでいく晩か過ごしましたが、その折、同行していた人々は『アッラーに誓って。私たちはここでこうしていますが、遠くに残してきた家族のことが心配です』と口々にいいました」

「このことが、預言者の耳に達した時、彼は、『あなた方の話していたのはなんのことですか。

私が誓う御方にかけて、または、私の生命の主にかけて、《私（アブーサイード）はこれらの言葉のどれを彼がいわれたのか憶えていない》帰ることに決めましたが、もし、あなた方が望むならば私はラクダをマディーナまで休止することなく進めるよう命じます』といわれたのです」

「預言者は、次いでこういわれました

『アッラーよ、イブラーヒームはマッカを尊び聖地としましたが、私はマディーナを聖地であると宣言しました。

アイルとウフドの山の間の領域です。

その領域では、いかなる血も流されず、また、武器の携帯も許されず、飼料用を除き木の葉も落とされません。

アッラーよ、私たちの町を祝福し給え！

アッラーよ、豊かな食糧で、多量の収穫物で、更に豊かな食糧で、更に多量の収穫物で私たちを祝福し給え！

アッラーよ、私たちの町を祝福し給え！

アッラーよ、倍の祝福を与え給え！

私の生命の主に誓って申しますが、マディーナまでの谷や山道は全て、二人の天使によって庇護されています。

前進しなさい！』

それで私たちは前進し、マディーナに到着しました。

私たちが誓い、また、その誓いを受け入れて下さる御方、アッラーにかけて申しますが、私たちは、アブドッラー・ビン・ガタファーン族の者らから攻撃されたのでマディーナに到着

しても、ほとんどラクダの鞍をはずせませんでした。
このようなことは以前にはありませんでした」

アブー・サイード・フドリーは伝えている
アッラーのみ使いは「アッラーよ、サーアとムッド《豊かな食糧品の数々》で、私たちを祝福し、更にそれに倍加する祝福をも与えて下さい！」といわれた。

前記と同内容のハディースは、**ヤヒヤー・ビン・アブー・カシール**によっても、別の伝承者経路で伝えられている。

アブー・サイード・マウラー・マフリーは伝えている
私は世の中がまだ騒然としていた頃の或る夜（注）、アブー・サイード・フドリーを、マディーナを去ることについて相談するため訪れた。
その折、私は物価高や私が大家族を抱えていることなどについて話し、マディーナの生活の苦しさとそれを取り巻く荒涼とした環境などに耐えられないといった。
するとアブー・サイード・フドリーは「なんということだ！
私はあなたにそうすることを勧めません。
アッラーのみ使いは『もしムスリムなら、最後の審判の日の執り成し役、証言者の私がいる故、マディーナの生活の辛さにも耐えられるであろう』といっておられた」と語った。

（注）原文はハッラの夜々。
683 年にカリフ・ヤズィードの命を受けた軍隊はマディーナを攻略した。
騒然とした当時の世情をハッラの日々、或いはハッラの夜々と呼んでいる。
ハッラは軍部が野営したマディーナ東方の平原の名

アブドル・ラフマーンは彼の父、アブー・サイードの語った話を伝えている
アブー・サイードは、アッラーのみ使いが次のように語るのをきいた。
「イブラーヒームがマッカを聖地としたように、私もマディーナのふたつの岩地の間を聖地であると宣言する」
この折、アブー・サイードは手中に鳥をつかんでいたが、その手を開き鳥を放してやった。

サフル・ビン・フナイフは伝えている
アッラーのみ使いは手でマディーナの方を指し「あれは、安全な聖地である」といわれた。

アーイシャは伝えている

私たちが移って来た時、マディーナは不健康な土地だった。
アブー・バクルもビラールも病気になった。
アッラーのみ使いは教友たちの病気を知った時、「アッラーよ！
あなたがマッカを快適な町にしたように、マディーナをそれ以上に快適に、そして、健康的にしてください。
豊かな収穫物で私たちを祝福して下さい。
暑さをジュッファへ追いやって下さい」と祈った。

前記と同内容のハディースは**ヒシャーム・ビン・ウルワ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは「マディーナの困難さに辛抱強く耐える人のために、最後の審判の日に私は、執り成し人となり、証言者となるであろう」といわれた。

ズバイルの元奴隷、**ユハンニス**は伝えている

世の中がまた騒然としていた頃（ハッラの日々）の或る折、彼はアブドッラー・ビン・ウマルと坐っていた。
そこへ元奴隷だった一人の女性がやってきて、挨拶をし、「アブー・アブドル・ラフマーンよ、私はこの時期あまりに生活が困難なので、マディーナを離れようと決めました」といった。
すると彼は「なんとばかなことを！
ここに留まりなさい。
私はアッラーのみ使いが、『マディーナの辛さや、やるせなさに耐えた者のため、最後の審判の日に、私が証言者、または、執り成し人となるだろう』といわれたのをきいたのです」といった。

アブドッラー・ビン・ウマルは語っている

アッラーのみ使いは「審判の日、私はマディーナの辛さや、やるせなさに耐えた者のための証言者、または、執り成し人になります」といわれた。

アブー・フライラは語っている

アッラーのみ使いは「ウンマ《イスラーム共同体》の人のなかで、マディーナの辛さや、やるせなさに耐えた者のために、審判の日に、私は執り成し役、もしくは、証言者になります」といわれた。

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは語っている
　　アッラーのみ使いはいわれた。
　「マディーナの辛さに耐えた者のために……」
　　このハディースの後半は前記内容と同じである。

マディーナの安全性に関して

アブー・フライラは語っている

アッラーのみ使いは「マディーナの入り口には天使がいる。
だから災いや大嘘つきのペテン師（ダッジャール）（注）は入れない」といわれた。

（注）ダッジャールは偽救世主、ペテン師などと訳される

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「大ペテン師（ダッジャール）は東の方からやってき、マディーナを攻撃しようとして、ウフド山の背後まで来るが、天使が彼の顔をシリアの方へ向かせたので、彼はそこに行き、やがて滅びてしまう」といわれた。

マディーナの特異性に関して

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは次のようにいわれた。

「マディーナの民には、いつか自分の従兄弟や近親者を招き『物価が安くて、物が豊富なこの土地に来なさい』といえる時がやってきます。

しかし、マディーナは本来彼らにとって、ずっと良い土地なのです。

人々がそれに気づいてないだけです。

生命の主に誓っていいますが、誰もマディーナを嫌って出ていくものはいないのです。

ただし、アッラーが彼よりも良い人物を住まわせたいと思われる場合は別ですが。

みなさい！

マディーナは溶鉱炉のように、不純物を取り除きます。

溶鉱炉が鉄の不純物を取り除くように、マディーナは悪を滅ぼします。

それまでは最後の審判の日は来ません」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「私は（後日）他の町をも圧倒することになったマディーナの町への移住を命じられました。

人々はここを、ヤスリブと呼んでいたが、正しい名はマディーナです。

溶鉱炉が鉄の不純物を取り除くように、ここマディーナは悪い人々を滅ぼします」といわれた。

前記と同内容のハディースは、**ヤフヤー・ビン・サイード**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

ジャービル・ビン・アブドッラーは語っている

砂漠に住むアラブ人の一人が、アッラーのみ使いに盟約を誓った。

しかし彼は、マディーナへ来て間もなく、ひどい熱病にかかってしまった。

それで（砂漠に戻りたいと願い）預言者の処へ来て「ムハンマド様、盟約を反故にして下さい」と頼んだ。

しかし、アッラーのみ使いはこれを拒否なさった。

そのアラブ人は、再度、アッラーのみ使いの処に来て「ムハンマド様、盟約を反故にしてください」と頼んだが、預言者は、また、これを拒否なさった。

そのアラブ人は、更に再び、預言者の処に来て「ムハンマド様、盟約を反故にして下さい」と頼んだ。

預言者は三度目もまた拒否なさった。

結局そのアラブ人は（自ら盟約を破棄して砂漠へ）帰っていった。
アッラーのみ使いは、この折「マディーナはちょうど溶鉱炉のように、不純物を取り除き、良い物を純化する」といわれた。

ザイド・ビン・サービトは伝えている
預言者は「ここここそ実にタイバである。《即ち、マディーナのこと》。
ここでは火が銀の不純物を取り除くように、悪徳が追放される」といわれた。

ジャービル・ビン・サムラは伝えている
アッラーのみ使いは「アッラーがマディーナをターバ（注）と命名された」といわれた。

（注）ターバは善、または、純なることを意味する。
マディーナは別に、タイバ、または、ムッタイヤバとも呼ばれるが、いずれも意味は同じである

マディーナの民に関して

アブー・フライラは伝えている

アブー・カーシム（アッラーのみ使いムハンマドの別称）は「この土地《即ち、マディーナ》の民に害を与えようとする者をアッラーは、丁度水が塩を溶かしてしまうように、罰し滅ぼしてしまうであろう」といわれた。

アブー・フライラは語っている。

アッラーのみ使いは「この土地《即ち、マディーナ》の民に害を与えようとする者を、アッラーは、丁度水で塩を溶かすように、罰し滅ぼしてしまう」といわれた。

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

サアド・ビン・アブー・ワッカースは伝えている

アッラーのみ使いは「マディーナの民に害を与えようとする者があれば、アッラーは、丁度水が塩を溶かすように、罰し滅ぼしてしまうだろう」といわれた。

サアド・ビン・マーリクは、アッラーのみ使いからきいて、前記と同内容の話を伝えているが、それには「奇襲しようとする者、または、害を及ぼそうとする者」という言葉がみられる。

アブー・フライラ及び**サアド**は伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーよ、豊かな収穫物を与え、マディーナの民を祝福し給え！」といわれた。

この後半は前記内容と同様である。

マディーナでの生活に関して

スフヤーン・ビン・アブー・ズハイルは伝えている

アッラーのみ使いは次のようにいわれた。

「シリアが征服されれば、マディーナから人々は家族を連れてラクダで移住して行くことだろう。

マディーナの方がずっとよいことを知ってさえいれば行くことはないだろうに。

イエメンが征服されれば、マディーナから人々は家族と共にラクダで移住して行くことだろう。

マディーナの方がずっとよいことを、知ってさえいれば行くことはないだろうに。

イラクが征服されれば、マディーナから人々は家族を連れてラクダで移住して行くことだろう。

マディーナの方がずっとよいことを知ってさえいれば行くことはないだろうに（注）」

（注）預言者ムハンマドがシリア、イエメン、イラクの征服を予想した言葉である。

ともあれ、預言者はこのなかで人々がマディーナの信仰上の特異性をもっとよく知り、物質欲のためだけにマディーナを離れることのないよう戒めている

スフヤーン・アブー・ズハイルは伝えている。

アッラーのみ使いは、次のようにいわれた。

「イエメンが征服されれば、人々は家族や彼らに従う者たちを連れてラクダに乗り、そこへ移住することだろう。

マディーナの方がずっとよいことを知ってさえいれば行くことはないだろうに。

シリアが征服されれば、人々は家族や彼らに従う者たちを連れてラクダに乗り、そこへ移住することだろう。

マディーナの方がずっとよいことを知ってさえいれば行くことはないだろうに。

イラクが征服されれば、人々は家族や彼らに従う者たちを連れてラクダに乗り、そこへ移住することだろう。

マディーナの方がずっとよいことを知ってさえいれば行くことはないだろうに」

マディーナを去る人々に関して

サイード・ビン・ムサイイブは、アブー・フライラの言葉を次のように伝えている。

アッラーのみ使いは、マディーナについてこういわれた。

「住民たちは、彼らのためにはよい処であるが、マディーナを捨てて去ってしまう。

その結果マディーナは動物や鳥たちの生息地となってしまうであろう」

なお、イマーム・ムスリムは、このハディースの伝承者の一人、アブー・スフヤーンについて、彼は名をアブドッラー・ビン・アブドル・マリクといい、イブン・ジュライジュが十年にわたり孤児だった彼の面倒をみたと伝えている。

アブー・フライラは語っている

アッラーのみ使いは「マディーナの住民は、彼らにとってよい処であるのに、マディーナを見捨てて去ってしまう。

その結果、マディーナは動物や鳥類の生息地となってしまう。

二人の羊飼いがムザイナから、マディーナを目指して、彼らの家畜の面倒をみながらやって来るが、その頃には、ここには荒れ果ててなにもないため、彼らはワダアの山道に着いた時には、がっかりして倒れてしまうことだろう」（注）といわれた。

（注）これらのハディースは、復活の日が間近い時のマディーナの状態を語ったものといわれる。

その頃になると、イスラームへの信仰は弱まり、マディーナは忘れられて鳥獣の生息地となってしまうといわれる

天国の庭園について

アブドッラー・ビン・ザイド・マーズィニーは伝えている

アッラーのみ使いは「私の家と説教壇の間には天国の庭がある」（注）といわれた。

（注）住居が信仰の中心モスクに近いことを意味する

アブドッラー・ビン・ザイド・アンサーリーは語っている

私はアッラーのみ使いが「私の家と説教壇の間には天国の庭がある」といわれるのをきいた。

アブー・フライラは語っている

アッラーのみ使いは「私の家と説教壇の間には天国の庭がある。
私の説教壇は貯水所（ハウド）（注）の上にある」といわれた。

（注）礼拝前のウドゥー（洗浄）用水場。
預言者は復活の日、天国にあるハウド・カウサルで人々を待つため立ち続ける。
ここは、生前彼の説教をきき、その数えに従った者らとの再会の場所であるといわれる

ウフド山について

アブー・フマイドは語っている

私たちはアッラーのみ使いと共に、タブークの遠征に参加した。
私たちがクラーの谷まで帰って来た時、み使いは、「私は先に行く。
私と一緒に行きたい者はそうしなさい。
後からゆっくり来たい者はそうしなさい」といわれた。
私たちはマディーナがみえる処まで進んだ。
この時み使いは「これがターバ《マディーナの別称》です。これがウフド山です。
この山は私たちを愛し、私たちもこの山を愛しています」といわれた。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは「ウフド山は私たちを愛し、また、私たちも愛している山です」といわれた。
アナス・ビン・マーリクによるこのハディースは、別の伝承者経路でも伝えられているが、それには「アッラーのみ使いはウフド山の方をみて、『ウフドは私たちを愛する山であり、私たちも、また、愛している山です』といわれた」と記されている。

マッカとマディーナのモスクでの礼拝について

アブー・フライラは伝えている

預言者はこういわれた。私のマスジド（マディーナの預言者モスク）での礼拝は、マスジド・ハラーム（マッカのカーバモスク）を除いた、他のマスジドでの礼拝より千倍も優っている。

アブー・フライラは語っている

アッラーのみ使いは「私のマスジド（マディーナの預言者モスク）での礼拝は他のマスジドでの千回の礼拝よりも優っている。
ただしマスジド・ハラーム（マッカのカーバモスク）は除かれる」といわれた。

アブー・フライラは語っている

「アッラーのみ使いのマスジド（マディーナの預言者モスク）での礼拝は、マスジド・ハラームを除く、他のマスジドでの千回の礼拝よりも功徳がある。
なぜならば、アッラーのみ使いは最後の預言者であり、彼の最後のマスジドであるからです」
なお、このハディースに関する二人の伝承者、アブー・サラマとアブー・アブドッラーは、こ

う述べている。
私たちは、アブー・フライラがみ使いのいわれたことを話したという点については、疑いは持たなかった。
それ故、彼の存命中このハディースについての証言を彼から得ようとは思わなかった。
しかし、（後になって）私たちは、アブー・フライラがこのハディースをみ使いから直接きいて語ったのかどうかについて、何故証言を得ておかなかったのだろうと仲間同志で話し咎め合った。
私たちが討議していた時、アブドッラー・ビン・イブラーヒーム・ビン・カーリズが座っていたので、このハディースに言及し、これが預言者から直接きいたアブー・フライラによって伝達されたものであるかどうかの証言を得なかったことを彼に話した。
すると、アブドッラー・ビン・イブラーヒームは、「私はアブー・フライラから、アッラーのみ使いが『私は最後の預言者であり、私のマスジドは最後のマスジドである』（注）といわれたというのをきいたことを証言します」といった。

（注）ムハンマドは最後の預言者である故、彼のモスクは預言者のためのモスクとしては最後のものとなる

アブドル・ワッハーブは、ヤヒヤー・ビン・サイードの話を次のように伝えている
私（ヤヒヤー）は、アブー・サーリフに「アブー・フライラが、アッラーのみ使いのモスクでの礼拝の卓越性について話したのをききましたか」とたずねた。
これに対し彼は「いいえ、私はアブー・フライラから直接にはきいていません。
ただ私はアブドッラー・ビン・イブラーヒーム・ビン・カーリズが、アブー・フライラからきいて、み使いが『私のこのモスクでの礼拝は、千回の礼拝よりも優る。
もしくは、マスジド・ハラーム（マッカのカーバモスク）を除く他のモスクでの千回の礼拝に等しい』といわれたと話すのをききました」と答えた。
なお、このハディースはヤヒヤー・ビン・サイードによっても、別の伝承者経路で伝えられている。

イブン・ウマルは伝えている
預言者は「私のこのモスクでの礼拝は、マッカのカーバモスクを除く、他のモスクでの千回の礼拝よりも優っている」といわれた。
前記と同内容のハディースは、**ウバイドッラー**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

イブン・ウマルはアッラーのみ使いが、前記と同内容のことを話すのをきいたと伝えている。

イブン・ウマルは預言者からきいて、別にも前記と同内容のハディースを語っている。

イブン・アッバースは伝えている

或る女性が病気になった。

彼女は「アッラーが私を回復させて下さったら、私は必ずエルサレムのアクサーモスク（バイトル・マクデス）に行き礼拝を行ないます」といった。

それで、病気が直ると、彼女はそこに旅立つ準備を始めた。

そして、預言者の妻のマイムーナの処を訪ね挨拶してからそのことについて話した。

それをきいたマイムーナは「（行くのを止めて、ここに）お座りなさい。

そして（旅行用として）あなたが作った物を食べてしまってから、アッラーのみ使いのモスクで礼拝しなさい（注）。

私はみ使いが『そこでの礼拝は、カーバのモスクを除き、他のモスクでの千回の礼拝よりも優っている』といわれるのをききました」といった。

（注）誓願事項の実行は、状況によって変更可能とされる

三つのモスクに関して

アブー・フライラは預言者からきいてこう伝えている

預言者は「三つのマスジド、即ち、私のこのマスジド（マディーナの預言者モスク）、マスジド・ハラーム（マッカのカーバモスク）、そしてマスジド・アクサー（エルサレムのアクサーモスク）以外への巡拝の旅に出てはならない」といわれた。

このハディースは**ズフリー**によっても伝えられているが、それには「三つのマスジドを巡拝する旅に出なさい」と記されている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは「三つのモスクの巡拝の旅に出掛けなさい。
それらは、カーバのモスク、私のモスク、そしてエリアのモスク（エルサレムのモスク）です」といわれた。

預言者モスクに関して

アブー・サラマ・ビン・アブドル・ラフマーンは伝えている

アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・サイード・フドリーが、たまたま私の側を通った時私は「あなたの父上は"敬虔に基礎を定めて建立されたモスク"（注）に関して、どのように話していましたか」とたずねた。

これに対し彼は「私の父は、次のようにいいました。

『私が訪問した時、アッラーのみ使いは彼の妻の一人の家にいました。

この折、私は"み使い様、二つのモスクのうち、どれが敬虔に基礎を定めて建立されたのですか"と質問しました。

この時、み使いは、一握りの小石を取り、それらを地面に投げてから"それはあなた方のモスク（マディーナの預言者モスク）です"といわれました』」と答えた私（アブー・サラマ）は、この話をきいたあと「私はあなたの父上が、これに関して述べた話を確かにみ使いから直接きいたことを証言します」といった。

（注）「敬虔に基礎を定めて建立されたモスク」という言葉は、クルアーン悔悟の章 108 節にあり、「最初の日から敬虔に基礎を定めて建立されたモスクこそは、あなた方がそこに立つにふさわしい」と記されている

アブー・サイードは前記と同内容のハディースをアッラーのみ使いからきいて伝えている。

クバーウのマスジドに関して

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはクバーウのモスクを或る時は乗物で、或る時は徒歩で訪れになった。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはクバーウのモスクを乗り物または、徒歩で訪問なさった。

そして、ニラカートの礼拝を行なわれた。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはクバーウのモスクへ、時には乗り物で、また、時には徒歩で訪れになった。

イブン・ウマルによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはクバーウのモスクへ乗り物を用いたり、歩いたりして訪問なさっていた。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは常々クバーウのマスジド（モスク）へ乗り物や徒歩でお出掛けになった。

アブドッラー・ビン・ディーナールは伝えている

イブン・ウマルは毎週土曜日にクバーウのモスクへ行った。

そして彼は「私は預言者が毎週土曜日にクバーウのモスクへおいでになるのをみた」と語った。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、しばしばクバーウ（注）を訪れになったが、それは毎週土曜日のことであった。

その折、み使いは乗り物か、または、徒歩でおいでになった。

これに関連し、伝承者の一人イブン・ディーナールは、イブン・ウマルもみ使いと同様のことをしていたと述べている。

なお、このハディースはイブン・ディーナールによっても伝えられているが、それには毎週土曜日という言葉は記されていない。

（注）クバーウ　マディーナ郊外の地名、ここには預言者ムハンマドのマディーナへの最初の到着を記念するモスクがある。
預言者は、これらのハディースが示すように、礼拝や休息のためしばしばここを訪れた

結婚の書

結婚に関して

アルカマは伝えている

私が、ミナーで、アブドッラーと歩いていた時、たまたまウスマーンがやってきて久しぶりにアブドッラーに会った。

ウスマーンは立止り、彼と話し始めた。

その折、ウスマーンは「アブー・アブドル・ラフマーン（アブドッラーの別称）よ、あなたに若い女性を娶らせ過ぎ去った昔の元気を呼び戻してあげたいのですが、いけませんか」といった。

これに対し、アブドッラーは、「あなたにそういわれると、アッラーのみ使いが、『若者たちよ、あなたたちの中で、妻を養っていける者は結婚しなさい。

そうすれば、両目を悪い方にむけることがなくなり、不道義に走るのを抑えられます。

しかし、それが、できない者は、断食をやりなさい。

断食は性欲を抑える手段にもなります』といわれたことを思い出します」といった。

アルカマは伝えている

私がミナーで、アブドッラー・ビン・マスウードと歩いていた時、ウスマーン・ビン・アッファーンがきて、久し振りに彼に会い、こういった。

「ここにきなさい。アブー・アブドル・ラフマーンよ」

ウスマーンは、アブドッラーを私からひき離したが、アブドッラーは、別に秘密にすることはないと思ったらしく、私にむかって「アルカマ、ここに来なさい」といった。

私が、彼らの処に近寄った時、ウスマーンは、アブドッラーに「アブー・アブドル・ラフマーンよ、あなたに、処女を妻合せたいのだが、いけませんか、そうなれば、あなたも、昔を思い出すことでしょうが」といった。

これに対し、アブドッラーは「あなたにそういわれると……」といった。

以下は前記ハディース内容と同じである。

アブドッラー・ビン・マスウードは伝えている

アッラーのみ使いは私たちに「若者たちよ、あなたたちの中で妻を養える者は、結婚しなさい。

そうすれば、あなたたちの目がよくない方にむくのが制され、不道義に走ることもなくなり

ます。

しかし、それができない者は、断食をしなさい。

断食は性欲を抑える手段になります」といわれた。

アブドル・ラフマーン・ビン・ヤズィードは語っている

私と（父方の）叔父のアルカマ及びアスワドは、アブドッラー・ビン・マスウードを訪問した。

私は当時若者だったので、彼は、多分、その若かった私のためであろうが、或るハディースを話してくれた。

アッラーのみ使いの言葉を述べたそのハディースの後半は、ムアーウィヤが伝えた内容と同じである。

なお、アブドッラーは、この時、「私は結婚を遅らせなかった」とも話していた。

アブドル・ラフマーン・ヤズィードはアブドッラーに関連してこう伝えている

私たちは、アブドッラーを訪問したが、当時私は、その中で最も若かった。

このハディースの後半は、前記と同内容であるが、「私は結婚を遅らせなかった」という言葉はみられない。

アナスは伝えている

教友らが預言者の夫人たちに、彼の日常生活に関して質問した。

この折、教友らは、「私は女性と結婚しない」とか、「私は肉は食べない」、更には「私はベッドには寝ない」などとも口々に話していた。

預言者は、アッラーを讃美してから、こういわれた。

「そのようなことをいう人々がいるとは、一体どうしてですか。

私は礼拝をし、ねむりもします。断食もするし、食事も取ります。

勿論、女性とも結婚します。

私のこういうスンナ（慣行）を無視する人は、私とは関係ない人です」

サアド・ビン・アブー・ワッカースは伝えている

アッラーのみ使いは、ウスマーン・ビン・マズウーンが独身生活をつづけ、「もし、預言者が許して下されば、去勢したい」と述べたのを拒否された。

サイード・ビン・ムサイイブは伝えている

私は、サアド・ビン・アブー・ワッカースが、ウスマーン・ビン・マズウーンの独身主義的考えを預言者が拒否されたことやもし預言者がお許しになれば、彼の仲間らは去勢したであろうと話すのをきいた。

サイード・ビン・ムサイイブは伝えている

彼は、サアド・ビン・アブー・ワッカースから、ウスマーン・ビン・マズウーンは、独身生活（注）をする決心をしたが、アッラーのみ使いが、それを禁じたこと、及び、もしも、み使いがお許しになったら、去勢したいと話していたことをきいた。

（注）原語は、タバットル、世事を離れ、敬神行為に専念すること。

ここでは、女性を遠ざけた独身生活者を意味する

性衝動に関して

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは、或る女性をみかけた折、その足で、丁度、皮をなめしていた妻のザイナブの処に行き交接なさった。
そのあと、み使いは、教友らの処に行き、「女性は、いわば、悪魔（シャイターン）が姿を変えて往来しているような存在である故、だれでも他の女性に気をとられた場合には、自分の妻の処に行きなさい。
それによって、よからぬ情念を追い払えます」といわれた。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者は、ある女性をおみかけになった。
このハディースの後半は、表現上多少の異同があるが前記と同内容である。

ジャービルは、預言者の言葉をこう話している

或る女性が、あなた方のだれかを魅惑し、心を迷わせた場合には、自分の妻の処に行き、交合すれば、情念を払うことができるだろう。

一時婚の禁止に関して

カイスは伝えている

アブドッラー・ビン・マスウードはこう語った。

「私たちは、アッラーのみ使いと共に遠征したが、その折、女性はだれも連れて行かなかった。

それで、私たちは（冗談に）『去勢すべきではなかったのですか』といった。

み使いは、それを否定なさったが、そのあと、女性に衣服を与えることを条件に、特定期間を定めた一時婚（ムトア）の契約をかわすことをお認めになった。

この折、アブドッラーはクルアーンの聖句を誦んだ。

「あなた方、信仰する者よ、アッラーがあなた方に許される良いものを禁じてはならない。また、法を越えてはならない。アッラーは、法を越える者を御愛でになられない」（第5章87節）

ジャービルは、前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えているが、それには、クルアーンの聖句を誦んだ人物が、アブドッラーであるとは記されていない。

前記と同内容のハディースは、**イスマーイール・ビン・アブー・ハーリド**によっても別の伝承者経路で伝えられている。
ただし、その中には「私たちは若かった。それで、『アッラーのみ使い様、去勢すべきではなかったのですか』といった」と記されているが、「遠征した」という言葉はない。

ジャービル・ビン・アブドッラーと、**サラマ・ビン・アクワウ**は語っている

私たちの処にアッラーのみ使いの伝令がやってきて「み使いは、あなた方の為になること、即ち、女性と一時婚（ムトア）の契約を結ぶことをお許しになった」といった。

サラマ・ビン・アクワウと**ジャービル・ビン・アブドッラー**は伝えている

アッラーのみ使いは、私たちの処においでになり、私たちが一時婚の契約を結ぶことをお許しになった。

イブン・ジュライジュは伝えている

アターが、ジャービル・ビン・アブドッラーがウムラのためにやってきたと伝えたので、私たちは共々彼の宿泊所を訪れた。

丁度人々が集まり、彼に様々なことを質問していた。

そして一時婚についても質問が為された。

これに関して、ジャービルは「確かに、この一時婚は、アッラーのみ使いの時代や、アブー・バクル、及び、ウマルのカリフ時代に私たちにとって役に立つ制度でした」と語った。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私たちは、アッラーのみ使いの在世当時やカリフ・アブー・バクルの時代には、ひとつかみのなつめやしの実や麦粉を贈り物として、一時婚の契約を結びました。

しかしカリフ・ウマルは、アムル・ビン・フライスの一件を契機に、この制度を禁じました（注）。

（注）アムル・ビン・フライスは、クーファで一時婚を結び、相手の女性を妊娠させた。

この折、アムルから相談を受けたウマルは、この慣行が姦通行為にも類似するとして、全面的に禁止するに至った

アブー・ナドラはこう伝えている

私が、ジャービル・ビン・アブドッラーと一緒にいた時、或る男が彼の処に来て、「イブン・アッバースとイブン・ズバイルでは、二つのムトア《ハッジのタマットゥ方式及び女性との一時婚を意味する》についての意見が対立しています」といった。

これに対し、ジャービルは、「私たちは、アッラーのみ使いの在世当時には、この両方共行ないましたが、カリフ・ウマルによって禁じられました。

それ以後、私たちは、再び行なうことはなかったのです」と語った。

イヤース・ビン・サラマは、彼の父からきいて、こう伝えている

アッラーのみ使いは、アウタースの年（注）に、三晩だけの一時婚の契約を結ぶことをお許しになったことがあるが、後にこれを禁じられた。

（注）アウタースの年フナインの戦闘が行なわれたイスラーム暦 8 年（629 年）を指す

サブラ・ジュハンニーは伝えている

アッラーのみ使いは、私たちに一時婚を許された。

それ故、私は或る男と一緒に出かけて、アーミル部族の一女性に会った。

彼女は、若くて首の長い雌ラクダのような女性だった。

私たちは、彼女に一時婚の契約をしたいと申し込んだが、この時、彼女は「どんな増物を私にくれるのか」といった。

私は「外套を贈ります」と答え、私の同僚も同じく「外套を贈ります」といった。

同僚の外套は私のより上等だったが、私は彼よりも若かった。

私の同僚の外套は彼女の関心をひいたようであったが、彼女が私をみた時、私が思うに、

彼女はその外套以上に私に対し興味を持ったようであった。
それで彼女は、私に対し「あなたとあなたの外套で私は満足します」といった。
私は彼女の処に三晩とどまった。
み使いはその後、「一時婚を契約した者は、その契約期限後には相手の女性を自由の身にすべきである」といわれた。

ラビィーウ・ビン・サブラは伝えている

彼の父（サブラ）は、マッカ征服の折、アッラーのみ使いに従って遠征した。
これに関し、サブラは次のようにいった。
「私たちは 15 日間、マッカに滞在した。
この折、み使いは、私たちに女性との一時婚をお許しになった。
それで、私と私の部族の或る男は共々出かけた。
私はやや美男に近いタイプであったが、その男は醜いといってもよい顔付きをしていた。
私たちは、また、外套を持っていたが、私のは古くすり切れていた。
一方、私の同伴者の外套は極めて新しかった。
私たちが、マッカの下手、または、上手に着いた時、若くて形のよい長首の雌ラクダにも似た年若い女性と行き合った。
それで、私たちは『私たちの一人が、あなたと一時婚の契約をしたいのですが』と話した。
彼女が『なにを贈物にくれるのですか』ときいたので、私たちは、それぞれ外套をひろげてみせた。
彼女は、二人の方を観察しはじめた。
私の同伴者はこの時、彼女の方をみながら、『彼の外套はすりきれているが私のは極めて新しい』といった。
しかし彼女は、二度か三度繰り返して『この古い外套を受取っても構わない』といった。
そんな次第で、私は、彼女と一時婚の契約を結んだ。
そして、私は、み使いが一時婚の禁止を宣言するまでこれを解消しなかった。

ラビィーウ・ビン・サブラ・ジュハンニーは彼の父の言葉をこう語っている

私たちは、マッカ征服の年、み使いに従って遠征した。
以下は、前記ハディースと同内容である。

ラビィーウ・ビン・サブラ・ジュハンニーは彼の父の話をこう伝えている

彼（サブラ）がアッラーのみ使いと一緒の折、み使いは「人々よ、私は、あなた方に女性と一時婚の契約を結ぶことを許した。
しかし、今や、アッラーは、審判の日までそれを禁じられた。

それ故、この形式によって女性と結婚した者は、その女性と別れて自由にしてやりなさい。
あなたたちが彼女らに贈った物を取り返してはなりません」といわれた。

前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブドル・マリク・ビン・ラビィーウ・ビン・サブラ・ジュハンニーは、彼の父が祖父（サブラ）からきいた話を次のように伝えている

アッラーのみ使いは、勝利の年、マッカに入った折、私たちに一時婚をお許しになった。
それで私たちは、この制度が禁じられるまでそれぞれの女性の処で過ごした。

サブラ・ビン・マアバドは伝えている

預言者は、マッカでの勝利の年に、教友らに女性との一時婚をお許しになった。
それ故、私とスライム族出身の友人は外出し、長い首を持った若い雌ラクダのようなアーミル部族の一女性に会った。
私たちは、彼女に、一時婚の契約を結んでくれるよう申し込み、彼女に私たちの外套を贈り物としてさし出した。
彼女は、私たちを観察しだし、私の方が友人より美男ではあるが、外套は友人のものの方がずっと美しいと思ったようであった。
彼女はしばらく考えたが、友人よりも、結局、私を選んだ。
それで、私は、三晩の間、彼女と一緒に過ごした。
このあと、アッラーのみ使いは、私たちに、このような形式で契約した女性と別れるようお命じになった。

ラビィーウ・ビン・サブラは、彼の父からきいて、こう伝えている

預言者は、一時婚を禁じた。

ラビィーウ・ビン・サブラは、彼の父からきいて、こう伝えている

アッラーのみ使いは、マッカ征服の日、女性と一時婚の契約を結ぶことを禁じた。
なお、次のハディースもラビィーウ・ビン・サブラによって伝えられている。
アッラーのみ使いは、マッカ征服の頃に、女性との一時婚を禁じた。
彼の父は、二着の赤い外套を贈り物として一時婚の契約を結んでいた。

ウルワ・ビン・ズバイルは伝えている

マッカで或る時、アブドッラー・ビン・ズバイルは、立ち上がって次のようにいった。
「アッラーは、或る人たちの心を、丁度、盲人が視力を奪われたように、盲目になさった。
彼らは、一時婚に賛同し、それに対する意見を述べたてています。」

こういって、彼は、或る人物の名をほのめかした。
この時、その人物は彼をよんで、「あなたは、野暮で、センスのない人だ。
私の生命にかけていうが、一時婚は、あの敬虔な指導者（預言者）が存命の頃、行なわれていたものです」といった。
これに対し、彼は、「それならば、あなただけおやりなさい。
アッラーに誓うが、もしあなたがそれを行なったなら、私は、あなたの処にある石を使って、あなたにその石を投げつけるでありましょう」といった。
この話に関連し、イブン・シハーブは、こう語っている。
ハーリド・ビン・ムハージル・ビン・サイフッラーは、私に次のようにいった。
「私が、或る人物と一緒に座っていた時、一人の男がきて、彼に一時婚についての意見をうかがいたいといった。
その人物は、この男に、一時婚（ムトア）に賛成であると語ったが、この時、イブン・アブー・アムラフ・アンサーリーは
『それは違います。
確かに、イスラームの初期、一時婚は許されたが、それも屍肉や血や豚肉を食う場合のように、必要止むを得なかった人のために許されたにすぎません。
アッラーは、その後、彼の命令を強化なさり、全面的に禁止されたのです』といった」
イブン・シハーブは、また、こうも伝えている。
ラビィーウは、彼の父サブラが「私は、アッラーのみ使い御存命の頃、アーミル族の一女性に、二枚の上衣を贈って一時婚の契約をした。
その後、み使いは一時婚を禁じられた」と語ったと私に話してくれた。
イブン・シハーブは、また、「ラビィーウ・ビン・サブラがこの話を、ウマル・ビン・アブドル・アズィーズに語っていた時、私もそこに座っていた」と述べている。

ラビィーウ・ビン・サブラ・ジュハンニーは、彼の父からきいて伝えている
アッラーのみ使いは、一時婚を禁止し、「注意しなさい！
この日以後、審判の日まで、このことは禁止されます。
贈り物として、女性になにかを与えた者は、それを取り返してはなりません」といわれた。

アリー・ビン・アブー・ターリブは伝えている
アッラーのみ使いは、ハイバルでユダヤ人らと戦った日、女性と一時婚の契約を結ぶこと、及び、家畜用ろばの肉を食べることを禁じた。

マーリクは、前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えているが、それには、アリー・ビン・アブー・ターリブが或る男に対し、「あなたは、過ちを犯している。
アッラーのみ使いは、一時婚を禁止なさった」といった言葉も記されている。

ムハンマド・ビン・アリーは彼の父アリーよりきいて、次のように語っている

預言者は、ハイバルの日に、一時婚を契約すること、及び、家畜用ろばの肉を食べることを永久に禁じた。

ムハンマドは彼の父アリーよりきいて次のように伝えている

彼（アリー）は、イブン・アッバースが、女性との一時婚の契約に賛同していることをきいた。
それで彼は、「イブン・アッバースよ、軽卒なことをいってはならない。
アッラーのみ使いは、ハイバルの日、一時婚と家畜用ろば肉を食することを永久に禁止なさったのだ」といった。

ムハンマド・ビン・アリーは伝えている

彼（ムハンマド）は彼の父アリー・ビン・アブー・ターリブがイブン・アッバースに次のように話すのをきいた。
「アッラーのみ使いは、ハイバルの日に、一時婚を契約すること、及び、家畜用ろば肉を食べることを、永久に禁止なさった」

結婚の障碍に関して

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いはこういわれた。

「男は、女とその父方の姉妹、もしくは、女とその母方の姉妹と同時に結婚してはならない」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、次の四種の場合の女性、即ち、一人の女性とその女性の父の姉妹を同時に妻にすること、及び、一人の女性とその母の姉妹を同時に妻とすることを禁じた。

アブー・フライラは伝えている

私は、アッラーのみ使いが次のようにいわれるのをきいた。

或る女の父方の姉妹とその女の兄弟の娘とを同時に妻にすることはできない。

また、或る女の母方の姉妹とその女の姉妹の娘とを同時に妻にすることも禁じられる。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、男が（一人の）女とその女の父方の姉妹、または女とその女の母方の姉妹を同時に妻とすることを禁じた。

イブン・シハーブは、これに関連し、「それ故、私たちは、妻の父の父方の叔母、及び、妻の父の母方の叔母に関しても同様であるとみなした。」と述べている。

アブー・フライラは、アッラーのみ使いの言葉をこう伝えている

（一人の）女性、及び、彼女の父の姉妹、または、彼女の母の姉妹を、同時に妻としてはならない。

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている

アブー・フライラは伝えている

預言者は次のようにいわれた。

自分の兄弟がすでに婚約した女性に婚約を申し込んでならない。

自分の兄弟がすでに取引きしている事に取引きを申し込んではならない。

一人の女とその父方の姉妹、または、母方の姉妹を同時に妻としてはならない。

女は義理の姉妹に、離婚を奨めて彼女の持物を奪おうとしてはならない。

むしろ、それよりも、結婚すべきである。
そうすれば、アッラーがおきめになった物を持つことができるからである。

アブー・フライラはこう語っている
アッラーのみ使いは、一人の女とその父方の姉妹、もしくは、母方の姉妹と同時に結婚すること、持物を奪うことを目的に（義理の）姉妹の離婚を奨めることなどを禁止した。
アッラーは、また、彼女の扶養者でもあられる。

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは、或る女性及びその父の姉妹、または、或る女性及びその母の姉妹と同時に結婚することを禁止なさった。

前記と同内容のハディースは、**アムル・ビン・ディーナール**によっても伝えられている（注）。
（注）ムスリムの婚姻に関する基本条項は大要次の通りである
（a）近親婚は禁止される。
ムスリムは直系の女の親族（卑属及び尊属）との婚姻を禁止されている。
即ち、その姉妹、その兄弟姉妹の女の卑属及びその父方と母方の伯叔母及び従伯叔母などとは婚姻できない
（b）姻戚関係（婚姻した者と婚姻の結果による、それぞれの配偶者側の男または女の親族）は婚姻の障碍となる
（c）ムスリムは義理の女子親族（卑属及び尊属）と婚姻することはできない。
たとえば、義母、義理の娘、異父母の娘などまた二人の姉妹、一人の叔母と一人の姪とを同時に妻として持つこともできない
（d）乳親の関係もまた婚姻の障碍となる
（遠峯四郎著「イスラム法」に拠る）

ムフリム（禁忌者）の婚姻に関して

ヌバイフ・ビン・ワフブは伝えている

ウマル・ビン・ウバイドッラーは、自分の息子タルハ・ビン・ウマルをシャイバ・ビン・ジュバイルの娘と結婚させようとした。

それで彼は、アバーン・ビン・ウスマーンに結婚式に出席していただきたいと使いを送って頼んだ。

アバーンは、ハッジの責任者（アミール・ハッジ）であった。

この折、アバーンは「私はウスマーン・ビン・アッファーンから、アッラーのみ使いが、『ムフリム（イフラームをまとった者禁忌者）状態の者は、結婚してはならぬし、また、他人の結婚を斡旋してもならない、更に、結婚の申し込みをしてもならない』といわれたときいている」と話して出席を断った。

ヌバイフ・ビン・ワフブは伝えている

ウマル・ビン・ウバイドッラー・ビン・マアマルは私をアバーン・ビン・ウスマーンの処に使いとして送ったが、それは、シャイバ・ビン・ウスマーンの娘と彼の息子が婚約していたからであった。

アバーン・ビン・ウスマーンは、当時、巡礼の時期でもあり多忙であった。

アバーンはこの折「私には、彼が（全く無知な）砂漠のベドウィンではないかとも思えるほどです。

なぜなら、ムフリム状態の者が結婚できないことやだれかを結婚させることも許されないことは、だれでも知っていることだからです。

このことをみ使いからきいて私たちに語ってくれたのは、ウスマーン・ビン・アッファーンでした」と話した。

ウスマーン・ビン・アッファーンは伝えている

アッラーのみ使いは、こういわれた。

「ムフリムは結婚してはならない。

また、他人の結婚の世話をしてはならない。

更にまた、結婚の申し込みをすることも許されない」

ウスマーン・ビン・アッファーンは、アッラーの預言者から直接きいて次のように伝えている

預言者は「ムフリムは、（その状態のままで）結婚してはならない。

また、結婚の申し込みをしてはならない」といわれた。

ヌバイフ・ビン・ワフブは伝えている

ウマル・ビン・ウバイドッラー・ビン・マアマルは巡礼の間に、彼の息子タルハを、シャイバ・ビン・ジュバイルの娘と結婚させようとした。

アバーン・ビン・ウスマーンは、当時、巡礼の責任者（アミール・ハッジ）であった。

それで、ウマル・ビン・ウバイドッラーは、アバーンの処に使いを出して、「私は息子のタルハ・ビン・ウマルを結婚させたいと思います。

それ故、あなたが、この結婚式に出席して下さるよう心より願っています」と伝えさせた。

これに対し、アバーンは、「私は、あなたを、愚かなイラク人かとも思っています。

私は、ウスマーン・ビン・アッファーンから、アッラーのみ使いが、『ムフリム状態の者は結婚してはならない』といわれたときいています。」と返辞した。

イブン・アッバースは伝えている

預言者は、イフラームを着た状態で、マイムーナと結婚なさった。

イブン・ヌマイルは、これに関連して次のように述べている。

「私が、ズフリーにこの話を伝えた時、彼は、『ヤズィード・ビン・アサンムは、預言者が、マイムーナと結婚なさったのは、ムフリム状態ではなかった時であったと私に話してくれた』といった」

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは、彼がムフリム状態の時、マイムーナと結婚なさった（注）。

（注）イブン・アッバースの伝承内容については、預言者とマイムーナの結婚当時、彼がまだ、若少時だったこともあり、記憶違いによるものとされる

ヤズィード・ビン・アサンムは伝えている

ハーリスの娘、マイムーナが私に話してくれたが、アッラーのみ使いは、彼女と結婚した時、イフラーム状態ではなかった。

マイムーナは、私の母の姉妹であったし、また、イブン・アッバースの母の姉妹でもあった。

兄弟が同じ女性と結婚することに関して

イブン・ウマルは伝えている

預言者は、次のようにいわれた。
だれも、商取引きで他人を出しぬいてはならない。
だれかが、すでに申し込んだ女性に対して、結婚を申し込んではならない。

イブン・ウマルは伝えている

預言者は、次のようにいわれた。
だれでもその兄弟の商取引きが終らない中に同じ交渉を始めてはならない。
また、彼の兄弟がすでに結婚の申し込みをしている同じ女性に対し、兄弟の同意がないかぎり、結婚を申し込んではならない。

前記と同内容のハディースは、**ナーフィウ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

預言者は、町の住民が、田舎の人々の作った品物を売ること、または、高値をつけて売ることを禁じ、更にまた、兄弟のだれかが、すでに申し込みをした同じ女性に対し、結婚を申し込むこと、兄弟のだれかがすでに行なっているのと同じ商取引きを為すこと、そして、更に、女性が自分の義理の姉妹に対し、その所有物を取ろうとして、離婚するよう奨めることなどを禁じた。
なお、アムルは、これに「人はだれも、自分の兄弟の取引きの邪魔をしてはならない」という預言者の言葉を加えている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、次のようにいわれた。
「人をだまして、高い値をつけて、品物を売ってはならない。
兄弟がすでに行なっている取引きに立入ってはならない。
町の住民が村人に代って彼らの品物を販売してはならない。
兄弟がすでに申し込みをしている女性に結婚を申し込んではならない。
女は、夫を同じくする他の女を、彼女の持物を取ろうとして、離婚させようとしてはならない」

前記と同内容のハディースは、**ズフリー**によっても別の伝承者経路で伝えられているが、それには用語上多少の異同がみられる。

アブー・フライラは語っている

アッラーのみ使いは、「ムスリムは、彼の兄弟に対抗して取引きをしてはならない。

また、兄弟がすでに申し込んでいる女性に、結婚を申し込んではならない。」といわれた。

アブー・フライラの語った前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブドル・ラフマーン・ビン・シュマーサは伝えている

ウクバ・ビン・アーミルは、説教壇（ミンバル）でこう語った。

アッラーのみ使いは、「信仰者は、互いに兄弟である。

それ故、信仰者には、兄弟を出しぬいて、品物を売ることは許されない。

また、兄弟がすでに申し込み、まだ断念もしていないのに、同じ女性に対し、結婚を申し込んではならない」といわれた。

シガール婚について

イブン・ウマルは語っている

アッラーのみ使いは、シガール婚を禁止なさった。

シガール婚とは、相手の娘を貰う条件で、自分の娘を相手と結婚させることを意味する。

この場合、双方共、婚資（サダーカ）は払わない。

前記と同内容のハディースは、**アブドッラー・ビン・ウマル**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、シガール婚を禁止なさった。

イブン・ウマルは語っている

アッラーのみ使いは「シガール婚は、イスラームには存在しない」といわれた。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、シガール婚を禁止なさった。

イブン・ヌマイルは、これに、「シガール婚とは、男が他の男に『あなたの娘の支配権を私に下さい。

私は（お返しに）私の娘をあなたと結婚させます。

もしくは、あなたの姉妹と結婚させて下さい。

私の姉妹をあなたと結婚させます』ということである」と付言している。

前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられるが、それには、イブン・ヌマイルの言葉は記されていない。

ジャービル・ビン・アブドッラーは、こう語っている

アッラーのみ使いは、シガール婚を禁止なさった。

結婚の条件について

ウクバ・ビン・アーミルは伝えている

アッラーのみ使いは、「結婚成立上最も重要な条件は、性行為を正当なものとさせることです」といわれた。

結婚承諾の表示に関して

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、「夫をもたない女性(アインム)(注 1)の場合、当人との相談なくしては結婚させられない。

処女の場合、当人の同意なくしては結婚させられない」といわれた。

人々が、「み使い様、処女の場合、同意の表示には、どうすればよいのですか」とたずねると、み使いは、「沈黙することです」といわれた(注 2)。

(注 1)アインム　夫を持たない女性、寡婦または離婚した女性がこれに含まれる

(注 2)結婚の契約は証人の前で取り交わされることになっている。

両者の合意は、イジャーブ(宣言または肯定)、クブール(承諾または同意)という用語で表わされる

前記と同内容のハディースは、別にも五種の伝承者経路で伝えられている。

アーイシャは語っている

私は、アッラーのみ使いに、後見人によって結婚の取りきめが行われる処女の場合、事前に、彼女に相談する必要があるかどうかについて質問した。

これに対し、み使いは、「そうです。彼女は相談を受けるべきです」といわれた。

私は、この折、「彼女は、はずかしがるかも知れません」といったが、み使いは、これに対しては「彼女の沈黙は同意を示します」といわれた。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは、こういわれた。

「夫のない女性の場合、後見人よりも彼女自身の意志が尊重される。

処女の場合、彼女の同意が確認されるべきで、その同意は沈黙することで示される」といわれた。

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは、「一度結婚したことのある女性(サイイブ)(注)については、後見人よりも本人の意志がより尊重される。

処女の場合も、諾否を問われるべきで、彼女の沈黙は同意を意味する」といわれた。

(注)サイイブ　以前結婚したが、現在は夫を持たない女性を指す

イブン・アッバースの別伝承では次のように伝えられている

以前結婚したことのある女性（サイイブ）の場合は、後見人より、本人の意志が尊重される。

処女の場合は、その父親は彼女の承諾を求めねばならない。

彼女の承諾の意志は、沈黙することで示される。

なお、このことを彼は、折々、「処女の沈黙は肯定の意志表示である」という表現で語っている。

アーイシャの結婚に関して

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、私が六歳の時、私と結婚なさった。
そして、私は九歳の時、み使いの家に入ることになった。
私たちがマディーナに移った頃、私は一ヵ月程熱病で苦しんだが、その時には髪の毛は耳たぶの処までのびた。
私の母ウンム・ルーマーンが私を呼びにきた時、私は友達とぶらんこに乗って遊んでいた。
彼女が大声で呼ぶので私は彼女の処に行ったが、彼女がなんのために私を呼んだのかわからなかった。
ともあれ彼女は私の手をとって入り口の方に連れていった。
私は胸の動悸が収まるまでハーハー息をついでいた。
彼女は私を家の中に連れて入ったが、そこには、アンサール《マディーナに元から住んでいたムスリム》の女性たちが集まっていた。
そして、その時、彼女らは、みんな私を祝福し、幸運を祈り、「あなたに善いことがあるように」といってくれた。
母は私を彼女らに預けた。
彼女らは私の顔を洗いきれいにしてくれたが、私は少しも脅えたりはしなかった。
アッラーのみ使いが、朝、そこにおいでになり、私はみ使いに託されることになった。

アーイシャは語っている

預言者が私と結婚なさった時、私は六歳でした。
私は九歳の時彼の家に入ることになりました。

アーイシャは伝えている

預言者は彼女が七歳の時彼女と結婚なさった。
彼女が九歳の時、花嫁として預言者の家に連れて行かれたが、その時彼女はおもちゃを持って行った。
預言者が死去なさった時、彼女は 18 歳であった。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いが彼女と結婚した時、彼女は 6 歳の少女でした。
また、み使いが彼女を家に迎え入れた時、彼女は 9 歳の少女でした。
そして（更に）み使いが死去した時、彼女は 18 歳でした。

シャッワール月の結婚に関して

アーイシャは語っている

アッラーのみ使いはシャッワール月に私と結婚の契約を結ばれ、シャッワール月に私を花嫁として（み使いの）家に連れて行かれた。
（み使いの）妻たちの中で他にだれが私ほどみ使いに愛された者がいたでありましょう。
なお、伝承者によると、アーイシャは、彼女の家族の女たちがシャッワール月に結婚することを望んだといわれる。

前記と同内容のハディースは、**スフヤーン**によっても別の伝承者経路で伝えられるが、それには妻として預言者の家に入ることになった頃のアーイシャの様子についての記述はみられない。

結婚前、許されることに関して

アブー・フライラは伝えている

私がアッラーのみ使いのお伴をしていた時、或る男がきて、み使いに「アンサールの女性と結婚の契約をしました」といった。

み使いはその時、彼に「彼女をみたのか」とおたずねになり、彼が「いいえ」と答えると、「行って彼女をみてきなさい。アンサールたちの目にはおかしいところがあるようだ」（注）といわれた。

（注）アンサールの女たちには目に疾患をもつ者か多かったといわれる

アブー・フライラは伝えている

残る男が預言者の処にきて、「私はアンサールの女性と婚約しました」といった。

預言者は「アンサールには目に疾患を持つ者が多いが、あなたは彼女をちょっとでもみましたか」といわれた。

彼が「はい、みました」と答えると、み使いは「いくら婚資を出したのですか」といわれた。

彼はこれに対し「4 ウーキヤ《約 1.5 キロ》ほどです」といった。

すると預言者は「4 ウーキヤも払ったのですか。

あなたはこの山の近くで銀でも掘り当てたのですか《どうしてそれ程高い婚資を払ったのですかの意》私たちには、あなたに祝品としてあげる物はありませんが、あなたを今度の遠征に派遣することができるかもしれないので、その折、戦利品を手に入れる機会があるでしょう」といわれた。

預言者はその男をアブス族に対する遠征に参加させた。

婚資（サダーカ）に関して

サフル・ビン・サアド・サーイディーは伝えている

或る女性がアッラーのみ使いの処にきてこういった。

「み使い様、あなたに私のことをお任せしたいと思ってここにきました《あなたの判断で、私の結婚を誰かと契約していただきたいの意》（注 1）」

この言葉をきかれたみ使いは、彼女を頭の先から足元までご覧になった後、うつむかれた。

その女性は、み使いがなにもいわれないのでその場所に座り込んだが、この時、教友の一人が立ち上って、「み使い様、もしあなたが必要ないなら、彼女を私と妻せて下さい」といった。

み使いはこれに対し、「なにか彼女にあたえる物を持っていますか」といわれた。

彼が「いいえ、なにもありません」と答えると、み使いは「家族の処に行き、なにか捜してきなさい」といわれた。

それで彼は家に戻って行ったが、またやってきて、「なにもありませんでした」といった。

み使いはこれに対し、「鉄製の指輪でもよいから捜してきなさい」といわれた。

それで彼はまた家に戻ったが、しばらくしてから再びやってきて

「アッラーに誓って、鉄製の指輪もなく、あるものはこの私の腰巻き（イザール）だけです。

（サフルは、この時彼は上衣を着ていなかったと伝えている）

私はこの腰巻きの半分を彼女に婚資として贈ります」といった。

み使いはこれに対し、「あなたの腰巻きがなんの役に立ちますか。

もし、あなたがそれを着たなら、彼女は使うことができなくなり、もし、彼女がそれを着たなら、あなたには着る物がなくなりはしませんか」といった。

彼はそこにしばらく座り込んで、ひどく失望していたようであったが、立ち上がりしかたなく立ち去ろうとした。

その時み使いは、彼を呼び止めるようお命じになり、彼がきた時、「あなたはクルアーンのどこかの章を暗記していますか」といわれた。

彼が「私はしかじかの章を覚えています」と答えると、み使いは「あなたはそれを今暗唱できますか」とおたずねになった。

彼が「できます」と答えると、み使いは彼に、「行きなさい。私はあなたの覚えているクルアーンの章句を婚資としてあなたから受けたことにして、あなたが彼女と結婚することを許します」といわれた（注 2）。

（注 1）クルアーンには、これに関連し、「女の信者で、その身を預言者に捧げたという者で、もし預言者がこれと結婚を欲するならば許される。これはあなただけの特例で、他の信者たちには許されない」（部族連合章 50 節）という啓示がみえる。

預言者には、婚資なしで女性と結婚できる特権があたえられていることを示している。
預言者はムハンマド、妻の一人マイムーナとの結婚の際、婚資を払わなかったといわれる

（注 2）クルアーンの章句を教えることが婚資（サダーカ、または、マハル）の一種とみなされるのは、このハディースを典拠としてのことである。
ただし、ハナフィー派では、クルアーン章句を教えることは宗教的義務で、婚資とするのは、このハディースのような特別の場合を除き、好ましいことではないとしている

サフル・ビン・サアドによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられる。
なお、伝承者の一人**ザーイダ**は、この折、預言者は、「行きなさい。私は、彼女をあなたと結婚させた。彼女に、クルアーンの章句を幾つか教えなさい」といわれたと記している。

アブー・サラマ・ビン・アブドル・ラフマーンは伝えている
私は預言者の妻、アーイシャに「アッラーのみ使いの婚資（サダーカ）はどれ程だったのですか」ときいた。
彼女は「12 ウーキヤと 1 ナッシュでした」と答え、そして「ナッシュの意味を知っていますか」といった。
私が「いいえ」と答えると彼女は、「ウーキヤの半分で、500 ディルハムに相当します」といった。
これが、み使いが妻たちのために支払った婚資の額であった。

アナス・ビン・マーリクは伝えている
預言者は、アブドル・ラフマーン・ビン・アウフの衣服に、黄色い痕跡（注 1）がついているのをみ、「それはなにか」とおたずねになった。
アナスは、この時、「アッラーのみ使い様、私は、なつめやしの実の核（ナワート）ほどの重さ（注 2）の金を婚資として贈り、或る女性と結婚したのです」といった。
み使いは「アッラーの祝福があるように！
たとえ、羊一匹であっても屠殺して、結婚祝をしなさい」といわれた。

（注 1）黄色い痕跡は、サフラン系統の香料をつけたためであろう

（注 2）なつめやしの実の核の重さは、約 5 ディルハム相当に換算される

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アブドル・ラフマーンは、アッラーのみ使い在世の頃、なつめやしの核（ナワート）ほどの重さの金を婚資として贈り、結婚した。

み使いは「羊一頭でも供して、祝宴を開きなさい」といわれた。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アブドル・ラフマーン・ビン・アウフは、なつめやしの核（ナワート）ひとつほどの重さの金を婚資として贈り、或る女性と結婚した。

アッラーのみ使いは、彼に、「たとえ、羊一頭であろうと、屠殺して結婚披露宴をしなさい」といわれた。

前記のハディースは、**フマイド**によっても、別の伝承者経路で伝えられている。

アブドル・ラフマーン・ビン・アウフは伝えている

アッラーのみ使いは、結婚して幸福そうな様子の私をごらんになった。

その時、私は、「アンサールの或る女性と結婚しました」と話した。

この折、み使いが、「幾ら婚資を出したのか」といわれたので、私は、「なつめやしの核（ナワート）ほどの重さの金を婚資として払いました」と答えた。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アブドル・ラフマーンは、なつめやしの実の核（ナワート）一個ほどの重さの金を婚資として払い、或る女性と結婚した。

このハディースは、シュウバによっても、別の伝承者経路で伝えられるが、それには、用語上多少の異同がみられる。

奴隷女の解放に関して

アナスは伝えている

アッラーのみ使いが、ハイバル遠征に出発した日、私たちは、明方早く、朝の礼拝を行なった。

アッラーの預言者はラクダに乗り、私とアブー・タルハもこれに続いた。

私は、アブー・タルハのラクダの後部に座っていたが、預言者が、ハイバルへの道筋を進んで行かれた折には、道幅が、あまりにせまかったため、私の膝が、預言者の足にうっかり触れてしまった。

また、預言者の腰巻き（イザール）の一部が、ずり落ち、白い足がみえたこともあった。

み使いは、住居地域に入ると「アッラーフ、アクバル！（アッラーは偉大なり！）ハイバルは滅んだ」と叫んだあとクルアーンの聖句、**「実際に、それが人々の真只中に下ると、それまで警告を受けているだけに、（彼らにとっては）寝覚めの悪い朝となろう」**（第 37 章 177 節）を三度、繰り返してお唱えになった。

そのうち、人々は、仕事のため、それぞれの家から出てきた。

そして「アッラーに誓って、ムハンマドがやってきた」と口々にいい合った。

この時、（彼らにむかって）アブドル・アズィーズや教友らの何人かの者が「ムハンマドとその軍隊がやってきたのだ！」と告げた。

私たちは（ともあれ）軍力で、ハイバルを占領し、大勢捕虜にした。

この折のことであるが、ディフヤがやってきて、「アッラーのみ使い様、捕虜の中から、女を一人、私にお与え下さい」といったので、み使いはそれに対し、「行って、どの女でも選びなさい」といわれた。

それで、彼は、フヤッイーの娘サフィーヤを選んだのであるが、その時、アッラーの預言者の処に一人の男がきて、「アッラーの預言者様、あなたは、クライザ族及びナディール族の部族長フヤッイーの娘サワィーヤをディフヤに与えなさったが彼女は、あなたにこそふさわしい女性です」といった。

その言葉をきいたアッラーの預言者は、「ディフヤを彼女と一緒にここへ呼びなさい」といわれ、ディフヤが、彼女をつれてきた時、しばらく彼女をごらんになってから、ディフヤに「捕虜の中から、他のどの女でも選び直すように」といわれた。

アッラーの預言者は、彼女を解放してから、結婚なさった（注）。

この折サービトは、アブー・ハムザにむかい、「アブー・ハムザよ、預言者は、どれ程、婚資（サダーカ）を彼女に支払ったのか」ときいたが、アブー・ハムザは、これに対し、預言者は彼女を自由の身にしてやり、それから、結婚なさったと答えただけであった。

ウンム・スライムは、道中、彼女を着飾らせ、そのあと、夜、彼女を預言者のもとに送った。

それで、預言者は、翌朝、花婿として（人々の前に）出てこられ、「どんな食物でも持っている者は、それを持参するように」といわれた。

その時一枚の布が地面に広げられ、或る者は、チーズを、別の者はなつめやしの実を、更に別の者は、上等なバターを持って集まりその上に置いた。
人々は、それらを使ってハイス《なつめやしの実やチーズその他をまぜて作る料理》を作った。
それがアッラーのみ使いの結婚祝宴であった。

（注）預言者は、サフィーヤとの結婚を通じ、それまで対立関係にあったクライザ及びナディールの両部族と友好関係を結ぶことになった

アナスによる前記のハディースは、他にもいくつかの伝承者経路で伝えられている。
なお、それには「預言者は、サフィーヤを解放なさった。
そして、その解放が彼女の結婚への婚資（サダーカ）とみなされた」と記されている。
また、ムアーザが彼の父からきいて伝えたハディースにも「預言者はサフィーヤと結婚なさったが、彼女への婚資は、彼女を解放することであった」と記されている。

アブー・ムーサーは伝えている
アッラーのみ使いは、奴隷女を解放し、その後、彼女と結婚した者には、二つの報賞があたえられるといわれた。

アナスは伝えている
ハイバル討伐の日、私はアブー・タルハのラクダの後部に座っていた。
その折、私の足はアッラーのみ使いの足に触れた。
私たちが着いた時日差しはすでに高く、住民たちは家畜を追い、斧や大きな籠や鎌などを手にして仕事に出ていたが、口々に「ムハンマドと軍隊がここにやってきた」と叫んだ。
この時、み使いは「ハイバルは滅んだ！」といわれ、**「実際に、それが人々の真只中に下ると、それまで警告を受けているだけに、（彼らにとっては）寝覚めの悪い朝となろう」**（クルアーン第 37 章 177 節）と唱えられた。
アッラーは彼らを打ち敗かし給うた。
この折、一人の美しい少女はディフヤの所有するところとなったが、み使いは彼女を七人（の捕虜）と交換して、ディフヤから取り戻された。
そして、ウンム・スライムにあずけて、預言者との結婚の準備のため、彼女の身仕度を整えさせた。
そうすることで、私が思うに、預言者は彼女の待婚期間（イッダ）をウンム・スライムの家で過させたのである。
この女性は、フヤッイーの娘サフィーヤであった。
み使いは、なつめやしの実、チーズ、バターなどを用いて結婚披露宴の準備をなさった。

そのため地面を掘って平らにしそこに食事用の布を敷いたが、チーズやバターが置かれたのはその布の上であった。
この時人々は満腹するまで食事しながら、「私たちは、預言者が彼女を自由身分の女、または、奴隷女のどちらとして結婚なさったのかわからない」といったり、「もしも、預言者が彼女にヴェールを着けさせたら、彼女は自由身分の女性であり、もしも、彼女にヴェールを着けさせない場合は、彼女は奴隷女に相違ない」などと話していた。
み使いはラクダに乗る時、彼女にヴェールを着けさせラクダの背の後部に座らせた。
それで人々は、み使いが自由身分の彼女と結婚なさったことを知ったのである。
マディーナに近づくと、み使いはラクダを急がせた。
私たちもそれに倣ったが、その折、み使いのラクダアドバーウがつまずいたためみ使いはラクダの背からふり落とされた。
彼女も同様であった。
預言者は、すぐに起き上って彼女を他人の目から隠したのであるが、彼女の方をみていた女たちは、「アッラーよ、ユダヤ人を近づけないでください」と祈った。
私（アナス）は、この時のことについてアブー・ハムザに、「み使いは、本当にラクダから落ちたのですか」とたずねたが、これに対し彼は「アッラーに誓って。事実、落ちたのです」と答えた。
私はまた預言者の妻の一人ザイナブの結婚祝宴にも出席したが、この折、み使いは、
人々をパンと肉で持て成し、十分満足させ、そして、もっと、人々を呼んでくるようにと私に命じられた。
（その後）宴が終ったあと、み使いが立ち上ったので私も従った。
しかし、部屋には、まだ二人の男が居残り、話に夢中になっていた。
み使いは、妻たちの住居にむかい、妻たち一人一人に「サラーム・アライクム！（あなた方に平安を！）」と挨拶なさり「元気ですか」と声をおかけになった。
彼女らが「み使い様、私たちは、元気です。あなたの家族（ザイナブ）はいかがですか」というと、み使いは「元気です」とそれに対してお答えになった。
彼女らとの挨拶を終えると、み使いは戻って行き、私もそれに従った。
み使いが、戸口の処に着いた時も、あの二人の男は、まだ、話に夢中になっていたが、み使いが戻ったことを知ると、ようやく、立ち上って帰っていった。
アッラーに誓って、二人の男が、帰ろうとしていることをだれがみ使いに告げたのか、私が知らせたのであったのか、それとも、み使いが啓示でも受けられたのか、私にはわからないが、いずれにしろ、彼らはみ使いが自分の家に入る前に立ち去ったのであった。
み使いが、お帰りになった時、私も一緒だったが、み使いは戸口に入ると、私との間にカーテンをおかけになった。
アッラーが次の啓示を下されたのは、この折のことであった。

「信仰する者よ、許可が与えられぬかぎり、預言者の家々に入ってはならない」（クルアーン第 33 章 53 節）

アナスは伝えている

サフィーヤは捕虜となり、ディフヤに与えられた。

この時、人々は、彼女をアッラーのみ使いの前でほめ、「私たちは戦争捕虜の中で、彼女ほどの女をみたことがない」といった。

そのため、み使いは、使いをディフヤに送った。

そして（彼女と交換に）彼の望む通りのものを彼に与えた。

み使いは、そのあと、サフィーヤを私の母の元に送り、彼女を着飾らせるよう頼んだ。

み使いは、その後、ハイバルを離れ、その反対側の地点で停止なさった。

この折、テントがみ使いのために建てられた。

次の日の朝、み使いは「余分の食糧を持つ者は、それを持って来るように」といわれた。

それで、人々は、なつめやしの実や、麦がゆの余りを持ってきた。

集まった品々で小さな黒い固まりの山ができたほどだった。

それらを使ってたくさんのハイス《バターやチーズになつめやしの実を入れた料理》が作られた。

人々はそのハイスを食べ始め、近くの雨水のたまった池から水を飲んだ。

アナスは、「これが、アッラーのみ使いの結婚披露宴であった」と述べ、続けて次のように話した。

「私たちは、更に進んで行った。

そして、マディーナの城壁がみえる処に着いた時には、喜びのあまり、ラクダを走らせた。

み使いも同様に、ラクダを急がせなさった。

その時、み使いの背後には、サフィーヤが座っていたが、ラクダがつまずいたため、み使い共々、ラクダから地面に落ちてしまった。

この折、だれも二人がラクダの背から落ちるのをみた者はいなかったが、み使いが地面に立ち上り、彼女を人目から隠したので、私たちはこれに気付いて近くに寄った。

み使いは、その時「私たちに怪我はありません」といわれた。

私たちは、その後、マディーナの町に入った。

その折、み使いの家族の若い女たちが、家から次々と出てきた。

そして、サフィーヤをみ、彼女がラクダから落ちたことを知って口々に言葉をかけた。

ザイナブの結婚に関して

アナスは伝えている

ザイナブ（注 1）の待婚期間（イッダ）（注 2）が終った時、アッラーのみ使いは、結婚の申し込みを彼女に告げるようにザイドに頼んだ。

ザイドが、彼女を訪れた時、彼女は、粉をこね合わせていたところだった。

ザイドはこの折のことを次のように語った。

私は心中、彼女がみ使いから結婚の申し込みを受けるほどに秀れた女性であることに、尊敬の念を抱き、そのため、彼女の方をまともにみることもできないほどであった。

それ故、私は、彼女に背をむけ、おずおずとしながら『ザイナブよ、アッラーのみ使いから、あなたへの伝言をもってきました』と述べた。

この時、ザイナブは「私は、私の主（アッラー）から、このことに関しなんらかの啓示（注 1）が下されるまでなにもしたくありません」といって礼拝場所の前に立った。

彼女の結嬉に関するクルアーンの聖句が啓示された時、アッラーのみ使いは、許しも乞わず、彼女の処においでになった。

アナスは、つづけて、こう語っている。

アッラーのみ使いは、（ザイナブとの結婚祝宴の折）私たちに、まだ日が明るい時、パンと肉の料理を出された。

食後、大半の人々は立ち去ったが、話に夢中になっている何人かの人たちは、み使いの家に残っていた。

み使いが外に出たので、私もお伴をしたが、この時、み使いは、妻たちの住まいを訪れ「アッサラーム・アライクム！（平安でありますように！）」といいながら挨拶してまわった。

この時、妻たちは、「み使い様、あなたの家族（ザイナブ）はいかがですか」といった。

アナスは、つづけてこう語っている。

私は、私自身が、み使いに、お客らはもう帰りましたとお伝えしたのか、それともみ使いが私にそうお告げになったのか覚えていない。

（ともあれ）み使いはお戻りになり、家の中に入られた。

私もみ使いに従って帰り、家の中に一緒に入ったが、み使いはそこで私との間にカーテンをおかけになった。

この折、「ヒジャーブ《カーテン・ヴェールの意》に関する聖句（クルアーン第 33 章 53 節）の啓示があり、人々はその教えについて学んだのである。

なお、このハディースに付け加えて、イブン・ラーフィウはクルアーンの聖句を記している。

「預言者の家に食事に呼ばれても、食事の準備が完了するまでは、家の中に勝手に入ってはならない。

だが呼ばれた時には入りなさい。

そして食事が終ったならば立ち去りなさい。

世間話に長座してはならない。

こんなことが預言者に迷惑であっても、預言者は、あなたがたを退散させることを遠慮するだろう。

だがアッラーは、真実を告げることを遠慮なさらない」（クルアーン第 33 章 53 節）

（注 1）ザイナブは、預言者ムハンマドの養子ザイドの妻であったが離縁され、後に、ムハンマドと再婚した。

預言者は、ザイナブへの結婚申し込みを彼女の元の夫、ザイドを通じて行なった

（注 2）待婚期間（イッダ）女性は前婚の解消後、一定期間を経ないかぎり再婚することを禁止される。

この期間は寡婦の場合は 4 か月と 10 日、離婚した女性の場合は 3 か月ときめられている

アナス・ビン・マーリクはこう話している

私は、アッラーのみ使いが、ザイナブと結婚した時、他の夫人たちとの場合には、みられなかったほどの祝宴が開かれるのをみました。

その折には、羊一頭が祝宴のため屠殺されました。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは、ザイナブとの結婚式の場合よりも、良い祝宴をなさったことはなかった。

伝承者の一人、サービト・ブナーニーが、これに関して、「なにを、み使いはお出しになったのか」ときいたところ、アナスは「み使いは、食事にパンと肉を、お客らが食べきれずに残す程たくさんお出しになった」と答えたと伝えている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

預言者は、ジャフシュの娘ザイナブと結婚した時、人々を祝宴に招待した。

彼らは、食事をし、そのあと、座って互いに話を始めた。

預言者は（祝宴が終ったことを示すため）立ち上る仕草をなさったが、話に夢中になっていた人々は立ち上ろうとしなかった。

預言者はそれをみて座を立たれたが、その時何人かの人たちもそれに続いた。

伝承者、アーシムとアブド・アーラーはこの話の結末を次のように伝えている。

「三人の者がそこに座っていた。

預言者はそこにきて家の中に入ろうとなさったが、まだ人々が残っていることに気付かれた。

その時、彼らは立ち上り帰って行った。
私は、預言者の処に行き、彼らが帰ったことを告げた。
預言者は、それでようやく、家の中にお入りになった。
その時、私も家の中に入ったが、預言者は私との間にカーテンをおかけになった。
この折、アッラーの聖句、**「信仰する者よ、預言者の家に食事によばれても、食事の準備が完了するまでは、家の中に勝手に入ってはならない。**
だが呼ばれた時は入りなさい。
食事が終った時には、立ち去りなさい。
世間話に長座してはならない。
こんなことが、預言者に迷惑であっても、預言者は、あなたがたを退散させることを遠慮するであろう。
だが、アッラーは、真実を告げることを遠慮なさらない。
また、あなたがたが、彼女らに何事でもたずねる時は、必ず帳の後からにしなさい。
その方があなた方の心、また、彼女らの心にとって一番汚れがない。
また、あなたがたは、アッラーの使徒を悩ますようなことがあってはならない。
また、あなたがたはどんな場合でも、彼の後で、彼の妻たちを娶ってはならない。
本当にそれらは、アッラーの御目には大罪である」（クルアーン第33章53節）が啓示された。

アナス・ビン・マーリクは語っている
私は、ヒジャーブ《ヴェール、隔離の意》の聖句については最もよく理解している者で、そのため、ウバッイ・ビン・カーブは、度々に私にそれについて質問していた。
アッラーのみ使いは、ジュフシュの娘ザイナブとマディーナで結婚し、新郎として（初めての）朝を迎えた。
そして、日も高く昇った頃、人々を結婚披露宴に招待なさった。
（祝宴も終り）大半の人々は帰っていったが、み使いや何人かの人たちは座っていた。
その後、み使いは立ち上って歩きだされ、私もお伴をしたが、アーイシャの住いの戸口まで行かれた。
み使いは、その後、もう残っていた人々も帰ったことと思い、私を伴ってまた元の場所にお戻りになった。
しかし、人々は、まだ、その場所に座って話をしていた。
それをみたみ使いは、またひき返し、再度、アーイシャの住いに向った。
そして後、また、元の場所の方にお戻りになり、私もそれに従った。
その時には、人々も立ち上り出て行った。
み使いは、（ザイナブの家の戸口で）私との間にカーテンをおかけになった。
その時、アッラーは、ヒジャーブに関する聖句を啓示された。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

アッラーのみ使いは結婚なさり、夫人の家に行かれた。

私の母、ウンム・スライムはハイス《なつめやしの実をチーズやバターなどと一緒に煮た食物》を作り、小さな器にそれを入れてから、「アナスよ、み使いの処にこれを持って行き、『私の母があなたに差し上げるようにといい、また、よろしくともいっておりました。

それにこれは、私共からのささやかな贈り物です』と申しあげるように」といった。

私はそれを持って、アッラーのみ使いの処に行き「私の母があなたによろしくとのことでした。

これは私たちからのささやかな贈り物ですとも申しておりました」といった。

み使いは「そこに置きなさい」といわれてから「行って私の代りに某々や、お前が会う誰でも招待してきなさい」といわれた。

その時み使いは、幾人かの名前も指示なされた。

それで、私は、み使いが名指しした人や、私の会った人たちを招待した。

この話に関連し、或る伝承者は、「私がアナスに『何名くらいきたのですか』ときいた時、アナスは『300 名ほどです』と答えた」と伝えている。

その後、み使いは、私に、「アナスよ、あの土鍋を持ってきなさい」といわれた。

（そうこうするうちに）お客が集まりだし、ほどなく庭も家の中も一杯になった。

み使いは彼らに、「10 人ずつ組をつくり、それぞれ最も近くにある食物をとって食べなさい」といわれた。

それで人々は食べ始め、十分に食欲を満した。

そして、一組が食べ終えて立ち去ると、別の組が入ってくるという風にして、集まった全ての人たちが食事し終った。

その後、み使いが私に、「土鍋を提げなさい」といわれたので私はそれを提げたのであるが、（ともあれ）私がみ使いの処にそれをもって行った時、または、それを手に持った時、まだ食物が中に残っているかどうかについてはわからなかった。

食事が終った後、或るグループの人たちは、み使いの家で話を始めた。その時み使いは座っておられ、彼の新妻も壁の方に顔を向けたまま座って接待が終るのを待っていた。

客に長居をされるのはみ使いにとって迷惑なことであった。

しかたなくみ使いは外に出て行かれ、ご自分の（他の）妻たちに挨拶してまわったあと戻ってこられた。

残って話をしていた人たちは、み使いが戻ったのをみ、長居をしてみ使いに迷惑をかけたと思って、急いで戸口に向かい全員帰って行った。

それで、み使いは家に入り、カーテンをかけてから部屋の中に入って行かれた。

私はその時、み使いの家に座っていたが、み使いはしばらく部屋におられただけで、また私のいる処に戻っておいでになった。

この折、啓示が下され、み使いは家を出てこの聖句を人々の前でお読みになった。

それは、**「信仰する者は、預言者の家で食事に呼ばれても、食事の準備が完了するまでは、家の中に勝手に入ってはならない。**
だが、呼ばれた時は入りなさい。食事が終ったならば立ち去りなさい。
世間話に長座してはならない。こんなことは預言者にとって迷惑である」（クルアーン第 33 章 53 節）に始まる聖句の最後の部分までであった。
なお、ジャアドは、「アナス・ビン・マーリクは『この聖句を最初にきいたのは私です』といい、更に、『この啓示が下されてから、預言者の妻たちは自らを他人の目から隔離（ヒジャーブ）するようになったのです』と話した」と伝えている。

アナスは伝えている
預言者がザイナブと結婚した時、ウンム・スライムは石作りの容器に入れたハイスを作り、アナスに託して預言者の処に贈った。
アナスはこの折、アッラーのみ使いから、「私の代りに行って、お前が会う全てのムスリムを招待してきなさい」と命ぜられた。
それで人々は彼の家に集まり、食事をして帰って行った。
み使いはこの折、片手を食物の上に置いて、それにアッラーの祝福がありますようにと祈願し、アッラーがお望みになった通りの言葉をお唱えになった。
私は（ともあれ）会った人全てを招待した。集まった人々の大半は満腹するまで食事し帰って行ったが、或るグループの人たちだけが残り長話をしていた。
預言者は彼らに（もう退散するよう）なにかいうことを遠慮なさった。
それで彼らを家に残したまま外に出て行かれた。
この折、アッラーは次の啓示を下された。
それは**「信仰する者よ、預言者の家に食事に呼ばれても、食事の準備が完了するまでは、家の中に勝手に入ってはいけない」**
（この聖句に関し、カターダは『**食事の準備が完了するまでは**』という代りに『**食事の時間を待たずに**』という言葉を用いている）
「だが、呼ばれた時には入りなさい」から**「その方があなた方の心、また、彼女らの心にとって一番汚れがない」**（クルアーン第 33 章 53 節）までの聖句であった。

招待に応ずることに関して

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、「あなた方はだれでも、祝宴に招待された場合には出席しなさい」といわれた。

イブン・ウマルは伝えている

預言者は、「あなた方はだれでも、祝宴に招待されたならば、それに応じなさい」といわれた。

なお、ウバイドッラーは、この祝宴とは結婚披露宴のことであると述べている。

イブン・ウマルは伝えている

預言者は、「あなた方のうちだれでも、結婚披露宴に招待された時には、それに応ずるべきです」といわれた。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、「招待された時には、その祝宴に出席しなさい」といわれた。

イブン・ウマルは伝えている

預言者は、「あなた方のだれかが、兄弟を招待した時、その兄弟は、結婚祝宴であれ、また、それに類似するものであれ、出席すべきである」といわれた。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、「結婚、または、その他の祝宴に招待された者はそれに応じねばならない」といわれた。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、「招待されたならば、祝宴に行きなさい」といわれた。

ナーフィウは伝えている

私は、アブドッラー・ビン・ウマルが、「アッラーのみ使いは、『招待されたならば、その招待に応じなさい』といわれた」と語るのをきいた。

アブドッラー・ビン・ウマルは、祝宴には、それが結婚式の祝宴であろうとなかろうと出席した。断食をしている最中であっても同様であった。

イブン・ウマルは伝えている

預言者は、「もし、あなた方が祝宴に招待された時には、たとえ（出される食事が）羊の足だけであったとしても応ずるべきである」といわれた。

ジャービルは伝えている

アッラーのみ使いは、「あなた方のうちだれでも、食事に招待されたならば、それに応じなさい。

そして、出された食事に関しては、食べたり、食べなかったり、自由にしなさい」といわれた。

前記と同内容のハディースは、**アブー・ズバイル**によっても、別の伝承者経路で伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、「もしあなた方のだれかが、招待されたならば、その招待を受けねばなりません。

断食中の場合は、招待者の祝福を祈願して礼拝を行ないなさい。

また、断食中でない場合には、出された食事は（できる限り）食べるようにしなさい」といわれた。

アウラジュは伝えている

アブー・フライラは常々次のように語っていた。

「もっともよくない食事は、富裕者が招待され、貧乏人は無視された場合の結婚祝宴の食事である。

祝宴に招待されても出席しない者は、アッラーとそのみ使いの教えに従わない者である」

スフヤーンは伝えている

私は、ズフリーに「アブー・バクル（ズフリーの別称）よ、『もっともよくない食事は、富裕者の結婚祝宴での食事である』とはどのような意味ですか」ときいた。

すると、彼は笑って「祝宴に富裕者が供する食事が最悪の食事だという意味ではない」と答えた。

これに関連しスフヤーンは次のように述べている。

「私の父は、裕福でした。

それ故、このハディースをきいた時、不安になり、それで、ズフリーに質問したのです。

ズフリーは、この時、次のようにいいました。

『私はアブドル・ラフマーン・アウラジュから、アブー・フライラが、もっとも悪い食事は結婚

祝宴の時供される食事である云々と語っていたとききました』」
この後半のハディースは、前記と同内容である。

アブー・フライラの伝える前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラが語った前記と同内容のハディースは、更にまた、別の伝承者経路でも伝えられている。

アブー・フライラは伝えている

預言者は、こういわれた。
「最もよくない食事は、出席しようとする者らが断わられ、出席を断わろうとする者らが招待される類の結婚祝宴での食事である（注）。
招待されてもその招待に応じない者は、アッラーとそのみ使い（の教え）に背くことになる」

（注）「招待に喜んで応じようとする者らを招待せず、富裕者らのみを招待しようとする類の祝宴の食事」という意味である。
富裕者には、一般に、軽々しく招待に応ずることを喜ぼうとしない傾向でもあったのであろう

三度目の離婚宣言に関して

アーイシャは伝えている

リファーアの妻が預言者の処にきてこういった。

「私は、リファーアに嫁がされましたが、彼は私を離婚し、しかも、離婚の取消しは不可能です（注）。

その後、私は、アブドル・ラフマーン・ビン・ズバイルと結婚しましたが、彼の持物は、外套の房飾りのようなものです《性的に弱いの意》」

アッラーのみ使いは、これをきいて、ほほ笑まれたが、「あなたは、リファーアの元に戻りたいのですか。

しかし、あなたが、アブドル・ラフマーンの蜜を味わい、彼があなたの蜜を味わうといった互の性関係が結ばれないかぎり離婚することはできません」といわれた。

この時、アブー・バクルは、預言者の傍におり、ハーリド・ビン・サイードは、み使いに家の中に入る許可を求めて、戸口で返事を待っているところであった。

ハーリドは、この折、「アブー・バクルよ、あなたは、み使いの前で、大声で彼女が述べたてた言葉をききましたか」といった。

（注）離婚は、アラビア語でタラークとよばれ、夫の一方的宣言によって成立する。

ただ、一時的感情から離婚を宣言したあと、それの取消しが安易に行なわれたため、預言者ムハンマドは夫の取消権に制限を加えた。

即ち、夫は妻に二度だけ、タラークを宣言することが許されるが、三度のタラークを宣言した場合、結婚は直ちに解消されると定めたのである。

そして、このように、三度目のタラーク宣言によって、離婚した夫婦には、新たに、婚姻契約を結ぶことは許されないとした。

ただし、例外として、三度目の宣言で離婚された妻が、一度、別の男と婚姻し、かつ、離婚をした後であれば、前の夫との再婚が許されることになっている。

このハディースにみられ取消し不可能の離婚というのは、三度目のタラーク宣言による離婚を意味する

預言者の妻**アーイシャ**は伝えている

リファーア・クラズィーは、彼の妻を離婚したが、それは取消し不可能の離婚であった。

その後、彼女は、アブドル・ラフマーン・ビン・ズバイルと再婚した。

彼女は、アッラーのみ使いの処にきて、彼女がリファーアの妻であったが三度目の離婚（タラーク）宣言で離別されたこと、及び、その後アブドル・ラフマーン・ビン・ズバイルと結婚したことを話した。

彼女はこの時、「アッラーに誓って。彼の持物は、この外套の房飾りのように小さいので

す」といいながら、彼女の外套の房飾りをつかんだ。
これをきいたみ使いはお笑いになったが「多分、あなたは、リファーアの元に戻りたいと願っているのでしょう。
しかし、あなたは彼《現在の夫、アブドル・ラフマーン》の甘さを味わい、また、彼もあなたの甘さを味あわないかぎり戻ることはできません」といわれた。
アブー・バクル・シッディークは、この時、み使いと共に座っており、また、ハーリド・ビン・サイード・ビン・アースは部屋の中に入ることを許されなかったので、み使いの家の戸口に座っていた。
ハーリドは、この折、大声で「アブー・バクルよ、み使いの前で、あのようなことを声高にしゃべる彼女をどうしてあなたは叱らないのですか」と叫んだ。

アーイシャは語っている
リファーア・クラズィーは、妻と離婚した。
そして後に、アブドル・ラフマーン・ビン・ズバイルが彼女と結婚した。
彼女は、預言者の元にきて、「アッラーのみ使い様、リファーアは、三度タラーク宣言をし、私を離婚しました」といった。
このハディースの後半は、前記と同内容である。

アーイシャは伝えている
アッラーのみ使いは、或る女性に関する質問をうけた。
その女性は、或る男と結婚したが、後になって離別し、そのあと、他の男と再婚した。
しかし、彼女は、再婚相手との性交渉を持つ前に(また)離婚された。
それで、「このような状態の場合、彼女の最初の夫は、彼女と改めて結婚することが可能でしょうか」というのが質問の内容であった。
み使いは、これに対し、「いや、(彼女と再婚した夫が)彼女の甘さを味わうまでは、(即ち、彼女と性交渉をもたないかぎり)改めて結婚することは許されない」といわれた。

前記と同内答のハディースは、**ヒシャーム**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

アーイシャは伝えている
或る男が妻を三度目のタラーク(離婚)宣言で離別した。
そのため、別の男が彼女と結婚したが、彼もまた、彼女と性交渉を持つことなく、彼女を離婚した。
その後、彼女の最初の夫が彼女と改めて結婚したいと願った。
アッラーのみ使いが質問を受けたのは、このような事例についてであった。

これに対し、み使いは、「いいえ、彼女の再婚した夫が、最初の夫と同様に、彼女の甘さを味あわないかぎり、そうすることは認められない」といわれた。

アーイシャによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

性行為前の祈願に関して

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いは、次のようにいわれた。

「もしも、あなた方のだれかが、自分の妻と性交渉をもとうとする時には、『アッラーの御名によってアッラーよ、悪魔(シャイターン)から、私たちをお守り下さい。

あなたが私たちに与え給うたものから悪魔を遠ざけて下さい。

そして、もしも、アッラーが男の子をお授け下さった場合でも、悪魔がその子に決して害を及ぼすことのないようお守り下さい』といいなさい」

前記のハディースは、別にも幾つかの伝承者経路で伝えられている。

性行為に関して

ジャービルはこう語っている

ユダヤ人たちは、常々、後背から(妻の膣に)性行為をすると、やぶにらみ(斜視)の子が生れると話していた。

性行為に関しては、次の啓示が下された。

「妻は、あなた方の耕地である。それ故、意のままに耕地に赴くがよい」(第 2 章 223 節)

ジャービル・ビン・アブドッラーは語っている

ユダヤ人たちは、妻の膣に背後から交接して妊娠させた場合、生れる子供は斜視になるといっています。

性行為に関しては、次の啓示がみられます。

「妻は、あなた方の耕地である。それ故、意のまま耕地に赴くがよい」(クルアーン第 2 章 223 節)

ジャービルによる前記と同内答のハディースは、別にも幾つかの伝承者経路で伝えられている。
なお、伝承者の一人**ズフリー**はこのハディースに関連し、「交合は、彼女の(躰の)前後どちらから行なわれても構わない。
ただし、膣だけに対して行なわれるべきである」と付言している

妻が夫の寝室を離れることについて

アブー・フライラは伝えている

預言者は、「妻が夫のベッドを離れて夜を過すと、天使たちは朝まで彼女をのろいつづける」といわれた。

このハディースは、別の伝承者経路でも伝えられるが、それには、「彼女が帰ってくるまで」と記されている。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、「私の生命の主なる御方に誓って、夫がその妻をベッドに呼んだ時それに応じない妻に対して、天におられる御方は、彼女の夫が、彼女に対する機嫌を直すまで、怒りをお解きにならない」といわれた。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、「妻をベッドにくるように呼んでもこないため夫が彼女を怒りながら夜を過す場合、天使たちは、夜が明けるまで、彼女をのろいつづける」といわれた。

女性の秘密を漏らすことに関して

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは「審判の日、アッラーの御目からみて、人々の中で最も悪い者は、妻の処に行ってきいたり、また、妻が彼の処に来て話したりした妻の秘密を漏らす者である」といわれた。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは「審判の日、アッラーの御目からみて、信頼し合うため最も重要なことは、夫が妻の処に、また、妻が夫の処に、度々、行くことである。

また、この信頼がこわれるのは、夫が妻の秘密を漏らす場合である」といわれた。

アズル（注）について

（注）アズルとは、本来、脇に置く、離すの意味であるが、ここでは、不完全な性行為を指す言葉として用いられている

イブン・ムハイリーズは伝えている

私とアブー・シルマは、アブー・サイード・フドリーを訪問した。
この折、アブー・シルマは、アブー・サイード・フドリーに、「アブー・サイードよ、あなたはアッラーのみ使いがアズルについていわれたことをききましたか」とたずねた。
彼は「ききました」と答えた後、更に次のように語った。
「私たちはみ使いと共にムスタリク部族に対して遠征し、幾人かの上品なアラブ女性を捕虜にした。
私たちは、妻たちがいなかったため彼女らを欲しいと思ったが、また同時に、彼女らを解放した時得られる身の代金も欲しかった。
ともあれ、この時、私たちは彼女らと性行為をしても、アズル《妊娠を避けるため膣外に射精すること》を守ることに決めた。
この時、私たちは、「せっかくアッラーのみ使いがおいでなのに、意見をきこうともしないで行動しようとしている」といって、み使いの処に行き、この件について質問した。
み使いは「アズルをしなくても別に構わない。アッラーによって、復活の日の至るまでに生まれるべく定められた者は、全て生まれるからです」（注）といわれた。

（注）性行為の結果が必ず妊娠につながるわけではなく、全てはアッラーの定めによって決められること故、そのような配慮は必要ないという意味であろう

前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路で**ハッバーン**によっても伝えられるが、それには、「アッラーは、審判の日までに創造すべき者たちをお決めになっている」と記されている。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

私たちは、女たちを捕虜にした。
そして、彼女らとアズルを行なうことにした。
アッラーのみ使いにアズルについて質問したが、彼は「まことにそうするがよい。
まことにそうするがよい。
まことにそうするがよい。
ただ、審判の日までに生まれるべく運命づけられている者は、（たとえアズルを行なっても）生まれ出ることに変わりはない」といわれた。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

彼は「アズルについてきいていますか」と質問された時、「はい。私は、アッラーのみ使いが『アズルを行わなくても構わない。

子供の誕生は、アッラーによって定められているからです』といわれるのをききました」と答えた。

アブー・サイード・フドリーの語った前記と同内容のハディースは、他にも幾つかの伝承者経路で伝えられている。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

預言者は、アズルに関して質問を受けた時、「それを行なわなくても構わない。

なぜなら、子供の誕生は（アッラーによって）定められるものだからです」といわれた。

伝承者の一人、ムハンマドは「構わない」という言葉は「禁止に近い意味である」と述べている。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

預言者の前でアズルが議題になった時、預言者は「なぜあなた方はアズルをするのか」といわれた。

これに対し人々が、「乳飲み子を抱えた妻を持った男がその妻と交合したら、彼女は彼が喜ばないのに妊娠するかもしれません。

また、奴隷女を所有する男が、その女と交合した場合、彼は妊娠を喜ばないでしょう。（それ故、アズルは必要ではありませんか）」というと、

預言者は、「アズルの処置を行なわなくても構いません。

なぜなら、子供の誕生はあらかじめ運命づけられていることだからです」といわれた。

これに関連し、イブン・アウンは、「私がこのハディースをハサンに語ったところ、彼は『アッラーに誓って、アズルを（預言者は）非難しているようにも思える』といった」と伝えている。

イブン・アウンは伝えている

私はアブドル・ラフマーン・ビン・ビシュルからきき、イブラーヒームが伝えたアズルに関するハディースをムハンマドに話した。

彼はその折、「このハディースをアブドル・ラフマーン・ビン・ビシュルが私にも話してくれた」といった。

マアバド・ビン・シーリーンは次のように語っている

私たちはアブー・サイードに「あなたは、アッラーのみ使いがアズルに関してなにかいわれたことをききましたか」とたずねた。

それに対し、彼は「ききました」と答えた。
このハディースの後半は、前記と同内容である。

アブー・サイード・フドリーは、伝えている
アッラーのみ使いの処で、アズルについての話がなされた。
その折、み使いは、「どうして、あなた方は、だれもがアズルをするのですか。
（み使いは「あなた方だれも、アズルを行なってはならない」とはいわれなかった）。
アッラー以外の創造主によって、創られた者はいないというのに」といわれた。

アブー・サイード・フドリーは伝えている
アッラーのみ使いは、アズルについて、質問を受けた時、「全て精液からだけで子供ができるわけではない。
アッラーがなにかを創ろうとなさる時、だれもそれを妨げることはできない」といわれた
預言者からきいてアブー・サイードによって語られた前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

ジャービルは伝えている
或る男が、アッラーのみ使いの処にきて「私は女奴隷を一人所有しています。
彼女は召使いで、私たちのため水運びをしています。
私は彼女と交合しましたが、しかし、彼女が妊娠することは望んでいません」といった。
み使いは、彼に「もし、よければアズルをしなさい。
ただ（アッラーが）彼女に運命づけたことは避けられません」といわれた。
その男は、しばらくみえなかったが、また、やってきて、「あの召使いは、妊娠しました」といった。
み使いは、この時、「私はあなたにアッラーによって、彼女のために運命づけられたことは避けられませんと話したはずです」といわれた。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
或る男が、アッラーのみ使いにむかって、「私は奴隷女を所有しており、彼女と交合する時には、アズルを行なっています」といった。
すると、み使いは、「そのことで、アッラーの定めを避けることはできません」といわれた。
その男は、その後しばらくたってから、再びやってきて、「み使い様、私があなたにお話しした奴隷女は妊娠しました」といった。
み使いは、これに対し、「私は、アッラーのしもべであり、彼の使徒である（注）」といわれた。

（注）私の教えは、通常人の教えとは異なる。

私の決定と知識は、「アッラーから示唆されたもの故常に正しい」という意味でこういった
のである

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
或る男が、預言者の処に来た。
この後半は、前記ハディースと同内容である。

ジャービルはこう伝えている
私たちは、クルアーンが啓示されていた頃、《預言者在世時代》、アズルを行なっていた。

ジャービルはこう伝えている
私たちは、アッラーのみ使いがご在世の頃、アズルを行なっていた。

ジャービルは伝えている
私たちは、アッラーのみ使いが存命していた頃、アズルを行なっていた。
このことは、アッラーの預言者もご存知であったが、禁止なさらなかった。

妊婦との交接について

アブー・ダルダーウは預言者からきいて伝えている

預言者は、或るテントの入口の処で、出産間近い一人の女にお会いになった。

預言者は、この折、「恐らく彼《彼女を同伴した男》は、彼女と交接するつもりであろう」といわれ、預言者と一緒にいた人々が、「その通りです」というと、「私は、彼に対し、彼が墓場に行く《死ぬ》まで続くのろいをかけることにした。

一体どのようにして、彼は生れてくる子供を、彼にとっては、許されないことであるのに、後継者にしようとするのか、そして、また、どのようにして、彼はそれが許されないというのに、その子を自分の召使いにすることができるというのか」といわれた。

（注）捕虜となった妊娠中の女との性行為は禁じられる。

生れる子の父親の決定や身分を決めることが困難なためである。

たとえば、もしも彼女の妊娠が前夫によるものであれば、現在の夫は生れる子を実子とは認めないであろうし、財産相続者にも指名することはないであろう。

またもし、子供が彼の実子であったとしても、捕虜が生んだという理由だけで召使いとして扱ったり、当然受けるべき財産の相続権を与えなかったりするのは好ましいことではないからである

前記と同内容のハディースは、**シュウバ**によっても伝えられている。

乳児の母親に関して

ワフブ・アサディーヤの娘ジュダーマは伝えている

彼女は、アッラーのみ使いが、次のようにいわれるのをきいた。

「私は、乳児の母親（ギィーラ）との同棲を禁止した（注）。

しかし、ローマ人やペルシャ人らがそれを禁じられても、彼らの子供らに害を及ぼしてなかったことを考慮し、禁止することをやめた。

イマーム・ムスリムは、このハディースを伝承した人物名について、「ハラフは、“ジュザーマ”と記しているが、別の伝承者ヤフヤーの記述“ジュダーマ”の方が正確である」と述べている。

（注）同棲中の性交渉などが母乳の出を悪くすると考えたためであろう

ウッカーシャの姉妹に当るワフブの娘**ジュダーマ**はこう伝えている

私は、或る人たちと一緒に、アッラーのみ使いを訪問したが、彼は、その折、「私は、乳児をもつ女性（ギィーラ）との同棲を禁じようと思ったが、ローマ人やペルシャ人の女をみると、彼女らは子供らに母乳を飲ませており、同棲はなんら子供らに影響を及ぼしてないことを知った」といわれた。

この時、人々は、み使いにアズルについて質問した。

み使いは、これに対し、「あれは、生きている子を秘かに埋めるのと同じです」といわれた。

なお、ウバイドッラーは、ムクリーが伝えたハディースによって、「生き埋められていた女児が、問われる時」（注）という聖句をこれに加えて語っている。

（注）クルアーン第 81 章 8-9 節の「生き埋められていた女児が、どんな罪で殺されたかと問われた時」からとられた言葉である。

イスラーム以前には、飢に対する恐れその他の理由で、女児を生きたまま土中に埋めることも行なわれたといわれる

ジュダーマ・ビント・ワフブ・アサディーヤは伝えている

私は、アッラーのみ使いが、次のようにいわれるのをきいた。

以下は、前記と同内容である。

サアド・ビン・アブー・ワッカースは伝えている

或る男が、アッラーのみ使いの処にきて、「私は、妻とアズルを行なっています」といった。

み使いが「どうして、そうするのですか」といわれた時、この男は、「彼女の子供、もしくは、彼女の子供たちに有害になることを恐れているのです」と答えた。

これに対し、み使いは、「もし、アズルをしないことが有害であるならば、ペルシャ人やローマ人にとっても有害であったはずです」といわれた。
ズハイルは、これに関連し、み使いは「もし、そうであるならば、ペルシャ人やローマ人にどうして有害でないのか」といわれたと記している。

養育の書

乳親子関係に関して

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いが彼女の家におられた時、誰かが（預言者の妻の一人）ハフサを訪ね、家に入るための許しを求めている声を耳にした。

アーイシャが、「み使い様、誰かがあなたの家に入る許しを求めています」と告げると、み使いは、「私は某《乳親子関係によるハフサの父方の小父》ではないかと思う」といわれた。

アーイシャはこの折、「み使い様、某《乳親子関係による彼女の小父》が生きていたならば、彼は私の家に入ることが許されますか」と質問した。

み使いは「許されます。そして、乳親子関係の者に許されないことは、血縁親族関係の者にも許されないのです」といわれた。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは「血縁親族関係の者に違法とされることは、乳親子関係の者にも違法とされる」といわれた。

乳親子関係の男性に関して

アーイシャは伝えている

私と乳親子関係による小父で、アブー・クアイスの兄弟、アフラフが来て私の家に入るための許しを乞うた。

すでにヒジャーブ《帳：女性を他人の目から隔離すること》に関しての啓示**「あなた方が、かの女らになにごとでもたずねるときは、心ず、帳の後ろからにしなさい」**（クルアーン第33章53節）が下された後のことでもあり、私はそれを断った。

アッラーのみ使いが来られた時、私はこの件について話した。

その時、み使いは私に（養父の兄弟は私の小父にも相当するといわれて）彼が家の中に入るのを許すようにとお命じになった。

アーイシャは伝えている

乳親子関係による私の父方の小父、アフラフ・ビン・アブー・クアイスがきた。

この後半は前記ハディース内容と同じであるが、次の言葉が付されている。

「私（アーイシャ）は預言者に、私に乳を飲ませたのは、女性であって男性ではありません」といった。

すると、預言者は「あなたの両手、もしくは、あなたの右手が埃で汚されますように！《あなたは間違っている！の意》」といわれた。

アーイシャは伝えている

ヒジャーブ（女性の隔離）に関する啓示が下された後のことであるが、アブー・クアイスの兄弟アフラフがきて、家に入れてくれるよう彼女に頼んだ。

アブー・クアイスは、乳親子関係による彼女の父親であった。

この折、彼女は、「アッラーに誓って、アッラーのみ使いのご意見をうかがわないかぎり、アフラフの願いを許すことはできません。

をぜならアブー・クアイスが私に乳を与えてくれたのではなく、彼の妻が私に乳を飲ませてくれたのですから」といった。

それでみ使いが彼女の家にこられた時、「み使い様。アフラフはアブー・クアイスの兄弟です。

彼は私の処にきて家に入れてくれるよう願いましたが、私はあなたの意見をうかがいもしないで許しを与える気にはなりませんでした」といった。

預言者はこの時、「許してあげなさい」といわれた。

このハディースに関連し、伝承者の一人、ウルワは、「このことがあってから、アーイシャは常々『血縁の者に許されないことは、乳関係の者にも許されない』と語っていた」と伝えている。

前記と同内容のハディースは**ズフリー**によっても伝えられている。

なお、「アブー・クアイスの兄弟アフラフがきて、彼女に許可を求めた」に始まるこのハディースには、「預言者はアーイシャに『彼はあなたの小父ではないか、あなたの手が挨にまみれるように！《あなたは間違っている！の意》』といわれた」
「アブー・クアイスはアーイシャに乳をふくませた女性の夫であった」などという言葉が記されている。

アーイシャは伝えている

乳親子関係にある小父が私の処にきて家に入る許可を求めたが、私はアッラーのみ使いの意見をうかがうことにして、許可しなかった。
み使いがおいでになったので、私が「乳親子関係の小父がきて許可を求めたが、私は許しませんでした」と話したところ、み使いは、「あなたはその小父が家に入ることを許した方がいい」といわれた。
私はこの時「私に乳を飲ませたのは女性であって、男性ではありません」といったが、み使いは「彼はあなたの小父ですよ、入れてあげなさい」といわれた。

前記のハディースは、**ヒシャーム**によっても伝えられている。

ヒシャームによる前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられるが、それには「アブー・クアイスが彼女に許可を求めた」と記されている。

アーイシャは伝えている

私の乳親子関係の小父アブー・ジャアド（アフラフの別称）が、私に許可を求めたが、私は断った。
（伝承者の一人ヒシャームは、「アブー・ジャアドとは、実は、アブー・クアイスのことである」とも述べている）
預言者がおいでになった折、私（アーイシャ）がこの件について話したところ、預言者は、「どうしてあなたは彼を入れてあげなかったのか。
あなたは間違っている！（あなたの右手、または、左手が埃まみれになりますように！）」といわれた。

アーイシャは伝えている

アフラフという名の彼女の乳親族関係の小父が、彼女の家に入るための許しを求めた時、彼女はヴェールをかぶって応待した。
そして、そのことをアッラーのみ使いに話した。
み使いはこれに対し、「ヴェールを着ける必要はありません。

なぜなら彼は、乳親族関係によるマフラム《婚姻を禁止されている親族》で、血縁関係によるマフラムと同じだからです」といわれた。

アーイシャは伝えている

アフラフ・ビン・クアイスは、私に、家の中に入れてくれるよう許しを求めたが、私は断った。
すると彼は、私に使いをよこして、「私はあなたの小父にあたる。
私の兄弟の妻があなたに乳を飲ませたからです」といった。
しかし、私はそれでも彼に許可を与えなかった。
その後、アッラーのみ使いがおいでになったので、私はこのことを話した。
その時み使いは「彼はあなたの小父であるから、家に入ることができます」といわれた。

乳兄弟関係について

アリーは次のように伝えている

彼は、アッラーのみ使いに「どうしてあなたは私たち親族の者を無視して、クライシュ族の者ばかりから奥様を選ばれるのですか」とたずねた。

み使いは、この時、「私にふさわしい相手がいますか」といわれた。

これに対してアリーが、「はい。ハムザの娘がいます」と答えたところ、み使いは、「彼女を娶ることは、私にとって違法になります。

なぜなら彼女は乳親子関係による私の兄弟の娘だからです（注）」といわれた。

（注）預言者ムハンマドとハムザは、共々アブー・ラフブの奴隷スワイバの乳で育てられた。

ハムザは血縁上では預言者の父方の伯父であるか、乳親子関係では兄弟にあたる

前記のハディースは、**アーイシャ**によっても別の伝承者経路で伝えられている。

イブン・アッバースは伝えている

預言者は、ハムザの娘と結婚するよう勧められた。

彼はその時、「彼女との結婚は私にとって違法になります。

なぜなら彼女は私の乳親族関係上の兄弟の娘だからです。

血縁関係上許されないことは、乳親族関係の者の間でも許されないのです」といわれた。

前記と同内容のハディースは、用語上多少の異同がみられるが、ハンマームやサイード、また、ビシュル・ビン・ウマルなどによっても伝えられている。

預言者の妻の一人、**ウンム・サラマ**は語っている

アッラーのみ使いは「ハムザの娘はあなたにふさわしい相手ではありませんか」

もしくは、「どうしてあなたは、アブドル・ムッタリブの息子ハムザの娘と結婚しないのですか」と、（人から）質問された時、「ハムザは、乳親族関係による私の兄弟です」といわれた。

義理の娘や妻の姉妹との結婚禁止について

アブー・スフヤーンの娘**ウンム・ハビーバ**は伝えている

アッラーのみ使いが私の家においでになった時、私はみ使いに、「あなたは、アブー・スフヤーンの娘にあたる私の姉妹に関心をお持ちですか」とたずねた。
み使いはこの折「もしそうなら、どうしたらよいのですか」といわれ、私がそれに対し「彼女と結婚しなさい」というと、「それがよいと思いますか」といわれた。
私はこの時、「私はあなたを独占しようとは思いません。
それ故私はきてくれる人が姉妹であれば善いと願っています」と答えたのであるが、
それに対し、み使いは「彼女との結婚は私にとって違法になります」といわれた。
私は、この折また「あなたはアブー・サラマの娘ドゥッラに結婚を申し込んだときいています」ともいった。
み使いは、「ウンム・サラマの娘のことですか」といわれ、私が「そうです」と答えると、
「もし彼女が私の保護下に育てられた義理の娘でなかったとしても、彼女との結婚は私には認められないことです。
なぜなら、彼女は私の乳兄弟(ハムザ)の娘だからです。
スワイバが私や彼女の父に母乳を飲ませて育ててくれたのです。
それ故、あなた方の娘たちや姉妹たちを私の結婚相手として考えないでください」といわれた。

このハディースは、ヒシャーム・ビン・ウルワによっても別の伝承者経路で伝えられている。

預言者の妻の一人**ウンム・ハビーバ**は伝えている

彼女は、アッラーのみ使いに対し、「み使い様。私の姉妹のアッザと結婚して下さい」といった。
み使いは、この時「それがよいと思いますか」といわれ、彼女が「はい、み使い様。私はあなたを独占しようとは思いません。
私は、あなたの妻として善い人が加ってくれることを望んでいますが、それには私の姉妹が適任者です」と答えると、彼女に対し「それは私には許されないことです」といわれた。
この時彼女は「み使い様、私たちはあなたがアブー・サラマの娘ドゥッラとの結婚を望んでおられるとうわさをしています」ともいった。
み使いは、「アブー・サラマの娘のことですか」といわれ、私が「そうです」と答えると、次のように話された。
「もし彼女が、後見役として育てた私の義理の娘でなかったとしても、彼女と結婚することは、私にはできないことです。

なぜならば、彼女は私の乳兄弟の娘だからです。
スワイバが、私にもアブー・サラマにも乳を飲ませてくれたからです。
それ故、あなた方の娘たちや姉妹たちを私の結婚相手として考えないでください」といわれた。

（注）イスラームでは、乳親子関係は、血縁による親族関係と同等視される。
それ故、この関係にある者同志の婚姻は禁止されている。
ただし、遺産その他の相続権が認められるのは血縁関係者のみに限られている

結婚の障碍になる授乳の回数について

アーイシャ、**スワイド**及び**ズハイル**は、伝えている

預言者は、「一回、または二回だけ、同じ乳母から授乳された者同志の緒婚は、違法とはならない」といわれた。

ウンム・ファドルは伝えている

アッラーの預言者が私の家におられた時、一人のベドウィンがきて「アッラーの預言者様、私には妻が一人いましたが、彼女以外に、また、別の女性と結婚しました。
私の最初の妻は、私が新たに結婚した妻に一度か二度授乳したことがあるといっています」といった。
アッラーの預言者は、これに対し、「一度か二度の授乳は、結婚の障碍にはならない」といわれた。

ウンム・ファドルは伝えている

アーミル・ビン・サアサア族出身の男が、「アッラーの預言者様、一度だけ同じ乳母から授乳された者同志の結婚は違法になりますか」とたずねた時、預言者は「いいえ」といわれた。

ウンム・ファドルは伝えている

アッラーの預言者は、「同じ乳母から一度か二度だけ授乳された者、もしくは一度か二度だけ乳を吸った者同志の結婚は、違法にはならない」といわれた。

前記に関連して**イブン・ビシュル**によって伝えられるハディースには、「二度の授乳、もしくは、二度の吸乳は」と記され、**イブン・アブー・シャイバ**のハディースにもこれとほぼ同様の記述がみられる。

ウンム・ファドルは伝えている

預言者は、「一度、または、二度の授乳は、結婚の障碍とはならない」といわれた。

ウンム・ファドルは伝えている

或る男が預言者に、「一度だけ同一の乳母から授乳された者同志の結婚は、違法になりますか」とたずねた。
預言者は「いいえ」といわれた。

五回の授乳が違法になることについて

アーイシャは伝えている

クルアーンには、同じ乳母から 10 回授乳されたことが明白であれば、その者同志の結婚は違法になるという啓示があったが、それが廃棄され五回の授乳に代った。

アッラーのみ使いが逝去される以前には、クルアーンに明記されており、ムスリムたちはそれを誦んだ。

アムラは伝えている

アーイシャは、婚姻の障碍となる乳親子関係について話をしていた。

その折、彼女は、「クルアーン啓示には、10 回授乳されたという明白な証拠がある者同志の婚姻は違法になるとあったが、その後、これが五回の授乳に変更された」といった。

アーイシャによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

若者に対する授乳に関して

アーイシャは伝えている

サフラ・ビント・スハイルが預言者の処にきて「アッラーのみ使い様、（手伝い人の）サーリムが私たちの家に入る度に、夫のアブー・フザイファは不快気な顔をします」といった時、預言者は「乳を飲ませてやりなさい」といわれた。

彼女がこれに対し、「サーリムは、成人した男だというのに、どうやって乳を飲ませるのですか」というと、み使いはほほ笑まれた後、「勿論、私も彼が若者であることは知っています」といわれた。

伝承者の一人アムルの伝えるハディースには「アブー・フザイファは、バドルの戦闘に参加した」と記され、また、イブン・ウマルの伝えるハディースには、「アッラーのみ使いは、お笑いになった」という記述がみられる。

アーイシャは伝えている

アブー・フザイファの元奴隷サーリムは、アブー・フザイファの家で、彼や彼の家族と一緒に住んでいた。

或る時、スハイルの娘サフラが預言者の処にきて、次のようにいった。

「サーリムは、思春期に達し、人並の知識を身につけるようになりました。

彼は自由に私たちの家に出入りしています。

それもあってか、私には、夫のアブー・フザイファが心中なにか心配しているように思えます（注）」

これをきいた預言者は、彼女に「彼（サーリム）にあなたの乳を飲ませてやりなさい。

そうすれば、あなたは、サーリムにとって乳親子関係となり、婚姻その他は互いに禁止されることになります。

そうなれば、アブー・フザイファの心中の悩みも消えることでしょう」といわれた。

彼女は、その場から帰って行ったが、後になって、「私は、彼（サーリム）に私の乳を飲ませた。

その結果、アブー・フザイファの心中にあった悩みも消えたようです」といった。

（注）アブー・フザイファは、妻サフラとサーリムの関係を心配したのである。

なお、この場合スハイルの娘（サフラ）は、自分で乳を少量しぼり、サーリムに飲ませたのであろう

アーイシャは伝えている

スハイル・ビン・アムルの娘サフラが、預言者の処にきて、次のようにいった。

「アッラーのみ使い様、サーリム（アブー・フサイファの元奴隷）は私共と一緒に家で暮して

いますが、他の人同様に、思春期に達し、人並みの知識を持っているようです」
これをきいたみ使いは、「彼にあなたの乳を与えなさい。
そうすれば、彼はあなたとは結婚禁止の関係（マフラム）になります」といわれた。
このハディースの伝承者の一人イブン・アブー・ムライカは、次のように語っている。
「私はこのハディースを一年近く、不安でもあり他人に話さなかったのですが、丁度その頃、
カーシム・ビン・ムハンマド・ビン・アブー・バクルに会う機会があり、その時、
『あなたは、私がまだだれにも話したことのないハディースを、昔、私に教えてくれました』
といって
『それは、なんだったのですか』とたずねる彼にこのハディースについて話しました。
彼はこの折、『私からきいたといって人々に伝えなさい。
アーイシャが私にこのハディースを語ってくれたのです』といいました」

ザイナブ・ビント・ウンム・サラマは伝えている

ウンム・サラマは、アーイシャに「思春期に入りかかった若者があなたの処に来ています。
私は（あのような若者が）私の処に来るのを好きではありません」といった。
アーイシャは、この折、「アッラーのみ使いのお言葉が、あなたの参考になりませんか」と
いって、次のように話した。
「アブー・フザイファの妻が、『アッラーのみ使い様、サーリムが私の処に来ますが、彼は、
今や一人前の男です。夫のアブー・フザイファは心中、彼（の出入）について、嫌がってい
るようです』といった時、
み使いは『サーリムにあなたの乳を与えなさい。（そうすれば、あなたと乳親子関係にな
り）それによって、彼はあなたの処に気がねなく出入りできることになります』といわれた」

アブー・サラマの娘、**ザイナブ**は語っている

私は、預言者の妻、ウンム・サラマがアーイシャにむかい、「アッラーに誓って、私は授乳
期をすぎた子供らにじろじろみられることを好きではありません」というのをきいた。
その折、アーイシャは次のように話した。
「どうしてですか。スハイルの娘サフラがアッラーのみ使いの処にきて、『み使い様、アッラ
ーに誓って申しますが、サーリムが私の家に出入りする度に、アブー・フザイファは不快
気な顔つきをしています』といった時、
み使いは、『サーリムにあなたの乳を飲ませてやりなさい』といわれました。
これに対し、サフラが『彼は髭をはやした大人です』というと、み使いは再び『乳を飲ませ
てやりなさい。
そうすれば、アブー・フザイファの顔から不快気な様子も消えるでしょう』といわれました。
その後、彼女は、『私は、み使いのいわれた通りにしました。

アッラーに誓って、それ以後アブー・フザイファの顔にあの不快気な様子がみられなくなりました』と話していました」

アブー・サラマの娘**ザイナブ**は伝えている

アッラーの預言者の妻ウンム・サラマは常々次のように話していた。

アッラーの預言者の妻たちは皆、特定期間だけ授乳した里子らが彼女たちの処にいつまでも出入りすることを嫌っていた。

それで、アーイシャに「私たちは、サーリムだけに、アッラーのみ使いが特別にお認めになった以外、あのような例はみたことがありません。

私たちはだれも養い子を家に入れたくはありませんし、入れることにも同意しません」といった。

乳関係は幼児期に生ずることについて

アーイシャは伝えている

或る人物が私の近くに座っていた時、アッラーのみ使いがおいでになりその様子をごらんになった。

私は、み使いの不快気な表情をみて、「み使い様、彼は、乳親子関係による私の兄弟です」といった。

み使いは、その時、「乳関係の兄弟についてよく考えてみなさい。

乳関係は、腹をすかす幼児期に生ずるものなのです」といわれた。

前記と同内容のハディースは、**アブー・アフワス**によっても伝えられている。

捕虜の女性との性行為について

アブー・サイード・フドリーは伝えている

フナインの戦いの時、アッラーのみ使いは、軍隊をアウタースに送った。

その軍隊は、敵軍と会い、戦闘を行なって敵を敗退させ、捕虜をとらえた。

み使いの教友らは、捕虜になった女性らとの性行為を、彼女らの夫が多神教徒でもあるし、自制するかのようにみえた。

この折、アッラーは、これに関する次のような啓示を下された。

「あなた方に禁止されている者は、夫のある女である。ただし、あなた方の右手の所有する者（奴隷の女）は別である」（クルアーン第 2 章 24 節）

彼女らのイッダ（再婚禁止期間）が終っていれば、彼女らとの性行為は許されるという啓示であった。

アブー・サイード・フドリーは伝えている

アッラーのみ使いは、フナインの戦いの折、小軍勢を派遣した。

このハディースの後半は前記と同内容である。

アブー・サイード・フドリーによるこのハディースは、更に、別の伝承者経路でも伝えられているが、それには、「彼らは、アウタースでの戦いが行われた日に、夫を持つ女らを捕虜としたが、彼女らと性行為を行うことに恐れを抱いた。

この時、**「あなた方に禁じられている者は、夫のある女である。ただし、あなた方の右手の所有する者（奴隷の女）は別である」**（クルアーン第 2 章 24 節）が啓示された」と記されている。

前記と同内容のハディースは、**カターダ**によっても、別の伝承者経路で伝えられている。

出生児の父親に関して

アーイシャは伝えている

サアド・ビン・アブー・ワッカースとアブド・ビン・ザマアは、互いに一人の男の子をめぐって口論していた。
サアドは「アッラーのみ使い様、この子は、私の兄弟、ウトバ・ビン・アブー・ワッカースの息子です。
彼と似ているのをごらん下さい。彼の息子であることがはっきりわかります」といった。
これに対し、アブド・ビン・ザマアは「アッラーのみ使い様、この子は、私の兄弟です。
なぜなら、この子は、私の父のベッドで、父の奴隷女から生れたからです」といった。
み使いは、子供の顔がだれに似ているかごらんになり、ウトバに似ていることがはっきりしていると思われた。
しかしながら、み使いは「アブドよ、この子はあなたのものです。
なぜなら、子供はその子が生れたベッドの所有者のものとされるべきだからです。
姦通者は、石打刑で罰せられます。
ザマアの娘サウダよ、あなたは、この子に会う時には、ヴェールを着けなさいよ（注）」といわれた。
この少年は、その後、サウダをヴェール越し以外には、全くみることがなかった。
なお、これに関連し伝承者の一人ムハンマド・ビン・ルムフの伝えるハディースには「アブド」という言葉は記されてない。

（注）預言者かサウダにこういったのは、その少年が彼女の兄弟ではないためである。
ウトバがザマアの父の奴隷女と姦通したため生れた子供であることを暗示する言葉とも受取れる

前記と同内容のハディースは、**イブン・ウヤイイナ**及び**マアマル**によっても伝えられる。

アブー・フライラはこう伝えている

アッラーのみ使いは、「子供はその生れたベッドの所有者に帰属される。
そして、姦通者には石打刑が科せられる」といわれた。

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

身体的特徴による判断について

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、顔を輝かせ嬉しげな様子で私の処においでになり、私に「（人相見の）ムジャッジズがザイド・ビン・ハーリサとウサーマ・ビン・ザイドをみて、彼らの両足の或る部分の特徴が共通しているといったのをききましたか」といわれた。

アーイシャは伝えている

或る日、アッラーのみ使いは、嬉し気な顔付で私の処においでになりこういわれた。
「アーイシャよ、ムジャッジズ・ムドリジー（注 1）に会いませんでしたか。
彼は、私の家に入り、ウサーマとザイドにビロードをかけて彼らの顔をおおい、両足だけみえるようにしてから、これら二人の足は、互いに共通する特徴があるといった（注 2）」

（注 1）ムドリジ族には、身体の特徴から人間関係を判断することに長けた人か多かったといわれる

（注 2）名前からも判断できるように、ウサーマの父親はザイドであるが、ザイドの妻、即ち、ウサーマの母は、エチオピア系であったため両者の皮膚の色は多少異なっていた。
ここでは、身体的特徴の共通性から両者の親子関係が再確認されたことを預言者は単純に喜んだのである

アーイシャは伝えている

或る人相見が、私たちの家を訪れた。
この折、アッラーのみ使いと共に、ウサーマ・ビン・ザイドとザイド・ビン・ハーリサがいたが、この二人は横になって寝ていた。
この時、その人相見は、両人の足には互に共通する特徴があるといった。
預言者はこれをきいて喜び、かつ、感心して、そのことをアーイシャに話された。

前記と同内容のハディースは、**ズフリー**によっても伝えられる。

妻の家での滞在に関して

ウンム・サラマは伝えている

アッラーのみ使いは、ウンム・サラマと結婚なさった時、彼女の処に三晩お泊りになり「あなたの夫側からの判断では、三晩滞在すればあなたに不足はないと思う。

もし望むならば一週間滞在することも可能であるが、そうすれば、私は他の妻たち全ての処にも一週問滞在せねばならない」といわれた。

イブン・アブー・バクル・ビン・アブドル・ラフマーンは伝えている

アッラーのみ使いは、ウンム・サラマと結婚なさった日、彼女と一緒に夜を過された。

明け方に、み使いは「夫側からいえば、あなたに不足はあるまいと思うが、もしあなたが望むならば私は七日間滞在することにしてもよいし、また、三晩共に過して、その後は順番毎にあなたの処にくることにしてもよい」といわれた。

これに対し、彼女は、「三晩過して下さい」といった。

アブー・バクル・ビン・アブドル・ラフマーンは伝えている

アッラーのみ使いが、ウンム・サラマと結婚し、彼女の処に滞在された後、外に出ていこうとなさった時、彼女はみ使いの衣服の端をとらえて離そうとしなかった。

み使いはこの時、「もしあなたが、そう願うなら、滞在をのばしてあなたともっと一緒にいることができます。

そうなると、あなたとの日数を定め他の妻にもそれを同じにしなければなりません。

それで私は、処女妻の場合には七日間、結婚を体験したことのある女性には三日間、夫がそれぞれ一緒に過すよう日数を決めることにします」といわれた。

前記と同内容のハディースは、**イブン・フマイド**によっても伝えられている。

ウンム・サラマは伝えている

アッラーのみ使いは、ウンム・サラマと結婚された(これに関して、伝承者は様々なハディースを伝えているが、その中のひとつに次の話がある)。

み使いはこの時、彼女に「もし私が一週間、あなたと過したいと望んだ場合、私は、他の妻たちとも一週間過さなければなりません。

もし私が実際にあなたと一緒に一週間過した場合、私は、他の妻たちとも一週間過すことになるでしょう」といわれた。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

すでに妻を持っている者が、新たに処女と結婚した場合、彼は七日間その新婦と過さねばなりません。

またもし、処女（ビクル）だった女を妻としている者が、以前結婚したことのある女性（サイイブ）と新たに結婚する場合には、彼女の処に三晩過さねばなりません。

伝承者の一人ハーリドは、このハディースに関連し、次のように述べている。

「私が『これが、預言者の言葉に由来するということがわかれば、私は信じます』とアナスにいった時、彼は『これはスンナ（預言者の慣行）です』と答えた」

アブー・キラーバはアナスからきいて伝えている

処女と結婚した夫が、七日間彼女と一緒に過すことはスンナである。

ハーリドは、このハディースに関連し「私は、このハディースが預言者の言葉に由来していることがわかれば、なお、良いと思う」といった。

夫人たちを平等に訪れることについて

アナスは伝えている

預言者は、九人の夫人を娶っておられた（注 1）。
預言者は、それら夫人の家に滞在する日数を平等に分割なさったので、最初に泊った夫人の家での順番は、九日後でなければ回ってこなかった。
彼女らは、毎晩、順番に預言者が訪れる夫人の家に集まる習慣であった。
アーイシャの家に預言者がこられた日、ザイナブもきていた。この折、預言者は、間違って、ザイナブの方に手を差し出されたが、アーイシャが「彼女はザイナブです」と叫んだので、（あわてて）手をおひきになった。
このためもあって二人の間で（一寸した）声高ないい争いが起こった（注 2）。
丁度、礼拝のイカーマ（起立）を告げる声がきこえる時刻だったので、たまたま、アブー・バクルもきており、彼女らの争う声をきいた。
彼は、この時、「アッラーのみ使い様、礼拝に行きましょう。
彼女らの口にはごみでも投げ込んで下さい」といった。
預言者らが、礼拝に出て行った後、アーイシャは「礼拝を終えるとアブー・バクルはまたここにやってきて、私を当然叱責することだろう」といった。
預言者が礼拝を終えると、アブー・バクルは彼女の処に来て、言葉厳しく彼女を叱責し「お前は、いつもこのようにふるまっているのか」といった（注 3）。

（注 1）同時期に預言者の妻たちの座を担ったのは、アーイシャ、ハフサ、ザイナブ、ウンム・サラマ、ウンム・ハビーバ、マイムーナ、ジュワイリヤ、サフィーヤ、サウダら九名である。
預言者のマディーナ聖遷以前に死去した最初の妻ハディージャはこれには数えられていない

（注 2）預言者は、順番でもありアーイシャの方に手をのべるべきを、明りがなく、暗かったため、誤ってザイナブの方に手を差し出してしまったのである。
そのため、二人の間で小さな諍が起こったのである

（注 3）アブー・バクルはアーイシャの実父に当る。預言者の面前での彼女の不作法を叱責したのである

妻たちが順番を譲り合うことについて

アーイシャは伝えている

「私は、サウダ・ビント・ザマアほどに、私を好いてくれた女性をみたことがありません。

私も愛情深かった彼女のようになりたいと願っていました。」

老齢になると、サウダはアッラーのみ使いと過すよう決められた日をアーイシャに譲った。

その折には、彼女は「み使い様、私は、あなたと過す日をアーイシャに譲りました」と述べた。

このため、み使いは、アーイシャに、彼女の順番日として余分に二日間をサウダの分から取って割り当てられた。

前記と同内容のハディースは、**ヒシャーム**によっても別の伝承者経路で伝えられている。
なお、これには、「サウダが年をとった時」と記されるなど前文とは異なった表現がみられる。
なおまた、伝承者の一人シャリークの伝えるハディースには「彼女(サウダ)は、預言者が私(アーイシャ)のあと、最初に結婚した女性であった(注)」という言葉が加えられている。

(注)預言者は、最初の妻、ハディージャの歿後サウダと結婚したが、彼女との結婚前にアーイシャと婚約している。

アーイシャが実際に預言者の家に入るのは、預言者がサウダと結婚したあと、しかも、マディーナに移ってからのことである故、ここにみられるアーイシャの言葉は、「彼女が婚約したあと」と理解すべきであろう

アーイシャは伝えている

私は、アッラーのみ使いに自分から進んで身を捧げた女性(注)たちに対し、嫉妬を感じていた。

このような折、アッラーは次の聖句を啓示なされた。

「あなたは妻たちの中の欲する者を去らせ、欲する者を受入れてもよい。また、あなたが退けていた者らを召しても罪にはならない」(クルアーン第 33 章 51 節)

この折、私は、預言者に「アッラーに誓ってあなた方の主は、あなた方の欲望を満足させるため急いでおられるように思えます」といった。

(注)「アッラーのみ使いに身を捧げた女性たち」という言葉は、クルアーンの聖句にみえる**「女の信者でその身を預言者に捧げたという者で、もし預言者が、これと結婚を欲するならば、許される。これはあなただけの特例で、ほかの信者たちには許されない」**(第 33 章 50 節)に関連する。

預言者の妻の一人マイムーナは、婚資を求めることなく自ら申し出て預言者と結婚した敬虔な女性であったといわれる

ヒシャームは彼の父からきいた話を伝えている

アーイシャは常々「女性が男性に自分から身を捧げると申し出るのは、恥ずかしいことではないだろうか」と語っていた。

その後、アッラーは、次の聖句**「あなたは、妻たちの中の欲する者を去らせ、欲する者を受け入れてもよい」**（クルアーン第 33 章 51 節）を啓示されたのであるが、

アーイシャは、この折、「私には、あなたの主は、あなたの欲望を満足させようと急いでおられるように思える」といった。

アターは伝えている

私たちは、イブン・アッバースと共にサリーフで預言者の妻マイムーナの葬式に参列した。

この時、イブン・アッバースは「彼女は、預言者の妻です。

それ故、棺台をひどくゆさぶったり、ぐらつかせたりせず、静かに持ち上げなさい:

アッラーのみ使いは、九人の妻を持たれ、その中八人には機会を平均に割り当てて一緒にお過しになったが、その中一人だけには、その割り当てをなさいませんでした（注）」といった。

アターは、この話に付言して「預言者が一緒に過す機会の割り当てをなさらなかったのは、フヤッイー・ビン・アフタブの娘、サフィーヤに対してでした」と述べている。

（注）イブン・アッバースの言葉は、預言者の妻の一人サウダについて述べたものといわれる。

サフィーヤとしたのは、アターの誤解による。

サウダが老齢のため、預言者と過す己れの割り当て分を、アーイシャに譲った話はこのハディースの前文に記されている

イブン・ジュライジュは前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えている。

なお、これには、「アターが、『彼女（マイムーナ）は預言者の妻たちの中では、マディーナで最後に死んだ女性である』と述べた」と、記されている。

信仰深い女性との結婚に関して

アブー・フライラは伝えている

預言者は、「女は次の四つの理由を基に、結婚の対象とされる。

それらは、彼女の財産、彼女の血統、彼女の美しさ、そして彼女の信仰である。

それ故、信仰深い女性を得るようにしなさい。

あなたの両手が埃だらけになりますように！（注）《しっかりやりなさい！の意》」といわれた。

（注）人を励ます場合にも使われる言葉である

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使い在世の頃、私は或る女と結婚した。

或る日、私が預言者にお会いした時、預言者は、「ジャービルよ、結婚しましたか」といわれた。

私が「はい」と答えると、預言者は「処女（ビクル）とですか、それとも結婚体験者（サイイブ）とですか」といわれた。

私がそれに対し「以前に結婚したことのある女性です」と答えたところ、預言者は「どうして処女と結婚しなかったのですか。

そうすれば、より楽しく遊べたであろうに」といわれた。

この折、私は「み使い様、私には姉妹がいます。それ故彼女（新妻）が、私と姉妹らとの間に上手く立入ってくれるかどうか心配だったのです」といった。

預言者は、「それはよい選択でした（注）。女は、信仰深さ、財産、血統、美しさを理由に結婚の対象とされます。

この次には、信仰深い女を選びなさい。

あなたの両手が埃だらけになりますように！（しっかりがんばりなさい！）」といわれた。

（注）預言者は、ジャービルが、彼の姉妹たちの世話をも期待して、経験をつんだ未亡人を結婚の対象としたことを、良い選択をしたとほめたのである

処女との結婚に関して

ジャービル・ビン・アブドッラーはこう語っている

私は、或る女性と結婚した。

アッラーのみ使いが、私に「結婚したのか」といわれた時、私は、「はい」と答えたが、その折、み使いは「相手は処女だったのか、それとも結婚体験者だったのか」ともいわれたので、それには、私は、「相手は以前結婚したことのある女性です」と答えた。

み使いはこの折、「どうして、処女と結婚して楽しまなかったのか」といわれた。

なお、伝承者の一人、シュウバは、この話をアムル・ビン・ディーナールに語った時彼は「私もジャービルからきいたが、彼はみ使いがこの折、『どうしてあなたは少女と結婚しなかったのか。

そうすれば、あなたは、彼女を楽しみ、彼女もあなたを楽しめたであろうに』といわれた」と話していたと伝えている。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私の父アブドッラーが死去し（注）、九人、または、七人の娘が残された。

私は、一度結婚したことのある女性を妻にした。

或る時、アッラーのみ使いが私に、「ジャービルよ、結婚したのか」といわれたので私が肯定すると、更に「処女とであるのか、それとも、結婚体験者とであるのか」とおたずねになった。

それに対し、私が「み使い様、結婚体験者とです」と答えると、み使いは、「どうして若い娘と結婚しなかったのか。

そうすれば、お互いにもっと楽しく遊べたであろうに。（もしくは、お互いに笑い合い楽しめたであろうに）」といわれた。

私はこの時、「私の父アブドッラーは、九人、または、七人の娘を後に残して、死去しました。

それ故、彼女らと同じ年頃の若い娘を嫁として家に入れる気にはなれなかったのです。

それで、私は、彼女らの世話をし、行儀作法を教えてくれる女性を選んだのです」といった。

み使いは、「アッラーが、あなたに祝福を給わんことを！（もしくは、善いことがあるように！）」といわれた。

（注）ジャービルの父、アブドッラーはウフドの戦い（625 年）の折、殉教した

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーのみ使いは、私にむかって、「ジャービルよ、あなたは結婚したのか」といわれた。

この後半は、前記と同内容である。

なお、これには、「私は、彼女らの世話をし、髪を櫛けずってやる女性と結婚しました」という表現がみられ、最後は、「『よくやった』といわれた」という言葉で終っている。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私たちは、アッラーのみ使いと共に遠征した。

そして、帰途には私は歩みの遅いラクダをしきりに急がせた。

私のすぐ後には、先端に鉄をつけた棒を持ち、ラクダを駆りたててくる人がいた。

その時、私のラクダはかつてないほどの速さで進んでいたが、それに後から追いついてきたそのラクダの乗り手は、私がふり返ってみると、アッラーのみ使いであった。

み使いが、その折、「ジャービルよ、どうして急ぐのか」といわれたので私は、「み使い様、私は新婚者です」といった。

すると、み使いは、「相手は若い娘かそれとも、結婚体験者か」といわれ、私が、「以前結婚したことのある女です」と答えると「どうして若い娘と結婚しなかったのか、そうすれば、お互いに十分楽しめたであろうに」といわれた。

その後、私たちが、到着したマディーナの町に入ろうとした時、み使いは、「待ちなさい。夜（夕刻）、町に入ることにしよう。

そうすれば、乱れた髪の女性は櫛けずり、夫と遠く離れて不細工に過ごしていた女性は身づくろいをすることができる。

そのあと町に入れば、すぐに楽しめるではないか」といわれた。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私は、アッラーのみ使いと共に遠征に出発した。

この折、私のラクダが遅れたので、み使いは、私の処にきて、「ジャービルよ」と呼び、私が「はい、み使い様」と答えると「どうしたのか」といわれた。

私は、その時、「私のラクダは歩みが遅く、疲れているようです。

そのため取り残されました」といった。

すると、み使いは、ラクダから降り、手にもっていた先の曲った杖で私のラクダをつついた後、私に「乗りなさい」といわれた。

私が乗ると、驚いたことに、ラクダは非常に早く歩くようになり、そのためみ使いから離れて先に進みすぎないよう手綱を、折々、引き締めなければならないほどであった。

この道中、み使いは私に「結婚したのか」といわれ、私が肯定すると、「相手は処女であったのか。それとも、結婚体験者であったのか」とまたいわれた。

そして、私が、これに対し、「以前結婚したことのある女です」と答えると「どうして若い女の子を娶らなかったのか。互いに十分遊べたであろうに」といわれた。

私はこの時、「私には姉妹たちがいるので、彼女らをうまく取り締り、髪を梳いてやったり、世話をしてやれる女性を選んだのです」といった。

み使いは、この折また、「もうすぐ家に着くが、家では楽しみが待っているぞ」といわれた。
み使いは、その後「あなたのラクダを売るつもりはないか」といわれ、私が肯定すると、1ウーキヤ《銀単位》で私からラクダをお買い上げになった。
やがて、み使いは（マディーナに）到着なさった。
私が、町に着いたのは朝方であった。
私はすぐにモスクに行ったが、その入口の処には、み使いが立っておられ、「今、到着したのか」といわれた。
私が「はい」と答えると、み使いは「ラクダをそこにつないで置きなさい」といわれ、そのまま、モスクに入って二ラカートの礼拝をなさった。
それで、私も中に入り、二ラカートの礼拝を行ない、そのあと、家に戻った。
み使いは、ビラールに、私のため１ウーキヤの銀を計るよう命じられ、それでビラールが天秤を使って重さを計ったので私はその銀を受取りに行った。
帰りかけた時、み使いが「ジャービルを呼び戻しなさい」といわれたため、私は、またみ使いの処に戻ったが、
その時、私は、“み使いはラクダをお返しになるかも知れない。もしそうであれば、大変、困ったことになる”と思った。
しかし、み使いは、この時「あなたのラクダを連れて行きなさい。
代金も（返す必要はなく）あなたにあげます」といわれた。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私たちは、アッラーのみ使いと共に旅をしていた。
私は、水を積んだラクダに乗っていたため、一行から遅れてしまった。
み使いは、この折、（私が思うに）手に持っていたなにかを使って、私のラクダを打つか、もしくは、突くかなさった。
その後、私のラクダは（早く歩くようになり）一行より先に進みだして、手綱をしめるのに苦労する程になった。
み使いが、私にこの時「ラクダをしかじかの値段で売りますか。
アッラーがお許し給わんことを！」といわれたので私は「アッラーの預言者様、ラクダはあなたのものです」といった。
（その後）み使いが再び、私に「ラクダをしかじかの値で売りますか。
アッラーが許し給わんことを！」といわれたので私はまた、「アッラーの預言者様、ラクダはあなたのものです」と繰り返していった。
この折、み使いは私に対して「あなたは、あなたの父の死後、結婚したのですか」といわれ、私が肯定すると、更に「相手は前に結婚したことのある女性ですか、それとも、処女でしたか」ときかれた。
私は、これに対し「相手は、以前に結婚したことのある女性です」と答えた。

み使いはこの時、「どうして、処女を娶らなかったのですか、そうすれば、互いにもっと楽しみ合えたでしょうに、また、互いに遊ぶことができたでしょうに」といわれた。
このハディースに関連し、アブー・ナドラは、「『これこれのことをしなさい。アッラーが許し給わんことを！』というのは、ムスリムたちが普段に使っていた言葉であった」と述べている。

敬虔な女性について

アブドッラー・ビン・アムルは伝えている

アッラーのみ使いは、「この世に喜ばしいものは多い。
この世で最も喜ばしいものは敬虔なる女性である」といわれた。

女性に関する忠告について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、「女性は肋骨のようなもので、まっすぐにしようとすれば折れてしまう（注 1）。
そのままにしておけば、彼女の丁度肋骨のような曲った部分（注 2）が、あなたの役に立つのです」といわれた。
これと同様のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

（注 1）過度に干渉することなく、女性特有の性行（やさしさ、やわらかさ）を発揮させるようにすればよいの意

（注 2）強情さ、或いは、内気さなどをいう

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、「女性は肋骨でつくられており、真っ直ぐにのばす方法はない。
それ故、もし女性から楽しみを得ようとするならば、彼女らに特有の曲りや偏向性を理解してやり、楽しむようにしなさい。
もし、それらを無理にまっすぐにしようとすれば、折ってしまうことになる。
彼女を折るということは、彼女を離婚することである」といわれた。

アブー・フライラは伝えている

預言者は「アッラーと来世を信ずる者は、もし、何事かをみかけた場合、それに関し、よい言葉使いで話すか、さもなければ、沈黙を守りなさい。
女性には、親切にしなさい。
女性は肋骨からつくられています。
その肋骨の中で最も曲った処は一番先の部分です。
もしまっすぐにしようとすれば、折れてしまいます。
もし、そのままにしておけば、曲りはそのまま残ります。
それ故、女性には親切にしてやりなさい」といわれた。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、「男の信者が女の信者を憎んではならない。
もしも、彼が彼女の性質の惑る面を嫌いであるならば、他の面を好きになるようにしなさい」といわれた。

アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

イブに関して

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、「イブのような女さえいなかったならば、女性は決して、彼女の夫に対し、不誠実な行為はしなかったであろう」といわれた。

ハンマーム・ビン・ムナッビフは伝えている

アブー・フライラは、アッラーのみ使いからきいて、私たちに幾つかのハディースを語った。次のハディースもその一つである。

アッラーのみ使いは、「イスラエルの民さえいなかったならば、食物はかび臭くならず、肉もくさることはなかったであろう(注 1)。

イブさえいなかったならば(注 2)、女性は決して彼女の夫に対し不誠実な行ないをすることはなかったであろう」といわれた。

(注 1)旧約聖書　出エジプト記(16:15-20)には、イスラエルの民(バヌー・イスラーイール)の欲深い者らが、食物を朝まで残しておいたため、虫がついて臭くなったという話が記されている

(注 2)アダムの楽園追放に関しては、クルアーン、旧約聖書、それぞれに異なった記述がみられる。

クルアーン(第 2 章 33 節)には、アダムはイブ共々悪魔にそそのかされたと記され、旧約(創世紀 3:6)には、イブがアダムをそそのかして禁断の実を食べた経緯が記述されている

離婚の書

月経中の女性の離婚に関して

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使い在世時代、イブン・ウマルは、妻と離婚した。

その時、彼の妻は月経中であった。

ウマル・ビン・ハッターブがこのことについて質問したところ、み使いは、次のようにいわれた。

「イブン・ウマルに対し彼の妻を連れ戻し（この月経期が終って）彼女が清浄になり、その後再び月経期に入って、それが終って再び清浄になった時、離婚（タラーク）の宣言をするよう命じなさい。

この時、もし彼が望むならば、そのまま彼女を妻として留めてもよい。

またもし彼が望み、かつ、彼女に（この間）触れてさえいなければ、（最終的に）彼女と離婚させなさい。

これがイッダ（再婚禁止期間）（注）であり、アッラーが女性の離婚に関して命じられたことです」

（注）イッダ（再婚禁止期間）離婚後の、女が再婚できない期間をいう。

待婚期間ともいわれる。

妊娠していない女の場合は二度の月経期を経過するまで、月経期を持たぬ女の場合は45 日間、更に夫が死去した場合は四ヵ月と 10 日がそれぞれ再婚禁止期間とされる

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

彼は、彼の妻の月経中、ただ一度タラーク（離婚）宣言をして、妻と離婚した。

アッラーのみ使いは、彼に対し「彼女を連れ戻し、月経が終るまで、彼の家に留め置き、その後、彼女が彼の家で二度目の月経期に入り、それが終って彼女が清浄になるまで、離婚を待つように」とお命じになった。

そして後、「もしも、彼が、彼女と離婚することを決意しているならば、性行為は一切行わず、彼女が清浄である時離婚すればよい。

これが、離婚女性のためにアッラーがお定めになったイッダ（再婚禁止期間）である」といわれた。

これに関連し、伝承者の一人イブン・ルムフは、彼の伝えるハディースの中に、次の言葉を加えている。

「アブドッラーは離婚問題について質問された時、彼らの一人に『もしも、あなたが、一回もしくは二回のタラーク宣言であなたの妻を離婚した場合には、それを取消して彼女を元に戻すことができます。
なぜなら、アッラーのみ使いは、私にそうするようお命じになったからです。
ただし、あなたが、三度のタラーク宣言で、彼女を離婚した場合には、彼女が他の男性と結婚するまで、彼女はあなたと再婚することを禁じられます。
あなたの妻との離婚に関して命ぜられたこれらのことを守らないかぎり、アッラーに背くことになります』といった。」
なお、イマーム・ムスリムは、このハディースの伝承者の一人ライスの「一回のタラーク宣言で離婚は成立する」という言葉は正しいと述べている。

イブン・ウマルは伝えている
私は、アッラーのみ使い在世の頃、妻と離婚したが、その時、彼女は月経中であった。
私の父ウマルは、この件についてみ使いに話した。
み使いは、「彼（息子のイブン・ウマル）に命じて、彼女を連れ戻させ、月経が終って清浄になり、また、二度日の月経期に入ってそれが終って清浄になるまで家に留めさせ、そのあと、性行為をする前に（最終的に）彼女を離婚するか、またはそのまま留めることにするか決めさせなさい。
これが、アッラーが、女と離婚する時守るよう命じられたイッダの規則です」といわれた。
なお、ウバイドッラーは、「イッダ中に離婚宣言をされた場合はどうなるのか」とナーフィウにたずねたところ、彼が、「『それも一つに数えられる』と答えた」と伝えている。

前記と同内容のハディースは、**ウバイドッラー**によっても伝えられている。

ナーフィウは伝えている
イブン・ウマルは、月経中の妻と離婚した。
（彼の父）ウマルが、預言者にこの件についてたずねたところ、預言者は「イブン・ウマルに対し、彼女を連れ戻し、次の月経期に入るまで離婚をのばすよう、次いでまた、その月経期が終って清浄になるまで離婚をのばすよう、そして、それが過ぎたあと、彼女に触れることなく離婚するよう命じなさい。
これが、離婚する女性に対し、アッラーのお定めになったイッダについての規則です」といわれた。
イブン・ウマルは、月経中の妻と離婚した男について質問された時、「もしも、一度もしくは二度、離婚宣言をした場合であれば、アッラーのみ使いは彼女を連れ戻して次の月経期に入るまでの滞在を許して、更に、それが終って清浄になるまで滞在を許し、その後、彼女と性交渉を持つことなく離婚するようにとお命じになった。

また、あなたが、もし同時に三度離婚宣言を唱えたとしたならば、妻と離婚することに関して命じられた主の教えに背くことになるが、ともあれ、彼女はあなたと別れることになる」と答えた。

アブドッラー・ビン・ウマルは語っている

私が、月経中の妻と離婚した時、私の父ウマルはこのことを預言者に話した。
預言者はお怒りになり、次のようにいわれた。
「彼に、彼女を連れ戻し、彼女を離婚した時とは別の二度目の月経期間が始まるまで彼女を留めておくよう、そして離婚をやむを得ないと考える場合には、彼女が（月経も終り）清浄になった時、性交渉を持つことなく、離婚宣言をするよう命じなさい。
それが、アッラーが命じた離婚に関する定めの期間です」
アブドッラーは、一度離婚宣言を行ない、それによって離婚をしたのであるが、アッラーのみ使いのこの命令に従い彼女を連れ戻した（注）。
これと同内容のハディースはズフリーによっても別の伝承者経路で伝えられており、それには、「イブン・ウマルは『私は彼女を連れ戻したが、しかし、この離婚宣言は有効で、これによって私は離婚したのである』といった」と記されている。

（注）妻を連れ戻すこと、離婚を取消すことは、アラビア語でルジューウと呼ばれる

イブン・ウマルは伝えている

彼が月経中の妻を離婚した時、彼の父、ウマルはこのことを預言者に話した。
すると、預言者は、「彼女を連れ戻すよう彼に命じ、彼女が（メンスも終り）清浄な時、または、妊娠している時（注）、離婚させなさい」といわれた。

（注）生れる子供の父親がだれであるか明白なためであろう。
この場合、別れた夫が生れる子供を要求する権利は認められている

イブン・ウマルは伝えている

彼が離婚した時、彼の妻は月経中であった。
彼の父、ウマルはこのことに関し、アッラーのみ使いに質問した。
この折、み使いは、「彼に命じて、彼女を連れ戻させ、彼女が清浄となり、その後二度の月経に入ってから、再び、清浄になるまで家に留めさせ、そのあと、（最後に）彼女を離婚するか、家にそのまま留めるか決めさせなさい」といわれた。

イブン・シーリーンは伝えている

伝承者として、非難の余地のない或る人物が 20 年前、私に次のハディースを語ってくれた。

イブン・ウマルは、彼の妻に三度目の離婚宣言をしたが、その時、彼の妻は月経中であった。

そのため彼は、彼女を連れ戻すよう命ぜられた。

私はアブー・ガッラーブ・ユーヌス・ビン・ジュバイル・バーヒリーという非常に信頼できる知識の持主に会うまでこのハディースを伝えた人々を批判したこともなく、また、このハディースが、正しいかどうかについて考えたこともなかった。

その彼は、私に、次のように語ってくれた。

私（アブー・ガッラーブ）は、イブン・ウマルにこの件について質問したことがあるが、その折、彼は月経中だった彼の妻に、一度目の離婚宣言を行なったが、彼女を連れ戻すよう命ぜられたと話した。

その時、私が彼に「それは一度目の離婚宣言と認められたのですか」ときくと、彼は「どうして、そうでないのですか、私がそれほど無力者ですか。

それとも愚か者ですか」といった。

前記と同内容のハディースは**アイユーブ**によっても伝えられているが、用語上、多少の異同がみられる。

アイユーブの語った前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられるが、それには次の記述がみられる。

ウマルは、預言者にそれについて質問した。

預言者は、「彼女を連れ戻させ、性交渉を持たぬ清浄な状態の時、離婚させるように」と、お命じになった。

そして更に、「彼女のイッダの初めに、離婚宣言を終えさせよ（注）」といわれた。

（注）一度離婚宣言された女性が、そのイッダ中に、更に、二度目の離婚宣言を受けると、イッダはその二度目の宣言より再開始されることになり、それだけ期間が長くなる。

それ故、イッダ中の再度の離婚宣言は女性に過酷な負担をおわせることになる。

預言者はこの点を案じたのである

ユーヌス・ビン・ジュバイルは伝えている

私は、イブン・ウマルに「或る男が、月経中の妻を離婚した」と話した。

これに対し、彼は「あなたは、アブドッラー・イブン・ウマルを知っていますか。

彼が、月経中の妻を離婚したのです。

そのため、彼の父ウマルは預言者の処に行き、この件について質問しました。
その結果、預言者は、彼に彼女をひきとらせました。
それから、彼女のイッダが始まったのです」と語った。
私はまた、彼（イブン・ウマル）に「或る男が月経中の妻に離婚宣言をした場合、その宣言は有効と認められますか」とたずねたが、その時、
彼は「どうしてだめなのですか！
彼は、無力者ですか、それとも愚か者ですか」といった。

ユーヌス・ビン・ジュバイルはイブン・ウマルの話を次のように伝えている
私は、妻と離婚したが、その時、彼女は月経中だった。
私の父ウマルは、預言者の処にきて、このことを彼に話した。
預言者はこの時、「彼（イブン・ウマル）は、彼女をひきとるべきである。
そして、彼女が清浄な時、彼がそう願うなら、彼女と離婚しても構わない」といわれた。
私（ユーヌス）は、イブン・ウマルに「あなたは、その離婚宣言を彼女の場合、有効だと思いましたか」といった。
それに対し、彼は「どうしてそれがだめだというのですか、あなたは、私（イブン・ウマル）を無力者か、または、愚か者とでも思っているのですか」といった。

アナス・ビン・シーリーンは伝えている
私は、イブン・ウマルに、彼が離婚した女についてたずねた。
彼はこの折、「私が離婚したのは、彼女が月経中の時でした。
このことは、父ウマルの耳に入り、彼はまた預言者に話しました。
それで預言者は『彼（イブン・ウマル）に命じて彼女をひきとらせ、月経期間が終って、彼女が清浄な状態（トゥフル）（注）にいる時、離婚させなさい』といわれたのです」と話し、更に、「それで、私は、その時は彼女を連れ戻し、彼女が清浄になった時、（改めて）離婚したのです」といった。
私（アナス・ビン・シーリーン）は、この時、「彼女の月経中に行なったあなたの離婚宣言は、有効だったと思いますか」といったが、彼はこれに対し、「そう思わないはずはないでしょう！　それほど、私は、無力で愚か者なのですか」といった。

（注）清浄な状態（トゥフル）　月経のない状態のこと。
その清浄な状態の期間はクルウとよばれる

アナス・ビン・シーリーンは伝えている
彼は、イブン・ウマルが次のように話すのをきいた。
私は、妻と離婚したが、この時彼女は月経中であった。

私の父ウマルは、このことを預言者に知らせた。
預言者は、その折、「彼に命じて、彼女を連れ戻させ、彼女が清浄な時、離婚させなさい」といわれた。
私（アナス）は、イブン・ウマルに「あなたは（彼女が月経中の時の）離婚宣言を有効視していますか」ときいたが、これに対し、彼は「当然です」と答えた。
このハディースは、シュウバによっても、別の伝承者経路で伝えられているが、用語上多少の異同がみられる。

イブン・ターウースは、時の父（ターウース）からきいて次のように伝えている
イブン・ウマルは、（ターウースから）月経中に妻を離婚した男について質問された時、「アブドッラー・ビン・ウマルを知っていますか」といった。
彼（ターウース）が「はい」と答えるとイブン・ウマルは「月経中に妻と離婚したのは彼です。彼の父ウマルが、預言者の処に行き、このことを話したところ、預言者は『彼（アブドッラー）に彼女を連れ戻させよ』とお命じになりました」といった。
このハディースに関連し、彼（イブン・ターウース）は「私は父からこれ以上のことは、きいていない」と語っている。

アブー・ズバイルは、アッザの元奴隷、アブドル・ラフマーン・ビン・アイマンからきいて次のように伝えている
アブドル・ラフマーンは、アブー・ズバイルもきいていたが、アブドッラー・イブン・ウマルに「月経中の妻と離婚した男についてどう思いますか」とたずねた。
これに対し、彼は、次のように語った。
アブドッラー・イブン・ウマルは、アッラーのみ使いの在世当時、月経中の彼の妻を離婚した。
彼の父、ウマルは、この時、「アブドッラー・イブン・ウマルが月経中の妻と離婚しました」といって、預言者に（どうすべきか）たずねた。
預言者は、この時、アブドッラーに対し「彼女を連れ戻すように」といわれた。
彼がその通りにすると、更に預言者は、「彼女が清浄になった時、離婚するか、または、このまま留めるか、決めなさい」といわれた。
そして、預言者はその時、次の聖句「**預言者よ、あなたがたが、妻と離婚する時は、定められた期限がきてから（注）、離別しなさい**」（クルアーン第 65 章 1 節）とお唱えになった。

（注）定められた期限がきてからとは、具体的には、「三ヵ月経てまたは、三回の月経をみてから」ということでこれによって妊娠の有無を確かめたのである。
なお、クルアーンには、「定められた期限がきてから」とあるが、このハディース中でイブ

ン・ウマルか唱えた言葉は、「定められた期限の初めに」となっている。
ここではクルアーン本文に従って記した

アブー・ズバイルによる前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられるが、それには、アブドル・ラフマーン・ビン・アイマンは、ウルワの元奴隷であると記されている。

ただし、これに関して、イマーム・ムスリムは「彼が、ウルワの元奴隷と記されているのは誤りで、実際は、アッザの元奴隷であった」と述べている。

三度の離婚宣言に関して

イブン・アッバースは伝えている

アッラーの在世時代、アブー・バクルの時代、更に、カリフ・ウマルの時代の初期二年間には、つづけて唱えられる三回の離婚宣言は一度目分に数えられた。

ウマル・ビン・ハッターブはこれに関し、「人々は、まことに、延期すべきことをも急いで始めるようになってしまった。

もし私たちが、或ることを一部の人々に適用すると、人はすぐそれを他の人たちにも適用してしまう」といった。

イブン・ターウースは彼の父が、アブー・サフバーウからきいた話を次のように伝えている

アブー・サフバーウが、イブン・アッバースに、「あなたは、三度の離婚宣言が、アッラーのみ使い在世の頃、及び、アブー・バクルの時代、更に、カリフ・ウマルの時代の初期三年間には、一度目の離婚分として扱われたことをご存知ですか」ときいた時、

彼は「はい、知っています」と答えた。

ターウースは伝えている

アブー・サフバーウはイブン・アッバースに「（一度で同じ時に）三回離婚宣言を唱えることは、アッラーのみ使いの在世時代やアブー・バクルの時代には離婚成立条件と認められなかったのか、どうか、ということについてのあなたの知識を私たちに与えて下さい」といった。

これに対し、イブン・アッバースは「事実、かつては、認められませんでした。

しかし、カリフ・ウマルの時代、人々が離婚宣言を頻繁に行ない始めたので、成立可能の三回の離婚宣言を一度に、（一息で）、唱えることを彼は許したのです」といった（注）。

（注）つづけて三回離婚宣言を行なった場合それが解消不能の離婚になるのか、または、その三回が一括していわれることで一度の離婚のためと数えられている宣言も解消不能なものであるのか、これらの点、問題となるところで、前者を支持する内容のハディースも一部みられるが、各法学派によって解釈は異なっている

不当な宣言に対する贖罪について

イブン・アッバースは伝えている

離婚の意志もないのに自分の妻に、それを宣言することは違法に当り、贖罪（注）されるべきである。

まことにアッラーのみ使いの行為の中には、あなた方にとって良い模範がみられる。

（注）贖罪（カッファーラ）とは、不履行義務や過失行為に対し償いをすることであるが、それには貧者への食事供応、断食、奴隷解放など様々な方法がある

イブン・アッバースは伝えている

妻を自分にとってふさわしくないとして、その意志もないのに離婚を宣言した場合、その宣言に対しては贖罪されねばならない。

アッラーのみ使いの行為の中には、あなた方にとってよい模範がみられる

アーイシャは伝えている

預言者は、ジャフシュの娘ザイナブのもとで過ごされる時、よく蜂蜜をお飲みになった。

私とハフサは約束し、私たち二人のうち、どちらかの処に預言者がおいでになったら「マガーフィール（注）の樹液の香りがしますが、お食べになったのですか」ということにした。

預言者が、私たち二人のうち、どちらかの処にやってこられた時、この約束通りの言葉をいったところ、預言者は「ジャフシュの娘ザイナブの処で蜂蜜を飲んだのです。もう、飲まないことにします」といわれた。

クルアーンの**「アッラーが、あなたのために合法とされていることを、只あなたの妻たちの御機嫌をとる目的だけで、何故自ら禁止するのか」**（第 66 章 1 節）以後、

「もし二人（アーイシャとハフサ）が悔悟してアッラーに帰るならば」（第 66 章 4 節）までと、

「預言者が、妻の一人にある秘密を打ちあけた時」（第 66 章 3 節）にみられる聖句が啓示されたのはこの時のことで、

これらは全て預言者の「私は蜂蜜を飲んだのです」という言葉に関連するものである。

（注）ミグファール（複数形はマガーフィール）ねむの木の樹液

アーイシャは次のように伝えている

アッラーのみ使いの好物は、お菓子と蜂蜜だった。

アスルの礼拝を終えるとみ使いは、妻たちの処を順番に訪れて親しまれたが、或る時、み使いはハフサを訪れ、いつもより長く彼女の処に滞在なさった。

私（アーイシャ）が、そのことについてたずねると、み使いは、「彼女の家族の女が、彼女

に容器に入れた蜂蜜を贈ったのだが、彼女は、それをアッラーのみ使い様にといって、私に一杯注いでくれたのです」といわれた。
私はその時、「アッラーに誓って、私たちもみ使いに対しなにか策略を考えたい」と思った。
そして、そのことをサウダと、サフィーヤに話し、次のようにいった。
「み使いが、あなたの処に行き、親しくなさった時『み使い様、マガーフィールをお飲みになったのですか』といいなさい。
そうしたらみ使いは、あなたに『いや、違う』といわれるでしょう。
それに対し、あなたは、『それでは、この香りはなんですか』とおたずねなさい。
み使いは、ご自分にいやな臭いがあれば非常に気になさる方ですからあなたに対し、『ハフサが蜂蜜の飲物をだしてくれたのです』といわれるでしょうが、
その時、あなたは『蜂がマガーフィールの蜜を吸ったのでしょう』といいなさい。
私も同じことをみ使いにいいます。サフィーヤよ、あなたも彼にいいなさい」
アッラーのみ使いが、訪れた時の様子をサウダは次のように語っている。
「唯一なる御方に誓って、あなたが、私にいった通りのことを話そうと決心していた時、み使いはドアの入口の真近にきておられました」
（ともあれ）み使いが側近くにこられた時、彼女は「み使い様、マガーフィールをお食べになったのですか」といい、み使いか「いや逢う」といわれたので、彼女は、再び「この香りはなんなのですか」ときいた。
み使いはこの時「ハフサが、私に蜂蜜の飲物をだしてくれたのです」といわれたが、彼女はこれに対し、「蜜蜂がマガーフィールの蜜を吸ったのでしょう」といった。
み使いが、私（アーイシャ）の処にこられた時、私もこれと同じことをいった。
み使いがサフィーヤの処に行かれた時にも、また、サフィーヤは、これと同じことをいった。
その後、み使いがハフサの家を訪れた時、ハフサは「み使い様、蜂蜜をお飲みになりませんか」といったが、み使いは「もう私には必要ない」といわれた。
サウダは「アッラーよ！　私たちはみ使いに蜂蜜を禁じてしまいました」と嘆いたが、その時、私は、彼女に「黙っていなさい」といった。
これと同内容のハディースはヒシャーム・ビン・ウルワによっても別の伝承者経路で伝えられている。

妻に離婚するかどうか決めさせることに関して

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは彼の妻たちに、離婚を望むかどうか、その選択をするよう命じられた。
そして、（私が若かったため気を使われたのであろうが）先ず私に対して、「私は、あなたに離婚のことを話しているのです。
しかし、急いで決める必要はありません。
あなたの両親に相談しなさい」といわれたが、み使いは、私の両親が私に別れるようにとは命じないことをすでに知っておられた。
この折、み使いは、**「力強くいと高きアッラーはいわれた。**
預言者よ、あなたの妻たちにいってやるがよい。
もし、あなたがたが、現世の生活とそのきらびやかさを望むならば、来るがよい。
私は、贈り物を与えて、りっぱに別れよう。
だが、あなたがたが、もし、アッラーとそのみ使い、そして来世の住まいを求めるならば、あなたがたの中で、善行に勤しむ者には、アッラーは偉大な報奨を準備して下さっている」（クルアーン第 33 章 28-29 節）という聖句をお唱えになった。
私は、み使いにこの時、「私は、アッラーとそのみ使い、そして、来世の住まいを求めています。
一体、私はなにについて両親に相談する必要があるのでしょうか」といった。
み使いの妻たちは、皆、私と同じように述べた。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、私たちのうちの誰かの処で（予定外に）一日過ごされる時には、私たちに了解を求められたが、それは次のようなアッラーの啓示が下った後のことであった。
「あなたは妻たちの中の欲する者を去らせ、欲する者を受け入れてもよい」（クルアーン第 33 章 51 節）
このことに関連し、ムアーザはアーイシャに「アッラーのみ使いがあなたに了解を求められた時、あなたはなんといいましたか」と質問した。
彼女は、これに対し「そういわれた時には私は必ず『誰にも私より優先させません』といいました」と答えた。

アースィムは、これと同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えている。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、私たちに選択するようにといわれたが、私たちは、それが、離婚の問題を意味するとは考えなかった。

マスルークは伝えている

「私は、もし私が妻に離婚の選択の機会を一度、或いは、100 度、または、更に 1000 度与えたとしても、彼女が私を夫として選んで、離婚を望んでないことを知っている故気にはしません。

私は、アーイシャにその選択の問題について質問したが、彼女はその時、「アッラーのみ使いは、確かに私たちに選択の機会を与えられたが、それが離婚の宣言でしたか《離婚を迫るものではありませんでしたの意》」といった。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、彼の妻たちに離婚をするかどうか選択させたが、それは離婚宣言を意味するものではなかった。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、私たちに離婚のための選択の機会を与えられた。

私たちは（離婚を選ばず）彼を選んだ。

彼はそれを離婚宣言とは数えていなかった。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、私たちに離婚のための選択をさせたが、私たちは彼を選んだ。

このことは、私たちに対し離婚を示唆するようなものではなかった。

アーイシャによるこれと同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アブー・バクルが、アッラーのみ使いとの面会の許可を求めようとした時、家の戸口の処には人々がたむろしていた。

彼らの誰ひとりとして入室が許されなかったのである。

やがて、アブー・バクルに入室が許可され、彼は中に入った。

そこへウマルもやってきて、み使いとの面会の許可を求め、許されて中に入った。

中ではみ使いが、彼の妻たちに囲まれて黙ったままやや悲しげな様子で座っておられた。

この時、ウマルは預言者を笑わすため、なにか（面白いことを）話してあげねばと思い、

「み使い様、もし、ハーリジャの娘が私に金銭をねだっているところをあなたにみられたら、私は立ち上って彼女の首を打つことでしょうよ」といった。

み使いは、これをきいてお笑いになり、「あなたもみての通り、私の周りにいるこの女たちも金銭を私にねだっているのです」といわれた。

アブー・バクルは、この時立ち上って、自分の娘アーイシャの処に行き彼女の首を打った。

同様に、ウマルも立ち上ってハフサの処に行き、彼女の首を打った。
そして、アブー・バクルとウマルは共に「あなたたちは、み使いに対し、無理な願い事をしているのか」といって叱責した。
彼女たちは「アッラーに誓って、私たちは、み使いに対し、無理な願い事などしていません」と抗弁した。
この後、み使いは、彼女たちを一ヵ月、あるいは 29 日の間、遠ざけられた。
その折、次のような聖句が啓示された。
「預言者よ。
あなたの妻たちにいってやるがよい。
『もし、あなたたちが、現世の生活とそのきらびやかさを望むならくるがいい。
私は、贈物を与えて、りっぱに別れよう。
だが、あなたたちが、もし、アッラーとその預言者、ならびに来世の住まいを求めるならば、あなたたちのうちで善行に勤しむ者には、アッラーは偉大な報奨を準備して下さっている』」（クルアーン第 33 章 28-29 節）
その後、み使いは、最初に、アーイシャの処に行き、「アーイシャよ、私は、あなたに話したいことがあります。
ただし、あなたの両親に相談してから、ことを決めなさい。
返事を急ぐ必要はありません」といわれた。
アーイシャが「み使い様、それはなんのことですか」ときき返すと、み使いは啓示を朗誦なさった。
アーイシャは、その時「私が、両親に相談せねばならないというのは、あなたに関することですか。
私は、アッラーとそのみ使い、そして来世の住まいを選んだのです。
でも、私が今述べたことを、あなたの他の妻たちには黙っていて下さい」といった。
これに対し、み使いは、「私が彼女たちに話さないかぎり、誰もきく人はいません。
アッラーが私を遣わされたのは、あなたたちを悩ましたり、諍をさせるためではありません。
私を遣わされたのはあなたたちに教えるためであり、物事を平易にさせるためです」といわれた。

妻との別居(イーラー(注))に関して

(注)イーラー　一時的に妻と別れること。
イスラーム法では、四か月間、夫婦間の性行為を断つことを誓い別居することを意味する

ウマル・ビン・ハッターブは伝えている

アッラーの預言者が彼の妻たちを遠ざけていた頃のことであるが、私がモスクに入ると、人々は小石で地面を打ちながら(注)、「アッラーのみ使いが、妻たちを離婚なさった」と口々に話していた。
それは、彼女たちが(親族以外の男性の前では)ヒジャーブ(隔離)されるよう命ぜられる前のことであった。
私(ウマル)は「今日こそは、その事実をはっきりと知りたい」と願い、アーイシャの処に行って「アブー・バクルの娘よ、あなたのことで、み使いが迷惑しているときいています」といった。
すると、彼女は「ハッターブの息子よ、私とあなたはそのことについて何の関係もありません。
あなたは、あなたの娘ハフサのことを心配しなさい」といった。
それで、私(ウマル)は、娘ハフサの処に行き、「ハフサよ、お前のことで、み使いが迷惑しておられるときいている。
み使いがお前を愛しておられないことがわかったであろう。
私がお前の父親でなかったら、み使いはお前をとっくに離縁なさったであろう」といった。
これを聞いてハフサは激しく泣いたが、私が「み使いは、どこにおられるのか」とたずねると、「水場の近くの倉庫にいます」と答えた。
私がそこに行くと、み使いの若い奴隷ラバーフが水場の入り口の土間で、なつめやしの木で作った階段のへこみに足をぶらぶらさせながら座っていた。
彼は、み使いが登り降りする際の手助け役をしていた。
私は、この時、「ラバーフよ、み使いに面会の許しを求めてくれ」といったが、ラバーフは部屋をのぞき、それから私の方をみただけで何もいわなかった。
そこでもう一度「ラバーフよ、み使いに面会の許しを求めてくれ」といったが、彼は部屋をのぞき、その後私の方をみただけで、やはり何もいわなかった。
それで、私は声を上げて「ラバーフよ、み使いに、面会の許しを求めてくれ。
み使いは、私が、娘ハフサを弁護するため、ここに来たと予想しておられると思うが、アッラーに誓って、み使いがハフサの首を打つようお命じになれば、私はハフサの首を喜んで打つつもりだ」といった。
私が声を上げたためか、彼は上に登るよう合図した。

（ともあれ）私が傍に行った時、み使いはマットの上に横になっておられた。
私が座ると、み使いは腰布を上に引きあげられたが、覆うものはそれ以外何もなかったため、マットの跡がみ使いの身体の脇に付いた。
私は、この日で、み使いの倉庫の中を見廻したが、そこには 1 サーア量の大麦とそれと同量ほどのミモザ香が部屋の隅に置かれ、半なめし皮がかかっているだけであった。
それらをみて私は涙をとどめることができなかった。
み使いは私の涙をみて、「ハッターブの息子よ、なぜ泣くのだ」といわれた。
私はこの時、「アッラーの預言者様、どうして泣かずにいられましょう。
マットの跡があなたの身体の脇に付いています。
そしてこの部屋には、ほとんど何もありません。
ローマの皇帝やペルシャの王は豪著な生活をしているというのに、アッラーに選ばれたあなたの倉庫がこんな状態とは悲しいかぎりです」といった。
これに対しみ使いは「ハッターブの息子よ、私たちには来世があるというだけで満足ではありませんか。
彼らには現世しかないのです」といわれたので、私は「まことにその通りです」といった。
（ともあれ）私が、部屋に入った時、み使いは怒ったような顔をしておられた。
それで私は、「み使い様、どんなことで夫人たちに迷惑しているのですか。
あなたが彼女たちを離婚しても、アッラーはあなたと共にあり、天使たちも、また、その中のジブリールとミカーエルも、そしてまた、私もアブー・バクルも、更に、多くの篤信者たちも、あなたに付いております」といった。
私がこれほど話したのは滅多にないことであったが、私は、アッラーが、私の発言したことに対し、証言して下さるよう望んでいます。
この後、次のアーヤト・タフイール（選択に関する聖句が啓示された。
「彼が、もし、あなた方を離婚したならば、アッラーはあなた方に優る妻たちを、代りに彼に授け給うであろう」（クルアーン第 66 章 5 節）
「もし互いに共謀して、彼に反抗するならば、アッラーは彼の守護者であられ、また、ジブリールや正しい信者たち、更に、天使たちも皆、彼の支持者である」（クルアーン第 66 章 4 節）
アブー・バクルの娘アーイシャとハフサは預言者の妻たちをけしかけて反抗していた。
それで私はこの時、「み使い様、あなたは彼女たちを離縁なさったのですか」とたずねたのであるが、み使いが否定なさったので、
また、「私はモスクでムスリムたちが小石で地面を打ちながら『アッラーのみ使いは妻たちを離縁なさった』といっているのをききました。
それ故私はここから出て、彼らにあなたが彼女たちを離縁していないと話したいと思います」といった。
み使いは「あなたがそうしたいのなら、そうしなさい」といわれた。

私は、み使いの顔から怒りが消え、普段の表情になり、やがて笑われるまで話を続けた。
笑う度にみ使いは美しい歯をおみせになった。
しばらくして、み使いは倉庫から出て、下に降りて行かれた。
私も同様に降りたのであるが、その時、私はなつめやしの木板のへこみに掴まった。
み使いは、それに反し、何にも触れることなく、地面を歩くような速さで、階投をお降りになったのであった。
この時、私は、「み使い様、あなたは 29 日間、部屋に籠られました」といった。
（当時一か月は 29 日間であった）。
ともあれ、私はモスクの入り口に立ち、声を大きくして「アッラーのみ使いは、彼の妻たちを離縁なさらなかった」と叫んだ。
この頃、次の啓示が下された。
「彼らは、優勢劣勢の情報を得る度に、それをいいふらす。
だが、彼らが、もしそれをみ使い、または彼らの中の権威をゆだねられた者たちにただせば、それを判断できる。
彼らは、必ずそれを知っているのである」（クルアーン第 4 章 83 節）
この事件について、詳しい事情を知ったのは私であった。
また、アッラーが離婚の選択に関する啓示を下されたのもこの折であった。

（注）「小石で地面を打つ」とは、人が物事を考え込んでいる時の動作を意味する言葉である

アブドッラー・ビン・アッバースは伝えている
私は、或る啓示についてウマル・ビン・ハッターブにたずねたいと思っていたが、彼が、その質問に立腹するかも知れないという恐れから、一年ほど、それをひかえていた。
彼が巡礼に出かけた折、私も彼と共に旅立った。
帰路の途中、彼が用便のために、アラクの木陰へ入っていったので、私は彼が戻るまで待ち、それから、一緒に歩きながら、彼に「信者たちの長よ、アッラーのみ使いの妻たちのうちで、協力し合って扶養のための費用を増やすようみ使いに要求して困らせたという二人とは誰のことですか」と質問した。
ウマルは、この時「ハフサとアーイシャです」と答えた。
私は、彼に「アッラーに誓って、私はこのことを一年も前からずっと質問したかったのです。けれども、あなたの感情を害することを恐れて質問できなかったのです」といった。
彼はこれに対し「私が知っていると思うことは、なんでも質問しなさい。
私が、知っている場合には、あなたに話してあげます」といい、次のように語った。
「アッラーに誓って、無明（ジャーヒリーヤ）時代、私たちは、女性（の情況）について、なんら関心を払わなかった。

そうでなくなったのは、アッラーが女性たちについての啓示を下されてからのことであり、
アッラーは、彼女たちの受け取るべき配分量をお決めになった。
（ともあれ）私が、或ることに思いをめぐらしていた時のことでしたが、妻が私に『あなたが、これこれのことをして下さればと願っています』といったので、私は、彼女に『それは、お前には関係ないことです。
私が、しようとすることに、お前が気を廻す必要はありません』というと、彼女は『ハッターブの息子よ、あなたは、だれかに反駁されることをひどく嫌がりますが、あなたの娘は、み使いに反駁し、そのため、み使いは、一日中怒っておられるのですよ』といいました。
それを聞いた私は外套を着て、家から出てハフサの処へ行き『娘よ、お前は、み使いに反抗して、み使いを一日中怒らせてしまったそうではないか』とききました。
ハフサはこの時『アッラーに誓って、私たちでも、み使いに反駁します』と答えたが私はこの折
『娘よ、覚えておきなさい。
私は、お前に、アッラーの懲罰とそのみ使いの怒りを恐れよと警告しておきます。
自分の美しさを過信したり、み使いの愛に増長して、その結果、誤ったことをしてはなりません』といいました。
それから、私は親戚のウンム・サラマを訪れ、彼女のことを話したところウンム・サラマは、次のようにいいました。
『ハッターブの息子よ。
あなたが、み使いと、彼の妻たちの揉めごとまで気を使って、あれこれと干渉するのは奇妙なことです！』
彼女が、私のいおうとしていたことをいえないように話題を外したので、私は、彼女の処を辞去しました。
私には、アンサールの友人がいたが、彼は、私が（預言者との会合の場所に）いなかった時には、そこでの話について伝えにきてくれ、私は私で彼がいなかった時には、それを彼に伝えていました。
当時、私たちは、ガッサーン地方の或る王を恐れ、警戒していました。
この王が私たちに対する攻撃を計画しているといわれていたため、私たちは、いつも、そのことを不安に思っていたのです。
或る日のこと、このアンサールの友人がやってきて扉を叩き、『開けてくれ、開けてくれ』といった。
私は、この時『ガッサーン人たちが来たのか』といったが、彼は、それに対し、『それよりも、もっと深刻なことです。
み使いが、彼の妻たちを遠ざけたのです』と告げた。
私は『ハフサとアーイシャの鼻が、埃まみれになればよい！』といってから、着物をきて、み使いの処に行った。み使いは、その折、水場近くにある倉庫の中におり、そこには、な

つめやしの木で作った梯子を使って、登り降りなさっていた。
ともあれ私が着いた時、み使いの黒人奴隷が、その梯子の端に座っていたので、『私はウマルです。
み使いに、とりついでくれるように』といった。
それで許されて、私はみ使いの傍に行き一部始終を語った。
更に、ウンム・サラマとのいきさつについても話したところ、み使いは微笑なさった。
み使いは、この折マットの上に横になっておられたが、そのマット上には、なにも敷物はなかった。
み使いの頭の下には、なつめやしの繊維を詰めた皮製の枕があった。
また、足もとには、染料に使われるアカシアの木枝が積み上げられていた。
そして、頭の近くには一枚の皮がかけられていた。
私は、み使いの躰の脇にマットの跡がついているのをみて、泣いてしまった。
その時、み使いが、『なんで、泣くのですか』といわれたので、私は、『み使い様、ペルシャの王やローマの皇帝は豪華な暮しをしています。
それなのに、アッラーのみ使いたるあなたが、このように貧しいとは』といった。
すると、み使いは『彼らには現世の享楽があり、あなたには来世がある。
それで満足ではありませんか』といわれた」

イブン・アッバースは語っている。

私は、ウマルと一緒に旅をして、マッル・ザフラーンに到着した。
このハディースの後半は、前記とほぼ同内容であるが、「私(イブン・アッバース)が『その二人の妻とは、だれですか』ときいた時、ウマルは『ハフサとウンム・サラマです』といった」などやや異った記述がみられ、
更に「私(ウマル)がアッラーのみ使いの妻たちの住居に行くと、どの住居からも泣声が洩れていた」及び「アッラーのみ使いは、一か月の間、妻たちから遠ざかることを誓い、29 日が過ぎた後に、彼女たちの処へ行かれた」という言葉が付け加えられている。

イブン・アッバースは語っている

私は、アッラーのみ使い在世の頃、目立ったことをした二人の女性についてウマルに質問したかったが、なかなかよい機会がなかった。
その後、一年ほど過ぎた頃、私はたまたまマッカへの旅で彼に同行することになった。
マッル・ザフラーンに着いた時、彼は、用便のため出かけ、その折、私に「水を入れた容器を持ってくるように」と頼んだ。
私は、それを持って行き、戻ってきた彼にその中の水をかけてやった。
その時、私は、質問のことを思い出し「信者たちの長よ、あの二人の女性とはだれのこと

ですか」とたずねた。

すると彼はまだ私の言葉が終らないのに「アーイシャとハフサです」と答えた。

イブン・アッバースは伝えている

「もし、悔悟して、アッラーに帰るならば、あなたがた二人の心は善い方に傾く」（クルアーン第 66 章 4 節）とアッラーが啓示された預言者の妻たちのうちの二人の女性についてウマルにたずねたいと、私はずっと思っていた。

そうしているうちに、ウマルは、巡礼に旅立ち、私もまた彼と一緒に出かけることになった。

道の途中で、ウマルは脇路に入り、私も水容器を持ってついて行った。

彼が、用をたして戻った時、私は彼の両手に水を注いだ。

彼は、その水でウドゥー（洗浄）を行なった。

この折、私は彼に「信者たちの長よ、アッラーによって『もし、悔悟して、アッラーに帰るならば、あなた方二人の心は善い方に傾く」と啓示された預言者の妻たちのうち二人とはだれのことですか」ときいた。

彼は、この時「これは驚いた！

イブン・アッバースよ、

（ズフリーは『アッラーに誓って。ウマルは、イブン・アッバースが質問した件について話すのを嫌っていたが、しかし、秘密にはしなかった』と述べている）

それは、アーイシャとハフサです」と答え、そのあと、次のように話した。

私たちはクライシュ族のなかでも、女たちに対しては、一方的な強い態度をとる方だったが、マディーナに移住してみると、そこでは、女性たちの権力の方が男よりも強いことを知った。

それで、女たちは、マディーナの女性のそのような態度を見習うようになった。

私の家は、ウマイヤ・ビン・ザイド族が住むマディーナ郊外にあった。

或る日、私が妻を叱責すると、彼女は私に強く反駁した。

私は、彼女が口答えするのを好きではなかった。

その時、彼女は「あなたは、私が口答えするのを嫌がりますが、アッラーに誓って、預言者の妻たちは彼に反駁していますよ。

彼女たちの一人は、怒って昼から夜まで預言者からずっと離れています」といった。

私は、外に出て、ハフサの処へ行った。

そして「お前は、アッラーのみ使いに反抗しているのか」ときいた。

彼女は、この時「はい、そうです」と答えた。

私は、また「お前たち妻の一人は、昼から夜まで、ずっとみ使いから遠ざかったのか」ときいた。

彼女はこれにも「その通りです」と答えた。

私は、この折、「お前たちのなかで、そのようなことをした者は間違っているし、大変な痛

手を受けることになる。
お前たちはみ使いを怒らしたことで、アッラーもお怒りになることを恐れないのか。
そのようなことをすると、身を滅ぼすぞ！
それ故、み使いに反抗してはいけない。
また、み使いにはなにも要求してはいけない。
欲しいものがあれば私にいいなさい。
お前の隣人（アーイシャ）がお前より優雅で、み使いから、より愛されていても、その彼女に影響されて間違ったことをしてはいけない」といった。
私には、アンサールの友人がいた。
私たちは交互にみ使いの処で過し、彼が一日、み使いの処に過すと、別の日に、私がそこで過すという風であった。
彼は、また、啓示やその他の知らせを告げにきてくれたが、私も同様なことを彼のために行なった。
その頃、私たちは、ガッサーンの王が馬を駆って、私たちを攻撃するためにやってくるだろうと専ら噂していた。
或る時、私の友人はみ使いを訪れ、その後、夜、私のところへきて、家の扉を叩き私を呼んだ。
私が外へ出て彼の処へ行くと、彼は「大変なことが起った」といった。
私は、その時「なにごとですか。ガッサーンの王が攻めてきたのですか」ときいた。
彼は、これに対し「いや、違います。
もっと大変で重大なことです。
預言者が彼の妻たちを離縁したのです」といった。
私は「ハフサが間違いをしでかした。
痛手を受けることをしてしまった。
こんなことになるだろうと心配していました」といった。
明け方だったので朝の礼拝をすませ、身仕度を整えてからハフサの住まいへ行ったが、その時、彼女は泣いていた。
私が「み使いはお前たちを離縁したのか」ときくと、
彼女は「わかりません。彼は水場近くの小屋に籠ってしまいました」と答えた。
私は、み使いの黒人召使いの処へ行き「ウマルが面会を求めている」と告げさせた。
召使いはなかに入り、しばらくしてから出てき、「あなたのことを話したのですが、彼は沈黙したままでした」といった。
それで仕方なく、私は、モスクの説教壇の処へ行き、そこに座ったのであるが、その時、モスクには少人数の人たちがおり、そのうちの何人かは泣いていた。
私は暫くの間、思いあぐねてそこに座っていた。
それから再び召使いの処へ行って「ウマルが面会を求めている」と伝えるように頼んだ。

召使いはなかに入り、その後出てきたが、私に対し「あなたのことを話したのですが、沈黙なさったままでした」というばかりだった。
仕方なく私が帰ろうとすると、召使いが呼び戻して「入って下さい。お許しがでました」といった。
それで、私はなかに入り、み使いに挨拶をした。
その時、み使いはマットの上に横になっており、脇腹にはそのマットの跡を残しておられた。
私は、この折「アッラーのみ使い様、あなたは、妻たちを離縁したのですか」ときいた。
すると、彼は頭を上げて「いや、していません」といわれた。
私は「アッラーは偉大なり！
あなたもご存知と思いますが、私たちクライシュ族の男は、女には強い態度を示してきました。
しかし、マディーナにきてみると、ここでは女たちの方が、男らを支配しているようにみえます。
それで女たちは、マディーナの女たちを見習おうとしているのです。
この間も私は妻を怒りました。
彼女が私に口答えをしたので、私は『そうするな』と強く叱責したのです。
彼女は、その時『私の口答えをあなたは非難しますが、アッラーに誓って、預言者の夫人たちは彼に反抗しています。
そればかりか、彼女たちの一人は怒って昼から夜までずっと彼から遠ざかっています』といいました。
私は、その時、『彼女たちのうちで、そのようなことをする者は間違っている。
み使いを怒らせて、アッラーの怒りをかうことを恐れないのか。
身を滅ぼすことになるのに』といいました」と話した。
この時、み使いは微笑なさった。
私は更に、「アッラーのみ使い様、私はハフサの処へ行き『お前の友（アーイシャ）がお前より美しく、アッラーのみ使いの寵愛を受けていても引き込まれてはいけない』と諭しました」とも話した。
み使いは、この時も、また、微笑なさった。
私がこのあと、「アッラーのみ使い様、なにか楽しいことをお話ししたいと思います」というと、それに対し、み使いは「いいですよ」と答えられた。
私は座り直し、頭を上げて家のなかを見廻した。
しかし、アッラーに誓って、その時私の目に入った物は、三点の皮製品の他なにもなかった。
それで私は「アッラーのみ使い様、あなたのウンマ（イスラーム社会）を豊かにするようにアッラーに祈って下さい。
アッラーはペルシャやローマの人々を豊かになさいましたが、彼らはアッラーを信仰して

はおりません」といった。
み使いは、この時、起き上がって座り直し、「ハッターブの息子よ、あなたは、彼らが現世で(アッラーから)良い物を与えられたことを疑問に思っているのですか」といわれた。
これに対し、私は「アッラーのみ使い様、私のための許しを祈って下さい」といった。
み使いは、妻たちに強い怒りを持たれたので、アッラーが彼女らの行為を咎める言葉を啓示するまで妻たちを一ヵ月の間遠ざけることを誓言なさった。
これに関し、ズフリーはウルワからきいたアーイシャの言葉を次のように伝えている。
「29 日の夜が過ぎると、アッラーのみ使いは、私の処においでになった。
私を最初に、他の妻たちへの訪れも再開なさった。
この時、私は、『み使い様、あなたは一ヵ月の間、妻たちを訪問しないとお誓いになりましたが、私が数える限りでは、29 日の夜が過ぎた時点で、私の処においでになりました』といった。
すると、み使いは『一ヵ月は 29 日間です』とお答えになり、つづいて、『アーイシャよ、私は離婚の選択についてあなたに話しておきます。
しかし、結論を急いではいけません。あなたの両親に相談してから決めなさい』といわれた。
そして、私のため、次の聖句「**預言者よ、あなたの妻たちにいってやるがよい。**
『もし、あなたがたが、現世の生活とそのきらびやかさを望むならくるがいい。
私は、贈り物を与えてりっぱに別れよう。
だが、あなたがたが、もし、アッラーとその預言者、そして、来世の住まいを求めるならば、あなたがたのうちで、善行に勤しむ者には、アッラーは偉大な報奨を準備して下さっている』」(クルアーン第 33 章 28-29 節)を朗誦なさった。
アッラーに誓って、み使いは、私の両親が、み使いとの離婚を許さないことを知っておられました。
それで、私は『両親に相談しなくてはならないのでしょうか。
私はアッラーとそのみ使い、そして、来世の住まいを望んだのです』といった。」
この話に関連し、マアマルは、アイユーブからきいて次のように伝えている。
アーイシャは「私があなたを選んだことを他の妻たちには話さないで下さい」といった。
預言者は、この時、「アッラーが、私を遣わされたのは、み言葉を伝えさせるためであって、苦しみをもたらさせるためではありません」といわれた。

離婚と扶養義務に関して

ファーティマ・ビント・カイスは伝えている

アブー・アムル・ビン・ハフスは遠く家を離れていた時、妻を離縁した。
それは、復縁ができない最終的な離縁であった。
彼は、その折、代理を通じて大麦を彼女に贈ったが、彼女がそれに満足しなかったので、
彼は「アッラーに誓って、お前には、私たちになにも請求する権利はない」と告げた。
そのため、彼女は、アッラーのみ使いの処へ行きこのことを訴えた。
み使いは、彼女にこの折、「あなたには、彼からなんら扶養費を貰う権利はありません」といわれ、彼女にはウンム・シャリークの家でイッダ《夫婦関係解消の後、再婚ができない一定の期間》を過すようお命じになった。
しかし、その後「ウンム・シャリークの家には、私の教友たちがよく訪れる（注）それ故、この期間をイブン・ウンム・マクトゥームの家で過すのがより適当だろう。
彼は盲人であるし、あなたも気兼ねなく衣服を脱ぐことができるだろう。
イッダが終ったならば私に報告しなさい」といわれた。
この後の話を彼女は次のように語った。
私は、「イッダが終わりました。
ムアーウィヤ・ビン・スフヤーンとアブー・ジャフムの二人が私に結婚の申し込みをしています」とみ使いに話しました。
み使いは、その時「アブー・ジャフムは彼の肩から杖を降ろしていません《女を打つ男ですの意》。
ムアーウィヤは自分で使える金がなく貧乏です。
ウサーマ・ビン・ザイドと一緒になりなさい」といわれた。
私は、彼が嫌いでした。
しかし、再度「ウサーマと一緒になりなさい」とみ使いがいわれたので、私は、彼と結婚しました。
アッラーは、私に人が羨むほどの幸せをお与え下さいました。

（注）ウンム・シャリークは有力な一族出の女性だったので、親戚の多くが彼女を訪問していた。
預言者は、ファーティマがイッダの期間をこの家で過せば、血縁関係もない多くの訪問者に会うことになりかねないので彼女にとっては適当でないと判断したのである

ファーティマ・ビント・カイスは伝えている

預言者の在世時、ファーティマの夫は彼女を離縁した。
彼女の夫は、最低額の扶養費を彼女に渡しただけであった。

それをみた時、彼女は「アッラーに誓って、このことをアッラーのみ使いに訴え、もし、私に扶養費を受け取る権利があれば、十分な額を彼から受け取ることにし、もし、ないのなら、彼からなにも受け取らないことにしたい」といった。
彼女は「私がこのことをみ使いに話した時、み使いは『あなたには、扶養を受ける権利も住まいを要求する権利もありません』といわれた」と語った。

ファーティマ・ビント・カイスは伝えている
彼女の夫マフズーミーは、彼女を離縁した。
そして、彼女に扶養費を支払うことを拒否した。
そのため、彼女はアッラーのみ使いの処に行きこのことを話した。
み使いは、「あなたには、扶養を受ける権利はありません。
イブン・ウンム・マクトゥームの処へ行き、イッダの期間、そこで過しなさい。
彼は盲人故あなたは、気兼ねなく衣服を脱ぎ替えることができます」といわれた。

アブー・サラマは、ダッハーク・ビン・カイスの姉妹ファーティマ・ビント・カイスからきいて、次のように伝えている
アブー・ハフス・ビン・ムギーラ・マフズーミーは彼女（ファーティマ）を（復縁不可能な）三回目の離婚宣言によって離縁し、その後、イエメンに旅立った。
彼の一族は「私たちには、あなたを扶養する義務はありません」と彼女に告げた。
ハーリド・ビン・ワリードは仲間と共にマイムーナの家におられたアッラーのみ使いを訪れ、「アブー・ハフスが、彼の妻を三回の離婚宣言で離縁しましたが、彼には扶養の義務はないのでしょうか」とたずねた。
み使いは、これに対し「扶養費を受け取る権利は、彼女にはありません。
彼女は、イッダ（再婚禁止期間）を守る義務があります」といわれた。
それから、み使いは、使いを送り、彼女に「自分のことを性急に決めないように。
ウンム・シャリークの家へ移るように」と指示なさった。
その後、み使いは、再度、使いを送り「最初にマディーナに移住してきた人たち（ムハージルーン）が、ウンム・シャリークの家をひんぱんに訪問するので、イブン・ウンム・マクトゥームの家に移った方がよい。
彼は盲人故、あなたがヴェールを脱いでも、彼にはあなたをみることはできないでしょう」と伝えた。
彼女は、彼の家に移った。
イッダの期間が終ると、アッラーのみ使いは彼女をウサーマ・ビン・ザイド・ビン・ハーリサと結婚させた。

ファーティマ・ビント・カイスは伝えている

私は、マフズーム族の男と結婚した。

彼は私を三度の離婚宣言で離縁した。

私は彼の家族に扶養費を要求する手紙を送った。

この後半は、前記のハディースの内容と変らない。

アブドル・ラフマーン・ビン・アウフは伝えている

ファーティマ・ビント・カイスは、アブー・アムル・ビン・ハフス・ビン・ムギーラと結婚した。

その後、彼（アブー・アムル）の離婚宣言によって、彼女を離縁した。

彼女は、アッラーのみ使いの処へ行き、夫の家を出ていいのかどうかついて質問した。

み使いは、その折彼女に盲人イブン・ウンム・マクトゥームの家に移るようお命じになった。

このハディースに関連しマルワーンは、離縁された女が、イッダの期間が終わる前に夫の家から出て行ってもよいとする意見を正しいと証言することを拒否した。

ウルワは、また、アーイシャがファーティマ・ビント・カイスの言葉に異議を唱えたと伝えている。

これと同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

ウバイドッラー・ビン・アブドッラー・ビン・ウトバは伝えている

アブー・アムル・ビン・ハフス・ビン・ムギーラは、アリー・ビン・アブー・ターリブと共に、イエメンへの旅に出かけた。

そこで彼は、彼の妻に離縁を伝えたが、まだ（復縁が許されない）最後の離婚宣言は残されていた。

彼は、ハーリス・ビン・ヒシャームとアイヤーシュ・ビン・アブー・ラビーアに彼女に扶養費を払うように頼んだ。

しかし、彼らは、彼女に「アッラーに誓って、私たちには、あなたが妊娠していない限りあなたに扶養費を払う義務はありません」と伝えた。

そこで、彼女は預言者の処に行き彼らの意見を話したが、預言者も、「あなたには、扶養費を受ける権利はありません」といわれた。

彼女はまた、その時、夫の家を去って、別な場所へ移る許可を求めたが、預言者はそれをお許しになった。

そして彼女がこの折、「アッラーのみ使い様、私はどこへ移れば良いのでしょう」とたずねると、「イブン・ウンム・マクトゥームの家に移るがよい。

彼は盲人故、あなたが衣服を脱いでもあなたをみることができないからです」といわれた。

イッダの期間が終った後で、預言者は彼女をウサーマ・ビン・ザイドと結婚させた。

マディーナの知事マルワーンは、彼女に直接このハディースについての真偽を問わせる

ために、カビーサ・ビン・ズワイブを派遣した。
しかし、彼女が話した内容について、マルワーンは否定的で、「私たちは、このハディース
を一人の女性からしかきいていない。
私たちは、多くの人々が話しているハディースを正当なものとして採ることにしたい」といった。
マルワーンのこの言葉がファーティマに伝わると、彼女は**「私とあなたの間には、アッラーの言葉があります。**
アッラーは「彼女らを、家から追い出してはならない」（クルアーン第65章1節）（注）といわれた」と述べ、
更に、「これは復縁の許される離縁についていっているのです。
それでは、復縁の許されない離婚の場合には、どうしたらよいのでしょうか。
どうしてあなた方は女がみごもっていないなら扶養の義務はないというのですか。
それならば、また、なにを根拠に彼女を拘束しておくのでしょうか」といった。

（注）これに関連するクルアーン啓示には他にも**「かの女たちを、あなたがたの暮している所で、あなたがたの力に応じて、住まわせなさい。**
かの女らを窮屈にして困らせてはならない。もし、妊娠しているならば、出産するまでの費用を彼女たちに与えなさい」（第65章6節）かある

シャービーは伝えている
私は、ファーティマ・ビント・カイスを訪問し、彼女に、アッラーのみ使いが裁断を下されたこと（即ち、イッダ期間の扶養費と住居）について質問した。
その時、彼女は、彼女の夫が復縁の許されない離縁を彼女にいい渡したといい、更に、次のように語った。
「私は、アッラーのみ使いに訴えて、住居と扶養費について夫と争いました。
しかし、み使いは、私に住居も扶養費も与えることを認めず、私にイッダ中イブン・ウンム・マクトゥームの家で過すようお命じになりました」

前記と同内容のハディースは、**フシャイム**によって別の伝承者経路で伝えられている。

シャービーは伝えている
私たちは、ファーティマ・ビント・カイスを訪問した。
彼女は、私たちになつめやしの実と大麦粉をとかした飲物を出してくれた。
その時、私は彼女に、女性は（復縁のできない）三度目の離婚宣言によって離縁された後、イッダの期間をどこで過すべきかについて質問した。

彼女はこの折、「私の夫は、三度離婚宣言して私を離婚しました。
預言者は、私にイッダの期間私の両親の家で過すことをお許しになりました」と答えた。

ファーティマ・ビント・カイスは伝えている
預言者は、「三度目の離婚宣言により離縁された女には、住まいと扶養費を要求する権利はない」といわれた。

ファーティマ・ビント・カイスは伝えている
私の夫は、私を三度の離婚宣言を唱えて離縁しました。
私は夫の家を去り、別の場所に移ろうと決めました。
それで、預言者の処に行きましたが、彼はその折、「あなたの従兄弟アムル・ビン・ウンム・マクトゥームの家へ移るがよい。
そこで、イッダの期間を過しなさい」といわれました。

アブー・イスハークは伝えている
私は、アスワド・ビン・ヤズィードと一緒にモスクのなかで座っていた。
そこにはシャービーもいて、ファーティマ・ビント・カイスが語ったことを私たちに話してくれた。
それは、アッラーのみ使いが彼女に住まいも扶養費も要求する権利がないとの判断を下されたという話であった。
その時、アスワドは、手に小石をつかみ、彼に向けて放り投げると、「あなたに災いがあるように！
そのようなことを語るとは！」といった。
ウマルは、これに関連し、次のように述べている。
私たちは、ただ一人の女の言葉だけを信用して、アッラーの聖典の教えや私たちの預言者のスンナを無視するようなことがあってはなりません。
なぜなら、私たちには彼女が正しく覚えているのか、或いは、忘れたのか、わからないからです。
彼女には、当然、家も扶養費も与えられるべきだからです。
アッラーは「**かの女らに、明白な不貞がないかぎり、期限満了以前に、家から追い出してはならない。また出て行かせてはならない**」（クルアーン第 65 章 1 節）と啓示なさっているのです。

アブー・イスハークによる前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

ファーティマ・ビント・カイスは伝えている

彼女の夫は、彼女を三度日の離婚宣言により、離縁した。

アッラーのみ使いは、彼女には住まいも扶養費も要求する権利はないと裁断なさった。

この折み使いは、彼女に、「イッダの期間が終了したら私に告げなさい」といわれたので、彼女はそれを報告したが、それまでにムアーウィヤとアブー・ジャフム、それにウサーマ・ビン・ザイドが彼女に求婚していた。

み使いは、これに関し、「ムアーウィヤには財産がないし、アブー・ジャフムは、女をよく打つ男です。

しかし、ウサーマ・ビン・ザイドは……」といわれた。

この時、彼女は手を上げて、彼女がウサーマを嫌っているとの意思表示をした。

しかし、み使いは「アッラーとそのみ使いの言葉に従うのがあなたにとって良いのです」といわれた。

彼女は「それで、私は彼と結婚しました。

その結果、私は幸福になれたのです」といった。

ファーティマ・ビント・カイスは伝えている

私の夫アブー・アムル・ハフス・ビン・ムギーラは、アイヤーシュ・ビン・アブー・ラビーアを私の許へよこし、離縁を伝えさせた。

この時、夫は5サーアの量のなつめやしの実と、5サーア相当の大麦を彼に持たせてよこした。

私は彼に「私の生活費はこれだけなのですか。私はイッダの期間をあなたの家で過すこともできないのですか」といったが、彼は「そうです」と答えるのみであった。

それで、私は、身仕度をして、アッラーのみ使いの許へ行った。

み使いはこの時「あなたの夫は何度離婚宣言を唱えましたか」といわれ、私が「三度です」と答えると、「アイヤーシュの言葉通りです。

あなたには、扶養費を要求する権利はありません。

イッダの期間は、あなたの従兄弟イブン・ウンム・マクトゥームの家で過しなさい。

彼は盲人だから、あなたは気にすることなく、彼の前で衣服を脱ぐことができます。

イッダが終ったら私に連絡しなさい」といわれた。

私は、この折、「ムアーウィヤとアブー・ジャフムが私に求婚しています」と話した。

すると、預言者は「ムアーウィヤは、貧しく困難な状態です。

また、アブー・ジャフムは女を打つ厳しい男です。

あなたは、ウサーマ・ビン・ザイドと結婚しなさい」といわれた。

アブー・バクル・ビン・アブー・ジャフムは伝えている

私とアブー・サラマ・ビン・アブドル・ラフマーンは、ファーティマ・ビント・カイスの処へ行った。
私は、彼女に彼女の離婚について、質問した。
彼女はこの時「私は、アブー・アムル・ビン・ハフス・ムギーラの妻でした。
彼は、ナジュラーンの戦役に出征しました」と語った。
この後半は、前述のハディースと同内容であるが、「彼女は『私は、彼（イブン・ザイド）と結婚しました。
アッラーは、イブン・ザイドとの私の結婚に名誉を給わりました。
そして、また、アッラーは、イブン・ザイドとの私の結婚に祝福を給わりました』と語った」という言葉も記されている。

アブー・バクルは伝えている

イブン・ズバイルの時代、私とアブー・サラマは、ファーティマ・ビント・カイスを訪問した。
その折、彼女は私たちに、彼女の夫が最終的な離婚宣言によって彼女を離縁したと語った。

この後半のハディースは、前記と同内容である。

ファーティマ・ビント・カイスは語っている

私の夫は、私に復縁が許されない三度目の離縁をいい渡した。
アッラーのみ使いは、私には、住まいと扶養費を要求する権利はないと裁断なさった。

ヒシャームは彼の父の言葉を伝えている

ヤヒヤー・ビン・サイード・ビン・アースはアブドル・ラフマーン・ビン・ハカムの娘と結婚した。
その後、彼は彼女を離婚し、彼の家から彼女を去らせた。
ウルワは、彼の一族のこのような行為を批難した。
すると、彼らは、「ファーティマ・ビント・カイスは、夫の家から出ていったではないか」と反駁した。
ウルワはこれに関し、次のように語った。
「私は、アーイシャの処へ行きこのことについて話したが、その折、彼女は『ファーティマ・ビント・カイスが、そのようなハディースを話すことが、そもそも、よくないのです』といった」

ファーティマ・ビント・カイスは伝えている

彼女は「アッラーのみ使い様、私の夫は、私に復縁の許されない三度目の離縁をいい渡しました。
私は、自分が困った状態になるのを心配しています」といって訴えた。

そのため、み使いは、彼女に（或ることを）命じられ、それに従って彼女は別な家へ移った。

アーイシャは語っている

ファーティマが、そのこと、つまり、離婚した女性には「住まいも扶養費も要求する権利はない」と話すのはよくないことです。

アブドル・ラフマーンは彼の父カーシムからきいて、こう伝えている

ウルワ・ビン・ズバイルは、アーイシャに、「夫から復縁不可能の離縁をいい渡されて、ハカムの娘某が、夫の家を出たことを知っていますか」ときいた。

アーイシャは、これに対し、「彼女は誤ったことをしました」と答えた。

ウルワは、また、「あなたは、ファーティマの言葉（注）をきいていますか」とたずねた。

彼女は、この時、「ファーティマが、あのように話すのがよくないのです」と答えた。

（注）クルアーン第65章6節《既述》にもみられるように、離婚女性の住まい及び生活費は、イッダ期間中は前夫がみることになっている。このファーティマの場合は、彼女の特別な事情を配慮した預言者による例外的な裁断とみるべきであろう

イッダ中の行動に関して

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私の母方の叔母は離縁された。

或る時、(外で)なつめやしの実を採集している叔母をみかけた男が、イッダ中の彼女の外出を批難した。

それで、彼女は預言者の処へ行き、そのことを話した。

この折預言者は、「あなたが、(外出して)なつめやしの実を集めるのは差し障りないことです。

そのため喜捨をしたり、他人に親切な行為をすればよいのです」といわれた。

出産とイッダに関して

ウバイドッラー・ビン・アブドッラー・ビン・ウトバ・ビン・マスウードは伝えている

彼の父アブドッラー・ビン・ウトバは、ウマル・ビン・アブドッラー・ビン・アルカム・ズフリーに手紙を書き、その中で、スバイア・ビント・ハーリス・アスラミーヤを訪問して（出産によりイッダが終了することに関し）彼女が、アッラーのみ使いに、質問した折のみ使いの教えについて、たずねるよう頼んだ。

それでウマル・ビン・アブドッラーはアブドッラー・ビン・ウトバに手紙を書き、スバイアが彼に語った言葉を、次のように報告した。

彼女は、アーミル・ビン・ルアイー一族の一人で、バドルの戦役に参加したサアード・ビン・ハウラと結婚したその後、彼は別離の巡礼に参加しその途中死去したが、この時、彼女は妊娠していた。

彼女が出産したのは、彼の死後、間もなくだった。

産褥を終えると、彼女は、求婚者たちのために化粧して身を飾った。

この折、アブー・サナービル・ビン・バアカク（アブド・ダール族の出身）が彼女を訪問し、「あなたは化粧をしているが、どういうことですか。多分あなたは、結婚したいのでしょうが、しかし、アッラーに誓って、あなたは四ヵ月と10日のイッダ期間を経なければ、結婚はできません」といった。

スバイアは、つづけて語った。

彼が、こう話した時、私は身仕度を整えて、夕方ではあったがみ使いの処に行き、み使いに質問した。

み使いはこの時私に、出産を終えれば結婚が認められるという（宗教上の）法規を私に教えて下さった。

そして、もし、私が望むなら、「結婚しなさい」といわれた。

これに関連し、イブン・シハーブは「私は、出産した女、または、産褥にある女が、結婚してもなんら害はないと思う。

ただし、これはまだ清浄になっていない彼女と夫が性交渉を持たない場合に限られる」と述べている。

スライマーン・ビン・ヤサールは伝えている

アブー・サラマ・ビン・アブドル・ラフマーンとイブン・アッバースが、共々アブー・フライラの家に集まった。

そこで、彼らは、夫が死去してから、数日後に出産をした女の問題を議論した。

イブン・アッバースは「この場合、イッダは（四ヵ月と10日または、出産までの期間の）二つのうち、より長い（期間の）方が妥当である」と述べ、一方、アブー・サラマは、「イッダは出産と共に終了する」といった。

そして、双方共互いに、この件についての自説を主張した。
この時、アブー・フライラは、「私は、甥のアブー・サラマの意見を支持する」といった。
（ともあれ）彼らは、イブン・アッバースの元奴隷、クライブをウンム・サラマの処へ使いにやり、この件について質問された。
やがて、彼が戻り次のように伝えた。
ウンム・サラマは「スバイア・アスラミーヤは夫の死後、数日も経ないうちに出産した。
彼女がそのことをアッラーのみ使いに話した時、み使いは彼女に結婚するよう、お命じになった」といった（注）。

（注）クルアーンには**「妊娠している者の場合（イッダの）期間は、かの女が重荷をおろす《出産》までである」**（第 65 章 4 節）と記されている。

出産と共にイッダは終了し、寡婦は再婚することが許される

ヤヒヤー・ビン・サイードは、前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えている。
なお、それには、「彼らは、ウンム・サラマの許へ使いを出した」とあるだけで、クライブの名は記述されてない。

イッダ中の化粧に関して

ザイナブ・ビント・アブー・サラマは伝えている

私は、預言者の妻ウンム・ハビーバを訪問した。

彼女の父アブー・スフヤーンが死去した頃のことであったが、彼女は、黄色い香水、または、それと同類の香水を求め、下女にそれを試めさせてから、自分の両頬に付けていた。

その時、彼女は、「アッラーに誓って。

私には、香料は必要ありませんが、私は、アッラーのみ使いが説教壇で、『アッラーと来世を信じる女は三日以上、喪に服することは許されない。

しかし、夫の喪に服する場合は別で、それは四ヵ月と 10 日である』（注）といわれるのをききました。

（それ故、父の喪が終ったので化粧するのです）」といった。

さて、私は、また、ザイナブ・ビント・ジャフシュを彼女の兄が死んだ頃に訪問した。

彼女は香水を求めそれを肌に付けていたが、その折、彼女は「アッラーに誓って。私は香料をほしいとは思いませんが、アッラーのみ使いが説教壇で『アッラーと来世を信じる女は、三日以上喪に服することは許されない。

しかし、夫の喪に服す場合は別で、それは、四ヵ月と 10 日である』といわれるのをききました。

（それ故、兄の喪が終ったので私は化粧したのです）」といった。

ザイナブはつづけてこう語った。

私は、私の母ウンム・サラマが、次のように話すのをききました。

或る女が、み使いの許へやって来て「アッラーのみ使い様、私の娘の夫が死んだのですが、娘の目の中に異常がみられます。

私たちはクフル《目もとを黒くする化粧剤》を使ってもよいでしょうか」とたずねた。

み使いは、「駄目です」と二回または三回、ただ、それだけを繰り返していい、その後、「イスラーム以前には、あなたたちは動物の糞を投げる機会もなく一年間過したが、今は四ヵ月と 10 日だけ待てばすむことです」といわれた。

フマイダは、次のように語った。

「私は、ザイナブに『一年たつと動物の糞を投げるとはどういうことですか』とたずねた。

彼女は『（イスラーム以前には）女の夫が死ぬと、女は小屋に籠って、粗末な服を着て過し、一年間は香水やそれに類するものを一切使用できませんでした。

女の処には、ろばや山羊、或いは鳥が運ばれ、女は手でそれを擦りました。

そして、女が手で擦った動物が死ぬと、その時には女は家から出られたのです。

なお、その折には動物の糞を与えられ、それを投げることになっており、それが終ると、女は初めて自分の好きな香水、または、それに類する化粧品を使うことができたのです』と

いった」

（注）イッダ期間中及び服喪中の女性には、化粧は一切禁じられる

ザイナブ・ビント・ウンム・サラマは伝えている

ウンム・ハビーバの親戚が死んだ頃に、彼女は黄色い香水を求めた。

彼女はそれを、彼女の腕に擦りつけてから次のようにいった。

「私が、このような行為をするのは、アッラーのみ使いが、『アッラーと来世を信じる女は、夫の死去については四ヵ月と 10 日、それ以外には三日間を越えて喪に服してはならない』といわれるのをきいたからです」

このハディースをザイナブは、彼女の母、また、預言者の妻ザイナブ、更にまた、預言者の妻たちのうちの数人からきいたと語っている。

ザイナブ・ビント・ウンム・サラマは彼女の母からきいて、こう伝えている

或る女が夫を失った。

彼女の親族の者らは彼女の両目に痛みがあるようなので、心配して預言者の処へ行った。

そして、預言者に、彼女がアイシャドーを使用するための許しを求めた。

この時、預言者は「あなたたち女性は、かつて、一年間家に籠もり、最も悪い服を着て暮らしたものです。

そして（イッダの終り頃）たまたま、犬が道を通った時には動物の糞を投げつけ、イッダの期間が終わると、ようやく外に出ることを許されたのです。

そのような時代もあったというのに、たった四ヵ月と 10 日の期間を、あなたがたは待てないというのですか」といわれた。

フマイド・ビン・ナーフィウは二つのハディースを伝えている。

そのひとつはウンム・サラマからきいた化粧品に関する話であり、他のひとつは彼女を含む預言者の妻たちからきいた話である。

ただし、後者以外にはザイナブの名は記されていない。

ザイナブ・ビント・アブー・サラマは伝えている

ウンム・サラマとウンム・ハビーバが話をしていた。

それは、或る女がアッラーのみ使いの許を訪れて、女の娘婿が死亡したことを告げ、娘の目がやつれてみえるのでアイシャドーの使用を認めて下さいと頼んだ時、

み使いが、「あなたたちは、かつて一年過ぎるまで待ち、それが終ると動物の糞を投げたものですが、今は化粧が許されるまでたった四ヵ月と 10 日辛抱するだけです」といわれたという話であった。

ザイナブ・ビント・アブー・サラマは伝えている

アブー・スフヤーンの死去の知らせがウンム・ハビーバに伝えられた時、その後、三日目に彼女は黄色い香水を求めた。

そして、それを腕と頬に擦りつけてから次のようにいった。

「私は、実際には、これらのものが必要ではありません。

ただ、アッラーのみ使いが『アッラーと来世を信じる女は、夫の服喪については四ヵ月と10日、それ以外の服喪は三日間を越えて行なってはいけない』といわれたのでこうしたのです」

サフィーヤ・ビント・アブー・ウバイダは**ハフサ**、または、**アーイシャ**、或いはこの両人からきいて、次のように伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーと来世（または、アッラーとそのみ使い）を信じる女は、夫が死亡した場合以外には、三日間を越えて、服喪してはならない」といわれた。

前記と同内容のハディースは**ナーフィウ**によっても伝えられている。

サフィーヤ・ビント・アブー・ウバイダは伝えている

私は、ウマルの娘で預言者の妻ハフサが、預言者による前記と同内容のハディースを語るのをきいた。

なお、これには「女は夫の死から四ヵ月と 10 日間、化粧をしてはならない」という言葉もみられる。

サフィーヤ・ビント・アブー・ウバイダは、預言者の妻たちのうちの何人からかきいて、前記と同内容のハディースを伝えている。

アーイシャは伝えている

アッラーのみ使いは、「アッラーと来世を信じる女は、夫が死去した場合以外は、三日間を越えて、死者のための喪に服してはならない」といわれた。

ウンム・アティーヤは伝えている

アッラーのみ使いは「アッラーと来世を信じる女は、三日間以上死者のための喪に服してはならない。

ただし、夫が死亡した場合は、四ヵ月と 10 日服喪しなければならない。

なお、この間、女は、染色した衣服を着てはいけない。

許されるのは編み布（アスブ）による衣服のみである。

アイシャドーを付けてはならない。

更にまた、月経が終った後の清めのため少量使う以外に、香水や香料を使用してはいけない」といわれた。

前記と同内容のハディースは、**ヒシャーム**によっても別の伝承者経路で伝えられるが、これには用語上多少の異同がみられる。

ウンム・アティーヤは語っている

私たちは、夫のための服喪期間、即ち、四ヵ月と 10 日以外は、三日間を越えて死者のための喪に服することを禁じられた。
そしてまた、アイシャドーを使用すること、香水に触れること、更に、染色された衣服を着ることなども禁じられた。
ただ、月経が終った後身体を洗う時、少量の香料、または、化粧水を用いることは許されている。

呪詛の書

タイトルなし

（注）リアーン　呪記という意味であるが、これに関して、クルアーン第 24 章（御光章）には 6 節から 9 節にかけて「**自分の妻を姦通の疑いで訴え、自分だけしか、証人かいない時には、アッラーに誓って、嘘でないと四度繰り返して証言する**（6 節）、
五度目に、もし、自分が嘘をついたなら、アッラーに呪詛がかかるようにと誓うがよい（7 節）。
女が、刑罰をまぬがれるには、男が嘘つきであるという証言をアッラーにかけて四度繰り返し（8 節）、
五度目に、もし男の言葉が本当であるならアッラーの怒りが自分の頭にふりかかれと誓わなければならない（9 節）」と記されている。
クルアーンによる離婚は、この規定に基づくものであり、夫が、その妻を姦通の疑いで非難してから、リアーンを宣することを拒み、かつ、証人もいないとなれば、妻を単に誹謗したかどで苔打刑に処せられる（遠峯四郎「イスラム法」に拠る）

サフル・ビン・サアド・サーイディーは伝えている

ウワイミル・アジラーニーが、アースィム・ビン・アディー・アンサーリーの処へやってきて、「自分の妻が、他の男と一緒にいるのをみつけた男はどうすべきか、意見をきかせて下さい。
夫は、その男を殺すべきですか。
そして、報復されて殺されるのですか。
彼はどうしたらいいのですか。アースィムよ。
私に代って、この件について、アッラーのみ使いにきいて下さい」といった。
それで、アースィムはみ使いに、このことを質問した。
しかし、み使いは、このような問題を嫌い答えたくない様子だった。
そのため、アースィムはみ使いから話をきくのが苦痛になり、質問をやめた。
アースィムが、家族の処に帰ると、ウワイミルが彼の許へやってきて、「み使いは、何といったのですか」とたずねた。
この時、アースィムは、彼に「あなたが、持ってきた問題は良くありません。
み使いは、私が質問した問題を嫌われたようです」と話した。
するとウワイミルは「アッラーに誓って。
私は、この件についての意見をきくまでは安心できません」といって、み使いの処へ行った。

み使いは、その時、人々と一緒に座っておられた。
ウワイミルはそこで「み使い様、自分の妻が、他の男と一緒にいるのをみつけた夫は、どうすべきか教えて下さい。
夫はその男を殺すべきでしょうか。
そして、あなた方はその夫を報復としてまた殺すのでしょうか。
その夫はどうしたらいいのですか」ときいた。
み使いは、この時、「あなたとあなたの妻に関する聖句が啓示された。
それ故、行って、彼女を連れてきなさい」といわれた。
これに関連し、伝承者サフルは、「彼ら二人共、この時、もし嘘偽の証言をした場合には、アッラーの呪詛がかかるようにと誓った」と述べ、そして、更に次のように語った。
「私は、この時、アッラーのみ使いの許で人々と一緒にいたのであるが、一通りの誓いを終えるとウワイミルは、『み使い様、妻をそのまま家に留め置くとしたら、私は嘘をついたことになります』といって、み使いが命じる前に、(復縁のできない)三度の離婚宣言を唱えて妻を離婚した。」
なお、このことについてイブン・シハーブは「互いに呪詛し合う者同志にとっては当然の帰結である」といった。

サフル・ビン・サアドは伝えている

アジラーン族出身のウワイミル・アンサーリーは、アースィム・ビン・アディーの許を訪れた。
このハディースの後半は、前記と同内容であるが、それには、「そして、離婚は、呪詛し合う者同志の慣行となった」及び、
「彼女は身籠っていた。
彼女の息子は、(父の子とは認知されず)母の血筋となった。
そして、そのような場合、息子は彼女の遺産を継承し、彼女もまた、アッラーが彼女のために定めた配当分を彼(息子)から継承することになった」などという言葉が、記されている。

イブン・シハーブは、呪記し合う者たち及び呪詛の慣行について、サーイダ族出身のサフル・ビン・サアドの、話を元に、次のように語っている

アンサール(マディーナ出身のムスリム)の或る男が、預言者の処にきて、「アッラーのみ使い様、自分の妻が、他の男と一緒にいるのをみつけた夫についての意見をおきかせください」といった。
このハディースの後半は前記と同内容であるが、次の言葉が付加されている。
「彼らは、モスクで、互いに、呪詛をかける誓いを行なったが、その時、私もモスクにいた」
及び
「アッラーのみ使いが、離婚を命じる前に彼は妻に(復縁の許されない)三度目の離婚を

いい渡した。
彼は、預言者のおられる処で彼女と別れたのである。
預言者はこの折、『呪詛する者同志は、全て離婚することになる』といわれた」

サイード・ビン・ジュバイルは伝えている

ムスアブ(ビン・ズバイル)が統治していた頃のことであるが、私は、お互いに呪詛をかけ誓言した者は離別すべきであるか、どうかについて人から質問された。
私には、なんと答えていいのかわからなかったので、マッカのイブン・ウマルを訪ねた。
私が召使いに面会の取次をしてくれるようにと頼んだ時、召使いは「ウマルは休息中です」と答えた。
しかし、ウマルは、私の声をききつけて、「イブン・ジュバイルですか」といい、私が「そうです」と答えると、「入りなさい。
アッラーに誓って、あなたが、こんな時間にここに来たのは大切な用事があってのことに違いない」といった。
私が、中に入った時、彼は敷布の上に横になり、なつめやしの繊維を詰めた枕にもたれかかっていた。
私はこの折、「アブー・アブドル・ラフマーンよ、呪詛をかけて誓った者同志は離別すべきでしょうか」と質問した。
これに対し、彼は、次のように話した。
「アッラーを讃えます！
はい、その通りです。そのことについて最初に質問したのは、某の息子、某でした。
その男は『アッラーのみ使い様、自分の妻の不倫をみつけた夫は、どうすればいいのでしょうか』とみ使いに質問しました。
このような問題は、話すにしても、黙っているにしても、重大なことです。
預言者は、これに対し、沈黙したままなにもお答えになりませんでした。
しばらくしてから、当事者である別の男がきて、「私が、あなたの質問した正にその問題に直面しているのです」といった。
アッラーは、この時、御光の章**「彼らの妻たちを非難する者たちは」**(クルアーン第 24 章 6-9 節)に始まる聖句を啓示された。
み使いは、この啓示を朗誦された後、その男に説教し、忠告なさった。
そして、「現世での罰は、来世の罰よりも軽いのです」といわれたが、
その男は、これに対し、「いいえ、真理と共にあなたを遣わされたアッラーに誓って。
私は彼女を中傷するような嘘は申しておりません」といった。
預言者は、この男の妻を呼び、彼女に説教し、忠告なさった。
そして、「現世での罰は、来世での罰より軽いのです」といわれたが、
彼女も、この折、「いいえ、真理と共にあなたを遣わされたアッラーに誓って。

彼は嘘をついています」といった。
彼ら二人の証言に対する誓いは、先ず、男の方から始められた。
彼は、自分が真実なことを、アッラーにかけて四度誓い、そして、五度目に「もし、自分の言葉が嘘偽なら、アッラーの御怒りが自分の上に下るように！」（注）と述べた。
次いで、女が呼ばれたが、彼女はアッラーにかけて、彼（夫）の言葉が、嘘偽である二とを四度誓い、そして、五度目に、「もし、夫の言葉が真実ならば、アッラーの御怒りが自分の上に下るように！」と述べたじこのあと、み使いは二人を離別させた。
サイド・ビン・ジュバイルによるこのハディースは別の伝承者経路でも伝えられているが、それには、彼（サイード・ビン・ジュバイル）の言葉が次のように記されている。
「ムスアブ・ビン・ズバイル時代に、私は呪詛し合っている者同士の問題について質問されたが、私にはそれに関してなんと答えてよいのかわからなかった。
それで、私は、アブドッラー・ビン・ウマルの許へ行った。
そして「呪詛し合う者同士は、離別されるべきでしょうか」とたずねた。
この後半の記述は、前記と同内容である。

（注）クルアーン第 24 章 6-9 節に記される言葉である

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、呪詛をかけた者同士に対して「あなたたちの行為についての明細書は、アッラーかお持ちですあなたたちのうちどちらかは、嘘を申し立てているに相違ありません。
あなたはこの女に対し、もはやなんらの権利もありません」といわれた。
この時、彼は「み使い様、払った婚資はどうなるのでしょう」といった。
み使いは、これに対し「あなたには婚資を返すよう請求することはできません。
あなたが真実を話しているのなら、その婚資は彼女と性交渉を持ったことに対する償いとなり、また、あなたが彼女を中傷するため嘘偽を申し立てているのなら、それはあなたから遠のき、彼女の方に一層、権利があることになります」といわれた。
ズバイルは、このハディースに関連し、次のように伝えている。
スフヤーンは、アムルがサイード・ビン・ジュバイルからきいた話を伝えているが、それには、「私（サイード・ビン・ジュバイル）は、アッラーのみ使いがそれについていわれたことをイブン・ウマルからきいた」と記されている

イブン・ウマルは語っている

アッラーのみ使いは、アジラーン族の者二人を離別させ、「アッラーは、二人のうち、どちらかが嘘言者であることをご存知ですしあなたたちのうち悔悟する者はいませんか」といわれた。

サイード・ビン・ジュバイルは伝えている

私は、イブン・ウマルに、呪詛を誓うこと（リアーン）について質問した。

その折、彼は、預言者からきいた前述と同内容のハディースを語った。

サイード・ビン・ジュバイルは伝えている

ムスアブ・ビン・ズバイルは呪詛をかけて誓った者同士を離別させなかった。

サイードはこれに関連し「このことがアブドッラー・ビン・ウマルに告げられると、彼は、『預言者は、アジラーン族の者二人を離別させた』と語った」と伝えている。

ナーフィウはイブン・ウマルからきいて、こう伝えている

アッラーのみ使い在世の頃、ある男が自分の妻に呪詛をかけて誓った。

この時、み傾いは彼らを離別させた。

そして「息子に関する権利は女性にありますか」と問われた時、「そうです」といわれた。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは、アンサールの或る男とその妻に呪詛をかけて誓うよう命じた。

そして、その後、二人を離別させた。

ウバイドッラーはこれと同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えている。

アブドッラーは伝えている

私たちが、金曜日の夜、モスクにいた時、アンサールの一人がやってきて次のようにいった。

「もし、或る男が、自分の妻が他の男と一緒にいるのをみつけ、そのことを他人に話した場合（注 1）、あなた方はその男を鞭で打つのですか。

また、もし、その男が彼（妻と一緒にいた男）を殺した場合、あなた方はその男を殺すのですか（注 2）。

もし、その男が黙っているとすれば、彼の怒りを抑えておくことになります。

アッラーに誓って。私はこの件について、アッラーのみ使いに質問したいのです」

翌日、彼はみ使いの処にきて、「自分の妻が、他の男と一緒にいるのを夫がみつけ、そのことを他人に話した場合、あなた方はその夫を鞭で打つのですか。

またもし、夫がその男を殺したなら、あなた方はその夫を殺すのですか。

もし、彼が黙っているとすれば、彼の怒りは治まることはないでしょう。

（一体どうすべきでしょうか）」といった。

み使いはこの時、「アッラーよ、この問題についてご教示下さい」と祈った。

呪詛（リアーン）に関する聖句「**自分の妻を批難するもので、自分以外に証人のない場合**

は」（クルアーン第 24 章 6 節）が啓示されたのは、この折のことであった。
その後、この男は人々の前で詰問されることになった。
男と彼の妻は、み使いの許にきて、私方とも呪詛をかけて誓った。
その男は自分が真実なことをアッラーにかけて四度誓い、そして五度目に「もし、自分の言葉が嘘偽ならアッラーの御怒りが自分の上に下るように！」といった。
このあと、彼の妻も呪詛をかけ誓い始めたが、その時み使いは（よく考えてから誓わせるため）「一寸待ちなさい」といわれた。
しかし、彼女はそれを拒否し、呪詛の誓いをつづけた。
彼女が立ち去ったあと、み使いは、「あの女は、多分、縮れ毛の黒い子供を生むことだろう」といわれた。
後に彼女が生んだのは、やはり縮れ毛の黒い子供であった。

（注 1）（カズフ）中傷のこと。
なお、これは女性の貞節についての中傷に限られるクルアーン第 24 章（御光の章）4 節には「**貞節な妻を批難して、四名の証人をあげられない者には、80 回の鞭打ちを加えよ。決してこのような者の証言を受け入れてはならない**」と記されている

（注 2）（キサース）報復のこと。
イスラーム刑法では、殺人罪や傷害罪には報復を行なうことを認めている

アアマシュは前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えている

ムハンマドは伝えている
私はアナス・ビン・マーリクがリアーン（呪詛）についての知識に詳しいと思い、質問した。
この折、彼は次のように話してくれた。
「ヒラール・ビン・ウマイヤは自分の妻を、バラーア・ビン・マーリクの母方の兄弟シャーリク・ビン・サフマーウと姦通したとして批難した。
ヒラールはイスラーム史上初めて呪詛（リアーン）をかけて誓った人物であった。
彼は事実、妻を呪詛したのであるが、
その折アッラーのみ使いは、『彼女が色白で黒い髪を持ち、明るい目付きをした子供を生んだらそれはヒラール・ビン・ウマイヤの子に相違ない。
またもし、彼女が縮れ毛でやせた躰付きをし、瞼の部分に陰りのある子供を生んだら、それは、シャリーク・ビン・サフマーウの子に違いあるまい』といわれた。
やがて彼女は子供を生んだが、それは縮れ毛で瞼の部分に陰りのある子供だった」

イブン・アッバースは伝えている

アッラーのみ使いの処で呪詛（リアーン）の問題が話題になった時、アースィム・ビン・アディーもこのことについて発言した。

たまたま娘が家に戻ると、同族の男が「自分の妻が他の男と一緒にいるのを見付けた」と訴えてきたので、低は「私の言葉をこれで立証したい」といって、その男を連れてみ使いの処に行った。

その男はみ使いに、自分の妻が他の男と一緒にいるところを見付けたといって訴えた。

その男はやせ型で、肌がやや黄色く、髪も柔らか気の様子をしていた。

彼の妻と姦通したと訴えられた男は、肉付きよく小麦色の肌をした大柄な男だった。

み使いは「アッラーよ、真偽を明らかにして下さい」と祈った。

その後女は出産したが、その子の顔付きは女の夫が「妻と一緒にいるのをみつけた」といった男と似ていた。

み使いは彼らに、呪詛をかけて誓言することを求めた。

これに関連して、或る男が、モスクで、イブン・アッバースに「彼女はみ使いが『もしも私が証拠を持たないのに、誰かに石を投げつけるとしたら、私はこの女にこそ石を投げつけたであろう』といわれた当の女ですか」ときいた。

イブン・アッバースはその時、「いや、彼女ではありません。

その女は、社会に害悪をまきちらした女でした」と答えた。

イブン・アッバースによるこのハディースは、別の伝承者経路でも伝えられているが、それには「肉付きよく、縮れからみ合った髪の」という表現がみられる。

アブドッラー・ビン・シャッダードは伝えている

イブン・アッバースの許で、呪詛をかけて誓い合う者同志のことが話題になった。

この折、イブン・シャッダードは「その二人は、預言者が『証拠もなしに誰かを石打つとすれば、私はその女を石打つであろう』といわれた人たちですか」ときいた。

イブン・アッバースはこれに対し、「彼女は、その女とは違います。

しかし、彼女が姦通したことは明白です」といった。

アブー・フライラは伝えている

サアド・ビン・ウバーダ・アンサーリーは、「アッラーのみ使い様、自分の妻が他の男と一緒にいるのをみつけた夫は、その男を殺すべきでしょうか」と質問した。

み使いはこれを否定なさった。

サアドは更に、「どうしてだめなのですか。

私は、真実をあなたにもたらした御方に誓っておたずねしますが」といった。

み使いはこの時「（そのような場合には）あなたたちの指導者のいう言葉をよく注意してききなさい」といわれた。

アブー・フライラは伝えている

サアド・ビン・ウバーダは「アッラーのみ使い様、もし私の妻が他の男と一緒にいるのをみつけた場合、私は証人が四人現れるまで待つべきでしょうか」と質問した。

み使いは「その通りです」といわれた。

アブー・フライラは伝えている

サアド・ビン・ウバーダは、「アッラーのみ使い様、もし、私の妻が他の男と一緒にいるのをみつけた場合、私は四人の証人が現れるまで彼に触れてはならないのでしょうか」と質問した。

み使いは、「その通りです」といわれた。

彼はそれに対し、「ともあれ、真理を携えたあなたを遣わされた御方に誓って申しますが、私はその前に、私の剣を直ちにその男にむけることでしょう」といった。

アッラーのみ使いは、この時「あなたたちの指導者の言葉をよく注意してききなさい。

指導者というものは、あなたたちよりも名誉を重んじます。

私はその指導者よりも名誉を大切にします。

アッラーは私よりもずっと名誉を重んずる方です」といわれた。

ムギーラ・ビン・シュウバは伝えている

サアド・ビン・ウバーダは「私の妻が他の男と一緒にいるのをみつけたなら、私はその男を剣で打ちます。

それも峰の方ではなく、刃で打ち倒すのです」といった。

これをおききになったアッラーのみ使いは、「あなたはサアドが名誉を重んずることに驚きましたか。

アッラーに誓って。

私は彼よりも名誉を重んじ、アッラーは私よりも更に名誉を重んじられますしそれ故、アッラーは公然であれ、秘密裏であれ、忌まわしいことが行なわれることを禁じられたのです。

アッラーよりも、名誉を重んじる方はいないのです。

またアッラーよりも、心広く弁明をきこうとする方はおられません。

それ故にこそアッラーは、み使いたちを、福音をもたらす者として、また、警告を告げる者として遣わされたのです。

アッラー以上に、、心から讃美されることを好む方はおられません。

アッラーを讃美する者には、それ故にこそ天国に入ることを約束されたのです」といわれた。

アブドル・マリクは、前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えているが、それには「（剣の）峰の方ではなく」及び「なにもいわずに」などという言葉がみられる。

アブー・フライラは伝えている

ファザーラ族の男が、預言者の許にやってきて「私の妻は黒い肌をした子供を生みました」といった。

預言者は、この時「あなたはラクダを所有していますか」といわれた。

その男が「はい」と答えると、預言者は更に「それらはなに色ですか」といわれた。

その男が「赤毛です」と答えると、預言者は、また「そのなかには茶褐色の毛色もありますか」といわれた。

その男は、これに対し、「はい、茶褐色のラクダもいます」と答えた。

預言者は更にまた「その色はどうして生じたのですか」といわれた。

その男がこの時「先祖がえりの血筋でしょう」と答えると、預言者は「彼女の生んだ子供も先祖がえりの血筋なのでしょう」といわれた。

ズフリーは前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えている。
なお、**マアマル**の伝えるハディースには、「彼は『アッラーのみ使い様、私の妻は黒い肌色の子を生みました』といった。
彼はその子を、当時、自分の子として認めようとしていなかった」とあり、更に、このハディースの最後には「預言者は、彼がその子供を認知しないことを許さなかった」という記述がみられる。

アブー・フライラは伝えている

砂漠のアラビア人（ベドウィン）が、アッラーのみ使いの許へやってきて、「み使い様、私の妻は黒い肌色の子を生みました。

私は、その子を自分の子供として認めません」といった。

預言者は、この折「あなたはラクダを所有していますか」といわれ、男がこれを肯定すると更に、「どんな毛色をしていますか」とおききになった。

その男は、「赤毛のラクダです」と答えたが、預言者は更にまた「そのなかには茶褐色のラクダもいますか」といわれた。

その男は、この時、「はい、茶褐色のラクダもいます」と答えた。

預言者は、この後、「その色はどうして生じたのですか」といわれたが、男はこれに対しては「多分、先祖がえりの血筋でしょう」と答えた。

それで預言者は、最後に「彼女の生んだ黒い肌色の子も多分、先祖がえりの血筋なのでしょう」といわれた。

アブー・フライラは前記と同内容のハディースを別の伝承者経路でも伝えている。

奴隷解放の書

奴隷解放に関して

イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いは次のようにいわれた。

「共同で所有している奴隷を解放しようとする者は、もし奴隷の値に相当する十分な資金のある場合、奴隷の正当な値を決めた後、共同所有者にそれぞれの負担金を払わねばならない。

このようにして奴隷は解放されるが、それ以外の場合には、解放しようとする者の負担分だけ奴隷は解放されることになる（注）」

（注）共有の奴隷を解放する場合には、他の共有者の負担相当分の償いをすれは個人でも解放することは許される。

共有者全員によって解放されない場合は、奴隷自身が不足分を払って自らの自由を買うことになる

イブン・ウマルによる前記と同内容のハディースは、別にも幾つかの伝承者経路で伝えられている。

奴隷が自らを解放することに関して

アブー・フライラは伝えている

預言者は、「二人に共有されている奴隷が、そのうちの一人から解放された場合、この奴隷の完全な解放はこの（奴隷を解放した）人物にかかっている」といわれた（注）。

（注）半解放状態から奴隷を完全に自由身分にするため、別の共有者を説得するか、または、奴隷に働き口を世話して自らの自由を買うための金を稼がせるなどの手段を考えてやることが必要である

アブー・フライラは伝えている

預言者は次のようにいわれた。
共同で所有している奴隷を解放しようとする者は、資金の余裕があれば完全に解放してやるべきである。
もしその者に十分な金がなければ、奴隷は完全な自由を得るための金を支払うべく自分で働かねばならない。
ただし、過酷な労働は強いられるべきてはない。

サイード・ビン・アブー・アルーバは前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えているが、それには「彼（奴隷を解放した共有者の一人）に公正に決められた奴隷の値の残りの部分を払うための十分な資金がない場合は、奴隷は自らの解放のために働くことが必要であるが、過酷な労働を強いられてはならない。」と記されている。

カターダはイブン・アブー・アルーバによる前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えているが、それには、「彼（奴隷）の正当な値が決められるべきである」という言葉がみられる。

奴隷を解放した者の権利に関して

イブン・ウマルは伝えている

アーイシャは、若い女奴隷を買いその後解放することにした。
しかし、女奴隷の主人側は「彼女をあなたに売ってもいいが、条件があります。
それは、彼女の持つ財産の相続権をそのまま私たちのものとすることです」といった。
アーイシャはこのことをアッラーのみ使いに話した。
み使いはこれに対し「それは、あなたにとって問題にならないことです。
解放された奴隷の財産の相続権は解放した者に帰属するからです」といわれた。

アーイシャは伝えている

バリーラは、アーイシャの許へやってきて自分を解放するために助けて欲しいと頼んだ。
しかし、彼女は契約に規定されている額をそれまで全く払っていなかった。
それでアーイシャは「あなたの主人の処へ戻りなさい。
もし、私があなたに代って、あなたが自由になるための契約金額を払ってもよいというの
でしたら、あなたの財産相続権は私に帰属することになります。
私は彼らさえ同意すれば、この支払いをする準備をしておきます」といった。
バリーラはそのことを彼女の主人の家族に話したが、彼らは拒否して「もし、アーイシャが
アッラーのために、お前に良いことをしたいと望むなら、そうするのは一向に構わない。
しかしお前の財産相続権は私たちのものです」といった。
アーイシャは、その件についてアッラーのみ使いに話した。
み使いはその折「その女奴隷を買いなさい。そして解放してやりなさい。
財産相続権は解放した者に帰属するのです」といわれた。
み使いはその後立ち上って、「アッラーの聖典に記されていないことを条件とする人々は、
一体なにを考えているのか。
アッラーの聖典に記されていないことを条件とした者の言葉は無効である。
それがたとえ100回条件としてつけられたとしても、アッラーの条件の方が最も正当であり、
最も有効なものなのです」といわれた。

預言者の妻**アーイシャ**は伝えている

バリーラが、私の許へやってきて「アーイシャよ、私は、自分の主人の家族と9ウーキヤ
量の銀で、自由身分になるための契約を結びました。
毎年1ウーキヤを払うことにしました」といった。
このハディースの後半は、前記と同内容であるが、これには、「アッラーのみ使いは、『あ
なたにとって問題にならないことです。
彼女を買ってから解放してやりなさい。』といわれた」

及び「アッラーのみ使いは、人々が、集まっている処で、立ち上り『アッラーを讃え、賞讃致します！』と唱えた。
そして後に」という言葉が記されている。

アーイシャは伝えている

バリーラが私の許へやってきて「アーイシャよ、私の主人の家族は私との間で 9 ウーキヤ量の銀で、私を自由にするための契約を結びました。
毎年 1 ウーキヤを九年間払うことになっています。
この支払いについて私を助けて下さい」といった。
私は、彼女に「あなたの主人の家族が望むなら、私は一回で全額を払い、あなたを自由にしてあげます。
しかし、もし、私がそうすれば、あなたの財産相続権は、私のものになりますよ」といった。
バリーラは、そのことを、彼女の主人の家族に告げたが、彼らは、財産相続権が彼らに帰属するならば、承諾するという条件を出して、アーイシャの言葉を拒否した。
彼女が私の処へやってきてそのことを話した時、私は彼女を叱った。
バリーラは、その時、「アッラーに誓って。彼らが同意しないのですから、もう不可能です」といった。
アッラーのみ使いは、彼女の言葉を耳にし、私に事情をおたずねになった。
それで、私がこれまでのいきさつを話したところ、み使いは、「その女奴隷を買い、解放してやりなさい。
財産相続権はそのままにしておきなさい。
そうしたとしても、奴隷の財産を相続する権利は解放した者に帰属するのです。
彼らにはそれを主張する権利はないのです」といわれた。
それで、私はみ使いの言葉通りにした。
み使いは、その夜に説教をなさり「アッラーを讃美致します！」と唱えてから、次のようにいわれた。
「アッラーの聖典に記されてもないことを条件とする人々は、一体なにを考えているのですか。
アッラーの聖典に記されていない条件は、たとえ、その条件が 100 回きめられたとしても無効です。
アッラーの聖典に記される言葉が、最も真実であり、アッラーによって示された条件が、最も正当なのです（注）。
あなたたちの中には、『しかじかの奴隷を解放しなさい。
しかし、奴隷の財産相続に対する権利は私のものです』という者たちがいるが、これは一体どういうことですか。
奴隷の財産相続の権利は、その奴隷を解放した者に帰するのです」といわれた。

（注）クルアーン第 24 章（御光の章 33 節）には、これに関連し、「あなたがたの右手が、持つ者《奴隷》のうち、（解放の証明）証書を求める者があって、あなたがたが、彼らの善良さを認めるならば、その証明を書きなさい。
なお、アッラーが、あなたがたに与えられた、資財の一部を、彼らに与えなさい」と記されている

ヒシャーム・ビン・ウルワは、前記と同内容のハディースを、別の伝承者経路で伝えている

なお、伝承者の一人ジャリールは「バリーラの夫は奴隷だった。
アッラーのみ使いは、（その結婚を解消してまで、彼女が自由身分になるのかどうかについて）彼女に選択させた。
彼女は、夫との結婚関係を解消し、み使いは、彼女の夫が自由身分の者であれば、彼女にこのような選択の機会は、お与えにならなかったであろう」と記している。

アブドル・ラフマーン・ビン・カーシムは、彼の父からきいて、こう伝えている
アーイシャは「バリーラの件では、三つの問題がありました」と次のように語った。
彼女の所有者たちは、彼女の財産相続権を彼らのものとすることを条件に、彼女を売ろうとした。
私は、預言者にそのことを話した。
すると、「彼女（バリーラ）を買って、解放しなさい。
奴隷の財産相続権は、解放した者に帰属するのです」といわれた。
私（アーイシャ）が彼女を解放すると、預言者は（奴隷身分の夫との結婚をそのまま続けるか、または、解放された後その結婚を解消するかに関する件を）彼女に選択させた。
彼女は、自分のためになること（つまり、この機会に結婚を解消して自由身分になること）を選んだ。
人々が、彼女に喜捨をしたが、彼女は私たちにそれを贈り物としてよこした。
私がこのことを話した時、預言者は、「それは彼女への喜捨（サダカ）です。
しかし、贈り物はあなたのもの故、受取ってよいのです」（注）といわれた。

（注）預言者及びその家族は喜捨（サダカ）を受取ってはならないことになっている

アーイシャは伝えている
彼女は、バリーラをアンサールの人たちから買った。
しかし、彼らは、この時、条件として彼女の財産相続に関する権利を彼らのものとすることを要求した。
それに対し、アッラーのみ使いは、「財産相続の権利は、彼女のために有益なことをした

者（彼女を解放した者）に帰属する」といわれ、（彼女が結婚を続けるか、解消するかの問題についての）選択は彼女にまかせた。
彼女の夫は奴隷身分であった。
彼女は、アーイシャに肉を贈り物として贈った。
み使いは、この折、「この肉を、私たちのために料理してくれませんか」といわれた。
アーイシャが、「この肉はバリーラに喜捨されたものです」といった時、み使いは、「彼女のために喜捨されたにしても、これは、私たちへの贈り物です」といわれた。

アーイシャは伝えている
アーイシャは、バリーラを買いたいと望んだが、それは、彼女を解放し自由身分にしてやるためであった。
彼ら（彼女の主人一家の者たち）は、この折、バリーラの財産相続の権利を、彼らのものとすることを条件とした。
アーイシャは、そのことをアッラーのみ使いに話した。
み使いは、これに対し、「彼女を購って、解放しなさい。
解放した奴隷の財産相続の権利は、解放した人のものになります」といわれた。
み使いは、彼女から肉を贈られたが、この折、教友たちは、「これは、バリーラに喜捨として与えられたものです」といった。
み使いは、それに対し、「これは、彼女に喜捨されたものであるが、私たちへの贈り物となった」といわれた。
バリーラは（結婚生活をつづけるか、または解消するかの問題について）選択の権利を与えられた。
なお、アブドル・ラフマーンは「彼女の夫は、自由民であった」と語ったが、シュウバは、この件に関し、「私は、バリーラの夫が自由民であるのか、それとも奴隷身分であるのかについて（或る伝承者に）質問したが、彼は『わからない』と答えた」と伝えている。

シュウバは前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えている。

アーイシャは伝えている
バリーラの夫は、奴隷身分であった。

預言者の妻**アーイシャ**は伝えている
（バリーラの件で、私たちが知ることができた）
預言者の教え（スンナ）は、次の三点である。
バリーラが解放された時、彼女には自分の夫に関しての選択権が与えられたこと、彼女に肉が喜捨として与えられたが、アッラーのみ使いがその肉を入れた土鍋が火にかけら

れた時私の処においでになり、
食べ物を要求なさったのでパンといつもの肉をだしたところ、「火にかけられた土鍋に肉が入っていませんか」といわれ、人々が、「はい、み使い様、バリーラに喜捨して与えられた肉が入っています。
私たちはその肉をあなたの食事にだすのは、よいことではないと思ったのです」というとそれに対し、
み使いが、「彼女へ喜捨された物ではあるが、それは彼女からの私たちへの贈り物なのです」といわれたこと、預言者が、「解放された奴隷の財産を相続する権利は、解放した人のものになります」といわれたことなどがそれである。

アブー・フライラは伝えている
アーイシャは、若い女奴隷を買って、解放しようと望んだ。
しかし、彼女の所有者の家族は、奴隷の財産相続の権利を彼らに認めない限り、彼女を売ることを拒否した。
アーイシャは、そのことをアッラーのみ使いに話した。
み使いは、この折、「それは、あなたにとって、取るに足らないことです。
なぜなら、解放された奴隷の財産相続権は、解放した人のものとなるからです」といわれた。

奴隷の権利を売ることに関して

アブトッラー・ビン・ディーナールは、イブン・ウマルよりきいて、こう伝えている。

アッラーのみ使いは、解放された奴隷の財産相続権を売り渡したり、贈り物としたりすることを禁じた（注）。

イマーム・ムスリムは、このハディースに関しては、アブドッラー・ビン・ティーナールの言葉に、全ての人々が準拠していると述べている。

（注）奴隷とその解放者との関係は、血縁関係にも近いものとされる。
奴隷の権利の売買は、丁度、血統が売買できぬと同じく、禁止されているのである。
なお、解放者が奴隷の財産を受け継げるのは奴隷がムスリムである場合に限られる。
ムスリムは、非ムスリムの財産継承者になることはできない

イブン・ウマルによる前記と同内様のハディースは別の伝承者経路でも伝えられているが、それには、「財産相続の権利を売ること（を禁ずる）」と記されるだけで「贈り物とすること（を禁ずる）」については言及されてない。

奴隷の後見人に関して

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者は、全ての部族に（殺人や傷害に対して）血の代償（注）を支払うことを義務づけた。
その折、彼は、また、ムスリムは他人によって、解放された奴隷を（その解放者の）ムスリムの許しもなく、自分の保護下におくことは認められないことを明言した（注 2）。
ジャービルは、それに関連し、「私は、預言者がそのような行為をした者を呪詛なされたことが、彼の文書の中に記載されていると知らされた」と述べている。

（注 1）血の代償（ウクール）ディーヤともいわれる。
同害報復を行なう代りに受取る一種の賠償金を指す。
殺人と傷害の場合にそれぞれ分けられている

（注 2）当時、解放された奴隷が、すぐに、普通の自由民なみの社会生活を営むことは必ずしも容易ではなく、解放者と結びつきその助力を得ることが必要であった。
また、生涯の大半を或る部族のなかで生活し、解放された後、すぐに、他の部族のなかで生活を始めれば、部族間に深刻な問題を引き起こす可能性もあった。
このハディースにはこの間の事情が示唆されている

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、「解放された奴隷の元の主人の許可なしに、その奴隷の後見人となった者には、アッラーと彼の大使たちの呪詛が下される。
また、そのような者か義務として課せられた正当な行為、また、それ以上の敬神行為を為したとしても、アッラーはお認めにはならない」といわれた。

アブー・フライラは伝えている

預言者は「解放された奴隷の元の主人の許可なしに、その奴隷の後見人となった者には、アッラーと彼の天使たち、そして全人類の呪いが下される。
最後の審判の日には、彼の正当な行為も、また、それ以上の敬神行為もアッラーによって受け入れられることはない」といわれた。
これと同内容のハディースは、アアマシュによっても、別の伝承者経路で伝えられているが、それには表現上、多少の異同がみられる。

イブラーヒーム・タイミーは彼の父からきいて、次のように伝えている

アリー・ビン・アブー・ターリブは、私たちを前に、次のように話した。
「私たち預言者の家族の者が、アッラーの聖典とこの文書（彼は「刀の鞘に結びつけられ

ている文書のことである」と述べた）以外になにか（特別の教典）を読んでいると主張した者は、嘘を述べたことになります。
この文書には、ラクダの年齢及び傷害に対する補償についての問題が記されています。
また、預言者の言葉も、次のように記録されています。
「マディーナは、アイル（注）からサウルに至る間の聖なる領域です。
（聖典に記されてない）
新しいことを始めた者やそれを庇護した者には、アッラーとその末使たち、それに全人類の呪詛が下されます。
最後の審判の日にアッラーは、そのような者の正当な行為やそれ以上の敬神行為も償いとしてはお認めにはなりません。
ムスリムたちの責任は共同責任であり、最下層の者でも他人に代って責任を担うことができます。
自分の父でもないだれかを父であると偽る者、自分が解放したわけでもない奴隷の後見人となった者などに対しても、アッラーとその天使たち、そして全人類の呪詛が下されます。
最後の審判の日に、アッラーは、そのような者の正当な行為も、また、それ以上の敬神行為も、償いとしてはお認めになりません」

（注）アイル　ウフドを指すともいわれる

奴隷の後見人に関して

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者は、全ての部族に（殺人や傷害に対して）血の代償（注）を支払うことを義務づけた。
その折、彼は、また、ムスリムは他人によって、解放された奴隷を（その解放者の）ムスリムの許しもなく、自分の保護下におくことは認められないことを明言した（注 2）。
ジャービルは、それに関連し、「私は、預言者がそのような行為をした者を呪詛なされたことが、彼の文書の中に記載されていると知らされた」と述べている。

（注 1）血の代償（ウクール）ディーヤともいわれる。
同害報復を行なう代りに受取る一種の賠償金を指す。
殺人と傷害の場合にそれぞれ分けられている

（注 2）当時、解放された奴隷が、すぐに、普通の自由民なみの社会生活を営むことは必ずしも容易ではなく、解放者と結びつきその助力を得ることが必要であった。
また、生涯の大半を或る部族のなかで生活し、解放された後、すぐに、他の部族のなかで生活を始めれば、部族間に深刻な問題を引き起こす可能性もあった。

このハディースにはこの間の事情が示唆されている

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、「解放された奴隷の元の主人の許可なしに、その奴隷の後見人となった者には、アッラーと彼の大使たちの呪詛が下される。
また、そのような者か義務として課せられた正当な行為、また、それ以上の敬神行為を為したとしても、アッラーはお認めにはならない」といわれた。

アブー・フライラは伝えている

預言者は「解放された奴隷の元の主人の許可なしに、その奴隷の後見人となった者には、アッラーと彼の天使たち、そして全人類の呪いが下される。
最後の審判の日には、彼の正当な行為も、また、それ以上の敬神行為もアッラーによって受け入れられることはない」といわれた。
これと同内容のハディースは、アアマシュによっても、別の伝承者経路で伝えられているが、それには表現上、多少の異同がみられる。

イブラーヒーム・タイミーは彼の父からきいて、次のように伝えている

アリー・ビン・アブー・ターリブは、私たちを前に、次のように話した。

「私たち預言者の家族の者が、アッラーの聖典とこの文書（彼は「刀の鞘に結びつけられている文書のことである」と述べた）以外になにか（特別の教典）を読んでいると主張した者は、嘘を述べたことになります。

この文書には、ラクダの年齢及び傷害に対する補償についての問題が記されています。

また、預言者の言葉も、次のように記録されています。

「マディーナは、アイル（注）からサウルに至る間の聖なる領域です。

（聖典に記されてない）

新しいことを始めた者やそれを庇護した者には、アッラーとその末使たち、それに全人類の呪詛が下されます。

最後の審判の日にアッラーは、そのような者の正当な行為やそれ以上の敬神行為も償いとしてはお認めにはなりません。

ムスリムたちの責任は共同責任であり、最下層の者でも他人に代って責任を担うことができます。

自分の父でもないだれかを父であると偽る者、自分が解放したわけでもない奴隷の後見人となった者などに対しても、アッラーとその天使たち、そして全人類の呪詛が下されます。

最後の審判の日に、アッラーは、そのような者の正当な行為も、また、それ以上の敬神行為も、償いとしてはお認めになりません」

（注）アイル　ウフドを指すともいわれる

奴隷を解放した場合の報賞について

アブー・フライラは伝えている

預言者は「信仰を持つ奴隷を解放した者に対しては、アッラーは、その奴隷の身体の器官（イルブ）に相応する解放者の全ての器官を業火の中から放免なさる」といわれた。

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、「奴隷を解放した者に対しては、アッラーは、奴隷の身体の全ての器官（ウドゥウ）に相応する解放者の全ての器官を業火の中から、解放なさる。
彼の秘所についても例外ではない」といわれた。

アブー・フライラは伝えている

私は、アッラーのみ使いが、次のようにいわれるのをきいた。
「信仰を持つ奴隷を解放した者に対し、アッラーは、その奴隷の身体の器官（ウドゥウ）に相当する彼の全ての器官を業火の中から解放なさる。
彼の秘所も解放されるのである」

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いはいわれた。ムスリムが、信仰を持つ奴隷を解放すれば、アッラーはその奴隷の身体の器官（ウドゥウ）に相応する解放者の器官を業火の中から全て救出なさる。
これに関連しサイード・ビン・マルジャーナは、「アブー・フライラからこのハディースをきいた時、私は、アリー・ビン・フサインの許へ行って、このことを話した。その時、彼は直ちに、彼の奴隷を解放した。
それは、イブン．ジャウファルから彼が一万ディルハム、または、10ディーナールの代価で買った奴隷であった」と語っている。

奴隷身分の父親の解放について

アブー・フライラは伝えている

アッラーのみ使いは、「もし、父親がだれかに所有されている場合、息子は、その父親を買って解放する以外には、その恩義に報いる方法はない」といわれた。

なお、伝承者の一人イブン・アブー・シャイバは「子供が、彼の父を」という表現をこのハディースの中で用いている。

スハイルは前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えているが、それには「子供が、彼の父を」という表現がみられる。

売買取引の書

ムラーマサ（注 1）とムナーバザ（注 2）両取引は禁ぜられていること

（注 1）衣類など品物を単に相互に触ってみるだけで決めてしまうバーター取引
（注 2）衣類など品物を相互に投げあっただけで取引が成立したとするバーター取引。
どちらもイスラーム以前に行われていたバーター取引の一形態であるが品物を入念
に品定めしないまま取引が行われるので後になって色々と問題が起り易い

アブー・フライラは次のように伝えている

アッラーの使徒はムラーマサ（手触りバーター取引）とムナーバザ（キャッチボール式バーター取引）の両取引を禁止した。

アブー・フライラは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アブー・フライラの伝える前記のハディースは別の伝承者経路を経て伝えられている。

アブー・フライラは次のように伝えている

ムラーマサとムナーバザの二つの取引は禁ぜられた。
ムラーマサとはお互が所持する着物を良く調べないで触っただけで取引を行うことである。
またムナーバザとは二人の男がお互に自分の着物を相手に投げ与え、それを受け取った双方がどちらも品物をよく見もしないで取引を行うことてある。

アブー・サイード・フドリーは次のように伝えている

アッラーの使徒は私達に二つの取引と二つの着物の着方（注）とを禁じた。
二つの取引とはムラーマサとムナーバザのことであり、ムラーマサとは日中または夜間に一方が他方の着物を触るだけで、それ以上の品定めを許さないで行われる取引である。
またムナーバザとは互いの着物を相手にそれぞれ投げあうことにより、品物の検査や双方の同意なしに成立する取引である。

（注）その一つは片方の肩だけを隠して他方の一層を露出した着方でもう一つは座った時に陰部が露出してしまう着方である

前記のハディースは**イブン・シハーブ**によっても同様の伝承者経路を経て伝えられている。

投石による取引の禁止とまやかし取引の禁止

アブー・フライラは次のように伝えている

アッラーの使徒は投石による取引(バイウル・ハサー)(注 1)とまやかしの取引(バイウル・ガラル)(注 2)を禁止した。

(注 1)売り手が小石を渡し、「この石を投げてそれが落ちたところの物を売る」といったり、「この石を投げてそれが満ちた所までの土地を売る」と言って成立するイスラーム以前の取引

(注 2)実際には手元にない品物を売る不正売買の全てで例えば未だ捕獲していない魚を売るとか逃亡中の奴隷を売るとか出産前の家畜の胎児を売るなどがある。
現代の投機などもこれに類すると考えられている

ハバルル・ハバラの取引（注）の禁止

（注）妊娠した雌ラクダの胎児が将来生むであろう仔ラクダを現時点で取引すること

アブドッラー・ビン・ウマルは次のように伝えている

アッラーの使徒はハバルル・ハバラの取引を禁じた。

イブン・ウマルは次のように伝えている

ジャーヒリーヤ時代（イスラーム以前の無明時代）の人々は屠殺されたラクダの肉をハバルル・ハバラ（雌ラクダの腹の中にいる仔ラクダが生むであろうそのまた仔ラクダ）の値段で売買していた。

それは孕んだ雌ラクダが仔を生んだ後その仔がまた孕み生んだ仔ラクダのことを意味するが、アッラーの使徒はこの取引を禁じた。

他人が既に交渉中の取引の中に割り込むことは禁ぜられていること、
（契約以前でも）他人が既に取引を終えた後に買いの申し出をすることは禁止されていること、
（対抗上）商品の値段を不当に高く吊り上げること（サクラ行為など）は禁ぜられていること、
牛の乳房を縛ってミルクがたくさん出るよう見せかけることは禁ぜられていること

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方の誰れかが取引を行っている時に、そこに割り込んではならない。

イブン・ウマルは預言者が次のように語ったとして伝えている

人は己れの同胞が取引を行っている時にはそこに割り込んではいけないし、また同胞の婚約者に求婚することは相手の男性の許しがない限り慎しむべきである。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

ムスリムは同胞の買ったもの（契約は完了していないが値段の点で相方が合意をみた商品）に対して買いの申し込みをすることは出来ない。

前記のハディースは**アブー・フライラ**によって別の伝承者経路を経て伝えられているがここでは表現上の言葉が僅かに違っている。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

都市に向う隊商を途中で出迎えてうまいことを言って安値で積荷を買い占めることはいけない（注）。
また誰れも他人の既に決った取引に割り込んで邪魔をしてはならない。
また人をあおって不当に値段を吊り上げてはならない（サクラ行為など）。
また都市の人間が砂漠の人間に代って売買することはできない。
またラクダや羊の乳房を縛って乳を溜めていつも乳が多く出るように見せかけた上で家畜を売買してはならない。
もしそれを知らないで買った者が乳を絞ってみて本当の量を知った時は二つの選択が認められる。
即ちそれでもよいとは思えばそのまま買った家畜を所有するか、気にいらなければ１サーア（升）のナツメヤシの実をつけてそれを返すかのどちらかである。

（注）隊商か都市に入り、ここで商品に対する公正な情報を得た上ではじめて公正な取引が行われるとする考え

アブー・フライラは次のように伝えている

アッラーの使徒は（町に到着する前に）隊商と会って商談することを禁じた。
また都市の住人が砂漠の遊牧民に代って取引をすることを禁じた。
また女が彼女の姉妹の離婚について（姉妹の夫に）請求することを禁じた。
さらに（競争して）不当に値段を吊り上げること、家畜の乳房を縛って乳量を豊かに見せかけること、（既に合意をみた）同胞の取引に割り込んで邪魔することなどそれぞれ禁じた。

前記のハディースは別の伝承者経路を経て伝えられている。

イブン・ウマルは次のように伝えている

アッラーの使徒はサクラ行為を禁じた。

隊商が町に入る前に合って取引することは禁ぜられていること

イブン・ウマルは次のように伝えている

アッラーの使徒は商品が市場に到着するまでは途中で取引のために商談することを禁じた。

これはイブン・ヌマイルが伝えるハディースであるが他の伝承者達は「預言者は談合を禁じた」と伝えている。

前記と同様のハディースが別の伝承者経路を経て**イブン・ウマル**によって伝えられている

アブドッラー（・ビン・ウマル）は次のように伝えている

預言者は（輸送の途中で）商品の取引をするための商談を禁じた。

アブー・フライラは次のように伝えている

アッラーの使徒は商品が町に着く前に取引きされることを禁じた。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

（町に着く前に）途中で商品取引をしてはならない。

もしこうして商品を買い取った場合はもとの商品の所有者が市場に到着して市場価格を知った時点で（その取引の合否は決まり）もとの所有者の自由選択に任せられる（注）。

（注）つまり市場価格よりも安く売っていた場合は途中の取引の無効を宣することができる

町の住民が砂漠の遊牧民に代って取引を行うことは禁ぜられること（注）

（注）往々にして町の市場価格に対する遊牧民の無知につけ込むことになるから

アブー・フライラはアッラーの使徒が彼に直接語ったとして次のように伝えている

町の住人は砂漠の遊牧民に代って取引を行ってはならない。

またズハイルは次のように伝えている。

預言者は町の住人が砂漠の遊牧民に代って取引を行うことを禁じた。

イブン・アッバースは次のように伝えている

アッラーの使徒は次のことを禁じた。

即ち（町に着く途中で）隊商を迎えて商取引を行うこと、町の住人が砂漠の遊牧民に代って取引を行うこととを禁じた。

私（イブン・アッバースの次の伝承者）はイブン・アッバースに町の住人が砂漠の遊牧民に代って取引をするとはどういうことかと尋ねました。

すると彼は答えてこういった。

遊牧民のために公正なブローカーの役割をしないからです（注）。

（注）通常は町の市場に到着してからスイムサールと称する公証仲介人を介して取引を行う

ジャービルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

町の住民が砂漠の遊牧民に代って取引を行ってはならない。

人々に任せなさい、そうすればアッラーはお互にそれぞれを養って下さるでしょう。

またヤヒヤーもまたわずかな表現上の違いはあるが同様のハディースを伝えている。

前記と同様のハディースが**ジャービル**によって別の伝承者経路を経て伝えられている

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

私達は町の住人が砂漠の遊牧民に代って取引を行うことを、たとえそれが兄弟や父親の間柄であっても禁じられた。

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

私達は町の住人が砂漠の遊牧民に代って取引を行うことを禁じられた。

乳房を縛られた家畜(注)の売買規定

(注)乳の出を良く見せかけて値を吊り上げるためにこうする

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

乳房を縛られた雌羊を買った者はそれを連れて帰り乳を搾ってみなさい。

それで満足すればそのまま引き取り、そうでないならば１サーア(穀物の計量単位)のナツメヤシの実をつけてその雌羊を返しなさい。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

乳房を縛られた雌羊を買った者は三日間の内にそれを引き取るかそれとも返すかを選ぶ権利がある。

そして返す際には１サーアのナツメヤシの実を添えて返しなさい。

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている

乳房を縛られた雌羊を買った者は三日間の選択期間をもつ。

(その期間中に)もしそれが欲しければそれを取れば良いし、返したいならば１サーアの当地の食糧(ナツメヤシの実)を添えて返せばよい。

なおそれが小麦粉である必要はありません。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

乳房を縛られた雌羊を買った者には二つの選択の道が残されている。

それをつかむか(売手に)１サーアの小麦でなくナツメヤシの実を添えてそれを戻すかのどちらかである。

アイユーブは前記のハディースを同じ伝承者経路を経て伝えているが、彼は「(乳房を縛られた)山羊を買った者には選択の権利がある」と伝えている。

ハンマーム・ビン・ムナッビフはこう伝えた

これはアブー・フライラがアッラーの使徒が語ったとして私達に話したハディースの一つである。

アッラーの使徒はこう語った。

乳房を縛られたリクハ(搾乳ラクダ)(注)か羊を買った者はその乳を搾ってみた後、それを引き取るかまたは１サーアのナツメヤシの実を添えてそれを返すかのどちらかを選ぶ権利がある。

(注)出産後二〜三ヵ月位の雌ラクダのことでこの期間は乳がよく出る

（売買が成立してその商品を実際に）取得する以前にそれをさらに転売することは禁ぜられている

イブン・アッバースはアッラーの使徒が語ったとして次のように伝えている

食糧（穀物）を買った者はそれを十分に（重さやかさを量って）手にするまではそれを売ってはならない。

またイブン・アッバースは「私は全てのものについても同様だと考えている」と語った。

前記同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられている。

イブン・アッバースはアッラーの使徒が語ったとして次のように伝えている

食糧（穀物）を買った者はそれを実際に入手するまでは転売してはならない。

またイブン・アッバースはこういった。

私は全ての売買の対象となるものがこの食糧と同じ原則にあてはまると考えている。

イブン・アッバースはアッラーの使徒が語ったとして次のように伝えている

食糧を買った者はそれを計量しないうちはよそに売ってはならない。

ところでイブン・アッバースから直接このハディースを聞いた伝承者（ターウース）が「なぜですか」と尋ねると彼はこういった。

あなたは人々が食糧を実際に手にしないうちにそれをお金で売買しているのを知らないのですか。

ところでアブー・クライブは「手にしないうちに」という言葉は述べていない。

イブン・ウマルはアッラーの使徒が語ったとして次のように伝えている

食糧（穀物）を買った者はそれを（重さやかさを計って）十分にかつ実際に手にするまではほかに売ってはならない。

イブン・ウマルは次のように伝えている

アッラーの使徒の時代でしたが私達が食糧を買うと彼は私達がそれを売る前に私達がそれを買った場所から他の場所に移すよう命じて使いの者を送ってよこしました。

イブン・ウマルはアッラーの使徒が語ったとして次のように伝えている

食糧（穀物）を買った者はそれを十分に（量って）実際に受け取るまでは転売してはならない。

イブン・ウマルは（アッラーの使徒が語ったとして次のように）伝えている

食糧を買った者はそれを十分に手にするまでは他に転売してはならない。

さらにイブン・ウマルはこういった。

私達は食糧を隊商から重さや升で量らずに積荷のまま買っていましたが、アッラーの使徒は私達がそれを買った場所から他の場所に移すまでは他に転売することを禁じました。

イブン・ウマルはアッラーの使徒が語ったとして次のように伝えている

食糧を買った者は誰れでもそれを十分に手にして（完全に）所有するまでは他に売ってはならない。

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

食糧を買った者は誰れでもそれを（確実に）所有するまでは他に売ってはならない。

イブン・ウマルはこう伝えている

アッラーの使徒の時代、もし重さや升で量らずに積荷のまま食糧を買ってそれをその場で転売する者たちはそれを他の場所に移すまでは鞭打たれたものでした。

サーリム・ビン・アブドッラーが彼の父が語った事として次のように伝えている

私はアッラーの使徒の時代に人々が食糧を重さや升で量らずに積荷のままそれを買ってその場でそれを転売したために鞭打たれる姿を見ました。

そしてそれは買った食糧を彼等の場所に移すまで続けられました。

このハディースはウバイドッラー・ビン・アブドッラー・ビン・ウマルによって他の伝承者経路を経て次のように伝えられている。

彼の父（イブン・ウマル）は食糧を重さや升で量らずに積荷のまま買うとそれを彼の家族のもとに運ぶのが常でした。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

食糧を買った者は誰れでもそれを量ってみるまでは他に売ってはならない。

またアブー・バクルの伝えているハディースではイブターア（購入する）という言葉がイシュタラー（買い取る）の代りに使われている。

アブー・フライラはマルワーン（当時マディーナの長官）に次のように語ったと伝えられている

あなたはリバー（高利）の生じる取引を許可した。

するとマルワーンはこういった。

いやそんなことはしていない。

そこでアブー・フライラはこういった。
あなたはシック（地方の行政長官から兵士などに振り出される現物支給の保証書）の取引を許可した。
だがアッラーの使徒は食糧を確かに手元にしないうちはそれを転売することを禁じました。
するとマルワーンは人々に向って演説しシックの取引を禁止した（注）。
スライマーン（アブー・フライラの言葉を伝えた最初の伝承者）はさらにこう伝えた。
私は（そのとき）兵士達が人々からそれ（シック）を取り戻している有様を見ました。

（注）チェック即ち小切手の語源だがシックの取引を認める学派はこの保証書によって現物を手元にする義務が生ずるのは最初の買い手であり（即ち彼がさらに第三者に転売する時に不正が生ずると考える）保証書のもとの所有者にはこのハディースは通用されないとする

ジャービル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったものだったとして伝えている
もしあなたが食糧を買った時にはそれを確実に手元にするまでは他に売り渡してはいけない。

量が不明なナツメヤシの実の一山と定量のナツメヤシの実とのバーター取引の禁止

ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように伝えている

アッラーの使徒は量が不明のナツメヤシの実の一山と一定量のナツメヤシの実とのバーター取引を禁止した。

ジャービル・ビン・アブドッラーは前記と同様のハディースを伝えているがここでは前記の「（一定量の）ナツメヤシの実」の記述部分は省略されている。

取引当事者双方は取引場所を離れる前に取引解消の選択権を有すること

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

通常取引当事者の双方はそれぞれが取引終了後もその場所を離れるまでは取引解消権を有する。

ただしその後でも双方が取消権をもつという条件付取引の場合は別である。

前記のハディースは**イブン・ウマル**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

二人の男が取引を行う場合、彼等が二人ともその場を離れない限り双方はそれぞれ取消権を持っているかまたは一方が他方に対して取消権を与えているかどちらかの状態にある。

もし一方が他方に取消権を与えていれば取引はこの条件付取引で成立していることになり、この取引は義務付けられる。

また取引成立後、双方がその場所を離れ、なおかつ双方ともその取引を取消さない限りこの取引は義務付けられる。

アブドッラー・ビン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

取引当事者はその取引についてその場を離れるまではそれぞれが取消権を持っている。

あるいはその取引はもともと相互に取消権を条件として与えているものである。

それで取引が取消権を持つものならばその取引は（当然）義務付けられる。

イブン・アブー・ウマルは以上に加えてこう伝えている。

彼が或る男と取引をする時に、それをその条件で結びたくない場合、しかし取引そのものは破談にしたくない場合はちょっと席を外してから取引を新たに始めるために再び元の場所に戻ったものでした。

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている取引当事者双方はその場を離れるまではその取引に対して取消権の選択が行われない限りにおいてそこでの取引は未だ無効である。

取引と商品説明においては誠実であること

ハキーム・ビン・ヒザームは預言者が次のように語ったとして伝えている

取引当事者はその場を離れるまでは取消権を有する。

さて二人がその取引において正直に話し、商品について包み隠さず説明するならば彼等はその取引によって（アッラーから）祝福を受けるでしょう。

ハキーム・ビン・ヒサームは前記と同様のハディースを伝えている

ところでこのハディース集の編者ムスリムはハキーム・ビン・ヒザームはカーバ神殿の中で生れ 120 歳まで長らえたと伝えている。

取引をごまかす者

アブドッラー・ビン・ディーナールはイブン・ウマルが次のように語ったことを聞いたとして伝えている

一人の男が取引でだまされたとアッラーの使徒に告げた。するとアッラーの使徒はこういった。

あなたは誰れとでも取引する際には「（お互に）一切のごまかしは無しにしましょう」と言いなさい。

それ以来彼は取引する際にはいつも「ごまかしは一切無しにしましょう」と言うのが常でした。

アブドッラー・ビン・ディーナールは前記と同様のハディースを伝えているがここでは、「彼が取引する際には……」の一節は伝えられていない。

理由もなく出来具合が判明しない果実を摘み取って販売することは禁止されている

イブン・ウマルは伝えている

　　アッラーの使徒は果実の売買をその出来具合が判明するまで禁止した。
　　彼はそれを売り手と買い手の双方に禁止した。

イブン・ウマルは前記と同様のハディースを預言者が語ったとして伝えている。

イブン・ウマルは次のように伝えている

　　アッラーの使徒はナツメヤシの実の売買をこれが色付く（熟する）まで禁止した。
　　また穀物についてはその穂が白くなり病虫害から安全であることが判明するまでそれを売買することを禁じた。
　　彼はこの取引を売り手と買い手の双方に禁じた。

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

　　果実はそれが良く熟していて病虫害に罹っていないことが明かになるまでは売買してはならない。
　　また彼（イブン・ウマル）はこう付け加えた。
　　良く熟しているとは赤や黄色に色付くことである。

前記のハディースは同じ伝承者経路を経て**ヤヒヤー**によって伝えられている。
しかし彼は「良く熟していることが明かになるまで」とは伝えているがそれ以降の言葉については伝えていない。

前記のハディースが**イブン・ウマル**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

ナーフィウはイブン・ウマルが預言者の語ったものとして前記と同様のハディースを伝えている。

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

　　果実が（充分に熟して）良好な状態であることが明かになるまではそれを売ってはならない。
　　シュウバが伝えるハディースではイブン・ウマルは「良好な状態」とは何かと聞かれ「病虫害に罹っていないことだ」と答えたとして付記している。

ジャービルは次のように伝えている

アッラーの使徒は果実が充分に熟するまでその売買を我々に禁じた。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーの使徒は果実が良好な状態であることが明かになるまではその売買を禁じた。

アブー・バフタリーが伝えている

私はイブン・アッバースにナツメヤシの実の売買について尋ねた。

それで彼はこういった。

アッラーの使徒は木になったナツメヤシの実が実際に人がそれを食べてみるかまたは（そうでなくとも）それが食べられる状態になるまで、あるいはまたそれが（収穫されて）秤りにかけられるまではその売買を禁じた。

そこで私は次のように質問した。

量りにかけられるとはどういう意味ですか？

すると彼はこれに答えてこういった。

（収穫後）本人の手元にありそれが実際に評価されるまでということです。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

果実はその状態が良好であることが明かになるまでは売買してはならない。

イブン・ウマルが次のように伝えている

預言者は果実の状態が良好であることが明かになるまでその売買を禁止した。

また熟成ナツメヤシの実と乾燥ナツメヤシの実を交換取引することを禁止した（注）。

（注）ナツメヤシの実とそれ以外の果実との交換ならば勿論禁止の対象とはならない

ザイド・ビン・サービトは次のように伝えている

アッラーの使徒はアラーヤーの取引（注）だけは特別にこれを許可した。

またイブン・ヌマイルの伝えるハディースでは「あなたがその取引をすること」と表現している。

（注）自分のナツメヤシの樹を持たない貧乏人がナツメヤシの実が熟成する時節になって、自分の家族のために熟成ナツメヤシの実を買ってやるだけの現金を持たない場合で、もし彼に乾燥ナツメヤシの実が未だ手元に残っているならばナツメヤシ園主に頼んでそれを一～二本の樹上の熟成ナツメヤシの実と交換取引をしてもらうこと。

ただしその取引量は 5 ワスク（300 サーア）以上を越えないことが条件である

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

果実はその出来具合が良好であることが明かになるまでは売買してはならない。

そしてまた乾燥ナツメヤシの実で熟成したナツメヤシの実を取引してはならない。

またイブン・ウマルは預言者が語ったとして同様のハディースを別の伝承者の経路を経て伝えている。

熟成したナツメヤシの実を（熟成後の）乾燥ナツメヤシの実と交換取引することはアラーヤーの場合を除いて禁止されていること

サイード・ビン・ムサイイブは次のように伝えている

アッラーの使徒はムザーバナとムハーカラの売買を禁じた。
ムザーバナとは木になっている新鮮な熟成ナツメヤシの実が乾燥ナツメヤシの実でもって交換取引されることである（注 1）。
ムハーカラ（注 2）とは畑の穀物が（既に収穫された）小麦でもって交換取引きされることであり、その際に土地はそこから収穫される小麦でもって賃借されることになる。
また彼（サイード）は次のように語った。
サーリム・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が語ったとして次のように私に伝えた。
果実はその出来具合が良好であることが分かるまでは買ってはならない。
また熟成したナツメヤシの実を乾燥ナツメヤシの実でもって売買取引してはならない。
またザイド・ビン・サービトが次のように伝えている。
アッラーの使徒はその後アラーヤーの取引の場合のみ許可したがこの取引によれば乾燥ナツメヤシの実は樹上の熟成したナツメヤシの実と交換することができた。
しかし彼はそれ以外の取引については許されなかった。

（注 1）禁止の理由は樹上のナツメヤシの実が推定量でしか計れないためそこに高利的不正が生じる恐れがあるから

（注 2）いわゆる青田売りのこと

ザイド・ビン・サービトは次のように伝えている

アッラーの使徒はアラーヤー取引の有資格者には乾燥ナツメヤシの実に換算した推定量でもって売買することを許可した。

ザイド・ビン・サービトは伝えている

アッラーの使徒は家族の者が新鮮なナツメヤシの実を食べるためにアラーヤーの取引によって乾燥ナツメヤシの実に換算したそれを手に入れることを許可した。

ナーフィウは前記と同様のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

同様の伝承者経路を経て伝えているが、ここでは彼は次のように語っている。

アラーヤーとはそれを必要とする人々のために寄進されたナツメヤシの木の実のことであるがそれを乾燥ナツメヤシの実に換算してから新鮮なうちに売ることができることである。

ザイド・ビン・サービトは次のように伝えている

アッラーの使徒はアラーヤーの取引で乾燥ナツメヤシの実に換算して（新鮮な熟成ナツメヤシの実を）売買することを許可した。

またヤヒヤーはこういった。

アラーヤーとは新鮮な熟成ナツメヤシの実を家族に食べさせるために乾燥ナツメヤシの実に換算してそれを買うことである。

ザイド・ビン・サービトは伝えている

アッラーの使徒はアラーヤーの取引で新鮮なナツメヤシの実を乾燥ナツメヤシの実に換算して秤りで量って売られることを許可した。

ウバイドッラーは前記のハディースを伝えているが彼は「乾燥ナツメヤシの実に換算して所有されること」と表現している。

ナーフィウは次のように伝えている

アッラーの使徒はアラーヤーの取引を乾燥ナツメヤシの実に換算することで許可した。

ブシャイル・ビン・ヤサールはアッラーの使徒の一族の教友の一部の者、たとえばサハル・ビン・アブー・ハスマのような人からの伝聞として次のように伝えている

アッラーの使徒は新鮮な熟成ナツメヤシの実を乾燥ナツメヤシの実で売買することを禁じた。

そして彼（預言者）はさらにこういった。

それはリバー（不正な高利）であり、ムザーバナになるからである。

しかし彼は一本か二本のアラーヤー（寄進）の取引はこれを許可した。

それは家族の者が自家用に新鮮な熟成したナツメヤシの実を食べるためにその分だけ乾燥ナツメヤシの実に換算してそれを手に入れることである。

ブシャイル・ビン・ヤサールはアッラーの使徒の教友が次のように語ったとして伝えている

アッラーの使徒はアラーヤーの取引では乾燥ナツメヤシの実に換算して取引を行うことを許可した。

ブシャイル・ビン・ヤサールはアッラーの使徒の一族の中の一部の教友が語ったとして次のように伝えている

彼は「アッラーの使徒は禁じた」と言って前記と同様のハディースを伝えた。

しかしイスハークとムサンナーはリバー（高利）という言葉の代りにザブン（まとめ売り）という言葉を使っている。

ただしイブン・アブー・ウマルはリバーという言葉を使っている。

サハル・ビン・アブー・ハスマは預言者からの伝聞として前記と同様のハディースを伝えている。

サハル・ビン・アブー・ハスマは次のように伝えている

アッラーの使徒はムザーバナ（新鮮なナツメヤシの実を乾燥ナツメヤシの実と交換すること）の取引を禁じた。

しかしアラーヤーの権利の所有者（注）は除かれる。

なぜならば彼等にはその取引の許可が与えられたからである。

（注）数本のナツメヤシの樹を慈善の意味で寄進された者、つまり新鮮で熟成したナツメヤシの実を時節のうちに家族の者に食べさせたいと願う者に対する好意的な取引の場合の意

アブー・フライラは次のように伝えている

アッラーの使徒はアラーヤーの取引で（その量が）5 ワスク以内から 5 ワスク（ただし伝承者の一人ダーウードは彼が五といったのかそれ以下の数字だったのか決めかねているが）までならその取引を許可した。

イブン・ウマルは伝えている

アッラーの使徒はムザーバナを禁じた。

ムザーバナとは新鮮なナツメヤシの実を乾燥ナツメヤシの実で、または新鮮なブドウを干しブドウでその量を換算してそれぞれ交換売買することである。

アブドッラー・ビン・ウマルは次のように伝えている

預言者はナツメヤシの木になっている実（新鮮で熟成した実）を乾燥ナツメヤシの実で、また新鮮なブドウを干しブドウで、また畑の小麦を小麦の穀粒でもってそれぞれ量を換算して売買するムザーバナの取引を禁じた。

ウバイドッラーは前記のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている

イブン・ウマルが伝えている

アッラーの使徒はムザーバナを禁じた。
ムザーバナとはナツメヤシの木になっている実を乾燥ナツメヤシの実で、また干しブドウをブドウで、それぞれ量を換算して売買することである。
そして全ての果実についても同種果実の換算取引を禁じた。

イブン・ウマルは次のように伝えている

アッラーの使徒はムザーバナを禁じた。
ムザーバナとはナツメヤシの木になっている実が或る一定量の乾燥ナツメヤシの実と交換に売られることである。
その際にもし定量を越えるときにはその分については自分のものであり、それより少ない時には（その不足分は）自分の責任であることをはっきりさせた上で行う取引のことである。

アイユーブが前記と同様のハディースを伝えている

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーの使徒はムザーバナを禁じた。
それは果樹園に実っている果実を、もしそれがナツメヤシの実の場合は換算された乾燥ナツメヤシの実で、あるいはブドウの場合は干しブドウで、また畑の作物の場合は同種の穀粒でそれぞれ換算して売買されることである。
彼はそれら全ての取引を禁じた。
なおクタイバの伝承によれば「あるいは穀物の場合は」として伝えている。

前記のハディースは**ナーイフ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

実のついたナツメヤシの木を売買した場合、売った者にその実は属していること

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

既に授粉したナツメヤシの木を売った場合はその実は買い手が条件を付けない限り売り手のものである。

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

既に授粉したいかなるナツメヤシの木でも根付で買われた場合はその実は買い手が条件を付けない限り授粉した者の権利である。

イブン・ウマルは預言者が次のように語ったとして伝えている

ナツメヤシを授粉させてそれからそれを根付きで売った場合、買い手が条件を付けない限りその実は授粉させた者の権利になる。

ナーフィウは前記と同様のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

アブドッラー・ビン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったことを聞いたとして伝えている

授粉されたナツメヤシの木を売った場合その実は買い手が条件を付けない限りは売り手の権利になる。

また奴隷が売買された場合に買い手が条件を付けない限り奴隷の所持金は売手の方に権利がある。

ズフリーは前記と同様のハディースを伝えている

イブン・ウマルは彼の父がアッラーの使徒から前記と同様のハディースを聞いたとして伝えている。

ムハーカラとムナーバザとムハーバラ（注）の禁止、及び果実の出来具合が良好であることが明かになる前の取引の禁止、またはムアーワマ（年ぎめの取引）の禁止

（注）小作契約であるが種子が小作人持ちの場合

ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように伝えている

アッラーの使徒はムハーカラ（青田売り）とムナーバザとムハーバラの取引を禁止したじまた果実の出来が良好であることが明かになるまでその売買を禁じた。

またアラーヤー以外の取引では商品はディーナール（金貨）とディルハム（銀貨）で売買されなければならないとした。

ジャービル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が禁じた取引として前記のハディースを伝えている。

ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように伝えている

アッラーの使徒はムハーバラとムハーカラとムザーバナの取引を禁じた。

また果実の売買についてはそれが熟して食されるようになるまでその取引を禁じた。

そしてまたアラーヤ以外の果実の売買はディーナール（金貨）やディルハム（銀貨）で行われなければならないとした。

またアターはジャービルが次のような説明を加えたとして伝えている。

ムハーバラとは末耕作地を他人に与え、もらった男がその土地に投資して得た作物の一部を与えた男が得ることである。

またムザーバナとは樹上のナツメヤシの実を乾燥ナツメヤシの実に升で換算して取引することである。

また農事におけるムハーカラとは現在植わって生育中の作物を収穫物に升で換算して売買することである。

ジャービル・ビン・アブドッラーが次のように伝えている

アッラーの使徒はムハーカラとムザーバナとムハーバラの取引を禁じた。

またナツメヤシの実が熟さない内はその売買を禁じた（熟すとナツメヤシの実は赤や黄に変色し食べられるようになる）。

またムハーカラとは畑の作物を収穫物に一定の升量で換算して売買することである。

そしてムザーバナとは樹上のナツメヤシの実が乾燥ナツメヤシの実に換算されて数ワスクの範囲内で売られることである。

またムハーバラとは分け前のことであってその比率は 1/3 とか 1/4 などいろいろある。

ザイド（伝承者の一人）はアター・ビン・アビー・ラバーフ（別の伝承者）にこう尋ねた。
あなたはジャービル・ビン・アブドッラーがアッラーの使徒から聞いたとしてそのことを述べたところを聞いたのですか？
すると彼はそれに答えて「はい」といった。

ジャービル・ビン・アブドッラーが伝えている
アッラーの使徒はムサーバナとムハーカラとムハーバラの取引を禁じた。
また果実が熟するまではその売買を禁じた。
ところで私（伝承者の一人）はサイード（別の伝承者）にこう質問した。
熟するとはどういうことですか？
すると彼は答えてこういった。
赤や黄色に色付いて食べられるようになることだ。

ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように伝えている
アッラーの使徒はムハーカラとムサーバナとムアーワマとムハーバラの取引を禁じた。
伝承者の一人は数年先の先物売買取引それがムアーワマのことであると伝えている。
また部分売買取引（注）も禁止した。しかしアラーヤーについては特にこれを許可した。

（注）全体として不可分の部品の一部分を除いて売ることで例えば私は君にこのかたまりの一部を除いて売り出すと言っても除外された一部が不明確であるためトラブルの原因となり易い

ジャービルは預言者からの伝聞として前記と同様のハディースを伝えている。
しかし彼はここでは「数年先の先物売買取引それがムアーワマのことである」という一節を述べていない。

ジャービル・ビン・アブドッラーが伝えている
アッラーの使徒は土地の賃貸を禁じた。
またその土地から取れる作物の数年先の先物取引を禁じた。
また果実が良く熟するまでその売買を禁じた。

土地の賃貸（注）

（注）土地の賃貸については禁止されているというハディースと禁止されたわけではないとする二種の相矛盾するハディースが流布していた

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーの使徒は土地の賃貸を禁じた

ジャービル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

土地を持っている者は自らそれを耕すべきである。
もし耕さないならば彼の宗教上の兄弟に耕させなさい（注）。

（注）宗教上の兄弟には只で農地を借すべきであるとするハディースはマッカの信者が身一つでマディーナに移住した後に成立した初期イスラームの社会事情を物語っているように思える

ジャービル・ビン・アブドッラーはかつてアッラーの使徒の教友の一部に土地の余っている者達がいたが彼等についてアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

土地の余っている人はそれを自ら耕しなさい。
それができなければ彼の宗教上の兄弟に只であげるべきである。
だがもし彼（宗教上の兄弟）がそれを断るようならその時はそれをそのまま保持すべきである。

ジャービル・ビン・アブドッラーが伝えている

アッラーの使徒は地代をとることと土地収益の分け前をとることを禁じた。

ジャービルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

土地を所有する者はそれを耕すべきだ。
もし耕すことが出来なくて非力を感ずる時にはそれをムスリムの同胞に只で与えなさい。
決してそれを賃貸して地代をとってはならない。

スライマーン・ビン・ムーサーはアターに次のように尋ねた

ジャービル・ビン・アブドッラーは預言者が次のように語ったとしてあなたに伝えましたか？
土地を所有している者はそれを耕さねばならない。

または宗教上の兄弟に耕させるべきである。だがその際に土地を賃貸してはいけません。
以上の質問に対してアターは「はいその通りです」と答えた。

ジャービルは伝えている
預言者はムハーバラ（土地を小作条件で賃貸すること）の取引を禁じた。

ジャービル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
土地が余っている者はそれを自ら耕すか彼の兄弟に耕作させるかすべきであり、それを売ってはならない。
私（伝承者の一人）はサイードに「売ってはいけない」とはつまり「賃貸すること」ですか？といった所、彼はそうだと答えた。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
私達はアッラーの使徒の時代にムハーバラ（土地の小作貰貸）を行っていた。
それで私達は脱穀した後の藁に残った穀粒やその他の何がしかのものを分け前として受け取っていた。
そこでアッラーの使徒は次のようにいった。
土他の所有者は白らそれを耕すか彼の兄弟に耕させるかすべきである。
もしそれが出来ないようならば土地を手放すべきである。

ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように伝えている
私達はアッラーの使徒の時代に土地を用水路付きで賃貸してその収穫物の 1/3 か 1/4 を受け取っていた。
するとアッラーの使徒はそのことで（説教するために）立ち上がり次のようにいった。
土地の所有者は自らそれを耕すべきである。
もし耕作しない場合にには彼の兄弟に与えなさい。
また彼が兄弟にそれを与えない場合でも彼はそれをそのまま保持しなければならない。

ジャービルは次のように伝えている
私は預言者が次のように語ったハディースを聞いた。
（余った）土地を所有している者はそれを他に寄進するか（見返り無しで）貸し与えるべきである。
このハディースはアアマシュによって同様の伝承者経路を経て伝えられているがここでは彼は「それを耕すか誰か他の男に耕させるかすべきである」と表現している。

ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように伝えている

アッラーの使徒は土地の賃貸を禁じた。

さてブカイル（伝承者の一人）はこういった。

ナーフィウは私にイブン・ウマルから次のように聞いたとして伝えた。

私達は土地を賃貸していたものでした。

しかしラーフィウ・ビン・ハディージュのハディースを聞いてからはそれを止めました。

ジャービルは次のように伝えている

アッラーの使徒は二年間あるいは三年間だけは空き地を売ることを禁じた。

ジャービルは次のように伝えている

預言者は数年先の先物取引を禁止した。

ところでイブン・アブー・シャイバ（伝承者の一人）の伝えるところでは「数年先の果実の先物取引」と表現している。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

土地を所有している者はそれを自ら耕すかまたは彼の（宗教上の）兄弟にそれを与えるべきである。

もし彼（兄弟）がそれを断るならば（その時は）自らそれを保持すべきでしょう。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私はアッラーの使徒がムザーバナとフクールの取引を禁じた言葉を聞いた。

そしてジャービルはさらにこう説明した。

ムザーバナとは新鮮なナツメヤシの実を乾燥ナツメヤシの実で売買することであり、フクールとは土地を小作条件で賃貸することである。

アブー・フライラは次のように伝えている

アッラーの使徒はムハーカラとムザーバナの取引を禁じた。

アブー・サイード・フドリーは次のように伝えている

アッラーの使徒はムザーバナとムハーカラの取引を禁じた。

ムザーバナとは木になっている状態のナツメヤシの実を買うことであり、ムハーカラとは土地の賃貸のことである。

アムルはイブン・ウマルが次のように語ったとして伝えている

我々は（小作条件による）土地の賃貸が悪いことだとは最初の年が過ぎるまでは考えてもいなかった。

しかしラーフィウは預言者がそれを禁じたと主張した。

アムル・ビン・ディーナールは前記と同様のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えているがウヤイナの伝えるハディースでは「そこで我々はそれ（土地の賃貸）を止めた」という一節を加えている。

イブン・ウマルはこう伝えている

確かにラーフィウは我々が土地を賃貸して利益を得ることを禁じた。

ナーフィウは次のように伝えている

イブン・ウマルはアッラーの使徒の時代と初代カリフのアブー・バクルの時代、さらに第二代目、第三代目のカリフのウマルとウスマーンの時代、さらにまたムアーウィヤの全時代を通じて彼の農地を貸していた。

ところでラーフィウ・ビン・ハディージュがそれ（農地の貰貸）を預言者が禁じたというハディースを語りそれが彼（イブン・ウマル）の耳に入った。

そこでイブン・ウマルはラーフィウのもとに出掛けて行き、その時私（ナーフィウ）も一緒だったが、その事（農地賃貸の禁）について尋ねた。

するとラーフィウは「アッラーの使徒は農地の賃貸を禁じた」といった。

それでイブン・ウマルはそれ（農地の賃貸）を以後きっぱりと止めた。

そして以後そのことについて尋ねられた時はいつも「ラーフィウ・ビン・ハディージュがアッラーの使徒がそれを禁じたと主張したからだ」と答えるのが常でした。

アイユーブは前記と同様のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えているが、イブン・ウライヤのハディースではこれに加えて「イブン・ウマルは以後それをきっぱりと止めてしまい土地を貸すことはなかった」と伝えている。

ナーフィウは次のように伝えている

私はイブン・ウマルと一緒にラーフィウ・ビン・ハディージュの所に行った。

それで彼（イブン・ウマル）はバラート（注）に居た彼（ラーフィウ）の所までやって来た。

するとラーフィウはアッラーの使徒が農地の貰貸を禁じたと彼に伝えた。

（注）マディーナの預言者モスクの近くの場所でそこは石だたみが敷きつめられているのでその名がある

ナーフィウはイブン・ウマルがラーフィウの所に出掛けて行き、彼（ラーフィウ）が前記のハディース
を語ったと伝えている。

ナーフィウは次のように伝えている
　　イブン・ウマルはかつて土地の小作賃貸を行っていた。
　　そこへラーフィウ・ビン・ハディージュの伝えるハディースが彼の耳に入った。
　　そこで彼は私を連れてラーフィウの所に（そのことを確かめに）出掛けた。
　　ラーフィウは彼の叔父達から伝え聞いたとして預言者が土地の賃貸を禁じたことを伝えた。
　　そこでイブン・ウマルは以後それ（土地の賃貸）を止めて二度と土地の賃貸をすることは
　　なかった。
　　このハディースは別の伝承者経路によっても伝えられている。

サーリム・ビン・アブドッラーが伝えている
　　アブドッラー・ビン・ウマルはマディーナ出身のラーフィウ・ビン・ハディージュが土地の賃
　　貸を禁じている預言者のハディースを伝えているということが彼の耳に届くまでは彼の土
　　地を賃貸していた。
　　そこでアブドッラーは彼（ラーフィウ）に面会してこういった。
　　イブン・ハディージュよ、あなたはアッラーの使徒が土地の賃貸について語ったことで何を
　　伝えているのですか？
　　するとラーフィウはアブドッラーにこういった。
　　私はバドルの戦に参戦した二人の叔父からアッラーの使徒が土地の賃貸を禁じたことを
　　聞きました。
　　そこでアブドッラーはこういった。
　　アッラーの使徒の時代に土地が賃貸されていたことを私は知っています。
　　だがしかしアブドッラーはその後アッラーの使徒がそのことで新たに何かを語り、彼（アブ
　　ドッラー）がそれを知らなかったのかも知れないと恐れた。
　　それで彼は以後土地の賃貸を止めた。

穀物による土地の賃貸

ラーフィウ・ビン・ハディージュは次のように伝えている

我々はアッラーの使徒の時代に土地を賃貸していたその際一定量の穀物の他に収穫物の 1/3 かまたは 1/4 を上納する条件で貸していた。

ある日、私の叔父にあたる男が我々の所にやって来てこういった。

アッラーの使徒はかつて我々にとって有益であった行為を禁じた。

もっともアッラーとその使徒に従うことはそれ以上に有益ではあるが、いずれにせよ彼（預言者）は一定量の穀物の上納または収獲物の 1/3 または 1/4 を納める条件で我々が土地を賃貸することを禁じた。

そして土地の所有者にはそれを自ら耕すかあるいは他人に無条件で耕作させることを命じ、その賃貸やそれに類する一切を彼は嫌ったのだ。

ラーフィウ・ビン・ハディージュは次のように伝えている

我々は土地を収穫物の 1/3 か 1/4 を上納する条件で賃貸していた。

そして以下はイブン・ウライヤと同じハディースを語った。

ラーフィウ・ビン・ハディージュは前記のハディースを別の伝承者経路を経て伝えているが、ここでは「私の叔父」という言葉を伝えていない。

ラーフィウ・ビン・ハディージュが伝えている

叔父のズハイル・ビン・ラーフィウが私の所にやって来てこういった。

アッラーの使徒はかつて我々にとって有益だった行為を禁止した。

そこで私はこう言って尋ねた。 それは一体何ですか？

もっともアッラーの使徒がいった事それは完全に真実であると私は信じていますけれども。

するとズハイルは次のようにいった。

彼（預言者）は私に「あなた方は農地をどのようにしていますか？」と尋ねました。

そこで私はこう答えました。

アッラーの使徒よ我々は潅漑用水路付の農地をナツメヤシの実や大麦で上納する条件で賃貸しています。

すると預言者は次のようにいった。

そうしてはいけません、自ら耕すかあるいは他人に小作条件なしに耕させるか、あるいは自らそれをそのまま保持するしかない。

ラーフィウは預言者について前記のハディースを伝えているがここでは彼の叔父のズハイルとは名指していない。

金貨や銀貨による土地の賃貸

ハンザラ・ビン・カイスがラーフィウ・ビン・ハディージュに土地の賃貸について尋ねたところ、彼は次のように語ったとして伝えている

アッラーの使徒は土地の賃貸を禁じた。
そこで私は「金貨や銀貨で支払う条件でもいけないのですか？」と尋ねた。
すると彼は「それでなら構いません」といった。

ハンザラ・ビン・カイス・アンサーリーは次のように伝えている

私はラーフィウ・ビン・ハディージュに土地を金貨や銀貨で賃貸することについて尋ねました。
すると彼は「それは構わない」として次のように説明した。
かつて預言者の時代に人々は水路に面した土地や水口の土地を賃貸していた。
または畑の一部を（収穫の一部を上納する条件で）賃貸していた。
しかしある時はその一部の収獲がだめになり他の一部は収穫をみるかと思うとまたある時にはその一部が保全されても他の一部はだめになった。
そこで保全された分しか賃貸料が支払われなくなった。
このような理由でそれは彼（預言者）によって禁ぜられるに至った。
しかし一定量を保障されたお金などによる賃貸は別にさしつかいない。

ハンザラ・ズラキーはラーフィウ・ビン・ハディージュが次のように語ったハディースを聞いたとして伝えている

我々はアンサール（マディーナ土着のムスリム）の中でも大地主だったが土地を貸す際には「この部分でとれるものは我々のものであちらの部分でとれるものは彼等のもの」という条件で貸していた。
しかしこの部分では収穫をみてもあの部分では収穫がないことだってありました。
そこで預言者はこれを禁止しました。
しかし銀貨をもって支払う場合については禁じませんでした。

ヤヒヤー・ビン・サイードは前記と同様のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

ムザーラア（注 1）とムアージャラ（注 2）

（注 1）収穫物の一部を手に入れる契約で土地を耕すこと（注 2）お金で土地を貸すこと

アブドッラー・ビン・サーイブは次のように伝えている

私はアブドッラー・ビン・マアキルにムザーラアの取引について尋ねたところ彼はこういった。
サービト・ビン・ダッハークが私に「アッラーの使徒はムザーラアの取引を禁じた」と伝えた。
ところでイブン・アブー・シャイバの伝承では、「彼（預言者）はそれを禁じた」と伝え、また「私はイブン・マアキルに尋ねた」として名前の「アブドッラー」については言及しなかった。

アブドッラー・ビン・サーイブは次のように伝えている

私達はアブドッラー・ビン・マアキルを訪れてムザーラアの取引について尋ねた。
すると彼は「サービトはアッラーの使徒がムザーラアを禁じ、ムアージャラ（お金で土地を貸すこと）を命じた」と主張し、さらに「それなら構わない」ともいった。

土地の授与

ムジャーヒドがターウースにこういった

君は我々と一緒にイブン・ラーフィウ・ビン・ハディージュの所に行って彼の父（ラーフィウ）が預言者から伝え聞いている（土地の賃貸についての）ハディースについて聞くべきだ。

すると彼（ターウース）は私を（ムジャーヒド）を叱ってこういった。

私はアッラーに誓って、もしアッラーの使徒がそれを禁じたことを前もって知っていたならそうはしなかっただろう。

しかしそのことについて誰れよりも一番良く知っている人（イブン・アッバース）はアッラーの使徒が次のように語ったとして私にこう伝えています。

土地を（無償で）彼の兄弟に授与することは土地を決められた収穫物で貸すことよりは良いことだ。

かつて土地を賃貸していた**ターウース**はアムルが次のように語ったとして伝えている

私は彼（ターウース）に「アブー・アブドル・ラフマーン（ターウースの悼名）よ、あなたがこの収穫物の一部貢納条件付の土地賃貸（ムカーバラ）を止めてくれたらよいのだが。

なぜならば人々は預言者が土地の賃貸を禁じたと主張しているのだから」といった。

それからアムルはさらにつづけて「そのことで最も良く知っている人（イブン・アッバース）が私に次のように伝えた」といった。

預言者はそれを禁じなかった。預言者はただ次のように述べただけです。

あなた方の内で誰れであっても土地を己れの（宗教上の）兄弟に授与することは決められた一定の収穫物を受け取る条件で土地を与えることよりも良いことだ。

イブン・アッバースは預言者が語ったとして前記と同様のハディースを伝えている。

イブン・アッバースは預言者が次のように語ったとして伝えている

あなた方の内の誰れであれ、己れの土地を（宗教上の）兄弟に授与するならばそれはあれこれと何がしかを受け取ることよりも確かによいことだ。

そしてイブン・アッバースはさらにこう付け加えて説明した。

それとはハクル（土地の賃貸のこと）であり、アンサール（マッカから亡命した預言者一行を受け入れたマディーナ土着の信徒）の人達の言い方ではムハーカラのことである。

イブン・アッバースは預言者が次のように語ったとして伝えている

土地を持っている者がそれを己れの（宗教上の）兄弟に授与することは良いことである。

ムサーカーの書

収穫される穀物や果実の一部を見返りとする条件で果樹の世話をする「ムサーカー」（注）について

（注）原義は果樹に水をやること、果樹の世話契約従って果樹の小作のこと、ただし土地の小作はムザーラアと言う

イブン・ウマルは次のように伝えている

（ハイバルの役の後に）アッラーの使徒はハイバル（注）の住人との間にそこでとれる穀物や果実の半分を彼が受け取る条約を結んだ。

（注）マディーナ北方のユダヤ人の住むオアシス都市でイスラーム勢力に逆って敵対したために攻略されイスラーム側に降服した。

イブン・ウマルは次のように伝えている

アッラーの侍従は敗北したハイバル側にそこでとれる作物や果実の半分を与えた。
それで彼は（そのあがりで）彼の妻達に毎年 100 ワスク即ち乾燥ナツメヤシの実で 80 ワスクと大麦で 20 ワスクの糧を与えることができた。
それからウマルがカリフになった時に彼はハイバルの土地や樹木を分配した（注）。
その時彼は預言者の妻達に今まで通りに毎年決められた知行ワスクを受け取るかそれともそれを止めて新たに土地と水利権を取得するかの選択を求めた。
だが彼女達の意見は分かれ、土地と水利権を選ぶ者もいれば毎年の知行ワスクを選ぶ者もいるという状態で、アーイシャとハフサは土地と水利権を選んだ仲間に入っていた。

（注）第二代カリフ、ウマルはヒジャーズの地からユダヤ人を追放し彼等を他のイスラーム圏に移住させたのでその結果ハイバルの地は分配されることになったものと思われる

アブドッラー・ビン・ウマルは次のように伝えている

アッラーの使徒はハイバルの住人との間にそこに産する果実や穀物の半分を彼等に与えることとて条約を結んだ。
そして彼（イブン・ウマル）は前記と同様のハディースを伝えている。
ところでアリー・ビン・ムスヒルのハディースでは前記のアーイシャとハフサ以下の言葉は

伝えられていない。
また「土地と水利権」の所では「水利権」という単語にも言及していない。

アブドッラー・ビン・ウマルは次のように伝えている
ハイバルが陥落した時、土地のユダヤ人達はアッラーの使徒に果実や穀物の収穫の半分を貢納する条件でそこに引き続き留まることを懇願した。
するとアッラーの使徒は「我々が望む限りにおいて（注 1）あなた方をその条件でそこに住まわせましょう」といった。
そして残りは前記と同様のハディースを伝えたがしかしここではそれに加えて次のように伝えている。
かつてハイバルの果実の向半分はそれぞれの分け前に応じて分配されていた。
それでアッラーの使徒はその（半分の）五分の一を受け取っていた（注 2）。

（注 1）つまりイスラーム側が望む間だけはの意であり現に預言者はその統治の末期においてヒジャーズの地から異教徒を放逐する決意をしていた

（注 2）征服されたハイバルの地はいわばイスラームの国営地でその収穫の半分は国庫に入っていたがその中のさらに五分の一はイスラーム共同体のリーダーとしての預言者の私生活を支える費用のために使われていたの意

アブドッラー・ビン・ウマルは次のように伝えている
アッラーの使徒はハイバルのユダヤ人達にその土地とナツメヤシの樹を彼等の財産（種子や道具）を使って耕作栽培し、その収穫の半分をアッラーの使徒に上納する条件でそれらを返してやった（注）。

（注）彼等ハイバルのユダヤ人は戦いに敗けて元来は捕虜の身の上であったので当時としては決して悪い条件ではなかったはずだ

イブン・ウマルは次のように伝えている
ウマル・ビン・ハッターブはユダヤ教徒とキリスト教徒をヒジャーズ地方から追放した。
ところでアッラーの使徒がハイバルを征服した時にはユダヤ教徒とキリスト教徒をそこから追放しなかった。
なぜだろうか？
征服された時点でハイバルの土地はアッラーの使徒とイスラーム教徒のものとなった。
それで彼（預言者）は（実際の所）ユダヤ教徒の追放を望んだわけだがユダヤ人達はアッラーの使徒に彼等が引き続きその土地を耕し収穫物の半分を供出する条件でそこに留

まれるように懇願した。
そこでアッラーの使徒は彼等にこういったのである。
我々が望む限りにおいてあなた方をその条件で住まわせることにしましょう。
こうして彼等ユダヤ教徒達は（後に）ウマルがタイマーやアリーハ（注）に追放するまでそこに留まりつづけたのである。

（注）いずれもヒジャーズの地の外にある

植樹と耕作の徳

ジャービルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

誰でもムスリムが一本の木を植えるとその木から得られる食べ物はアッラーからの報償に値するその者の慈善行為である。
またその実が盗まれてもその分彼には報償が与えられる慈善行為となる。
また野獣や鳥類がそれを食べてもその分彼には報償が与えられる慈善行為であることには変りはない。
要するに誰も彼のこの慈善行為を減したり無にすることはできないのだ。

ジャービルは次のように伝えている

預言者はウンム・ムバッシルを彼女が所有するナツメヤシ園に訪れてこう尋ねた。
このナツメヤシの樹を枯えた者はムスリムですか、それともカーフィル(不信者)ですか？
そこで彼女は「もちろんムスリムです」と答えた。
すると彼(預言者)は次のようにいった。
ムスリムが木を植えたり作物を作ってそれを人間や動物その他の生き物が食べたとするとその分彼にとってそれはアッラーから報償が与えられる慈善行為以外の何ものでもないでしょう。

ジャービル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったハディースを聞いたとして伝えている

ムスリムが木を植えたり作物を作ったりしてそこから動物や鳥類その他の生き物が食糧を得る時にはアッラーがその者に報酬を与えずにはおかない。

ジャービル・ビン・アブドッラーが次のように伝えている

預言者は果樹園にいたウンム・マアバド(注)を訪れてこういった。
ウンム・マアバドよ、このナツメヤシの木を植えたのはムスリムですかそれともカーフィル(不信者)ですか？
そこで彼女は「もちろんムスリムです」と答えた。
すると預言者は次のようにいった。
ムスリムが木を植え、そこから人間や動物や鳥類が食糧を得る時には復活の日まで彼のこの行為は慈善の施しとして消えるものではない。

(注)前述のウンム・ムバッシルと同一人物と言われているが彼女はザイト・ビン・ハーリサの妻だったという

アブー・ムアーウィヤは前記同様のハディースを少し言葉を変えて伝えている

アナスはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

　ムスリムが木を植えたり作物を作ったりしてそれでもって鳥類や人間や家畜が食べ物を得る時には彼のその行為は慈善行為に他ならない。

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

　預言者はマディーナ土着の一人の婦人であるウンム・ムバッシルのナツメヤシ園を訪れてこういった。

　このナツメヤシを植えたのは誰れですか？

　ムスリムですか、それともカーフィル（不信者）ですか？

　するとそこに居合せた人々がムスリムであるといったが以下は前記と同様のハディースを伝えている。

天災にあった収穫物に対する代金支払いの免除について

ジャービル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

もしあなたの同胞に果実を売ったとしてそこに天災が起った場合にはあなたはあなたの同胞から何も得ることは出来ない。

何の根拠によってあなたは兄弟の財産を不法に取りあげることができようか？

イブン・ジュライジュは前記のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている

アナスは次のように伝えている

預言者はナツメヤシの実の売買をそれが良く熟するまで禁じた。

そこで我々はアナスに「それが熟する」とはどういうことかと尋ねた。

すると彼はこう言って説明した。

赤や黄色に色付くことです。アッラーが果実の成育を禁じた（災害で色付かない場合など）のにあなたはどんな理由であなたの兄弟の財産を手にすることが出来ますか？

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

アッラーの使徒は果実の売買をそれが熟するまで禁じた。

そこでそれを聞いていた彼の仲間が「熟する」とはどういうことかと尋ねた。

これに対して彼は次のように答えた。

それが赤く色付くことです。

もしアッラーが果実の成育を禁じた（天災などで）としたらあなたはどんな理由であなたの兄弟の財産を手にすることが出来るでしょうか？

アナスは預言者が次のように語ったとして伝えている

もしアッラーが果実を実らせなかったとしたら誰れが彼の兄弟の財産を手にすることが許されようか？

ジャービルは次のように伝えている

預言者は災害にあった作物に対する支払いの控除を命じた。

借金減額の徳

アブー・サイード・フドリーは次のように伝えている

アッラーの使徒の時代にある男が既に買った果実が天災にあって多大な借金を背負い込む羽目になった。
そこでアッラーの使徒は「彼に喜捨をするよう」人々に呼びかけた。
そこで人々は競って喜捨をした。
しかしそれで集まった金額は彼の借金を返済するまでに至らなかった。
（それを知った）アッラーの使徒は債権者達に向ってこういった。
あなたたちが（たまたま）見いだしたもの（喜捨されたお金）を取りなさい。
しかしあなた達にはそれ以外には何もありません。

ブカイル・ビン・アシャッジは前記のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

アーイシャは次のように伝えている

アッラーの使徒が戸口の所で言い争いをしている二人の男の甲高い声を聞いた。
驚いたことには一方が他方に負債の軽減を求め彼に寛大に取り計らってくれるよう頼んでいた。
しかしもう一方の男は「アッラーに誓ってそんなことはしない」と言い張っていた。
そこでアッラーの使徒は二人の所に出ていってこういった。
アッラーにかけても善行をしないと誓った者はどこにいる。
（それを聞いて恐れ入った）相手の男は「アッラーの使徒よ、それは私です。
彼には望むように致します」といった。

アブドッラー・ビン・カアブ・ビン・マーリクは他の父からの伝聞を次のように伝えている

アッラーの使徒の時代だったが彼（カアブ）は預言者のモスクでイブン・アブー・ハドラドに貸し付けてあった借金の返済をしつこく求めたことがあった。
そこで二人の声が（自然と）高くなったために（モスクに接して建てられた）家にいたアッラーの使徒の耳にまでそれが届いてしまった。
そこで彼は二人の方に向ってやって来て部屋の仕切りのカーテンを上げて「カアブよ」とイブン・マーリクを呼んだ。
そこでカアブは答えて「アッラーの使徒よ、御前に」といった。
すると彼は手で「あなたの借金の半分を免除するように」と指示した。
それでカアブは「アッラーの使徒よ、確かに私はそのようにします」といった。
次にアッラーの使徒は（イブン・アブー・ハドラドに向って）こういった。
さあ立って借金を返済しなさい。

カアブ・ビン・マーリクは次のように伝えている

彼（カアブ）はイブン・アブー・ハドラドに貸し付けた借金の返済を求めていた。

以下は前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

カアブ・ビン・マーリクは次のように伝えている

彼はかつてアブドッラー・ビン・アブー・ハドラド・アスラミーに金を貸していた。

そこで彼に出会った時、カアブはその返済を強要した。

そして二人は言い争いになり声を張り上げて押し問答した。

そこへアッラーの使徒が通りかかり「カアブよ」と呼びかけまさに「半分にしてやりなさい」

と言っているかの如く手で指示を与えた。

そこで彼は借金の半分だけを受け取り残りの半分を免除した。

買い手が破産して代金の支払いが不能になった時、売り手が買い手の所で売った商品を未だ手つかずに見付けた場合にはそれを取り戻せること

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

破産した男の所に（売り掛けになっている）売り手の商品を手つかずの状態で見付けた場合、それについては売り手の権利は誰れよりもある。

ヤヒヤー・ビン・サイードは前記と同様のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。しかしここでは「人が破産宣告を受けた時にはいつでも」と伝えている。

アブー・フライラは預言者が破産した男についてこう語ったとして伝えている

もし彼の所に商品を見付けそれがまだ元のままならそれはそれを売った者のものである。

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている

破産者の元に債権者が（売り掛けになっている）彼の商品を見付けた場合、彼はそれに対しては誰れよりも権利を有する。

カターダが前記と同様のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えているがここでは「彼はそれに対して他の債権者の誰れよりも権利を有する」と伝えている。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

破産者のもとに債権者が彼の商品を手つかずの元の状態で見付けた場合、彼はそれに対しては誰れよりも権利を有する。

困窮者に対する（借金）猶予の徳

フザイファはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

天使達があなた方以前にいたある男の魂を引き抜いた（死を与えた）。
そして天使達はその男にこういった。
あなたは何か善行を行いましたか？
すると男は「いいえ」と答えた。
そこで「良く思い出してみなさい」と天使達か言うと、彼は次のように語りました。
私は人によくお金を貸していましたが召使達（番当）に困窮者には借金の返済期日を待ってやるように、また支払能力のある者に対しても斟酌を旨とするよう命じていました。
崇高で荘厳なるアッラーは天使達に「その男の罪を許しなさい」と仰せられた。

フザイファとアブー・マスウードは次のように伝えている

ある男が（死後に）主にまみえた。主は「お前は何か良いことを（生前に）行ったか？」と尋ねた。
それで彼は次のように答えた。
私はこれといって良いことをしませんでした。
しかしかつて私にお金があった時、私はそれを人々に貸し与えその返済については能力のある人にはそれを求めましたが困っている人にはそれを免除しました。
そこで主は（天使に向って）「我が下僕の罪を許しなさい」と仰せられた。
また伝承者の一人アブー・マスウードも次のように伝えた。
私はこのようにアッラーの使徒が語っている話を聞きました。

フザイファは預言者が次のように語ったとして伝えている

ある男が死んであの世に行った。
そこで彼は「あなたは生前になにをしていたのか？」と聞かれたが彼はそれを自ら思い出したか思い出させられたかしてこういった。
私はかつて人々と取引を行っていましたが、（お金の返済に）困っている人には猶予を与え、（その返済に際しては）刻印貨幣の受け入れでも現金支払の請求の際でも厳格なうるさい条件を付けませんでした。
さてそこで彼はこの行為によって罪を許されました。
またアブー・マスウードは次のように付言しています。
私はこの話をアッラーの使徒から聞きました。

フザイファは次のように伝えている

アッラーは生前に金持ちにしてやった彼の下僕（人間）の一人をあの世に召した。

そして彼に「現世でお前は何を行ったか？」といった（もっともアッラーには何も隠し立ては出来ないのだが）。

そこで彼は次のように答えた。

主よ、あなたは私に富をお与えになりました。

そこで私は人々と取引を行っていましたが、私の寛容な性格からお金の支払い能力のある人にはその人のやり易い方法で、また困っている人にはそれを待ってやっておりました。

するとアッラーは「われこそ汝よりもそうする権利を有する者なり、（天使達よ）わが下僕の罪を見のがしてやりなさい」と仰せられた。

さてウクバ・ビン・アーミル・ジュハニーとアブー・マスウード・アンサーリーはこういった。

私達はそのようにアッラーの使徒から聞きました。

アブー・マスウードはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方以前に生きたある男が最後の審判を受けた。

彼には善行がまるで無かった。

しかし彼は金持ちで人々と取引をしていた時には彼の召使（番当）に命じて金の返済に困っている人には猶予を与え寛容に扱うよう指示していた。

そこで崇高にして荘厳におわしますアッラーはこう仰せられた。

我こそはそのことでは彼よりも権利があるのだが、天使達よ！　彼の罪を見逃してやりなさい。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

かつて人々にお金を貸していた男がいた。

そして使用人に言う彼の口癖は「返済に困っている人が来たら彼を寛大に扱いなさい。

そうすればアッラーが私達をお許し下さるだろう」ということだった。

そして彼がアッラーに実際にまみえた時にアッラーは彼の罪を見逃してやった。

アブー・フライラは前記と同様のハディースをアッラーの使徒から聞いたとして伝えている。

アブトッラー・ビン・アブー・カターダは次のように伝えている

アブー・カターダが借金の返済を彼の債務者に求めたところ、その男は姿を消してしまった。

その後アブー・カターダが彼を見付けた時「私は本当に困っているのです」と例の男はいった。

それでアブー・カターダは「アッラーに誓ってか？」と念を押した。

するとその男は「アッラーに誓って」といった。

そこでアブー・カターダは「私はアッラーの使徒が次のようにいったハディースを聞いている」といった。

審判の日アッラーがその苦しみから救ってくれることを願う者は借金返済に困っている者を助けてやるかあるいはそれを帳消しにしてやるかどちらかにしなさい。

前記のハディースは**アイユーブ**によって同様の伝承者経路を経て伝えられている。

支払能力がある者が借金返済の支払い延期をすることは禁止されている、ハワーラ（借金の肩代り）の有効性、金持ちは借金の肩代わりを依頼された場合（保証人となること）はそれを引受けることが望ましいこと

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

金持ちの借金返済引き延しは罪である。
またあなた方の誰れでも借金の肩代わりをある金持ちに移した場合は彼をして借金の肩代わりをせしめなさい。

アブー・フライラは前記と同様のハディースを伝えている。

乾燥した荒地で遊牧用の草の成育に欠かせない残余水の売買の禁止、またその水を人々が利用することを妨げてはならないこと、牡ラクダの有料種付の禁止

ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように伝えている

アッラーの使徒は余分な剰余水の売買を禁じた。

ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように伝えている

アッラーの使徒は有料のラクダの種付けを禁じた。

また他人に耕作させて収穫の一部を上納させる土地の賃貸や残余水を売ることを禁じた。

そしてそのようなことを全て禁じた。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

余った（井戸）水を制限しその結果（周辺の）草の成長が阻害されてはならない。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

余った（井戸）水を制限して（周辺の）草の成長を制限してはならない。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

余分な（井戸）水はそれによって育つ革を売って儲けるために売買されてはならない（注）。

（注）余った水はまず他に必要としている者に無償で与えられるべきであるの意

犬に値を付けること（注）、占師へのお菓子の謝礼、売春による儲け、猫の売買等全ての禁止

（注）ただし猟犬と番犬は別である

アブー・マスウード・アンサーリーは次のように伝えている

アッラーの使徒は犬に値をつけることと売春によって金を得ること、占い師にお菓子を差し出すことを禁じた。

ズフリーは前記と同様のハディースを別の伝承者の経路を経て伝えている。
ところでイブン・ルムフの伝承では「彼はアブー・マスウードから聞いた」とある。

ラーフィウ・ビン・ハディージュは預言者が次のように語るハディースを聞いたとして伝えている

最悪の所得とは売春による稼ぎと犬の値ぶみと吸角法施術師の所得である（注）。

（注）吸角法施術は必ずしも全面的に禁止されているわけではない。
なぜならば預言者自身がこの施術を受けて謝礼したという確かな記録がある

ラーフィウ・ビン・ハディージュはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

犬の値段は忌むべきものだ。
また売春の稼ぎも忌むべきものだ。
また吸角法施術師の所得も忌むべきものである。

ヤヒヤー・ビン・アブー・カスィールは前記と同様のハディースを同様の伝承者の経路を経て伝えている。

ラーフィウ・ビン・ハディージュは前記と同様のハディースを別の伝承者の経路を経て伝えている

アブー・ズバイルは次のように伝えている

私はジャービルに犬や猫に値段を付けることについて尋ねました。
すると彼は「預言者はその行為を叱った」といった（注）。

（注）犬猫の売買を全面的に禁止したわけではない。
特に猫の売買の可能性については多くの学者によって支持されている

犬類殺害の命令とその取り消し、猟犬、番犬、シェパード犬以外の犬を飼うことは禁ぜられていること

イブン・ウマルは「アッラーの使徒は犬を殺すように命じた」と伝えている。

イブン・ウマルは次のように伝えている

アッラーの使徒は犬を殺すことを命じた、そしてマディーナの各地区に犬を殺すべく人を送った。

アブドッラー・ビン・ウマルは次のように伝えている

かつてアッラーの使徒は大の殺害を命じたものでした。

そこで私達はマディーナの隅々まで人を送って片っぱしから犬を殺しました。

そしてとうとうベドウインの女に付いてくる犬までも殺しました。

イブン・ウマルはこう伝えた

アッラーの使徒は猟犬や羊その他の家畜の番犬以外の犬を殺すように命じた。

ところでイブン・ウマルはアブー・フライラは「もしくは農地を見回る犬」と言っていますがと問われた。

そこで彼はこういった。

アブー・フライラは農地を持っていたからじゃよ。

アブー・ズバイルはジャービル・ビン・アブドッラーが次のように語ったとして伝えている

アッラーの使徒は私達に犬を殺すように命じました。

そこで私達は砂漠からやって来た婦人の連れ犬までも殺してしまいました。

その後預言者はそれを殺すことを禁止しました。

そして彼はこう言いました。

あなた方は両目の上に白い斑点のある真黒な犬を殺すべきである。

なぜならばそれはシャイターン（悪魔）であるからだ。

イブン・ムガッファルは次のように伝えている

アッラーの使徒は犬を殺すように命じた。

その後彼は「彼等（マディーナの市民）の様子はどうですか？

また野犬の様子はどうですか？」といった（即ち増え過ぎた野犬にマディーナの市民は未だ困っているかどうかと尋ねたの意）。

それから彼は猟犬と羊の番犬については飼うことを許可した。

ヤヒヤーは伝えている

彼（預言者）は羊の番犬と猟犬と農地の番犬については飼うことを許可した。

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

猟犬や家畜などの番犬以外の犬を所有する者は毎日 2 キーラート（注）ずつ彼の善行が減少されていく。

（注）カラットの源語となったギリシャ語起源のアラビア語で貴金属宝石類の重量単位（0.2 グラム）として用いられたが預言者の時代にはかなりの重量とみなされたという

サーリムは彼の父からの伝聞として預言者が次のように語ったとして伝えている

猟や見張り以外のために犬を飼う者は毎日 2 キーラートずつ彼の（積んだ善根に対するアッラーの）報償が減少する。

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

猟や家畜の番以外のために犬を飼う者は毎日彼の善行が 2 キーラートずつ減少する。

サーリム・ビン・アブドッラーは彼の父からの伝聞としてアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

家畜の番あるいは猟以外のために犬を飼う者は毎日 1 キーラートずつ彼の善行が減少する。

またアブドッラーとアブー・フライラは「あるいは畑の見張りのために犬を飼う」を加えている。

サーリムは彼の父からの伝聞としてアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

猟あるいは家畜の番以外のために犬を飼う者は毎日 2 キーラートずつ彼の善行が減少する。

ところでサーリムの父アブドッラーはさらにこう付け加えた。

（畑を所有していた）アブー・フライラは「あるいは農地を見張る犬」という一節を加えた。

サーリム・ビン・アブドッラーは彼の父からの伝聞としてアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

家畜の番犬あるいは猟犬以外の犬を飼う家の主人は誰れでも毎日彼の善行が 2 キーラートずつ減少する。

イブン・ウマルは預言者が次のように語ったとして伝えている

畑の見張りや家畜の番及び猟のため以外に犬を飼う者は（アッラーからの）己れの報償を毎日１キーラートずつ減らしている。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

猟犬や家畜の番犬や畑の番犬以外の犬を飼う者は毎日２キーラートずつ己れの報償を減らしている。

またアブー・ターヘルの伝えるハディースでは「畑の番犬」については伝えていない。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

家畜の番犬や猟犬や農地の番犬以外のために犬を飼う者は毎日１キーラートずつ己れの報償が減少する。

またズフリーは次のように語っている。

イブン・ウマルにアブー・フライラの上記の言葉が語られたところ彼は「アッラーがアブー・フライラを祝福なさいますように、彼は農地の所有者でした（注）」といった。

（注）アブー・フライラは預言者存命中は貧しい生活を送っていた。

その後大征服時代になってから農地を与えられたわけであるから上記のハディースは少々おかしいところがある

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

犬を所有する者は毎日１キーラートずつ己れの善行を減少させている。

ただし農地や家畜の番犬を飼う場合は別だが。

アブー・フライラは前記と同様のハディースを伝えている。

ヤヒヤー・ビン・アブー・カスィールは前記と同様のハディースを同様の伝承者緑路を経て伝えている。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

猟犬や羊の番犬でない犬を飼う者は毎日１キーラートずつ己れの善行を減らしている。

スフヤーン・ビン・アブー・ズハイル（シャヌーア族の出身）はアッラーの使徒が次のように語ったハディースを聞いたとして伝えている

農地や家畜の番犬以外の犬を飼う者は毎日１キーラートずつ己れの善行を減らしている。

またサーイブ・ビン・ヤズィード（スフヤーンからこのハディースを聞いた伝承者）は次のよ

うにいった。

あなた（スフヤーン）はこれをアッラーの使徒から（直接）聞いたのですね？

すると彼（スフヤーン）は「はいそうです、このモスクの主（アッラー）に誓って」といった。

スフヤーン・ビン・アブー・ズハイルは前記と同様のハディースを伝えている。

ヒジャーマ（吸角法、吸玉放血）料金取得の許可について

フマイドは次のように伝えている

アナス・ビン・マーリクが吸角法放血施術師の料金について尋ねられた。
そこで彼はこう答えた。
アッラーの使徒は吸角法放血施術をしてもらいました。
その施術はアブー・タイバ（バヤーダ族の奴隷）が行いました。
それが終った後彼（預言者）は 2 サーアの穀物を（施術者に）与えるように命じました。
また施術者の一族の者達には彼の施術について話した。
そこで彼等は施術者の地租税をその分自発的に軽減した（注）。
また預言者は次のようにいった。
あなた方が行う治療で最も優れているものはこの吸角法放血施術です。
それは最も典型的な医療です。

（注）バヤーダ族全体の地租税（ハラージュ）の中で施術者の負担分は免除したの意

フマイドは次のように伝えている

アナスが吸角法放血施術を行う者の収入について（認められるかどうか）尋ねられた。
そこで彼は前記と同様のハディースを語ったがここでは「あなた方が行う治療の内で最も
優れているのはこの吸角放血施術と海のコアスタ（注 1）である。
故にあなた方は子供の喉を押さえつけて痛めつけてはならない（注 2）」と付け加えている。

（注 1）沈香やきゃらの原料となるインド産の香木で aloe Wood ともいう、それは胃病、心臓
病、脳疾患等特に咽喉疾患によく利くとされている

（注 2）当時の人々は子供の喉の痛みを押さえつけて治そうとした。
その代りに預言者はこのインド産の香木を使うよう指示した

フマイドはアナスが次のように語るハディースを聞いたとして伝えている

預言者は我々の所の吸角法放血施術を行う若い奴隷を呼び寄せて放血施術をさせた。
そして彼に 1 サーアかあるいは 1 か 2 ムッドの小麦を（その報酬として）与えるよう命じた。
また預言者が施術者のことについて（彼の主人）と話したので施術者の納税負担はその
結果軽減された。

イブン・アッバースは次のように伝えている

アッラーの使徒は吸角放血の治療を受けその施術師に代金を支払った。

そしてまた彼はかぎ薬を鼻腔に入れた。

イブン・アッバースは次のように伝えている

バヤーダ族の奴隷が預言者に吸角放血の治療を行った。

それで預言者は彼にその代金を支払い、彼の主人には（彼の税負担について）話した。

そこで主人は彼の税負担を軽減した。

もしこのこと（施術）が禁じられていたなら預言者はそれ（代金）を与えることはなかったでしょう。

酒類販売の禁止

アブー・サイード・フドリーはアッラーの使徒がマディーナで次のような説教をしたハディースを聞いたとして伝えている

や一皆の衆、至高におわすアッラーは酒類の禁止を暗示しておられる。
たぶんもうすぐ命令が下されるでしょう。
酒を持っている人はすぐに売って儲けを取りなさい。
さて伝承者は「そしてわずかな期間をおいて預言者は次のようにいった」として述べている。
至高におわすアッラーは酒を禁じられた。
故にこのクルアーンの一節(第5章90節)を知った者は酒を持っていてもそれを飲むことも売ることも出来ない。
さらに伝承者は「そこで酒を持っていた人々はそれを持ってマディーナの道路にやって来て路上にぶちまけた」と語った。

アブドル・ラフマーン・ビン・ワアラト・サバィー(エジプト出身)はアブドッラー・ビン・アッバースにブドウを搾った汁について尋ねた

イブン・アッバースはこれに答えてこういった。
ある男がアッラーの使徒にワインが一杯入った革製の水袋のプレゼントをした。
するとアッラーの使徒はその男にこういった。
あなたはアッラーが既にそれを禁じられたことを知らないのですか？
すると彼は「いいえ」と答えて、他の男にこっそりと何か耳打ちした。
そこでアッラーの使徒は彼に「何を耳打ちしたのですか？」と尋ねた。
するとその男は答えて「この酒を売るように指示しました」といった。
そこでアッラーの使徒は「飲酒を禁じたお方はその売買も禁じました」といった。
そこでその男はその水袋を開き中のもの(酒)をすべて流してしまいました。

アブドッラー・ビン・アッバースは前記と同様のハディースを伝えている。

アーイシャは次のように伝えている

クルアーンの雌牛章の最後の節(第2章275節〜)が啓示された時アッラーの使徒は外に出てそれを読んで聞かせた後に酒の売買を禁じました(注)。

(注)飲酒の禁については既にこの節以前に啓示されており、ここでの禁止(商取引)は最初の啓示では禁止されていなかった。
そのために改めて禁止の項が啓示されたものと考えられる。

あるいはまた最初の禁止でこの商取引も禁じられていたとも考えられるかここではリバー（高利）の禁止の啓示が下ろされたので再確認のためにまた以前に知らなかった人々にも知らせる意味で再度禁止の項が下ったとも考えられる

アーイシャは次のように伝えている

クルアーンの雌牛の章の最後のリバー（高利）に関する節が啓示された時、アッラーの使徒はモスクに出てきて酒の売買を禁じました。

酒と動物の死体と豚と偶像の売買禁止

ジャービル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が勝利の年（マッカ征服の年）にマッカで次のように語ったハディースを聞いたとして伝えている

アッラーとその使徒は酒と動物の死体と豚と偶像の取引を禁じた。
すると誰かがこういった。
アッラーの使徒よ、死体の脂についてはどうですか？
それは舟に塗装される（水の浸透を防ぐ）し、革のなめし油としても使われます。
また庶民は（燈して）明かりにも使います。
すると彼は「いやそれはハラーム（禁じられていること）だ」と言いさらに続けてこういった。
アッラーがユダヤ人を滅ぼされますように！
彼等は崇高にして荘厳におわすアッラーがその脂を禁じたにもかかわらずそれを溶かして売りその代金を得ている。

ヤズィード・ビン・アブー・ハビーブは次のように語った

アターウは私にジャービル・ビン・アブドッラーがアッラーの使徒から勝利の年に聞いたとして前記と同様のハディースを伝えた。

イブン・アッバースは次のように伝えている

ウマルの耳にサムラが酒を売ったという知らせが届いた。
するとウマルはこういった。
アッラーがサムラを滅ぼしますように！
いったい彼はアッラーの使徒が「禁じられた（動物の死体の）脂を溶かしてそれを売ったユダヤ人達にアッラーの呪がありますように！」といったハディースを知らないとでも言うのでしょうか！？

アムル・ビン・ディーナールは前記と同様のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アッラーが禁じられた（動物の死体の）脂を売り払いその代金を手にしたユダヤ人をアッラーが滅ぼしますように！

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アッラーがユダヤ人を滅ぼしますように！
（動物の死体の）脂が禁じられているにもかかわらずそれを売り払いその代金を手にしたがために！

リバー（高利）

アブー・サイード・フドリーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

同質同量以外で金で金を売ってはならない。

（売る際には）少しでも増減があってはならない。

また同質同量以外で銀で銀を売ってはならないし少しでも増減があってはならない（注）。

また物を後渡しで現金取引をしてはならない。

（注）利益となる増減でなくリバー（高利）となる増減のことを指している。

同質物品の取引はリバーの抜け道として利用される恐れがあった

ナーフィウは次のように伝えている

イブン・ウマル（アブドッラー）は彼にライス族のある男が次のように語ったとして伝えた。

即ちアブー・サイード・フドリーは前記の預言者のハディースを伝えているといった。

ところでクタイバの伝承の中では「そこでアブドッラー（イブン・ウマル）はナーフィウと彼（ライス族の男）を連れて出かけた」とあり、またイブン・ルムフの伝えた伝承ではナーフィウは次のように伝えている。

即ちアブドッラーと私はライス族の男と一緒に出かけアブー・サイード・フドリーの所に行った。

そこで彼（アブドッラー・イブン・ウマル）はこういった。

あなた（アブー・サイード・フドリー）はアッラーの使徒が銀と銀の取引には同質同量以外の取引を禁じ、金と金の取引でも同質同量以外の取引を禁じたと伝えていますね？

するとアブー・サイード・フドリーは彼の二本の指で自分の両目と両耳を指してこういった。

確かに私の両目は見ました。

私の両耳はアッラーの使徒が次のように語ったハディースを聞きました。

同質同量以外で金を金で売ったり銀を銀で売ったりしてはならない。

また少しでもどちらの場合も増減したりしてはならない。

そして先物後渡しで物を現金取引してはならない。

必ず現物手渡しの取引きでなければならない。

アブー・サイード・フドリーは前記のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アブー・サイード・フドリーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

金を金であるいは銀を銀で売る時には同質同量でしか売ってはならない。

ウスマーン・ビン・アッファーン（後に第三代カリフとなる）はアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

1 ディーナール（金貨）を 2 ディーナールで売ってはならない。
また 1 ディルハム（銀貨）を 2 ディルハムで売ってはならない（注）。

（注）このような取引を認めるとリバー（高利）の逃げ道を公然と認めたことになり兼ねないから

両替と金を銀貨で売買すること

マーリク・ビン・アウス・ビン・ハダサーンは次のように伝えている

私が誰れか（金を）ディルハム（銀貨）に交換する人はいないかと言いながらやって来た時ウマル・ビン・ハッタ－ブのそばにいたタルハ・ビン・ウバイドッラーが「あなたの金をみせてくれ。後で召使が来たら約束のあなたの（受け取る）銀をあげるから（再び）私達の所に来てくれ」といった。

するとウマル（後に第二代カリフとなる）はこう言って戒めた。

いやいやアッラーに誓って、あなたは今彼に銀を与えるかさもなければその金貨を返すべきだ。

なぜならばアッラーの使徒は「銀と金の交換はその場で行う以外はリバー（イスラーム法で禁じられている高利）になる。

また小麦と小麦の交換もその場で行う以外はリバーになる。

また大麦と大麦の交換もその場で行う以外はリバーになる。

同様に乾燥ナツメヤシの実と乾燥ナツメヤシの実の交換もまたその場で行う以外はリバーとなり禁じられている」と語ったからです。

ズフリーは前記と同様のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

アブー・キラーバは次のように伝えている

かつて私はシリアのある車座教場で勉強していました。

そこにはムスリム・ビン・ヤサールもいました。そこにアブー・アシュアスがやって来ました。

人々が「アブー・アシュアスだ、アブー・アシュアスだ」と言うと彼は（私達の車座の中に）座りました。

そこで私は彼に「我々の（宗教上の）兄弟ウバーダ・ビン・サーミトの伝えたハディースを話してくれないか」と言うと彼はこう言いました。

分かりました、私達はムアーウィヤの指揮する遠征隊に加わり出撃してたくさんの戦利品を得ました。

そしてその戦利品の中には一ケの銀製の容器がありました。

そこでムアーウィヤはそれを売って人々（兵士達）に分け与えるよう或る男に命じました（注）。

人々は分け前を得ようと躍起となっていました。

そしてそのことがウバーダ・ビン・サーミトの耳に入った時彼は立ち上がりこう言いました。

本当に私はアッラーの使徒が金と金、銀と銀、小麦と小麦、乾燥ナツメヤシの実と乾燥ナツメヤシの実、塩と塩の取引は同質同量でなければならないと言い、

さらに預言者はもしそれに追加する者や増加を受け入れる者はその分リバー（高利）を行ったことになるといったハディースを聞きました。
それで人々は手に入れたものを返しました。
またこのことがムアーウィヤの耳に伝わると彼は立ち上がり次のように演説した。
アッラーの使徒をこの日で見、彼と同席した我々が聞いたこともないハディースを伝える人々のことなど取るに足らないではないか。
するとウバーダ・ビン・サーミトは立ち上がり再び先の話しを繰り返した後でこういった。
我々はアッラーの使徒から聞いた事を話しているだけだ。
たとえムアーウィヤが嫌がっても（あるいはたとえそれが彼の意に反していようとも）。
私は漆黒の闇夜に預言者の兵に同席しなかったことを気に懸けてはいない。
なおハンマードの伝える所によれば彼は「このように若しくはそれに近いことをいった」と付け加えている。

（注）ムアーウィヤはこの容器を実際の銀の目方以上の値で売りつけたと言われている

アイユーブは前記と同様のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

ウバーダ・ビン・サーミトはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
金と金、銀と銀、小麦と小麦、大麦と大麦、乾燥ナツメヤシの実と乾燥ナツメヤシの実、塩と塩の売買はそれぞれが同質同量で（支払いは）その場で手から手に渡さなければならない、
もしこれ以外の組み合わせの売買で支払を直接手渡しにするならばあなた方の好きなように売買するがよい。

アブー・サイード・フドリーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
金と金、銀と銀、小書へと小麦、大麦と大麦、乾燥ナツメヤシの実と乾燥ナツメヤシの実、塩と塩の取引は同量でかつ（支払いは）手から手に直接手渡しにしなさい。
もしそれに増やしたり増加を求める者がいれば与えた方も受け取った方も同じようにリバーの禁を犯したことになる。

アブー・サイード・フドリーは前記と同様のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
乾燥ナツメヤシの実と乾燥ナツメヤシの実、小麦と小麦、大麦と大麦、塩と塩の取引は同量で（支払いは）直接手渡しにしなければならない。

それに加えたり増加を求める者はそれぞれ異る商品の組み合せによる取引以外はリバーの禁を犯したことになる。

フダイル・ビン・ガズワーンは前記と同様のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えているがここでは彼は「手渡しで」とは述べていない。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

金と金の取引では同じ重さで同じ品質でなければならない。
また銀と銀の取引でも同じ重さで同じ品質でなければならない。
それより多くする者や多く求める者はリバーの禁を犯したことになる。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

ディーナール（金貨）とディーナールの交換はその二つの間に余分があってはならない。
またディルハム（銀貨）とディルハムの交換もまたその二つの間に余分があってはならない。

前記のハディースは**ムーサー・ビン・アブー・タミーム**によって同様の伝承者経路を経て伝えられている。

金で銀を売る取引で支払いを先に延ばすことは禁ぜられている

アブー・ミンハールは伝えている

私の事業仲間がこんどの巡礼シーズンが巡礼の日に清算する約束で銀を売った。

彼は私の所にやって来てそのことを伝えたので私は「それは正しくないことだ」と言いました。

すると彼はこう言いました。

私は既に市場でこのような方法で売りましたが誰一人として私に文句を言う人はいませんでした。

そこで私はバラーウ・ビン・アーズィブの所に出かけてそのことについて尋ねてみました。

すると彼はこう言いました。

預言者がマディーナに移住して来た時、私達はこのやり方で商売をしていました。

それを見た預言者は「手から手に渡すことは構わないが売りかけにすることはリバーの禁を犯すことになる」と言いました。

よかったらザイド・ビン・アルカムの所に行って聞いてみなさい。

彼は私よりもずっと大きな商をしています。

そこで私は彼の所に行って尋ねました。

すると彼は前記と同じことを話してくれました。

ハビーブはアブー・ミンハールが次のように語っている話を聞いたとして伝えている

私（アブー・ミンハール）はバラーウ・ビン・アーズィブに両替について尋ねたところ彼は「ザイド・ビン・アルカムに聞きなさい。彼の方が良く知っているから」といった。

そこで私はザイドに尋ねたところ彼は「バラーウに聞きなさい。彼の方が良く知っているから」といった。

その後二人はこういった。

アッラーの使徒は銀を金で売るとき売り掛けにすることを禁じました。

アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクラは彼の父（アブー・バクラ）が次のように語ったとして伝えている

アッラーの使徒は銀と銀、金と金の取引は同量の条件で行う以外は禁じました。

そして私達に銀を金で買う場合や金を銀で買う場合は私達の好きなようにしなさいと指示した。

するとある男が「手から手に直接渡して」と言いませんでしたかと尋ねたが彼は「私はそのように聞きました」と答えた。

アブドル・ラフマーンは彼の父（アブー・バクラ）が次のように語ったとして伝えている
アッラーの使徒は私達に禁じた……以下は前記のハディースと同じである。

真珠の入った金の首輪の販売

ファダーラ・ビン・ウバイド・アンサールは次のように伝えている

アッラーの使徒がハイバルに遠征した時、戦利品として真珠の入った金の首飾りが売り物として彼の所に持って来られた。

そこでアッラーの使徒は首飾りの金を分離するように命じそれだけが外された。

それから彼は人々にこういった。

金と金の取引は同じ重さで行いなさい。

ファダーラ・ビン・ウバイドは伝えている

私はハイバル遠征の戦勝日に 12 ディーナールで真珠の入った金の首輪を買いました。

そして金だけを取り分けたところそれが 12 ディーナール以上の重さがあることが分かりました。

そこでそのことを預言者に話したところ彼は「（首飾りは）その成分をより分けない限り売られるべきではありません」と言いました。

サイード・ビン・ヤズィードは前記と同様のハディースと同様の伝承者経路を経て伝えている。

ファダーラ・ビン・ウバイドは次のように伝えている

かつて私はハイバルの遠征の戦勝日にアッラーの使徒と一緒にいた時でしたがユダヤ人に 1 ウーキヤ（注）の金を 2 ディーナールもしくは 3 ディーナールで売っていました。

するとアッラーの使徒はこう言いました。

金を金で売る場合には同じ目方でしか売ってはならない。

（注）ギリシャ語語源でおおよそ 1/2 英オンスの重さ

ハナシュは次のように伝えている

私達はある戦いでファダーラ・ビン・ウバイドと一緒だった。

その時私と仲間の所に金と銀と宝石が散りばめられた首飾が戦利品として手に入った。

私はそれを買いたいと思いファダーラ・ビン・ウバイドに尋ねた。

すると彼はこういった。

金だけを取り出し天秤の一方の皿の上に置きなさい。

そしてもう一方の皿にはあなたの金を乗せなさい。

そしてあなたは同じ分量だけ取りなさい。

なぜなら私はアッラーの使徒が次のようにいったハディースを聞いたからです。

アッラーと来世を信じる者は同じ分量以外に取ってはならない。

食糧（穀物）の売買は同量で行う

ブスル・ビン・サイードは次のように伝えている

マアマル・ビン・アブドッラーは召使に１サーアの小麦を持たせ「これを売って大麦を買って来なさい」と言ってお使いに出した。
そこでその召使は出掛けて行き、１サーアといくらか余分の大麦を持ち帰った。
そしてそのことを彼がマアマルに告げると彼はこういった。
なぜそのようにしたのですか？
もう一度行ってそれを返して来なさい。
あなたは同じ分量しか取ってはいけません。
なぜなら私はアッラーの使徒が次のように常々語っているハディースを聞いているからです。
食糧と食糧の交換は同量で行うべきだ。
さて当時我々の食糧とは大麦のことを言いましたが誰かがこう言いました。
それ（小麦）はそれ（大麦）とは同じではありません。
すると彼（マアマル）は「私はそれが類似していることを懸念しているのです」といった（注）。

（注）つまり大麦と小麦は同種のものと考える、従って同量交換の規定が通用されるとする考え

アブー・フライラと**アブー・サイード**の二人は次のように伝えている

アッラーの使徒はマディーナ土着のアディー族の一人をハイバルに年貢の徴収のために遣わした。
そして彼が上等の乾燥ナツメヤシの実を持って帰った時アッラーの使徒は彼にこういった。
ハイバルの乾燥ナツメヤシの実は全てこの種類のものですか？
するとその男はこう答えた。
いいえ、アッラーに誓って、アッラーの使徒よ、我々はその乾燥ナツメヤシの実１サーアにつき（上等不良が混じった）混合乾燥ナツメヤシの実２サーアで必ず買うことになっています。
するとアッラーの使徒はこういった。
それはいけません、同じ物には同じ量で交換しなさい。
それともこれを売ってからそのお金でそちらを買いなさい。
そうすればつりあいが取れたことになります。

アブー・フライラは次のように伝えている

アッラーの使徒はある男をハイバルに年貢の徴収のために代理として遣わした。

彼は任務を終えて上等な乾燥ナツメヤシの実を持ち帰った。

そこでアッラーの使徒は彼にこういった。

ハイバルの乾燥ナツメヤシの実はすべてこのようなのですか？

するとその男はこういった。

いいえ、アッラーに誓って、アッラーの使徒よ、我々はこれを 1 サーアに対し 2 サーアを 2 サーアに対しては 3 サーアを払っても手に入れるでしょう（それ程の高級品ですの意）。

するとアッラーの使徒はこういった。

そうしてはいけない。まず（あなたの持っている）質の落ちる乾燥ナツメヤシの実をディルハム（銀貨）で売りなさい。

そしてその銀貨で高級品質の乾燥ナツメヤシの実を買いなさい（そうすればリバーにならないの意）。

アブー・サイードは次のように伝えている

ビラールが高級品質の乾燥ナツメヤシの実を持ってやって来た時アッラーの使徒は彼に向ってこういった。

これはどこからのものだ。

するとビラールはいった。

もともと我々は品質の良くない乾燥ナツメヤシの実を持っていたのですが預言者の食べ物ということでそれらを 2 サーアに対してこれを 1 サーアで交換したのです。

その時預言者はこういった。

あー、それこそリバーそのものです。

そんなことをしてはいけません。

どうしてもそれを買いたいのならばまずあなたの手持のものをほかで売りその代金で高級タムル（乾燥ナツメヤシの実）を買いなさい。

ところでイブン・サハルが伝えるハディースでは「その時」という語句は伝えていない。

アブー・サイードは次のように伝えている

アッラーの使徒のもとに乾燥ナツメヤシの実が持ち込まれた。

するとアッラーの使徒はこういった。

この乾燥ナツメヤシの実は我々のところのものと違う。

そこで一人の男がこういった。

アッラーの使徒よ、我々はこの乾燥ナツメヤシの実 1 サーアを 2 サーアの品質の劣る乾燥ナツメヤシの実とで取引したのです。

するとアッラーの使徒はこういった。

それこそリバーである。それを返しなさい。
それから我々の乾燥ナツメヤシの実をまず売りなさい。
そしてその代金でこの種の（上等な）乾燥ナツメヤシの実を買いなさい。

アブー・サイードは次のように伝えている
我々はアッラーの使徒の時代に（上等不良）色々混った乾燥ナツメヤシの実を食用にしていましたがこの混合ナツメヤシの実 2 サーアと高級なナツメヤシの実 1 サーアとを交換していました。
そしてこのことがアッラーの使徒の耳に届いた時彼はこういった。
2 サーアと 1 サーアの乾燥ナツメヤシの実や 2 サーアと 1 サーアの小麦の交換はあり得ないし、1 ディルハムと 2 ディルハムの交換もあり得ない。

アブー・ナドラは次のように伝えている
私はイブン・アッバースに両替について尋ねた。
すると彼は「手から手に直接渡す場合ですか？」といった。
私が「そうです」と答えると彼は「それは構わないでしょう」といった。
そこで私はアブー・サイードに私がイブン・アッバースに両替について尋ねたところ彼は「手から手に直接か」聞いたので「そうです」と答えると「それなら構わないでしょう」といったことを伝えました。
すると彼（アブー・サイード）は次のように言いました。
ほんとに彼はそういったのですか？
私はすぐに問合わせの手紙を書きますが彼はそのファトワー（法勧告）をあなた方に出さないでしょう。
それというのもアッラーに誓ってアッラーの使徒の若い召使の何人かが乾燥ナツメヤシの実を持って来たが使徒はそれ（受取）を拒否してこう言いました。
これは我々の土地で採れた乾燥ナツメヤシの実ではないようだ。
そもそもその年は我々の土地または我々の乾燥ナツメヤシの実には何か災害が起り不作だった。
そこで私（アブー・サイード）はそれを交換する際に幾らか割増した。
するとアッラーの使徒はこういった。
あなたは質の良い乾燥ナツメヤシの実を手に入れるためにあなたのナツメヤシの実の量を増やしましたね、それはほとんどリバーの罪を犯したも同然です。
二度とそのようなことをしないことです。
もしあなたの乾燥ナツメヤシの実（の品質）に何か疑いがある場合にはまずそれを売ってからその代金であなたの欲しい乾燥ナツメヤシの実を買いなさい。

アブー・ナドラは次のように伝えている

私はイブン・ウマルとイブン・アッバースに（金と金との）両替（注）について尋ねたところ二人とも悪い事ではないと考えていた。

また私がアブー・サイード・フドリーの所に座っている時に両替について尋ねると彼は「増えた分についてはリバーである」といった。

そこで私は前の二人の言葉を根拠にそれに難色を示したので彼は更にこういった。

私はアッラーの使徒から聞いた事しかあなたに話していません。それは次のようなことです。

ナツメヤシの木の所有者が彼の所に 1 サーアの上等な乾燥ナツメヤシの実を持ってやって来ました。

預言者の乾燥ナツメヤシの実もこの同じ種類のものでした。

そこで預言者は彼に「どこでこれらを手に入れましたか？」といった。

そこで彼は「2 サーアを持って出てそれでもってこの上等なものを 1 サーア買いました。

市場ではこの種の値段はこうです。あの種の値段はこうです」といった。

するとアッラーの使徒は次のようにいった。

お前に災いあれ！

お前はリバーを行った。

もしそれが欲しいのならまずお前の乾燥ナツメヤシの実をお金か他の品物で売ってからそれで今度はお前の好きなナツメヤシの実を買いなさい。

さてアブー・サイードはこういった。

乾燥ナツメヤシの実と乾燥ナツメヤシの実の取引はリバーになり易い。

あるいは銀と銀の取引も同じだが。

さて彼（アブー・ナドラ）はこういった。

その後私はイブン・ウマルの所に行ったら彼は私にそれ（両替）をすることを禁じた。

しかし私はイブン・アッバースの所には行かなかった。

さらに彼（アブー・ナドラ）はこう付け加えた。

アブー・サフバーはマッカでイブン・アッバースにそのことを尋ねたところ彼はそれを認めなかった。

（注）ここでは良悪優劣の差のある金の交換を意味している

アブー・サーリフはアブー・サイード・フドリーが次のように語った話を聞いたとして伝えている

ディーナール（金貨）とディーナール、ディルハム（銀貨）とディルハムの取引は同量でやらねばならない。

それに付け加えたり増加を求める者はリバーの罪を犯したことになる。

そこで私は彼に「イブン・アッバースはそれとは違ったことを言いました」といった。

するとと彼はこういった。

私はイブン・アッバースに会って「あなたが言っている言葉はアッラーの使徒から聞いたことですか、それとも偉大にして崇高におわすアッラーの書（クルアーン）の中で見付けたものですか？」と聞いたところ彼は次のように答えた。

アッラーの使徒から聞いたのでもアッラーの書から引用したのでもありません。

ただウサーマ・ビン・ザイドが私に預言者は「リバーは掛け売りから起きる」と語ったと話してくれたからです。

ウバイドッラー・ビン・アブー・ヤズィードはイブン・アッバースが語った言葉を聞いたとして伝えている

ウサーマ・ビン・ザイドは私に預言者が「リバーというものは売り掛けから起きるものだ」と語ったとして伝えてくれた。

イブン・アッバースはウサーマ・ビン・ザイドがアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

手から手に直接手渡しされる取引にはリバーはない。

アターウ・ビン・アブー・ラバーフは次のように伝えている

アブー・サイード・フドリーはイブン・アッバースに会った時「あなたが両替について語っていることはアッラーの使徒から（直接）聞いたのですか、それとも偉大にして崇高におわすアッラーの書（クルアーン）から引用したものですか？」と尋ねました。

するとイブン・アッバースはこう言いました。

いいえ、私は決してそうは言っていません。

けだしアッラーの使徒について言えばあなたの方がもっと良く知っておいでだし、アッラーの書については私はあなた以上には知りません。

ただウサーマ・ビン・ザイドがアッラーの使徒は「リバーは（往々にして）掛け売りから起きるものだから心せよ」と語ったとして私に話してくれましたがそれを伝えたまでです。

預言者がリバーを貪った者とリバーを支払った者を呪ったこと

アブドッラー（ビン・マスウード）は次のように伝えている

アッラーの使徒はリバーを貪る者とそれを支払う者とに災いあれと言って厳しく非難した。
そこで私（アブドッラー）はそれ（リバー契約）を書き留めた者と二人の証人はどうなるのかと尋ねた。
すると彼（伝承者）はこういった。
我等はただ聞いたままを伝えているだけです。

ジャービルは次のように伝えている

アッラーの使徒はリバーを貪る者とそれを支払う者とそれを書き留めた者と二人の証人に災いあれと言って厳しく非難した。
また使徒は「彼等は皆同類である」ともいった。

ハラール（合法的な行為）の遵守と疑わしきものや行為は避けるべきこと

ヌウマーン・ビン・バシールはアッラーの使徒が次のように語ったハディースを聞いたとして伝えている
（ヌウマーンはその時「確かにこの耳でと言わんばかりに」二本の指で両耳を指し示していたが）

ハラール事項は明白である。
またハラーム（禁じられているものや行為）事項もこれまた明白である。
そしてそれら二つの間には多くの人々がどちらともはっきりと区別できない疑わしい部分がある。
故にその疑わしい部分を恐れ用心して避ける者は彼の宗教と名誉とを守ったことになる。
一方その疑わしい部分にのめり込んだ者はハラームを犯したことになる。

それはまさに（ちょっと目を離すと）すぐに踏み込んでしまうほどヒマー（放牧禁止区域（注1））のすぐ近くで放牧している羊飼のようなものだ。

まこと王たる者は皆ヒマー（放牧禁止区域）を持っておりアッラーのヒマーそれこそ数々のハラーム事項だと心すべきでしょう。
また人体の中に一塊の肉がありそれが正常なうちは体全体も正常でそれが悪くなると体全体も悪くなってしまう。
それこそが（人のモラルを支配する）心臓であり（人は心のヒマーに）用心すべきである（注 2）。

（注 1）乾燥地域の住民の長年にわたる経験から生れた生きるための知恵の結晶である。ヒマーの存在が突然の大旱魃による人間と家畜のホロコーストを回避する保障となっている

（注 2）アラブ人は思考や精神活動の根源は心臓にあると考えていた

ザカリヤーウは前記のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

ヌウマーン・ビン・バシールは前記のハディースを預言者が語ったとして伝えているがザカリヤーウの伝えたハディースの方がより長く一層まとまっている

アーミル・ビン・シャアビーはヌウマーン・ビン・バシール・ビン・サアドがフムス（シリアの町ホムス）で人々を前にして次のように語った説教を聞いたとして伝えている

私はアッラーの使徒が次のように語ったハディースを聞きました。
ハラールは明白である、ハラームもまた明白である……
以下ザカリヤーウが伝えた前記のハディースを「危うくヒマーに踏み込んでしまう羊飼のようなものである」のところまで伝えた。

ラクダの売買とそれに乗る特別条項

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

彼はかつて彼のラクダに乗って移動していたがひどく疲れ果ててしまっていたのでそれを手放そうと思った。
それから預言者が彼に出会い彼のために祈りを捧げてくれ、彼のラクダに鞭をいれて走らせてくれたがそれは今までに一度もみたこともない走りっぷりで駆け出した。
そこで預言者は「私にそれを１ウーキヤで売ってくれ」といった。
だが私（ジャービル）は「いいえ」と答えました。
それから再び「私に売ってくれ」と預言者がいったので私は１ウーキヤで売りました。
だが私の家までそれに乗って行った後でという条件をつけました。
そこて私は家に到着したときラクダを連れて彼の所に行きました。
彼はその値段を現金で支払いそれから私は帰りました。
すると彼は私の後を追って使いを送り次のように伝えました。
あなたは私がラクダを手に入れるときに値切ったと思っているでしょう。
どうかあなたのラクダとあなたのお金を取って下さい、それはあなたのものです。

ジャービル・ビン・アブドッラーは前記のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように伝えている

私はアッラーの使徒と共に遠征に出かけました。
彼が私に追いついた時に私は水袋を運ぶ専用ラクダに乗っていましたが、それはすっかり寝れ切って弱っており殆んど歩けない状態でした。
そこで彼は私に「あなたのラクダはどうしたのですか？」と尋ねた。
それで私は「病気なんです」と答えました。
するとアッラーの使徒はその後方につけてそれを駆り立てそれに祈ってやりました。
そうするとそれは他のラクダの先頭に立って進み続けるようになった。
それから彼は「あなたのラクダはどうなりましたか？」と尋ねました。
それで私は「すばらしいです。あなたの恵みが与えられたようです」と答えた。
すると彼は「それではそれを私に売ってくれませんか？」といった。
それで私は（私達の手元にはこの他には水を運ぶラクダがいないことを知らせて断ることが）恥ずかしかったので「はい」と答えてマディーナに着くまでは私がそのまま乗って行くという条件でそれを売りました。
さて私は「アッラーの使徒よ、私は結婚したての花婿です」と言って（キャラバンの先頭に立つ）許しを求めました。
そこで彼は私に許可を与えたので私は人々のはるか先頭に立ってマディーナに早々と到

着しました。
そこでは私の母方の叔父が出迎えてくれたが彼は私にラクダのことを尋ねました。
そこで私が自分が行ったそれについての次第を知らせると彼はその事で私を叱りました。
さてジャービルはこれにつづいて次のように語った。
アッラーの使徒は先に私が（先頭を行く）許可を求めた際に私が未婚の女性と結婚したのかそれとも再婚の女性と結婚したのかどうかについて尋ねていました。
それで私が再婚の女性と結婚したと言うと彼は次のようにいった。
もし未婚の女性と結婚していれば、お互いにふざけあえてもっと楽しかったのではありませんか？
そこで私は「アッラーの使徒よ、私の父は亡くなって（または戦死して）しまい私には幼い妹達が残されました。
それで私は彼女達と同じような若い女性と結婚することがいやでした。
なぜなら彼女達に礼儀を教えたり面倒を見ることができないからです。
それで私は彼女達の面倒を見てくれて礼儀作法を教えてくれる再婚の女性と結婚しました」と言いました。
さていずれにせよ、アッラーの使徒がマディーナに到着したとき私はラクダを連れて午前中に彼の所へ行きました。
すると彼はその代金をくれたがさらにそのラクダまでも私に返してくれました。

ジャービルは次のように伝えている
私達はアッラーの使徒と共にマッカからマディーナに向かいました。
そのとき私のラクダが病気に罹りました。
そして以下は前記の話しを次のように語りました。
アッラーの使徒は「あなたのこのラクダを私に売ってください」といった。
そこで私は「いいえ、それはあなたのものです」と言いました。
だが彼は「いや売って下さい」と繰り返していった。
私も「いいえ、それはあなたのものです。アッラーの使徒よ」と繰り返した。
だが彼はまた「いや、売って下さい」と繰り返すだけでした。
そこで私はこう言いました。
私はある男に１ウーキヤの金を借りています。
それではその金でそのラクダをあなたに差しあげましょう。
すると彼は「確かに（その条件で）もらい受けました。
しかしあなたはマディーナに着くまでそれに乗って行きなさい」といった。
こうしてマディーナに到着するとアッラーの使徒はビラールに「彼に１ウーキヤの金と少し余計に上げなさい」と言いました。
そこでビラールは私に１ウーキヤの金と更に１キーラートをそれに加えて渡してくれました。

私はそのとき「このアッラーの使徒の増加分がいつまでも私から離れないでともにありますように」と言いました。
実際それはシリアの住人達によってハッラの暴動（注）の際に取り上げられてしまうまでは私のもとにあり私は常に袋に入れて持ち歩いていました。

（注）ヒジュラ暦 63 年にマディーナのハッラ地区で起きたシリアの住人による襲撃虐殺事件

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
私達は預言者と一緒に旅をしていたとき、水を運ぶ私のラクダが一行から遅れてしまいました。
以下は前記と同様であるがしかしここでは次のように伝えている。
するとアッラーの使徒はそれを突っいてから私に「アッラーのみ名において乗りなさい」といった。
またこうも付け加えている。
そして彼（預言者）はずっと（私のために祈りを）増やして行きそのたび毎に「アッラーがあなたをお赦しになりますように」と言い続けた。

ジャービルは次のように伝えている
預言者が私のところに来たとき私のラクダは疲れてへばりこんでいました。
そこで彼が棒で一突きすると跳びはねるようにして走り出しました。
それからというもの私は彼の話を聴きとるためにその手綱を締めて先に進み過ぎないように努めましたがそれも出来ない位でした。
それから預言者が私に追いつきそれ（ラクダ）を彼に売るようにいったので私はそれを 5 ウーキヤで売りました。
そのとき私は「ただしマディーナまではそれに乗って行く条件で」と言うと預言者は「マディーナまではあなたの権利です」といった。
私はマディーナに到着するとラクダを連れて彼の所に行きました。
すると彼は 1 ウーキヤ余分に代金をくれたばかりでなくそれ（売ったラクダ）を私に贈与してくれました。

アブー・ムタワッキル・ナージーはジャービル・ビン・アブドッラーが次のように語ったとして伝えている
私（ジャービル）はアッラーの使徒と一緒に何回か旅（伝承者は多分「遠征」かとしている）をしましたが……以下は前記のハディースを伝えている。
しかしここではそれに加えて預言者が次のように語ったとして伝えている。

「ジャービルよ、私（預言者）がいった代金を全部受け取ったかね？」
そこで私（ジャービル）は「はい」と答えました。
すると彼はこういった。
その代金とラクダはあなたのもの！

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
アッラーの使徒は（旅の途中で）私から 2 ウーキヤと 1 ディルハムか 2 ディルハムで一頭のラクダを買いました。
さて彼はスィラールという所（注 1）に着いたとき一頭の雌牛を屠殺するように命じた。
それで雌牛が実際に屠殺されました。
そして彼らはそれを食べました。
さて彼はマディーナに着くと私にモスクに来るように命じました。
私はそこで 2 ラカート（礼拝単位）の礼拝（注 2）を捧げると彼はラクダの代金を量ってくれましたがそれは私にとって過ぎたものでした。

（注 1）マディーナ近郊の村

（注 2）これは旅から帰った後のモスク訪問の礼拝である

ジャービルは前記の話を預言者の語ったこととして伝えている
しかしここでは「それで彼（預言者）はそれ（ラクダ）を私の言い値で買った」と伝えており「2 ウーキヤと 1 ディルハムか 2 ディルハムで」とは言っていない。
また「彼は雌牛を屠殺するように命じそれでそれは殺された。
それからその肉を分配した」と伝えている。

ジャービルは預言者が彼に次のように語ったとして伝えている
私はあなたのラクダを 4 ディーナールで手に入れましたがマディーナまであなたがそれに乗って行くことはあなたの権利です。

物を借りた人は借りた物よりも良い物を返すこと、また立派な人とはより良い返済をする人

アブー・ラーフィウは次のように伝えている

アッラーの使徒はある男から（六歳以下の）若いラクダを借りました。

その後、彼のもとにサダカ（任意の喜捨）のラクダの群が送られたので彼はアブー・ラーフィウに向って借りたラクダを持ち主に返すように命じました。

アブー・ラーフィウは（それを連れに行ったが）戻って来て預言者にこういった。

私はその群の中で六歳以上の良いラクダだけしか見つけられませんでした。

すると彼（預言者）は「それを返してあげなさい。

立派な人とは借りをより良くして返す人である」といった。

アッラーの使徒の解放奴隷である**アブー・ラーフィウ**が伝えている

アッラーの使徒は一頭の若いラクダを借りた……以下は前記のハディースと同様であるが、ただしここでは次のように伝えている。

立派なアッラーの下僕とは借りをより良くして返す人である。

アブー・フライラは次のように伝えている

かつてアッラーの使徒はある男に借りがあった。

そこでその男は強引にその借りの返済を彼（預言者）に求めた。

それでこのことが預言者の教友達をひどく困惑させた。

しかし預言者はいった。

（貸しの返済を求める）権利の所有者はそれを言う権利を持っています。

彼のために相応の年のラクダを買ってそれをあげなさい。

すると彼らは「彼のラクダより良いラクダしか見つけられません」といった。

そこで預言者は「それを買って彼にあげなさい、あなた方の内で一番立派な人は借りた物よりも良い物をその返済にあてる人である」といった。

アブー・フライラは次のように伝えている

アッラーの使徒はラクダをローンで手に入れた。

そしてそれよりも成熟したラクダで返済した。

そうして彼はこういった。

あなた方のうちで立派な人とはより良い返済を行う人である。

アブー・フライラは次のように伝えている

アッラーの使徒のもとにある男が貸したラクダの返済を求めてやって来た。
そこで彼は「彼から借りたラクダよりも良いラクダを返しなさい」といった。
そしてさらにこういった。
あなた方の内で立派な人とはより良い返済をする人である。

同種の動物（奴隷）を交換する場合でも増減が認められること

ジャービルは次のように伝えている

一人の奴隷が預言者の所にやって来た。

彼は預言者に忠誠を誓うために移住（ヒジュラ）して来たのであった。

預言者は彼が奴隷であることを知らなかったが彼の主人が返還を求めてやって来たとき「私に彼（奴隷）を売って下さい」といった。

そして二人の黒人奴隷で彼を買い取りました。

それ以後、彼は奴隷かどうかを尋ねてからでないと彼に対して忠誠を誓わせませんでした。

担保それは平常時と同時に旅行時においても認められること

アーイシャは次のように伝えている

アッラーの使徒はユダヤ人から幾らかの穀物を彼の鎖かたびらを担保にしてつけで買った。

アーイシャは伝えている

アッラーの使徒はユダヤ人から幾らかの穀物を（つけで）買いました。
そして彼の鉄製の鎖かたびらを担保として与えました。

アーイシャは伝えている

アッラーの使徒はユダヤ人から幾らかの穀物を期限付きのつけで買いました。
そして彼の鉄製の鎖かたびらを担保として与えました。

アーイシャは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えているがここでは「鉄製の」と言う言葉を用いていない。

サラムの取引（注）

（注）代金を先払いをして現物を後で接す先物取引

イブン・アッバースは次のように伝えている

　　預言者は（マッカから）マディーナに到着（ヒジュラ）した時、人々はその年の乾燥ナツメヤシの実やその次の年の実（の収穫で支払う約束）で借金をしていました。

　　そこで預言者はこういった。

　　乾燥ナツメヤシの実の見込み収穫で借金する者はその枡高を明かにするかまたはその重さを明示した上でさらに期日を明かにしてから借金をしなさい。

イブン・アッバースは伝えている

　　アッラーの使徒がマディーナに到着（聖遷）したとき人々は先物取引で金を貸していた。

　　そこでアッラーの使徒は彼らにこういった。

　　金を貸す者は（将来手にする作物などの）枡高を明かにするかまたは重さを明らかにするかしない限りはそれを行ってはならない。

イブン・アブー・ナジーフは前記のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。
しかしここでは「期日を明かにする」とは伝えていない。

イブン・アブー・ナジーフは前記のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。
ただしここでは「期日を明かにする」という一文を伝えている。

食糧買占めの禁

マアマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

「(穀物などの先物を)買い占めた者は罪を犯した者だ」

ところで伝承者の一人サイード・ビン・ムサイヤブは誰かから「あなたこそ買い占めをしている」と言われた。

そこでサイードは「このハディースを伝えたマアマルも買い占めをやっていました」といった。

マアマル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

買い占をすれば誰でも罪を犯さざるを得ない。

マアマル・ビン・アブー・マアマルはアッラーの使徒が語ったとしてスライマーン・ビン・ビラールがヤヒヤーから聞いたとする前記のハディースを伝えている。

取引における(不要な)誓約(注)の禁止

(注)たとえば「アッラーに誓って、この品物は世界に二つとない品だ」など

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語った話しを聞いたとして伝えている

誓約は商品をより売りやすくするが(宗教上の)ご利益を逃がしてしまう。

アブー・カターダはアッラーの使徒が次のように語った話しを聞いたとして伝えている

取引でむやみに誓約を立てる者は気をつけなさい。

なぜなら彼はそのことで商品を売り易くしたために(宗教上の)ご利益を逃しているからだ。

シュフアの権利（処分優先権）について

ジャービルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

住居やナツメヤシの木（果樹園）を共有している者は共有者の許可が無い限りそれを処分することはできない。

もし彼が同意すれば処分できるが同意がなければ諦めるべきである。

ジャービルは次のように伝えている

アッラーの使徒は果樹園や住居の共有などそれぞれの権利が分け難い場合には個々の共有者のそれぞれにシュフアの権利を認める判定をした。

そしてその所有者は彼の共有者の許可なしには勝手に売買はできない。

彼は共有者の欲するままに売ることにもなるしまた諦めることにもなる。

そしてもしも山方が他方の許可なしに売った場合には他方の共有者がそれを手に入れる一番の権利をもっている。

ジャービル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

シュフアの権利は土地や住居や果樹園などの共有者のそれぞれに与えられている。

ゆえに共有者に計ることなしに売ることは認められない。

（計ったとしても）その結果（共有者の）賛同を得るかもしれないしあるいは諦めざるを得ないかも知れない。

それで同意がなかった場合でも共有者は彼が同意を与えるまではそれを手に入れる一番の権利を持っている。

隣人の塀に材木を立てかけること

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方は隣人があなた方の家の塀に（梁などの）材木を立てかけることを禁じてはならない。

ところでアブー・フライラはつづけてこういった。

私（アブー・フライラ）の見るところ、あなた方はこのことについて不満のようだが、アッラーに誓って私は確かにそのことをあなた方の肩の間に投げかけましたよ（確かに伝えたの意）。

ズフリーは前記のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

隣人の塀に材木を立てかけること

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方は隣人があなた方の家の塀に（梁などの）材木を立てかけることを禁じてはならない。

ところでアブー・フライラはつづけてこういった。

私（アブー・フライラ）の見るところ、あなた方はこのことについて不満のようだが、アッラーに誓って私は確かにそのことをあなた方の肩の間に投げかけましたよ（確かに伝えたの意）。

ズフリーは前記のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

道幅について揉めた場合その広さについて

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている

道幅について揉めたときにはそれは 7 キュービット（注）に作られるべきである。

（注）腕尺で 1 キュービットは 18-20 インチ

相続の書

タイトルなし

ウサーマ・ビン・ザイドは預言者が次のように語ったとして伝えている

ムスリムはカーフィル（不信者）の財産を相続しないし、カーフィルはムスリムの財産を相続しない。

相続はその権利のある者に与えよ

イブン・アッバースはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

相続はその権利のある者に与えよ。

そして残った分については（もともと）権利のある者に一番近い成人男子のものになる。

イブン・アッバースはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

相続はその権利のある者に与えよ。

そしてその残った分については相続人に一番近い成人男子のものになる。

イブン・アッバースはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

財産はその相続する権利のある者たちの間でアッラーの啓典によって分配しなさい。

そしてその残った分についてはその権利のある者に一番近い成人男子のものになる。

イブン・ターウースは前記と同様のハディースを伝えている。

相続人のない遺産（カラーラ）について

ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように伝えている

私が病気で床に伏していたときアッラーの使徒とアブー・バクルが見舞にやってきました。

ちょうどそのとき私は意識を失ってしまいました。

そこでアッラーの使徒はウドゥー（清浄行為）をしてから浄めに使った残りの水を私に振りかけて下さいました。

それで私は意識を取り戻し、こう言いました。

アッラーの使徒よ、私の財産をどう処分すればよいのでしょうか？

だが彼は遺産相続に関する次の啓示が下るまでは一言も返答しませんでした。

「彼らは汝（預言者）に合法的な判定について問うであろう。

言ってやるがよい、アッラーはあなた方にカラーラの相続（父母も子供もない場合）はこう判定される……」（クルアーン第 4 章 176 節）。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

預言者とアブー・バクルがサリマ族のもとにいる私を訪ねてくれました。

そのとき私は意識が無い状態でした。

そこで預言者は水を持ってこさせてそれでウドゥーをしてから残りの水を私に振りかけました。

すると私は意識を取り戻してこういった。

アッラーの使徒よ、私の財産をどう処分すればいいのですか？

すると次の啓示が下されました。

「アッラーはあなた方の子供の（遺産相続の配分）についてこう命じられている。

男児には女児の二人舟と同額……」（第 4 章 2 節）。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

私が病気でいたときアッラーの使徒がアブー・バクルを連れて訪ねてくださった。

ちょうどそのとき私は意識を無くしておりました。

そこでアッラーの使徒はウドゥーをしてその浄めに使った残り水を私に振りかけて下さった。

すると私は意識をとり戻しそこにアッラーの使徒がいることを知りました。

そこで私は尋ねました。

アッラーの使徒は、私の財産をどう処分（分配）すればいいのですか？

しかし彼は相続についての啓示（第 4 章 176 節）が下されるまで一言も返答しませんでした。

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アッラーの使徒が私を訪ねられたとき、私は病気で意識不明の状態でした。

そこで彼はウドゥーをしてからその浄めに使った残り水を私に振りかけました。

すると私は意識を回復して言いました。

アッラーの使徒よ、私のようなカラーラ（子供や親のない）の相続についてはどうなりますか？

すると相続に関する啓示（第 4 章 176 節）が下された。

ところで伝承者の一人はこう伝えている。

私はムハンマド・ビン・ムカンディルにクルアーン第 4 章 176 節即ち**「彼らは汝に合法的な判定について問うてくるであろう。**

言ってやるがよい、アッラーはカラーラの相続についてかく判定される…」を誦んでこれですか？

と尋ねると彼は「たしかにその節が啓示された」といった。

シュウバは前記のハディースを伝えているがわずかに言葉の違いが見られる。

マアダーン・アブー・タルハは次のように伝えている

金曜日の合同礼拝の説教の中でウマル・ビン・ハッターブはアッラーの預言者とアブー・バクルの名前を挙げて次のようにいった。

私はカラーラに関する問題以上に難しい問題を私の後に残すことはないでしょう。

私はカラーラの問題ほどアッラーの使徒にしつこく尋ねたことは他にありません。

またこのことで彼が私に対してこれほど不快感を露わにされたことは他にありませんでした。

彼は興奮して殆んど私の胸に指を突き刺さんばかりに強く私を押し返しました。

そして彼はこういった。

ウマルよ（カラーラの問題のことは）クルアーンの婦人章（第 4 章）の最後の節である夏の節（176 節）で十分ではないのかね。

それでウマルは次のようにいった。

私は生きている限りその問題について、クルアーンを読んでいる人も読んでいない人も判断ができる判決を下すつもりです。

カターダは前記のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

クルアーンで最後に下った啓示はカラーラに関する節だったこと

バラーウは次のように伝えている

クルアーンで最後に下った啓示は次の一節です。

「彼らは汝に合法的な判定を問うてくるであろう。

言ってやるがよい、アッラーはカラーラ（父母も子供も無い場合の相続）についてはあなたたちにこう判定される……」第 4 章 176 節）。

アブー・イスハークはバラーウ・ビン・アーズィブが語ったとして次のように伝えている

最後に啓示された（クルアーンの）節はカラーラに関する節（第 4 章 176 節）である。

また最後に下った章はバラーア（改悛）の章（第 9 章（注））である。

（注）タウバ（悔悛）の章ともいう

バラーウは伝えている

最後に完全な形で下った章はタウバ（悔悛）の章（第 9 章）である。

また最後に下った節はカラーラに関する節である。

バラーウが前記と同様のハディースを伝えているがここでは「完全な状態で下った最後の章は」として伝えている。

バラーウは最後に下った節は**「彼らは合法な判定について汝に問うであろう……」**（第 4 章 176 節）であると伝えた。

（借金でなく）財産を残して死んだ者についてはその財産は相続人のものである

アブー・フライラは次のように伝えている

かつてアッラーの使徒のもとに借金を残して死んだ男の遺体が運ばれて来たときに彼（死んだ男）が借金の返済に十分な財産を残したかどうか尋ねました。
そしてもし彼が返済できるだけのものを残していると言われた場合には死者のために自ら葬儀の礼拝を捧げました。
しかし残していない場合には「あなた方の友人に葬儀の礼拝を捧げなさい」と言うだけでした（自らは捧げなかった）。
それからアッラーが預言者に数々の勝利を授けたときになると彼はこういった。
私は信者の中の第一人者に他ならない。
ゆえに借金を残して死んだ者についてはその返済は私の義務である。
そして財産を残して死んだ者についてはその遺産は相続人のものである。

ズフリーは前記のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている。

ムハンマドの命がそのみ手の中にある者（アッラー）にかけて、私は地上の信者の第一人者に他ならない。
ゆえにあなた方の内で借金を残して死んだ場合は私がその返済責任者である。
また貧しい子供を残して死んだ場合は私がその子供達の保護者である。
そしてあなた方の内で財産を残した者についてはその財産は誰れであれその者の法定相続人のものである。

ハンマーム・ビン・ムナッビフは伝えている

これはアブー・フライラがアッラーの使徒から私達に伝えたたくさんのハディースの内の一つです。
さてアッラーの使徒はこう言いました。
私は自ら崇高にして荘厳におわすアッラーの聖典において信者の第一人者である（注）。
ゆえにあなた方の内で誰でも借金を残して死んだ場合あるいは貧しい子供達を後に残して死亡した場合には私に助けをお求めなさい。
私がその返済者になり保護者になります。
そしてあなた方の内で財産を残して死亡した場合は誰れであれその者の法定相続人がその財産を相続する。

（注）クルアーン第 33 章 6 節と第 9 章 128 節がその根拠となっている

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている

財産を残して死亡した場合はそれは相続人のものである。

また困窮した家族を残したまま死亡した場合その扶養は私（達）の義務である。

シュウバが前記ハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

しかしグンダルの伝えるハディースでは「（困窮した）家族を残して死亡した場合には私がその保護を引き受けよう」とある。

贈答贈与の書

サダカ（任意の寄付）をした者がそれを相手から買い戻すことは好ましくないこと

ウマル・ビン・ハッターブは次のように伝えている

私はアッラーの道のために（戦っている）ある人に高価な駿馬をプレゼントした。
しかしその者はすぐにその馬を弱らせてしまった。
私は彼がその馬を安く売ってしまうのではないかと思ったのでアッラーの使徒にこの事について尋ねたところ彼は次のようにいった。
あなたはそれを買い戻してはなりません。
またあなたのサダカを取り戻してはなりません。
なぜならば（一旦出した）サダカを取り戻す者は吐き出した物を再び口にする犬のようなものだからです。

マーリク・ビン・アナスは前記のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。
しかしここでは「たとえ 1 ディルハムでそれを買い戻せるにせよ」と付け加えている。

ザイド・ビン・アスラムは彼の父が次のように語ったとして伝えている

ウマルがアッラーの道のために戦っている男に一頭の馬をプレゼントした。
しかし彼はすぐにその者がその馬を弱らせてしまったことを知った。
実際その男は貧しかったのでウマルはその馬を買い戻そうとした。
そこへアッラーの使徒がやって来たのでウマルはそのことを話した。
すると彼は次のようにいった。
たとえそれが 1 ディルハムだけであなたに与えられるとしてもそれを買ってはなりません。
自分の出したサダカを取り戻す人はまるで自分が吐き出したものをもう一度飲みこむ犬のようなものです。

ザイド・ビン・アスラムは前記のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えているがマーリクとラウフの伝える（前の）ハディースの方がもっと長くかつより完結している。

イブン・ウマルは次のように伝えている

ウマル・ビン・ハッターブはアッラーの道のために戦っているある男に一頭の馬をプレゼントした。

それから間もなくしてその馬が売りに出されていることがわかった。
そこでウマルはそれを買い戻したいと考えた。
そしてアッラーの使徒にこのことについて尋ねた。
すると彼は次のようにいった。
それを買い戻してはいけない、ましてあなたの出したサダカを取り戻してはならない。

イブン・ウマルは前記のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

イブン・ウマルは次のように伝えている
父（ウマル）はアッラーの道のために（戦っている）ある者に一頭の雌馬をプレゼントした。
それからほどなくして彼はその雌馬が売りに出されているところを見た。
それで彼はそれを買い戻したいと思った。
そこで預言者に尋ねたところ、預言者は次のようにいった。
ウマルよ、あなたの出したサダカを取り戻してはいけません。

一旦贈り物（ヒバ）や寄付（サダカ）の形で相手に与えた後でそれを取り戻すことは禁じられている。ただし子供やそれに準ずる者に与えられた場合はその限りではない

イブン・アッバースは預言者が次のように語ったとして伝えている

　　サダカとして差し出した物を取り戻そうとする者をたとえてみるなら嘔吐した犬が吐き出したものを再び口に戻しそれからそれを食べてしまうようなものだ。

ムハンマド・ビン・アリー・ビン・フサインは前記のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

アッラーの使徒の娘のファーティマの息子**ムハンマド**は前記のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

イブン・アッバースはアッラーの使徒が次のように話したところを聞いたとして伝えている

　　サダカとして差し出した物を取り戻そうとする者をたとえてみるなら一旦嘔吐した物を再び口に戻してそれを食べてしまう犬のようなものである。

イブン・アッバースは預言者が次のように語ったとして伝えている

　　贈り物を再び取り戻そうとする者は嘔吐物を再び口に戻そうとする者にあたる。

カターダは前記と同様のハディースを同様の伝承老経路を経て伝えている。

イブン・アッバースはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

　　贈り物を取り戻そうとする者は嘔吐物を再び口に戻そうとする犬のようなものである。

贈与（ヒバ）を一部の子供だけに多くやることは好ましくないこと

ヌウマーン・ビン・バシールは次のように伝えている

アッラーの使徒の所に彼（ヌウマーン）の父が彼を連れてやって来てこういった。

私はこの私の息子に私の奴隷の一人を贈与しました。

するとアッラーの使徒は「あなたの全ての子供達にそれと同じことをしたのですか？」といった。

それで父が「いいえ」と答えるとアッラーの使徒は「それならばそれを撤回しなさい」といった。

ヌウマーン・ビン・バシールは次のように伝えている

父は私と一緒にアッラーの使徒の所にやって来て「私はこの私の息子に一人の奴隷を贈与しました」と言いました。

すると預言者は「全ての子供達にも贈与したのですか？」と問うた。

そこで父は「いいえ」と答えた。

そこで預言者は「それを撤回しなさい」といった。

ズフリーは前記のハディースを別の伝承者経路を経て伝えているがここでは表現上の言葉が少し違っているだけである。

ヌウマーン・ビン・バシールは伝えている

父は私に一人の奴隷をくれました。そして預言者が「この奴隷はどうしたのですか？（どうして手に入れたかの意）」と私に尋ねたので私は「私の父が私に与えたのです」と答えた。

すると預言者は「兄弟全部が与えられましたか？」と再び尋ねた。

そこで私が「いいえ」と答えると預言者は「それではそれを返しなさい」といった。

ヌウマーン・ビン・バシールは伝えている

私の父は彼の財産の一部を私にくれました。

そのとき私の母アムラ・ビント・ラワーハは「アッラーの使徒にその証人になってもらわないと私は得心しません」といった。

そこで私の父は私へのサダカの証人になってもらうために預言者の所に出かけて行きました。

すると預言者は父に「あなたはあなたの全部の子供にも同様に与えましたか？」と尋ねました。

そこで父が「いいえ」と答えると預言者は「アッラーを畏れなさい。そしてあなたの子供達を

公平に扱いなさい」と言いました。
そこで私の父は帰ってきてそのサダカを取り止めました。

ヌウマーン・ビン・バシールは伝えている
彼の母のビント・ラワーハが彼の父に彼女の息子のために彼の財産のうちからその一部を贈与するよう懇願した。
だが彼は一年間それを無視して何もしませんでした。
その後彼はそうすることを意志表明しました。
すると彼女は「あなたが私の息子に贈与したことについてアッラーの使徒に証人になってもらうまでは私は得心しません」といった。
そこで私の父はその当時まだ幼なかった私の手を取ってアッラーの使徒の所にやって来てこう言いました。
アッラーの使徒よ、この子の母ビント・ラワーハは私が彼女の息子に贈与したことについてあなたが証人になって下さることを望んでいます。
するとアッラーの使徒は「バシールよ、あなたにはこの子の外に子供がいたはずだが」といったので父は「はい」といった。
すると預言者は「その子ら全てにも同じようにしたんだね？」といったので父は「いいえ」と答えた。
するとアッラーの使徒はこういった。
それなら私を証人などにしないでくれ、なぜなら私は曲ったことの証人にはなれないからです。

ヌウマーン・ビン・バシールはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
あなた（バシール）は彼（ヌウマーン）の外にも子供がありますか？
そこで父が「はい」と答えると彼は「それならば彼ら全部にも同じように与えましたか？」と尋ねました。
それで父が「いいえ」と答えると預言者はこう言いました。
それなら私は曲ったことの証人にはなれません。

ヌウマーン・ビン・バシールはアッラーの使徒が彼（ヌウマーン）の父に次のように語ったと伝えている
私を曲ったことの証人にさせないでくれ。

ヌウマーン・ビン・バシールは次のように伝えた
私の父は私を連れてアッラーの使徒の所に行きこう言いました。
アッラーの使徒よ、私がこのヌウマーンに私の財産の中からこれこれの物を贈与したこと

の証人になって下さい。
すると預言者は「あなたの子供達全てにヌウマーンに贈与したようにしたんですね」と言いました。
それで父が「いいえ」と答えると預言者は「それなら私以外の人に証人になってもらいなさい」と言いさらにつづけて「彼ら全ての子供達が同じようにあなたに良くしてくれたらあなたは嬉しくはありませんか？」といった。
それで父は「全くその通りです」とうなずいた。
すると預言者は「それならそんなこと（一人にだけ与えること）をしないことです」といった。

ヌウマーン・ビン・バシールは伝えている
父は私に贈り物をくれた。そして私を連れてアッラーの使徒の所にそのことの証人になってもらうために行きました。
そこで使徒は「あなたの子供達全部にも彼に与えたようにしましたか」と尋ねた。
父が「いいえ」と答えると預言者は「あなたは彼に期待しているように同じ善行を彼らに期待しないのですか？」といった。
父が「確かに」とうなずくと「ですから私は証言しません」といった。
ところでイブン・アウン（伝承者の一人）は次のように語っている。
私がこのハディースをムハンマドに話したところ彼はこういった。
我々は預言者が「あなたの子供達を平等に扱いなさい」といったと聞いています。

ジャービルは次のように伝えている
バシールの妻が彼女の夫に「私の息子にあなたの持っている奴隷の一人を贈与して下さい。
そしてアッラーの使徒にその証人になってもらって下さい」といった。
そこで彼はアッラーの使徒の所にやって来て次のように言いました。
だれそれの娘（注）は私に私の持っている奴隷の一人を彼女の息子に贈るよう懇願しました。
そしてさらにアッラーの使徒がその証人になってもらうようにと彼女は言いました。
すると預言者は「その子には外にも兄弟はいますか？」と尋ねた。
それでバシールは「はい」と答えた。
そこで預言者はさらに「その子に与えたようにあなたは彼ら全部にも与えましたか」と尋ねた。
するとバシールは「いいえ」と答えた。
それで預言者はこういった。
それならばこれは正しくないことです。
私は正しいこと以外には証人にはなりません。

（注）女性は結婚しても氏姓を変えない。
彼女はバシールの妻のこと。
息子のヌウマーンには異母兄弟がいたはず

ウムラー（永代贈与物）について（注）

（注）語義は終身贈与に近い、たとえば「あなたが生きている限りこの家はあなたのものです」といったケースであろう。
しかしこのケースの場合でもウムラーの基本は贈与を受けた時点で相続権が発生するという考えから贈与者及びその子孫が取り戻せないという立場が基調にあり実際上は永代贈与と考えられる

ジャービル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

ウムラーを受けた者の権利は受けた本人でもその孫でも誰でもよくそれは与えられた者のものであり、それを与えた者のもとに戻されることはない。
なぜならば贈り物は贈られた時点で既に相続権が発生しているからである。

ジャービル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が次のように話しているところを聞いたとして伝えている

ウムラーを或る者とその子孫に与えると表明した者はその表明が贈り物に対する権利を放棄したことになりそれは与えられた者本人や彼の子孫のものである。
ところでヤヒヤーは彼の伝えるハディースの初めで次のように伝えている。
ウムラーを与えられた者が誰であれそれは与えられた本人もしくは彼の子孫のものである。

ジャービル・ビン・アブドッラー・アンサーリーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

私はあなたとあなたの子孫にウムラーを与えましたと言ってそれを行った者は誰れでもそれ（ウムラー）については何の権利も残されていない。
それは与えられた側の権利であり元の所有者に戻ることはない。
なぜならば彼が贈り物を与えた時点でそこには相続権が発生したからです。

ジャービルは伝えている

アッラーの使徒が認めたウムラーとはたとえば「これはあなたとあなたの子孫のものだ」と言うような場合であり、もし「それはあなたが生きている限りはあなたのものだ」といった場合にはそれは（彼の死後に）元の所有者に戻ることになる。
ところでマアマルは「かつてズフリーはこれに基づいてファトワー（法勧告）を出していました」と語った。

ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように伝えている

かつてアッラーの使徒はウムラーはそれが与えられた者やその子孫にとって恒久的な権利がありそれを与える者はそこにいかなる条件や例外を付け加えることも許されないと判定していた。

さてアブー・サラマ（伝承者の一人）はこういった。

なぜならばこの贈り物はそれを与えた時点でそれに対する相続権が生じてその相続権は条件を無効にするからです。

ジャービル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

ウムラーはそれを受けた人のものである。

ジャービル・ビン・アブドッラーは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

ジャービルは前記ハディースを直接預言者から開いたとして伝えている。

ジャービルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方の財産は自身で守りなさい。

決して（気軽にウムラーを与えて）浪費してはなりません。

なぜならばもしウムラーを与えた場合それは受け取人の生死にかかわりなく彼とその子孫の権利となるからです。

ジャービルは預言者から前記と同様のハディースを別な伝承者経路を経て伝えているが伝承者の一人アイユーブはそれに加えて次のように伝えた

アンサール（マディーナの住人）はムハージル（マッカからの無産の移住者）の人々に対してウムラーを始めた。

するとアッラーの使徒は次のようにいった。

あなた方の財産は自身で守りなさい。

ジャービルは次のように伝えている

マディーナのある婦人が彼女の所有する果樹園を彼女の息子にウムラーとして与えた。

それからその息子が亡くなり彼女がその後に亡くなった。

そのとき彼女はもう一人の息子と彼の兄弟を後に残した。

そこでウムラーの供与者（婦人）のその息子は「その果樹園は私達のもとに戻ってくる」といった。

ところがウムラーを受けた方の息子達は「いやこれは私達の父（最初の息子）がその生死にかかわらず与えられたものだ」と言って口論となった。

それで彼らはウスマーンの解放奴隷ターリクのところに訴え出た。
それでターリクはジャービルを呼んだ。
そしてジャービルはアッラーの使徒がウムラーはそれを受けた者のものであるということを証言した。
そこでターリクはこれに従って裁決した。
それからこのことをジャービルの証言も付けてアブドル・マリクに書き送った。
するとアブドル・マリクは「ジャービルは真実を語った」といった。
そこでターリクはそのように判決を確定した。
それ以来今日に至るまでその果樹園はウムラーを受けた側の子孫の手にある。

スライマーン・ビン・ヤサールは伝えている
ターリクはジャービル・ビン・アブドッラーの伝えた使徒のハディースを根拠にしてウムラーはそれを受けた者の相続人の権利であると判決した。

ジャービル・ビン・アブドッラーは預言者が次のように語ったとして伝えている
ウムラーは許容された行為である（注）。

（注）贈与を受けた者の死亡後もその者の遺産として引継がれることもきめている

ジャービルは預言者が次のように語ったとして伝えている
ウムラーはそれが与えられた者の遺産になる。

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている
ウムラーは許容された行為である。
さてカターダはこのハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。
しかしここでは「それを与えられた者の遺産になる」かまたは「許容されている行為である」として伝えている。

遺言の書

タイトルなし

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

ムスリムが何かを遺言したいと望んだ場合、二晩過ごしてからも決心が変らなければ彼の遺言は正式に書類として手元に書き留められていることが必要である。

ウバイドッラーは前記のハディースを同様な伝承者経路を経て伝えているがここでは「……と望んだ」という二語は除かれている。

イブン・ウマルは預言者から聞いたとして前記のハディースを伝えている。
ただしここでは伝承者の一人アイユーブは「……と望んだ」という一語を伝えているが他の伝承者はこの一語を伝えていない。

サーリムは彼の父がアッラーの使徒が次のように語ったところを聞いたとして伝えている

ムスリムが何か遺言する場合、三晩過ごしてもその決心が変らなければ彼の遺言は正式に書類として彼の手元で書き留められることが義務である。
ところでアブドッラー・ビン・ウマルは次のように語った。
私はアッラーの使徒がそれを語ったところを聞いてからは（決心して）一晩もたたないうちに正式な自分の遺言書を手元に作成するようにしました。

ズフリーは前記のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

遺言は遺産の三分の一まで

アーミル・ビン・サアドは彼の父（注 1）が次のように語ったとして伝えている

アッラーの使徒は離別の巡礼の年（注 2）私が（マッカで）病気にかかって殆んど死にそうだったときにお見舞に来られた。

そこで私はこういった。

アッラーの使徒よ、あなたは私の苦しみが良くおわかりでしょう（もう先が長くないということ）。

そして今私には少なからず財産があります。

しかしそれを相続する者は私のただ一人の娘しかおりません（注 3）。

それで財産の三分の二を（娘に）遺贈致しましょうか？

すると預言者は「それはいけない」といった。

そこで私（サアド）は「それなら半分に致しましょうか？」というと彼はこういった。

それもいけない。

三分の一にしなさい。

それでも多いくらいだ。

もっともあなたが相続人を金持ちにして残すことは他人に物乞をして歩かなければならない貧乏人にして残すよりもずっと良いことにはちがいないが。

もしあなたがアッラーのお顔を拝みたい（善行を重ねて来世でアッラーにお目見えしたいの意）一心で財産を使うのであればあなたはきっと報われましょう。

たとえそれがあなたの妻の口に一ちぎりのパン切れを入れることであっても。

さてそれから私は「アッラーの使徒よ、私は（ここマッカで）仲間達の後に取り残されるのでしょうか？」（注 4）と尋ねた。

すると彼はこういった。

決して取り残されることにはなりません（注 5）。

だからあなたはアッラーのお顔を拝むために善行を積んで行けば報償と名声はそれに連れて増していきます。

恐らくあなたは生き伸びるでしょう。

そしてあなたによって幾多の人々が益を得また別の人々は逆に害を被るでしょう（注 6）。

アッラーよ、どうか私（預言者）の教友たちのヒジュラ（移住）をば完遂させて下さい（注 7）。

それにしてもサアド・ビン・ハウラ（注 8）は不運でした。

ところで伝承者はここで「そしてアッラーの使徒は彼（イブン・ハウラ）がマッカで亡くなってしまったことを嘆き悲しんだ」と伝えている。

（注 1）サアド・ビン・アブー・ワッカースのことで彼はマッカからマディーナに預言者と同様に移住した教友の一人

（注 2）この巡礼はヒジュラ暦 10 年に行われ、預言者をはじめとして主な教友はこのときマッカに来ていた

（注 3）サアドはこの後長生きをして少くとも男児三人の父親となる

（注 4）マッカでこのまま死んではムハージル（移住者）としての名折れといった気持かまたは巡礼を終えて預言者と教友達がマティーナに帰ってしまい病気のため自分だけが後に取り残されるかも知れないという不安感を示しているようだ

（注 5）ここでは早死はしませんよの意か

（注 6）預言者のサアドに関する予言は的中している。
サアドは生き伸び有名なカーディシーアの大戦を指揮してイラクとペルシャの一部を征服した。
ここでは敵にとって彼は害になったはずである

（注 7）サアドが一旦捨てたマッカの地で汚名を負いなから客死をしないようにという祈りにも相当するだろう

（注 8）前述のサアドとは別人のサアドだが、彼は一旦マッカからマディーナに移住し、バドルの戦にも参戦したがヒジュラ 10 年に不運にもマッカで死去したと言われている人物

ズフリーは前記のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

アーミル・ビン・サアドは彼の父サアドが次のように語ったとして伝えている
預言者は私を見舞に訪問された。
以下は前記のハディースと同じである。
しかし彼はサアド・ビン・ハウラについての預言者の言葉は伝えなかったが次の一文を新たに加えている。
彼（預言者）は聖遷をした（一旦捨てた）土地即ちマッカで死ぬことを嫌っていた。

ムスアブ・ビン・サアドは彼の父が次のように語ったとして伝えている
私は病気になったとき、使いを預言者に遣わして私が望むように自分の財産を分与することを許してくれるようにと伝えました。
しかし彼はそれを拒否しましたので私が「半分では？」というと彼はまたそれを拒否しました。

そこで私は「三分の一では？」というと、彼は三分の一の後は黙ってしまいました（注）。
ところで伝承者は「それ以後三分の一以下については許されました」と伝えた。

（注）イスラーム法の解釈では預言者の沈黙は黙認事項として許可の範囲に入れる

シマークは前記のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えているが彼は「それ以後三分の一以下については許されました」とは伝えていない。

ムスアブ・ビン・サアドは彼の父が次のように語ったとして伝えている

預言者が私（サアド）を見舞ったとき私は「私の財産をすべて遺言にします」といったところ、彼は「それはいけない」といった。
そこで私は「半分では？」といったところ彼はまた「それはいけない」といった。
それから私が「三分の一では？」といったところ彼は「それなら良い。（本当なら）三分の一でも多いくらいだ」といった。

フマイド・ビン・アブドル・ラフマーン・ヒムヤリーはサアドの三人の息子達から彼らの父が次のように語ったとして伝えている

預言者がマッカで彼（サアド）を見舞に訪れたとき彼（サアド）は泣き出しました。
預言者がどうして泣くのかと尋ねたところ彼はこういった。
私はサアド・ビン・ハウラのように聖遷をして捨てた土地（マッカ）で死ぬことが恐ろしいのです。
すると預言者は「アッラーよ、サアドの病をお癒し下さい、アッラーよ、サアドの病をお癒し下さい」と三回繰り返していった。
そこで彼（サアド）は「アッラーの使徒よ、私には多くの財産があります。そしてそれを相続するのは私の一人の娘です。
出来るならそれを全て遺言にしたいのですが？」といった。
すると預言者は「だめです」といった。
そこで私（サアド）は「それでは三分の二では？」といった。
だが預言者はまた「だめです」といった。
私は「それでは半分では？」と尋ねたが預言者はまた「だめです」と答えた。
そこで私は「三分の一では？」といった。
すると彼はこういった。
三分の一ならよいでしょう。
それでも多いくらいですが。
あなたが自分の金から寄付するのもサダカならあなたが自分の家族を扶養するのもサダカです。

またあなたの財産の中からあなたの妻が食べてゆくのもサダカです。
故にあなたがあなたの家族に不自由をさせないこと（あるいは良い生活を送らせることともいったが）はあなたが彼らを物乞いにさせるよりはずっとよいことです。
こういって預言者は手でそれ（物乞の仕草）を示しました。

フマイド・ビン・アブドル・ラフマーン・ヒムヤリーはサアドの三人の息子が次のように語ったとして伝えている
マッカでサアドが病にかかったとき、アッラーの使徒が彼を見舞に訪れた。
以下は前記のハディースと同じである。

フマイド・ビン・アブドル・ラフマーンはサアド・ビン・マーリクの三人の息子が次のように語ったとして伝えている
マッカでサアドが病にかかったとき、預言者が彼を見舞いに訪れた。
以下は前記と同様のハディースを伝えている。

イブン・アッバースは次のように伝えている
人々が（遺言による遺産の割合を）三分の一から四分の一に減らすようならよいのだが。
なぜならばアッラーの使徒は「三分の一、本当は三分の一でも多いのだが」といったからです。
ところでワキーウはハディースの中で「多いまたは大きいとなっている」と伝えている。

サダカ（慈善の寄付）の報償は死者にも届く

アブー・フライラは次のように伝えている

ある男が預言者に「私の父は遺言のないお金を残して亡くなりました。
もし私がそれを彼のためにサダカをすれば彼の罪を償うことになりますか？」と尋ねた。
すると預言者は「なります」と答えた。

アーイシャは次のように伝えている

ある男が預言者に「私の母は突然亡くなりました。
もし彼女が話せていたならきっとサダカすると遺言したと思います。
もし私が彼女のために代ってサダカしたならば私に報償はありますか？」と尋ねた。
すると預言者は「あります」と答えた。

アーイシャは次のように伝えている

ある男が預言者を訪れて「アッラーの使徒よ、私の母は遺言もせずに突然亡くなりました。
私は彼女がもし話していたならばサダカをすると遺言したと思います。
それでもし私が彼女のために代ってサダカをしたら彼女にはその報償がありましょう
か？」と尋ねた。
すると預言者は「あります」と答えた。

ヒシャーム・ビン・ウルワは前記のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている

ただしここでは伝承者によって「私に報償はあるか？」としたりまた別の伝承者は「彼女に
報償はあるか？」とこの点でまちまちに伝えている。

人が死後に報償を受け得る事項

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

人が死んだとき彼の行為は（次の）三つの事柄を除いてそこで中断される。
それらは繰り返し行われるサダカと役に立つ知識と彼のために祈りを捧げる品行方正な
子供である。

ワクフ（宗教的寄進）について

イブン・ウマルは伝えている

ウマルはハイバルで土地を手に入れた（注）。

そこで預言者を訪問してこのことについて指示を仰いでこういった。

アッラーの使徒よ、私はハイバルで土地を取得しました。

私は私の財産の中でこれほど高価なものを持っておりません。

このことで私に何か指示がありますか？

すると預言者は「もしお望みならばその主体財産（土地）をそのままにして置いてそこから取れる収穫物をサダカにしなさい」といった。

そこでウマルはその土地が売買されないことまた相続されないこと、さらにまた贈与されないことを明かにしてそれをサダカにした。

こうしてウマルは貧乏人、近親者、奴隷の解放、アッラーの道（聖戦）、旅人や訪問客などのために（その土地の収益を）サダカにした。

ところでそれを管理する者が常識の範囲内でそこから食を得たり、また蓄財に手を貸さない範囲で友人に食を与えることは別に罪にはならない。

さて伝承者は「私はこのハディースをムハンマドに伝えました」といって次のように語った。

そして私（伝承者）が「蓄財に手を貸さない範囲で」のところまで伝えるとムハンマドは「金持にさせるための資産形成に手を貸すことなく」といった。

またイブン・アウヌは次のように伝えた。

この本（ワクフの書）を読んだ者がその言葉は「金持にさせるための資産形成に手を貸すことなく」であると私に知らせてくれた。

（注）ハイバルは武力によって征囁きれたので戦闘参加者には土地などの戦利品の分配があったためと思われる

イブン・アウンは前記と同様のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている

ただしここでは若干の伝承者が「友人に金を与えることはそれによって彼の蓄財に手を貸すことがない範囲内で罪にはならない」の所まで伝えているがそれ以下については何も伝えていない。

ウマルは次のように伝えている

私はハイバルに土地を手に入れました。

そしてアッラーの使徒の所にやって来てこういいました。

私は未だかつて手にしたことのないような高価で気に入った土地を手に入れました。

以下は前記のハディースと同じであるがしかしここでは「私は（このハディースを）ムハンマドに伝えました」以下の文は伝えていない。

遺言すべきものを持たない者はそれを放棄すべきである

タルハ・ビン・ムサッリフは次のように伝えた

私はアブドッラー・ビン・アブー・アウフに次のように尋ねた。

アッラーの使徒は（自分の資産に関して）遺言を残しましたか？

すると彼（アブドッラー）は「いいえ」と答えた。

そこで私は「それならなぜムスリムに遺言が義務づけられたのですか？

もしくは、それならなぜ遺言を命じられたのですか？」と尋ねた。

すると彼は「自ら崇高にして尊厳におわすアッラーの聖典に基づいて遺言をしたのです」といった。

マーリク・ビン・ミグワルは前記と同様のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。
ただしワキーウのハディースでは「それならどのようにして人々は遺言を命じられたのですか？」とあり、またヌマイルのハディースでは「どのようにしてムスリムに遺言が義務づけられたのか？」とある。

アーイシャは次のように伝えている

アッラーの使徒は 1 ディーナールも、また 1 ディルハムも、また一頭の羊も、また一頭のラクダものこさなかったし遺言もしませんでした。

アアマシュは前記と同様のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

アスワド・ビン・ヤズィードは伝えている

アーイシャのところで皆が「アリーは預言者の遺言を受けた（注）」といったとき彼女はこういった。

いつ預言者が披に遺言しましたか？

私は（預言者が亡くなるとき）胸または膝で彼の支えになっていました。

そして彼が洗面器を求めたとき、彼は私の膝に崩れ落ちましたがそのとき私は（まさか）彼が亡くなったとは感じませんでした。

ですからいつ彼（アリー）に預言者が遺言をしたのですか？

（注）遺言を受けたとすればこの時アリーは初代のカリフに任ぜられたということになるはずで、この主張はシーア派によって支持されている

サイード・ビン・ジュバイルは伝えている

イブン・アッバースは「木曜日」といって更に「何たるあの木曜日（さえなかったらなあ）」といって泣き始め、彼の涙は砂利をも濡さんばかりだった。

そこで私が「イブン・アッバースよ、木曜日がどうしたというのかね？」と尋ねたところ彼はこういった。

（その日）アッラーの使徒が重態になったのです（注 1）。

そして彼は「こちらに来なさい、私が居なくなった後もあなた方が迷わないように一筆書いてあげよう」といった。

ところがそれでそこに居合わせた教友達が我勝ちにいい争いになった。

預言者の前では争うべきではないのに彼等はこういった。

預言者の様態はどうなんだい？

彼の意識は無くなったのかい？

（あの問題について）彼に尋ねてみたら？

そこで預言者は「私には構わないで下さい。

私はこの方（アッラーに見とられてアッラーにまみえんとする今の状態）が良いのです。

私は次の三つのことをあなた方に遺言致しましょう。

（一つは）アラビア半島から多神教徒を排除すること。

（二つ目は）かつて私が外からの使節団を歓待したことに習って彼等を歓待すること。

そして三つ目についてだが、彼は沈黙した（注 2）。

あるいは（伝承者は）（注 3）「それを忘れてしまった」と伝えた（注 4）。

（注 1）預言者の病気は確かに木曜日に悪化したがその後四日間は持ちなおしてモスクに出かけるほどであった。

しかし月曜日には最後の息を引き取った

（注 2）イブン・アッバースか沈黙したの意

（注 3）伝承者のサイード・ブン・ジュバイルがの意

（注 4）第三の遺言については色々な意見が言われている。

それは預言者の死の直前にシリアに向けて派遣したウサーマ揮下の遠征軍のことについての忠告といいまたは彼の墓を崇拝対象にしないようにとの遺言だったという。

その他にも色々と想定されている

サイード・ビン・ジュバイルは次のように伝えた

イブン・アッバースは「木曜日、何たるあの木曜日」といった。

それから彼の涙が彼の両ほほを一連の真珠のように流れ始めたがそれを私は見た。

そして彼はアッラーの使徒が次のように語ったといった。

私に肩甲骨（注 1）とインクつぼ（または書板とインクつぼ）を持って来て下さい。

あなた方に以後決して迷うことのない文書を書き残しましょう。

すると彼らは「アッラーの使徒は人事不省に陥っている」（注 2）といった。

（注 1）ラクダなどの大型動物の肩甲骨を当時書板や紙の代りに書付用に使っていた

（注 2）だから預言者に遺言を書かせることは控えるべきだという言外の意味か？

イブン・アッバースは次のように伝えている

アッラーの使徒が召されようとしていたとき、家には大勢の男達がいました。

その中にはウマル・ビン・ハッターブもいました。

そして預言者が「私はあなた方にその後迷うことのないように文書を書いて残しましょう」といった。

するとウマルはこういった。

アッラーの使徒は非常に苦しんでおいでになる。

あなた方にはクルアーンがある。

アッラーの聖典で私達には十分です。

しかしその家にいた人達（預言者の親族を含めて）の意見が割れて口論になった。

ある者は「書くものを持ってこい！

アッラーの使徒はそれ以後迷うことのない文書を書いて下さるというのだから」と言えば他の者はウマルがいったことを繰り返した。

そしてアッラーの使徒の前で喧嘩と分裂が激化したときアッラーの使徒は「立ちなさい（そして出て行きなさい）！」といった。

ところでウバイドッラーは「かつてイブン・アッバースはこういったものだった」として次のように伝えた。

実に最大の損失だったことはアッラーの使徒が彼らの分裂と口論のためにその文書を書くことができなかったことだ！

誓願の書

誓いの履行命令（注）

（注）この場合の誓いはイスラームの目的にかなっている誓い

イブン・アッバースは伝えている

サアド・ビン・ウバーダがアッラーの使徒に彼の母が誓いを立てそれを履行しないうちに亡くなったためにその誓いについてどうすべきかの判断を求めてきた。

するとアッラーの使徒は「彼女に代ってそれを履行しなさい」といった。

ズフリーは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

誓いの禁止、誓いは（災難など）何も回避することはできない（注）

（注）この場合誓いがイスラームの目的にかなっていないこと。
むしろイスラーム精神に逆行する誓いである。
例えば病気を治してくれたら施しをするといった具合

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーの使徒はある日、私達に誓いを立てることを禁止し始めました。
そしてこういった。

それ（誓い）は（災難など）何も回避することはできない（注 1）。

そればかりかそれは吝嗇に由来するものだ（注 2）。

（注 1）全ては全能のアッラーのお望みのままの意

（注 2）けちんぼうの施しには全て裏があること、彼の誓いの行為が神のみ心に近づかんとするものではないことを意味している

イブン・ウマルは預言者が次のように語ったとして伝えている

誓いは（それによって）何事もそれを早めたり延期したりすることはない。
それに何よりもそれはけちに由来するものだ。

イブン・ウマルは次のように伝えている

預言者は誓いを禁止してこういった。
「それは決して良い結果をもたらさない。何よりもそれはけちに由来するものである」

マンスールは前記と同様のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

誓いを立ててはならない。
なぜならばそれはカダル（アッラーの決めた運命）に反抗することであり何も生じないからである。
そして何よりもそれはけちに由来するものである。

アブー・フライラは次のように伝えている

預言者は誓いを禁止して「それがカダル（運命）を変えることは決してないばかりか、けちに由来するものだからです」といった。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

誓いはアッラーが定めなかった出来事にアダムの息子達（人間）を近づけることはない。
むしろカダル（運命）とそれ（誓い）は一致するものである。
ゆえにそれはけちんぼうが物を出し惜しみすることに由来するものである。

アムル・ビン・アムルは前記と同様のハディースを伝えている。

アッラーに背くことになる誓いの無効と人力を越えた物事について立てる誓いは成立しない

イムラーン・ビン・フサインは次のように伝えている

かつてサキーフ族はウカイル族と同盟関係にあった。
そしてサキーフ族はアッラーの使徒の教友の内から二人の男を捕虜として捕らえた。
一方アッラーの使徒の教友達はウカイル族の一人の男を捕虜として捕えた。
そして彼ら教友達はその男と一緒にアドバーウ(注 1)を分捕った。
それからアッラーの使徒がその男の側を通ったとき、彼は縄で縛られていたが「ムハンマドよ」と呼びかけた。
そこで預言者は彼の所に近づいて「どうしましたか？」と尋ねると彼は逆に次のように尋ねてきた。
なぜ私を捕まえたのですか？
そしてなぜ巡礼の先導ラクダ(注 2)を分捕ったのですか？
すると預言者は(それは非常に重大なことであるといった様子で)「私があなたを捕まえたのはあなたの同盟者のサキーフ族の犯した罪のせいです」といった。
そして彼は背を向けて歩き出した。
するとその男がまた「ムハンマドよ、ムハンマドよ」と呼びかけてきた。
預言者は心優しい寛容なお方でしたので披の所に再び戻り「どうしましたか？」といった。
するとその男は「私はムスリムです」といった。
そこで預言者は彼にこういった。
もしそれをあなたが自由意志の状態で(捕まえられる前)いっていたならあなたは最大の成功をおさめていたでしょう。
そして預言者はまた背を向けて歩きだした。
すると再びその男は「ムハンマドよ、ムハンマドよ」と呼びかけた。
そこで預言者は彼の所に戻って来て「どうしましたか？」と尋ねた。
するとその男は「私は腹ペコで喉がカラカラです。
何か食べ物と飲み物をください」といった。
そこで預言者は「それこそはあなたの必要を満たすことでしょう」といった。
それからその男は二人の男(サキーフ族によって捕えられていた教友)と引き換えに捕虜交換された。
さてまた伝承は引き続いて次のように語った。
アンサールの一人の女性が捕虜として捕えられ、ラクダのアドバーウも捕えられた(注 3)。
そして彼女は縄につながれ人々(敵)は彼らの家の前で家畜を休ませていた。
そこで彼女は夜になって縄から抜け出してラクダの群の所にやって来た。
そして彼女がラクダの群に近づいて行くとそれらはいずれもざわざわと興奮していらだっ

た。
こうして彼女がアドバーウの所まで近づいた。
だがそれはもともと従順なラクダだったせいかいらだっていなかった。
そこで彼女はその背中に座りそれを走らせてそこを立ち去った。
敵の者達はこれを知り探したが徒労に終った。
一方彼女の方は「もし彼女を助け出してくれたならこのラクダを犠牲として捧げます」といってアッラーに誓いを立てた。
こうして彼女がマディーナに到着したとき人々はそのラクダを見て「マッラーの使徒のラクダのアドバーウだ！」といった。
すると彼女は「これはアッラーがもし自分を救い出して下さるなら犠牲として捧げると誓ったラクダです」といった。
そこで人々はアッラーの使徒の所に行きこの事を話した。
すると彼は次のようにいった。
アッラーに称讃あれ！
彼女は何と悪い報酬を得たことよ！
アッラーが彼女を救い出して下さるならこのラクダを犠牲として捧げると誓うとは何たること！
アッラーに背くことになる誓いの履行はあり得ない。
また人力を越えた物事について立てる誓いも成立しない。
ところでイブン・フジュルの伝えるところでは「アッラーに反逆する事柄について立てる誓いは無効である」となっている。

（注 1）ラクダの名前、後に預言者の雌ラクダとなるかこの時はウカイル族の或る男のものだった

（注 2）注 1 のアドバーウという名ラクダのこと

（注 3）この時アドバーウは既に預言者のものになっていた

アイユーブは前記のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている
ところでハンマードの伝承では「アドバーウはかつてウカイル族の或る男のものでした。
そしてそれは巡礼団の先頭に立って進んだラクダでした」とあり、また「それは乗り物用の鈴をつけた雌ラクダでした」と表現されている。
またサカフィーの伝承では「それは良く訓練されたラクダでした」とある。

マッカのカーバ神殿まで徒歩で行くと誓いを立てた者

アナスは次のように伝えている

預言者は二人の息子に付き添われて支えられながら歩いている老人を見て「これは一体どうしたのですか？」といった。

すると彼らは「彼（老人）は歩いて（カーバ神殿に）行くと誓ったのです」と答えた。

そこで預言者はこういった。

アッラーご自身はこの苦痛を与えている責任から免れていらっしゃる（注）。

そして預言者は彼に乗りものに乗るよう命じました。

（注）アッラーは決して信者に苦痛を求めたりしないの意

アブー・フライラは次のように伝えている

預言者は一人の老人が二人の息子に支えられながら歩いていることに気付いた。

そこで預言者は「これは一体どうしたのですか？」と尋ねたところその二人の息子は「アッラーの使徒よ、彼は誓いを立てたのです」と答えた。

すると預言者はこういった。

そこのご老人よ、乗りものに乗りなさい。

なぜならばアッラーはあなたもまたあなたの誓いも不必要な存在でいらっしゃるからです。

アムル・ビン・アブー・アムルは前記のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

ウクバ・ビン・アーミルは次のように伝えている

私の姉妹がアッラーの館（カーバ神殿）に裸足で歩いて行くと誓いを立てた。

そして私にアッラーの使徒の意見を聞いてくるようにと頼んだ。

それで私が彼を訪ねたところ彼はこういった。

歩いて行くのも良し（疲れれば）乗りものに乗るのも良い。

ウクバ・ビン・アーミル・ジュハニーが前記と同じハディースを伝えているがここでは「裸足で」という言葉はない。

ヤズィード・ビン・アブー・ハビーブは前記と同様のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。

誓いを破った時の償い

ウクバ・ビン・アーミルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

誓願（ナズル）の償いは宣誓（ヤミーン）の償いと同じである（注）。

（注）ナズルもヤミーンも日本語ではどちらも誓いに相当する。
「神よどうかこうして下さい。そうすれは私はこうします」といった類のいわゆる「願かけ」が
前者であり後者は「神かけてほんとうだ、嘘は言わない」といった類である

宣誓の書

アッラー以外のものにかけて誓う宣誓の禁止

ウマル・ビン・ハッターブはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

偉大にして荘厳におわすアッラーはあなた方がご先祖にかけて宣誓することを禁じられた。
さてウマルはこれについてこういっています。
アッラーにかけて私はアッラーの使徒がそれを禁じて以来それにかけて誓ったことはありません。
自分から口に出していったこともないしまた他人の言葉としてそれに言及したこともありません。

ズフリーは前記と同様のハディースを伝えているがウカイルのハディースでは「私はアッラーの使徒がそれを禁じて以来それを口に出していったことはありません」とありそれにつづく「自分から口に出していったこともないしまた他人の言葉としても言及したことはありません」の部分は伝えていない。

サーリムは彼の父が次のように語ったとして伝えている

預言者はウマルが彼の父にかけて宣誓したところを聞いた。

以下は前記と同様のハディースである。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

アッラーの使徒はウマル・ビン・ハッターブが騎士達の間にあって彼の父にかけて宣誓していることを知った。
そこでアッラーの使徒は彼らを呼んでこういった。
偉大にして荘厳におわすアッラーはあなた方があなた方の父親にかけて宣誓することを禁じられたことを知らないのですか？
故に誓いを立てる者はアッラーにかけて誓うかもしくは何も言わないことだ。

イブン・ウマルは前記のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

宣誓をする者は誰でもアッラー以外のものにかけて誓いを立ててはならない。

ところでかつてマッカのクライシュ族は彼らの父親達（祖先）にかけて誓いを立てていました。

さて預言者はつづいて「あなた方の父親達（祖先）にかけて誓いを立ててはならない」といった。

ラート神（注 1）やウッザー神（注 2）にかけて誓った者は「アッラー以外に神は無し」と（償いの意味で）言わなければならない

（注 1）ターイフの住人サキーフ族の偶像神名（注 2）ガトファーン族の偶像神の名前

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方の中で誓いの中でラート神にかけた者がいればその者には「アッラー以外に神は無し」と言わせなさい。

また友達に「こちらに来て一緒に賭けをしようよ」と誘った者にはサダカをさせなさい。

ズフリーは前記と同様のハディースを伝えている。
しかしここではマアマルの伝えたハディースの中で「何かサダカをさせなさい」と伝え、またアウサーイーの伝えたハディースの中では「ラート神とウッザー神に誓って」として伝え、また「こちらに来て一緒に賭けをしようよ」以下はズフリーを除いて誰れも伝えていない。

アブドル・ラフマーン・ビン・サムラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

偶像やあなた方の父親達（祖先）にかけて誓いを立ててはなりません。

誓いを立てた者がそれよりも良いものを他に見付けた場合には良い方を取り、そして誓ったものについてはそれを破った償いをすることは良いことである

アブー・ムーサー・アシュアリーは次のように伝えている

私はアシュアリー族の一団とともに預言者を訪れて彼に乗りものを私達に供与するようにと頼んだ。
すると彼はこういった。
アッラーに誓って私はあなた方に乗りものを供与できませんし、また私はあなた方に与えるべき乗りものを持っていません。
そこで私達はアッラーの望むままそこに停まった。
それからしばらくすると預言者のもとにラクダの群が（戦利品として）連れてこられた。
それで彼は私達に三頭の白こぶラクダを与えるように命じた。
そこで私達はそこを立ち去ったがそのとき私達または私達の一部の者がお互に「アッラーは私達を祝福されないだろう」といいあった。
そこで私達はアッラーの使徒のところにまた戻って来て彼に乗用ラクダを求めた。
すると彼は私達に乗りものを供与できないと誓った。
しかしその後に彼は私達にそれを与えました。
すると何人かの教友達が彼のところにやって来てそのこと（すっきりしない彼らのわだかまり、（注）を彼に告げた。
そこで彼はこういった。
この私があなた方に乗りものを与えたのではない。
アッラーがあなた方に乗りものを与えて下さったのだ。
私はもしアッラーがお望みならば一旦誓いを立てたとしてもそれよりも良いものを見付けた場合には（その誓約を破棄して）私はその誓いを破棄した償いをしてでもそのより良い方をとります。

（注）一旦乗りもの供与をしないと誓っておきながら結局は供与したということ

アブー・ムーサーは次のように伝えている

私の仲間はアッラーの使徒のもとに私を送り彼らのために乗りものを準備してもらうように頼んだ。
そのとき彼らは彼と一緒にジャイシュ・ウスラー（苦境の軍隊（注 1））に参加しようとしていた。
それで私は次のようにいった。
アッラーの預言者よ、私の仲間はあなたが彼らに乗りものを与えて下さるようにと私をあ

なたのもとに送りました。
すると彼は「アッラーに誓って私はあなた方に乗りものを供与することはできません」といった。
そしてそのとき彼は怒っており、私は彼に同意したもののそれをあまりよく感じていなかった。
そこで私はアッラーの使徒の拒絶と彼の私に対する悪感情とを恐れて悲しみに打ち沈んで仲間の所に戻った。
そして彼らにアッラーの使徒が語ったことを伝えた。
そしてそれが終るやいなやビラールが「アブドッラー・ビン・カイスよ（注 2）」と呼ぶ声を聞いた。
私がそれに応えると彼はこういった。
アッラーの使徒にすぐ応えなさい。
彼はあなたを呼んでいます。
そこで私がアッラーの使徒の所に行くと彼は次のようにいった。
「このつがいとこのつがいとこのつがいを取りなさい（預言者はこれら六頭のラクダをそのときサアドから買っていた）
そしてアッラーが（もしくはアッラーの使徒がといったかも知れないが）あなた達をこれらのラクダに乗せて下さるのだから乗りなさいと彼らにいいなさい」
そこで私（アブー・ムーサー）はそれらを連れて仲間の所に行きこういいました。
アッラーの使徒はこれらの乗りものをあなた達に与えて下さった。
しかしアッラーの使徒が最初はあなた達のための私の頼みを拒絶してその後それを聞き届けてくれたがそのことを聞いた人の所に誰れかが私と一緒に行って（確かめて）あなた達が彼が言わなかったことまで私が話したと思わないようになるまでは私はこれらのラクダをあなた達にアッラーに誓って渡しません。
すると彼らは「アッラーに誓ってあなたは私達の間で正直者で通っていることに間違いありません。
私達はあなたのお望みのように振る舞います。」といった。
さてそこでアブー・ムーサーは彼らのうちの一団を連れてアッラーの使徒の言葉即ち彼の拒絶とその後の彼の供与認可について聞いた者の所に行きました。
すると彼ら〔証人〕は人々にアブー・ムーサーが話したことと同じことを話した。

（注 1）630 年のタブークの戦いのこと。この戦いに勝って北部アラビア半島をイスラームの勢力下に置く

（注 2）アブー・ムーサーの本名

アイユーブは次のように伝えている

私達はアブー・ムーサーの所にいた。彼は私達を鶏肉の乗っている食卓に呼んでくれました。そこにタイムッラー族の一人の男が入って来た。

彼は赤ら顔で奴隷のような様子をしていた。

そこでアブー・ムーサーはその者に「さあ、こちらに来て（一緒に食べなさい）」といった。

ところがその男は余り気乗りしないようだったのでアブー・ムーサーは再び「さあ、こちらに来て、私はアッラーの使徒がそれ（鶏肉）を食べるところを見ましたよ」といった。

するとその男は次のようにいった。

私は彼が何かを食べているところを見ましたが私はそれを汚いものと思いました。

それで私はそれ（鶏肉）を食べないことを誓いました。

それでアブー・ムーサーは「さあ、こちらに来て、その事でしたら私はあなたに話しておきたい」といってこう語った。

私はアシュアリー族の一団とアッラーの使徒の所に私達に乗りものを供与してくれるよう頼みに行ったとき彼は「アッラーに誓ってあなた方に乗りものを与えることは出来ません。またあなた方を運ぶ乗りものを私は持っていません」といった。

そこで私達はアッラーが望まれるままにそこに留まりました。

それからしばらくしてアッラーの使徒の所にラクダの群が戦利品として連れて来られた。

彼は私達を呼んで五頭の白こぶラクダを私達に与えるよう命じた。

こうして私達が戻ろうとしたときお互いに私達はこういい出した。

私達はアッラーの使徒に彼の誓いを破らせたことを詫びるべきである。

そうしなければ私達は祝福されないであろう。

そこで私達は彼の所に戻り次のようにいった。

アッラーの使徒よ私達はあなたに乗りものを求めましたがこれに対してあなたは私達に乗り物を与えられないと誓いを立てその後で私達に乗りものを与えました。

アッラーの使徒よお忘れになったのですか？

すると彼はこういった。

アッラーに誓ってアッラーが望まなければ私は誓いを立てたりはしません。

そして私はそれ以外のものがより良いと考えた時には（誓いを破っても）良い方をとります。

私はそれに償いをすることによってハラール（イスラーム法上許された行為）にしました。

ですからあなた達はそのまま行きなさい。

崇高にして荘厳におわすアッラーがあなた達を運んで下さったのだから。

ザフダム・ジャルミーは次のように伝えている

ジャルム族とアシュアリー族からなるこの市街区には信頼と友情が双方の部族の間に存在していました。

私達がアブー・ムーサー・アシュアリーの所にいたとき食事が持ってこられそれには鶏肉

がありました。
以下は前記と同様のハディースを伝えている。

ザフダム・ジャルミーは伝えている
私達がアブー・ムーサーの所にいたとき、……以下は前記と同様のハディースを伝えている。

ザフダム・ジャルミーは伝えている
私がアブー・ムーサーを訪ねたとき彼は鶏肉を食べていた……以下は前記と同様のハディースを伝えている。
ただしここでは次の一文を加えている。
預言者は「私はアッラーに誓ってそれを忘れていません」といった。

アブー・ムーサー・アシュアリーは次のように伝えている
私達はアッラーの使徒の所に行き私達に彼が乗りものを供与してくれるよう求めた。
すると彼はこういった。
私にはあなた方に供与できる乗りものがない。
アッラーに誓って私はあなた方にラクダを供与しません。
その後になってアッラーの使徒は私達の所に三頭の白こぶラクダを送り届けた。
そこで私達はこういった。
私達はアッラーの使徒の所に行き私達に乗りものを供与してくれるよう求めた。
ところが彼は私達に乗りものは供与できないとアッラーに誓ったはずだが？
そこで私達は彼の所に（再び）行きその事を伝えた。
すると彼は次のようにいった。
私はもし誓いを立てたとしてもそれ以外のものでより良いものがあると知った場合にはその良い方を取って誓いを立てることにやぶさかではありません。

アブー・ムーサーは次のように伝えている
私達は歩兵でした。それでアッラーの使徒の所に来て私達を運んでくれるように求めました。
以下は前記と同様のハディースを伝えている。

アブー・フライラは次のように伝えている
預言者のもとに一人の男が夜遅くまでいて彼の家族の所に帰った時には既に子供達は寝てしまっていた。
そして彼の妻が食事を持って来ると彼は（食事もしないで寝てしまった）子供達のために

食べないと誓った。
しかしその後彼にはそのことが（ばかばかしいことに）思えてきた。
（そこで誓いを破って）食事をした。
その後アッラーの使徒の所にやって来てその事を話した。
すると彼はこういった。
誓いを立てた後それ以外のものの方がより良いと考えるならそちらの良い方を取りなさい。
そして誓いを破った償いをしなさい。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
誓いを立てた者がそれ以外のものをより良いと考えるなら誓いを破った償いをしてからそれを行いなさい。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
誓いを立てた者がそれ以外の方がより良いと考えるならその良い方を取り誓いを破った償いをしなさい。

スハイルは前記と同様のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。
しかしここでは「それならば誓いを破った償いをしてより良い方を行いなさい」と伝えている。

タミーム・ビン・タラファは伝えている
一人の乞食がアディーユ・ビン・ハーティムの所に来て奴隷一人分のお金かまたはその一部を求めた。
すると彼（アディーユ）はこういった。
私には鎖かたびらと兜しかあげるものはありません。
今家の者にそれを渡すよう一筆書いてあげましょう。
しかしその男はそれを喜ばなかった。
そこでアディーユは怒って「アッラーに誓って、もうお前には何もやらない」といった。
ところがしばらくしてその男は（受け取ることを）承諾した。
そこで彼（アディーユ）は次のようにいった。
もし私がアッラーの使徒が次のように語っているところを聞かなかったなら私は私の誓いを破らないでしょう。
誓いを立てた者にその後それよりも信仰深くなることがあればそちらの方を行いなさい。

アディーユ・ビン・ハーティムはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
誓いを立てた者がその後それ以外のものの方がより良いと考えたならばその良い方を行い、誓いを破りなさい（その後その償いをしなさい）。

アディーユはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方のうち誰れか誓いを立てた後、それよりも良いものを知った時には誓いを破って、その償いをしてからより良い方を行いなさい。

アディーユ・ビン・ハーティムは預言者が前記のハディースを語ったとして伝えている。

タミーム・ビン・タラファはアディーユ・ビン・ハーティムが次のように語ったところを聞いたとして伝えている

一人の乞食が彼の所にやって来 100（ディルハム）を求めた。
そこで彼はこういった。
あなたは私から 100（ディルハム）を求めようというのかね？
このハーティムの息子に！
アッラーに誓ってあなたには何もやりません。
しかしその後彼は（それを与えて）こういった。
もしアッラーの使徒が次のように語ったところを聞かなかったならば私は誓いを破ってまで与えることはなかったでしょう。
誓いを立てた者がそれよりも良いものを知ったときはより良い方を行いなさい。

アディーユは次のように伝えている

ある男が彼に物乞いをしに来た。
以下は前記と同様のハディースを伝えている。
しかしここでは「私からあなたへの贈り物としてここに 100（ディルハム）がある」と伝えている。

アブドル・ラフマーン・ビン・サムラは伝えている

アッラーの使徒は私に次のように語った。
アブドル・ラフマーン・ビン・サムラよ、あなたは自ら権限を求めてはならない。
なぜならば自ら求めてそれが与えられたとすればあなたは（アッラーの支持もなしにただ）それを委任されたことになるからです。
しかしもしあなたが自らそれを求めずして与えられたとすればあなたは（アッラーの支援の基に）その任に当たることになるでしょう。
またもしあなたが誓いを立ててからそれ以外のより良いことを知った時には誓いを破る償いをしてからそのより良い方を行いなさい。
またこのハディースはシャイバーン・ビン・ファッルーフによっても伝えられている。

アブドル・ラフマーン・ビン・サムラは前記のハディースを別の伝承者の経路を経て伝えている。しかしここでは「権限」という言葉は伝えられていない。

誓いを立てる者はそれを行うニーヤ（意志）を持って誓いを立てるべきである

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなたの誓いは相手があなたを信ずるであろう事柄についてなされるべきものです。

ところでアムルは「あなたの誓いは相手がそれを信ずるであろう事柄であるべきです」といった。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

誓いはそれを行う者のニーヤ（意志）による。

インシャーアッラー（アッラーがお望みならば）という誓いの型

アブー・フライラは次のように伝えている

かつて預言者スライマーン（ソロモン）には60人の妻がいたがそれで彼はこういいました。
私は毎夜彼女達を一人づつきっとまわってやる（注）。
そうすればそれぞれ全員が妊娠して男児を生み落しやがて彼らは騎士になりアッラーの道のために戦うだろう。
しかし（実際には）一人の妻を除いて誰れも妊娠しなかったしまた彼女は欠陥のある不完全な子供を生んだ。
さてここでアッラーの使徒はそれについてこういった。
もし彼（ソロモン）が「インシャーアッラー」の一語を付け加えていたならばそれぞれの女達はきっとアッラーの道のために戦う騎士になる男の子を生んだことだろう。

（注）「夜」の定冠詞を特定の夜と解釈すると一夜に 60 人の妻をまわる意味となる。
ただしこれは通常不可能であるがソロモンの場合は預言者であるのでこうした奇跡も可能だとする説もある。
次に定冠詞を種一般を指示していると考えれば「昼」ではなく「夜」即ち「夜間」という意味になり「毎夜」という解釈ができる

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている

アッラーの預言者スライマーン・ビン・ダーウードはこういった。
私は夜間に 70 人の妻達の間をきっとまわってやる。
そうすれば彼女達すべてがアッラーの道のために戦う男の子を生むであろう。
すると彼の友人、あるいは天使が「インシャーアッラーといいなさい」と彼にいった。
しかし彼はそれを言わずにそのことを忘れてしまった。
それで彼の妻達の内の一人を除いて誰れも子供を生まなかった。
またその子も欠陥のある不完全な男の子供でした。
さてここでアッラーの使徒はこれについて次のようにいった。
もし後がインシャーアッラーといっていたら彼は失敗しなかったであろうし彼の欲求も実現していたことでしょう。

アブー・フライラは前記と同様のハディースを預言者が語ったとして伝えている。

アブー・フライラは次のように伝えている

スライマーン・ビン・ダーワードは次のようにいった。
私は夜間に 70 人の妻達をきっとまわり、それぞれの妻にやがてアッラーの道のために戦

う男の子を生ませようぞ。
すると彼は「インシャーアッラーといいなさい」と言われた。
しかし彼はそれを言わなかった。
そして彼は彼女達をまわったが一人の妻を除いて誰れにも子供が生れなかった。
それに生まれた子供も欠陥のある不完全な男の子であった。
さてここでアッラーの使徒はこのことについて次のようにいいました。
もし彼がインシャーアッラーといっていたならば彼は失敗しなかったし彼の欲求は実現していたことであろう。

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている
スライマーン・ビン・ダーウードは次のようにいった。
私は夜間に 90 人の妻達をきっとまわり、彼女達すべてはアッラーの道のために戦う騎士を生むであろう。
すると彼の友人は彼に「インシャーアッラーといいなさい」といった。
しかし彼は「インシャーアッラー」と言わずに彼女達すべてをまわった。
その結果は一人を除いて誰れも妊娠しなかった。
それも彼女は欠陥のある不完全な男の子を産んだ。
さてムハンマドの命がそのみ手の中に握られているお方に誓って、もし彼がインシャーアッラーといっていたならば彼ら（子供達）はきっとすべてアッラーの道に騎士として邁進していたことてしょう。

前記のハディースは**アブー・ズィナード**によって同様の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは「それぞれの妻はアッラーの道のために邁進する男の子を身ごもったことでしょう」と伝えている。

イスラーム法上非合法ではないがそれに固執することによって家族の者に害を及ぼす誓いは禁ぜられている

ハンマーム・ビン・ムナッビフは次のように伝えている

これはアブー・フライラがアッラーの使徒が語ったとして私達に伝えた幾つかのハディースの内の一つである。

アッラーに誓ってあなた方の誰でも自分の家族に関して誓いを立てそれに固執して害を及ぼす（注）ことはそれを破ってアッラーが定めた償いをすることよりもアッラーのもとでは一層罪深いことである。

（注）たとえば家族の者と話さない誓いを立てることなど

不信者の誓い（ナズル）と彼がイスラーム教徒になった時にそれを実行すること

イブン・ウマルは彼の父ウマルが次のように語ったとして伝えている

アッラーの使徒よ、私はジャーヒリーヤ時代にマッカの聖モスクで一晩おこもりする誓いを立てました。
すると預言者は「あなたの誓いを実行しなさい」といった。

イブン・ウマルは前記と同様のハディースを伝えている。
しかしここでは伝承者によっては「一夜のおこもり」とする者や「一日のおこもりを義務づけた」とする者や一日も一夜もどちらも伝えていないハディースなどがある。

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている

ウマル・ビン・ハッターブはターイフからの帰りにジウラーナという所（注）でアッラーの使徒に次のように尋ねた。
アッラーの使徒よ、私はジャーヒリーヤ時代にマッカの聖モスクで一日おこもりすることを誓いました。
これについてどうお考えですか？
すると彼は「そこに行き、一日おこもりしなさい」といった。
ところでかつてアッラーの使徒は五分の一（戦利品の中の預言者の取り分）の中から彼（ウマル）に女の奴隷を与えた。
さてアッラーの使徒が戦争捕虜を解放したときウマル・ビン・ハッターブは彼らが「アッラーの使徒は我々を解放した」という声を聞いた。
そこでウマルは「これは一体どうしたのですか？」と尋ねたところ人々は「アッラーの使徒は我々を解放した」という声を聞いた。
そこでウマルは「これは一体どうしたのですか？」と尋ねたところ人々は「アッラーの使徒が戦争捕虜を解放したのです」と答えた。
するとウマルはこういった。
アブドッラー（ウマルの息子）よ、あの女奴隷の所に行って彼女を解放しなさい。

（注）聖地マッカとの境界地点。巡礼に参加する者はこの地点で巡礼服を着用し身体を浄めてマッカに入ることが義務付けられている

イブン・ウマルは次のように伝えている

預言者がフナインの戦いから戻ったときウマルはアッラーの使徒にジャーヒリーヤ時代に彼（ウマル）が立てた一日のおこもりの誓いのことを尋ねた。

以下は前記と同じ内容のハディースを伝えている。

ナーフィウは次のように伝えている

イブン・ウマルの所でジウラーナから入ったアッラーの使徒のウムラ（小巡礼）について語られた。

そしてイブン・ウマルは次のように伝えた。

預言者はそこからウムラに入らなかった（注）。

またウマルはジャーヒリーヤ時代に一晩おこもりをする誓いを立てていた。

以下は前記と同様のハディースを伝えている。

（注）巡礼服に着替え身を浄め禁忌状態でマッカに入らなかった意味だがしかし実際には別な記録から明かをように預言者はそこからウムラの状態で入った。

従ってイブン・ウマルはそのことを知らなかったものと思われる

イブン・ウマルは前記と同様の誓いについてのハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。しかしここには若干の言葉の違いが認められる。

奴隷との友好関係及び奴隷をたたいた者の償い

ザーザーヌ・アブー・ウマルは伝えている

私がイブン・ウマルの所にやって来たとき、彼は一人の奴隷を解放したところだった。
そして彼は地面から一本の枝か何かを拾い上げていった。
私が行ったこと（奴隷解放）の報酬はこれ位にも達しない（注）。
事実私はアッラーの使徒が次のように話したところを聞いています。
自分の奴隷の顔を張るかまたは殴る者はその償いとして彼を解放すべきである。

（注）文脈からみて、イブン・ウマルは自発的に解放したわけではなく奴隷を殴った償いとして解放したので報償が少ないという意味か

ザーザーヌは次のように伝えている

イブン・ウマルは彼の奴隷を呼んだ。
そして彼の背中に打撲の跡を見つけて「私はお前を痛めつけたか？」といった。
すると彼（奴隷）は「いいえ」といった。
そこでイブン・ウマルは「あなたは解放された」といった。
それから彼は地面から何かを拾い上げてこういった。
このことで私が受ける報酬などこの重さにも満たない。
私はアッラーの使徒が次のように語ったところを聞きました。
自分の奴隷をさほどの罪もないのに殴ったり顔を張ったりする者はその償いとして彼を解放すべきである。

同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられている。
ただしここでは若干の表現上の違いがある。

ムアーウィヤ・ビン・スワイドは伝えている

私はうちの奴隷の顔を張り逃げ出しました。
それから私が戻ったのは正午のほんの少し前でした。
そして私は正午の礼拝を父の後ろで行いました。
（それが済んだ後に）父はその奴隷と私を呼んでこういいました。
（奴隷に向って）彼（ムアーウィア）がしたように仕返ししてやりなさい。
ところが彼は許してくれました。それから父は次のようにいいました。
アッラーの使徒の時代でしたが我々はムカッリヌ族に属していました。
そして我が家には一人の女奴隷しかいませんでした。
そして我々の内の一人が女の顔を張ったことが預言者の耳に伝わってしまいました。

それで預言者は「彼女を解放しなさい」といいました。
ところが人々（家族のメンバー）は「彼女以外には奴隷がおりません」といった。
すると彼はこういった。
それなら彼女を（お金で）雇いなさい。
それでもし披女の使役が必要でなくなったときには彼女を自由の身にしてあげなさい。

ヒラール・ビン・ヤサーフは伝えている

ある人が怒りかっとなって彼の奴隷の顔を張った。
そこでスワイド・ビン・ムカッリヌは彼に次のように語った。
あなたは彼女の顔のほんの表面しかたたいてはいけません。
私はムカッリヌ家の七人兄弟の一人でした。
私達には召使の女奴隷が一人しかいませんでしたが私達の一番小さい者が彼女の顔を張りました。
するとアッラーの使徒は彼女を解放するよう私達に命じました。

ヒラール・ビン・ヤサーフは伝えている

かつて私達はヌウマーン・ビン・ムカッリヌの兄弟のスワイド・ビン・ムカッリヌの家で着物を売っていました。
そこへ一人の女奴隷が出て来て私達の一人に一言何かを話しました。
すると彼は彼女の顔を張りました。
それでスワイドは怒り、以下は前記と同様のハディースを伝えた。

スワイド・ビン・ムカッリヌは伝えている

彼の女奴隷の顔をある人（家族のうちの一人）が張った。
そこでスワイドは彼にこういった。
あなたは顔（を張ること）が禁じられていることを知らないのか？
そしてさらにまた彼はつづけてこういった。
知っての通り、アッラーの使徒の時代に私は兄弟の七番目であった。
そのとき我々には一人の奴隷しかいなかった。
ところが我々の内の一人が彼に腹を立てて彼の顔を張ってしまった。
するとアッラーの使徒は（償いとして）彼を解放するように我々に命じた。

ワフブ・ビン・ジャリールはシュウバが次のように語ったとして伝えている

ムハンマド・ビン・ムンカディルは私に「あなたの名前は何か？」と尋ねた。
そして以下は前記と同様のハディースを伝えた。

アブー・マスウード・バドリーは伝えている

以前私は自分の奴隷を鞭でたたいていました。

そのとき私は背後で「アブー・マスウードよ、（お前のしていることに）気付きなさい」という声を聞きました。

しかしそのときは私はあまりの怒りでその声の意味を理解しませんでした。

そしてその声がだんだんと私に近づいて来たときそれがアッラーの使徒であることを知りました。

そのとき彼は「アブーマスウードよ、気付きなさい」「アブー・マスウードよ、気付きなさい」といいつづけているではありませんか！

そこで私は鞭を手から放り出しました。

すると彼はこういいました。

アブー・マスウードよ、アッラーはこの奴隷に関してあなたの力以上に（何でもお出来になる）お力を持っているのですぞ。

そこで私は「以後私は決して奴隷をたたくことは致しません」といいました。

同様のハディースが**アアマシュ**によって語られている。

しかしジャリーズの伝えるハディースでは「彼（預言者）の畏怖に触れて私の手から鞭が（ぼろりと）落ちた」とある。

アブー・マスウード・アンサールは次のように伝えている

私が自分の奴隷をたたいていたとき私は背後で「アブー・マスウードよ、アッラーはこの奴隷に関してあなたの力以上にお力を持っていることを知りなさい」という声を聞きました。

そこで私が振り返ってみると驚いたことにそこにはアッラーの使徒がいるではありませんか！

そこで私は「アッラーの使徒よ、彼（奴隷）はアッラーのお顔のために自由の身です」といいました。

するとアッラーの使徒はこういった。

もしあなたがそうしなかったら地獄の業火があなたを焼くか、もしくは業火があなたを捕えることになっていたでしょう。

アブー・マスウードは次のように伝えている

彼はかつて自分の奴隷をたたいていましたがそのとき奴隷は「アッラーに助けを請い願います」といい続けていました。

しかし彼はたたきつづけました。

そこで奴隷が「アッラーの使徒に助けを請い願います」というと彼はようやく奴隷を手放した。

（丁度そのとき）アッラーの使徒が（やって来て）こういった。
アッラーに誓って、アッラーは彼に関してあなたの力以上のお力をお持ちですぞ。
そこで彼（アブー・マスウード）はその奴隷を解放しました。

シュウバは同様のハディースを同様の伝承者経路を経て伝えている。
しかしここでは「アッラーに助けを請い願います」の一文と「アッラーの使徒に助けを請い願います」の一文は伝えていない。

自分の奴隷をズィナー（姦通）の罪で中傷する者に対する厳しい条件

アブー・フライラはカーシムの父（預言者ムハンマド）が次のように語ったとして伝えている

自分の奴隷を姦通の罪で中傷する者は最後の審判の日にその罰を負わされるだろう（注）。

しかし奴隷が彼のいうようにそれを犯していたのなら勿論それを負うことにはならない。

（注）現世での自由人に対する姦通中傷罪の罰は 80 回の鞭打ち。

しかし奴隷の場合は裁判官の判断にもよるかもっと軽い。

だが来世の罰は双方とも全く変らない

フダイル・ビン・ガズワーヌは前記のハディースをカーシムの父から聞いたとして同様の伝承者経路を経て伝えている。

しかしここでは「私はカーシムの父即ち悔悛を受け入れる預言者が語ったところを聞いた」と伝えている。

主人は己れが食べるものを奴隷にも食べさせ、己れが着るものを着せること。また彼の能力以上のことを押し付けないこと

マアルール・ビン・スワイドは伝えている

私達はラバザ(注 1)のアブー・ザッルの所に行った。

彼は外套を羽織っており彼の奴隷もまた同様な物を身につけていた。

そこで私達は「アブー・ザッルよ、彼のと合わせれば正服(注 2)になるのではないかね」といった。

すると彼はこういった。

前に私と私の兄弟(宗教上の兄弟でここでは奴隷のこと)の一人の男との間で口論があった。

彼の母親はアラブ人ではなかったので私は彼の母親のことで彼をそしった。

すると彼は預言者に私を訴えた。

そこで私が預言者に会うと彼は「アブー・ザッルよ、本当にお前はまだジャーヒリーヤの残骸を残した男だな」といった。

それで私は「アッラーの使徒よ、人が他人を中傷すれば言われた方は相手の父母を中傷して返すものでしょう(注 3)」といった。

すると預言者はこういった。

アブー・ザッルよ、本当にお前はジャーヒリーヤの残骸を残した男だ。

彼ら奴隷達はアッラーがあなた方の手元に置いたあなた方の兄弟なのだよ。

故にあなた方の食べるものを彼らに食べさせ、あなた方の着るものを彼らに着せてやりなさい。

そして彼等の能力以上のことをさせてはなりません。

もしそうなったときには彼らに手を貸してやりなさい。

(注 1)マディーナ北方の約三日行程の所で後にアブー・ザッルの隠遁地となる。
彼はここで没し彼の墓がこの地にある

(注 2)アブラの正服(フッラ)は少くとも二枚以上から成る衣服だから

(注 3)つまり奴隷から最初に中傷されたのていい返しただけだというアブー・ザッルの口実。

しかしイスラーム以後のルールは同じことをいい返すべきであり父母や祖先まで巻き込むことはご法度とされた

同様のハディースを**アアマシュ**が伝えているがズハイルやアブー・ムアーウィヤのハディースでは預言者の言葉「お前は本当にジャーヒリーヤの残骸を残した男だな」の後に次の対話が伝えられている

私は「この年になってまでもですか？」といった。

すると預言者は「そうだ」と答えた。

またアブー・ムアーウィヤの伝えるハディースでは「そうです。あなたのその年になってまでも」となっている。

またイーサーの伝えるハディースでは「もし彼の能力以上の仕事をやらせるときには（まず）彼を売りなさい（注）」とある。

またズハイルの伝えるハディースでは「その事で彼を助けなさい」となっている。

そしてアブー・ムアーウィヤの伝えるハディースでは「彼は売る」とか「彼を助ける」とかは伝えていない。

単に「彼の能力以上の仕事を負わせてはならない」で終っている。

（注）「彼を売る」、「彼を助ける」はアラビア文字の方からみると極めて相似した文字にならざるを得ない。

つまり字体のレベルだったらどちらにも読み取れたと思う。

こうした意味で「彼を助ける」の方が正しいとする説がある。

本テキストの通りに「彼を売る」と読み取るとすれは言外の意味は「それでその仕事が出来る他の奴隷を買いなさい」ということになろう

マアルール・ビン・スワイドは伝えている

私はアブー・ザッルに会った。彼は外套を身にまとっており、またそれと同じものを彼の奴隷も着ていた。

そこで私がそのことで彼に尋ねると彼は次のように語った。

彼はアッラーの使徒の時代にある男を下品にののしった。

即ちその男の母を侮辱した。

それでその男は預言者の所に行きその事を伝えた。

そこで預言者はこういった。

本当にあなたはジャーヒリーヤ時代の遺物をまだ残している男だ。

（そもそも）奴隷達はあなた方の兄弟でありアッラーが彼らをあなた方の手元に置れたのだ。

それ故に謙れでも手元に兄弟を置いている者は自分が食べるものを食べさせ、自分が着るものを着させなさい。

また彼らに能力以上の仕事を負わせてはならない。

もし彼らに負わせたときにはその事で彼らを助けて手を賢しなさい。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

奴隷には彼（主人）の食事と着物（と同じもの）を与えるべきである。

そして仕事については彼の能力以上の事を負わせてはならない。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

あなた方の誰れかが所有する奴隷が食事を作りそれを持って来たときには既に彼（奴隷）は熱や煙に接して（苦労して準備して）いたのだから彼を座らせて一緒に食事をさせなさい。

そしてもし食事が足りなそうなときは彼の手に一食か二食分の食物をのせなさい。

さて伝承者の一人ダーウードは「それはつまり一口か二口の食事ということです」と説明している。

奴隷が彼の主人に誠実でありかつまたアッラーへの信仰が深い場合のその奴隷が受ける報償と報酬について

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

奴隷は彼の主人に誠実に尽くしかつアッラーへの信仰に励んだとき彼には二度の報酬が与えられる。

同様のハディースが**イブン・ウマル**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

信仰をもった忠実な奴隷には二重の報酬がある。

アブー・フライラの命がそのみ手の中にあるお方に誓ってもしアッラーの道のためのジハード（聖戦）やハッジ（巡礼）や私の母に対する孝行が無かったとしたら私は奴隷として死ぬことを欲したであろう。

さてアブー・フライラは彼が常に母と一緒にいて彼女の世話をしていたために彼女が死ぬまではハッジ（巡礼）をしなかったと伝えられている。

また伝承者のアブー・ターヒルはわずかな言葉の違いだけで同様のハディースを伝えている。

イブン・シハーブは前記ハディースを同様の伝承経路を経て伝えている。
ただしここでは「さてアブー・フライラは……」以下には言及してない。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

もし奴隷がアッラーへの義務と彼の主人への義務を果たすならば彼には二重の報酬がある。

そこで私（アブー・フライラ）はカアブにこのことを伝えたところ彼はこういった。

彼（そのような奴隷）には審判が無いし、同様に貧しい信者にもそれは無い。

アアマシュは前記ハデースを伝えている。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アッラーへの信仰を守り彼の主人に良く仕えて死ぬ奴隷は何と素晴しいことよ！

本当に彼は何と素晴しいことよ！

奴隷を共有している者がその奴隷を解放することについて

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

共有している奴隷を解放しようとする者はその奴隷の相場の値段を割り出し、もしそれに見合うお金を持っているなら共有者にそれぞれの権利に応じて渡せばその奴隷は（完全に）解放される。

しかしお金が足りない場合には彼の権利の分だけその奴隷は自由の身になる。

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

共有している奴隷を解放しようとする者は完全解放を目ざすべきである。

もし彼（奴隷）が残りの値段に相当するお金を持っているならばそこで彼は完全に解放される。

しかしそうでない場合は最初の共有者が払った分だけ彼は自由になる。

アブドッラー・ビン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

ある奴隷に対する自分の持ち分を放棄した者がその奴隷の値段に見合うだけの充分なお金を持っていたとしたら（完全解放のために）その奴隷に対する公正な値段が割り出されるべきである。

さもないとその者は己れが持ち分を放棄したその分だけしかその奴隷を自由にしただけになりかねない。

同様のハディースが若干の言葉を変えて別の伝承者経路を経て伝えられている。

サーリム・ビン・アブドッラーは彼の父からの伝聞としてアッラーの使徒が次のように語ったと伝えている

共有の奴隷を解放しようとする者は相手の共有者の持ち分を不正やごまかしのない相場の値段で割り出した後にもし彼（相手の共有者）が裕福であれば（彼の持ち分を放棄したという形で）奴隷は解放されます。

イブン・ウマルは預言者が次のように語ったとして伝えている

共有している奴隷を解放しようとする者はもし彼がその奴隷の値段に相当するお金せ持っているならば（完全解放のために）残りの金額は彼の財産の中から支払われる。

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている

奴隷が二人の人物によって所有されているとき、一方が彼を解放しようとすれば他方はそれ（完全解放）を保証しなければならない（注）。

（注）ただし相手か裕福であることが条件になる

同様のハディースが**シュウバ**によって同様の伝承者経路を経て伝えられている。
ただしここでは「共有する奴隷を解放せんとする者は彼の財産によってその奴隷の残りの自由をも完全に確保すべきである」と伝えている。

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている。

共有する奴隷を解放せんとする者にとっての奴隷の完全解放はもし彼がそれに必要な十分な財産を持っていればそれは彼のお金によって果される。
しかしそうでない時にはその奴隷には臨時残業が（自らを買い戻すために）当てられるべきである。
しかしそれが過重労働であってはならない。

同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられているがイーサーの伝えるハディースでは「そして彼（奴隷）は解放されなかった部分については（自らを買い戻すために）臨時残業が過重労働にならない程度に要求されるでしょう」となっている。

イムラーン・ビン・フサインは伝えている

ある男が死の間際に彼の所有する六人の奴隷を解放した。
だが彼にはこの他に何の財産もなかった。
そこでアッラーの使徒は彼らを呼んで彼らを三つのグループに分けてからくじ引きさせて二人を解放し四人を奴隷のままにした。
そして預言者は彼を激しく非難した（注）。

（注）イスラーム法では遺言は財産の三分の一までしか許されていないのにこの男はそれを無視したために預言者の怒りを買った

同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられている。
ただしサカフィーの伝えるハディースでは「アンサールのある男が彼の死の間際に遺言して六人の奴隷を解放した」とある。

同様のハディースが**イムラーン**・ビン・フサインによって別の伝承者経路を経て伝えられている。

ムダッバル（注）を買うことは許されている

（注）主人の死後に解放を約束されている奴隷

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている

アンサールのある男が彼の死後に自由にする条件で彼の奴隷を解放した。
そうしたのは彼にはその奴隷以外の財産がなかったからです。
さてそのことが預言者に伝えられると彼は「誰か彼（奴隷）を私から買う者はいないか？」といった。
するとヌアイム・ビン・アブドッラーがそれを 800 ディルハムで買った。
そしてそれを彼に支払った。
ところでアムルは次のように語っている。
私はジャービル・ビン・アブドッラーが「それはコプト人の奴隷であり最初の年（注）に死んだ」と語るところを聞きました。

（注）アブドッラー・ビン・ズバイルがカリフを宣告した最初の年の意

スフヤーン・ビン・ウヤイナはアムルがジャービルから次のように聞いたとして伝えている

アンサールのある男が彼の奴隷に彼の死後に彼を解放することを約束した。
それというのも彼にはその奴隷以外には何の財産もなかったからです。
するとアッラーの使徒はその奴隷を売った。
ジャービルは「それを買ったのはイブン・ナッハームであり奴隷はコプト人でイブン・ズバイルの統治の最初の年に死んだ」と伝えている。

同じハディースが**ジャービル**によって別の伝承者の経路を経て伝えられている。

同じハディースが預言者が語ったこととして別の伝承者の経路を経て伝えられている。

カサーマ、キサースの書

殺人罪確定の誓い（カサーマ）

サフル・ビン・アブー・ハスマとラーフィウ・ビン・ハディージュは次のように伝えている

アブドッラー・ビン・サハル・ビン・ザイドとムハィイサ・ビン・マスウード・ビン・サイドの二人は出かけた。

そしてハイバルに着いてから二人はそこのある場所で別れた。

それからムハィイサはアブドッラー・ビン・サハルが殺されているところを見付けた。

それで彼はアブドッラーを埋葬した。

それからアッラーの使徒のもとへ行ったがその時彼の他にフワィイサ・ビン・マスウードとアブドル・ラフマーン・ビン・サハルが一緒に来た。

アブドル・ラフマーン（注 1）は三人の中で一番若かった。

彼は二人より先に喋り始めた。

そこでアッラーの使徒は彼に「年上を先に喋らせなさい」といった。

すると彼は黙り二人が喋りだした。

ついで彼も二人と一緒に喋った。

こうして彼らはアッラーの使徒にアブドッラー・ビン・サハルが殺害されたことについて語った。

すると預言者は彼らに次のようにいった。

あなた達は 50 人の誓いを集めることができますか？

そうすればあなた達は殺人容疑者に対して血の代金を請求する権利を得るでしょう。

そこで彼らは「どうして私達が見てもいないのに誓いを立てることができましょう」といった。

すると預言者は「それではユダヤ人達はあなた達に向けて50 人の誓いを集めて疑いを晴らすことになりましょう」といった。

そこで彼らは「どうして、無信仰者達の誓いを受け入れることができましょう」といった。

アッラーの使徒はその状態を見たとき、彼は自分で殺された者の血の代金を支払った（注 2）。

（注 1）殺されたアブドッラーの弟、ムハィイサとフワィイサは彼の従兄弟にあたるが彼らは彼よりも年上だった

（注 2）預言者は状況から判断して殺人者の特定は不可能とみた。

しかし殺された男の血の代金を無にすることも浮ばれないと考えて自らのポケットからそれを支払ってやった

サハル・ビン・アブー・ハスマとラーフィウ・ビン・ハディージュは次のように伝えている

ムハィイサ・ビン・マスウードとアブドッラー・ビン・サハル・ビン・ザイドはハイバルに向けて出て行った。
そして二人はナツメヤシの樹の所で別かれた。
ところがアブドッラー・ビン・サハルは殺された。
それで彼ら(殺された被害者の身内)はユダヤ人達を疑った。
そして被害者の弟のアブドル・ラフマーンと従兄弟の二人フワィイサとムハィイサが預言者の所にやって来た。
そしてまずアブドル・ラフマーンが彼の兄の事件について喋り始めた。
彼は彼ら三人の中で一番若かった。
そこでアッラーの使徒は「年上に先に喋らせなさい」または「最年長者に喋らせなさい」といった。
そこで二人が彼らの従兄弟を殺した容疑者について喋った。
するとアッラーの使徒はこういった。
彼らのうちの一人の男に対して(加害者であると)あなた達の内から50人の者に誓いを立てさせなさい。
そうすればその者の身柄はきちんと引き渡されるでしょう。
すると彼らは「私達が見てもいないことにどうして誓いを立てることができましょうか？」といった。
すると預言者は「それではユダヤ人はあなた達に向けて50人の誓いを立てて無実を訴えるでしょう」といった。
そこで彼らは「アッラーの使徒よ、彼らは無信仰者達ですよ」といった。
こうしてアッラーの使徒は血の代金を自身が支払うことになった。
ところでサハルはこれにつづいて次のようにいっている。
ある日、私が彼らのラクダの囲いに入ったとき、その内の一頭の雌ラクダが私を蹴とばした(注)。

(注)血の代金はラクダの群で支払われたことを暗示しているとともにこの話しを加えることによって伝承者は彼の記憶が確かでありいかに鮮明であるかを示そうとしている

同様のハディースが**サハル・ビン・アブー・ハスマ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは表現上に多少の違いがある。
また「その内の一頭が私を蹴とばした」という最後の一文は述べられていない。

同様のハディースが**サハル・ビン・アブー・ハスマ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

ブシャイル・ビン・ヤサールは次のように伝えている

ハーリサ族出身のアンサールの者二人、アブドッラー・ビン・サハル・ビン・ザイドとムハィイサ・ビン・マスウード・ビン・ザイドはアッラーの使徒の時代にハイバルへ出向いて行った。
それはユダヤ人と休戦協定を結んでいるときでそこの住民はまだユダヤ人でした。
二人はそれぞれの用事で別れたのだがアブドッラー・ビン・サハルの方が殺されて彼の死体は（ナツメヤシの根本につくられている）水溜めの中で見つかった。
そこで彼の友人がこれを埋葬した。
それから彼（ムハィイサ）はマディーナに向った。
そして殺された者の弟アブドル・ラフマーン・ビン・サハルとフワィイサと三人でアッラーの使徒のもとに出向き、（殺された）アブドッラーのことや殺害の現場について彼に語った。
さて以下で伝承者のブシャイルは預言者の教友の一人から伝聞したとして次のように伝えている。
アッラーの使徒は彼らに「あなた達は 50 人の誓いを立てることができますか？
そうすればあなた達は殺した者に対して権利を持つでしょう」といった。
すると彼らは「どうして私達が見ていないのに、また現場に居なかったのに誓いを立てることができましょう」といった。
そこで彼は「それではユダヤ人達はあなた達に向けて 50 人の誓いを立てて無実を訴えるでしょう」といった。
すると彼らは「アッラーの使徒よ、どうして無信仰者達の誓いを受け入れることが出来ましょうや」といった。
こうしてアッラーの使徒は自分の財産の中から彼（殺された男）の血の代金を支払った（注）。

（注）国家元首または裁判官が状況を見て適切と判断を下せばこのような形式で支払われることもあり得る

ブシャイル・ビン・ヤサールは次のように伝えている

ハーリサ族出身のアンサールの一人アブドッラー・ビン・サハル・ビン・ザイドと呼ばれる男と彼の従兄弟のムハィイサ・ビン・マスウード・ビン・ザイドと呼ばれる者が旅に出て行った。
以下は前記ハディースの「アッラーの使徒は自分の財産の中から彼（殺された男）の血の代金を支払った」までは同じである。
ところでブシャイル・ビン・ヤサールはサハル・ビン・アブー・ハスマが彼に語ったとして次のように伝えている。
確かにラクダの囲いの中で血の代金として送られ一頭の雌ラクダが私を蹴った。

ブシャイル・ビン・ヤサール・アンサーリーはサハル・ビン・アブー・ハスマからの伝聞として次のように伝えている

彼の部族の幾人かがハイバルへ出て行った。
彼らはそこでお互に別れて散々になった。
それから彼らは彼らの内の一人が殺されていることに気付いた。
以下は前記ハディースと同じである。
しかしここでは次の一文が加えられている。
アッラーの使徒は彼(殺された男)の血が無駄になることを嫌った。
そこで彼は彼の血の代金として自らサダカのラクダ(注)を 100 頭支払った。

(注)サダカはその使用範囲が指定されているので血の代金には使用されない。
そこでサダカのラクダを預言者が一度買ってそれを殺された男の家族に血の代金として送ったものと考えられる

アブー・ライラー(注)はサハル・ビン・アブー・ハスマが彼の部族の年配者達が次のように伝聞したとして伝えている

アブドッラー・ビン・サハルとムハィイサは彼らを悩ましていた苦境を打開するためにハイバルに行った。
ところがムハィイサがやって来てアブドッラーが殺されて井戸または水路の中に投げ込まれていたと知らせた。
そして彼はユダヤ人の所に行き「アッラーに誓ってあなた達が殺したに違いない」といった。
だが彼らは「アッラーに誓って、私達は彼を殺さなかった」といった。
それから彼(ムハィイサ)は自分の部族の所にやって来て彼らにそのことを語った。
それから彼は彼の兄フワィイサとアブドル・ラフマーン・ビン・サハルと三人で預言者の所にやって来てまずムハィイサが喋り始めた。
ところで彼こそがハイバルに居た者であったが、アッラーの使徒はムハィイサに「年配者を先に」といった。
そこでフワィイサが喋り始めそれからムハィイサが喋った。
すると預言者はこういった。
それは彼らが殺された者の血の代金を支払うかさもなければ彼らは戦争を準備しなければなるまいぞ。
こうしてアッラーの使徒は彼らに手紙を書いた。
すると彼らは「アッラーに誓って、私達は本当に彼を殺してはいません」と手紙を書いてきた。
そこでアッラーの使徒はフワィイサとムハィイサとアブドル・ラフマーンにこういった。
あなた達は被害者の血の代金の権利を得るために彼らに対して殺人罪を確定する誓い

（カサーマ）を立てることができますか？
すると彼らは「いいえ」と答えた。
それで彼は「ユダヤ人達が彼らの無実の誓いをあなた方に対して立てるとしたら？」といった。
そこで彼らは「でも彼らはムスリムではありません」といった。
こうしてアッラーの使徒は彼の財産の中からそれを支払った。
つまりアッラーの使徒は 100 頭のラクダを彼らに送った。
そしてそれらは彼らの囲いの中に追い込まれた。
ところでサハルはさらにつづけてこういいました。
その内の赤いラクダが私を蹴ったのです。

（注）正式名はアブー・ライラー・アブドッラー・ビン・アブドル・ラフマーン・ビン・サハル

預言者の妻マイムーナの解放奴隷**スライマーン・ビン・ヤサール**はアッラーの使徒の教友のアンサールの一人からの伝聞として次のように伝えている

アッラーの使徒はカサーマ（誓い（注））をそれがジャーヒリーヤ時代にあったように定めて追認した。

（注）カサーマ（誓い）の定義は殺人者が不明の場合、原告側が 50 人の誓いを立てるかまたはその場に居合せた者が 50 回誓いを立てることによって被告側に血の償いの義務を生ぜしめるものである。
往々にして被告側は殺人現場の住民である部族が負わされる。
一方被告側が逆に無実の誓いを同じように立てると血の償いの義務は打ち消されることになる。
またこの際に誓いを立てる資格のない者は少年、女性、狂人、奴隷である

同様のハディースが**イブン・シハーブ**によって同様の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは次の一文が追加されている

彼（預言者）は殺された者についてユダヤ人達に疑いをかけているアンサールの人々の間をカサーマ（誓い）の裁定でもって裁いた。

同様のハディースをアンサールの一部の人々さらには預言者からの伝聞として**アブー・サラマ・ビン・アブドル・ラフマーン**と**スライマーン・ビン・ヤサール**が伝えている

離反の戦闘者と背教者達に対する判決

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

ウライナ部族の幾人かの人々がマディーナのアッラーの使徒のもとにやって来た。
しかし彼らはマディーナに馴染まずに病気になりこの地を嫌った。
そこでアッラーの使徒は彼らにこういった。
もしあなた達が望むならサダカのラクダの集まっている所に行きその乳と尿（注 1）を飲むことができます。
それで彼らはそのように行い元気になった。
それから彼らはラクダ飼達に襲いかかり、彼等を殺してイスラームに離反してしまった。
そして彼らはアッラーの使徒のラクダをも奪って追い立てていった。
それでこのことがアッラーの使徒の耳に入り彼は彼らの後を追跡して人々を送った。
それから彼らは連れ戻された。
そこで彼は彼らの手と足を切り、彼らの目をえぐり取った。
それから彼らをハッラの原（黒石台地の原（注 2））に死ぬまで置きざりにした。

（注 1）ラクダの尿はある種の病気の薬になると言われている

（注 2）マディーナの近くにある石の原で黒色の原だから太陽熱を吸集して最も暑い所、しかしここでは彼らがここの近くでラクダ飼いを殺して家畜を奪ったためにここに放置された

アナスは次のように伝えている

ウクル部族から八人の者がアッラーの使徒のもとにやって来て彼にイスラームへの忠誠を誓った。
しかし彼らはその土地に馴染まず、健康を害して病気になってしまった。
そこで彼らはこのことをアッラーの使徒に訴えた。
すると彼はこういった。
なぜあなた達は私達のラクダ飼と一緒に私達のラクダの群の囲いに行き、その乳と尿を利用しないのですか？
すると彼らは「はいその通りです」といって出て行きその尿と乳を飲んで元気になった。
ところが彼らはラクダ飼を殺してラクダを追い払ってしまった。
そしてこのことがアッラーの使徒に伝えられたので彼は彼らを追って人々を送った。
そして彼らは追いつかれ連れ戻された。
そこで預言者は彼らについて命令を下したが彼らの手と足は切断され、彼らの目はえぐり取られた。
それから彼らは死ぬまで太陽の下に投げ出された。

ところで同様のハディースがイブン・サッバースによって伝えられているがここでは多少の表現上の違いがある。

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

ウクル部族またはウライナ部族の幾人かの人々がアッラーの使徒のもとにやって来た。
しかし彼らはマディーナの空気に馴染まず、健康を害して病気になってしまった。
そこでアッラーの使徒は彼らに搾乳用のラクダの所に行くようにそしてその尿と乳を飲むように命じた。
以下は前記のハディースと同様であるが最後の一文には次のような若干の違いがある。
そして彼らの目はくりぬかれ、ハッラの原に投げ出された。彼らは死水を求めたが与えられなかった。

アブー・キラーバは次のように伝えている

私はウマル・ビン・アブドル・アズィーズの後ろに座っていた。
そのとき彼は人々にこういった。
あなた達はカサーマ（殺人罪確定の誓い）については何と云うつもりですか？
するとアンバサが「アナス・ビン・マーリクは私達にかくかくしかじかと語りました」といった。
それで私（アブー・キラーバ）は「私にもアナスは以下の如くに語りましたよ」といった。
人々が預言者のもとにやって来た。そして以下は前記のハディースを伝えたが私（アブー・キラーバ）がこのハディースを語り終えたとき、アンバサは「アッラーに称讃あれ！」といった。
そこで私は「アンバサよ（私が伝えたことについて）私を疑っているのですか？」といった。
すると彼は次のようにいった。
いいえ、そのようにアナス・ビン・マーリクは私達に伝えました。
シリア地方の方々よ、この人物（アブー・キラーバ）または彼のような人物がいる限りはあなた達は善きことに見放されることはあるまいぞ。

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

ウクル部族出身の八人の男がアッラーの使徒のもとにやって来た。
以下は前記のハディースと同じであるが最後に次の一文が付け足されている。
彼は彼ら（の傷口）を焼灼しなかった（注）。

（注）通常は切断刑を受けた者の流血を止めるために傷口を焼いたものと思われる

アナスは次のように伝えている

ウライナ部族から数人の者がアッラーの使徒のもとにやって来て、イスラームに入信して彼に忠誠の誓いを立てた。

そのころマディーナでは悪性の天然痘が広まっていた。

以下は前記のハディースと同じであるが最後に次のように付加えている。

彼のもとにはアンサールの若者が 20 人近くいた。

彼は彼らの後を追跡するためにそれらの若者を送ったのだが彼らと一緒に足跡追跡の専門家も一緒に送った。

同様のハディースが**アナス・ビン・マーリク**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは伝承者により「ウライナ部族の一団」ともまた「ウクラ族とウライナ族の一団」ともいっている。

アナスは前記と同様のハディースを伝えている。
しかしここでは次の一文が加えられている

預言者は彼らの目をくりぬいた。なぜなら彼らはラクダ飼達の目をくりぬいたからだ。

石その他尖った物または鈍器による殺人に対するキサース（報復刑）の正当性と女性殺害による男性の死刑確定について

アナス・ビン・マーリクは伝えている

一人のユダヤ人がある女性の銀の装飾品のことで彼女を石で殺害しました。
それで彼は彼女とともに預言者のもとに連れてこられました。
そのとき彼女は虫の息であった。
それで預言者は彼女に「誰々があなたを殺したのですか？（注）」と尋ねた。
ところが彼女は「いいえ」と頭を振って答えた。
それからまた彼は二回目を彼女に尋ねた。
するとまた彼女は「いいえ」と頭を振って答えた。
それから三度目を同じように尋ねると今度は「はい、そうです」と頭を動かして彼女は答えた。
そこでアッラーの使徒は二つの石の間でその男の頭を潰して殺すように命じた。

（注）アラビア語の動詞には常に文字通りの意味の他に「ほとんどそうした」とか「ほとんどこうだった」といった動作の不確定要素を内包している。
従って文字通りの意味に特定する場合には様々な強調形式（قد Qad の挿入など）がとられる。

前記の殺した「قتل Qatala」は後者の好例である

同様のハディースが**シュウバ**によって同様の伝承者経路を経て伝えられている。
また伝承者の一人、イブン・イドリースは次のように伝えている。
“そこで預言者は彼の頭を二つの石の間で潰すことを命じた”

アナスは次のように伝えている

ユダヤ人の男がアンサールの某女性を彼女の装飾品のことで殺害しました。
それから彼は彼女を井戸に投げ込んだのだが石で彼女の頭を潰した。
それで彼は捕えられてアッラーの使徒のもとに引っぱり出されました。
そこで預言者は彼に右投げによる死刑を命じ彼は石打ちにされて死んだ。

同様のハディースが**アイユーブ**によって伝えられている。

アナス・ビン・マーリクは伝えている

一人の女性が二つの石の間で頭を潰されているところが見つかった。

彼らは彼女に「誰れがあなたにこのようなひどいことをしたのか？　あいつか？　あいつか？」と尋ねて

遂にあるユダヤ人の名前を述べると彼女は「そうです」と頭でうなずいて合図した。

そこでそのユダヤ人は捕えられたが彼は自分の罪を白状した。

それでアッラーの使徒は彼の頭を石で潰すことを命じた。

正当防衛で相手を殺したり傷つけたとしても保障金を支払う必要はないこと

イムラーン・ビン・フサインは伝えている

ヤアラー・ビン・ムンヤまたはイブン・ウマイヤ（注 1）がある男と争い、そのうちの一人が相手の手にかみつき、それで咬まれた方が手を引っ込めた拍子に咬んだ方の前歯が抜け落ちた。

そこで彼ら二人はこの争いの決着を預言者のところに持ち込んだ。

すると彼はこういった。

あなた達のどちらかが雄ラクダが咬みつくように咬みついたのですね？

ならば血の代金はありません（注 2）。

（注 1）ムンヤはヤアラーの母の名前でウマイヤは彼の父の名前

（注 2）勿論、加害者が正当防衛である必要がある

同様のハディースが**ヤアラー**によって伝えられている。

イムラーン・ビン・フサインは伝えている

ある男が別の男の腕に咬みついた。

そこで咬みつかれた男が腕を（あわてて）引っ込めたので咬みついた男の前歯が抜け落ちた。

そこでこの件が預言者のところに持ち込まれた。

だが彼はそれを却下してこういった。

あなたは彼の肉を食べようと思ったのですか？

サフワーン・ビン・ヤアラーは伝えているある

男がヤアラー・ビン・ムンヤの使用人の腕に咬みついた。

それで彼が腕を引っ込めたとき噴みついた男の前歯が抜け落ちた。

そこでこの件が預言者のもとに持ち込まれたがしかし彼はそれを却下した。

そしてこういった。

あなたは雄ラクダが咬じるようにそれ（腕）を咬じろうとしたのですか？

イムラーン・ビン・フサインは伝えている

ある男が別の男の手に嘆みついた。

嘆みつかれた男が彼の手を引き抜いたとき、噴みついた男の前歯一本または数本が抜け落ちた。

彼（前歯が落ちた男）はアッラーの使徒にそのことを訴えた。
するとアッラーの使徒はこういった。
あなたは私に何を命じろというのですか？
あなたは種ラクダが咬むように彼の手を咬むために彼があなたの口の中に彼の手を置くようにと私が命ずるようにと私に命じたいのですか？
（もしどうしても報復したいのであるならば）まずあなたの手を彼の口の中に置いて充分に彼に咬ませてそれから手を引き抜くことです。

サフワーン・ビン・ヤアラー・ビン・ムンヤは父からの伝聞として次のように伝えている
ある男が預言者のもとへ（訴えるために）やって来た。
既にその男は別の男の手に咬みついていたが、咬みつかれた男が彼の手を引き抜いたときに彼の前歯が二本落ちてしまったわけである。
さてこの件では預言者は訴えを却下してこういった。
あなたは種ラクダが咬むように彼を咬みたかったのですか？

サフワーン・ビン・ヤアラー・ビン・ウマイヤは父からの伝聞として次のように伝えている
私は預言者と一緒にタブークの戦いで戦った。
さてヤアラーはいつもこういっていました。
あの聖戦が私にとって最も厳しいものでした。
私には一人の使用人がいたが彼がある者と争いその内の一人が他方の手に咬みついた。
それで咬みつかれた方が咬みついた者の口から手を引き抜いたとき彼の前歯の一本が抜け落ちた。
それで二人は預言者のもとに行った。
しかし彼は彼らに抜けた前歯に対する保障金は無効と宣告した。

同様のハディースが**イブン・ジュライジュ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

歯には歯の報復（キサース）の正当性の確認（注）

（注）これまでの前歯事件は預言者によってその報復も保障義務も却下されているが
これはあくまでも正当防衛という特殊なケースでの出来ごとであった。
しかしここでは一般的な状況の中での歯には歯という報復は正当性を持つとしている

アナスは次のように伝えている

ルバイウの妹のウンム・ハーリサはある男を傷つけた（彼女は彼の歯を折った）。
そこで彼ら（被害者の身内）はこの争いを預言者に訴えた。
すると預言者は「キサース（報復）だ、キサースだ」といった。
そこでウンム・ラビーウがこういった。
アッラーの使徒よ、某女史にキサースを執行するのですか？
アッラーに誓って彼女にはキサースは行われない（事を望みます）。
すると預言者は「アッラーに称讃あれ、ウンム・ラビーウよ、キサースはアッラーの聖典に書かれている裁きです」といった。
だが彼女は「しかし、アッラーに誓って彼女には決してキサースは行われない（注）」といった。
さてこうして彼ら（被害者の親族）が血の代金（即ち保障金）を受け取るまで彼女はいい続けた。
そこでアッラーの使徒はこういった。
ほんとうにアッラーの下僕の内にはもしアッラーに誓ったならばアッラーが必ずそれを正当にして下さる者（実に信仰深い人）がいるものだ。

（注）預言者の判決にたてつこうとしているのではない。
これによって被害者の親族に報復をあきらめるよう預言者に仲介してもらいたい願望を表わしているまでである

ムスリムの血が流されてもよい場合

アブドッラー・ビン・マスウードはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アッラー以外に神なしと証言し私がアッラーの使徒であることを証言したムスリムの血が流されること（殺害されること）は許されない。

しかし次の三者の場合は別である。それは姦通した既婚者（注 1）の場合と命には命の場合（注 2）と背教してムスリム社会を離れる者である。

（注 1）双方が未婚者同志の私通の場合は 100 回の鞭打ち刑だけである

（注 2）殺人事件でキサース刑が確定した場合である

同様のハディースが**アアマシュ**によって同様の伝承者経路を経て伝えられている。

アブドッラー・ビン・マスウードは伝えている

アッラーの使徒は私達の間に立ちこういった。

彼以外に神はないお方に誓ってアッラー以外に神はなしと証言し私がアッラーの使徒であることを証言したムスリムの血が流されることは許されない。

しかし次の三者の場合は別である。

それはイスラームを捨てて背教者としてムスリム社会を離れた者と姦通した既婚者の場合と命には命の場合である。

同様のハディースが**アアマシュ**によって伝えられている。

しかしここでは「彼以外に神はないお方に誓って」という一節は述べられていない。

殺人を犯した者の罪（の原点）について

アブドッラー・ビン・マスウードは預言者が次のように語ったとして伝えている

誰も不当に殺されることはない。

さてしかし（もし殺人を犯した場合は）その血の一部（殺人の一部）はアダムの最初の子（カイン）が負っている。

なぜならば彼は殺人を行った最初の人類であるからだ。

同様のハディースが**アアマシュ**によって同様の伝承者を経て伝えられている。
ただしジャリールとイーサー・ビン・ユーヌスによって伝えられているハディースでは「なぜなら彼は殺人を行った者であるからだ」として伝え「最初の」という三和は伝えていない。

殺人に対する来世での報い。殺人は来世で人々の間で（注）最初に裁かれる

（注）人々の間でとは人間間のもめごとの意味であり礼拝など人間と神との関係ではないことを示している

アブドッラー・ビン・マスウードはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

来世で人々の間で最初に裁かれることは殺人についてである。

同様のハディースが**アブドッラー**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは表現上に多少の違いがみられる。

生命と名誉と財産は神聖にして犯すべからざること

アブー・バクラは預言者の言葉として次のように伝えている

暦の流れはアッラーが天地を創造した日の状態にまた戻った（注 1）。

一年は 12 ヵ月であり、そのうちの四ヵ月は神聖月である。

それはズール・カアダ月、ズール・ヒッジャ月、ムハッラム月の連続した三ヵ月とラジャブ月である。

またそれ（ラジャブ月）はジュマーダー月とシャアバーン月の間にある月でムダル族の（重視した）月（注 2）である。

それから彼は「今月は何の月ですか？」といった。

そこで私達は「アッラーとその使徒が一番よく知っています」と答えた。

ところが彼は暫くの間黙っていたので私達は彼がそれに別な名前を付けるのではないかと思いました。

すると彼は「ズール・ヒッジャ月ではありませんか？」といったので私達が「そうです」と答えると彼はまた「ここは何という町ですか？」と尋ねた。

それで私達は「アッラーとその使徒が一番よく知っています」と答えた。

ところが彼は暫くの間黙っていたので私達は彼がそこに別の名前を付けるのではないかと思いました。

しかし彼は「アル・バルダ（マッカの町）ではありませんか？」といいましたので私達は「そうです」と答えた。

それから彼は「今日は何の日ですか？」とまた尋ねた。

そこで私達は「アッラーとその使徒が一番よく知っています」と答えた。

ところが彼は暫くの間黙っていたので私達は彼がそれに別の名前を付けるのではないかと思いました。

それから彼は「犠牲の日（注 3）ではありませんか？」といったので私達は「はいそうです、アッラーの使徒よ」と答えた。

これにつづいて彼は次のようにいった。

あなた達の生命と財産（伝承者の一人ムハンマドは「私は彼がそのようにいったと思います」と伝えているが）及びあなた達の名誉は今月の今日のこの町における神聖さと同じようにあなた達にとって神聖にして犯すべからざるものです。

あなた達はいずれあなた達の主にまみえることでしょう。

そのとき主はあなた達にあなた達が行ったことについて尋ねるでしょう。

ですから私の亡き後（注 4）であなた達は決してお互いに首を打ちあう無信仰者達（あるいはひどく迷った人々ともいった）に戻ってはなりません。

ですからこの場に居合わせた者は不在だった者にきっと伝えなさいよ。

なぜならば多分にそれを伝えられた者の幾人かはそれを直接聞いた者よりもしっかりと

記憶するかも知れないからです。
それから彼は念を押して「私は確かにあなた達に(啓示を)伝えましたよ」といった。
ところで同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられているがそこでは若干の表現上の違いがある。

(注 1)イスラーム以前のアラブはアブラハムの宗教の暦制に習って神聖月を設けていた。
しかし連緑した三ヵ月間の戦闘禁止の状態に耐えられなくなりこの禁を破ってムハッラム月の神聖月を衆のサファル月に遅らせたり次の年まで遅らせた。
こうして預言者の離別の巡礼の年のズール・ヒッジャ月(巡礼月)はたまたま神聖月に当っていたという意味

(注 2)ムダル族の敵対部族ラビィーア族はラマダーン月をもってラジャブ月と主張していた。
そこて預言者は北アラブ族のムダル族の主張するラジャブ月が正しいことを指定する必要があった
(注 3)当然ズール・ヒッジャ月の 10 日のこと

(注 4)ヒジュラ 10 年の離別の巡礼中の出来事であるので預言者はこの時自らの死期が近いことを予感していたと言われている

アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクラは父からの伝聞として次のように伝えている

あの日(離別の巡礼のアラファの野に立つ日)彼は彼のラクダに乗っていたがある者がラクダの手綱を取っていた。
そのとき彼は「あなた達は今日が何の日か知っていますか？」といった。
そこで彼らは「アッラーとその使徒が一番よく知っています」といった。
だが(彼は暫く黙っていたので)私達は彼がそれに別の名前を付けるのかと思いました。
すると彼は「犠牲の日ではありませんか？」といった。
それで私達は「そうです、アッラーの使徒よ」と答えた。
ついで彼は「今日は何の月ですか？」といった。
そこで私達は「アッラーと彼の使徒が一番よく知っています」といった。
だが(彼は暫く黙っていたので)私達は彼がそれに別の名前を付けるのかと思いました。
すると彼は「ズール・ヒッジャ月ではありませんか？」といった。
それで私達は「そうです」と答えた。
ついで彼は「ここは何という町ですか？」と尋ねた。
そこで私達は「アッラーとその使徒が一番よく知っています」といった。
だが(彼は暫く黙っていたので)私達は彼がそれに別の名前を付けるのかと思いました。

すると彼は「アル・バルダ（マッカの町）ではありませんか？」といった。
それで私達は「そうです」と答えた。
ここで彼は次のように語った。
あなた達の生命、財産、名誉は今月今日この町の神聖さと同じくあなた達にとって神聖にして犯さざるべきものです。
ですからこの場に居合わせた者は不在だった者に伝えなさいよ。
さてそれから彼は白黒まだらの二匹の雄羊の方に向き直りその二匹を犠牲に捧げ、ついで二匹の山羊を殺しそれを私達に分配した。

アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクラは父からの伝聞として次のように伝えている
あの日（離別の巡礼のアラファの日）預言者はラクダに乗っていた。
そしてある男がラクダの手綱を取っていた。
以下は前記のハディースと同じである。

アブー・バクラは次のように伝えている
犠牲の日（巡礼中のズール・ヒッジャ月の 10 日）、アッラーの使徒は私達に演説した。
そして「今日は何の日ですか？」といった。
以下は前記のハディースと同じである。
しかしここでは「あなた達の名誉」とは述べていない。
また「それから彼は白黒まだらの二匹の雄羊の方に向き直り」以下の一文には言及していない。
またここでは次のように伝えている。
あなた方が主にまみえる日まで今月今日のこの町の神聖さと同じように……私は確かに伝えましたよ。
すると彼らは「はい伝えました」といった。
そのとき彼は「アッラーもご照覧あれ」といった。

自白による殺人確定の正当性。被害者の相続人はキサース（報復）の権利を有すること。加害者は赦しを乞う権利があること

アルカマ・ビン・ワーイルは父からの伝聞として次のように伝えている

私が預言者の所で座っていたとき、ある男が別の男を編んだ皮紐で縛って連れて来て「アッラーの使徒よ、この者が私の弟を殺しました」といった。

するとアッラーの使徒は「あなたは彼を殺しましたか？」と尋ねた。

（連行して来た男が「もし彼が自白しなかったなら私は証人を連れてくるまでだが」などといったが）。

すると男は「はい、私が彼を殺しました」と自白した。

そこで預言者は「なぜ彼を殺したのですか？」と尋ねた。

彼は答えて次のように語った。

私と彼は棒で木の葉をたたき落して家畜の餌を集めていました。

そのとき彼は私を侮辱して私を怒らせました。

それで私は斧で彼の頭の側面を殴りそして彼を殺してしまいました。

すると預言者は彼に「あなたはあなた自身に代るべき何か支払うものを持っていますか？」といった。

だが彼は「上着と斧以外には財産を持っていません」といった。

すると預言者は「あなたの部族はあなたのために血の代金を支払ってくれると考えますか？」と尋ねた。

だが彼は答えて「そうしてもらえるほど私は私の部族の中で重要視される存在ではありません」といった。

すると預言者は皮紐を彼（殺人者を連行した男）に投げて「あなたの連れを連れて行きなさい」といった。

こうしてその彼は連を連れて立ち去ったが、彼が背を向けてその場を離れたときアッラーの使徒は「もし彼が彼を殺したならば彼も彼と同じような者だ（徳のない同類だの意）」といった。

ところが彼は戻って来てこういった。

アッラーの使徒よ、あなたが「もし彼が彼を殺したならば彼も彼と同じ様な者だ」といったことが私の耳に伝えられました。

私はあなたの命令に従って彼を捕まえていたというのに。

するとアッラーの使徒は「あなたの罪と弟の罪とを彼が（来世で）背負い込むことをあなたは望みませんか？（注）」といった。

そこで彼は答えて「アッラーの使徒よ、どうして望まないことがありましょうか！」といった。

すると彼は「そうならばそうしなさい」といった。

そこで彼は皮紐を投げ捨ててその男を自由にした。

（注）なぜその男が来世で二人の罪を背負い込むかというと、第一に一人の人間の生命を奪ったこと、第二には殺された者の兄弟にとっては身内の喪失と嘆きの原因をつくった罪

アルカマ・ビン・ワーイルは父からの伝聞として次のように伝えている
アッラーの使徒のもとにある男を殺した男が連れてこられた。
そこで預言者はキサースを被害者の相続人に許した。
そこで彼は殺人者の首に皮紐を巻いて引っぱり彼を連れて立ち去った。
こうして彼が背を向けてその場を離れたとき、アッラーの使徒は「殺す者も殺される者も火獄の中です（注 1）」といった。
それからある者がその男（被害者の相続人）の所にやって来てアッラーの使徒の言葉を伝えた。それで彼は犯人を解放した。
ところでイスマーイール・ビン・サーリムは「私はハビーブ・ビン・アブー・サービトにそのように伝えた」といった。
すると彼（ハビーブ）は「私にイブン・アシュワウは次のように語った」といった。
預言者は彼に犯人を赦すことを求めたが、彼は拒絶した（注 2）。

（注 1）この一文はムスリム同志が部族間抗争など非合法の戦闘で剣を交えることを戒めたものでここでは前後の脈絡とは直接関係がないように思える。
しかしこの偶然の言葉が伝えられて結果は犯人の解放となったものと考えられる。
なぜならば被害者の相続人は預言者の命を受けて報復の執行をしようとしていたのだから
（注 2）預言者はこの事件を計画的意図的な殺人とは見なかった。
彼は過失致死に近いものと考え報復刑は避けようとした。
しかし被害者の相続人は預言者の命に背いたとあれば注 1 の文は文字通りの意味に解釈できるケースとなるだろう

胎児の血の代金と過失致死または準過失致死の血の代金は加害者の父系親族が負うこと

アブー・フライラは次のように伝えている

フザイル族の二人の女性の内の一人がもう一人に石を投げつけてそれがもとで彼女は流産した。

そこで預言者は彼女の（流産した）胎児について健全な男の奴隷か女の奴隷を血の代金として与えるべしと判決を下した。

アブー・フライラは次のように伝えている

アッラーの使徒はリフヤーン族の女性の死産した胎児について健全な男の奴隷かまたは女の奴隷を血の代金として与えるべしと判決を下した。

それから被害者の胎児の母が死んだ。そこでアッラーの使徒は彼女の遺産は子供達と夫のものであり、また（胎児の）血の代金は加害者の女性の父系親族に負わされるべしと判決を下した。

アブー・フライラは次のように伝えている

フザイル族の二人の女性が互いに殺しあった。

そしてそのうちの一人が他方に石を投げつけて彼女とお腹の子供を殺してしまった。

それで彼ら（親族）はこのことをアッラーの使徒に訴え出た。

そこでアッラーの使徒は彼女の胎児の血の代金は男か女の健全な奴隷であると裁いた。

また殺された女性、つまり胎児の母の代金は加害者の父系親族が負うことと定めた。

そして彼はそれ（血の代金）を彼女の子供達と彼らと一緒にいる者に相続させた。

ところがハマル・ビン・ナービガ・フザリーは次のようにいった。

なぜ私は飲みもしない食べもしない喋りもしない物音も立てない者（注）に血の代金を支払うのですか？

そのような者に血の代金は支払われないと考えます。

するとアッラーの使徒は「この者は調子のよいサジュウ文体を口先だけでもて遊ぶ占い師の兄弟のようだ」といった。

（注）胎児のことでここでは出産して初声もあげていないのにの意

アブー・フライラは次のように伝えている

フザイル族の二人の女性が互いに殺しあった。

以下は前記ハディースと同じである。

しかしここでは「そして彼はそれを彼女の子供達と彼らと一緒にいる者に相続させた」の

一文は言及されていない。
またある者が「なぜ私達は血の代金を払わなければなりませんか？」といったとして伝え
その者がハマル・ビン・マーリクであるとして名指ししていない。

ムギーラ・ビン・シュウバは伝えている
ある女性がテントの支柱で彼女の夫の別の妻を殴り殺してしまった。
彼女はそのとき妊娠していた。そして二人の妻のうちの一人はリフヤーン族出身だった。
そこでアッラーの使徒は被害者への血の代金は加害者の父系親族が負うとし、またおなかの子供のそれは健全な奴隷一人とした。
すると加害者の父系親族の一人がこういった。
私達は飲みもしない食べもしない喋りもしない、物音も立てない者（胎児）に血の代金を支払うのですか？
そのような者に血の代金は支払われないと考えます。
そこでアッラーの使徒は「（彼の話しは）ベドウィン達が口先でもて遊ぶサジュウ詩歌のそれではありませんか？」といった。
そして彼は断然血の代金を彼らに課しました。

ムギーラ・ビン・シュウバは伝えている
ある女性がテントの支柱で彼女の夫の別の妻を殺してしまった。
それでこの事件がアッラーの使徒のもとに持ち込まれた。
それで彼は被害者への血の代金を加害者の父系親族に課した。
さて殺された女性はそのとき妊娠していたので胎児の血の代金としては健全な奴隷を一人支払うことを定めた。
すると加害者の父系親族の幾人かがこういった。
私達は食べもしない、飲みもしない、叫びもしない、物音も立てない者に血の代金を支払うのですか？
そのような者にには血の代金は支払われないと考えます。
そこでアッラーの使徒は「（あなた達の話しは）ベドウィン達が口先だけでもて遊ぶ調子のよいサジュウ詩歌のそれではありませんか？」といった。

同様のハディースが**マンスール**によって伝えられている。

同様のハディースが**マンスール**によって伝えられている。
しかしここでは「流産した」「この件が預言者のもとに提訴された」「健全な奴隷一人と判決された」「それをその女の保護者達に課した」など多少の表現上の違いがある。
またここでは「その女性の血の代金」の一節には言及されていない。

ミスワル・ビン・マフラマは伝えている

ウマル・ビン・ハッターブは人々に女性の流産に対する血の代金について尋ねた。

するとムギーラ・ビン・シュウバがこういった。

私は預言者がそのことに関して男か女の健全な奴隷一人を支払うことと裁いた現場を目撃しました。

そこでウマルは「あなたの証人となる者を私のところに連れて来なさい」といった。

こうしてムハンマド・ビン・マスラマが彼のために証言した。

刑罰の書

窃盗罪の刑罰とその刑罰が成立する最小額

アーイシャは次のように伝えている

　アッラーの使徒は四分の一ディーナール（注）かそれ以上の窃盗に及んだ場合に犯人（の手）を切断しました。

　（注）ディーナール金貨のこと

同様のハディースが**ズフリー**によって伝えられている。

アーイシャはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

　窃盗犯の手は四分の一ディーナールかそれ以上の窃盗でない限りは切断されない。

アーイシャはアッラーの使徒が次のように語ったところを聞いたとして伝えている

　人の手は四分の一ディーナールかそれ以上の窃盗でない限り切断されない。

アーイシャはアッラーの使徒が次のように語ったところを聞いたとして伝えている

　窃盗犯人の手は四分の一ディーナールかそれ以上の窃盗でない限りは切断されるべきでない。

同様のハディースが**ヤズィード・ビン・アブドッラー・ビン・ハード**によって伝えられている。

アーイシャは次のように伝えている

　アッラーの使徒の時代に盾の価値以下では、それが革製の盾または鉄製の盾であっても、窃盗犯人の手は切断されなかった。

　勿論その（盾の）双方は価値のあるものです。

同様のハディースが**ヒシャーム**によって伝えられている。

しかしアブドル・ラヒームとアブー・ウサーマの伝承では「それ（盾）はその当時としては価値のあったものである」と伝えている。

イブン・ウマルは次のように伝えている

アッラーの使徒は三ディルハム（注）の価値がある盾を窃盗した犯人の手を切断した。

（注）ディルハム銀貨のこと

同様のハディースが**イブン・ウマル**によって伝えられている。
しかしここでは伝承者によって若干の表現上の違いがある。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

窃盗者にアッラーの呪あれ。
一個の卵を盗んでもその者の手は切断される。
また一条のロープを盗めばその者の手は切断される。

（注）一個の卵「バイダ」は鉄兜という別な意味もある。
またロープ「ハブル」は船のロープであるとする解釈もできる。
鉄兜も船のロープも非常に高価なものだからこの解釈によれば判決としては矛盾しない。
しかし文脈の趣旨からみるとあまりしっくりとしない。
一方文字通りに解釈すると卵一ケで手首が切断されてしまうことになる。
そこでこのハディースは全体として比喩的訓戒的なものと考えられる。
即ち卵にせよ鉄兜にせよ一条のロープにせよ船舶用ロープにせよ人間の手に比べればいずれもつまらないものである。
こうしたつまらない物と引換えに手首を失うことはもっとつまらないと云わんとしているというわけ

同様のハディースが**アアマシュ**によって伝えられている。しかしここでは次のような表現上の違いがある

「もしロープを窃盗すれば、またもし一個の卵を盗んだとしても」

犯人が名門出であってもなくても窃盗犯の手首は切断される。刑罰に対する仲裁は禁止されていること

アーイシャは次のように伝えている

クライシュ族の最大の心配事は窃盗を犯したマフズーム家の女性のことであった。
それで彼らは「誰が彼女についてアッラーの使徒に説明したらよいか？」といっていた。
そしてまた彼らは「この任を大胆にやれるのはウサーマ以外をおいて他にない。
なぜなら彼はアッラーの使徒にこよなく愛されているからだ」などといっていた。
こうしてウサーマが預言者に話した。
するとアッラーの使徒はこういった。
あなたはアッラーが定めた刑罰にとりなしをするのですか？
それから預言者は立ち上がりこう説教した。
人々よ、あなた方に先だつ人々は滅ぼされました。
彼らは名門出の者が窃盗を犯したならその者を見逃し、弱い立場の者が窃盗したときはその者に刑罰を執行しました。
アッラーに誓って仮にムハンマドの娘のファーティマが窃盗を犯したとしても私は彼女の手首を切断するでしょう。

預言者の妻の**アーイシャ**は次のように伝えている

かつて預言者の時代に（マッカ）征服の戦いの時でしたが窃盗を働いた女性のことがクライシュ族の最大の心配事でした。
それで彼らは「誰がアッラーの使徒に彼女について説明したらよいか？」と話しあっていました。
そして彼らは「この大任を大胆にやれるのはウサーマ・ビン・ザイド以外にはありえない。
なぜなら彼はアッラーの使徒に愛されているからだ」といった。
それでアッラーの使徒のもとに彼女が連れてこられ、彼女のことについてウサーマが彼に話をした。
すると即座に、アッラーの使徒の顔色が変り、そして「あなたはアッラーが定めた刑罰にとりなしをするのですか？」といった。
それでウサーマは彼に「アッラーの使徒よ、私をお赦し下さい」といった。
それからアッラーの使徒は日が暮れたとき、立ち上がり、説教をした。
彼はアッラーに相応しい称讃の言葉を捧げた後にこういった。
さて、人々よ、あなたがたに先行する人々は、滅ぼされました。
彼らは、名門の出の者が窃盗を犯したならば、彼を見逃し、弱い立場の者が窃盗を犯したならば、彼には刑罰を執行しました。
私の命を手中にする御方（アッラー）に誓って、たとえ、ムハンマドの娘のファーティマが窃

盗を犯したとしても、私は彼女の手を切断するでしょう。
それから、彼は窃盗を犯したその女性に関して命令を下し、それで彼女の手は切断されました。
さてアーイシャはつづいてこういった。
後に、彼女は立派に改悛した。そして、結婚をして、その後、私のもとによく来ていた。
それで私が彼女の必要なお願いをアッラーの使徒に伝えていました。

アーイシャは次のように伝えている
マフズーム家出身の女性が（人々から）品物を借りていたが、それを彼女は否定していた（注）。

さてそこで預言者は彼女の手を切断することを命じた。
彼女の家族がウサーマ・ビン・ザイドの所にやって来て（預言者に彼女のとりなしをしてくれるように）彼に頼んだ。
そこで彼はアッラーの使徒に彼女について話した。以下は前記ハディースと同じである。

（注）このことは彼女が窃盗の常習犯である説明のための傍証であり、手首切断の直接の原因説明ではない。
手首切断の原因は前述の窃盗行為である

ジャービルは次のように伝えている
マフズーム家出身の女性が窃盗を働いた。
それで、預言者のもとに彼女が連れてこられた。
そのとき、彼女は預言老の妻ウンム・サラマに助けを求めた。
しかし、預言者は「アッラーに誓って、仮にムハンマドの娘のファーティマが窃盗を犯したとしても、私は彼女の手を切断したでしょう」といった。
そして彼女の手は切断された。

姦通の刑罰

ウバーダ・ビン・サーミトはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

私から（教えを）受け取りなさい。私から（教えを）受け取りなさい。
確かに、アッラーは彼女達に道をお定めになった。
未婚者どうしが私通を行なった場合は、100 回の鞭打ちの刑の後、一年間の追放となる。
しかし、既婚者どうしが姦通を行なった場合は、100 回の鞭打ちの刑の後、石打ちの死刑となる。

同様のハディースが**マンスール**によって伝えられている。

ウバーダ・ビン・サーミトは次のように伝えている

アッラーの預言者は啓示を受けたとき、そのために非常な苦痛を受け、彼の顔色が変わったものでした。
さてある日、彼は啓示を受けたが、同様の苦痛を受けていた。
そして彼がそれから開放されたとき、彼はこういった。
私から（教えを）受け取りなさい。
確かに、アッラーは彼女達に道をお定めになった。
既婚者どうし、または未婚者どうし（が姦通した場合）だが、既婚者の場合は 100 回の鞭打ちの刑の後、石打ちの死刑であり、未婚者の場合は 100 回の鞭打ちの刑の後、一年間の追放である。

同様のハディースが**カターダ**によって、伝えられている。
しかしここでは以下の様な違いがある。
未婚者の場合は、鞭打ちの刑の後、追放の刑である。
また既婚者の場合は鞭打ちの刑の後、石打ちの死刑である。
しかしここでは一年間とも、100 回とも述べられてはいない。

既婚者の姦通罪は石打ちの死刑

アブドッラー・ビン・アッバースは次のように伝えている

ウマル・ビン・ハッターブはアッラーの使徒の説教台に座り次のようにいった。
アッラーはムハンマドを真理を携えてお送りなさった。
そして、彼に啓典をさずけた。
彼に下された啓示の中には石投げの死刑に関する一節があった。
私達はそれを読み、記憶し、理解した。そして、アッラーの使徒は石打ちの死刑を執行し、また私達も彼の後、石打ちの死刑を執行した。
しかし、私は、時が経つうちに、人々の中で、「私達はアッラーの啓典中に石打ちの刑の一節を見付けません」などといい出す者が出てきて、アッラーが下した義務をないがしろにしていて人々は道に迷ってしまうではないかと心配しています。
だがアッラーの啓典の中に記されている石打ちの死刑は確かに姦通を犯した者が男であれ女であっても、まず既婚であり、なおかつその確証が実証された場合（注 1）、また（女性の場合は）妊娠している場合（注 2）、または本人が自白によって自ら認めた場合（注 3）でその者にとってはそれは（石打ちの死刑は）義務なのである。

（注 1）四人の信頼できる証人（狂人、奴隷、少年、女性等は排除）によって証言される必要がある

（注 2）夫や主人（奴隷の場合）がいないのに妊娠した場合であるがウマルの見解ではこれによって充分に姦通罪が成立するとしている。
しかしマーリキー法学派を除いた他の学派の大部分の学者は単に妊娠だけでは姦通罪は成立しないと考えている。
即ちこの他に自白か証人かが必要要件となるとしているわけだ

（注 3）外的圧力を一切受けない自由意志による自白であることが決め手となる

同様のハディースが**ズフリー**によって伝えられている。

姦通を自白した者について

アブー・フライラは次のように伝えている

ムスリムの一人がモスクの中に居たアッラーの使徒のもとにやって来て、彼を呼んで「私は姦通の罪を犯しました」といった。

しかし預言者は彼に顔を背むけた。

すると彼は預言者の顔の方に向き直り、「アッラーの使徒よ、私は姦通の罪を犯しました」といった。

そこでまた預言者は彼から顔を背むけた。

こうして、同じ事が四回繰り返された。

そして、彼が自分自身で四回の証言を終えたとき、アッラーの使徒は彼を呼んで「あなたは気違いですか？」といった。

すると彼は「いいえ」と答えた。

それから預言者は「あなたは結婚していますか」と尋ねた。

そこで彼は「はい」と答えた。

すると預言者は人々に「彼を連れていき、石打ちの死刑にしなさい」といった。

さてイブン・シハーブは、シャービル・ビン・アブドッラーから聞いた者が私に次のように語った」としてこう伝えている。

私は彼に石打ちの死刑を行なった者の一人です。

私達は墓地の礼拝場所で石打ちの死刑を執行した。

しかし、石の尖った部分が彼に当たり苦しめたとき、彼は逃げ出してしまった。

だが、私達はハッラ（近郊の黒石の原）で彼に追い付き、彼に石打ちの死刑を執行した。

前記のハディースが**イブン・シハーブ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

同様のハディースが**ズフリー**によって伝えられている。

ジャービル・ビン・サムラは次のように伝えている

預言者のもとに上衣を着けていない筋肉質の背の低い男が連れられてこられたとき、私はその男つまりマーイズ・ビン・マーリクを見た。

そして彼は自ら姦通の罪を犯したと四回証言した。

そこでアッラーの使徒は「たぶん（接吻をしたか、抱擁をしたかそんなところであろう）」といった。

ところが彼は「いいえ、アッラーに誓って、善行から見放されたこの者め（卑下した自分のこと）が確かに姦通の罪を犯しました」といった。

そこで預言者は彼を石打ちの死刑にした。

それから彼は演説を行なってこういった。
「気を付けなさい。
私達がアッラーの道のためにジハードに出て不在のとき、一人の者が居残った。
彼は雄山羊のような欲情に満ちた声を出し、少量のミルクを（主人が留守中の夫人達の一人に）与えていた。
アッラーに誓って、アッラーが私にその者を捕まえる力をお与え下さるならば、私は彼を他への見せしめにきっと厳罰に処するのだが」

ジャービル・ビン・サムラは次のように伝えている
預言者のもとに腰巻しか着けていない筋肉質で髪を振り乱した背の低い男が連れてこられた。
その男は姦通の罪を犯していたが、アッラーの使徒は彼を二度追い返した。
それから、預言者は彼に関して命令を下し、彼は石打ちの死刑にされた。
それから、彼は演説を行なってこういった。
「私達がアッラーの道のためにジハードに出ているときはいつもきまって一人の者が居残り、彼は雄山羊のような欲情に満ちたなき声を出し、少量のミルクを（主人が留守の）夫人達の一人に与えている。
アッラーに誓って、アッラーが私にその者を捕まえる力をお与え下さるならば、私はきっと彼を厳罰に処するに違いない」
ところで伝承者の一人サイード・ビン・ジュバイルは「預言老は彼を四回追い返した」と伝えている。

同様のハディースが**ジャービル・ビン・サムラ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは伝承者によって以下の点で違いが見られる

預言者は彼を二度または三度追い返した。

イブン・アッバースは次のように伝えている
預言者はマーイズ・ビン・マーリクに「あなたについて私に知らされた事は本当ですか？」といった。
すると彼は「私についてあなたにどんなことが知らされましたか？」といった。
それで彼は「私はあなたが某家の奴隷娘と姦通に及んだと知らされました」といった。
すると彼は「はい」と答えて四回の証言をした。
そこで、預言者は彼について命じ、彼は石打ちの死刑にされた。

アブー・サイードは次のように伝えている

マーイズ・ビン・マーリクと呼ばれるアスラム族出身の男がアッラーのもとへやって来て、「私は姦通の罪を犯しました。ですから、私を罰して下さい」といった。
だが預言者は幾度も彼を追い返した。
それから、預言者は人々に（彼の精神状態について）尋ねた。
すると彼らは次のように答えた。
私達は彼の病気について何も知りませんが、ただ何か刑罰が執行されない限りは自分自身を救い出すことができないと彼自身が考えこむような間違いを犯したことだけは確かなようです。
それから彼（マーイズ）はアッラーの使徒の所に戻り、アッラーの使徒は私達に、彼を石打ちの死刑にすることを命じた。
（そこで）私達はバキーウ・ガルカド（注 1）へ彼を連れていった。
そのとき私達は彼を縛りもせず、また彼のために墓穴も掘らなかった。
そして私達は彼に骨や、粘土の塊や陶器の破片などを投げつけた。
すると突然、彼は逃げ出し、私達は彼の後を急いで追いかけた。
それから彼はハッラ（黒石の原）まで逃げて来て、そこで（私達に追い付かれ）立ち止まった。
それで私達はハッラの石を彼が動かなくなるまで、彼に投げ付けた。
それから、アッラーの使徒は夜の礼拝のとき次のような説教を行なった。
私達がアッラーの道のために聖戦に出ていたときはいつも、私達の関係者のある者が後に居残り、彼は種山羊のような情欲に満ちた鳴き声をあげていた。
私はそのようなことをした者が私のもとに連れてこられたなら（見せしめのためにも）彼を厳しく処罰しないでは置かない。
ところで預言者は彼（先の姦通した男）のために（アッラーに）赦しを乞うこともなく、また彼を呪うこともなかった（注 2）。

（注 1）マディーナの墓のある所

（注 2）呪わなかった理由は既に右投げによって処刑されているので彼の罪は償われ魂は浄化されているから、公式に赦しを乞わなかった理由は人々が預言者の赦しをあてにして姦通罪に及ばないため

ダーウードは前記と同様のハディースを伝えている。しかしここでは次のように云っている

それから預言者は夜の礼拝のために立ち上がりまずアッラーを讃えてからこう云った。
さて人々の状態はどうなっているのでしょうか？

我々が聖戦中に我々の内で一人だけ居残って種山羊のような情欲に満ちた声を出す者がいる。

ダーウードは前記と同様のハディースを伝えているがスフヤーンの伝えたハディースでは次のようになっている。

そこで彼は姦通の罪を犯したと三回証言した。

スライマーン・ビン・ブライダは父からの伝聞として次のように伝えている

マーイズ・ビン・マーリクが預言者のもとに来て「アッラーの使徒よ、私を浄めて下さい」といった。
預言者はそれに答えてこういった。
「あなたに災いあれ。
帰りなさい。
そして、アッラーに赦しを乞いなさい。
そして、彼のもとに改悛して戻りなさい」
それで彼はあまり遠くない所へ引き下った。
それから、彼はまたやって来て「アッラーの使徒よ、私を浄めて下さい」といった。
預言者はそれに答えて「あなたに、災いあれ。
帰りなさい。
そして、アッラーに赦しを乞いなさい。
そして彼のもとに改悛して戻りなさい」といった。
それで彼はあまり遠くない所に引き下った。
それからまた彼はやって来て「アッラーの使徒よ、私を浄めて下さい」といった。
それで預言者は前と同じ様に答えた。
こうして、四回目には、アッラーの使徒は「あなたの何を私が浄めるのですか？」と彼にいった。
すると彼は「姦通の罪です」と答えた。
そこでアッラーの使徒は彼が気違いかと人々に尋ねた。
ところが彼は気違いではないと知らされた。
そこで預言者は彼がワインを飲んだかを尋ねた。
すると一人の男が立ち上がり、彼の口臭をかいだ。
しかし、彼からワインの臭いはなかった。
そこでアッラーの使徒は「あなたは姦通の罪を犯しましたか？」と尋ねた。
すると抜は「はい」と答えた。
それで彼は彼について命令を下した。

そして、彼は石打ちの死刑にされた。
人々は彼（マーイズ）の事に関して、二つのグループに分かれた。
彼らのある者は「彼はぐるりと取り巻かれた過ちによって、滅びたのだ」といっていた。
また別のある者はこういった。
マーイズの改悛よりも立派な改悛はない。
彼は預言者のもとに来て、彼の手を彼（預言者）の手に置き、を「私を石で殺して下さい」といったといったのだから。
彼らはそのように二日も三日も（口論）しつづけた。
それから、アッラーの使徒が彼らが座っている所へやって来て、挨拶をして座ってから「マーイズ・ビン・マーリクのために（アッラーに）赦しを乞いなさい」といった。
それで彼らは「アッラーがマーイズ・ビン・マーリクをお赦しになりますように」といった。
それからアッラーの使徒はこういった。
「確かに、彼は改悛した。もしその報酬が人々の間に分けられたとしても、それは人々に充分にゆきわたったに違いない」
さてそれからアズド族から分かれたガーミド族出身の女性が彼のもとにやって来て、「アッラーの使徒よ、私を浄めて下さい」といった。
そこで彼はそれに答えてこういった。
「あなたに、災いあれ。
帰りなさい。
そしてアッラーに赦しを乞いなさい。
そして彼のもとに改悛して戻りなさい」
すると彼女は「あなたはマーイズ・ビン・マーリクを追い返したように私を返そうと思っているようです」といった。
そこで彼は「あなたに何がありますか？」といった。
すると彼女が姦通の結果妊娠しているといった。
それで彼は「あなたがですか？」と聞きなおした。
すると彼女は「はい」と答えた。
それで彼は「あなたのおなかにいる者を生むまではあなたは罰せられません」と彼女にいった。
そして、彼女が出産するまでアンサールの一人が彼女の世話をした。
さてその後そのアンサールが預言者の所に来て、「ガーミド族の女性は無事に、出産しました」といった。
すると彼（預言者）は「でも、私達は彼女を石打ちの死刑にはできません。
私達は彼女の子供を授乳者のいない子にはできません」といった。
そこでアンサールの一人が立ち上がり、「アッラーの預言者よ、子供の養育は私に任せて

下さい」といった。
こうして預言者は彼女を石打ちの死刑にしました。

アブドッラー・ビン・ブライドは父からの伝聞として次のように伝えている
マーイズ・ビン・マーリク・アスラミーがアッラーの使徒のもとへやって来てこういった。
「私は本当に私自身非道な行為をしました。
私は姦通の罪を犯しましたので、あなたが私を浄めて下さることを望みます」
だが預言者は彼を追い返した。
そして、次の日に、彼は再び預言者のもとへ来て、「アッラーの使徒よ、私は本当に姦通の罪を犯しました」といった。
だが、彼は彼を二度目もまた追い返した。
そして、アッラーの使徒は彼の一族のところに人を送り、「あなた達は、彼の精神に何か異常があることをご存知ですか？」と尋ねた。
だが彼らは「私達が見る限りでは、彼は私達の間で充分に知性があるとしか思われません」といった。
ところで、彼が三度目にまたやって来たときも、預言者は彼らの所に人を送り、彼について尋ねた。
すると彼らは、「何も彼に問題はなく、知性にも心配はない」と彼に知らせた。
それから、彼が四度目にやって来たとき（はじめて）彼のために墓穴が掘られ、それで彼を石打ちの死刑にすることを預言者は命じた。
それで、妓は石打ちの刑にされた。
さて伝承者はつづけてさらに次のように伝えている。
そこへ、ガーミド族の女性が来て「アッラーの使徒よ、私は本当に姦通の罪を犯しました。私を浄めて下さい」といった。
だが彼は彼女を追い返した。
次の日、彼女はこういった。
「アッラーの使徒よ、なぜ私を追い返すのですか。
多分、あなたはマーイズを追い返したように、私を追い返そうとしているのでしょうが、アッラーに誓って、私は本当に妊娠しています」
そこで彼は「もし、あなたが帰らずにこのままそのことを主張するならば、おなかの子供を生むまではともかく立ち去りなさい」といった。
さてその後、彼女は子供を生んだとき、子供をぼろ布に包んで連れてきて、「この子が私が生んだ子供です」といった。
それで彼は「行きなさい。
そして、子供を乳離させるまで、育てなさい」といった。
それから、彼女は子供を離乳させた後に、子供を連れて彼のところに来た。

そのとき、子供の手には一切れのパンが握られていた。
そして、彼女は「アッラーの預言者よ、これがあの子です。
私はこの子を離乳させました。
そしてこの子は普通の食べ物を食べました」といった。
すると預言者は、子供をムスリム達の一人の男に預けた。
それから、彼は彼女に刑を命じた。
彼女のために胸までの深さに穴が掘られた。
そして彼は人々に命じ、彼らは彼女を石打ちの死刑にした。
さてその時ハーリド・ビン・ワリードは石を持って近づき、彼女の頭に投げつけた。
そしてハーリドの顔に血がかかったとき、彼は彼女を罵しった。
するとアッラーの預言者は彼が彼女を罵った声を聞きつけてこういった。
「ハーリドよ、落ち着きなさい。
私の魂がそのみ手の中にあるお方に誓って、確かに、彼女は改悛したのです。
たとえ、悪徳徴税人でも改悛したならば、彼は赦されるのですよ」
それから、彼は彼女に関して、命令を下し、彼女のために（葬儀）礼拝を行ない、そして、彼女は手厚く埋葬された。

イムラーン・ビン・フサインは次のように伝えている

ジュハイナ族出身の女性がアッラーの使徒のもとへやって来た。
彼女は姦通により妊娠していた。
そして、彼女は「アッラーの預言者よ、私は罰せられるべき事を行ないました。
私に刑罰を執行して下さい」といった。
そこでアッラーの預言者は彼女の保護者を呼びよせて彼にこういった。
「妊娠している期間は彼女に優しくしてあげなさい。
そして、彼女が出産した後で、彼女を私のもとへ連れてきなさい」
それで彼（保護者）はその通りにした。
それから、アッラーの使徒は彼女に判決を下し彼女の服が彼女の体にしっかりと巻き付けられた。
（処刑の時に体が乱れないため）
それから、彼は彼女に関して命令を下し、彼女は石打ちの死刑にされた。
そして、彼は彼女のために葬儀の礼拝を行なった。
そのとき、ウマルは彼に「アッラーの預言者よ、あなたは彼女のために礼拝をするのですか。
彼女は姦通を犯しましたよ」といった。
すると彼はこういった。
「彼女は確かに立派に改悛しました。

もしその報酬がマディーナの住民 70 人の間で分けられたとしても、それは彼らには充分なほどでしょう。
あなたは彼女が己れの魂を取り出してアッラーに差し出したことよりも立派な改悛を見いだすことができますか？」

同様のハディースが**ヤヒヤー・ビン・アブー・カスィール**によって伝えられている。

アブー・フライラとサイド・ビン・ハーリド・ジュハニーは次のように伝えている
ベドウィンの一人の男がアッラーの使徒のもとへやって来て「アッラーの使徒よ、わしはあなたがどうかわしをアッラーの啓典によって裁く事を神かけてお願い申すだ」といった。
すると彼よりも利口な訴訟相手の方がこういった。
「そのとおり、私達の間をアッラーの啓典によってお裁き下さい。
そしてまず私に喋ることをお許し下さい」そこでアッラーの使徒は「宜しい、いいなさい」といった。すると彼はこういった。
「私の息子はこの者の家に雇われていました。
そして、彼の奥さんと姦通の罪を犯しました。
私は息子が石打ちの死刑を受けなければならないと知らされました。
そこで私は息子の身代金として、100 頭の羊と女奴隷を差し出しました。
そして、私は知識ある方々に（このことが罪の償いに有効であるかを）尋ねましたところ、彼らは私の息子には 100 回の鞭打ちと一年間の追放が課せられ、女性には既婚であるので石打ちの死刑が課せられると私に知らせました」
するとアッラーの使徒は次のように語った。
「私の魂を手中にするお方に誓って、私があなたがた二人の間をアッラーの啓典で裁きます。
女奴隷と羊はあなたに返されます（注）。
そして、あなたの息子は 100 回の鞭打ちと一年間の追放によって罰せられます。
ウナイス（ビン・ズハーク・アスラミー）よ、明日の朝に、その女性のところに行き、もし彼女がそのことを自白したならば、彼女を石打ちの死刑にしなさい」
さて彼（ウナイス）は朝になって、彼女のところに行ったが、彼女はそのことを自白した。
そこで、アッラーの使徒は彼女に関して、命令を下し、彼女は石打ちの死刑にされた。

（注）姦通の罪は金であがなえないの意
同様のハディースが**ズフリー**によって伝えられている。

姦通の罪における、ユダヤ人および庇護民（キリスト教徒）の石打ちの死刑について

アブドッラー・ビン・ウマルは次のように伝えている

アッラーの使徒のもとへユダヤ人の男性と女性が連れてこられた。

彼ら二人は姦通の罪を犯していた。

そこでアッラーの使徒はユダヤ人達の所に出かけて行き、「あなた達の旧約聖書には姦通を犯した者について何と書いてありますか？」と尋ねた。

すると彼らはこういった。

「私達は二人の顔を黒く塗り、（ろばに乗せて）運び、二人を背中合わせにして（町中）引っぱり廻します」

そこで彼は「もしあなた達が正しければ、旧約聖書を持って来なさい」といった。

それから彼らはそれを持ってきて、読み始めた。

そして、彼らが石打ちの死刑の一節まで来たとき、読んでいた少年は彼の手をその一節に置いてかくした。

そして彼は手元にある部分とそれに続くところを読んだ（その一節を飛ばして読んだ）。

そのとき、預言者と一緒に居たアブドッラー・ビン・サラームは「手を上げるように彼にお命じなさい」といった。

それで少年は手を上げたが手の下には石打ちの死刑の一節があった。

それでアッラーの使徒は彼ら二人に関して、命令を下した。

そして、彼ら二人は石打ちの死刑にされた。

さてアブドッラー・ビン・ウマルはさらにつづけてこう伝えている。

私は彼ら二人に石打ちの死刑を行なったものの一人だが、私は彼（ユダヤ人）が身を挺して投げられる石から彼女を守るところを見た。

イブン・ウマルは次のように伝えている

アッラーの使徒は姦通の罪を犯したユダヤ人の男女を石打ちの死刑にした。

それはユダヤ人達がアッラーの使徒のもとへ二人を連れてきて……。

以下は前記ハディースと同様である。

イブン・ウマルは次のように伝えている

ユダヤ人達がアッラーの使徒のもとへ彼らの仲間の男と女を連れてきた。

二人は姦通の罪を犯していた。

以下は前記ハディースと同様である。

バラーウ・ビン・アーズィブは次のように伝えている

預言者のそばを顔を黒く塗られ、鞭打ちにされたユダヤ人が通った。

それで預言者は彼ら（ユダヤ人達）を呼び「あなた達の啓典に姦通を犯した者への刑罰がこのように書いてあるのですか？」と尋ねた。

すると彼らは「その通りだ」といった。

そこで彼は彼らの中の学者の一人を呼んでこういった。

「私は、モーゼに旧約聖書を下したアッラーの御名において、たずねます。

あなた達の啓典で姦通を犯した者への刑罰が書かれていますか？」

すると彼は答えて次のように語った。

「いいえ。

でももし、あなたがこのようにアッラーの御名によって、私に尋ねなければ、私はあなたに知らせはしないでしょう。

そもそも私達はそれが、石打ちの死刑であったと見ています。

つまりそれ（姦通罪）が私達の金持ちの間で多くなりますと、私達は裕福な者を（その罪で）捕まえたとしても私達は彼をみのがしました。

そして私達が質しい弱い者を捕まえたときには、彼に対してその刑罰を執行していました。

そこで、私達はこういいました。

身分の高い富める者にも、身分の低い貧しい者にも私達が執行できる処罰を決めようではないかと。

そして、私達は石打ちの刑の代わりに顔を黒く塗ることと、鞭打ちとを決めました」

そこでアッラーの使徒は「アッラーよ、私は彼らがあなたの命令を反古にして捨て去った後に、それを最初に蘇らせる者です」といった。

そして、彼は命令を下して、彼（罪人）は石打ちの死刑にされた。

そこで、アッラーは次のような啓示を下した。

「使徒（ムハンマド）よ、互いに不信を競う徒輩のために心を痛めることはない……「もし君達（ユダヤ人）に（たまたま）それ（ユダヤの律法と一致するもの）が与えられたならばその時はそれを受け入れればよいさ（注）」（クルアーン第 5 章 41 節）

かくして彼（ユダヤ人）はこう云っている。

「あなた達はムハンマドのところに行きなさい。

そしてもし彼があなた達に、顔を黒く塗ることと、鞭打ちを命じたならばそれを受け入れなさい。

だがしかし、あなた達に石打ちの死刑で裁いたならば、用心しなさいよ」。

そこで、またアッラーは次のように啓示を下した。

「もし、アッラーが下したもの（聖典）で裁判しない者がいれば彼は不信心者である」（第 5 章 44 節）

「アッラーが下したもので裁判しないものは、不義を行なう者である」（第 5 章 45 節）

「アッラーが下したものによらず、裁く者は主の裁きに背く者である」（第 5 章 47 節）
これらすべての節は不信者達についてである。

（注）「」内はユダヤ人が仲間同志で話している会話

同様のハディースが**アアマシュ**によって伝えられているが、しかしここでは「そして預言者は命令を下し、彼（罪人）は石打ちの死刑にされた」まで言及したがそれ以下の啓示が下った話については記されていない。

ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように伝えている

預言者はアスラム族出身の男とユダヤ人の男とその相手の女を石打ちの死刑にした。
同様のハディースが**イブン・ジュライジュ**によって伝えられているが、ここではわずかな表現上の違いがある。

アブー・イスハーク・シャイバーニーは次のように伝えている
私はアブドッラー・ビン・アブー・アウファーに「アッラーの使徒は石打ちの死刑を行ないましたか？」と尋ねた。
すると彼は「はい」と答えた。
そこで私は「それは光の章が下された後ですか、それとも、前ですか（注）」と尋ねた。
すると彼は「私は知りません」と答えた。

（注）光の章の第二節にある「姦通した男と女は、それぞれ 100 回鞭打て」に付いての質問であるがこれは未婚者に対する姦通罪の刑罰であり既婚者のそれはこの章の一節が下った後に預言者によって指示されたと云われている

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
あなた方の女奴隷が姦通を犯し、彼女の姦通が証明されたならば、刑罰として彼女を鞭打ちなさい（注）
だがその後は彼女を非難してはならない。
それから、また彼女が姦通を犯したならば、刑罰として彼女を鞭打ちなさい。
だがその後は彼女を非難してはならない。
それからまた彼女が三度目の姦通を犯し、彼女の姦通が証明されたならば、そのときは彼女を売り払ってしまいなさい。
（彼女の状態を説明して）たとえ、髪の毛のように細いロープの値段であっても（たとえ安い値であってもの意）。

（注）奴隷は社会的に弱者なので姦通罪を犯したとしても自由人よりも軽罰で済む。
未婚の場合は 50 回の鞭打ちで既婚の場合でも石投げの死刑にされることはない。
単に鞭打ちにされるだけである

同様のハディースが**アブー・フライラ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは「彼女が三回姦通したならば鞭打て」とありまた「それから四度目には彼女を売り払いなさい」とある。

アブー・フライラは次のように伝えている
アッラーの使徒は姦通を犯した結婚していない女奴隷について尋ねられて次のように答えた。
もし彼女が姦通を犯したならば、彼女を鞭打ちの刑にしなさい。
それから、また彼女が姦通を犯したら、彼女を鞭打ちの刑にしなさい。
それから、また彼女が姦通を犯したならば、彼女を鞭打ちの刑にしなさい。
それから彼女を売りなさい。
たとえ、弁髪のようなロープの値段であっても（たとえ値段が安くても）。
さて伝承者の一人イブン・シハーブは次のように伝えている。
（その女奴隷を売ることが）三回目の姦通の後に彼が述べたのか、あるいは四回目の後かは私にはわかりません。

また彼は「弁髪のようなロープ」の一文を「ロープ」そのものの意味として伝えた。
同様のハディースが**アブー・フライラ**と**ザイド・ビン・ハーリド・ジュハニー**によって伝えられているが、イブン・シハーブの言葉「弁髪のようなロープをロープそのものの意味とする」という部分は伝えていない。

同様のハディースが**アブー・フライラ**と**ザイド・ビン・ハーリド・ジュハニー**によって別の伝承者経路を経て伝えられているが女奴隷を売り払うことが三回目の姦通の後に述べられたのかそれとも四回目の後かはっきりしていない。

出産による刑罰の延期

アブー・アブドル・ラフマーンは次のように伝えている

アリーは演説して次のようにいった。

人々よ、あなた達の奴隷達に刑罰を執行しなさい。

彼らの内の既婚者にも、また未婚者にも。

さて以前、アッラーの使徒の女奴隷（注）が姦通を犯した。

そこで彼は彼女を鞭打ちの刑にすることを私に命じた。

しかし彼女は最近出産したばかりであったので私が彼女に鞭打ちの刑を行えば彼女を殺してしまうのではないかと恐れていました。

そこで私はその事を預言者に話したところ彼は「あなたは良いことをしました」といった。

（注）彼女は預言者の家内奴隷ではなく戦争捕虜として国庫に送られて来た奴隷である。預言者は国家元首としてこの国庫管理の最高責任者であったので「アッラーの使徒の女奴隷」と便宜的に簡略表現されているわけである

同様のハディースが**スッディーユ**によって伝えられている。

しかしここでは「彼らの内の既婚者にもまた未婚者にも」の一文は記されていない。

しかし次の一文が加えられている彼女の健康がほぼ戻るまでは彼女をそのままにしておきなさい。

飲酒に対する刑罰

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

預言者のもとに葡萄酒を飲んだ男が連れてこられた。

預言者はその男を二本のナツメヤシの枝で 40 回打った。

さてまた（第一代カリフの）アブー・バクルもそのように行った。

しかしウマルがカリフになったとき、彼は人々に意見を求めた。

するとアブドル・ラフマーンは「飲酒に対する最も軽い刑罰であっても 80 回にしなさい」といった。

そこでウマルはそのように命じた。

同様のハディースが**アナス**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

アッラーの預言者は飲酒の刑罰としてナツメヤシの枝とスリッパでたたいた。

それからアブー・バクルは 40 回の鞭打ちを行った。

そしてウマルがカリフになって人々が村々や都市へと広がって住む（注 1）ようになったとき、彼は教友達に次のようにいった。

飲酒に対する鞭打ちの刑についてあなた達はどのように考えますか？

するとアブドル・ラフマーン・ビン・アウフは答えて「最も軽い刑罰（注 2）に決めるべきだと思います」といった。

それでウマルは 80 回の鞭打ちを執行することにした。

（注 1）大征服によってアラブ人がシリヤやイラクをどの葡萄がよくできる（従って葡萄酒の産地）地方に移り住むようになったことを示している。

その結果ウマルの時代は飲酒かかなりアラブ人の間に急速に広まったと思われる

（注 2）窃盗が手首切断、姦通が鞭打 100 回、中傷罪が 80 回、従って最も軽い刑罰とは 80 回の鞭打ちということになるわけである

同様のハディースが**ヒシャーム**によって伝えられている。

アナスは次のように伝えている

預言者は飲酒の罰としてスリッパとナツメヤシの枝で 40 回たたいた。

以下は前記ハディースと同じであるが「村々や都市」の一節は述べられていない。

フダイン・ビン・ムンゼルは伝えている

私は（第三代カリフ）ウスマーン・ビン・アッファーンのもとにワーリド（注 1）が（呼びつけられて）連れてこられたところを見ました。
そのわけは彼はかつて（人々を率いて）日の出前の礼拝二ラカートを行ったが（酒に酔っていたためか）彼は「あなた達のためにラカート数を増やしましょうか？」などといった（注 2）。

さてそこで二人の男が証言することになった。
一人はウムラーンといい彼は「彼（ハーリド）は葡萄酒を飲んだ」と証言した。
もう一人は「彼が吐いているところを見た」と証言した。
するとウスマーンは「それ（酒）を飲まずに吐くことはあり得ない」といった。
そして彼は「アリーよ、立ちなさい。そして彼を鞭打ちなさい」といった。
するとアリーは「ハサンよ、立ちなさい。そして彼を鞭打ちをさい」といった。
するとハサンは次のようにいった。
その（カリフという）涼しさを受けている者（つまりウスマーン）がその暑さをも受けもったら（注 3）。

（そのときあたかもアリーは息子のハサンに怒っていたようでしたが）アリーはこういった。
アブドッラー・ビン・ジャアファルよ、立ちなさい。
そして彼を鞭打ちなさい。
それで彼（アブドッラー）は彼を鞭打ったがアリーは 40 回まで数えたところで「それまで」といった。
そして彼はこういった。
預言者は 40 回鞭打ち、アブー・バクルも 40 回鞭打ち、ウマルは 80 回の鞭打ちを執行した。
これらすべてはスンナ（注 4）の範疇に入るのだが私にとってはこれ（40 回）が最も好ましい。

（注 1）ワリード・ビン・ウクバのことであるが彼は軍営都市クーファの長官に就任していた。
しかし彼は酒を飲んで礼拝を先導するなど行状が悪く人々によって訴えられカリフのもとに連行された
（注 2）日の出前の礼拝は二ラカートに決っているがハーリドは酒に酔って四ラカートを行う。
当時人々は、地方長官を礼拝時のイマームとしていたので彼は人々に訴えられた

（注 3）この表現自体はアラブの諺である。
しかしここではウスマーンがウスマーンの身内のウマイヤ家の者がいやな鞭打ちを執行したらよいのだといった不満表明と思われる
（注 4）預言者の慣行。
イスラーム法ではこれも神の意志、命令と考えている

アリーは次のように伝えている
私が刑罰の執行を命じ、その間にその者が死んでも酔払いの場合以外は気にかけませんでした。
なぜならばもしその者が死んだならば私はその執行者に賠償金を課したからです。
それというのもアッラーの使徒はそのことに関して何らスンナを残さなかったからです。

同様のハディースが**スフヤーン**によって伝えられている。

矯正刑（タアズィール）の鞭打ちの数

アブー・ブルダ・アンサーリーは次のようにアッラーの使徒が語ったところを聞いたとして伝えている

アッラーの定めた刑罰以外の理由で誰れも 10 回以上は鞭打たれることはない。

刑罰は罪を償いそれを消す

ウバーダ・ビン・サービトは伝えている

私達が集会でアッラーの使徒と一緒にいたとき彼はこういった。

以下のことで私に誓いを立てなさい。

アッラーには何ものも同位者を配してはならないこと。

姦通を犯さないこと。

窃盗を犯さないこと。

法的正当性なくして、アッラーが禁じた命を奪って殺害しないこと。

そしてあなた方のうち誰れでもそれを果たしたならばその者の報酬はアッラーのもとにある。

しかしその中の何かを犯したならば罰せられる。

それ（刑罰）は自分の罪の償いである。

またその中の何かを犯しアッラーがそれを隠したならばそのことはアッラーに任せられアッラーが望めばその者を赦すであろうし、またアッラーが望めば彼を罰するであろう。

同様のハディースが**ズフリー**によって伝えられている。

しかしここでは次の一文が追加されている

それから彼は女性に関する次の一節を私達に読んだ。

「彼女らはアッラーの外は何者も同位者をあがめません」（第 60 章 12 節）

ウバーダ・ビン・サービトは伝えている

アッラーの使徒は女性達に誓約をとったように私達にも以下の事に関して誓約をとった。

私達はアッラーに何ものも同位者を配しない。

私達は窃盗を犯さない。私達は私達の子供を殺害しない。

私達はお互いに他を中傷しない。

（そしてアッラーの使徒は次のようにいった）

さてあなた達の内で（この誓約を）守った者その者の報酬はアッラーのもとにある。

また何らかの刑罰を犯した者には刑が執行されるがそれはその者の罪の償いとなる。

しかしアッラーがその者の罪をお隠しになればそのことはアッラーに任せられアッラーが望めば彼を赦すであろう。

またアッラーが望めば彼を罰するであろう。

ウバーダ・ビン・サービトは伝えている

私はアッラーの使徒に誓いを立てた班長（ナキーブ）達の一人であった（注）。

さて私達は以下のことを預言者に誓った。

私達はアッラーに何ものも同位者を配しない。

私達は姦通を犯さない。

私達は窃盗を犯さない。

私達は法的正当性なしにはアッラーが禁じた命を奪って殺害しない。

私達は不当に略奪しない。

私達は（アッラーと預言者に）反抗しない。

さて私達がこの誓いを守ればその報酬は天国である。

しかし私達がその中の何かを犯せば（そして現世で罰せられなければ）その判決はアッラーに任される。

ところでイブン・ルムフは「彼の判決はアッラーに一任される」と伝えている。

（注）預言者をマディーナに迎えるための妨害約を交わしたアカバの夜（の誓い）の際にマディーナの信徒の代表団はグループに分けられ各グループにはグループリーダー（ナキーブ）が指名された。

ウバーダもその一人であったがグループリーダーは全部で 12 人いた

動物によって、また鉱坑において、または井戸に落ちて傷を受けてもそれに対する保証はない

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

動物によって（起きた事故で）受けた負傷には保障がない（注 1）。
また井戸に落ちて受けた傷には保障がない（注 2）。
また鉱坑において（起きた事故）で受けた傷には保障がない。
また発掘財宝にはフムス（国庫への五分の一）が課せられる。

（注 1）ハナフィー法学派を除いてその動物の所有者または世話人が同伴している場合には人間に責任があるとしている。
また人が動物をけしかけて他人に害を及ぼした場合も有罪であるまたは時に獰猛な動物をその所有者または世話人が放置したために起きた事故にも人間に責任がある
（注 2）公道とか他人の土地に許可なく穴を掘って人または家畜か落ちた場合その事故の保障は勝手に掘った者の責任である

同様のハディースが**ズフリー**によって伝えられている。

同様のハディースが**アブー・フライラ**によって伝えられている。

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

井戸に落ちて受けた傷には保証はない。
また鉱坑において（起きた事故で）受けた傷には保証がない。
また動物によって受けた傷には保証がない。また発掘財宝にはフムスが課せられる。

同様のハディースが別の伝承者経路を経て**アブー・フライラ**によって伝えられている。

判決の書

被告による潔白の誓いがまず必要

イブン・アッバースは預言者の言葉として次のように伝えている

人々は申し立てだけで（証拠も、証人もなしに）他人を告訴できるものなら他人の生命も財産も要求することでしょう。

ですから被告人の潔白の誓いがまずなされるべきでしょう。

イブン・アッバースは次のように伝えている

アッラーの使徒はまず被告の潔白の誓いをもとに判決を下したものでした。

潔白の誓いと証人をもとにして判決

イブン・アッバースは次のように伝えている

アッラーの使徒は（被告の）潔白の誓いと（原告側の）証人をもとにして判決を下した。

判決は証拠にもとづいて宣告さるべきことまた抗弁に優れた者は勝訴するかも知れないこと

ウンム・サラマはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

あなた方は争議を私に持ち込んでくるが、たぶんあなた方のある者は他の者よりも証拠陳述をより雄弁に行うことができよう。
そこで私は彼から聞いたことによって彼を裁くであろう。
だがそれによって私が彼のために彼の同胞の権利を何か切り取ったとしても彼はそれを真に受けてはならない。
なぜならば私はそれにより彼のために火獄の叫部を切り取ったまでのことだからです。

同様のハディースが**ヒシャーム**によって伝えられている。

預言者の妻**ウンム・サラマ**は伝えている

アッラーの使徒は彼の部屋の戸口のところで口論者達の喧騒を聞いたので彼は彼らのところに出て行ってこういった。
私は一人の人間である。喧嘩の当事者達が私のところに来たとしても、たぶんある者は他の者よりも（証拠の陳述で）より雄弁でありましょう。
そこで私が彼の方が正しいと判断して彼に味方して裁くでしょう。
しかしもし私がこうして一人のムスリムの権利を切り取って他方のために過分に裁いたとしてもその者に私は火獄の一部を与えているだけである。
それで彼にはそれを背負い込むかまたは避けようとするか（の選択が残る）だけのことである。

同様のハディースが**ズフリー**によって語られている。
しかしマアマルの伝えたハディースでは「ウンム・サラマの部屋の戸口で」となっている。

ヒンドの事件

アーイシャは次のように伝えている

アブー・スフヤーンの妻であるヒンド・ビント・ウトバがアッラーの使徒のもとにやって来てこういった。

アッラーの使徒よ、アブー・スフヤーンはけちな男です。

彼は私と子供達に充分な生活費を与えません。

しかし私は彼に気付かれることなく彼の財産の中から多少のものを取りました。

果して私にはそのことで罪があるでしょうか？

するとアッラーの使徒は「彼の財産の中からあなたと子供達のために慣例に従って適切で充分をものを取りなさい」といった。

同様のハディースが**ヒシャーム**によって伝えられている

アーイシャは次のように伝えている

ヒンドは預言者のもとにやって来てこういった。

アッラーの使徒よ、アッラーに誓って地上のどの家族よりもアッラーがあなたの家族を卑しめることが私にとって最も喜ばしいことでした。

（しかし今は）地上の他のどの家族よりもアッラーがあなたの家族に栄誉を与えることが私にとって最も喜ばしいことです。

すると預言者は「同様に（これからも信仰が深まり、アッラーとその使徒を益々愛することでしょう）私の魂をその手中にするお方に誓って」といった。

それから彼女はこう尋ねた。

アッラーの使徒よ、アブー・スフヤーンはどけちな男です。

そこで私が彼の家族のために彼の財産の中から彼の許しなしに使ったことで何か罪がありましょうか？

すると預言者は「彼らのために慣例に従って適切に使う分にはあなたに罪はない」といった。

アーイシャは次のように伝えている

ヒンド・ビント・ウトバ・ビン・ラビィーアがやって来てこういった。

アッラーの使徒よ、アッラーに誓って地上で他のどこの家族よりもあなたの家族が卑しめられることが私にとってもっとも喜ばしいことでした。

しかし今は地上で他のどの家族よりもあなたの家族が栄誉を与えられることが私にとってもっとも喜ばしいことです。

すると預言者は「同様に（これからも信仰が深まり、アッラーとその使徒を益々愛すること

でしょう）私の魂を手中にするお方に誓って」といった。
それから彼女はこういった。
アッラーの使徒よ、アブー・スフヤーンはとてもけちな男です。
そこで私が彼の家族に彼の持っている物から食べさせたことに何か罰がありますか？
すると預言者は彼女に「いいえ（あなたには罪はない）しかし慣例に従って適度に使うことです」といった。

不必要に沢山の質問をすることの禁止。
自分の事は棚に上げておいて他人には「持って来い」主義の禁止

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

アッラーは次の三つの事であなた達に満足なさり、また次の三つの事であなた達をお嫌いになる。
つまりあなた達がアッラーを崇め彼に何者も同位者を置かないこと。
またアッラーの絆に皆でしっかりとすがり、決して分裂しないことそれでアッラーはあなた達に満足する。
またアッラーはあなた達が他人の事でつまらない噂をしあうことや、無益を沢山のしつこい質問や、それに財産の浪費の三つのことであなた達をお嫌いになる。

同様のハディースが**スハイル**によって伝えられている。
しかしここでは「三つの事であなた達にお怒りになる」といいまた「決して分裂しないこと」という一文は述べられていない。

ムギーラ・ビン・シュウバはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

アッラーは母親への不服従と幼女の生き埋の（注）と自分の事は棚に上げて他人には「持って来い」主義をあなた達に禁じた。
また彼は他人の事でつまらぬ噂をしあうことや、無益な沢山のしつこい質問や、財産の浪費の三つの事であなた達をお嫌いになる。

（注）ジャーヒリーヤ時代にアラブの一部の部族には女児が誕生すると己れの恥と考え生き埋めにする悪習があったとされている

同様のハディースが**マンスール**によって伝えられている。
しかしここでは「アッラーの使徒はあなた達に禁じた」とあり「アッラーはあなた達に禁じた」とは述べられていない。

シャアビーはムギーラ・ビン・シュウバの書記からの伝聞として次のように伝えている

ムアーウィヤはムギーラに「アッラーの使徒から聞いたことを私に書いて送って下さい」と手紙を書いた。
そこで彼はムアーウィヤに次のように手紙を書いた。
私はアッラーの使徒が「アッラーは他人の事でつまらぬ噂をしあうことや財産の浪費や無益な沢山のしつこい質問の三つの事であなた達をお嫌いになる」といっているところを聞きましたと彼に書いた。

ワッラードは次のように伝えている

ムギーラはムアーウィヤへ次のように手紙を書いた。

あなたに平安がありますように！

さて私はアッラーの使徒が次のようにいっているところを聞きました。

アッラーは三つの事を禁じ三つの事を許さなかった。

つまりアッラーは母親への不服従と幼女の生き埋めと自分の事は棚に上げて他人には「持って来い」主義を禁じた。

また彼はつまらぬ噂をしあうことや無益な沢山のしつこい質問や財産の浪費の三つを許さなかった。

もし判事が法的な論理的推理を立てて判決を下し
それが正しかったにせよ間違っていたにせよそのときの彼の報酬について

アムル・ビン・アースはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

判事が裁くとき、彼が法的な論理的推論を行って判決を下しそれが正しかったならば彼には二倍の報酬があり、また間違えていた場合でも彼には一回の報酬がある。

同様のハディースが**アブー・フライラ**によって伝えられている。

同様のハディースが**ウサーマ・ビン・ハード**によって伝えられている。

間違った諸判決、ならびに教理に関する新説の否定

アーイシャはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

もし誰れかが私達のこのこと（教理のこと）で根拠のない新説を主張してもそれは否定される。

サアド・ビン・イブラーヒームは伝えている

私はカーシム・ビン・ムハンマドに三軒の住宅を持っている男について尋ねた。
そのときその男はそれぞれの住居の三分の一ずつ遺言を残していた。
それで彼（カーシム）はこういった。
それらすべては一つの住居にまとめることができる。
またアーイシャはアッラーの使徒の言葉として私に次のように伝えた。
誰れかが私達の側で裁可していない行為を行ったとすればそれは拒否さるべきことである。

もっとも立派な証人

ザイド・ビン・ハーリド・ジュハニーは預言者の言葉として次のように伝えている

あなた達に最も立派な証人について述べましょうか？
つまりそれは問われる前に進んで証言に来る人です。

論理的推論者達の法的見解の相違について

アブー・フライラは預言者の言葉として次のように伝えている

二人の婦人が彼女達の息子二人を連れているときに狼が来て息子の一人を連れ去った。
そこで彼女達の一人が連れの相手に「あなたの息子を狼は連れ去ったのですよ」といった。
だが相手の方も「狼はあなたの息子を連れ去ったのだ」といった。
そこで彼女等二人はそのことでダーウード(預言者ダビデ)に訴えた。
そして彼はそれを年配者の女性の方に有利に裁いた。
それから彼女達はスライマーン(預言者ソロモン)・ビン・ダーウードのところに行って事の次第を知らせた。
すると彼はこういった。
ナイフを持ってきなさい。
私がその子をあなた達二人に切って分けてあげよう。
すると若い方の女が「とんでもない、アッラーがあなたに慈悲をおかけしますように！　彼は彼女の子供です」といった。
そこで今度はスライマーンが若い方の女性に有利に裁いた。
ところでアブー・フライラは次のような補足説明をしている。
アッラーに誓って私はシッキーン(ナイフ)という言葉はアッラーに誓ってめったに聞かなかった。
それを聞いたのはその時だけだった。
私達はそれを通常ムドヤ(ナイフ)としかいわなかった。

同様のハディースが**アブー・ズィナード**によって伝えられている。

論争者二人の間を判走者が調停することは好ましい

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

一人の男がある男から土地を買った。

その土地を買った男は金の入っている陶器の壷をその土地で見付けた。

するとその土地を買った者が売った者にこういった。

あなたの金を受け取りなさい。

私はあなたから土地を買ったのであり、金を買ったのではないので。

ところが土地を売った男は「私はあをたにその土地とそこにある物を売りました」といった。

そこで彼ら二人はことの決着をある男に一任しました。

すると彼らが一任した男は「あなた達には子供がいますか？」と尋ねた。

それで彼らの一人が「私には男の子がいます」といった。

そしてまたもう一人の男が「私には娘がいます」といった。

すると彼はその男の子と女の子とを結婚させなさい。

そしてそれ（金）をあなた達二人のために使いなさい。

そしてまたその一部を寄付しなさい」といった。

拾得物の書

タイトルなし

ザイド・ビン・ハーリド・ジュハニーは伝えている

ある男が預言者のもとに来て拾得物について尋ねたので彼はこういった。
それが入っている袋とそれを縛っている皮紐とをよく覚えておきなさい。
それから一年の間それを公に知らせなさい。
そしてもしその持ち主が来れば（彼にそれを返しなさい）。
そうでなければそれはあなたの物になります。
するとその男は「迷った羊についてはいかがですか？」と尋ねた。
そこで彼はこう答えた。
それはあなたのものになるか、もしくはあなたの兄弟（通りかかった誰か他の者）のものになります。
そうでなければ狼のものになる（注 1）。
それからまたその男は「迷ったラクダについてはいかがですか？」と尋ねた。
すると彼はこういった。
それはあなたのものにはならない。
なぜならばそれは水袋と靴を持っている（注 2）からです。
そしてそれはその持ち主が見付ける日まで水のある場所にやって来て水を飲みまた木の葉を食べているでしょうから。

（注 1）つまり羊を危険から守るために人間の側で保護する必要があることが最優先すること。
もし拾った者が一年以内にそれを殺して食べた後で持ち主が現われた場合は賠償金を払わねばならない

（注 2）つまりラクダは数日間水を飲まなくても平気であり、また丈夫な足を持ち長距離を歩くことも可能であり人間の側の当面の保護は必要としない。
水場の所在も自らの嗅覚で嗅ぎ分けるというから砂漠地では人間以上に環境に適応して生きて行くことができるので拾得物とはならないとする見解

ザイド・ビン・ハーリド・ジュハニーは伝えている

ある男が預言者のところに来て拾得物について彼に尋ねたので彼は答えて次のようにいった。

一年間それを公けに知らせなさい。

それからそれを縛っている皮絶とそれが入っている袋とをよく覚えておきなさい。

それからそれを自分で使いなさい。

だがもしその持ち主が現われたならばそれを彼に返しなさい。

それからまたその男は「アッラーの使徒よ、迷った羊についてはいかがですか？」と尋ねた。

すると預言者は答えて「それを取っておきなさいそれはあなたのものになるか、もしくは誰かあなたの（宗教上の）兄弟のものになるべきものです。

そうでなければ狼のものになります」といった。

さらにつづいてその男は「アッラーの使徒よ迷ったラクダについてはいかがですか？」と尋ねた。

するとアッラーの使徒はほほが真赤になるほど怒ってこういった。

それはあなたの物とはならない。

なぜならそれは靴と水袋とを持っていていずれはその持ち主が見付けることになるであろうから。

同様のハディースが**ラビィーア・ビン・アブー・アブドル・ラフマーン**によって伝えられている。
しかしここでは次の一文が付け加えられている

ある男がアッラーの使徒のもとにやって来た。

そのとき私は彼と一緒でした。

そして彼は拾得物について預言者に尋ねた。

またアムルは伝承の中で「さてそれを求める者が誰れも来なかったときはそれを自分で使いなさい」と伝えている。

ザイド・ビン・ハーリド・ジュハニーは次のように伝えている

ある男が預言者のもとにやって来た。

以下は前記ハディースと同じであるが最後の部分に次のような多少の表現上の違いがある。

それは「彼の顔と額が真っ赤になるほどに怒った」とあり、また「そして一年間それを公に知らせなさい」の一文の後に「さてもしその持ち主が来なかったときはそれはあなたのあずかった委託物となる」と付け加えられている。

アッラーの使徒の教友**ザイド・ビン・ハーリド・ジュハニー**は次のように伝えている

アッラーの使徒は金または銀の拾得物について尋ねられたので彼は答えてこういった。
それを縛っている皮紐それの入っている袋とをよく覚えて置きなさい。
それから一年間はそれを公に知らせなさい。
そしてもしあなたがその持ち主を知ることができなければそれを自分で使いなさい。
でもあなたのあずかった委託物としなさい。
もしある日、その持ち主が現われたならば彼にそれを返しなさい。
それからまた「迷ったラクダについて」尋ねられた。
すると彼は答えて次のようにいった。
それはあなたの物とはならない。
それはそのままにして置きなさい。
なぜならそれは靴と水袋を持っている。
またラクダはその持ち主が見付けるまで水のある場所に来て水を飲みまた木の葉を食べているからです。
そこでまた羊について尋ねられた。
すると彼は答えて次のようにいった。
それは取って置きなさい。
それはあなたの物になるかもしくはあなたの兄弟の物になる。
そうでなければ狼の物となる。

ザイド・ビン・ハーリド・ジュハニーは次のように伝えている

ある男が預言者に迷ったラクダについて尋ねた。
ところで伝承者の一人ラビィーアは次の一文を付け加えている。
彼（預言者）はほほが真赤になるほどに怒った。
また残りは前記ハディースと同様であるが彼は次の一文を付け加えた。
それの持ち主が来てそれが入っている袋とそれの数とそれを縛っている皮紐を知っていたら
それを彼に返しなさい。しかしもしそうでなければそれはあなたの物です。

ザイド・ビン・ハーリド・ジュハニーは伝えている

アッラーの使徒は拾得物について尋ねられたので彼は答えてこういった。
一年間それを公に知らせなさい。
その持ち主が確認されなかったならそれが入っている袋とそれを縛っている皮紐をよく覚えてそれからそれを食べてもよい。
もしその後それの持ち主が来たならばそれを彼に返してやりなさい（注）。
（注）もし食べた後ならば当然それに代るものを与えなさいの意

同様のハディースが**ダッハーク・ビン・ウスマーン**によって伝えられているがここでは次のような多少の表現上の違いがある

もしそれが（持ち主によって）確認されたならばそれを返しなさい。

しかしそうでなければそれが入っている袋とそれの数とそれを縛っている皮紐をよく覚えておきなさい。

サラマ・ビン・クハイルはスワイド・ビン・ガファラからの伝聞として次のように伝えている

私はザイド・ビン・スーハーンとサルマーン・ビン・ラビィーアとともに聖戦に出て行った。

そこで私は一本の鞭を見付けそれを手に取った。

すると彼ら二人は私に「それを手放しなさい」といった。

それで私はこういった。

いいえ、手放しません。

しかしそれを公に知らせます。

そしてもし持ち主が来たならば（それを渡します）。

しかしそうでなければ私はそれを使います。

こうして私は二人のいうことを拒絶しつづけた。

それから私達が聖戦から戻ったとき私は巡礼をする機会がありそれを行った。

そして私はマディーナに来てウバイヤ・ビン・カアブに会い彼に鞭の一件と二人のいったことを知らせた。

すると彼は次のように語った。

アッラーの使徒の時代に私は 100 ディーナール入った財布を見付けた。

そこで私はアッラーの使徒のもとにそれを持って行った。

すると彼は「それを一年間公示しなさい」といった。

そこで私はそれを公示したのですがそれを知っている者を探せませんでした。

それから私は再び彼（預言者）のもとにやって来たが彼はまた「それを一年開公示しなさい」といった。

そして私はそれを一年間公示したが私はそれを知っている者を探せませんでした。

すると預言者はこういった。

それの数とそれが入っている袋とそれを縛っている皮紐とを覚えておきなさい。

もしその持ち主が来たならば（それを返しなさい）。

しかしそうでなければそれを使いなさい。

こうして私は自分でそれを使いました。

ところで伝承者の一人シュウバは次のように語った。

私（シュウバ）は彼（サラマ）にマッカで会った。

そのとき彼は「私は彼が三年間といったのか一年間といったのか分かりません」といった。

シュウバは次のように伝えている

サラマ・ビン・クハイルが私に伝えたかもしくは彼が人々に伝え私が彼らの中にいたのかも知れませんがと前置きして次のように伝えた。

彼（サラマ）はスワイド・ビン・オファラからの伝聞として次のように伝えている。

私（スワイド）はザイド・ビン・スーハーンとサルマーン・ビン・ラビィーアと一緒に出て行った。

そして私は一振りの鞭を見付けた。

それから「それで私は自分でそれを使った」までは前記ハディースと同様である。

ところでシュウバは「私は彼が 10 年後に彼はそれを一年間公示したといっているところを聞いたと伝えている。

同様のハディースが**サラマ・ビン・クハイル**によって伝えられている。
しかしここでは「三年間と伝えられている。
またハンマード・ビン・サラマの伝えるハディースでは「二年間もしくは三年間」と伝えている。
またスフヤーン・とザイド・ビン・アブー・ウナイサとハンマード・ビン・サラマが伝えるハディースでは次の一文がある。
「ある者がそれの数とそれを入れた袋とそれを縛っている皮紐とをあなたに知らせて来たならばそれを彼に渡しなさい」
またスフヤーンはワキーウの伝承の中で「もしそうでなければそれを貴方の財産として扱われる」と付け加えている。
またイブン・スマイルの伝承では「そうでなければそれを使いなさい」と付け加えている。

巡礼者の拾得物について

アブドル・ラフマーン・ビン・ウスマーン・タイミーは次のように伝えている

アッラーの使徒は巡礼者達の落し物を拾得することを禁じた（注）。

（注）巡礼者は絶えず移動しているので拾得物を公示しても持ち主は既にその場にいないケースが多いのでむしろその場にそのまま放置しておいた方が反って持ち主が探し易いということ

ザイド・ビン・ハーリド・ジュハニーは次のように伝えている

落し物（注 1）を見付けた者はもし公に知らせない限り彼自身が迷った身となる。

（注）ラクダなどの大形で所持運搬保管が不可能なものであるとする説もある。
また拾得物公示は絶対条件であるとする意味にも解釈されている。

持ち主の許可なく家畜から搾乳することを禁ずる

イブン・ウマルはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

誰一人として持ち主の許可なく他人の家畜の搾乳をしてはならない。
あなた達は食糧庫が侵入されその貯蔵室が壊され食糧が他に運び出されることを誰れが一体好みますか？
誠に彼らの家畜の乳房は彼らの食糧を貯蔵しているのであるから、誰一人として持ち主の許しなしに他人の家畜の搾乳をしてはならない。

同様のハディースが伝えられているがここではライス・ビン・サアドの伝承を除いて「そして彼の食糧が運び出される」の代りに「全て播き散らされる」となっている。

客の接待について

アブー・シュライフ・アダウィーは伝えている

私の両耳と両目はアッラーの使徒が次のように語っているところを見聞きした。

アッラーと来世を信じるものは出来る限りの丁重さ(ジャーイザ)をもって客をもてなしなさい。

すると彼らは「アッラーの使徒よ、出来る限りの丁重さ(ジャーイザ)とは何ですか？」といった。

そこで預言者は次のように答えた。

それは彼(客)が一昼夜進んでいくことができるほどの糧(水と食糧)です。

そして客の接待は三日間(注)に及びそれ以上のことは客に対するサダカ(慈善)である。

またアッラーと来世を信じる者は(客には)善いことをしなさい。

もしくは黙っていなさい。

(注)第一日は大盤振るまいをしてもてなす。

次の二日間は主人の生活の範囲内で接客する。

最後に丸一昼夜の旅が出来るだけの水と食糧を与えることが慣例とされた

アブー・シュライフ・フザーイーはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

客の接待は三日間である。

そして彼が丁重にもてなす程度とは(最後に)彼が一昼夜旅ができるほどの糧(水と食糧をさらに与えること)である。

そしてムスリムは同胞のもとでその家の主人に罪を犯させるほどに滞在することは許されない(注)。

そこで彼らは「アッラーの使徒よ、いかにして彼に罪を犯させることになりますか？」といった。

すると彼は答えて「彼のもとに滞在するが彼にはもはやもてなすものかないかなくなる場合である」といった。

(注)客が三日間以上滞在すると主人の方がもてなし切れなくなり客は次第に招かざる客に変ってゆく。

主人の方もぶつぶついい出すかこのぶつぶついうこと自体がここで言う罪なのであるからそうなる前に失礼しなさいということ

サイード・マクブリーはアブー・シュライフ・フザーイーの伝聞として次のように伝えている

私の両耳そして両目そして心はアッラーの使徒が語っているところを聞いて見てそれをよく記憶した。

そして彼は同様のハディースを伝えた。

しかしここでは彼は次のように伝えた。

あなた達の内の誰れでも同胞のもとに滞在しても彼に罪を犯させる（ぶつぶついい出すこと）ほど長く滞在することは許されない。

ウクバ・ビン・アーミルは伝えている

私達は「アッラーの使徒よ、あなたが私達を派遣し、ある人々のもとに泊ることになり、だが彼らが私達をもてなさないとしたらあなたはどのように考えますか？」と質問した。

するとアッラーの使徒は私達にこういって答えた。

もしあなた達が彼らのもとに泊まり、彼らがあなた達に客として当然のものをすすめたならばそのもてなしを受けなさい。

しかし彼らが何もしないとなれば彼らにとっては当然の義務でありあなた達にとっては当然の接客の権利のみを彼らに求めなさい。

財産の剰余分を同胞に与えて助けることは好ましいこと

アブー・サイード・フドリーは次のように伝えている

私達が預言者と一緒に（聖戦の）旅に出ているとき一人の男が彼の乗り物に乗ってやって来た。

そして彼は左右をじろじろと見倒した（注 1）。

そのときアッラーの使徒はこういった。

余分な乗り物を持っている者は乗り物を持っていない者にそれをあげなさい。

また余分な食糧を持っている者は食糧を持っていない者にそれをあげなさい。

こうして彼は様々な財産や所持品の名前を述べたが最後には私達は余剰分に対して誰一人として権利がないのだと考えるまでになった（注 2）。

（注 1）恐らく聖戦の長旅で物資が欠乏しだしてきて皆他人の持ち物が気になりだしたといいたいのだろう

（注 2）これによって預言者は共有財産制度や共産主義を命じた訳ではない。

これはあくまでも戦時における異常事態下の一時的な命令である

人々の食糧が欠乏したときはそれを集めて共有となし助け合うことは好ましいことである

イヤース・ビン・サラマは父からの伝聞として次のように伝えている

私達がアッラーの使徒と一緒に聖戦に出たとき、私達は食糧の確保が困難になり私達の乗ったラクダ数頭を犠牲にしようと思ったほどでした。
さてそのときアッラーの使徒は命じ、私達は私達の食糧袋を全て集めました。
それで私達は皮のシートを敷き人々の食糧袋がその上に集められました。
さてそこで私はそれがどの位のかさになったかを計るために自分の身体を伸ばして計ってみましたがそれは山羊が座る位の広さでした。
それから私達は全部で一万四千人ほどの人数でしたが全員が満足するまで食べました。
それから私達の皮袋には残った分を一杯に詰めました（注）。
それからアッラーの使徒は「ウドゥー（清浄行為）をするための水はありますか？」といった。
すると一人の男がほんの少しの水が入った容器を持って来て水を椀に移した。
そして私達一万四千人の者が浴びる程ふんだんに水を使ってウドゥーをすることができました（注）。

さてそれからその後になって八人の者が来て「ウドゥーをするための水はありますか？」といった。
するとアッラーの使徒は「ウドゥーはすでに完了しました」といった。

（注）水や食糧が異常に急増したとするこの話しは通常では考えられない。
そこでここでは弘法大師伝説の類の預言者の奇跡だと信じられている

聖戦と軍事遠征の書

イスラームの布教をすでに耳にしていてもなおこれを拒む不信者に対しては最後の通告なしに急襲することも許される

イブン・アウンは次のように伝えている

私は手紙でナーフィウに不信者達と交戦に入る前に彼等にイスラームへの呼びかけをする必要があるかどうかについて尋ねた。
すると彼は次のように答えて書き送ってきた。
確かにイスラームの初期においてはそれは必要であった。
しかしアッラーの使徒はムスタリク族を襲撃したがその時、彼らは全くそれに気づかずのんびり家畜に水をやっていた（注 1）。
それでアッラーの使徒は戦闘員は殺し非戦闘員は捕虜にした。
そして丁度その日に（ヤヒヤーは「そう云ったと思うが」と云っているが）彼はハーリスの娘（ジュワイリヤ）（注 2）を捕えた。
（さらにナーフィウはこう付け加えた）
その時の襲撃隊の一員であったアブドッラー・ビン・ウマルがこのハディースを私（ナーフィウ）に伝えた。

（注 1）ハディースの趣旨はイスラームへの呼びかけを耳にしない部族には最後通告が決裂した後に戦闘に入るべきこと。
また耳にしている部族の場合でも最後通告を事前に与えることが望ましいこと。
だが止むを得ない場合にはこのハディースのように不意打ちも可能であること

（注 2）ハーリスはムスタリク族のリーダーで彼の娘のジュワイリヤの夫はこの戦で戦死した。後に彼女は預言者の妻の一人となる

同様のハディースがイブン・アウンによって別の伝承者経路を経て伝えられている。
ところでここでははっきりと「ハーリスの娘ジュワイリヤを」とある。

イーマムによる遠征軍の指揮官任命並びに彼らへの戦陣訓その他

スライマーン・ビン・ブライダは彼の父親からの伝聞として次のように伝えている

アッラーの使徒はある者を大隊や分遣隊（注 1）の指揮官に任命するとき彼に心得としてまずアッラーを恐れかしこむことまた一緒に居るムスリム達を大切に扱うように指示し忠告した。

それから彼（預言者）は続けてこういった。

アッラーのみ名によって戦闘に入りアッラーの道のために戦いなさい。

アッラーを信じない者に戦いをいどみなさい。

（アッラーの道のために）戦い決して戦利品を横領することなかれ。

また決して誓約を破ることなかれ。

決して（耳や鼻などを切るなどして）死体をバラバラに切断することなかれ。

また決して子供を殺すことなかれ。

さてもしあなたが多信教徒からなる敵軍に遭遇した時は彼らに三通りの行動を呼びかけなさい。

もし彼らがどれかそのうちの一つに応じた時はあなたはそれを受け入れ彼らにいかなる危害も加えてはならない。

即ちまず彼らにイスラームを受け入れるよう呼びかけなさい。

そこで彼らがそれに応じてきたならばあなたはこれを受け入れて彼らへの攻撃を取り止めなさい。

そして彼らに彼らの土地からムハージル達の地（信徒の移住地であるマディーナのこと）に移り住むよう呼びかけなさい。

そして彼らがそのように行動するならば彼らはムハージル達（マッカからマディーナに移住した信徒集団）が持つ権利を獲得しムハージル達に課せられる義務が課せられるだろうと彼らに知らせてやりなさい。

もし彼らがそこから移ることを拒んだならば彼らはベドウィンムスリムと同じ扱いになり、他の信徒達と同等のアッラーの命令が課せられる。

ただし彼らはムスリム達と一緒に戦うとき以外は戦利品もファイウ（注 2）の分け前も得ることはないことを告げなさい。

もし彼らがイスラームに入ることを拒んだならば彼らにジズヤ（人頭税）を求めなさい。

そして彼らがそれに応じたならばそれを受け入れ彼らへの攻撃を取り止めなさい。

もし彼らがジズヤを払うことを拒んだならばその時はアッラーの加護、のもとに彼らと戦いなさい。

あなたが砦を包囲し、砦の人々があなたにアッラーのみ名による庇護の契約やアッラーの預言者のみ名による安全保障の契約を望んだとしてもあなたは決してアッラーとアッラーの預言者のみ名による安全保障の契約を彼らに与えてはならない。

だがあなたの名による安全保障の契約とあなたの仲間の名による安全保障の契約を与えなさい。
なぜならあなたとあなたの仲間によって与えられた安全保障の契約が破棄されたとしてもそれはアッラーとアッラーの預言者のみ名によって与えられた安全保障の契約が破棄されることよりもずっと罪が軽いからです。
またあなたが砦を包囲して砦の人々がアッラーのお裁きに従って彼らを外に出すことをあなたに望んだとしてもあなたは決してアッラーのお裁きに従って外に出してはならない。
だがあなた自身の判断に従ってそうしなさい。
なぜならあなたはそのアッラーのお裁きが彼らにとって適切であるかどうか知る由もないからである。

（注 1）五百騎前後の小隊

（注 2）交戦せずに降伏した敵の財産であり、それは戦士以外の指揮官が適当と認めた者に分配される。
いわばそれはムスリム共同体全体の財産となるべきもの

スライマーン・ビン・ブライダは父からの伝聞として次のように伝えている
アッラーの使徒は指揮官を分遣隊をつけて派遣する時は彼を呼び出して指示と忠告を与えたものだった。
以下は前記のハディースの内容と同じである。

このハディースは**シュウバ**によっても伝えられている。

人には寛仁をもって接し宗教に反感を抱かせるべからず

アブー・ムーサーは次のように伝えている

アッラーの使徒は教友の一人を彼の代理人として派遣するときはその教友に次のようにいったものでした。
アッラーの福音だけを人々に伝えなさい。
決して人々に宗教に対する反感を抱かしてはならない。
人には寛仁をもって接し、決して無理なことを押しつけてはならない。

サイード・ビン・アブー・ブルダは彼の父を経て彼の祖父からの伝承として次のように伝えている

預言は彼（祖父）とムアーズを（布教のために）イエメンに派遣したが、その時二人にこういった。
人には寛仁をもって接し決して無理なことを押しつけてはならない。
アッラーの福音だけを人々に伝えなさい。
決して人々に宗教に対する反感を抱かせてはならぬ。
（何ごとも）二人で協力して行いなさい。
決してお互いに対立してはいけません。

このハディースは別の伝承者経路を経て前記ハディースと同様に**サイード**によって伝えられている。
しかし伝承者の一人**ザイド・ビン・アブー・ウオイサ**の伝えたハディースでは「（何ごとも）二人で協力して行いなさい。
決してお互いに対立してはいけません」という一節はない。

アナス・ビン・マーリクはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

人には寛仁をもって接し、決して無理なことを押しつけてはならない。
人には慰安を与え、決して宗教に対して反感を抱かせてはならない。

信頼を裏切ることは禁じられている

イブン・ウマルはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

アッラーが最後の審判の日に過ぎ去った人々と後代の人々全てを一堂に集めるとき、信頼を裏切った全ての者の頭上には大きな旗がかかげられるだろう（注）。
そこでこれこそは誰々で裏切者であると云われて公表される。

（注）イスラーム以前の定期市においてアラブ人は裏切者の目印としてその者のかたわらに旗を立てたと云われている

このハディースは別の伝承者経路を経て前記ハディースと同様に**イブン・ウマル**によって伝えられている。

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アッラーは信頼を裏切る者の頭上にこそ最後の審判の日に大きな旗を掲げなさる。
そこで、見よ、これこそが誰々で裏切者であると公表される。

イブン・ウマルはアッラーの使徒から次の言葉を聞いたとして伝えている

最後の審判の日は信頼を裏切った全ての者の頭上には大きな旗がある。

アブドッラー（イブン・ウマル）は預言者が次のように語ったとして伝えている

最後の審判の日に、信頼を裏切った全ての者の頭上に大きな旗があり、これこそが誰々で裏切者であると公表される。

このハディースは前記と同様の伝承者経路によって伝えられている。
しかし伝承者の一人**アブドル・ラフマーン**の伝えたハディースには「これこそは誰々で裏切者であると公表される」という一節は述べられていない。

アブドッラーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

最後の審判の日に、信頼を裏切った全ての者の頭上には他と見わけがつくように大きな旗があり、これこそ誰々で裏切者であると云って公表される。

アナスはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

最後の審判の日に信頼を裏切った全ての者の頭上には他と見分けがつくように大きな旗がある。

アブー・サイードは預言者が次のように語ったとして伝えている

最後の審判の日に、信棺を裏切った全ての者のでん部には大きな旗がある。

アブー・サイードは預言者が次のように語ったとして伝えている

最後の審判の日に信頑を裏切った全ての者の頭上には大きな旗が裏切りの程度に応じてより高く揚げられる。

それにしても統治者の裏切行為ほど罪深い裏切はないではないか。

戦争における策略は正当である

ジャービルは預言者が次のように語ったとして伝えている
　　戦争は策略である。

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている
　　戦争は策略である。

敵との対戦を自ら望むのは好ましくない。
しかしもし対戦に臨む際には忍耐が肝要である

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている
　　あなたは敵との対戦をみだりに望んではならない。
　　しかしもし彼らと対戦するときにはしっかりと耐え忍びなさい。

ウマル・ビン・ウバイドッラーがハルーリィーヤ（注 1）へ進攻したときアブドッラー・ビン・アブー・アウファーと呼ばれるアスラム族出身の教友の一人が彼に書いた手紙に関連して**アブー・ナドル**はこう伝えている
　　アッラーの使徒は敵と対戦したある日、太陽が傾くまで待っていた。
　　それから彼は人々に話すために立ち上がりこういった。
　　皆さん敵との対戦をみだりに望んではいけません。
　　まずアッラーに身の安全を祈りなさい。
　　しかし、もし敵と対戦した時にはその時はしっかりと耐え忍びなさい。
　　天国は刃剣の影のすぐ下（注 2）にあることを肝に命じなさい。
　　それから預言者は再び立ち上がってこういった。
　　おおアッラー、啓典を下されたお方、雲を自在に走らせたまうお方、部族連合軍をば敗走せしめるお方、どうか彼らを敗走させた考え、そして私達をば彼らに勝たせて下さいませ。

　　（注 1）ハワーリジュ派との戦いのため

　　（注 2）天国への切符が剣の一撃にあることの比喩

敵と対戦するとき勝利を祈願することは望ましいことである

アブドッラー・ビン・アブー・アウファーはアッラーの使徒が部族連合軍(注)を呪って次のように語ったとして伝えている

おおアッラー、啓典を下したもうたお方、計算の敏速なお方、部族連合軍をば敗走させたまえ、おおアッラー、彼らを敗走させたまえ、彼らを揺がせたまえ。

(注)ヒジュラ 5 年にマディーナに押し寄せたマッカ軍を中核とした多神教徒の連合軍のこと

このハディースは別の伝承者経路を経て前記ハディースと同様の内容を**イブン・アブー・アウファー**によって伝えている。
ただしここでは「部族連合軍を敗走させたまうお方」と云い、またそれに続いて「おおアッラー」とは云っていない。

このハディースは別の伝承者経路を経て**イスマーイール**によって前記と同様の内容を伝えている。
しかし伝承者の一人イブン・アブー・ウマルは「雲を自在に散らすお方」という一節を加えている。

アナスはアッラーの使徒がウフドの戦いの日に次のように語ったとして伝えている

おおアッラー、もしあなたが多神教徒達の勝利を望まれるならば地上にはあなたを崇拝する打者はいなくなるでしょう。

戦闘での婦女子の殺害禁止について

アブドッラーは次のように伝えている

アッラーの使徒が戦ったある戦場で一人の女性が殺されている遺体が見つかった。
そのとき彼は婦女子の殺害を認めなかった。

イブン・ウマルは次のように伝えている

ある戦場で一人の女性が殺されている遺体が見つかった。
その時アッラーの使徒は婦女子の殺害を禁じた。

夜襲で意図せず間違って婦女子を殺害した場合は許される

サアブ・ビン・ジャッサーマは次のように伝えている

預言者は夜襲の間に殺害される多神教徒の婦女子について尋ねられた。

すると彼は答えて次のようにいった。

その者（婦女子）は彼ら（多神教徒の戦闘員）の仲間である（注）。

（注）この場合は止むを得ない過失致死で例外である。

イスラームの戦陣訓の原則は非戦闘員（子供、女性、老人、病人、負傷者、僧院の奉仕者、礼拝者）の殺害の禁止である

サアブ・ビン・ジャッサーマは次のように伝えている

私はアッラーの使徒に次のようにいった。

アッラーの使徒よ、私達は夜襲のとき多信教徒の子供達を殺すことがあるかもしれません。

すると彼は答えて次のようにいった。

その者らは彼ら（多信教徒の戦闘員）の仲間である。

サアブ・ビン・ジャッサーマは次のように伝えている

預言者はもし騎馬隊が夜襲を行い多神教徒の子供達を殺害した場合の是非について尋ねられた。

すると彼はそれに答えてこういった。

彼ら（子供達）は彼らの父親達（多神教徒）の仲間である。

不信者達の果樹を切り倒したり焼き払ったりすることは許される

アブドッラーは次のように伝えている

アッラーの使徒はブワイラにあるナディール族（注 1）のナツメヤシの林を焼き払い残りを切り倒した（注 2）。

このハディースの伝承者の一人であるクタイバとイブン・ルムフの伝えるハディースには次の一節が付け加えられている。

そのときアッラーは次の啓示を下した。

「あなた方のうちナツメヤシの若木（注 3）を切り倒した者もまた（その木をそのまま）その根幹の上に立たせておいた者もどちらもアッラーのお許しによるものでありアッラーの掟に背く者達を卑しめんとする心根には変りはないのだから」（クルアーン第 59 章 5 節）（注 4）。

（注 1）マディーナにおけるユダヤ三部族の一つ。

イスラームに敵対して滅ぼされる

（注 2）ナディール族の砦は周囲を厚いナツメヤシの林によって囲まれていて難攻不落の構えをしていた。

そこで戦術的に止むを得ず樹林を焼き払うか切り倒さざるを得なかった

（注 3）切り倒した者は果実を既に付けているナツメヤンの樹以外のもの、つまり若木だけを切り倒したの意

（注 4）敵の果樹といえどもそれを焼き払ったり切り倒すことは止むを得ざる場合以外は罪悪とみなされている。

ここでは預言者の命令を受けた信者達が動揺してある者はその時木を切り倒し、またある者はそれを差し控えたという意味であり、そのどちらの行為もこの場合罪にはならないとする啓示が下されたというわけだ

イブン・ウマルは次のように伝えている

アッラーの使徒はナディール族のナツメヤシの木を切り倒し焼き払った。

さてこれに関してハッサーンが詩を作った。

「ルアウィー族（注 1）の長老達にはいとたやすいことよ。

四方に燃えさかるブワイラの焼き打ちは」

またこの事件に関連して次の一節が啓示された。

「あなた方のうちナツメヤシの木を切り倒した者も、また（その木をそのまま）その根幹の

上に立たせておいた者も……」（注 2）。

（注 1）クライシュ族の異名

（注 2）クルアーン第 59 章 5 節

アブドッラー・イブン・ウマルは次のように伝えている

アッラーの使徒はナディール族のナツメヤシの林を焼き払った。

戦利品は特に（イスラーム）共同体のために合法となること

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

預言者達の一人（モーゼの後継者ヨシア）が聖戦を行った時、彼は仲間に向って次のようなことをいった。

次の者達は私についてくるな。

女性をめとり結婚を完了させたいと思いながらまだ果たせずにいる者、また家を建てたがまだ屋根をつけていない者、また孕んでいる羊またはラクダを買い子供が生れてくるのを待っている者。

こうして彼（預言者ヨシア）は聖戦に向った。

彼はアスルの礼拝（昼過ぎの礼拝）の時刻にある村に近づいた。

そこで彼は太陽に向ってこういった。

お前はアッラーの命ずるままだ。

私も然り、おおアッラー、太陽を私のために暫く止めて下さい。

こうしてアッラーが彼に勝利を授けてくれるまでそれ（太陽）は彼のために止まっていた。

そして人々はその戦争で得た戦利品を一ヵ所に集めた。

すると火がそれ（戦利品）を食べ尽くすために（空の方角から）近づいて来たのだが、しかしそれを食べなかった（注）。

そこで彼はこういった。

あなた方の中に戦利品を横領した者がいる。

すべての部族の中から一人ずつ私に忠誠の誓いを立てなさい。

そして彼らは彼に（手を差し出して）忠誠の誓いを立てた。

その時、一人の男の手が彼の手にくっついて動かなかった。

すると彼はこういった。

あなた方の中にその横領者がいるはずだ。

あなたの部族全員が一人ずつ私に忠誠の誓いを立てなさい。

それで彼らは彼に忠誠の誓いを立てた。

そのとき彼の手は彼らのうちの二、三人の者の手にくっついて動かなかった。

そこで彼は再びこういった。

あなた方の中には例の横領者がいる。

間違いなく横領したのはあなた方である。

すると彼らは雌牛の頭ほどの金塊を彼に差し出して地面に置いてある戦利品の中にそれを置いた。

それから火が近づきそれを食べ尽くした。

戦利品（の分配）は私達以前の人々には合法ではなかった。

しかしアッラーは私達の弱さとあわれな状態を見て戦利品を私達のために合法とされた

わけです。

（注）かつて戦利品は神に捧げるために火で焼却したという慣例と関係のある話しである

戦利品について（注）

（注）戦利品の分配についてはバドルの戦の直後に啓示が下り（第 8 章 41 節）、
その五分の一は使徒、彼の近親者、孤児、貧者および旅人のためにリザーブし、
残りの五分の四は戦闘に参加した戦士の間で分配することが定められた

ムスアブ・ビン・サアドは父からの伝聞として次のように伝えている

私の父（サアド）は戦利品のフムス（五分の一の意でアッラーと預言者に属する取り分）のうちから一振りの剣を取りそれを持って預言者の所に行きこういった。

「これを私に下さい」

しかし彼は断わった。

その時アッラーは次のような啓示を下した。

「彼らは戦利品について汝（預言者）に問うであろう。

云ってやるがよい。

（もともと）戦利品はアッラーと使徒のものである（注）」（第 8 章 1 節）

（注）戦闘参加の戦利品の取得は偶発的な余分なものであるという考えが根底にあるかのようだ。

いずれにせよ、このハディースは戦利品の確定的な分配に関する啓示が未だ下りる以前のものであり、

その啓示の後で預言者はサアドに「あなたの剣を取りなさい。

あなたはそれが私の物でもなくあなたの物でもない時に私にそれを求めた。

しかし今はアッラーがそれを私の物にしたのでそれを私はあなたの物にしてあげよう」といったことが後のハディースで伝えられている

ムスアド・ビン・サアドは父からの伝聞として次のように伝えている

クルアーンの中の四節が私（ムスアドの父サアド）のことを契機として下された。

（そのうちの一つは次の通りである（注））

私は戦利品の中に一振りの剣を見つけてそれを持って預言者のところにやって来た。

そして預言者に次のようにいった。

アッラーの使徒よ、それを戦利品の分け前として私に下さい。

すると預言者はそれを置きなさいといった。

それから彼（父）は立ち上がったが預言者は彼に次のようにいった。

それを取ってきたもとの場所に戻しなさい。

それから彼（父）は立ち上がりながら再びこういった。

アッラーの使徒よ、戦利品の分け前としてそれを私に下さい。

すると頚言者は再びそれを置きなさいといった。
それからまた彼（父）は立ち上がり預言者に次のようにいった。
アッラーの使徒よ、戦利品の分け前としてこれを私に下さい。
私は分け前のない者と同じですか？
そこで預言者は彼（父）にこういった。
それを取ってきた場所に戻しなさい。
そのとき次の一節が下りた。
「彼らは戦利品について汝（預言者）に問うであろう。
云ってやるがよい。
（もともと）戦利品はアッラーと使徒のものであると」（第 8 章 1 節）。

（注）残りの三節についてはここでは何も述べていない

イブン・ウマルは次のように伝えている
預言者はナジドへの遠征軍を送った。
そのとき私は彼らと一緒にいた。
そして彼らは戦利品としてたくさんのラクダを得た。
彼らのそれぞれの分け前はラクダ 12 頭か 11 頭であった。
また彼らにはさらに余分に一頭ずつのラクダが与えられた。

イブン・ウマルは次のように伝えている
アッラーの使徒はナジドへ遠征軍を送った。
そのときイブン・ウマルは彼らと一緒にいた。
そして彼らのそれぞれの分け前はラクダ 12 頭にもなった。
また彼らはそれ以外にもラクダ一頭がそれぞれ分け与えられた。
だがアッラーの使徒はこの分配を変更することはなかった。

イブン・ウマルは次のように伝えている
アッラーの使徒はナジドへ遠征軍を送った。
そのとき私は彼らと一緒に出陣した。
そして私達は戦利品としてラクダや羊を手に入れた。
私達の分け前はそれぞれにラクダ 12 頭になった。
またアッラーの使徒はその上に私達それぞれにラクダ一頭を余分に分け与えた。

このハディースは上記と同様の伝承者経路を経て**ウバイドッラー**によっても伝えられている。

イブン・アウンは次のように伝えている

私はナーフィウに戦利品について尋ねるために手紙を書いた。

すると彼は私に答えて次のように書いてきた。

イブン・ウマルは遠征軍の中にいた。

以下は前記のハディースと同じである。

サーリムは父からの伝承として次のように伝えている

アッラーの使徒は戦利品を私達の取り分（つまり五分の四）とは別に余分に分け与えて下さった。

それで私はシャーリフをいただいた（シャーリフとは年とった大きなラクダである）。

イブン・ウマルは次のように伝えている

アッラーの使徒は遠征軍に戦利品を分け与えた。

以下は前記ハディースと同じである。

アブドッラーは次のように伝えている

アッラーの使徒は遠征軍として送った小分隊には一般の大隊の分け前よりも何がしか多くの戦利品を分け与えたものでした。

ところであらゆる場合において戦利品の五分の一それは（アッラーと預言者のために取っておくことが）義務である。

戦闘で殺された者の所持品は殺した者に権利がある

アブー・カターダは次のように伝えている

私達はフナインの戦いの年アッラーの使徒と一緒に遠征に出かけた。
私達が敵軍と対戦したとき、ムスリム達（の幾人か）は恐れをなして逃げた。
私は多神教徒の一人がムスリムの一人を圧倒して押さえ込んでいる現場を見た。
そこで私は彼（多神教徒）の方に向きを変えて彼の後ろに回り込み彼の首と肩に一撃を加えた。
彼は私の方に向きを変えて私に掴みかかってきた。
彼との激しい格闘で私は今にも死にそうでした。
それからしばらくして死が彼の命を奪い、彼は私を手離した。
それから私はウマル・ビン・ハッターブに追い付いた。
その時彼は（退却中の）人々に何が起ったのだと云っていた。
私はそれはアッラーの定めであるといった。
それからしばらくして人々は戻ってきた（戦闘はムスリムの勝利に終わった）。
アッラーの使徒は（戦利品を分配するために）座らせた。
そして次のようにいった。
敵を殺しその証人がいる者は殺された相手の所持品を得ることができる。
そこで私は立ち上がり「誰か私のために証言していただけますか？」と云ってから座った。
それから彼（預言者）は前と同じ言葉を繰り返した。
私は再び立ち上がって「誰れか私のために証言して頂けますか？」と云ってから再び座った。
それから彼は三度目の前と同じ言葉を繰り返していった。
そこで私はもう一度立ち上がった。
するとアッラーの使徒は「どうしたのだ、アブー・カターダ」といった。
私は事の子細を語ったがその時仲間の一人が次のようにいった。
アッラーの使徒よ、彼は真実を述べました。
だが後が殺した敵の所持品は私が持っています。
それでどうか私のためにその権利を放棄するよう彼に説得して下さい。
アブー・バクル・スィッディークはこれに反対してこういった。
アッラーに誓ってそれはとんでもないことだ。
預言者はアッラーと彼の使徒のために戦うアッラーのライオンの権利を損ってまであなたに彼の戦利品の分け前を与えることは決して望まない。
すると彼（預言者）はこういった。
その通りだ。さあ彼（アブー・カターダ）にその品をあげなさい。
こうして彼はそれを私に与えた。

私は戦利品の分け前の一部である鎧を売りその代金でサリマ部族地区の果樹園を買った。
これが私がイスラームに入ってから初めて手にした持ち物である（注）。
ライスの伝えるハディースではこういっている
アブー・バクルはこれに反対して次のようにいった。
決して彼（預言者）は「アッラーのライオン中のライオンを差しおいてそれをクライシュ族の小ハイエナには」決して与えない。
また最後は単に「私が初めて手にした持ち物である」で終えている。

（注）法学派によっては戦利品は全て指揮官のもとに集められ、その分配は彼に一任されることが原則である（ハナフィー法学派）
ここでは指揮官としての預言者が聖戦参加奨励のための処置をとったと考えられる

アブドル・ラフマーン・ビン・アウフは次のように伝えている
バドルの戦の日、私が軍列に並んで立っていたときだったが私は自分の左右を見た。
それで私は未だ年若いアンサール（マディーナ出身の信徒）の二人の青年の間におりました。
私はこの二人よりももっと強壮な者の間にいたらよかったとその時は思った次第です。
ところでそのうちの一人が私に目で合図してこういった。
叔父さん（注 1）アブー・ジャフル（敵クライシュ族の大将）を知っていますか？
そこで私は「ええ知っているよ。
彼に何か用事があるのかね？
私の甥よ（注 2）」といった。
すると彼はこういった。
私は彼がアッラーの使徒を罵倒していると聞いています。
私の魂を手中にしているお方（アッラー）にかけてもし私が彼を見付けたならば（彼と格闘して）私はどちらかが先に死ぬまで決して彼を離さないでしょう。
そこで私はそのことに感心しました。
きてまたもう一人が私に目で合図をして同じことをいった。
きてこうして間もなく私はアブー・ジャフルが人々の間を動き廻っている姿を見ました。
そこで私はこういった。
「ほらお二人さん見なさい、あれがお前さん達が尋ねている人物だ」
すると二人は（それを聞くやいなや）彼に向って走っていった。
そして二人は彼に剣で殴りかかり彼を殺しました。
それから二人はアッラーの使徒の元に戻り彼に事の次第を話した。
すると彼（預言者）はどちらが彼を殺したのだと尋ねた。

すると二人とも「私が殺しました」といった。
そこで彼（預言者）は「二人とも剣を拭ったか？」と尋ねた。
それで二人は「いいえ」と答えた。
そこで彼は二人の剣を調べてから、「あなた方二人が彼を殺した」といった。
それから彼はアブー・ジャフルの所持品はムアーズ・ビン・アムル・ビン・ジャムーフの物であると決定を下した（その二人の若者とはムアーズ・ビン・アムル・ビン・ジャムーフとムアーズ・ビン・アフラーウである）（注 3）。

（注 1）単なる敬称である

（注 2）単なる愛称である

（注 3）預言者は二人の剣を調べて、ムアーズ・ビン・ジャムーフの剣の破損がより激しかったので彼が主に戦い、もう一人は助太刀をしたと判断して上記の決定を下したものと考えられる。
尚この決定権は指揮官に与えられている

アウフ・ビン・マーリクは次のように伝えている
ヒムヤル族出身の男が敵の一人を殺しその者の所持品を戦利品として取ろうとした（注 1）。
しかし彼らの指揮を取っていたハーリド・ビン・ワリードがそれを禁じた。
そこでアウフ・ビン・マーリク（このハディースの最初の伝承者）が預言者のところにやって来てそのことを彼に知らせた。
すると彼（預言者）はハーリドに尋ねた。
なぜあなたは彼に戦利品を与えないのですか？
そこでハーリドは答えてこういった。
アッラーの使徒よ、私はそれが多いと考えました。
すると彼（預言者）は「それを彼に与えなさい」といった。
さてハーリドがアウフのそばを通ったときアウフは彼の外套を引っ張って（苛立たしく）こういった。
預言者からの言葉として私があなたに伝えた通りのことが起ったかどうか私は見とどけていたでしょうかね？
（実際はそうでないのでこの件で預言者にまた苦情を云わねばならぬの意か）。
ところでこの言葉を耳にした預言者は怒りこういった。
ハーリドよ彼に与えることなかれ！

あなた達は私が任命した指揮官達を軽んじようとするのか？
あなたたちと彼らのことを例えるならばラクダや羊の世話を頼まれた男のようなものだ。
彼はそれに草を食べさせ、それから水をやる時間を見計らってそれらを水場に連れていった。
そこでそれらは水を飲み始める。
そして澄んだ水だけ飲んでしまい底に濁った水を残す。
つまり澄んだ水はあなたたち（一般の兵士）のもので彼等（指揮官）には濁った水だけが残されたようなものだ（注 2）。

（注 1）この事件はヒジュラ 8 年のムウタの役での出来事

（注 2）殺した者に戦利品を取る権利がありながらなぜ預言者はそれを禁じたのか？
それについて二つの事が考えられる。
第一は多分後でそれを殺した者に与えたであろうとするもの。
遅らせた理由はその男とアウフ・ビン・マーリクが指揮官の権威を侵害するようなことをいったので二人を戒めるためにそうしたとする。
第二には戦利品の権利者の心が良い方に変ることを期待して遅らせたとするもので、ここでは彼がそれを自分だけのものにするかそれともムスリム全体のために役立てるかは彼自身に任せたことになる

アウフ・ビン・マーリク・アシジャイーは次のように伝えている
私はムウタの役（注）でザイド・ビン・ハーリサの指揮下にある遠征軍に参加した。
そして私はイエメンからの支援部隊の者と一緒になった。
以下は次の部分を除いて前記のハディースと同じである。
私（アウフ）はこういった。
ハーリドよ、あなたはアッラーの使徒が戦利品は殺した者の物になると定められたことを知っていたはずです。
すると彼（ハーリド）はこういった。
確かにその通り、しかし私はそれが多すぎると考えたのです。

（注）イスラーム軍とビザンチン軍との間で 629 年に起きた戦いでムウタは死海の東南に位置する

サラマ・ビン・アクワウは次のように伝えている
私達はハワージンの戦いでアッラーの使徒と一緒に戦いました。
ある日私達がアッラーの使徒と朝食をとっていると赤いラクダに乗って一人の男がやって

来た。
彼はそのラクダをひざまずかせてラクダの腹帯から皮紐をとり出しそれでラクダを繋いだ。
それから彼は皆と一緒に食事を始めた。
そしてあたりをきょろきょろ見渡し始めた。
そのときの私達の状態は悪く乗り物にも事欠いていた状態であり、乗り物がなくて一部の者などは歩いていた。
突然その男は急いで私達の間から飛び出して彼のラクダの所に行き結んであった紐を解いてひぎまずかせてそれに乗り（ラクダを）立たせた。
そのとき急いで逃げるためにそのラクダは激しく鞭打たれた。
そこで茶色の雌ラクダに乗った男が彼の後を迫った。
サラマはさらにつづけてこういった。
私も急いで走って後を追いその雌ラクダの尻の所まで追い付き、それから逃げたラクダの尻の所まで追い付き、それからもっと近づき前のラクダの鼻綱を掴んだ。
そして膝まずかせた。
そこでそれが膝を地に着けるや否や即座に私は剣を抜きその男の頭に切りつけたので彼はどっと倒れた。
それから私は彼の荷物と武器を積んだラクダを連れて戻った。
そこへアッラーの使徒と彼と一緒にいる人々が私に会いに来た。
そして彼はこう尋ねた。
誰がその男を殺しましたか？
すると彼らは「イブン・アクワウです」といった。
そこで彼は「その男からの戦利品はすべて彼（イブン・アクワウ）のものです」といった。

戦利品の分配及びムスリムの身代金として敵の捕虜を解放すること（捕虜交換）

サラマ・ビン・アクワウは次のように伝えている

私達はファザーラ族と戦った。そのときアッラーの使徒が任命したアブー・バクルが私達の指揮官でした。

私達と敵の水飲み場との間の距離が一時間ほどになった時アブー・バクルは敵への攻撃を命じた。

そこで私達は夜半の間は行進を止めて休憩し、それから私達は敵を包囲し攻撃した。

そして私達は例の水飲み場へ到着してそこで敵のある者は殺しある者は捕虜にした。

そのとき私は女や子供が集まって逃亡する敵の一団を見た。

そこで私は彼らが私より先に山地に逃げ込むのではないかと恐れ、彼らと山の間に矢を射った。

すると彼らはその矢を見て立ち止まった。

そこで私は彼らを追い立てて連れ戻してきた。

さて彼らの中に皮のコートを着たファザーラ族出身の女性がいた。

彼女と一緒に娘がいて彼女はアラビアでもピカ一可愛い娘だった。

それで私は彼らをアブー・バクルの所まで連れてきた。

すると彼はその娘を戦利品の分け前として私に与えた。

さて私達はマディーナに到着したが私は未だその娘の服を脱がしていなかった。

ところでアッラーの使徒が市場で私に会いこういった。

サラマよその娘を私に下さい。

そこで私はこういった。

アッラーの使徒よ、アッラーに誓って彼女は私を魅了して止みません。

私はまだ彼女の服を脱がしてはいません。

それからまた次の日にアッラーの使徒が市場で私にまた出会って私にこういった。

サラマよその娘を私に下さい。

アッラーがあなたの父を祝福することでしょう。

そこで私はこういった。

「彼女はあなたのものです、アッラーの使徒よ。

アッラーに誓って私は彼女の服を脱がしていません」

ところでアッラーの使徒は彼女を（敵側の）マッカの人々に送った。

彼はマッカで捕虜となっていたムスリム達の幾人かを釈放する身代金代りに彼女を引渡したのです。

ファイウ（戦闘なしに敵から入手した財産）に関する規定

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

もしあなた達が無信仰者の村に来て戦うことなく村を明け渡され、そこに住んだならば彼らから得た財産はあなた方の分け前となる。
つまりそれはファイウとなりすべてのムスリムのものとなる。
しかしもしその村がアッラーとその使徒に反抗してムスリムたちと戦ったならばそこでの戦利品の五分の一はアッラーとその使徒のものになり、後の残りはあなた達のものとなる。

ウマルは次のように伝えている

ナディール族が残していった財産はムスリム達が馬やラクダを駆り立てることなく得たものでアッラーがその使徒に特に与えたものである。
それは預言者にとっての私的財産であった。
彼はその中の一部を家族のための一年分の経費に当て残りはアッラーの道のため（聖戦）の準備として軍馬や武器の購入に当てた。

同様のハディースが**ズフリー**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

ズフリーはマーリク・ビン・アウスが次のように語ったとして伝えている

ウマル・ビン・ハッターブが私に使いの者をよこした。
そこで私は太陽が高く昇った頃に彼のもとへ行った。
彼はその時むき出しの簡易ベッドの上にじかに座り皮製の枕に寄りかかっていたが、私にこういった。
マーリクよあなたの部族の数家族の者達が（私に助けを求めて）急いでやってきた。
私は彼らに多少の金品を与えることにした。
だからそれを取って彼らに分配してくれ。
そこで私（マーリク）はこういった。
この儀ばかりは他の者にお命じ下さいますように。
すると彼は「マーリクよそれを取りなさい（そして云われた通りにしなさい）」といった。
その時彼の召使いのヤルファーが入って来て次のようにいった。
信者の統率者（カリフ）よ、あなたはウスマーンとアブドル・ラフマーン・ビン・アウフとズバイルとサアドに面会の許可を与えますか？
するとウマルは「はいどうぞ」と云って彼らに許可を与えた。
それで彼らは入ってきた。
それからしばらくしてヤルファーが再び入って来て「アッバースとアリーにも面会の許可を与えますか？」と尋ねた。

そこでウマルは「ええどうぞ」と云って二人に許可を与えた。
そこでアッバースがまずこういった。
信者の統率者よ、私とこの嘘付きで罪深い裏切り者で不誠実な男（注 1）との間を裁いて下さい。
するとそこに居合わせた人々は一斉に「その通り信者の統率者よ二人の間を裁いて彼らに安らぎを与えて下さい」（注 2）といった。
ここでマーリク・ビン・アウフはこう（感想を）述べている。
彼らはこのことに関して前もって連絡しあいここにやって来たにちがいない。
いずれにせよそこでウマルはこういった。
二人ともちょっと待ちなさい。
それから天も地も彼のお許しによって支えられているお方アッラーにかけて私はあなた方にお願いします。
あなたたちはアッラーの使徒が「我等（預言者）には相続人はいない、我等が残したもの（遺産）はサダカ（慈善）とならん」といったことをご存知ですか？
すると彼らは「はい知っています」といった。
それから彼はアッバースとアリーの方に向き直ってこういった。
天も地も彼のお許しによってはじめて支えられているお方アッラーに誓ってあなた達二人にお願いします。
あなた達二人はアッラーの使徒が「我等（預言者）には相続人はいない、我等が残したものはサダカとならん」といったことを知っていますか？
すると二人は「はい知っています」といった。
そこでウマルはこういった。
自ら崇高にして最強におわすアッラーは彼の使徒に特別な恩恵を与えたが彼以外の誰れにもそれを与えなかった。
そして彼はクルアーンの次の一節を誦んだ。
「アッラーが村々の民から戦利品として使徒に与えたものはアッラーのもの（注 3）であり使徒のものである」（第 59 章 7 節）。
ところでここでマーリクはこの節の前の節を彼が読んだかどうかは私は知らないと述べている。
さて彼（ウマル）はさらに続けてこういった。
アッラーの使徒はナディール族の財産をあなた達に分け与えた。
アッラーに誓って彼は決して独り占めにしなかったし、またあなたたちをさしおいてそれを専有することもなかった。
そして（全て公平な分配が終った後）遂にこの財産が残った。
アッラーの使徒はその中の一部を彼の一年間の生活費に当てそして残った財産は国庫に入れた。

それからさらに彼（ウマル）はこういった。
天も地も彼のお許しによって支えられているお方アッラーに誓ってあなたたちにお願いします。
あなたたちはこのことをご存知ですか？
すると彼らは「はい知っています」といった。
それから彼（ウマル）はアッバースとアリーに向き直って前の人達に嘆願したように嘆願してから「あなた達二人はご存知ですか？」と尋ねた。
そして二人は「はい知っています」と答えた。
そこで彼は次のように語った。
アッラーの使徒が他界したとき、アブー・バクルが「私はアッラーの使徒の後継者である」といった。
そこへあなたたち二人が来てあなた（アッバース）は甥（他界した預言者）の遺産を要求し、またあの者（アリー）は自分の妻の父（預言者）の遺産を要求した。
その時アブー・バクルはこういって預言者の言葉をあなた方に伝えた。
アッラーの使徒は「我等には相続人はいない、我等が残したものはサダカとならん」といった。
するとあなた達二人は彼（アブー・バクル）を嘘つきで罪深く裏切り者で不誠実な男であると考えた。
だがアッラーに誓って彼は正直者で公正で真理に導かれ真実に従う者である。
それからアブー・バクルが他界して私がアッラーの使徒とアブー・バクルの後継者になりましたがあなた達二人は私を嘘つきで罪深く裏切者で不誠実な男と考えました。
しかし私が正直で公正で真理に導かれて真理に従う者であることはアッラーがご存知です。
それで私がこの財産を守ることになったのです。
それからあなたとこの者が私の所にやって来たがあなた達二人は一緒であり望むところは一つである。
それであなた達二人は「それ（預言者の残した財産）を私達に払って下さい」といった。
それで私はこういった。
もしあなた達が望むならばアッラーの使徒がそれを使っていた使い方であなた達もそれを使うということをアッラーに誓約するという条件で私はあなた達にそれを支払います。
そしてあなた達二人はそのように行うということでそれを受け取った。
そうでしょう？
そこで二人は「はいその通りです」といった。
さて彼（ウマル）はさらにつづけてこういった。
それからまたあなた達二人は私の所にやって来てあなた達の中を私に裁いてもらいたいという。

だが私はアッラーに誓って終末の日が来るまであなたたちの間をこれ以上は決して裁かない。
もしあなた達二人があの財産をこの条件では管理できないというのであるならばそれを私に返しなさい。

（注 1）預言者の残した遺産のことてアッバースとアリーの間にもめごとが起り、遂にこのようなののしりの言葉となったもの。
しかしこれはあくまでも一時的なことでありアッバースがアリーをいつもこのように考えていたわけではない

（注 2）二人の争いの争点は預言者自らがその使用目的をはっきりと設定した彼の遺産の管理をめぐるものだった

（注 3）戦利品がアッラーのものとはそれが神に属し神の道のために役立てるべきものという意味で現実的には公共の利益を第一義として状況に応じて指導者の判断によって配分された

マーリク・ビン・アウスは次のように伝えている

ウマル・ビン・ハッターブは私の所に使いをよこしてこういった。
あなたの部族の中の数家族が私のところにやって来た。
以下は次の部分を除いて前記のハディースと同じである。
「彼はその一部を家族のための一年分の計費として使い」、また多分伝承者の一人マアマルは次のようにいった。
彼はその一部でもって彼の家族の食糧を一年分確保しそして残った分を自ら最強にして崇高におわすアッラーの財産としてしかるべき使途（ムスリム社会の公共の利益）のために使った。

預言者の言葉「我ら（預言者）には遁産相続人なし、我らが残したものはサダカ（慈善）とならん」について

アーイシャは次のように伝えている

アッラーの使徒が他界したとき彼の妻達はウスマーン・ビン・アッファーンをアブー・バクルのもとに送って預言者が彼女たちへ残した遺産について（アブー・バクルに）尋ねようとした。

そのときアーイシャは彼女達に次のようにいった。

アッラーの使徒は「我ら預言者達には遺産相続人はいない、我らが残したものはサダカ（慈善）とならん」と云いませんでしたか？

ウルワ・ビン・ズバイルはアーイシャを経て次のように伝えている

アッラーの使徒の娘ファーティマ（アリーの妻）はアッラーの使徒の遺産の中から彼女の相続分について尋ねるためにアブー・バクルに使いを出した。

その遺産はアッラーが彼の使徒にマディーナとファダクで与えたもの、また使徒がハイバルで得た五分の一税の残りからなっていた。

そこでアブー・バタルは次のように伝えた。

アッラーの使徒は「我ら預言者らには相続人はいない、我らが残したものはサダカ（慈善）とならん」といった。

ムハンマド様の家族はこの財産で生活するにせよ私はアッラーに誓ってアッラーの使徒の時代に行われていたサダカの慣行を少しでも変えるつもりはありません。

私はこれに関してまさにアッラーの使徒が行ったように行うつもりだ。

こうしてアブー・バクルはその中からファーティマに何がしかを渡すことさえ拒んだ。

それでファーティマはそのことでアブー・バクルに怒っていた。

彼女は彼との関係を絶ち、他界するまで彼と喋らなかった。

彼女はアッラーの使徒の死後六ヵ月間生きていたが彼女が他界したとき彼女の夫アリー・ビン・アブー・ターリブは夜間に彼女の遺体を埋葬した。

そして彼は彼女の他界についてアブー・バクルに知らせることなく自ら彼女のために葬礼礼拝をとり行った。

アリーは彼女の存命中、人々から注目され、敬意を払われていたが彼女が他界すると彼は人々の敬意が疎遠になるのを感じた。

それで彼はアブー・バクルに和解を求めカリフとしての忠誠を彼に誓うことを申し出た。

実際彼はここ数ヵ月の間だがカリフへの忠誠の誓いを行っていなかった。

それで彼はアブー・バクルのもとに人を使わして一人で彼（アリー）を訪れることを要請した（ウマル・ビン・ハッターブが一緒についてくることを嫌ったので）。

けれどもウマルはアブー・バクルに「アッラーに誓ってあなた一人で彼らの所を訪れるべき

ではない」といった。
だがアブー・バクルはこう云って彼らの所を一人で訪問した。
彼らが一体私に何をすると云うのかね？
アッラーに誓って私は彼らのもとを訪れます。
こうしてアリー・ビン・ターリブはタシャッフド（証言儀礼の言葉）を唱えてからこういった。
アブー・バクルよ、私達は確かにあなたの高徳とアッラーがあなたに与えたものを認めております。
私達はアッラーがあなたにお与え下さった恩恵（カリフの地位）のことで決してあなたを妬んだりはしません。
しかしあなたは私達に相談することなしに（カリフに就任することを）一人で決めてしまいました。
私達はアッラーの使徒の親類であるゆえに相談される権利があるものと考えていました。
こうして彼（アリー）はアブー・バクルの目に涙が溢れるまで話しつづけた。
それからアブー・バクルは口を開きこう語った。
私の魂がその手中にあるお方（アッラー）に誓ってアッラーの使徒の親族は私にとって自分の親類よりももっと大切です。
ところで私とあなた達の間で起きたこの財産についての争いに関して云えば私はそれについて正しい道をそらしたつもりはない。
また私はアッラーの使徒が行ったことをことごとくその通りに忠実に実行し一度もそれを無視したことはない。
するとアリーはアブー・バクルにこういった。
私のあなたへのカリフ承認の誓約の期日は今日のアシーヤ（午後）にしましょう。
さてアブー・バクルはズフル（昼）の礼拝を済ませた後に、説教台に上りタシャッフド（証言儀礼）を行いアリーの近況と彼の誓約承認の延期及び彼が申し出たその理由などを述べた。
その後彼（アブー・バクル）はアッラーに許しを求めて祈った。
そしてアリーもまた同じくタシャッフドを行い、アブー・バクルの正しさを称揚した。
そして彼（アリー）は彼の行為がアブー・バクルに対する嫉妬やアッラーが彼（アブー・バクル）に特に授けた地位を否認するためではないと云い、さらに次のように言葉をつづけた。
そうではなく私達はそのことに関して何か果すべき役割があると考えていました。
だがそれは私達に知らされることなく決められてしまいました。
それ故にそのことが私達を不愉快にさせたのです。
するとムスリム達は彼のこの説明を聞いて喜び「あなたは正しいことをしました」といった。
かくてアリーが適切な行動をとった（カリフの誓約を承認しそれに従ったこと）とき、ムスリム達はアリーに親愛の情を持つに到った。

アーイシャは次のように伝えている

ファーティマとアッバースがアブー・バクルの所にアッラーの使徒の二人への遺産を求めてやって来た。

その時二人はファダクの彼（預言者）の土地とハイバルでの彼の割当分を求めた。

それでアブー・バクルは二人に次のようにいった。

「私はアッラーの使徒が次のように云っている言葉を聞いた」といって前記のハディースとほぼ同じ意味のハディースを引用した。

しかしそれはここでは次のような追加表現が加えられている。

それからアリーは立ち上がり、アブー・バクルを称揚し、彼の優秀さを述べまた彼が早々とイスラームに帰依したこと（注）を述べた。

それからアブー・バクルのもとに進み出て彼をカリフとして承認する忠誠の誓いを立てた。

このとき人々はアリーの方を向き、「あなたは正しく、良い行いをしました」といった。

かくしてアリーが適切な行動をとったとき人々は彼に親愛の情を持った。

（注）アブー・バクルは預言者の妻ハディージャについで早くイスラームに帰依した。

つまり成人男子として最も早くイスラームに入信した

ウルワ・ビン・ズバイルは預言者の妻アーイシャからの伝聞として次のように伝えている

アッラーの使徒の死後、使徒の娘ファーティマはアッラーが彼の使徒に授けたもののうち彼（預言者）が後に残したものの中から彼女の遺産分を配分するようアブー・バクルに求めてきた。

するとアブー・バクルは彼女に次のようにいった。

アッラーの使徒は「我ら預言者には遺産相続人はいない、我らが残したものはサダカ（慈善の基本財）となる」と云いました。

伝承者はつづいてこう語っている。その後彼女（ファーティマ）はアッラーの使徒の死後六ヵ月間生きていた。

その間ファーティマはアブー・バクルにハイバルとファダクからあがる持分とマディーナにある彼（預言者）の慈善の基本財とからなるアッラーの使徒が残したものの内から彼女の遺産配分をいつも要求していました。

ところがアブー・バクルは彼女にそのことを断ってこういった。

私はアッラーの使徒が行ったことを決してないがしろにしない。

それどころか私はそれをそっくりそのままその通りに行ってきた。

もし私が彼の指示の一部でも放棄したならば私は正道からそれてしまうことになりそのことを私は恐れています。

マディーナにある彼（預言者）の慈善の基本財について云えばウマルがアリーとアッバースに渡しました。

しかしアリーがアッバースを制してそれを専有しています。
ハイバルとファダクの遺産について云えばウマルかそれを管理している。
だがそれは双方ともアッラーの使徒のサダカである。
それは双方とも彼（預言者）の双肩にかかっていた責任を果すためにかつまた彼が遭遇する緊急事態に対処するために使われていた。
そしてこの二つの管理は社会全体を管理する者の手にゆだねられていた。
ここで伝承者はこう付け加えている。
かくしてこの二つは今日までそのようにして管理されております。

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
私の相続人は、一ディーナールさえも（私の遺産の中から）受け取ることはできない。
私が残した遺産の中から私の妻達へ生活費と使用人の手当を支払った残りはサダカ（慈善基金）である。

前記と同様のハディースが**アブー・ズィナード**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている
我ら預言者達は遺産相続されることはない。
我らが残したものはサダカである。

参戦者への戦利品の分配方法

イブン・ウマルは次のように伝えている

アッラーの使徒は戦利品を騎士には割合二、歩兵には割合一で分配した。

同記のハディースが**ウバイドッラー**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは「戦利品を」の一語は記されていない。

バドルの戦における天使達の支援と戦利品の許可

ウマル・ビン・ハッターブは次のように伝えている

バドルの戦い（注 1）のあった日だった。

戦場でアッラーの使徒は多神教徒を見渡したが、彼らはざっと千人の軍勢であり、これに対して味方は 319 人だった。

そこでアッラーの預言者はキブラ（注 2）に顔を向けそれから天に向かって両手を広げ彼の主に大声で祈り始めた。

おおアッラー、あなたが私に約束して下さったことをどうか私に果たさせたまえ。

おおアッラー、あなたが私に約束して下さったことを私にお与え下さい、おおアッラー、もしムスリムのこの集団が滅ぼされたならば地上にはあなたに仕える者は誰一人としていなくなるでしょう。

こうして彼は両肩から外套が落ちるまでキブラを向いて両手を広げ彼の主に大声で祈りつづけた。

そこへアブー・バクルが来て彼の外套を拾い上げ彼の両肩に着せてあげた。

そして彼（アブー・バクル）は彼（預言者）を後ろから抱きしめてこういった。

アッラーの預言者よ、あなたの主への祈りをあなたは充分に行われました。

主はあをたに約束されたことを果して下さるでしょう。

そこで自ら栄光に満ち崇高におわすアッラーは次のような啓示を下した。

「汝が主に援助を嘆願したときのことを思い起すがよい。そのとき主は汝にお答えになり“われは次々に天降る一千の天使の援助をつかわそう”と仰せられた」（第 8 章 9 節）。

かくてアッラーは天使達を差し向けて彼を助けたもうた。

さてアブー・ズマイルはイブン・アッバースからの伝聞として次のように伝えている。

その日（注 3）、ムスリムの一人が彼の前を走っていた多神教徒の一人を追跡していた。

その時彼の頭上で鞭を打つ音と「ハイズーム（注 4）前へ進め」という騎士の声を耳にした。

そして彼は前を走っている多神教徒が仰向けに倒れるところを見た。

そこで彼は注意深く倒れた男を見た。

すると驚いたことにその男はあたかも鞭で叩かれたかの様に鼻に傷跡を残し顔が割れていた。

そしてその部分が全て緑色に変色していた。

さて一人のアンサーリー（マディーナ出身のムスリム）がやって来てアッラーの使徒にそのことを話した。

すると彼は次のようにいった。

あなたは真実を語りました。それは第三層の天（注 5）からやって来た支援軍です。

さてムスリム達はその日 70 人の敵を殺し 70 人の敵を捕虜にした。

ところでアブー・ズマイルはイブン・アッバースからの伝聞として次のように伝えている。

彼らが捕虜をつかまえた時、アッラーの使徒はアブー・バクルとウマルにこれらの捕虜についてどう考えるか尋ねた。
するとアブー・バクルは次のようにいった。
アッラーの預言者よ、彼らは私達の親類縁者です。
私は彼らから身代金を取り彼らを解放するのが良策と考えます。
それにそれ（身代金）は無信仰者に対抗する私達の力となるでしょう。
またこのことでアッラーがきっと彼らをイスラームに導いて下さるかも知れません。
するとアッラーの使徒は「イブン・ハッターブ（ウマル）よ、あなたはどう考えますか」と尋ねたが、そこで私（ウマル）はこう答えた。
いいえアッラーに誓ってアッラーの使徒よ、私はアブー・バクルの考えとは違います。
それで私の考えとしては彼らを私に任せて下さい。
そうすれば私達は彼らの首をすべてはねます。
またアリーにはアキールをお渡し下さい。
そうすればアリーは彼の首をはねることでしょう。
そして私には某人物（ウマルの縁者）をお任せ下さい。
そうすれば私が彼の首をはねましょう。
なぜならば彼らは無信仰者の指導者達でありその中でも老練な者達であるからです。
ところがアッラーの使徒はアブー・バクルのいったことに賛成したが（ウマル）のいったことには賛成しなかった。
その次の日、私（ウマル）はアッラーの使徒の所にやって来た。
すると驚いたことに彼とアブー・バクルが涙を流しながら座っているではありませんか。
そこで私はこういった。
アッラーの使徒よ、なぜあなたとあなたの友が泣いているのですか？
教えて下さい。
それでもしその訳が分かれば私も泣きましょう。
またその理由がたとえ分らなくとも私はあなたがたの涙につられて泣きましょう。
するとアッラーの使徒は次のようにいった。
あなたの仲間達が私に捕虜から身代金を取るようにと提案したという事実が実際に起こってしまったことに泣いているのです。
彼らが（来世で）受ける責めを私は見せつけられたが（かたわらの木を示しながら）それはこの木よりも近かった。
かくして自ら栄光に満ち崇高におわすアッラーはそのとき次のような啓示を下した。
それは**「この地で（敵軍に対して）完全に勝利を収めるまでは捕虜を捕えることは使徒にとって相応わしくない」**から次の一節
「だが今日は汝（預言者）が得た戦利品を合法でまた清いものとして受けよ」（第 8 章 67-69 節）までである。

このようにアッラーは戦利品を彼らにとって合法なものとした。

（注 1）マディーナの北に位置する泉の名前、この戦はヒジュラ 2 年に起ったが数的に劣勢なムスリム軍が決定的な勝利をおさめ以後歴史の流れが変る

（注 2）マッカのカーバ神殿の方角

（注 3）バドルの戦の日

（注 4）天使の馬の名前

（注 5）天は七層からなると考えられていた

捕虜を縛り、監禁することについて、また身代金なしの捕虜解放の正当性について

アッラーの使徒はナジドへ騎兵隊を送った。
彼らはハニーファ族出身の男を捕えて来た。
その男はスマーマ・ビン・ウサールと呼ばれていたが彼はヤマーマの人々の首長であった
ところで（捕えた）人々は彼をモスクの柱の一つに縛りつけた。
そこへアッラーの使徒が出て来て「スマーマよ、お前はどのように扱ってほしいか？」と尋ねた。
すると彼は答えてこういった。
ムハンマドよ、私に良い考えがある。もし（私を）殺すならあなたはただ血を流した者を殺すことになるでしょう。
またもし恩恵を与えて下さるならあなたはそれに感謝する者に与えることになるでしょう。
またもし富（身代金）を望むならそれを要求しなさい。
きっとあなたは望むだけ与えられるでしょう。
ところでアッラーの使徒は彼を翌々日までそのままにしておいた。
そして再び「スマーマよお前をどのように扱ってほしいか？」と尋ねた。
すると彼は答えてこういった。
既にあなたにいった通りです。
もし（私に）恩恵を与えて下さるならあなたはそれに感謝する者に与えることになるでしょう。
またもし（私）を殺すならあなたはただ血を流した者を殺すことになるでしょう。
またもし富（身代金）を望むならそれを要求しなさい。
きっとあなたは望むだけのものが与えられるでしょう。
さてアッラーの使徒はさらに彼を翌日までそのままにしておいた。
そして再度「スマーマよ、お前をどのように扱ってほしいか？」と尋ねた。
彼はそれに答えてこう繰り返した。
既にあなたにいった通りにして欲しいです。
もし恩恵を与えて下さるならあなたはそれに感謝する者に与えることになるでしょう。
またもし殺すならあなたはただ血を流した者を殺すことになるでしょう。
またもし富（身代金）を望むならそれを要求しなさい。
きっとあなたは望むだけ与えられるでしょう。
そこでアッラーの使徒は「スマーマを解放しなさい」といった。
すると彼（スマーマ）はモスクの近くにあるナツメヤシの木のかたわらの水場に走って行き体を洗って浄めた。
それからモスクに入り次のようにいった。
私はアッラーの他に神なしと証言する。

私はムハンマドが彼の下僕であり使徒であることを証言する。
ムハンマドよ、アッラーに誓って私にとってあなたの顔より嫌いな顔はこの地上にはなかった。
だが今ではあなたの顔は私にとって全ての顔の中で最も好きな顔になりました。
アッラーに誓って私にとってあなたの宗教より嫌いな宗教はなかった。
しかし今はあなたの宗教が私にとって全ての宗教の中で最も好きな宗教となりました。
アッラーに誓って私にとってあなたの町より嫌な町はなかった。
しかし今はあなたの町が私にとって全ての町の中で最も好きな町となりました。
ところであなたの騎兵隊が私を捕えた時私はウムラ（注）をしようと思っていました。
さてこれについてあなたはどのように考えますか？
するとアッラーの使徒は（それはよいこととして）彼を祝福しウムラを行なうことを命じた。
そして彼がマッカに到着したとき、彼に一人の男が「あなたは宗旨変えをしたのか？」と尋ねた。
すると彼はこういった。
いいえそうではなく私はアッラーの使徒とともにイスラームに入りました。
アッラーに誓って以後アッラーの使徒が許可を出すまではあなた達のもとには一粒の小麦もヤマーマからは決して届かないことでしょうよ。

（注）季節外れのマッカ巡礼のことで小巡礼ともいう。
イスラーム以前にアラブ人はこのような大巡礼、小巡礼を行っていた

アブー・フライラは次のように伝えている
アッラーの使徒はナジド方面に彼の騎兵隊を送った。
彼らはスマーマ・ビン・ウサール・ハナフィーと呼ばれていた男を捕えて来たがその男はヤマーマの人々の首長であった。
そして以下の傍線部を除いては前記のハディースと同じことを伝えた。
もしあなたが私を殺すなら、あなたはただ血を流した者を殺すことになるでしょう。

ヒジャーズ地方からユダヤ人を追放

アブー・フライラは次のように伝えている

私達がモスクにいたとき、アッラーの使徒が私達のところにやって来て「ユダヤ人のところに行こう」といった。

それで私達はモスクを出て彼と一緒に彼らのところへやって来ました。

そこでアッラーの使徒は立ち止まり彼ら（ユダヤ人に）次のように云って呼びかけた。

ユダヤの人々よ、イスラームを受け入れなさい。

そうすればあなたたちは安全です。

すると彼らユダヤ人達はこういった。

アブー・カーシム（預言者の悼名）よ、既にあなたは（アッラーのメッセージを私達に）伝えています。

そこでアッラーの使徒は彼らにこういった。

私はそう（既にメッセージを伝えたこと）望んでいるのですよ。

皆さんイスラームを受け入れなさい。

そうすればあなたたちは安全です。

すると彼らはこう繰り返した。

アブー・カーシムよ、既にあなたは伝えています。

そこでアッラーの使徒は再びこういった。

私はそう望んでいるのですよ。

こうして彼は三度目も同じことをいったが今度はそれに続いて次のようにいった。

大地はアッラーと彼の使徒のものであることを知りなさい。

私はあなたたちをこの土地から追放します。

だからあなたたちのうちで財産を持っている者はそれを売りなさい。

さもなくば大地がアッラーと彼の使徒のものであることを知らされるでしょう（全てを失って追い出されることになるでしょうの意）。

イブン・ウマルは次のように伝えている

ナディール族とクライザ族のユダヤ二部族はアッラーの使徒に歯向って戦をいどんだ。

アッラーの使徒はナディール族を追放したがクライザ族には居住を許し恩恵を与えた。

だがそれもクライザ族がその後再び彼と戦った時までであった。

そのとき彼（預言者）は彼らのうち男は殺し、女と子供と財産は（戦利品として）ムスリム達の間で分けた。

しかし彼らのうち幾人かはアッラーの使徒に従い彼も彼らを保護したので彼らはイスラームに入信した。

そしてアッラーの使徒はマディーナのユダヤ教徒の全てを追放した。

即ちカイヌカーア族（彼らはアブドッラー・ビン・サラームの一族）、ハーリサ族のユダヤ人及びマディーナにいた全てのユダヤ人を追放した。

上記と同様のハディースが**ムーサー**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしイブン・ジュライジュを経て伝えられているハディースはより詳細でより完璧である。

アラビア半島からユダヤ人とキリスト教徒を追放する

ウマル・ビン・ハッターブはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

私は必ずユダヤ教徒とキリスト教徒をアラビア半島から追放する。

そしてムスリム以外はそこに残さない。

同様のハディースが**アブー・ズバイル**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アラビア半島からユダヤ人とキリスト教徒を追放する

ウマル・ビン・ハッターブはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

私は必ずユダヤ教徒とキリスト教徒をアラビア半島から追放する。

そしてムスリム以外はそこに残さない。

同様のハディースが**アブー・ズバイル**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

誓約違反者を殺すことは許されること、また籠城した人々を公正な裁定者の仲介によって降状させることは許される

アブー・サイード・フドリーは次のように伝えている

クライザ部族の人々はサアド・ビン・ムアーズが仲介をするという条件で降伏した。
そこでアッラーの使徒はサアドに使いを出した。
すると彼はすぐにろばに乗ってやって来た。
そして後（サアド）がモスクに近づいた時アッラーの使徒はアンサール（マディーナのムスリム達）に「あなた達の首長を迎えるために立ちなさい」といった。
それから彼（預言者）はサアドに向って「この者達（クライザ族）はあなたの仲介による裁定を受け入れて降伏しました」といった。
すると彼（サアド）は「あなたは彼らのうち戦闘員は殺すことができるでしょう。
また女子供は捕虜にすることができるでしょう」といった。
そこで預言者は「あなたはアッラーの判決でもって裁きました」といった。
または「あなたは王者の判決でもって裁きました」といったとあるが、しかしイブン・ムサンナーは彼の伝承の中で最後の一節を伝えていない。

同様のハディースが**シュウバ**によって同様の伝承者経路を経て伝えられている。
しかし彼の伝承ではアッラーの使徒は次のようにいったとして伝えている。
確かにあなたはアッラーの判決でもって彼らを裁定しました。
つづいて彼はもう一度いった。
確かにあなたは王者の判決でもって裁定しました。

アーイシャは次のように伝えている。

サアドはハンダクの戦の日負傷した。
名前をイブン・アリカというクライシュ族の男が射かけた矢が前腕中部の動脈を貫いて負傷した。
それでアッラーの使徒は彼のためにモスク内にテントを張った（注 1）。
それは間近でサアドの病状を見舞うためでもあった。
アッラーの使徒はハンダクから帰ってくると武器を置き全身沐浴をした。
すると天使ガブリエルが彼が頭の埃を払う間に（戦場から帰ってすぐの意）現われてこういった。
あなたは武器を置いたのですか？
アッラーに誓って私達（天使）は未だ武装解除していませんよ、さあ彼等（敵）に向かって出撃しなさい。
そこでアッラーの使徒は「（敵は）どこにいるのですか？」といった。

すると天使はクライザ族の方角を指し示した。
そこでアッラーの使徒は彼等と戦った。
彼等はアッラーの使徒に条件付で降服したが使徒はその条件をサアドにゆだねた。
そこでサアドはこういった。
私は彼等について戦闘員は処刑、非戦闘員は捕虜、彼等の財産は没収(注 2)して分配と裁定する。

(注 1)こうすれば病人や負傷者でもモスク内で過すことができるしまた寝ることも自由である

(注 2)この裁定は厳しいようだかトーラの教えに基いたもので彼等の間に不満はなかったとされている

ヒシャームは父からの伝聞として次のように伝えている
アッラーの使徒は(サアドに)こういった。
確かにあなたは彼ら(クライザ族)を自ら栄光に満ち崇高におわすアッラーの判決でもって裁定しました。

アーイシャは次のように伝えている
サアドは彼の傷口が乾き治り始めたときアッラーに次のように祈った。
おおアッラー、あなたのご存じの通り私にはあなたのために戦い、あなたの使徒を嘘つき呼ばわりし追い出した者達と戦うこと以外に望むことはありません。
おおアッラー、もしクライシュ族との戦いでまだ何か残っているならば私はあなたのために彼らと戦いたいので私の命を永らえさせて下さい。
おおアッラー、あなたは私達と彼らとの戦いを既に終結させたと私には思えるのですがもしそうならば私の傷口を大きく割りそれによって私を死なせて下さい(そして殉教死させて下さいの意)。
それで彼の胸の上部から傷口が裂けて血がモスクの人々の方に流れて行き、彼らを驚かせた。
(モスクには他にギファール族のテントもあったのでそこから流血したと思い驚いた)
それでモスクの人々はこういった。
テントの人々よ、あなたたちの方から私たちの方に流れてきているものは何ですか？
丁度その時サアドは傷口からおびただしい血を流しつづけてその場で死んだ。

同様のハディースが**ヒシャーム**によって別な伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは多少の表現上の違いがあり彼は次のように伝えた

彼の傷口はその夜大きく裂け出血をつづけ遂に他界した。
(「彼の胸の上部」という語句が「その夜」に変っているが、これは単なるスペルの間違いによるものとイブン・ハジャルは主張している)
またヒシャームはそのとき詩人が次のように詩を読んだとして伝えている。
よく聞けサアド、ムアーズ族のサアド
クライザとナディールが何をしたというのか？
君の生涯にかけてサアドよ、ムアーズ族のサアドよ
彼らが出発した早朝、彼（サアド）こそ実に辛抱強かった
あなたたち（アウス族）は空鍋をむなしく残しただけだ（注 1）
人々（ハズラジュ族）の鍋は熱く煮立っているのに（注 2）寛大な男アブー・フバーブ（注 3）はいったものだ
カイヌカーア族よ出て行くことはない。
このままここに住みなさい
彼ら（クライザ族）は彼らの市街区で実に財豊かにして堅固であったのだ
マイターンにある岩が堅固なように

（注 1）同盟ユダヤ部族であったクライザ族が集団処刑されて同盟者の数が少くなったということ

（注 2）同盟ユダヤ部族であったカイヌカーア族を預言者にうまく取り執したハズラジュ族の場合は同盟者数が多いそのさま

（注 3）悪名高い偽信者アブドッラー・ビン・ウバイのこと

襲撃は敏速に、またよりさし迫った行動を優先すべきこと

アブドッラーは次のように伝えている

アフザーブ（部族連合）の戦いから戻ってきた日、アッラーの使徒は私達に次のように呼びかけた。

決してクライザ族の所に着くまではズフル（正午過ぎ）の礼拝を誰れも行ってはいけない。

ところである若者達は礼拝の時間が過ぎてしまうことを恐れてクライザ族の所に着く前に礼拝を行った。

そのとき他の者達はこういった。

たとえ礼拝の時刻が過ぎようとも私達はアッラーの使徒が我々に命じた場所以外では礼拝を行わない。

さて彼（アッラーの使徒）はどちらの者達も責めることはなかった。

ムハージル達（マッカから移住した信徒達）は戦勝により生活が豊かになったとき
アンサール（マディーナ土着の信徒達）から与えられた果樹園等を彼らに戻したこと

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えていた

ムハージル達がマッカからマディーナへ移住してきた時、彼らは何も財産を手にしていなかった。

一方アンサールは当然土地とナツメヤシの果樹の持ち主だった。

彼らはその資産をムハージル達と分けあったがその条件はムハージル達は彼らと一緒に働き、彼らアンサールは果樹園からの収益の半分を毎年彼らムハージル達に分け与えることだった。

かくてアンサールは彼ら（ムハージル達）に仕事と食糧を保障していた。

アナス・ビン・マーリクの母はウンム・スライムと呼ばれていた。

また彼女はアブドッラー・ビン・アブー・タルハの母でもあった。

つまりアブドッラーはアナスと母方の兄弟であった。

アナスの母はアッラーの使徒に彼女の持っているナツメヤシの林を与えた。

だがアッラーの使徒はそれを彼が解放した女奴隷のウンム・アイマンに与えた。

ところで彼女はウサーマ・ビン・ザイドの母であった。

さてまたアナス・ビン・マーリクは次のように伝えている。

アッラーの使徒がハイバルの人々との戦いを終えてマディーナに帰ってきた時、ムハージル達はそれ以前に収穫物の中からアンサールに与えてもらっていたもの（収穫の半分）を返上した。

またアッラーの使徒は私の母にナツメヤシの林を返上した。

そしてウンム・アイマンには彼の果樹園から代りのナツメヤシの林を与えた。

イブン・シハーブは次のように伝えている。

ウサーマ・ビン・ザイドの母ウンム・アイマンについて云えば彼女はアブドッラー・ビン・アブドル・ムッタリブの奴隷でありアビシニア出身であった。

アーミナがアッラーの使徒を彼の父の死後に生んだ時以来ウンム・アイマンは彼が生長するまで彼の世話をした。

それで彼は彼女を自由にしてやりザイド・ビン・ハーリサと結婚させた。

その後彼女はアッラーの使徒が他界して五ヵ月後に死んだ。

アナスは次のように伝えている

一人の男が彼の土地にある何本かのナツメヤシの果樹を預言者に与えた。

それはクライザ族とナディール族の土地が征服されるまでつづいた。

その後彼は与えられたものをその男に返しはじめた。これに関連してアナスはこういった。
私の家族は私が預言者のもとに赴き身内の者が彼（預言者）に与えたもののすべてかまたはその一部を返してくれるよう彼に求めなさいと命じた。
しかしアッラーの使徒はそれを既にウンム・アイマンに与えていた。
だが私は預言者のもとに赴いた。
そして彼はそれを私に戻してくれました。
そのときウンム・アイマンがやって来て私の胸倉を掴みあげてこういった。
アッラーに誓って私達はそれをあなたに渡さない。
それは確かに彼（預言者）が私に与えたものだ。
そこでアッラーの預言者は「ウンム・アイマンよ、彼に渡しなさい。
あなたにはこれこれがある」といった。
だが彼女は「いいえ、彼の他にはいかなる神も存在しないお方（アッラー）にかけても決して渡しません」といった。
それで彼（預言者）は「あなたにはこれこれを与えます」といいつづけ最後には最初に与えた十倍かもしくはそれに近いナツメヤシの果樹を彼女に与えた。

敵の領土で食料を得ることは許される（注）

（注）やむを得ざる場合には異教徒の食料を食べてもよいということ

アブドッラー・ビン・ムガッファルは次のように伝えている

ハイバルの戦いの日、私は固形脂が入っている皮袋を手に入れた。
それで私はそれを手にしながら「今日私は誰れにもこれを分け与えない」と云って振り向いてみると驚いたことにアッラーの使徒がそこに微笑んでいるではありませんか。

アブドッラー・ビン・ムガッファルは次のように伝えている

ハイバルの戦いの日、食料と固形脂が入っている皮袋が私達に向けて投げられた。
そこで私はそれを取るために飛びついた。
それから私がひょいと振り返ってみるとアッラーの使徒がそこにいるではありませんか。
そこで私は自分の行為を恥じた次第です。

同様のハディースが**シュウバ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは「固形脂が入っている皮袋」とは伝えているが「食料」の一語はない。

イスラームの教えを説いた預言者がビザンチン皇帝ヘラクレイオスに宛た手紙

イブン・アッバースはアブー・スフヤーンから直接に伝聞したとして次のように伝えている

彼(アブー・スフヤーン)はこういった。

私はアッラーの使徒との間にとり交わされた(休戦協定)期間(注 1)中に(商売でシリア地方に)出かけていた。

それで私がシリアにいたとき、アッラーの使徒からの手紙がヘラクレイオスつまりビザンチン帝国の皇帝に届けられた。

つまりダフヤ・カルビーがその手紙を持って来たのだが彼はそれをブスラーの総督に手渡した。

それでブスラーの総督はそれをヘラクレイオスに手渡した。

そしてヘラクレイオスはそれを受け取り次のようにいった。

預言者と主張しているこの男の仲間がここにいるか?

すると人々は「はいおります」と答えた。

それで私(アブー・スフヤーン)はクライシュ族の者達数名と一緒に呼ばれてヘラクレイオスの所に入って行った。

そこで彼は私達を彼の手前に座らせて次のように尋ねた。

お前達の中で預言者と主張するこの男に誰れが一番血縁的に近いか?

そこでアブー・スフヤーンが「それは私です」と答えた。

すると彼は私を彼のすぐ手前に座らせ、私の仲間達を私の後方に座らせた。

それから彼は彼の通訳を呼び彼にこういった。

「彼らにいいなさい」私は預言者と主張する男についてこの者(アブー・スフヤーン)に尋ねる。

それでもし彼が私に嘘をいったら即座に彼を嘘つきであると非難しなさい。

そこでアブー・スフヤーンは次のようにいった。

アッラーに誓って(注 2)、もし私の嘘が(アラビア)に伝えられる恐れがなければ私は(預言者をにくんでいるので)嘘をつくでしょう(注 3)。

それからヘラクレイオスは通訳にこういった。

お前達の社会の中で彼の家系はどうであるかと彼に尋ねよ。

私は答えて「彼は私達の社会の中で立派な家系です」といった。

次に彼は「彼の祖先に王はいたか?」と尋ねた。

私は「いいえ」と答えた。

それから彼は「お前達は彼があのようなことをいい出す前に彼を嘘つきであると疑ったことはあるか?」と尋ねた。

私は「いいえ」と答えた。

そこで彼は「彼には人々の中でも身分の高い者達が従っているか、それとも弱い者達が従っているか？」と尋ねた。
私は「彼らのうちでも弱い者達です」と答えた。
次に彼は「彼らは数が増えているかそれとも減っているか？」と尋ねた。
私は「彼らは増えています」と答えた。
次に彼は「彼らの中にはいったん彼の宗教に入った後にそれに不満を感じて背信した者はいるか？」と尋ねた。
私は「いいえ」と答えた。
次に彼は「お前達は彼と戦ったことがあるか？」と尋ねた。
私は「はい」と答えた。
次に彼は「お前達は彼とどのように戦ったか？」と尋ねた。
そこで私は次のように答えた。
戦いは私達と彼の間を井戸に下がる両桶のように順次上下に揺らいでいる。
時には彼は私達によって敗北を喫し、時には私達が彼によって苦敗をなめている。
次に彼は「彼は誓約を破るか？」と尋ねた。
そこで私はこう答えた。
いいえ、しかし私達は最近彼と一定期間の和約を結びました。
それについて彼がどのようにするつもりなのか未だ分かりません。
さてここでアブー・スフヤーンはこう伝えている
アッラーに誓って私はこの対話の中にこれ以上に何も付け加えることはできなかった。
ところでヘラクレイオスはさらに「誰れか彼以前に預言の言葉を語った斉はいるか？」と尋ねた。
私は「いいえ」といった。
そこで彼は通訳官に次のようにいった。
彼（アブー・スフヤーン）にいいなさい。
私はお前に彼（預言者）の家系について尋ねた。
お前は彼がお前達の中で立派な家系であると主張した。
そのように使徒達は彼らの民の中でもより良い家系から選ばれて遣わされるものだ。
それから私は披の祖先に王がいるかと尋ねた。
お前は「いいえいない」と主張した。
もし彼の祖先に王がいたならば私は彼こそ祖先の支配を求める男であるといったのであろう。
また私は彼の追従者について力のない貧しい者達であるかそれとも身分の高い者達であるかと尋ねたところ、お前は「はい、弱い者達です」と答えた。
確かに彼らこそ使徒達の追従者であった。
また私は彼があのようにいい出す以前にお前達は彼を嘘つきであると疑ったことがある

かを尋ねたところ、お前は「いいえ」と答えた。
私は確かに彼が人々に嘘をついたことがなく、それからさらにアッラーについて嘘をつくに到ることは決してないことが分かった。
そしてまた私は彼らの中にはいったん彼の宗教に入った後に不満を感じて背信した者が誰かいるかと尋ねた。
お前は「いいえ」と答えたが信仰とはこのように心の奥深くに入ったならば決してそれは揺らぐことはない。
また私は彼らの数は増えているかそれとも減っているかと尋ねたところお前は「彼らは増えている」と答えた。
信仰とはこのようにそれが完全に広がるまで増えつづけていく。
また私はお前達は彼と戦ったかと尋ねたところお前はお前達は彼と戦いそして戦いはお前達と彼の間を井戸に下がった両桶のように順次上下に揺らいでいて時には彼はお前達に敗北し、時にはお前達が敗北を喫していると答えた。
諸使徒達とて同様であり彼らは試練を課せられそれからそれに耐えることにより、彼らには良い結果が与えられる。
また私は彼は誓約を破るかと尋ねたところ、お前は彼は誓約を破らないと答えた。
それは諸使徒達とて同様で彼らは決して誓約を破ることはない。
また私は誰れか彼以前にこのようなこと（預言）を語った者はいるかと尋ねたところお前はいいえと答えた。
もし彼以前にこのような言葉を誰れかがいったならば彼は以前にいわれたことを真似しているに過ぎないと私は考える。
それから彼（ヘラクレイオス）は「彼はお前達に何を命じたか？」と尋ねた。
そこで私（アブー・スフヤーン）は次のように答えた。
彼は私達に礼拝と喜捨と良好な親戚関係の保持と貞節を命じました。
すると彼（ヘラクレイオス）は次のようにいった。
もしお前のいうことが真実なら彼は確かに預言者である。
私は彼が現われることは知っていた。
しかし彼がお前達の中から現れるとは思わなかった。
もし私が彼に近づくことができることを知っていたならば彼に会うことを切望したに違いない。
もし私が彼の側にいたならば彼の両足を洗ったに違いない。
また彼の支配は私のこの足元まで届くにちがいない。
それから彼は大声でアッラーの使徒の手紙を持って来させそれを読んだ。
その内容は以下の通りである。
慈悲深く慈愛あまねきアッラーのみ名において。
アッラーの使徒ムハンマドからビザンチン帝国の皇帝ヘラクレイオスへ正道に従っている

者に平安あれ
私はあなたをイスラームの教えにお誘いします。
イスラームに帰依しなさい。
そうすればあなたは安全である。
イスラームに帰依しなさい。
そうすればアッラーはあなたに二倍の報酬を授けるでしょう。
もしあなたがイスラームに昔を向けたならばあなたの家臣らの罪をも負うことになる。
「経典の民よ私達とあなた達の間で共通の言葉のもとに来たれ。
私達はアッラー以外に何ものも崇拝することなく何ものをも彼に列しない。
まことに私達はアッラーを差し置いて他のいかなるものも主としてあがめることはない。
それでもし彼らが背き去るならばあなた達は、私達はムスリム（絶対帰依者）であることを証言するというべきでしょう」（第 3 章 64 節）
こうして彼（ヘラクレイオス）がその手紙を読み終えたとき彼の周りにどよめきと騒音が起こった。
そして彼は私達に出ていくように命じた。
それで私達が出ていくときに私（アブー・スフヤーン）は私の仲間に向ってこういったものだ。
確かにイブン・アブー・カブシャ（注 4）の威力は発揮された。
何とアスファル（ビザンチン）の王が彼（預言者）を恐れているではないか！
こうして私（アブー・スフヤーン）はアッラーが私の心にイスラームを植え付けるまでアッラーの使徒の威力が成功を納めるであろうと信じつづけていた。

（注 1）ヒジュラ 6 年の末のフダイビーヤの和約

（注 2）イスラーム以前にアッラーは神々の中の最高神として信仰されていた

（注 3）アラビアではイスラーム以前も以後も嘘付は社会的に非難された

（注 4）フザーア族出身の変人で血人シリウス星を崇めていた男だがアブー・スフヤーンは宗教を異にする預言音ムハンマドをここではこの男にたとえている

このハディースは**イブン・シハーブ**によって同様の伝承者経路を経て前記と同様の内容のハディースを伝えている。
しかしここでは次の言葉が追記されている。
アッラーが皇帝のためにペルシャの軍勢を敗北させたとき、彼はアッラーが与えた恩恵に対して感謝するためにフムスからエルサレムに出向いた

またこのハディースでは次のような言葉が使われている。
「アッラーの使徒であり下僕であるムハンマドから」
「家臣達の罪」
「イスラームの教えに基づいて」など。

預言者は不信者の王達を自ら栄光に満ち崇高におわすアッラーのもとに導くために手紙を書いたこと

アナスは次のように伝えている

アッラーの使徒はキスラー（ペルシャの王）やカイサル（ビザンチン皇帝）やナジャーシー（エチオピア皇帝）やその他全ての君侯に自ら至高におわすアッラーのもとに導くために手紙を書いた。
そして預言者が葬儀礼拝をしてあげた者はこのナジャーシー（注）ばかりではない。

（注）このナジャーシーとはマッカにおけるムスリムの迫害時代に彼らの亡命を受け入れたとされるイスラームに好意的な当代のエチオピア皇帝のこと

同様のハディースが**アナス・ビン・マーリク**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは以下の一節は述べられていない。
「預言者が葬儀礼拝をしてあげた者はこのナジャーシーばかりではない」

また前記と同様のハデースが**アナス**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

フナインの戦い

アッバースは次のように伝えている

フナインの戦いの日、私はアッラーの使徒と一緒にいた。

私とアブー・スフヤーン・ビン・ハーリス（預言者のいとこ）はアッラーの使徒と常に一緒にいた。

私達は彼から決して離れなかった。

そしてアッラーの使徒はファルワ・ビン・ヌファーサ・ジュザーミーが彼に贈った白い雌ラバに乗っていた。

こうしてムスリム達と不信者達が遭遇したとき、ムスリム達は背を向けて敗走した。

しかしアッラーの使徒は彼の雌ラバを不信者達の方へ向けて駆り立て始めた。

私（アッバース）はアッラーの使徒の雌ラバを速く進まないように抑えるためにその手綱を掴んでいた。

そしてアブー・スフヤーンはアッラーの使徒の（雌ラバの）あぶみを掴んでいた。

するとアッラーの使徒はこういった。

アッバースよ、サムラの人々（注）を呼び集めなさい。

そこで私は声高にサムラの人々はどこですかといった（アッバースは大音声の持ち主で有名だった）。

アッラーに誓って、彼らは私の声を開いたときあたかも雌牛がその仔牛達のもとにかけ寄るかの如くに（預言者のもとに）戻ってきた。

そして彼らは「ここに私達はいます」「ここに私達はいます」といった。

そして彼らは不信者達と戦った。

それからアンサールへの呼びかけが起こり、彼等は「アンサールよ」「アンサールよ」と叫んだ。

それから最後には呼びかけはハーリス・ビン・ハズラジュ族に限られ、彼等は「ハリス・ビン・ハズラジュの者よ」「ハーリス・ビン・ハズラジュの者よ」と叫んだ。

アッラーの使徒は彼の雌ラバに乗り上から首を伸ばして彼らの戦い振りを見ていた。

そしてアッラーの使徒はこういった。

これこそまさに白兵戦だ。

それからアッラーの使徒は小石を掴みそれを敵に向けて投げ付けてこういった。

ムハンマドの主に誓って、不信者達は破れたり。

そこで私は辺りを見て回ったが戦いは前に見た状況と同じであった。

だがしかしアッラーに誓ってその状況は彼が小石を投げ付けるまでであり、以後私は彼らの勢力が次第に弱まり遂に彼らが敗走するところまでその戦況を見続けました。

（注）樹の名前で、かつてフダイビーヤにおいてこの樹の下で人々は預言者に忠誠の誓いを立てたがその時の人々の意

同様のハディースが別の伝承者経路を経て**ズフリー**によって伝えられている。
ただしここでは「ファルワ・ビン・ヌアーマ・ジュザーミー」とあり、また「カーバの主に誓って彼らは破れたり、カアバの主に誓って彼らは破れたり」と表現されている。
またハディースの最後に次のように追記されている。
「アッラーが彼らを敗走させるまで」
また「それで私はあたかも預言者が彼の雌ラバに乗って彼らの背後を駆り立てているかのように見えた」

カスィール・ビン・アッバースは父からの伝聞として次のように伝えている

フナインの戦いの日、私（アッバース）は預言者と一緒にいた。
以下は前記のハディースと同じであるが前記のハディースの方がより多く伝え完全である。

アブー・イスハークは次のように伝えている

ある男がバラーウに次のように尋ねた。
アブー・ウマーラ（バラーウの悼名）よ、フナインの日あなた達は逃げましたか？
すると彼はこういった。
いいえ、アッラーに誓って、アッラーの使徒は決して逃げなかった。
しかし血気にはやる若い教友の幾人かが盾も充分な武器も持たずに飛び出してしまったのだ、それで彼らは狙った的は外すことのない達人ぞろいの（敵の）射手の一団に出会った。
その一団はハワージン族とナスル族の者達であった。
そして彼らは仕損じることのない矢を若者達に向って射かけてきた。
そこで（その若者達）はアッラーの使徒の方に向きを変えて後退した。
その時アッラーの使徒は彼の白い雌ラバに乗っていた。
そしてアブー・スフヤーン・ビン・ハーリス・ビン・アブドル・ムッタリブが彼を先導していた。
それで彼（預言者）は雌ラバから降りてアッラーに助けを求めて次のように叫んだ。
私は預言者である。決して嘘ではない。
私はアブドル・ムッタリブの息子である。
それから彼は彼らを戦闘隊形に整えた。

アブー・イスハークは次のように伝えている

ある男がバラーウに次のように尋ねた。

アブー・ウマーラよ、フナインの日あなた達は逃げ去りましたか？

すると彼はこういった。

私はアッラーの使徒が決して逃げなかったところをこの日で見ています。

しかし血気にはやる教友の幾人かが急いで飛び出した。

彼らには武器がなかったかもしくは充分ではなかった。

彼らは盾も持たずに丸腰でハワージン族の射手の一団に向かって突っ込んだ。

それで彼ら射手は血気にはやる教友達に向かっていっせいに雨あられと矢を射かけた。

あたかもそれはバッタの大群か何かの様であった。

それで彼らは敗走した。

そこで人々はアッラーの使徒のもとに向かった。

その時アブー・スフヤーン・ビン・ハーリスが彼の雌ラバを導いていたが彼（預言者）は雌ラバから降りて祈りアッラーに助けを求め次のように叫んでいた。

私は預言者である。

決して嘘ではない。

私はアブドル・ムッタリブの息子である。

アッラーよ、あなたのお助けをお授け下さい。

さてバラーウは続けて次のように伝えている。

戦いが激しくなったとき、アッラーに誓って私達は彼（預言者）のもとに身をよせていた。

私達の内で（敵の）猛攻に立ち向かう勇者それはつまり預言者でした。

アブー・イスハークはバラーウからの伝聞として次のように伝えている

カイス族出身のある男が「フナインの戦いの日、あなた達はアッラーの使徒から逃げましたか？」と尋ねた。

するとバラーウは答えてこういった。

だがアッラーの使徒は逃げなかった。

その日ハワージン族は射手部隊を編成していた。

私達が彼らを攻撃したとき、彼らは敗走しそれで私達は戦利品に夢中になった。

そこで彼らは（再び結集し）私達に矢を浴びせてきた。

そのとき私はアッラーの使徒が白い縞の雌ラバに乗っている姿をみた。

またアブー・スフヤーンがその手綱を取っていた。

そして彼（預言者）は次のようにいった。

私は預言者である。決して嘘ではない。

私はアブドル・ムッタリブの息子である。

このハディースは**バラーウ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしこのハディースは他の伝承者のものよりも短く不完全である。

イヤース・ビン・サラマは父からの伝聞として次のように伝えている

私達はアッラーの使徒と一緒にフナインで戦った。
私達が敵と出会ったとき、私は突き進み丘の小道を上った。
そのとき敵の一人が私に向かってきたので私は彼に矢を放った。
すると彼は私から隠れてしまった。
それで私は彼が何をしていたのか分からなかった。
だが私は（敵の）一群が別の丘の小道から現われたところを見た。
そこで彼ら敵と預言者の教友達は会戦したが教友達は敗走し私もまた逃げ戻った。
ところで私は二枚の上衣を着ていた。
一枚は腰に巻くものでもう一枚は肩にかけるものであった。
それで腰に巻く衣の方が急いだために緩んでしまい私は二枚ともまとめて持っていた。
そして私は打ちしおれてアッラーの使徒の側を通った。
そのとき彼は灰色の彼のロバに乗っていた。
そしてアッラーの使徒は「イブン・アクワウ（サラマ）は怯えている」といった。
そして彼ら教友がアッラーの使徒の周りに集まってきたとき彼は雌ラバから下り地面から
一握りの土を掴み彼ら敵の顔に投げつけて「これらの顔は歪んでしまえ！」といった。
するとあの一握りの土が敵の目にことごとく入った。
そこで彼らは背を向けて逃げ去ったがアッラーが彼らを敗走させたのである。
こうしてアッラーの使徒は、彼らの残した戦利品をムスリム達に分け与えた。

ターイフの闘い

アブドッラー・ビン・アムルは次のように伝えている

アッラーの使徒はターイフの住人を包囲した（注）。

しかし（守りが堅く）彼は彼らから何も得なかった（つまり勝利を得ることができなかった）。

それで彼はこういった。

もしアッラーが望むならば私達は（マディーナに）引き返しましょう（ターイフを陥落させるのは彼らには無理と考えたから）。

すると彼の教友達がこういった。

私達は征服することなく引き返すのですか？

そこでアッラーの使徒は彼らにこういった。

では早朝に襲撃しなさい。

そこで彼らは早朝に襲撃をかけたが（勝利を得るどころか頭上に降り注ぐ矢の雨によって）

彼らは負傷する始末でした。それでアッラーの使徒は彼らにこういった。

私達は明日引き返しましょう。

かくてこのこと（この声明）は彼らをいたく喜ばせたがアッラーの使徒は彼らの態度の変り様に笑った。

（注）この戦はフナインの戦の最終段階で敵を追いつめた結果起ったもの。

なおターイフの住民は後に自らの意志でイスラームに集団改宗する

バドルの闘い

アナスは次のように伝えている

アブー・スフヤーンが接近中とのニュースがアッラーの使徒に届いたとき彼は教友達と相談した。

そこでアブー・バクルが彼の意見を述べた。

しかし預言者は彼に反対した。

次にウマルが語った。

しかし預言者は彼にも反対した。

ついでサアド・ビン・ウバーダが立って次のようにいった。

アッラーの使徒よ、あなたは私達が喋ることを望んでいるのでしょう。

私の命を手中にされているお方に誓って、もしあなたが私達の馬を海に進めるように命じるなら私達はそうするでしょう。

またもしあなたが最も速い地バルクル・ギマード(注)まで馬の肝臓を打ちつづけること(馬を駆り立てること)を私達に命じるなら、私達はそのようにするでしょう。

そこでアッラーの使徒は戦闘のために人々を呼び集めた。

そして彼らは出陣してバドルの泉に布陣した。

そこへクライシュ族の水運搬用の雌ラクダを連れた者達が現われた。

その中にハッジャージュ族に属する若い黒人奴隷がいた。

そこでアッラーの使徒の教友達は彼を捕えアブー・スフヤーンと彼の仲間達について尋ねた。

すると彼は次のようにいった。

私はアブー・スフヤーンについて何も知りません。

しかしアブー・ジャハルやウトバやシャイバやウマイヤ・ビン・ハルフならおります。

こうして彼がこのようにうそぶいたとき彼らは彼を殴った。

すると彼は「分かった、あなたたちにアブー・スフヤーンについて教えます」といった。

これを聞いて彼らは彼を殴ることを止め再び彼に尋ねた。

ところが彼はまたアブー・スフヤーンについては何も知らないと答え、だがしかしアブー・ジャハルやウトバやシャイバやウマイヤ・ビン・ハルフは人々の中にいますと同じことを繰り返した。

彼がこのようにいったとき彼らは彼を再び殴った。

その時アッラーの使徒は礼拝のために直立していたが彼がこの有様を目撃したとき丁度礼拝を終えた。

そしてこういった。

私の命を手中にしているお方に誓って彼があなた達に真実を述べたとき、あなた達は彼を殴り彼があなた達に嘘をついたときあなた達は彼を放した。

そしてアッラーの使徒はさらにつづけてこういった。
これが誰々が戦死する場所である。
そして彼は「こことここ」といいながら地面に手を置いた。
それで彼等のうち誰一人としてアッラーの使徒が手を置いた場所から離れようとはしなかった。

（注）マッカから海岸に向って五日行程の地名

マッカ征服

アブドッラー・ビン・ラバーフはアブー・フライラからの伝聞として次のように伝えている

数々の使節団がムアーウィヤの所にやって来た。

それはラマダーン月のことであった。

そこで私達はお互に食事の準備をした。

ところでアブー・フライラは私達を頻繁に家に招待する人だったが私はこういった。

ぜひとも私が食事を準備して彼らを家に招待しましょう。

そして私は食事の準備をするよう（家の者に）命じました。

それから私は夕方アブー・フライラに会い彼にこういった。

今夜、私の所に招待します。

すると披は「あなたは私の先を越しましたね」といった。

私は「ええそうです」といい彼らを招待した次第です。

さて（彼らが食事を終えた後に）アブー・フライラはこういった。

アンサールの方々よ、あなた達のハディースの一つをお教えしましょうか？

かくして彼はマッカ征服について述べ次のように語った。

アッラーの使徒はマッカに着くまでそのまま前進した。

そして彼はズバイルに軍隊の一支隊（右陣）を任せ、またハーリドにはもう一方の分隊（左陣）を任せた。

またアブー・ウバイダには盾（武器）を持たない者達を任せて急派した。

それで彼らはワジ（涸谷）の中程へと進み出たがアッラーの使徒は大部隊の中にいた。

さて彼（預言者）はあたりを見回し私をみつけ「アブー・フライラよ」と呼んだ。

そこで私は「アッラーの使徒よ、私はここにいます」といった。

すると彼はこういった。

アンサール以外には誰れも私の囲りには来させるな、さあアンサールだけを私のもとに呼び集めなさい（注 1）。

そこで彼らアンサールがやって来て預言者の周囲をとり囲んだ。

さてクライシュ族の方もまた烏合の衆やもろもろの追従者達を集めてこう云っていた。

私達は彼らを差し向ける。

もし彼らが何か得たならば私達はその分け前にあずかるだろう。

またもし災難が彼らに降りかかったなら私達は（その代償として）求められるものが何であれそれを支払うだろう。

さて一方アッラーの使徒はアンサールに向ってこういった。

あなた達はクライシュ族の烏合の衆やもろもろの追従者達にまみえるであろう。

それから彼は片方の手でもう一方の手を打ち（彼ら敵はことごとく殺されるだろう）と合図した。

そして彼は「サファー（の丘）（注 2）で会おう」といった。
そこで私達は前進したが私達の誰れでも（敵の）ある者を殺そうと思えば難なく殺すことができ、彼らの方は誰れも私達に何の抵抗もできない状態でした。
それからアブー・スフヤーンがやって来てこういった。
アッラーの使徒よ、クライシュ族の血は地に落ちた。
今日以後はもはやクライシュ族はいないでしょう。
さてそれから彼（預言者）はこういった。
アブー・スフヤーンの家に入った者、その者の身の安全は保証されよう。
そこでアンサールはお互にひそかにささやいてこういい合った。
（結局）あのお方（預言者）は己れの故郷への愛着と己れの一族への思いやりに屈したのだ。
さて丁度そこへ啓示が下ったが、啓示が降りる時は我々の誰れの目にもそのことが分ったものだった。
また我々はその時啓示が終るまでは誰れ一人としてアッラーの使徒に向って敢て視線を上げることはなかった。
さて啓示が終ったときアッラーの使徒は「アンサールの方々よ」といって呼びかけた。
そこで彼らは「ここにいます、アッラーの使徒よ」と答えた。
そこで預言者はこういった。
あなた達はあのお方は己れの故郷への愛着に屈したといいましたね。
それで彼らは「その通りでした」といった。
すると預言者は次のようにいった。
決してそうではない。
私はアッラーの下僕でありアッラーの使徒です。
私はアッラーとそしてあなた達のもとへ移住したのです。
私はあなた達とともに生きあなた達の町が私の死地でありましょう。
すると彼らは泣きながら彼の方に向き直りこういった。
アッラーに誓って、私達がいったことはただただアッラーとアッラーの使徒を離したくなかったからです。
そこでアッラーの使徒はこういった。
アッラーとアッラーの使徒はあなた達を信用します。
そしてあなた達を赦します。
さて人々はアブー・スフヤーンの家に向い、また人々は彼らの家の戸口を閉じた。
一方アッラーの使徒は進みカーバ神殿の（黒）石に近づきそれに口づけをした。
それから彼はカーバ神殿の周囲を一巡した。
それで彼はカーバ神殿の片わらに安置されていた人々が崇拝の対象としていた偶像に近づいた。

そのときアッラーの使徒は弓を手にしていたがその端を彼は握っていた。
そして偶像に近づいた時彼は弓でその偶像の目を突き刺し始めた。
そうしながら彼は次のようにいった。
今まさに真理が来たりて虚偽は消え去った。
さて彼（預言者）はタワーフ（注 3）を終えた後にサファーの丘にやって来てその上に登りカーバ神殿を見おろしながら両手を挙げた。
そしてアッラーを讃え自ら望み通りに祈り始めた。

（注 1）アンサール（支援者達）はマディーナ土着のムスリムの総称。
マッカのクライシュ族攻略にあたって預言者がいかにアンサールを頼りにしていたかが伺われる

（注 2）カーバ神殿を望む小高い丘

（注 3）カーバ神殿の同りを巡回する儀式でイスラーム以前も行われていた。
今日マッカ巡礼の際の欠かせない儀礼の一つ

同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられているが、しかしそこでは以下の点で表現上の違いがある

それから彼は片方の手でもう一方の手を打ち「抵抗する者は殺してしまえ」といった。彼ら（アンサール）は「その通りでした、アッラーの使徒よ」といった。
すると彼（預言者）はこういった。
「それでは私の名は何という？
決して、そうではない（注）。
私はアッラーの下僕でありアッラーの使徒である」

（注）同郷の人々ということで降服したクライシュ族を赦したわけではない。
また征服後も預言者はマッカに決して戻るつもりはないことなどの意が込められている

アブドッラー・ビン・ラバーフは次のように伝えている

私達は代表としてムアーウィア・ビン・アブー・スフヤーンの所に到着した。
そして私達の中にはアブー・フライラが一緒にいた。
私達はそれぞれが毎日順番で仲間のために食事の用意をしていた。
そして私の順番が来たとき私は「アブー・フライラよ今日は私の番です」といった。
そこで彼らは私の家へやって来た。
しかし私達の食事はまだ準備されていなかった。

そこで私はこういった。
アブー・フライラよもし食事が準備できるまであなたにアッラーの使徒について話して頂けたら有難い。
そこで彼は次のように話し始めた。
私達はマッカ征服の日、アッラーの使徒と一緒でした。
彼はハーリド・ビン・ワリードを右の側面隊の指揮官に命じズバイルを左の側面隊の指揮官に命じた。
そしてアブー・ウバイダをワジの中程にそって進む歩兵隊の指揮官に命じた。
それから彼は「アブー・フライラよ、アンサールを私のもとに呼びよせなさい」といった。
そこで私は彼らを呼び集めた。
彼らは急いでやって来た。
すると彼はこういった。
アンサールの方々よ、クライシュの烏合の衆が見えますか？
そこで彼らが「はい」というと彼はさらにこういった。
よく見なさい、明日あなた達が彼らに会うときは彼らを全滅させなさい。
その時彼は右手を左手の上に置いてそのことを暗に示すかのように手で仕草をした。
そして彼は「あなた達との出会いの場所はサファーの丘にしよう」といった。
（アブー・フライラはさらにその日の印象をこう語った）
さてもその日、彼ら（アンサール）の所に現われたものは誰れでも皆殺されたにちがいない。
さてそれからアッラーの使徒はサファーの丘に登った。
アンサールもまたそこに集まって来てサファーの周りをまわった。
それからアブー・スフヤーンがやって来てこういった。
アッラーの使徒よ、クライシュ族は滅びた。
今日からはクライシュ族は存在しない。
そしてアッラーの使徒はこういった。
アブー・スフヤーンの家に入った者その者の身の安全は保証されよう。
また武器を捨てた者も安全な身となろう。
また門を閉めた者も安全である。
それでアンサールはこういった。
あの方（預言者）は己れの一族への配慮と己れの故郷への愛着に動かされたのだ。
このとき丁度、啓示がアッラーの使徒に下った。そして彼はこういった。
あなた達は「あの方は己れの一族への配慮と己れの故那への愛着に動かされた」といいましたね！
だが（私は）決してそうではない。
私の名前は何と云うか？（これを三回繰り返した）。

私はムハンマドであり、アッラーの下僕であり彼の使徒である。
私はアッラーとあなた達のもとへ移住しました。
私はあなた達とともに生きるとともに死ぬでしょう。
すると彼らはこういった。
アッラーに誓って私達があのようなことをいったのはただただアッラーとアッラーの使徒を離したくなかったからです。
そこでアッラーの使徒はこういった。
アッラーと彼の使徒はあなた達を信用します。
そしてあなた達のことを赦します。

カーバ神殿の周りからの偶像撤去

アブドッラーは次のように伝えている

預言者はマッカに入って行った。

その時カーバ神殿のまわりには 360 体の偶像があった。

それで彼（預言者）は手にしていた杖でそれらを突っき始めた。

そしてそのとき彼はこういっていた。

「今や真理が下り、虚偽は消え去った。

本当に虚偽は消え去る運命にある」（第 17 章 81 節）

「真理が下り虚偽はそもそもの最初から何ら創造性なく、また再び生き伸びることもない」（第 34 章 49 節）。

ところでイブン・アブー・ウマルは彼の伝承の中で「マッカ征服の日に」の一語を加えている。

このハディースは**イブン・アブー・ナジーフ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている

しかしここでは**「今や真理が下り、虚偽は消え去った。**

本当に虚偽は常に消え去る運命にある」（第 17 章 81 節）まで伝え、次につづくクルアーンの一節は伝えていない。

また彼はヌスブ（偶像）の代わりにサナム（偶像）を使っている。

マッカ征服の後は手足を縛られて殺されたクライシュ族は一人もいない

アブドッラー・ビン・ムティーウは父からの伝聞として次のように伝えている

私はマッカ征服の日、預言者が次のように語った言葉を聞いた。

クライシュ族の者は今日から最後の審判の日までは手足を縛られて殺されることはないだろう（注）。

（注）マッカ征服を契機に全てのマッカの住民はイスラームに改宗するだろう。

従って手足を縛られて殺されることはないだろうの意

同様のハディースが**ザカリーヤーウ**によって同様の伝承者経路を経て伝えられている。

しかしここでは次の一文が追記されている。

クライシュ族の反抗者達の中でムティーウ（注 1）以外には（マッカ征服以前に）誰もイスラームには帰依しなかった。

また彼の名前は（もともと）アースィー（注 2）といったがアッラーの使徒は以後ムティーウと名付けた。

（注 1）従順者の意

（注 2）反抗者の意

フダイビーヤの和約

バラーウ・ビン・アーズィブは次のように伝えている

アリー・ビン・アブー・ターリブはフダイビーヤの日、預言者と多神教徒達の間の和約協定を書いた。
それで彼は次のように書いた。
これはアッラーの使徒ムハンマドが書きとらせたものである。
すると彼ら多神教徒達はこういった。
アッラーの使徒とは書くな。
もし我々があなたをアッラーの使徒だと知って（認めて）いれば我々はあなたとは戦わなかった。
そこで預言者はアリーに「それを消しなさい」といった。
するとアリーは「私は（恐れ多くて）消せません」といった。
そこで預言者はそれを自分の手で消した。
さて彼らが要求した条件の中には次の項目があった。
彼ら（ムスリム側）は（翌年）マッカに入り、そこに三日間滞在するがそのとき武器は持ち込まず武器用のジルッバーン（注）だけが持ち込みが許されることだった。
私はアブー・イスハークに「武器用のジルッバーンとは何か？」と尋ねた。
すると彼は「皮製の鞘とその中味のことだ」と答えた。

（注）鞘におさめた剣や鞭類などを入れる皮製の袋

アブー・イスハークはバラーウ・ビン・ガーリブからの伝聞として次のように伝えている

アッラーの使徒がフダイビーヤの人々と和解をしたときアリーは彼ら双方の間の同意書を書いた。
彼は「ムハンマド、アッラーの使徒」と書いた。
以下は前述のハディースと同様である。
しかしここでは「これは書き取らせたものである」の一文はない。

バラーウは次のように伝えている

預言者がカーバ神殿へ巡礼を妨げられたときマッカの人々は彼と以下の事項で和解した。
彼（預言者）は翌年マッカに入り、そこに三日間滞在することを許されるがそのとき彼は剣は鞘に納めて武器にはカバーをつけてマッカに入ること。
彼はマッカの住民のうちから誰れも連れ出してはならないし、また彼と一緒にいた者でそこに居残り住みたい者を禁じることはできないこと。
さて彼はアリーに「私達の間で決った約定を書きなさい」といった。

（こうしてアリーは次のように書いた）
慈悲深く慈愛あまねきアッラーのみ名において、これはアッラーの使徒ムハンマドが定めたことである。
すると多神教徒達は預言者にこういった。
もし私達があなたがアッラーの使徒であると分かっているならば私達はあなたに従っていたことでしょう。
だからムハンマド・ビン・アブドッラーと書きなさい。
そこで預言者はアリーにそれを消すように命じた。
だがアリーは「アッラーに誓って（恐れ多くて）私にはそれを消すことはできません」といった。
そこでアッラーの使徒は「その部分を私に示しなさい（注）」といった。
こうしてアリーは預言者にその部分を指し示し、預言者はそれを消した。
そして彼はイブン・アブドッラー（アブドッラーの息子）と書いた。
さて（協定によって翌年）彼はそこに（マッカ）三日間滞在した。
そして三日目が来たとき、彼らはアリーにこういった。
今日があなたの主人（預言者）と協定した最後の日です。
故に彼に出て行くようにいいなさい。
そこでアリーは預言者にそのことを伝えた。
すると彼は「はいその通り」といって出ていった。
ところでイブン・ジャナーブは彼の伝承において「私達はあなたに従っていたことでしょう」の代りに「私達はあなたに忠誠の誓を立てていたであろう」と伝えている。

（注）ムハンマドは文盲預言者で字が読めなかった

アナスは次のように伝えている
クライシュ族は預言者と和解した。
彼らクライシュ族例の中にスハイル・ビン・アムルという者がいた。
さて預言者はアリーに「慈悲深く慈愛あまねきアッラーのみ名において、書きなさい」と命じた。
するとスハイルはこういった。
私達は「慈悲深く慈愛あまねきアッラーのみ名において」という意味を知らない。
だから私達が知っている「おおアッラーあなたのみ名において」と書きなさい。
ついで預言者は「アッラーの使徒、ムハンマドからと書きなさい」と命じた。
すると彼らはこういった。
もし私達があなたがアッラーの使徒であることを知っていたならば私達は（既に）あなたに従っていたでしょう。

だからあなたの名前とあなたの父の名前を書きなさい。
そこで預言者は「ムハンマド・ビン・アブドッラーからと書きなさい」といった。
また彼らは預言者に以下のような約定を条件づけた。
あなた（預言者）のもとから私達のもとへ来る者を私達はあなた達のもとへは追い返さない。
ただし私達のもとからあなた達のもとへ行く者はあなた達はその者を私達のもとに追い返すこと。
そこで彼ら教友達は「アッラーの使徒よ、私達はこれを（書面で）書くのですか？」と（心配して）尋ねた。
すると彼はこういった。
はいそうです。私達のもとから彼らのもとへ行く者はアッラーがその者を遠ざけたのであり、また彼らのもとから私達のもとへ来る者はアッラーが彼に救済と逃げ道を授けるであろう。

アブー・ワーイルは次のように伝えている
スィッフィーンの戦い（注）の日、サハル・ビン・フナイフは立ち上がりこういった。
皆さん（分別を欠いていることに恥じて）自らを反省しなさい。
私達はフダイビーヤの和約の日に、アッラーの使徒と一緒にいた。
もし私達はその時戦わなければならないと考えたならば私達は戦うことができた。
このような考えがアッラーの使徒と多神教徒の間で結ばれた和約成立のときにはあった。
即ちそのときウマル・ビン・ハッターブが現われて、アッラーの使徒のもとにやって来てこういった。
アッラーの使徒よ、私達は真理のためにそして彼らは虚偽のため（戦ってきたの）ではありませんか？
そこで預言者は「その通りです」といった。
さらに彼（ウマル）はこういった。
殺された私達の仲間は天国に入り、殺された彼等の仲間は火獄に入るのではありませんか？
そこで預言者は「その通りです」といった。
しかしさらに彼（ウマル）はこういった。
なぜ私達は私達の宗教に恥辱を与え、（このまま）私達は帰るのですか？
まだアッラーが私達と彼らの間に裁決を下していないというのに！
そこで預言者はこういった。
イブン・ハッターブ（ウマル）よ！
私はアッラーの使徒である、アッラーは決して私を破滅させないでしょう。
かくてウマルは立ち去った。

しかし彼は怒りを抑えることはできなかった。
そして彼はアブー・バクルのもとに来てこういった。
アブー・バクルよ、私達は真理のため、また彼らは虚偽のために戦って来たのではありませんか？
そこで彼（アブー・バクル）は「その通りだ」といった。
ついでウマルは「殺された私達の仲間は天国に入り、殺された彼らの仲間は火獄に入るのではありませんか？」といった。
それで彼（アブー・バクル）は「その通りだ」といった。
しかしさらにウマルはこういった。
ではなぜ私達は私達の宗教に恥辱を与え、私達は帰るのですか？
未だアッラーが私達と彼らの間に裁決を下していないというのに！
するとアブー・バクルはこういった。
イブン・ハッターブよ！
彼はアッラーの使徒です。
アッラーは決して彼を破滅させないでしょう。
きてそのときクルアーンが啓示され勝利の知らせを伝えた。
預言者はそれをウマルに送り、彼に読ませた。
するとウマルは「アッラーの使徒よ、これ（和約）は勝利ですか？」といった。
彼（預言者）は「はい」といった。
それで彼（ウマル）は満足して帰っていった。

（注）西暦 657 年アリーとムアーウィヤがイラク衆とシリア衆をそれぞれ率いて戦った。
スィッフィーンはユーフラテス河上流の右岸にある

シャキークは次のように伝えている
サハル・ビン・フナイフはスィッフィーンで次のようにいった。
皆さん、あなた達の分別を咎めて反省しなさい。
アッラーに誓って、アブー・ジャンダルの日（注 1）に私は私自身そのことについてこう考えた。
それはもし私がアッラーの使徒の命令に反対することができたならば私はそれに反対したであろうということである。
私達は私達の剣が私達の考える状況を容易にさせること以外には決していかなる場合にも私達は剣を肩に置くことはなかった。
だがあなた達（注 2）のこの戦い（スィッフィーンの戦い）は例外である。
ところでイブン・ヌマイルは「決していかなる場合にも」という一節を伝えていない。

（注 1）フタイビヤの日のこと

（注 2）シリアのムスリム衆と事をかまえた君達イラク衆、つまりアリーの一派

同様のハディースが**アアマシュ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは「私達の考える状況」の代りに「私達が途方もなくひどいと見なす状況」と伝えられている。

アブー・ワーイルは次のように伝えている
サハル・ビン・フナイフはスィッフィーンで次のようにいった。
皆さん、あなた達の宗教に対するあなた達の実のなさを咎めて反省しなさい（注）。
アッラーに誓って、アブー・ジャンダルの日に私は私自身そのことについて考えた。
それはもし私がアッラーの使徒の命令に反対することができたならば私はそうしていたであろうということだった。
いずれにせよ状況は厳しく私達が一か所を塞いだらまた別の箇所が裂け（て水が漏）るという状況である。

（注）スィッフィーンの戦は新興のイスラーム勢力が真二つに分かれて戦闘に及んだ最初の本格的なイスラーム世界内部の分裂である。
教友サハルはアリー派に属していたがこうした騒乱の時代に生きた彼の苦悩が伺われる

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている
クルアーンの一節**「まことにわれは汝に明らかな勝利を授けたり……偉大な成就である」**（第 48 章 1-5 節）が下った。
それは彼（預言者）がフダイビーヤから帰るときであった。
教友達は悲嘆と落胆に打ち沈み、彼は（その年マッカに入れず）フダイビーヤで犠牲を捧げて後止むなく帰る所だった。
さてその時彼（預言者）はこういった。
私にクルアーンの一節が下った。
それは私にとってこの世の何物よりも好きなものである。

同様のハディースが別の伝承者経路を経て**アナス**が伝えている。

誓約の履行

フザイファ・ビン・ヤマーンは次のように伝えている

以下の事件以外に私がバドルの戦いに参加することを妨げるものは何もなかった。
それは私と父のフサイルが（バドルの戦に参加するために）出かけたときクライシュ族の
無信仰者達が私達を捕まえてこういった。
ムハンマドのもとに行くつもりか？
それで私達は「私達は彼のもとに行くのではない。
マディーナに帰りたいだけだ」といった。
そこで彼らは以下のようにアッラーのみ名において誓約を私達からとった。
それは「私達はマディーナに帰るのであって、決して彼（預言者）とともに戦うのではない」
というものだった。
それから私達はアッラーの使徒のもとに来てそのことを彼に伝えた。
すると彼は次のようにいった。
ふたりとも（マディーナへ）行きなさい。
私達は彼らとの誓約を実行します。
そして私達は彼らに対するアッラーの援助を求めます。

部族連合の戦い（注）

（注）クライシュ族が周辺の部族と連合して627年にマディーナを約20日間包囲した。この時マディーナの周囲に堀をめぐらして防戦したので塹壕の戦ともいう

イブラーヒーム・タイミーは父からの伝聞として次のように伝えている

私達はフザイファの所にいた。

するとある男が「もし私がアッラーの使徒の時代にいたならば、私は彼とともに戦い、存分な働きをしただろうに」といった。

するとフザイファは「まあぁなただったらそのようなことができたでしょうかね？」といってさらにこう語りつづけた。

アフザーブの戦いで私達はアッラーの使徒と一緒でした。

その時強風に加えて厳しい寒さが私達を襲っていました。

さてアッラーの使徒はこういいました。

誰か敵の情報を探ってくる者はいないか？

最後の審判の日にアッラーはその者を私と一緒に扱って下さるでしょう。

だが私達は黙ってしまい、誰れも彼の（提案）に応じなかった。

そこで彼は再び「誰か敵の情報を持ってくる者はいないか？

最後の審判の日にアッラーはその者を私と一緒に扱って下さるでしょう」といった。

それでも私達は黙ってしまい、誰れも彼に答えなかった。

それから彼は「フザイファよ！

立ちなさい、そして敵の情報を私達のところに持って来なさい」といった。

彼が私を名指しで呼んだので私は断わる術もなく立たねばならなかった。

さて彼はこういった。

（敵のところに）行って敵の情勢を探って来なさい、（その際に）決して彼らを不必要に刺激するでないぞ！

それから私は（彼らの所に向って）彼のもとを立ち去ったが彼らのところに到着するまであたかも風呂の中を歩いているかの様に熱気を感じた（注）。

（彼らの所に到着して）私はアブー・スフヤーンが（焚き火で）背を暖めている所を見た。

私は矢を弓の真ん中に当てて彼を射ろうとした。

だがそのとき私はアッラーの使徒の言葉「不必要に彼らを刺激するでないぞ」を思い出した。

もし私が彼に弓を射かけていたら彼を射止めていたであろう。

しかし私はそのまま帰った。

そしてまた私はあたかも風呂の中を歩いているような熱気を感じていた。

私が抜（預言者）のもとに到着して彼に敵の情勢を伝え終ったとき、私は（はじめて）寒さ

を感じた。
そこでアッラーの使徒は彼がそれを着て礼拝する彼の外套を着せてくれた。
私はそれから朝まで眠り続けた。朝になったとき彼は「寝ぼすけさん、起きなさい」といった。

（注）この日は風が激しく寒さが厳しかったがちっともその寒さを感じなかったの意。
この現象は神の恩賜と解されているが恐らくは重大な任務を負った喜びと緊張で興奮してそう感じたのではあるまいか？

ウフドの戦い（注）

（注）マディーナの北方四キロの所に位置する山の名前。
ここで 624 年にマッカ軍との間に戦闘が行われムスリム軍は敗れた

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

ウフドの戦いの日、アッラーの使徒は七人のアンサールとクライシュ出身の二人のムスリムと一緒にとり残された。
敵が彼に近づいたとき、彼は次のようにいった。
彼ら（敵）を私達からそらす者には天国が待っているか、または天国で私の仲間となるだろう。
するとアンサールの一人が進み出て殺されるまで戦った。
それでまた彼らは近づいてきた。
そのとき彼（預言者）は再び同じことをいった。
彼らを私達からそらす者には天国が待っているかまたは天国で私の仲間となるだろう。
するとアンサールの一人が進み出て殺されるまで戦った。
こうして七人が殺されるまでこのような場面がつづいた。
それでアッラーの使徒は彼の二人の教友（クライシュ族出身のムスリム）に（つい）こういった。
私達（クライシュ族の者）は私達の仲間（アンサール）を公平に扱ってはいない（注）。

（注）預言者自身がクライシュ族の出身だがこの時のアンサールの勇気と犠牲の精神に比べるとその場にいた二人のクライシュ族出身のムスリムはたいした働きもなく
預言者はこのことをこうして責めているわけである

アブドル・アズィーズ・ビン・アブー・ハーズィムは父からの伝聞として次のように伝えている

彼（父）はサハル・ビン・サアドから次のことを聞いた。
それはウフドの戦いの日に受けたアッラーの使徒の負傷のことだった。
それで彼（サハル）は次のように述べた。
アッラーの使徒の顔は傷つけられ、前歯が折られた。
そして彼の兜が潰された。
それからアッラーの使徒の娘ファーティマが血を洗い流した。
そのときアリー・ビン・アブー・ターリブが盾に水を汲み上から水を流した。
ファーティマは水のために逆って出血がひどくなることに気付き敷物の切れ端を取りそれを灰になるまで燃し、その灰を傷口につけた。
それで預言者の出血が止まった。

アブー・ハーズィムはサフル・ビン・サアドから聞いたとして次のように伝えている

彼（サフル）はアッラーの使徒の傷について尋ねられて次のように答えた。

アッラーに誓って私はアッラーの使徒の傷を誰れが洗いまた誰れが水を注いだか、またどのようにして彼の傷が癒えたかを知っています。

それから彼（サフル）は前記と同様のハディースを伝えた。

しかしここでは「彼の顔は傷つけられた」といい、また「（兜が）潰された」の代わりに「壊された」という言葉を使った。

同様のハディースが**サフル・ビン・サアド**によって別の伝承者経路を経て伝えられているが、アブー・ヒラールの伝承では「彼の顔は犯された」とあり、またイブン・ムタッリフの伝承では「彼の顔は傷を負った」とある。

アナスは次のように伝えている

アッラーの使徒はウフドの戦の日に前歯を折られ顔に傷を負った。

彼はその血を拭いながらこういった。

いかで彼ら（敵）の救済があり得ようか？

彼らは預言者を傷つけ前歯を折り、しかも預言者が彼らをアッラーのもとに呼びかけているというのに！

そこでアッラーは次の啓示を下した。

「（アッラーが彼らに哀みをかけるのかそれとも懲罰なされるのかは）汝の関わる事ではない」（第 3 章 128 節）

アブドッラーは次のように伝えている

私にはアッラーの使徒の姿はあたかもある預言者の姿を見る思いでした。

それも彼（ある預言者）の仲間が彼を殴り、彼は額の血を拭いながら「主よ、我が民を赦したまえ、彼らは何も知らないのですから」といっていたある預言者の姿を私は見る思いでした。

同様のハディースが**アアマシュ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは以下のような表現上の違いがある。
即ちそれは「彼は額から血を洗い流しながら」とある。

アッラーの使徒に殺された者へのアッラーの激怒

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている

アッラーの怒りはアッラーの使徒をこのようにした人々に対して極に達した。

その時彼（預言者）は彼の前歯を指し示していた。

またアッラーの使徒は次のようにいった。

アッラーの怒りはアッラーの使徒がアッラーの道のために殺した者に対して極に達した。

多神教徒達と偽信者達から受けた預言者の迫害

イブン・マスウードは次のように伝えている

アッラーの使徒が館（カーバ神殿）の脇で礼拝していたときアブー・ジャフルと彼の仲間達がそこに座っていた。

（近くに）雌ラクダが一頭その前の日に犠牲として殺されて遺体がそこにあった。

そこで彼（アブー・ジャフル）がこういった。

誰か某部族の雌ラクダの胎盤を取ってきてムハンマドがサジダ（頓首）したときに彼の両肩にそれを置いてくる者はいないか？

それで人々の中でも最も呪われた醜い者がそのために送られた。

彼はそれを取り、預言者が頓首したときにそれを彼の両肩にかけた。

こうして彼らは彼（預言者）を笑い者にし、お互に笑いころげてもたれかかった。

私はこの光景を立ったまま見ていた。

もし私にそれを禁じる力があったならアッラーの使徒の背中からそれを取り去ったことでしょう！

一方、預言者は頓首したまま頭を上げなかった。

そしてある者が（彼の家に）走り、娘のファーティマにそのことを告げた。

それで未だ少女だったファーティマがかけつけて彼からそれを取り除いた。

それから彼女は彼らの方に向き直り彼らをののしった。

さて預言者は礼拝を終えると声高に彼らを呪った。

彼は祈るときいつも三度祈り、またアッラーのみ恵みを求めるときもまた三度求めた。

それで彼は三度次のようにいった。

おおアッラー、クライシュ族のことはあなたにお任せします。

彼らは彼の呪う声を聞いたとき、彼らの笑いが消え、彼の呪が怖くなった。

それから彼（預言者）はこういった。

アッラーよ、アブー・ジャフルとウトバ・ビン・ラビィーアとシャイバ・ビン・ラビィーアとフリード・ビン・ウクバとウマイヤ・ビン・ハラフとウクバ・ビン・ムアイト（彼は第七番目の男の名前も述べたが私はそれを覚えていない）をあなたにお任せします。

ムハンマドを真理とともにお送り下さったお方に誓って確かに私はバドルの戦いの日に彼が指名した者達が（皆）殺された姿を見た。

彼らの遺体はバドルの井戸に（投げ込まれるために）引きずられていった。

ところでアブー・イスハークはこのハディースの中の「ワリード・ビン・ウクバ」の指名は間違っているといった。

アブドッラー・ビン・マスウードは次のように伝えている

アッラーの使徒がサジダ（頓首）をしていたとき、彼の回りにクライシュの者達がいた。
そこにウクバ・ビン・アブー・ムアイトが雌ラクダの胎盤を持ってきてアッラーの使徒の背にそれを投げかけた。
だが彼は頭を上げなかった。
そこへファーティマがやって来て彼の背からそれを取り除いた。
そして彼女はそのようなことをした者を呪った。
それから彼はこういった。
おおアッラー、クライシュ族の長老達をあなたにお任せします。
アブー・ジャフル・ビン・ヒシャームとウトバ・ビン・ラビィーアとウクバ・ビン・アブー・ムアイトとシャイバ・ビン・ラビーアとウマイヤ・ビン・ハラフもしくはウバイ・ビン・ハラフとをあなたにお任せします（伝承者の一人シュウバはハラフのどちらの息子だったか確定できないとしている）。
さて確かに私（アブドッラー）は彼らがバドルの戦いの日に殺された姿を見た。
そして彼らの遺体は井戸に投げ込まれた。
しかしウマイヤもしくはウバイは手足をばらばらに切断されたが井戸には投げ込まれなかった。

同様のハディースが**アブー・イスハーク**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは以下の部分が加えられている

彼は三度繰り返すことを好んでいた。
そして彼は三度繰り返してこういった。
おおアッラー、あなたにクライシュ族のことはお任せします。
そして彼は彼らについては「ワリード・ビン・ウトバとウマイヤ・ビン・ハルフ」の名前を述べ、この名前について疑わなかった。
ところでアブー・イスハークは「私は第七番目の名前を忘れた」といった。

アブドッラーは次のように伝えている

アッラーの使徒は館（カーバ神殿）の方へ顔を向けた。
そして彼はクライシュ族の六人を呪った。
その中にはアブー・ジャフルとウマイヤ・ビン・ハラフとウトバ・ビン・ラビィーアとシャイバ・ビン・ラビィーアとウトバ・ビン・アブー・ムアイトがいた。
私はアッラーに誓って確かにバドル（の戦い）で彼らが殺された姿を見た。
太陽が彼らの顔付をすっかり変えてしまっていた（腐敗していた）。
その日は暑い日でした。

預言者の妻**アーイシャ**は次のように伝えている

彼女（アーイシャ）はアッラーの使徒に次のようにいった。
アッラーの使徒よあなたにとってウフドの日よりも厳しい日がありましたか？
すると彼はこういった。
私はお前の部族（クライシュ族）からそれを経験した。
私がアカバの日に彼らから経験したことが最も厳しいものであった。
私はイブン・アブド・ヤーリール・ビン・アブー・クラールに自らイスラームを説いた。
だが彼は私が望むようには応じなかった。
私は顔にはありありと深い苦悩を浮べてそこを立ち去った。
それで私はカルン・サアーリブ（という所）に着くまでは気が晴れなかった。
さて私がふと頭を上げてみると、そこに雲がありそれが私に日陰をつくっていた。
またよく見るとそこには天使ジブリール（ガブリエル）がいた。
そして彼は私を呼びこういった。
最強にして偉大におわすアッラーはあなた（預言者）の部族があなたにいったこと、またいかにあなたに反抗したかをお聞きになった。
そしてあなたに山を司る天使を送られた。
あなたは彼らに関して望み通りのことを命じることができる。
さて山を司る天使は私を呼び、そして私に挨拶をした。
それから彼はこういった。
ムハンマドよ、アッラーはあなたの部族があなたにいったことをお聞きになった。
私は山を司る天使である。
あなたの主はあなたのもとに私を送られた。
あなたが私に望むことを命じるためです。
もしあなたが望むなら私は二つの山で彼らを押し潰しましょう。
それでアッラーの使徒はこういった。
だがしかし、私は彼らの子孫からアッラーだけに仕え、アッラーの他にいかなる同位者を配さない者をアッラーが輩出下さらんことを望みます。

ジュンドブ・ビン・スフヤーンは次のように伝えている

アッラーの使徒の指はある戦いで傷を負って流血していた。
そこで彼（預言者）はこういった。
お前は血を流した。たかが指ではないか、だがお前が蒙ったことはアッラーの道のためなり（報われよう）。

アスワド・ビン・カイスは同様の伝承者経路を経て次のように伝えている

アッラーの使徒は洞窟(または攻撃隊)の中にいた。

そのとき彼の指は傷を負った。

アスワド・ビン・カイスはジュンドブからの伝聞として次のように伝えている

天使ジブリールがアッラーの使徒のもとに来るのが遅れた。

そのとき多神教徒達は「ムハンマドは見捨てられた」といい出した。

そこでアッラーは啓示を下した。

「朝の輝きと静寂な夜にかけて誓う。主は汝を見捨て賜わず。またうとまれたわけでもない」(第 93 章 1-3 節)。

アスワド・ビン・カイスはジュンドブ・ビン・スフヤーンからの伝聞として次のように伝えている

アッラーの使徒は病に伏し、二夜もしくは三夜礼拝に起きてこなかった。

そこへある女性が来てこういった。

ムハンマドよ、私はあなたについている悪魔が既にあなたから離れてしまっていることだと願っています。

私はここ二夜もしくは三夜の間それ(悪魔)があなたに近づくところを見ていませんので。

このとき、自ら最強にして偉大におわすアッラーは次の啓示を下された。

「朝の輝きと静寂な夜にかけて誓う。主は汝を見捨て賜わず。またうとまれたわけでもない」(第 93 章 1-3 節)

同様のハディースが**アスワド・ビン・カイス**により別の伝承者経路を経て伝えられている。

預言者のアッラーへの祈りと偽信者からの迫害に対する彼の忍耐

ウサーマ・ビン・ザイドは次のように伝えている

預言者はファダク（注 1）製のベルベットを鞍の下につけたロバに乗っていた。
彼はウサーマを後ろに乗せていた。
彼はサアド・ビン・ウバータを見舞うためにハーリス・ビン・ハズラジュ族の通りを進んでいた。
それはバドルの戦いの前のことであった。
（彼は進み続け）ムスリム達や偶像崇拝の多神教徒やユダヤ人達が雑多に集まっているそばを通りかかった。
そこにはアブドッラー・ビン・ウバイやアブドッラー・ビン・ラワーハがいた。
さて（預言者達が乗っている）ロバの立てた土埃が集まっていた彼らの上にかかったとき、アブドッラー・ビン・ウバイは鼻を外套で覆いついでこういった。
私達に土埃をかけるな。
そこで預言者は彼らに挨拶してそれから立ち止まり（ロバから）下りた。
そして彼らをアッラーのもとにいざない、彼らにクルアーンを誦んで聞かせた。
するとアブドッラー・ビン・ウバイはこういった。
そこの男よ、もしお前のいうことが真実なら私達の集会を邪魔しないことが最良である。
お前の家に帰りなさい。
私達のもとからお前のところに行った者には（このように）いって聞かせなさい。
だがアブドッラー・ビン・ラワーハは「私達の集会へ来なさい。私達はそれを聞きたいのです」といった。
（このような意見の相違かあって）
ムスリム達や多神教徒やユダヤ人達はお互に罵りあい果てはお互に掴みかかるほどであった。
それで預言者は彼らをなだめつづけた。
それから彼はまたロバに乗ってサアダ・ビン・ウバーダの所に行った。
そこで預言者は彼（サアド）にこういった。
サアドよ、アブー・フバーブ（アブドッラー・ビン・ウバイの悼名）がかくかくしかじかといったということを聞きませんでしたか？
するとサアドはこういった。
彼を赦してやって下さい。
アッラーの使徒よ、どうかお赦し下さい。
アッラーに誓って、アッラーはあなたには授けるもの（崇高な地位）を授けました。
（イブン・ウバイについては）この町の人々は王として彼（イブン・ウバイ）に王冠をかぶせ、王のターバンを巻くことを決めていました。

だがアッラーはあをたに授けた真実によってそのこと（イブン・ウバイの王位就任）を拒絶しました（注 2）。
そのことで彼はあなたに嫉妬しました。
それゆえに彼はあなたがご覧になったような態度を取った次第です。
こうしたわけで預言者は彼（イブン・ウバイ）を赦しました。

（注 1）マディーナの北方ハイバルの近くの町。住人はユダヤ人てあった
（注 2）つまりマディーナのムスリム達が預言者をこの町の調定者兼リーダーとして外部から迎え入れたのでアブドッラー・ビン・ウバイの王位就任の話しがふいになったこと

同様のハディースが**イブン・シハーブ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは次の一文が加えられている。
それはアブドッラー（イブン・ウバイ）がイスラームに帰依する前のことであった。

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている
預言者は（イスラーム受け入を説得するために）アブドッラー・ビン・ウバイのところにやって来たらどうかといわれた。
そこで預言者は彼の所へ出発した。
彼はロバに乗りムスリム達も（一緒に）出発した。
そして彼らは塩分を含んだ土地を進んだ。
預言者が彼に近づいたとき彼はこういった。
私に近づくな。
アッラーに誓って、お前さんのロバの嫌な匂が私には迷惑なんだ。
するとアンサールの一人が「アッラーに誓ってアッラーの使徒のロバはお前さんの匂よりは良い匂だ」といった。
ついでアブドッラーに組する彼の部族の一人が怒った。
それで双方の仲間がそれぞれ激怒するに至った。
そして彼らの間に棒や手や革のサンダルなどで殴りあいが始まった。
そこに次のような啓示が下されたことが知らされた。
「もしも信者達が二つに分かれて争うならば、両者の間を調停しなさい」（第 49 章 9 節）

アブー・ジャハルの死

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

アッラーの使徒は（バドルでの戦闘の直後）次のようにいった。

誰がアブー・ジャハルに何が起ったか私達のために見届けてくれますか？

するとイブン・マスウードが飛び出して行き、アフラーウの二人の息子によって討たれ冷たくなった瀕死の彼（アブー・ジャハル）を見つけた。

イブン・マスウードはその顎髭を掴み「お前はアブー・ジャハルか？」と尋ねた。

すると彼はこういった。

「お前達が殺した（殺そうとしている）相手（私）よりも身分の高い者が誰れか他にいるのか？」

もしくは「彼の部族の者が殺した」といった。

ところでアブー・ミジュラズはアブー・ジャハルが次のようにいったとして伝えている。

私を殺した者が農夫（注）以外であったらよいのに！

（注）マッカの社会では農夫を見下していた。

実はアフラーウの二人の息子はマディーナの農夫だった。

いかにもクルアーンの中で呪われた大悪党の最後の言葉らしい

アナスによる同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられている。

しかし以下のような表現の違いがある

アッラーの使徒は「誰れがアブー・ジャハルに何が起ったか私に教えてくれますか？」といった。

ユダヤ人の天性の悪魔カアブ・ビン・アシュラフの暗殺

ジャービルは次のように伝えている

アッラーの使徒は次のようにいった。
誰れがカアブ・ビン・アシュラフを殺しますか？
彼はアッラーとアッラーの使徒に実に有害でした。
そこでムハンマド・ビン・マスラマが「アッラーの使徒よ、私が彼を殺すことをお望みですか？」といった。
すると預言者は「勿論です」と答えた。
だがイブン・マスラマはさらにこういった。
でも（事をうまく運ぶために）私にいいたいことをいわせて下さい。
すると預言者は「あなたの好きなようにいいなさい」と答えた。
さてイブン・マスラマは彼（カアブ）のところにやって来て二人の間の旧交について語った。
そして「あの男（預言者）は我々がサダカ（寄付金）を納めることを望み、我々は厳しい状況に置かれた」といった。
すると彼（カアブ）はこれを聞いてこういった。
アッラーに誓ってあなたもまた彼（預言者）によってもっと困難な目に会うだろう。
そこでイブン・マスラマは次のようにいった。
確かに、今私達は彼に従っています。
また我々は彼の事がどのようになるかを見届けるまでは彼を見捨てることは好んでいません。
ところで彼（イブン・マスラマ）は「私にお金を貸して欲しいと思っていたのですが」といった。
すると彼（カアブ）は「何を抵当にするのか？」といった。
それでイブン・マスラマは「何を望みますか？」といった。
するとカアブは「あなた達の妻を抵当にして欲しい」といった。
それでイブン・マスラマは「あなたはアラブ一の美男子なのに私達の妻を抵当にするのですか？」といった。
するとカアブは「ではあなた達の子供を抵当にして欲しい」といった。
それでイブン・マスラマはこういった。
（もしそのようにすれば）私達の息子は２ワスタのナツメヤシの実で抵当にされたといわれて罵られるでしょう。
ですから私達はあなたに武器を抵当にしましょう。
するとカアブは「それでよろしい」といった。
それからイブン・マスラマはハーリスとアブー・アブス・ビン・ジャブルとアッバード・ビン・ビシュルと一緒に彼（カアブ）の所に出向くことを約束した。
それで彼らはやって来た。そして夜間に彼を訪れた。

そこで彼は彼らのところに降りて来た。
ところで伝承者の一人スフヤーンはアムル以外の伝承者が次のように伝えたと述べた。
（そのとき）彼の妻は「私はあたかも人殺しの声のようなものを聞きました」といった。
すると彼は「ああ、それはムハンマド・ビン・マスラマと彼の乳兄弟のアブー・ナーイラだよ、紳士はもし夜間に槍で突かれるために呼ばれたとしてもそれに応じなければなるまい」といった。
さて一方、イブン・マスラマは（仲間に）こういった。
彼が来たら私は彼の頭に手を伸ばし、そして彼をしっかりと捕まえたならば、あなた達はしっかりやりなさい（やってしまえ）。
こうして彼（カアブ）が外套を脇にかかえて持って降りてきたとき彼らは彼に「あなたからとても芳しい匂がする」といった。
するとカアブは次のように説明した。
そのとおり、私はアラブの女性のうちでも最もかぐわしい香水をつける某女性と一緒にいますがそのせいですよ。
するとイブン・マスラマは「（頭上の）匂をかいでもよいですか？」といった。
するとカアブは「ええどうぞ、かいでみて下さい」といった。
そこでイブン・マスラマは（頭を）掴み匂をかいだ。
そしてそれから彼は「いま一度かいでもよろしいですか？」といった。
こうしてイブン・マスラマはしっかりと（カアブの頭を）掴み「さあしっかりかかれ！」といった。
このようにして彼らは彼を殺害した。

ハイバルの戦い（注）

（注）マディーナ地方のオアシス都市、ユダヤ人が住んでいたが 628 年預言者はここを攻略した

アナスは次のように伝えている

アッラーの使徒はハイバルを襲撃した。
私達はその近くで夜明け前に早朝の礼拝をした。
それからアッラーの預言者は馬に乗った。
アブー・タルハも馬に乗り私はアブー・タルハの後ろに乗った。
それからアッラーの預言者はハイバルへの脇道を通った。
ところで（私が預言者にあまり近づいたため）私の膝が彼の大腿に触れた。
それでアッラーの預言者の大腿から服がめくれた。
そのとき私はアッラーの預言者の大腿の白さを見ました（注 1）。
さて彼（預言者）が町に入った時、彼は「アッラーは偉大なり、ハイバルは滅びたり、私達が町の広場に着く時には警告された者達（ハイバルの住民のユダヤ人）にとって最悪の朝となろうぞ」とこの言葉を三度繰り返した。
この町の住人は丁度仕事に出払っていた。
そして彼らが（彼を見たとき驚いて）「あっムハンマドだ！」といった。
ところでアブドル・アズィーズと私達の仲間数人とハミース（注 2）はこう伝えた。
私達はその町を力ずくで分どった。

（注 1）伝承者の記憶がいかに確かに刻明であるかを示そうとしているだけのこと

（注 2）五陣形のことか。つまりムハンマドの軍のこと

アナスは次のように伝えている

ハイバルの日、私はアブー・タルハの後ろに相乗りしていた。
そのとき私の足がアッラーの使徒の足に触れた。
日の出とともに私達は彼らのところにやって来た。
そのころ彼らは家畜を追ったりまたは斧やかごやシャベル（注）をもって（畑仕事に）出かけていたがムハンマドに気付き「ムハンマドとその五陣形軍が来た」と驚いて叫んだ。
それでアッラーの使徒はこういった。
ハイバルは滅びたり、我らが町の広場に着くときには警告された人々（町の住人）にとっては最悪の朝となろう。
こうしてアッラーは彼ら（敵）を敗北させた。

（注）紐という意味もある。
それならばナツメヤシの樹に登るための太紐のこと

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

アッラーの使徒がハイバルにやって来たときこういった。
我らが町の広場に着いた時には警告された人々にとっては最悪の朝となろう。

サラマ・ビン・アクワウは伝えている

私達はアッラーの使徒と一緒にハイバルに出陣した。
私達はずっと夜間行進をしつづけた。
さてある男がアーミル・ビン・アクワウに「あなたの詩を私達に聞かせてもらえませんか？」といった。
アーミルは詩人でもあり彼らのラクダを（元気づけて）駆り立てるために次のような詩（注1）を吟唱しました。
おおアッラー、もしあなたがいなかったなら私達は正道に導かれなかったでしょう
また私達はサダカを納めることもなかったし礼拝も捧げなかったでしょう
私達はあなたに命を捧げます
どうか私達が犯した間違をお赦し下さい
また私達が交戦するときは私達の足元をしっかりとお固め下さい
私達に平静さをお授け下さい
叫び声を上げて呼ばれたら我らはただちにはせ参じます
見よ、彼らは叫び声を上げて私達に助けを求めている
さてそこでアッラーの使徒は「（ラクダを）駆り立てている者は誰れだ」といった。
すると彼らは「アーミルです」といった。
そこで使徒は「アッラーが彼に慈悲をおかけになりますように！」といった。
するとある男がこういった。
（殉死が彼に）定められた（注 2）。
アッラーの使徒よ、もしあなたが彼への祈りを遅らせていたならば私達はいましばらく彼との仲を楽しむことができたものを。
さて私達はハイバルに到着した。
そして彼らを包囲した。
それは激しい空腹が私達を苦しめるまで続いた。
それから預言者は「アッラーはあなた達のためにそこを征服なされた」といった。
彼らのためにそこが征服された日の夜人々は火を沢山焚きだした。
そこでアッラーの使徒は「この火は何ですか？
あなた達は何を料理しているのですか？」と尋ねた。

すると彼らは「肉です」といった。
そこで彼は「何の肉か？」といった。
すると彼らは「飼いならされたロバの肉です」といった。
そこで彼は「鍋を投げ捨ててそれを壊してしまいなさい」といった。
するとある男が「彼らはその中味を捨てて鍋を洗うのですか？」と尋ねた。
それで彼は「そのようにしてもよい」と答えた。
さて人々が戦列を組んだとき、アーミルの剣は少々短かったが彼はその剣で一人のユダヤ人の脚をねらってなぎ払った。
だが彼の剣の刃先が跳ね返りそれがアーミルの膝を傷つけた。
そして彼はその傷がもとで死んだ。
彼らが（ハイバル征服の後マディーナに）戻ってきたときサラマは私の手を取りながらこう語った。
アッラーの使徒は私の沈んでいる姿を見て「どうしたのだ」といった。
それで私はこういった。
あなたは私の両親を身代金としてもおしくはないお方、人々は（私の兄弟の）アーミルの犠牲は無駄だったと決めつけました。
すると彼は「誰れがそのようなことをいいましたか？」と尋ねた。
そこで私は「誰と誰とそしてウサイド・ビン・フダイル・アンサーリーです」と答えた。
すると彼はこういった。
そのようなことをいった者は嘘つきです。
まこと彼（アーミル）には二倍の報酬があります。
こういって彼（預言者）は二本の指を合わせた。
また「彼こそは献身的にアッラーの道のために戦った戦士です。
彼のように勇敢に戦ったアラブ人はほとんどいない」ともいった。
ところでクタイバの伝えるハディースではわずかな表現上の違いがある。
またイブン・アッバードの伝えるハディースでは「我らに平静さを投げかけたまえ」となっている。

（注 1）ラジャズ調の詩。ラクダの歩みを駆り立てるような調子の詩

（注 2）「アッラーが彼に慈悲をおかけになりますように」と預言者が祈った者は近く殉教死することがよく知られていた

サラマ・ビン・アクワウは次のように伝えている

ハイバルの日、私の兄弟はアッラーの使徒と一緒に激しく戦った。
だが己れの剣先が跳ね返り、それがもとで彼は命を落してしまった。

アッラーの使徒の教友達は彼の死について語りあい、そして（彼の殉死について）疑った。
云く「彼は自分の武器で死んだ男だ」そして彼らはその他彼のいくつかの事についても疑い始めた。
さてアッラーの使徒がハイバルから戻ってきたとき、私（サラマ）は彼に「あなたのために詩を吟唱することをお許し下さい」といった。
そこでアッラーの使徒は彼（サラマ）に許しを与えた。
するとウマル・ビン・ハッターブは「あなたが何を吟唱したいかを私は知っています」といった。
そして私（サラマ）はこう詩を吟唱した。
アッラーに誓って、もしあなたがいなかったならば私達は正道へ導かれなかったでしょう
また礼拝をすることもなかったでしょう
するとアッラーの使徒は「あなたは真実を述べた」と合いづちを打った。
私達に平静さをお授け下さい
また私達が交戦するときは私達の足元をしっかりと固めて下さい
多神教徒達は本当に私達を抑圧した
こうして私が詩を吟唱し終えたときアッラーの使徒は「誰れがこの詩を吟じましたか？」と尋ねた。
そこで私は「私の兄弟が吟じました」といった。
するとアッラーの使徒は「アッラーが彼に慈悲をかけますように！」と祈った。
そこで私はこういいました。
アッラーの使徒よ、人々は彼のために祈りをしぶしぶやっています。
彼らは「あの者は自分の武器で死んだ者だ」といっています。
するとアッラーの使徒は「彼は献身的にアッラーの道のために戦って死んだ戦士です」といった。
ところでイブン・シハーブの伝承は次のように伝えている。
私はサラマにアクワウの一人の息子（アーミル）について尋ねた。
すると彼は父からの伝聞として私に前述の話を伝えた。しかし彼は次の一文を付け加えた。
私が「人々は彼のための祈りをしぶしぶやっています」といったときアッラーの使徒は「彼らは嘘をついた。
彼は献身的にアッラーの道のために戦って死んだ。
彼には二倍の報酬がある」といって二本の指でそのことを示した。

アハザーブ（部族連合）の戦い即ちハンダク（塹壕）の戦い

バラーウは次のように伝えている

アハザーブの日、アッラーの使徒は私達と一緒に土を運んでいた。
そのとき土が彼の腹の白さを隠していたがその間に彼は次のような詩を吟唱していた。
アッラーに誓って、もしあなたがいなかったならば私達は正道に導かれなかったでしょう
また私達はサダカを納めることもなかったでしょうし礼拝をすることもなかったでしょう
私達に平静さをお授け下さい
見よ、あの長老達は我々への追従を拒んだ
または多分彼は次のように吟じた
あの長老達は我々への追従を拒んだ
彼らが不和を望むなら我々もまた拒むだろう
彼はこの詩を声を上げて吟唱した。

イブン・イスハークはバラーウからの伝聞として同様のハディースを伝えている。
しかし以下の部分が違っていた

その長老達は本当に私達を抑圧した。

サハル・ビン・サアドは次のように伝えている

アッラーの使徒が私達の所にやって来たとき私達は塹壕を掘っていて土を肩にかついで運んでいた。
そのときアッラーの使徒がこういった。
アッラーよ、（残された）人生は来世のみです。
ところでムハージル達とアンサールをお赦し下さい。

アナス・ビン・マーリクはアッラーの使徒が次のように吟じたとして伝えている

おおアッラー、人生は来世のみです
ムハージル達とアンサールをお赦し下さい

別の伝承者経路を経て**アナス・ビン・マーリク**はアッラーの使徒が次のように吟じたとして次のように伝えている

アッラーよ、人生は来世のみです
ところで伝承者の一人シュウバは「または預言者が次のように吟じた」として伝えている。
アッラーよ、人生は来世のみです
ムハージル達とアンサールに栄誉をお与え下さい

別の伝承者経路を経て**アナス・ビン・マーリク**は次のように伝えている

教友達はアッラーの使徒と一緒に次のような詩を吟唱していた。

おおアッラー、来世の良さに勝るものは何もありません！

どうかムハージル達とアンサールをお助け下さい

ところで伝承者の一人シャイバーンは「お助け下さい」の代りに「お赦し下さい」と伝えた。

アナスは次のように伝えている

ハンダクの日、ムハンマドの教友達は次のような詩を吟唱していた。

私達はムハンマドに誓を立てた者である

私達は生きている限りイスラームに従う

ところで伝承者の一人ハンマードは「イスラームに従う」の代りに「ジハードに従う」と吟唱したのではなかったかとしている。

そしてまた預言者も次のような詩を吟唱した。

アッラーよ、真に良きものは来世の良さです

ムハージル達とアンサールをお赦し下さい

ズー・カラドの戦い（注）とその他の戦闘について

（注）マディーナから約一日行程の所にある水場でこの戦いはほんの小競り合い程度のものだった。
ハイバルの戦いの前だったともヒジュラ 6 年のフダイビーヤの和約の前だったともいわれている

サラマ・ビン・アクワウは次のように伝えている

私は早朝の礼拝のためのアザーン（礼拝への呼びかけ）が行われる前に出かけた。
アッラーの使徒の（出産間近い乳の出る）雌ラクダはズー・カラドで放牧されていた。
さて私はアブドル・ラフマーン・ビン・アウフの奴隷に会ったが彼がいうにはアッラーの使徒の雌ラクダが盗まれたという。
それで「誰れが盗んだのだ？」と私がいうと彼は「ガトファーン族（の者）です」と答えた。
私は助人を求めて「やられたぞ」と三度叫んだ。
私はマディーナの両黒石地帯の間にいる者（注 1）全てに私の叫び声を聞かせた（と思う）。
それから私は彼らの跡を追って懸命に走った。
そしてズー・カラドで彼らに追いついた。
丁度彼らは（ラクダに）水をやっているところだった。
そこで私は、（腕におぼえのある）射手だったので彼らに矢を射かけ始めた。
そのとき私はこう詩を吟唱した（注 2）。
私はアクワウの息子
今日は下劣な者達の破滅の日
こうして私は彼らからラクダを救い出し、また 30 枚の上衣を奪いとるまで詩を吟唱しつづけた。
そこへ預言者と人々がかけつけて来た。
そこで私はこういった。
アッラーの使徒よ、彼らは喉が乾いていますが私は彼らに一滴の水も与えませんでした。
彼らに兵を差し向けて下さい。
すると預言者は「イブン・アクワウよ、あなたが得た物はあなたの物です。
だが彼らのことは大目にみなさい」といった。
それから私達は帰途についたがそのときマディーナに到着するまで私はアッラーの使徒のラクダに彼と相乗りした。

（注 1）マディーナは黒色火山岩の二つの焼石の原にはさまれて位置している。
その間の人々とは結局マディーナの住人全てにの意

（注 2）やあ見参見参、我こそは……に相当するものでアラブでは会戦の前に決闘があり
決闘の前にまず詩合戦があったことが知られている

イヤーズ・ビン・サラマは父からの伝聞として次のように伝えている
私達はアッラーの使徒とともにフダイビーヤの水場に到着した。
私達の人数は 4000 人であった。
私達は 50 頭の羊を連れていたが（水場の水量が少くなて）水を与えられなかった。
それでアッラーの使徒は井戸の縁に腰掛けた。
そこで彼は祈ったかまたは井戸に唾を吐いた。
すると井戸の水が溢れ出て来た。
それで私達は水を飲み（家畜にも）水を与えた。
さてそれからアッラーの使徒は樹の下で忠誠の誓をとりつけるために私達を呼んだ（注 1）。
そこで私は最初に誓約をした。
それから他の者達が次々と誓約していった。
そして人々の半分が誓約をし終えたとき預言者は「サラマよ、誓約をしなさい」といった。
私は「最初にあなたに誓約しました」といった。
すると彼は「もう一度」といった。
さてアッラーの使徒は私が武器を持っていないことに気付き私に皮張りの大盾か小盾を
与えた。
それから預言者は誓約を主催しつづけ殆んどの者が誓約をし終えたとき「サラマよ、あな
たは誓約しないのですか？」といった。
それで私は「アッラーの使徒よ、確かに私は最初にそして中程でもあなたに誓約しました」
というと彼は「もう一度」といった。
そこで私は三度目の誓約をした。
それから彼は「サラマよ、私が与えた皮張りの大盾または小盾はどこですか？」といった。
そこで私は「アッラーの使徒よ、私の叔父アーミルが武器を持たずに（丸腰で）いましたの
で私は彼にそれをあげました」といった。
するとアッラーの使徒は笑いながらこういった。
あなたはあたかも以前に「アッラーよ、私に己れ自身よりももっと大切な友人をお授け下さ
い」といった人物のようだ。
さてそれから多神教徒達は和平条約の締結のために私達に使節を送りまた私達も彼ら
に使節を送った。
そして人々はお互いに相手方に出向いて行くことができた。
こうして私達は和平条約を結んだ。
ところで私はタルハ・ビン・ウバイドッラーに仕えていた。
私は彼の馬に水をやり、その背をこするなど彼のために働き彼の食料の中から食を得て

いました。
私は家族を捨て財産を捨てアッラーとアッラーの使徒のために移住した者でした。
さて私達はマッカの住人達と和平条約を結び人々はお互いに入り混ざった。
そのとき私は一本の樹の木陰に来てその刺を払いその根元に横になった。
そこへマッカの四人の偶像崇拝者達がやって来てアッラーの使徒を中傷し始めた。
私は彼らに非常に腹を立て別の樹の下に移った。
一方彼らは彼らの剣をその樹に吊し横になった。
彼らがそのようにして休んでいるとき、一人の男がワジ（涸川）の下の方から「ムハージル達よ！　イブン・ズナイムが殺された」と叫んだ。
そこで私は剣を抜きそして眠っていたあの四人の男に襲いかかり彼らの武器を取りあげてそれを私の手の中で一束にしてしまった。
そして私は彼らにこういった。
ムハンマドの上に栄誉をお授けになったお方に誓って、お前達のうちで一人でも頭を上げる者がいれば目玉のあるところ（つまり頭）を切り落してしまうぞ。
それから私は彼らを駆り立ててアッラーの使徒のもとへやって来た。
そこへ丁度私の叔父のアーミルがミクラズという名のアバラート族（注 2）出身の男を連れて来た。
アーミルはアッラーの使徒のもとへ 70 人の多神教徒の他に防護衣を着用した馬に乗っているその男を引いてきたのだが彼らを見てアッラーの使徒はこういった。
彼らを放してやりなさい。
我々が彼らに対して行動を起こす前に一度ならず二度までも（誓約を破る）罪を犯すかも知れないのだから。
こうしてアッラーの使徒は彼らを赦した。
そこで次のようなアッラーの啓示が下った。
「また彼こそはあなた達を彼らよりも優勢にしておいてからマッカの低地であなたがたからは彼らの手をまた彼らからはあなたがたの手を押えてお互に手を引かせて下さったお方である……」（第 48 章 26 節）。
さてそれから私達はマディーナに向けて戻っていった。
私達は山一つへだてて多神教徒のリフヤーン部族が住んでいる場所で宿営した。
ここでアッラーの預言者は夜間にこの山へ偵察に登る者と彼の教友達のためにアッラーの赦しを請うた。
ところでサラマは「あの夜私は二回もしくは三回（山に）登った」といった。
さて私達は遂にマディーナに到着した。
そこでアッラーの使徒は彼のラクダを彼の奴隷のラバーフと一緒に放牧に出した。
そしてそのとき私は彼（ラバーフ）と一緒であった。
私は彼とともにタルハの馬でラクダを連れて放牧地に出かけた。

夜が明けたとき、アブドル・ラフマーン・ファサーリーの一党がアッラーの使徒のラクダを襲い、彼はそれらの全てを追い立て、その世話をしていた者を殺した。
そこで私はこういった。
ラバーフよ、この馬をとれ、そしてこのことをタルハ・ビン・ウバイドッラーに告げよ。
そしてアッラーの使徒に知らせよ、多神教徒達が彼の家畜を襲ったと伝えよ。
それから私は小高い丘の上に立ちマディーナの方を向いて助人を求めて三度「敵が襲ってきたぞ」と叫んだ。
それから私は襲った者達の後を追った。
私は彼らに矢を射かけながら次のような詩を吟唱した。
私はアクワウの息子である
今日は下劣な者達の破滅する日
こうして私は彼らの中の一人に追いつき矢を射かけ、それが鞍を貫き鉄の矢尻が彼の肩に突きささった。
さらに私は「これを受けてみよ」といって次の詩を吟唱した。
そして私はアクワウの息子
そして今日は下劣な者達の破滅する日
さてアッラーに誓って私は矢を射かけつづけ彼ら（の馬）を仕止めた。
そして一人の騎士が私のところに戻ってきたときには、私は一本の木のところに行きその根本に座って身を隠した。
それから私は彼に矢を射かけ遂に彼の馬を仕止めました。
こうして最後に山道が狭くなり彼らは（矢の攻撃を避けて）その狭い山道に入っていった。
だが私はその山に登り、そして今度は彼らに向けて私は石を投げ始めた。
かくて私はこのように彼らを追跡したが遂に私はアッラーの使徒のラクダを全て解放し、彼らに一匹のラクダも残さなかった。
そして彼らは私とラクダを諦めた。だが私は彼らに矢を射かけつづけ彼らの後を追った。
それでとうとう彼らは 30 着以上の上衣と 30 本以上の槍を身軽にするために投げ捨てた。
そこで私は彼らが投げ捨てたもの全てにアッラーの使徒と彼の教友がそれと気付くように標石を置いた。
さて彼らは（進みつづけ）狭い山道にやって来た。
そこへファザーリー族のバドルの息子の某が彼らの所にやって来た。
それで彼らは朝食をとるために座ったがそのとき私は小山の山頂に座っていた。
さて例のファザーリー族の男は「私が見ているこの者は誰れですか？」と尋ねた。
そこで彼らはこういった。
私達はこの者のために厳しい状況にある。
アッラーに誓って彼は夜明け前から私達から離れず（矢や石を）投げつづけとうとう彼は私達の手から全てのものを奪ってしまいました。

するとファザーリー族の男は「ではあなた達の中から四人行かせましょう（彼を殺すため）」といった。
それから彼らのうちの四人の者が私をめざして山を登って来た。
そして彼らが私に話ができる程に近づいたときに私は「お前達は私を知っているのか？」といった。
すると彼らは「いいえ、お前は誰れだ」といった。
それで私はこういった。
私はサラマ・ビン・アクワウだ。
ムハンマドに栄誉を授けたお方に誓って、私はその気になればお前達の誰れでも殺すことができる。
しかしお前達の誰れもその気になっても私を殺すことはできない。
ここで彼らのうちの一人が「私は（その通りだと）思う」といった。
それで彼らは戻っていったが私はアッラーの使徒の騎士達が樹木の間を見えかくれしつつ現われるまではその場を離れなかった。
さて彼らの先頭はアクラム・アサディーでその後ろにアブー・カターダ・アンサーリーがいてその後ろにミクダード・ビン・アスワド・キンディーがつづいていた。
それで私はアクラムの馬の手綱を掴んだ。
（これを見て）彼ら襲撃者達はくるりと向きを変えて逃げてしまった。
そこで私はこういった。
アクラムよ、彼らから目を離すな、アッラーの使徒と彼の教友達が追いつくまで彼らがあなたを引き離さないよう気をつけて。
すると彼は「サラマよ、もしあなたがアッラーを信じ、来世を信じ、天国は真実であり地獄も真実であることを信じているならば私と殉教死との間を阻まないでくれ」といった。
それで私は彼を離した。
すると彼とアブドル・ラフマーン（ファザーリー）は一騎打をすることになった。
アクラムはアブドル・ラフマーンを引き止めて彼の馬の脚を切った。
だがアブドル・ラフマーンは彼を槍で突き殺した。
さて私はムハンマドに栄誉を授けたお方に誓って両足で走って彼らの後を追った。
（あまり速く走ったもので）私は私の後方にムハンマドの教友達も彼らの立てる土埃も見えなかった。
（私は彼らを追跡しつづけ）彼らは最後に日没前にズー・カラドと呼ばれている水場のある山道へ戻ってきた。
それは彼らが喉が乾いていたので水を飲むためであった。
だが彼らは彼らの後を追う私を見た。
そして私は彼らをそこから追い出してしまった。
それで彼らは一滴の水も味わうことができなかった。

そして彼らはそこから出て行き、坂を駆け下って行った。
ところが私は（彼らの後を追って）走りとうとう彼らの一人に追いつき、彼の肩の軟骨部を矢で射貫いた。
そこで私は「受けてみよ、われはアクワウの息子、今日こそ下劣な者達の破滅の日」といった。
するとその傷を受けた男は「母が子を失い嘆き悲しむ者よ、お前が朝から私達を追っているアクワウか？」といった。
それで私は「そうだ、汝自身の敵よ、今朝からのアクワウだ」といった。
さて彼らは（馬二頭を走らせていたが）疲れきったその二頭を山の小道に置き去りにした。
それで私はその馬二頭を追い立ててアッラーの使徒のもとに連れて来た。
そこへアーミルが私に追いつき薄めたミルクの入った皮袋と水が入った皮袋を持って来た。
私はそれでウドゥー（礼拝のための清浄行為）を行い（ミルクを）飲んだ。
それから私はアッラーの使徒のもとにやって来た。
彼は私が彼らをそこから追い払った水場の脇にいた。
アッラーの使徒は例のラクダとその他に私が多神教徒達から分取った全ての物と槍と上衣を受けとった。
一方ビラールが私が敵から奪い返したラクダの群の中から一匹の雌ラクダを選んで殺しアッラーの使徒のためにその肝臓とこぶを焼いた。
さて私は預言者にこういった。
アッラーの使徒よ、仲間の中から 100 人の男を選ばせてください。
されば私は略奪者達を追いかけます。
そして彼らの全滅を知らせる者さえ殺しましょう。
これを聞いてアッラーの使徒は火の明かりで彼の臼歯がはっきり見えるほど大笑した。
そして彼は「（もし私か許したならば）あなたはそのように出来ると思っているのですか？」といった。
そこで私は「はい、あなたに栄誉を授けたお方に誓って」といった。
すると彼は「今頃彼らはガトファーン族の地でもてなしを受けているはずだ」といった。
さてそのとき丁度ガトファーンの地から一人の男がやって来てこう語った。
誰々が彼らのためにラクダ一頭を殺してもてなした。
そして彼らがその皮をさらして調べたとき、それには遠方で立ち登ったと思われる土埃がかかっていた。
それで彼らは「アクワウとその仲間達が（攻めて）来た」といって逃げ出した。
さて朝が来たときアッラーの使徒は「今日私達の中で最も素晴しい騎士はアブー・カターダであり、最も素晴しい歩兵はサラマである」といった。
それからアッラーの使徒は戦利品のうちから私に騎士の分け前と歩兵の分け前の二つの分け前を与えた。

彼は私のためにその二つの分け前を特に併わせてくださったのである。
それからマディーナに帰る際に、預言者はアドバーウ（注 3）と呼ばれる彼のラクダに私を相乗りさせてくれた。
こうして私達が（マディーナへと）行進しているとき、走ることでは負けたことのないアンサールの一人がこういい始めた。
誰れか私とマディーナまで競走する者はいませんか？
挑戦する人はいませんか？
こうして彼は同じことを繰り返しつづけた。
それで私は彼の言葉を聞いてこういった。
あなたには寛大な方への思い遣りがないのですか？
また高貴な方への敬虔さはないのですか？
すると彼は「いいえ、ただその方はアッラーの使徒のみです」といった。
それで私は「アッラーの使徒よ、私の父母を身代りにしてもおしくないお方よ、私を降して下さい。
私に彼と競走させて下さい」といった。
すると預言者は「もしあなたが望むなら」といった。
それで私は（競走を望む者に）いった。
「今あなたの所に行くよ」そして私は両脚を屈伸して飛び降り、そして走り出した。
私は息切れしないように押え気味で走り小高い場所を一個所または二個所をやり過した。
それから彼の後を走りつづけ、押え気味に走ってまた小高い場所を一個所か二個所やり過した。
それから私はダッシュをかけ彼に追いつき彼の両肩の間を叩いた。
そして私は「あなたは抜かれた。
アッラーに誓って」といった。
すると彼は「私もそう思う」といった。
こうして私は彼を抜いてマディーナに着いた。
さてアッラーに誓って私達はこの（マディーナ）に三日間しかいなかった。
そして私達はアッラーの使徒とともにハイバルに向った。
途中で私の叔父のアーミルは皆のためにラジャズの詩を次のように吟唱し始めた。
アッラーに誓って、もしアッラーがいなかったら私達は正道に導かれることはなかったろう
またサダカを納めることもなく礼拝も捧げることもなかったろう
そして私達はあなたのお恵みなしには何もできません
ですから私達が交戦するときは私達の足元を固定させて下さい
そして私達に平静さをお授け下さい
するとアッラーの使徒は「この者は誰れですか？」といった。
そこで彼は「私はアーミルです」と答えた。

すると預言者はこう祈った。
あなたの主があなたの罪をお赦しになりますように！
ところでアッラーの使徒が特に人物を指定してアッラーに赦しを乞う場合はその者が殉死すると定められたときでした。
それでウマル・ビン・ハッターブがラクダの上からこう呼びかけた。
アッラーの預言者よ、もし（あなたの祈りが）なかったら（まだ私達はアーミルと一緒に過ごせたはずだ）だがあなたはアーミルと一緒に過す楽しみを私達から奪ってしまった。
そして私達がハイバルに到着したとき彼らの首長のマルハブが剣を上下に振りながら出てきて次のように吟唱した。
ハイバルは私がマルハブだと知っている
充分な武器を持ち立派な試練済みの勇士だと
戦争になってその炎が広がる時には
そこで私の叔父アーミルが彼に立ち向い次のように吟唱した。
ハイバルは私がアーミルだと知っている
充分な武器を持ち突進する勇士だと
そして彼ら二人はお互いに切り合った。
マルハブの剣がアーミルの盾を打った。
アーミルは相手を下の方から切りかかっていった。
しかし他の剣は彼自身に跳ね返り腕の正中静脈を切った。
そしてそれがもとで彼は死んだ。
さて私（サラマ）は（その場を）離れた。
すると教友達の数人が「アーミルの行為は無駄になった。彼は自分自身を殺してしまった」といっているではありませんか！
それで私は泣きながら預言者のところに来てこういった。
アッラーの使徒よ、アーミルの行為は無駄になったのですか？
するとアッラーの使徒は「誰れがそのようなことをいいましたか？」と尋ねた。
そこで私は「あなたの教友の数人です」と答えた。
すると彼はこういった。
そのようにいった者は嘘をつきました（間違えたの意）。
それどころか彼には二倍の（アッラーの）報酬があります。
それから預言者はこういって私をただれ目のアリー（注 4）のところに使いに出した。
私（預言者）はアッラーとアッラーの使徒を愛する者、またアッラーとアッラーの使徒が愛する者へ旗を授ける。
こうして私（サラマ）はアリーの所に来て彼を連れて来た。
（そのとき）彼はただれ目だったので私は預言者の所まで彼を導いて連れて来た。
そこでアッラーの使徒は彼の両目に唾をつけた。

すると彼（の目）は良くなった。そして預言者は彼に旗を与えた。
さてアリーはマルハブに会いに出かけた。
そこでマルハブが出てきて例によって吟唱した。
ハイバルは私がマルハブだと知っている
充分な武器を持ち立派な試練済みの勇士だと
戦争になりその炎が広がる時には
するとアリーもまた詩を吟唱した。
私こそは母がハイダル（注 5）と名付けた者
恐ろしい顔付きをしたジャングルのライオンのような男
私は彼ら（敵）にサーア枡の代わりにサンダラ枡を与えよう（注 6）
こうしてアリーはマルハブの頭を打って殺してしまった。それでハイバル攻略の勝利は彼の手によってもたらされた。
ところでこの良いハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。

（注 1）リドワーンの誓のこと

（注 2）クライシュ族の一支族

（注 3）預言者専用のラクダの名前

（注 4）アリー・ビン・アブー・ターリブのこと

（注 5）ライオンの別名。アリーの幼名はアサド（ライオン）といった

（注 6）どちらも穀物の計量単位でサンダラの方がサーアの方より大量。
ここでは「私は彼ら敵の攻撃に対して何倍にもしてお返ししてやる」という意味

前記と同様のハディースが**イクラマ・ビン・アンマール**によって伝えられている。

アッラーの言葉「また彼こそはあなた達から彼らの手を押えられ手を引かせたお方」（第 48 章 24 節）に関して

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている

マッカの住人からなる80 人の男がタヌイームの山から武装して降りて来てアッラーの使徒を襲撃した。

彼らはアッラーの使徒と彼の教友達の不意を突く予定だった。

だがアッラーの使徒は（逆に）彼らを捕虜とした。

そして彼は彼らの命を助けた。

そこへアッラーの次のような啓示が下った。

「また彼こそはあなた方を彼らに対して優勢にしておいてマッカの谷底であなた方には彼らの手をまた彼らにはあなた方の手を押えられ互に手を引かせたお方である」（第 48 章 24 節）。

男性達とともに戦った女性達の戦い

フナインの日、ウンム・スライムは短刀を持ち出しそれを身につけた。
そしてアブー・タルハがこの後女（の姿）を見て（預言者に）こういった。
アッラーの使徒よ、この女性はウンム・スライムです。彼女は短刀を身に着けています。
するとアッラーの使徒は彼女に「この短刀は何だね？」と尋ねた。
そこで彼女はこういった。
私は多神教徒の誰れかが私に近づいたならばその者の腹をこれで引き裂くために持ち出しました。
それで彼は（彼女のこの言葉に）笑いだした。
だが彼女は「アッラーの使徒よ、あなたに敗北した私達以外のマッカの住人で自由になった者達（注 1）を殺して下さい（なぜなら彼らは偽信者だから）」といった。
するとアッラーの使徒は彼女にこういった。
ウンム・スライムよ確かにアッラーが（彼らの行動に対して）充分に処罰して下さる。
また（私達には）良くして下さる（注 2）。

（注 1）マッカ征服後に止むなく入信したマッカの住人。
彼らは敗北したにもかかわらず預言者によって解放された。
しかし信仰は薄かったといわれここでは偽信者と考えられている

（注 2）だから女だてらに短刀を持ち歩かなくともよいという意味

前記のハディースは**アナス・ビン・マーリク**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている
アッラーの使徒はウンム・スライムやアンサールの夫人達を伴なって戦場に出ることがあった。
彼女達は（兵士達に）水を供給したり、怪我人の治療をしたりした。

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている
ウフドの戦いの日、人々が預言者を見捨てて敗走した。
しかしアブー・タルハは預言者の前に立ち盾で彼をかばった。
さてアブー・タルハは強の弓取りであった。
その日彼は二、三振りの弓を折ってしまった程である。
ところである男が矢の詰った失筒を抱えて彼のそばを通ったとき彼は「アブー・タルハにそれを分けて下さらんか」といった。

さてアッラーの預言者が人々の様子を見るために（頭を上げて）下を見おろすたびにアブー・タルハはこういった。
アッラーの使徒よ、私の父母にも代えがたいお方よ、敵の矢面に立たぬよう決して（頭を上げて）見おろしてはなりません。
どうか私の首の方があなたの首よりも（敵の）矢に近いところにありますように！
さらに伝承者は次のように伝えている。
私はそのときアーイシャ・ビント・アブー・バクルとウンム・スライムの二人を見た。
彼女達は衣服を捲っていたので私は彼女達の足首の足輪を見てしまった。
そして彼女達は水を入れる皮袋を背負っていた。
それから（井戸に）戻りそれに水を満杯に詰め、それから再び人々の口に注ぐために戻って来た。
さて（この日）アブー・タルハの手から剣が二度または三度と眠気のために落ちた（注）。

（注）敗北したイスラーム側の恐怖心と極度緊張を解消するためにアッラーがしばしの眠気とまどろみを与えたものと解釈されている

戦闘に参加した女性達は褒賞されるが正式の戦利品の分け前は受けないこと、また敵の子供を殺害してはならぬこと

ヤズィード・ビン・フルムズは次のように伝えている

ナジュダが五つの事項について尋ねるために手紙を書いた。

それでイブン・アッバースはこういった。

もし私が知識を隠す罪を恐れなければ私は彼に何も書かなかっただろう。

さてナジュダはイブン・アッバースに次のように書いてきた。

(挨拶の後)、次の事を私に教えて下さい。

アッラーの使徒は女性達と一緒に戦いに出ましたか?

(もしそうであれば)彼は彼女達に戦利品を分け前として割り当てましたか?

彼は敵の子供を殺しましたか?

何歳になるまで孤児としての待遇を受ける権利がありますか?

フムス(戦利品の五分の一)は誰のものですか?

そこでイブン・アッバースは彼に次のように書いて返事をした。

あなたはアッラーの使徒が女性達と一緒に戦いに出ましたかと尋ねるために私に手紙を書いてきましたが彼は彼女達と一緒に戦いに出ました。

彼女達は怪我人を手当していました。そして戦利品の中から褒賞の品を与えられました。

しかし正式な分け前は彼女達には割り当てられませんでした。

またアッラーの使徒は決して敵の子供達を殺すようなことはしませんでした。

だからあなたも決して敵の子供を殺してはなりません。

またあなたは何歳になるまで孤児としての待遇を受ける権利がありますかと尋ねるために私に手紙を書いてきましたが

私の人生にかけてそれ(孤児)はもし彼の顎髭が生えてもまだ彼自身に得るべきものを得ることかできず

また他人に与えるべきものを与えることができない者です。

しかしもし彼が人々が得る物を自分自身のために得ることができたなら彼の孤児としての権利はなくなります。

またあなたはフムスは誰のためですかと尋ねるために私に手紙を書いてきましたが

私達(ハーシム家の人々)は「それは私達のためのものである」といってきました。

しかしあの人々(ウマイヤ家の人々)は私達にそれを認めません。

同様のハディースが**ヤズィード・ビン・フルムズ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

しかし以下の部分に表現上の違いがある。

「決してアッラーの使徒は子供達を殺すことはなかった。

だからあなたも決して子供達を殺してはならない。

しかしもしあなたがハディル（注 1）が殺した子供について彼が知っていたことをあなたが知っていたならばそれは例外である（注 2）」
ところでハーティムは次の一文を加えている。
「あなたは（子供がいずれ）信者になるか否かを見極め、多神教徒になる者は殺し信者になるであろう子供は解放しなさい」

（注 1）伝説上の聖者、預言者とも使徒とも聖者ともいわれている

（注 2）彼が子供を殺したのはアッラーの命によるもの即ち彼にはその子が成長して多神教徒になることがあらかじめ解っていたの意

ヤズィード・ビン・フルムズは次のように伝えている

ナジュダ・ビン・アーミル・ハルーリーは以下の事について尋ねるためにイブン・アッバースに手紙を書いた。
それは戦利品を得るためにやって来た奴隷と女性に分配してもよいかどうかについて、また（敵の）子供達の殺害について、
また孤児はいつ孤児としての権利を断たれるか、また（預言者の）親族は誰かについて、であった。
それで彼（イブン・アッバース）はヤズィードに次のようにいった。
彼に手紙を書きなさい。
もし彼が愚かな行為をしそうもなければ私は彼に手紙を書くこともないのだが、次のように書きなさい。
あなたは戦利品を得るためにやって来た奴隷と女性に何か分配してもよいかどうかについて私に尋ねるために手紙を書きましたが
二人には何も正式に分配されるものはありません。
しかし二人には褒賞の品として何かが与えられます。
また（敵の）子供達の殺害についてあなたは私に尋ねるために手紙を書きましたが
アッラーの使徒は彼らを殺しませんでした。
ですからあなたも彼らを殺してはなりません。
しかしあなたがモーゼの同伴者（ハディル）が殺した子供について彼が知っていたことを知ったならば（そのケースは）別です。
また孤児はいつ孤児としての権利が断たれるかについてあなたは私に尋ねるために手紙を書きましたが
それは彼が成人して精神的確立が彼に見られるまで彼から孤児としての権利は断たれません。
また（預言者の）親族は誰かについてあなたは私に尋ねるために手紙を書きましたが、私

達は私達こそそれであると考えています（注 1）。
しかし人々は私達に対してそのこと（注 2)を認めません。

（注 1）具体的には預言者の娘婿アリーの子孫と叔父のアッバースの子孫

（注 2）預言者の親族という地位とそれに付随する特権と恩点など。

時にカリフ職やフムスに関する遺産相続などについては対立がある
同様のハディースが**ヤズィード・ビン・フルムズ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

ヤズィード・ビン・フルムズは次のように伝えている
ナジュダ・ビン・アーミルはイブン・アッバースに手紙を書いた。
私（ヤズィード）はイブン・アッバースが彼の手紙を読んでいるときもまた彼への返事を書いているときも彼のそばにいた。
そのときイブン・アッバースは次のようにいった。
彼（ナジュダ）が過ちを犯すことを予防しようとする気が私（イブン・アッバース）になければ私は彼には手紙を書かないでしょう。
これ（書くこと）は実に楽しい事ではない。
こうして彼は次のように手紙を書いた。
アッラーが述べた（預言者の）親族の（戦利品の）分け前の割合についてそれは誰であるかとあなたは尋ねたが
私達はアッラーの使徒の親族は私達であると考えています。
しかし人々は私達に対してそのことを認めません。
また孤児はいつ孤児としての権利を断たれるのかあなたは私に尋ねましたが
それは彼が結婚適齢期に達してまた精神的確立が彼に見られそれで彼の財産が彼に戻されたときに彼の孤児としての権利は終ります。
またアッラーの使徒は多神教徒の子供を一人でも殺しましたかとあなたは尋ねましたが、アッラーの使徒は彼らを一人も殺しませんでした。
あなたも彼らを一人でも殺してはなりません。
もしあなたがハディルが殺した子供について彼が事前に知っていたことをあなたが知ることが出来るならば別です。
また戦争に参加した女性と奴隷に（戦利品の分け前の）定められた割合があるかどうか尋ねましたが彼と披女らには定められた割合はありません。
しかし人々の戦利品の中から褒賞として何がしかの物が与えられます。

同様のハディースが**ヤズィード・ビン・フルムズ**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。しかしここでは前述のハディースほど完全ではない。

ウンム・アティーヤ・アンサーリーは次のように伝えている

私はアッラーの使徒と一緒に七回の聖戦に参加した。

私は彼らの陣営の後ろにいて彼らのために食事を作り怪我人の手当を行い病人の看病をしていた。

同様のハディースが**ヒシャーム・ビン・ハッサーン**によって別の伝承者経路を経て伝えられている。

預言者が戦った聖戦の数

アブー・イスハークは次のように伝えている

アブドッラー・ビン・ヤズィードは人々と一緒にイステカー（雨乞い）の礼拝をするために（町へ）出て行った。

彼はニラカートの礼拝を行い、それからイステカーの礼拝をした。

そして彼は次のように伝えている。

私はその日ザイド・ビン・アルカムに会った。

私と彼との間には一人のある男しかいなかった。

あるいは誰もいなかった。

それで私は彼に「アッラーの使徒は何回聖戦を行いましたか？」と尋ねた。

すると彼は「19 回」と答えた。

さらに私は「あなたは何回彼と一緒に戦いましたか？」と尋ねた。

すると彼は「17 回」と答えた。

そこでさらに私は「彼が最初に（指揮して）戦った聖戦は何ですか？」と尋ねた。

すると彼は「ザート・ウシャイルまたはザート・ウサイル（注）である」と答えた。

（注）これはザート・ウシャイルである

ザイド・ビン・アルカムは次のように伝えている

アッラーの使徒は 19 回の聖戦を行った。彼はヒジュラ（聖遷）をした後は別離の巡礼（ハッジャト・ワダーア）と呼ばれる巡礼を一回だけ行った。

ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように伝えている

私はアッラーの使徒と一緒に 19 回の聖戦を行った。

私は父が私の参戦を禁じたもので（年が若いために）バドルとウフドの戦いには参加しなかった。

しかし父アブドッラーがウフドの戦いで戦死した後はアッラーの使徒が戦う聖戦で決して私は遅れをとることはなかった。

アブドッラー・ビン・ブライダは父からの伝聞として次のように伝えている

アッラーの使徒は 19 回の聖戦を（指揮を取って）行なった。

そして彼はそのうちの八回は実際に剣を交えて戦った。

しかしアブー・バクル・ビン・アブー・シャイバは「そのうちの」とは言及していない。

イブン・ブライダは父からの伝聞として次のように伝えている

彼（父）はアッラーの使徒と一緒に 16 回の聖戦を行った。

サラマは次のように伝えている

私はアッラーの使徒と一緒に七回の聖戦を行った。

また彼が送った遠征のうち七回の聖戦に参加した。

そのうち一度はアブー・バクルが指揮をとり、また一度はウサーマ・ビン・ザイドが指揮をとった。

同様のハディースが**ハーティム**によって同様の伝承者経路を経て伝えられている。
しかし以下の部分に表現上の若干の違いがある

その双方（の聖戦）においてそれぞれ七回の聖戦（に参加した）。

ザート・リカーウの戦い（注）

（注）ヒジュラ 5 年にナジド方面の反乱部族の鎮圧に出向いた際に起った。
リカーウは彼の地の山の名前ともいわれている。
しかし次のハディースでは命名の由来を異にしている。
また年代もヒジュラ 7 年のハイバル陥落後ということになる。
なぜならばそれ以前にはアブー・ムーサーは未だエチオピアからマディーナに移住して来ていないから

アブー・ムーサーは次のように伝えている

私達はアッラーの使徒と一緒に聖戦に出た。
そのとき私達の人数は六人であって、それと一頭のラクダがいて私達はそれに代るがわる乗っていた。
それで私達の足は擦れてすっかり弱くなった。
また私の足もひどく弱ってしまい足の爪が剥がれてしまった。
そこで私達はそれぞれ足にぼろ切れを巻きつけた。
こうして（この聖戦は）ザート・リカーウ（ぼろ切れ）の戦いと名付けられた。
それは私達がそれぞれ足にぼろ切れを巻き付けたことによる。
ところでアブー・ブルダは次のように伝えている。
アブー・ムーサーはこのハディースを伝えたが彼はこの話しを繰り返して語ることは好まなかった。
あたかも彼は大義名分のもとに行われた彼のこの行為が広く知れ渡ることを好まないといったようである。
またアブー・ウサーマは次のように伝えている。
ブライド以外の者は私に「アッラーはそれに報いるであろう」と付け加えた。

戦いの最中に多神教徒に助人を求めることは好ましくない

預言者の妻**アーイシャ**は次のように伝えている

アッラーの使徒はバドルへ向けて出て行った。
彼がハッラト・ワバラ（注）に到着したとき一人の男が彼に近づいて来た。
その男は勇気と度胸の良さで知られていた。
それでアッラーの使徒の教友達は彼を見たとき非常に喜んだ。
さて彼は近づいてきてアッラーの使徒にこういった。
私が来たのはあなたについて行き、あなたと一緒に（戦利品の中から）分け前を手に入れたいからです。
するとアッラーの使徒は彼に「あなたはアッラーとアッラーの使徒を信じますか？」と質問した。
ところが彼は「いいえ」と答えた。
それで預言者は「では帰りなさい、私は決して、多神教徒に助人を求めません」といった。
それから預言者はそのまま進み私達がシャジャラという所に到着したときその男がまた彼に近づき彼に最初と同じことをいった。
また預言者も最初と同じことを答えた。
そして彼は「では帰りなさい、私は決して多神教徒に助人を求めません」といった。
それからその男はいったん戻り、だが彼は再びバイダーウという所で預言者に追いついた。
それで預言者は最初に尋ねたように尋ねた。
「あなたはアッラーとアッラーの使徒を信じますか？」すると今度は「はい」と答えた。
そこでアッラーの使徒は彼に「では一緒に参りましょう」といった。

（注）マディーナの北方 4 マイルの所にある地点

雨乞いの礼拝の書

タイトルなし
雨乞いの祈願は両手を上げる
雨乞いの祈願
風、曇天の日の憂いと降雨の喜び
サバーとダブールについて

日食の書

日食の礼拝
日食時の礼拝と墳墓においての懲罰
預言者が日食時の礼拝で見た天国と地獄
預言者の四叩頭・八立礼について
日食の礼拝への呼び掛け

葬儀の書

死者に対する唱道句について
災難時にいう言葉
病人や死者の側で口にする言葉
死者の目を閉じてから冥福を祈ること
死者の視線は己の魂を追う
死者に対して泣くことについて
病人を訪問すること
災難に出合った際に示す忍耐について
死者は家族が泣くことで苦しめられる
悲嘆への強い戒め
女性は葬列に加わることを禁止された
死者の清め
死者の経衣に関して
布で遺体を覆うこと
死者には白い清潔な経衣を着せること
葬儀には急いで参列のこと
葬儀に参列し礼拝を捧げた場合の徳
死者のための 100 人の同胞の祈願について

40 人の信者の礼拝でも受け入れられる
冥福を祈られた者と非難された者
安らげる者と安らぎを与える者について
死者のためのアッラーへの祈願について
墳墓への礼拝
葬列を見たら起立すること
葬儀に対する起立の撤廃
礼拝にて死者の冥福を祈る
死者への礼拝におけるイマームの位置
死者への礼拝終了後の乗り物について
墓を日干し煉瓦で覆う
墓にへり房のある赤い布を掛ける
「墓は地表と同じ高さにつくる」について
しっくいを塗ってはならない場所
墓に関する禁止事項
マスジドにおける葬儀の礼拝
墓地に入る際に唱える言葉に関して
預言者が母の墓を訪れることに関して
自殺者への礼拝は放棄される

ザカートの書

タイトルなし
十分の一、二十分の一のサダカに関して
奴隷や馬の所有のためのサダカについて
ザカートの寄進と、それの拒否について
ムスリムのフィトルのザカートについて
フィトルのザカートの寄進どき
ザカートを拒んだ者の罪
サダカの徴収者を満足させること
ザカートを行わない者の罪の重大さ
サダカの奨励
財宝の秘蔵者達と彼等への譴責
財を善き事に施す者への吉報
身近な者への出費や物惜しみについて
サダカを受ける者の順序

近親者に対するサダカの徳点
代理者が行うサダカについて
サダカとはあらゆる種類の善行を指す
神の道に費す者また惜しむ者について
サダカは受け取る者があるうちに
サダカは合法的に得た物であること
サダカは火災からの防御となる
労働者のサダカとそれを行う者について
与えることの徳
財を費やす者とけちな者のたとえ
サダカが不相応な者の手に渡った場合
主人の許可を得ているサダカについて
奴隷が主人のものをサダカとした場合
サダカと他の善行が重なった場合
己の善行はいちいち口にしないこと
小さなものでもサダカ
サダカの行為を秘める者の徳
最も良いサダカとは
上の手は施しの、下の手は物乞いのもの
物乞いの禁止
真のあわれな人とは
人に物を乞うことへの非難
物乞いが許される者について
物乞い以外で与えられたもの
物欲切望への非難
アダムの息子は永久に満たされぬ
まことの豊かさは心の豊かさから
現世の装飾品からもたらされる恐れ
慎みと忍耐の徳
充足と満足に関して
厚かましく求める者への給付について
信仰の弱さを懸念する者への給付
心が真理に傾ける人と篤信家の忍耐
ハワーリジュと彼等の性質について
離脱者達の殺害の勧め
ハワーリジュは最悪の輩である

預言者の一族へのザカートについて
預言者の家族にサダカの使用はない
サダカという性質が消える場合について
預言者御自身はサダカを受けられない
サダカを持って来た者へのみ使いの祈願
喜捨の徴収官を満足させることについて

断食の書

ラマダーン月の徳
ラマダーンの断食と新月の確認について
ラマダーン月直前の断食について
この月は 29 日の場合もある
新月の確認は各都市で行う
曇天の場合の新月の確認について
二祭礼月についてのみ使いの言葉
断食は夜明けと共に始まる
サフールとフィトルについて
断食を破る時と一日の終了時刻について
継続的断食の禁止
断食中の口付けについて
性交渉をもった者と断食について
ラマダーン月の日中の性交渉について
ラマダーン月の旅と断食について
断食を破っている者が報償を得る場合
断食を行うか破るかの選択について
アラファの日の巡礼者について
アーシューラーの日の断食について
アーシューラーの断食日について
アーシューラーの日に食事を取った者は
両イードの断食は禁止されている
タシュリークの日の断食について
金曜日だけ行う断食は好ましくない
クルアーン第 2 章 184 節規定の廃棄
断食はシャアバーン月に全うしてもよい
死者に代って断食を行うこと

「私は断食をしている」と言う時
断食をしている者は口を慎むべきこと
断食をしている者の徳
アッラーの道のために一日断食を行えば
自発的断食を発意した場合について
断食を忘れた者について
ラマダーン月以外における預言者の断食
継続的断食の禁止と一日おきの断食の徳
毎月 3 日間の断食は好ましい
シャアバーン月の中日の断食について
ムハッラム月の断食の徳
シャッワール月に 6 日の断食が好ましい
ライラトル・カドルの欣求について

参籠の書

ラマダーン月の下旬の 10 日間について
御籠りの祈願を望んだ者について
ラマダーン月の最後の 10 日間の奮励
ズール・ヒッジャ月の断食について

巡礼の書

ハッジやウムラの心得について
イフラームを着ける場所について
タルビーヤに関して
マディーナ市民のミーカートについて
イフラームに関して
ズール・フライファでの礼拝について
イスラーム前の香料に関して
ムフリム（禁忌者）の禁猟について
イフラーム状で殺し得る生物について
ムフリムの剃髪について
吸角治療法に関して
眼の治療に関して

頭部や体を洗うことについて
ムフリムが死んだ場合に関して
病人のイフラームについて
出産とメンス時のイフラームに関して
イフラームの三種のタイプに関して
ハッジとウムラを別行することについて
別離の巡礼に関して
アラファでのウクーフ場所に関して
アラファでのウクーフに関連して
ハッジ及びウムラに関して
タマットゥ巡礼方式について
タマットゥ巡礼の動物犠牲について
キラーン方式の巡礼者に関して
巡礼中イフラームを脱ぐことに関して
イフラード及びキラーン様式に関して
巡礼者の義務行為について
イフラームとタワーフに関して
タマットゥ方式のハッジについて
巡礼月のウムラに関して
犠牲動物の飾りについて
ウムラの際の切髪に関して
預言者のイフラームと犠牲動物に関して
預言者のウムラに関して
ラマダーン月のウムラに関して
マッカへの出入りに関して
ズー・タワーの夜に関して
速歩（ラマル）でのタワーフについて
イエメン側両角に触れることについて
黒石へのロづけに関して
ラクダ上でのタワーフに関して
サアーイに関して
サアーイを繰り返さないことに関して
タルビーヤ朗誦継続に関して
アラファの日の朗誦について
マグリブとイシャーの同時礼拝について
ズール・ヒッジャ月 10 日の礼拝について

ハッジ中の女性や老人の移動に関して
アカバでの投石に関して
アカバでの投石の意義に関して
ジャムラでの投石について
ジャムラでの投石時刻に関して
ジャムラでの投石の数について
剃髪及び切髪について
ナフルの日の儀式について
ミナーでの行事の順序について
タワーフ・イファーダについて
ムハッサブでの滞在について
ミナー滞在に関して
犠牲動物の肉を喜捨することについて
牛またはラクダの犠牲に関して
ラクダの屠殺に関して
犠牲動物に関して
犠牲用の動物に乗ることに関して
犠牲用動物の扱いに関して
別離のタワーフに関して
カーバ神殿の内部に入ることに関して
カーバ神殿の破壊と再建に関して
カーバ神殿の壁と扉に関して
代理による巡礼に関して
幼な児の巡礼について
巡礼の回数について
女性の巡礼に関して
旅行前の祈願に関して
旅行後の祈願に関して
ズール・フライファでの休止に関して
巡礼規則に関して
ハッジ、ウムラ及びウクーフに関して
マッカ滞在に関して
ムハージルのマッカ滞在について
聖地マッカに関して
マッカでの武器携帯禁止について
アッラーのみ使いのマッカ入城に関して

マディーナに関して
マディーナでの居住について
マディーナの安全性に関して
マディーナの特異性に関して
マディーナの民に関して
マディーナでの生活に関して
マディーナを去る人々に関して
天国の庭園について
ウフド山について
マッカとマディーナでの礼拝について
3 つのモスクに関して
預言者モスクに関して
クバーウのマスジドに関して

結婚の書

結婚に関して
性衝動に関して
一時婚の禁止に関して
結婚の障碍に関して
ムフリムの婚姻に関して
兄弟が同じ女性と結婚することに関して
シガール婚について
結婚の条件について
結婚承諾の表示に関して
アーイシャの結婚に関して
シャッワール月の結婚に関して
結婚前に許されることに関して
婚資(サダーカ)に関して
奴隷女の解放に関して
ザイナブの結婚に関して
招待に応ずることに関して
三度目の離婚宣言に関して
性行為前の祈願に関して
性行為に関して
妻が夫の寝室を離れることについて

女性の秘密を漏らすことに関して
アズルについて
妊婦との交接について
乳児の母親に関して

養育の書

乳親子関係
乳親子関係の男性に関して
乳兄弟関係について
義理の娘や姉妹との結婚禁止について
結婚の障碍となる授乳の回数について
5 回の授乳が違法になることについて
若者に対する授乳に関して
乳関係は幼児期に生ずることについて
捕虜の女性との性行為について
出生児の父親に関して
身体的特徴による判断について
妻の家での滞在に関して
夫人たちを平等に訪れることについて
妻たちが順番を譲り合うことについて
信仰深い女性との結婚に関して
処女との結婚に関して
敬虔な女性について
女性に関する忠告について
イブに関して

離婚の書

月経中の女性に関して
三度の離婚宣言に関して
不当な宣言に対する贖罪について
妻たちの離婚の選択に関して
妻との別居（イーラー）に関して
離婚と扶養義務に関して

ムハーバラとムアーワマの取引の禁
土地の賃貸
穀物による土地の賃貸
金貨や銀貨による土地の賃貸
ムザーラア（小作）とムアージャラ
土地の授与

ムサーカーの書

ムサーカー（果樹の世話契約）
植樹と耕作の徳
天災時の収穫物に対する支払い免除
借金減額の徳
破産者の残りの商品を売り手が取り戻す
困窮者に対する（借金）猶予の徳
借金返済の延期・ハワーラ・保証人
公共“残余水”売買の禁、有料種付の禁
犬猫の売買の禁・占師への謝礼の禁
犬類に関する規定
ヒジャーマ（吸角法）料金取得の可
酒類販売の禁止
酒と動物の死体と豚と偶像の売買禁止
リバー（利子）
両替と金を銀貨で売買すること
金で銀を売り掛けにすることの禁
真珠の入った金の首輪の販売
食糧（穀物）の売買は同量で行う
リバーを貪る者と支払う者は呪われる
ハラール（合法的な行為）の遵守
ラクダの売買とそれに乗る特別条項
借りた物よりも良い物を返すことは立派
奴隷の交換で交換比の増減が認められる
旅行時の担保も認められること
サラムの取引
食糧買い占めの禁
取引における（不要な）誓約の禁止

シュフアの権利（処分優先権）
隣人の塀に材木を立てかけること
不正の禁止と土地の強奪その他の禁止
道幅について揉めた場合の広さについて

相続の書

タイトルなし
相続はその権利のある者に与えよ
相続人のない遺産（カラーラ）について
最後に下った啓示はカラーラに関する節
（借金のない）遺産は相続人のもの

贈答贈与の書

サダカの買い戻しは好ましくない
贈り物やサダカの取り戻しの禁
一部の子供に片よる贈与は好ましくない
ウムラー（永代贈与物）について

遺言の書

タイトルなし
遺言は遺産の三分の一まで
サダカの報償は死者にも届く
人が死後に報償を受け得る事項
ワクフ（宗教的寄進）について
何も持たない者は遺言を放棄すべき

誓願の書

誓いの履行命令
誓い（ナズル）は災いを回避できない
アッラーに背くことになる誓いの無効
カーバまで徒歩で行くと誓いを立てた者

誓いを破った時の償い

宣誓の書

アッラー以外のものにかける宣誓の禁
間違った誓いに対する償いの言葉
誓いは破った償をして良い方を取れ
誓いにはそれを行うニーヤ（意志）
インシャーアッラーという誓いの型
家族の者に害を及ぼす誓いは禁
不信者の誓いは改修後にそれを実行
奴隷との友好、奴隷をたたいた者の償い
奴隷を姦通罪で中傷する者には厳罰
奴隷の衣食と能力以上強要不可
誠実で信仰深い奴隷の報償
共有奴隷の解放について
ムダッバルを買うことは許されている

カサーマ、キサースの書

殺人罪確定の誓い（カサーマ）
離反の戦闘者と背教者達に対する判決
器物による殺人に対する報復刑
正当防衛なら保障金の支払不要
歯には歯の報復の正当性の確認
ムスリムの血が流されてもよい場合
殺人を犯した者の罪の原点
殺人に対する来世での報い
生命と名誉と財産は犯すべからず
自白による殺人罪確定の正当性
加害者の父系親族が負う胎児の血の代金

刑罰の書

窃盗罪の刑罰が成立する最小額
刑罰に対する仲裁は禁止
姦通の刑罰
既婚者の姦通罪は石打ちの死刑
姦通を自白した者について
ユダヤ人および庇護民の石打ちの死刑
出産による刑罰の延期
飲酒に対する刑罰
矯正刑（タアズィール）の鞭打ちの数
刑罰は罪を償いそれを消す
動物、鉱抗、井戸落下事故の保障なし

判決の書

破告による潔白の誓いがまず必要
潔白の誓いと証人をもとにして判決
判決は証拠で、だが抗弁で勝訴するかも
ヒンドの事件
不要なしつこい質問、自己中心主義の禁
論理的推理による判決に対する報酬
裁判官は怒って裁くことを忌むべし
教理に関する新説、間違った諸判決の否定
もっとも立派な証人
論理的推論者達の法的見解の相違
論争者の間を調停することは好ましい

拾得物の書

タイトルなし
巡礼者の拾得物について
許可なく他人の家畜搾乳を禁ずる
客の接待について
剰余財産を同胞に与えることは好ましい
食糧欠乏の時は集めて共有とすべし

聖戦と軍事遠征の書

知って拒む不信者に最後通告不要
イーマムの指揮官任命及び戦陣訓
異教徒に寛仁をもって接すること
信頼を裏切ることは禁じられている
戦争における策略は正当である
敵との対戦を自ら望むのは好ましくない
敵との対戦で勝利祈願は望ましい
戦闘での婦女子の殺害禁止について
夜襲で間違った婦女子殺害は許される
不信者の果樹の切り倒しと焼き払い
イスラームでは戦利品は合法となること
戦利品について
戦死した者の所持品は殺した者の権利
戦利品の分配及び捕虜交換
ファイウに関する規定
「預言者には遺産相続人なし」の意味
参戦者への戦利品の分配方法
バドルの戦における天使達の支援
捕虜を縛り、監禁することについて
ヒジャーズ地方からユダヤ人を追放
ユダヤ人とキリスト教徒を追放する
誓約違反者を殺すことは許される
襲撃は敏速に、さし迫った行動を優先
ムハージル達が果樹園を戻したこと
敵の領土で食料を得ることは許される
預言者がビザンチン皇帝に宛てた手紙
預言者は不信者の王達に手紙を書いた
フナインの戦い
ターイフの戦い
バドルの闘い
マッカ征服
カーバ神殿の周りから偶像を撤去
マッカ征服後のクライシュ族の改宗
フダイビーヤの和約